
魔法少女リリカルなのは ~ 桜色の星光と黒き月光、そして紅き炎 ~

駆瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　桜色の星光と黒き月光、そして紅き炎

【Nコード】

N3130N

【作者名】

駆瑠

【あらすじ】

地球、海鳴市を舞台にロストロギア【冥界の鍵】を巡り時空管理局、護廷十三隊、そして【ティアマト】と名乗る反時空管理局組織が争いを始めた。

そしてその三つ巴の戦いに巻き込まれた元死神の少女、水無月 桔梗も過去から続く因縁と向き合うことになる。

魔法少女リリカルなのはとBLEACHのクロスオーバー作品です。
オリジナルストーリー、オリジナルキャラ、独自設定等が苦手な方は
右をオススメします。

オリキャラプロフィール（前書き）

オリキャラのプロフィールというか本作品で今まで何をしていたか、
つというのを載せました。

本編更新に合わせて変えてく予定です。

カラブリ+みたいなステータスが載ってますが本編内で戦ったこと
があるキャラのみです。

それではどうぞ。

オリキャラプロフィール

水無月 みなつき 桔梗 ききょう

イメージC.V：折笠 登美子さん

イメージカラー：赤

本作の主人公で元死神の少女。

かつては護廷十三隊に所属する死神だったが、山本元柳斎重國との戦いで死亡、そのまま消滅する……。筈が何の因果か人間の赤ん坊になり捨て子として水無月家に拾われ養子になる。

中学二年に上がってから暫くして水無月 陣谷の都合により海鳴市へと引越してきたが、その日の夜に【ティアマト】の【巫女】ニ―ニヤに襲撃され、闘いの渦中に巻き込まれるが……。

趣味は他人をからかって反応を楽しむこと。

義姉の香久弥をからかうのが楽しいらしい。

斬魄刀は皇呀。桔梗は自身の斬魄刀のことを相棒と呼んでいる。

身長150cmという小柄な身体からは想像もつかないような全距離対応型のパワーファイター。

瞬歩や鬼道を絡めながら、体格差など気にせず、大の大男を投げ飛ばしたり、剣の一振りで相手を防御ごと吹っ飛ばしたりする。

ステータス（カラブリ+風に）

攻撃力100 防御力70 機動力80 鬼道・霊圧90

知力90 体力70

高い攻撃力と戦闘を補助する鬼道に長け、攻撃的な能力を有する。
それ以外の能力値も軒並み高い。

皇呀

桔梗の斬魄刀。

封印時は普通の形状の太刀だが、解放時には全体が紅く、歪な形の片刃の長剣へと変化、様々な武具へと硬質化できる紅い炎を発現でき、高い攻撃力と状況対応能力を両立している。

具象化時の姿及び、卍解時の能力は不明。契約者のことを戦友と呼び、精神世界での声は女性らしいが……？

水無月 みなつき 香久弥 かぐや

イメージカラー：水色

水無月家の長女。大学生。

桔梗の義姉として常日頃から彼女のことを気にかけているが、普段は走りだすとそれだけでコケる運動音痴なお姉さん。

コンクリートに頭から突っ込んで怪我一つしない、桔梗曰く全人類中最高硬度の人。

時空管理局

タリル・ヘイス
イメージカラー：青色

時空管理局陸士部隊所属。ミッド式魔法を使用し、空戦Aランク、防御魔法や結界魔法だけならSランクに匹敵すると言われていたが、任務への積極性は低く、本人もやる気が無いことから戦闘が起こっても支援だけさせておけばいい……っと思われていた。

実際の戦闘スタイルは高町 なのはと同じ「中・遠距離戦を得意とする、単独戦闘が可能な砲撃魔導師」。自立行動を行う八つの円盤状の子機を操り、相手の死角から砲撃魔法を見舞う。

攻撃力90 防御力100 機動力60 鬼道・霊圧80 知力60
体力80

攻撃とバランスを備えた変則的なミッド式魔導師。一対一がその能力を一番発揮できる。

コメントサンクチュアリ

タリルが使うインテリジェントデバイス。

待機状態は三日月のペンダント。本編中の描写は無いが、起動時にはグローブ型のデバイスになり、八つの円盤状の子機を操る司令塔の役割を果たす。

性格は実直、生真面目、そして無口。必要な事以外話すことは無く、

いざ喋っても一言で終わり、というのも当たり前。なぜか日本語を話す不思議デバイス。

【ティアマト】

メリオス・ベルリヒンデン
イメージカラー：白

反時空管理局組織【ティアマト】の首領。【太陽神】と呼ばれる。神罰代行者。秩序に牙剥く者。

古代ベルカ式を使い、元時空管理局陸士部隊に所属していた騎士。二十年程前にある管理世界に存在した街を襲撃する詳細不明の魔法生物（下級大虚）と交戦、撃退している。しかし突如としてその行方を眩ませ、管理局からも個人情報完全に抹消される。その後数十年に渡り消息不明となっていたが……。
強大な魔力を備える斬魄刀に似た白い槍と、瞬歩にも見える高速移動技を使い、並大抵の魔導師とは比較にならない戦闘力を誇る。直接的な戦闘力だけでなく、街一つを一撃で火の海に沈める力を持つ。

攻撃力100 防御力90 機動力90 鬼道・霊圧90 体力100

管理局に所属していたころから培った戦闘経験と魔法、天啓の圧倒的な攻撃力を併せ持ち、一騎当千揃いの【ティアマト】メンバーす

ら霞む能力値を誇る。

ニーニヤ

イメージカラー：金色

【ティアマト】に所属する【巫女】と呼ばれる少女。神の声を聞く者。

異世界の人間だが、何故か死神が使う鬼道を使用し、海鳴市に引越してきたばかりの桔梗を二度に渡り襲撃するも敗北し逃走、隠れ家で従者であるストレンドの治療を行っていた時、メイズ達と合流した。

【ティアマト】内では重要な立場にあり常にストレンドの護衛を受けている。

攻撃力10	防御力10	機動力50	鬼道・霊圧100
知力50	体力20		

鬼道・霊圧以外は極端に低く、明らかに戦闘向けではない。

ストレンド

イメージカラー：灰色

【ティアマト】に所属する【力】と呼ばれる大男。己が前に立ち塞がる全てを破砕する暴君。

【巫女】ニーニヤの護衛役として常に行動を共にしていたが、ニーニヤの独断行動で海鳴市に入ったのは一日遅れ。

凄まじい怪力とそれらを活かす体術を持ち、腕を肥大化させ更に攻撃力を上げたり、常人なら致命傷となりうるダメージでも即座に再生する治癒能力を有する。結界内で攻撃してきたヴィータを圧倒するも続けて現れた桔梗に敗北、左腕を失いながらも一瞬の隙を突いて逃走した。

その後、隠れ家で傷の治療を行っていた時、メイズ達と合流した。

攻撃力90	防御力90	機動力80	鬼道・霊圧50
知力60	体力100		

鬼道や魔法系の能力は苦手らしいがそれを補って余りある直接戦闘能力を持つ。

メイズ・フォル・ロックソート
イメージカラー：群青色

【ティアマト】に所属する青年。仲間内からは【復讐者】と呼ばれる。

探査者。忌むべき過去の怨念。

異世界の魔術師で、“記憶“に関することが専門らしい。

相手の剣速を自身の剣に記憶させてまったく同じ速さで振るったり、他者の剣技を模倣した剣を複数同時に操ったりする。

ソニア、メリアと共に海鳴市を強襲。桔梗と刃を交えるも自身の魔術をあっさり見抜かれ敗北、一度は致命傷を負うも復活し逃走、ソ

ニアと合流した後撤退した。

攻撃力80 防御力40 機動力50 鬼道・霊圧100
知力100 体力40

何気に高い攻撃力を有しているのはまだ手の内を見せていない証拠か……。基本的には相手を翻弄するトリッキーな戦いを得意とする。

ソニア・フォル・ロックソート
イメージカラー：群青色

【ティアマト】に所属する女性でメイズの姉。【傀儡師】とも呼ばれる。

死霊術士。災厄の魔女。

鎧で全身を覆った巨大な屍人兵を連れており、治療魔法の使い手でもある。

メイズ、メリアと共に海鳴市を強襲。恋次、ルキアへと襲い掛かった。

恋次に重傷を負わせるも予期せぬ反撃に遭い、逃げられた上に時空管理局まで介入してきたことにより後からきたメイズと共に撤退、ニーニャ、ストレンジと合流した。

攻撃力70 防御力50 機動力40 鬼道・霊圧100
知力90 体力50

メイズと似たような能力値。細腕のわりに腕力があるらしいが……。

メリア・シュトーゼ

イメーヅカラー：赤紫

【ティアマト】に所属する少女。元時空管理局所属。

狂気に蝕まれた盾。

かつて高町なのはと模擬戦を行い敗北した。その後唐突に両親を殺害し、逃亡。

以後半年程は行方を眩ませていたが、メイズ、ソニアと共に海鳴市を強襲、高町なのはに襲い掛かった。

終始戦闘を優勢に進めるもフェイト、ヴィータと続けて現れた援軍を前に撤退、闘いの中蓄積したダメージで気絶していたところをメイズに回収された。

時空管理局に居た頃は、必要最低限の攻撃力と防御力を残してスピードだけを強化した戦闘スタイルだったが、海鳴市に現れた際には、強力な魔力障壁とAMFを展開する白と黒の球体を使用しており遠距離からの魔力攻撃に対して鉄壁の防御力を得た。

攻撃力50 防御力100 機動力100 鬼道・霊圧50

知力70 体力90

厚い防御と圧倒的なスピードで一騎打ちでは無類の強さを誇るが、攻撃力の低さ故に対多数戦が苦手という側面も……。

レオーナ・ヴァーンハルト
イメージカラー：青緑色

【ティアマト】に所属する十代後半の女性。【槍】の称号を持ちメリオスからの信頼も厚い。戦火の運び手。秩序を穿つ者。第九管理世界で祖国の独立の為に管理局と戦う騎士であったが、レジスタンスメンバーの一部の裏切りにあい、仲間と祖国を失ってしまふ。その弔いと管理局への復讐の為に【ティアマト】に降った。古代ベルカ式の使い手でありながら射撃魔法、砲撃魔法、範囲攻撃魔法をバランスよくこなす実力者。

攻撃力	90	防御力	80	機動力	80	鬼道・霊圧	90
知力	80	体力	80				

目立った弱点の無い万能型。またどんな敵や戦場にも柔軟に対応出来る戦術眼も併せ持っている。

マリア・シエルメリスト

イメージカラー：赤銅

【ティアマト】所属。

鋼鉄の女帝。鋼鉄の体を持つ者達の母。

【ティアマト】の中では技術関係の任を一手に引き受ける女性で首領であるメリオスをして現代最強の召喚師と呼ぶが、本人曰く【ティアマト】メンバー中最弱。かつて時空管理局の技術部門に在籍していた過去があり、最高評議会とも繋がりがあった。

通常の召喚魔法は当然として、巨大な質量を持ったものを一瞬で転移させたり、果ては敵の攻撃すら余所に飛ばした後、敵に向けて再転移して反撃したりする。

攻撃力	70	防御力	30	機動力	20	鬼道・霊圧	100
知力	100	体力	20				

本人も弱いと言っていた通り能力値は低い。転移魔法を使って攪乱したりなどの策を用いて戦う。

【群体】

【ティアマト】所属。

始まりにして既に終わっている存在。
詳細不明。

林崎 （林崎） 當麻 （當麻）

イメージカラー：茶色

【ティアマト】に所属する老人。

剣術の達人で、【剣】と呼ばれる。

魔を用いずに魔を狩る処刑人。

ある管理世界の研究所をティン・ダイロンと共に襲撃。研究者、警備員を問わず全滅させた。その後、救援に駆け付けたシグナムと交戦。剣技のみでシグナムを圧倒する技を見せ付けた後、撤退した。

攻撃力30

防御力20

機動力20

鬼道・霊圧10

知力90

体力40

年の功か、知力は高いが、それ以外の数値が軒並み低い。どう見ても高ランク魔導士に太刀打ちできるようには見えないが……？

ティン・ダイロン

イメージカラー：銀

【ティアマト】所属。外見は十代前半の少年。【竜】と呼ばれているが……。

絶対強者。

ある管理世界の研究所を林崎 當麻と共に襲撃。研究者、警備員を問わず全滅させた。

その後、救援に駆け付けたザフィーラと交戦、圧倒的な力で重傷を負わせた後撤退した。

攻撃力100

防御力100

機動力50

鬼道・霊圧10

0 知力100 体力100

スピード以外は全て最高値。身体能力だけで敵を圧倒する。

番外編（前書き）

まず番外編を読む前に以下の注意がございます。

・リリカルなのは要素0

・オリキャラ（桔梗）以外BLEACH要素0

なのは達や一護達は出てきません。

なので彼等の登場を楽しみにされている方々。

すいませんでしたっ！！

本編の方も書いてる途中なのでもう少し待ってください。

何故そんな物を書いた？ っと聞かれるかもしれませんが、理由としてはちよっとした仕事の合間の息抜きと割り込み掲載をやった事が無かったので試しに、って感じです。

またそんな感じで書いたので内容も微妙かもしれません。

それでもいいや、っという方はどうぞ。

番外編

あの男との出会いは強く印象に残るものだった。

あの出会いは海鳴市に引越してから初めての夏休みに家族で海外旅行に行った街の事だったか。

「まったく……気持ちは分からんでもないが陣谷殿は心配性が過ぎる。

香久弥殿でないのだから迷子になどならん」

相棒が入った竹刀袋を片手に一人土産物屋を見て回る。

相棒を空港に持ち込んだ際には一悶着あったがこいつを手放す気もないし、あの騒動は良い思い出ということにしておこう。

「陶器製のカップに……ハーブ？ 誰か紅茶でも嗜んでるのか？ 洋風かぶれの雀部副隊長じゃあるまいし」

数少ない友人に頼まれた土産を数点購入、明日にはホテルに届けてくれるそうなので色々手続きをしてから店を出る。

「良い夜だな。静かで、星もよく見える」

ホテルに戻る途中、不意に空を見上げる。

日本は夜でも明るい場所もあり、中々星も見れないがこの街は違つようだ。

月明かりに照らされたレンガの道を歩いていた時だった。

「チツ……」

唐突に変わった雰囲気にこれまで良い気分を邪魔されたのも含めてつい舌打ちしてしまう。

目に見える範囲で何かが変わったわけではない。

強いて言うなら空気。

一歩踏み出した瞬間、同じ街なのにまるで血生臭い戦場に踏み込んだような。

「……………」

ただ、それで動揺を顔に出すのも癪だったので素知らぬ顔で人っ子一人居ない夜道を歩いていく。

(いや……一人いるな)

月明かりの中、私と同様一人で道を歩いてくる男。

遠めからでも分かるその長身。赤い服に派手な赤いコート。声を掛けるのを躊躇いそうになる程端正な顔立ちに鮮やかな銀髪を持ち、肩には同じぐらいでかいギターケースを担いでいる。

(強い)

そいつとの距離が近付いてくる毎に強くなる無形の圧力。それでも私達は言葉を交わすことなく、互いを見ることなくすれ違
い。

右腕に霊圧を籠めて後ろを振り返る。

見れば男もギターケースから両刃の長剣を取り出して私の方を振り返る寸前だった。

その男目掛けて右腕を突き出し、男は長剣を横薙ぎに振るう。そして。

ヴウオオオオオオオオオ

私の拳は男の脇を摺り抜けてその後ろに居た等身大の、不気味な霧困気の人形を殴り飛ばし、男の剣が私の頭上を通過して後ろの奴を切り捨てた。

「オイオイ、お嬢ちゃん。

子供がこんな夜更けに出掛けちゃいけません、ってママに教わらな

「かつたか？」

「黙れ不審者。この事態を招いたのが私みたいに言うな」

軽口を叩きながら男と互いに背中合わせに立ちながら竹刀袋の紐を解いていく。

「まだ居るか。相当しつこい輩らしいな」

「ああ、まだまだ増えるぜ。」

「一匹見れば更にな」

斬魄刀を取り出した竹刀袋を腰に巻き付けながら地面から、建築物で出来た影から這い出してくる奴らを観察する。

着ている（着せられている？）服の色と手に持った物以外はさつき殴った奴と同じ木製の人形。

だが手には斧や金槌、はては銃器まで手にしている奴もいる。

「一応確認しておくが……貴様の客か？」

「さあて？ 心当たりが有りすぎてね。」

ただ、こいつらには俺も用があるんでな。

「丁度いい」

ダアアアアアンテエエエエエエエ！！

……………？。

「誰かの名前を呼んでいるようだが……貴様のことか？」

「ハッ！ まったく……人気者はつら」

「やっぱり貴様のせいか！ こうしている間にもこの後の家族の団
樂の時間が削られているんだぞ！？」

「どうしてくれる！？」

「オイオイ……それはあっちの団体客に言つべきじゃないか？
お嬢ちゃん」

「見つけたぞ！！ 裏切り者の息子！！
今は亡き我が主、ムンドウス様に代わ」

「それにさつきから聞いていればお嬢ちゃん、お嬢ちゃんと……！
初対面の相手ならもつと言い方があるだろう！」

「我が名は」

「そう言われてもな。ついさっき会ったばかりで貴様呼ばわりもど
うかと思つぜ、お嬢ちゃん？」

「こちらを向けえっ！！！」

どうも騒がしいと思つて銀髪の男と二人で横を見てみれば“人の形
をした何か”が怒鳴り声を上げていた。

「何だ、貴様？」

体長は2メートルはあろうか。全身が赤黒い毛で覆われその頭は人
ではなく山羊だが馬だかに角を生やした外見だった。

「貴様ら……！ 我を」

「悪いが後にしてほしい。今は忙しいのでな」

「まったくだ。空気を読んでくれ」

取り敢えず向こうは後回しにして目の前の男の問題に取り掛かる。

「我を……！ 我を愚弄する気があつ……！」

が、山羊面がまだ何か言い足りないようだったので。

「許さん！ 我が息吹を受け……！？」

「後にしてくれと言った筈だが？」

「悪いが……レディーファーストだ。
紳士的にいこうぜ？」

瞬歩でその横を通りながら居合いで肩から脇まで斬り裂く。
驚いたのは銀髪の男もまた瞬歩に等しい速力で動き、同じように剣を振るった事だった。

「な……に……？」

「仕方ない。まずはこいつらを片付けるとしよう」

「まあ、順番が変わっちまったが、元々こいつらに用があってこんなところまで来たわけだしな」

後ろで大きな音を発して倒れる山羊面を無視して、周りを取り囲む人形達を睨みつける。

「ところでお嬢ちゃん。名前は？」

「いきなりどうした？」

「今夜のダンスパーティーのパートナーだ。名前ぐらい聞かないと失礼だろ？」

「……………桔梗。水無月 桔梗だ。」

「そっちは？ まだ直接には聞いていないぞ？」

「ダンテだ」

さっきの事を気にして、っというわけではないだろうが名前が分かったのは重畳、私としても引っ込みがつかなくなってきていた。これで同じような口論はしなくて済むだろう。

自分の子供っぽさに少し嫌気が差したのは秘密だ。

「それじゃ、キキヨウ？」

激しいダンスパーティーになるが付いてこれるか？」

銀髪の男 ダンテが革製のベルトに長剣を挿し、代わりに両手に二丁の銃を手にしていた。

「これぐらいなら問題ない。

ダンテこそ足を滑らしてステージの奈落に落ちないでくれ。無様すぎる」

私もまた斬魄刀の切っ先を空に向ける。

「ハッ！ それじゃ……パーティーの開幕だ！！」

「天涯を焼き討て！ 皇呀！」

二丁の銃から放たれる咆哮が聴覚を支配し、斬魄刀から生まれた紅い炎が視界を埋め尽くす。

人形達を駆逐した後は奴らやダンテの事も聞くことなく別れホテルに戻った。

そのまま家族四人、旅行を満喫し日本に帰国。

ただ帰国してから暫くして、ダンテが厄介事を引き連れて海鳴市に現れたのは別の話。

強いて言うなら面白い男ではあったが録な事では無かったとだけ言っておく。

プロローグ1（前書き）

初めまして、駆瑠というものです。
あらすじでも書きましたがこの作品には

- ・クロスオーバー
- ・オリキャラ
- ・独自設定

を含んだオリジナルストーリーとなります。上記の要素が苦手な方はUターンをオススメします。

魔法少女リリカルなのははA・Sの数年後、中学二年の頃、BLEACHは天貝隊長との戦いが終わってしばらくしてから。

と設定しています。

駄作ですがよろしく願います。

プロローグ1

「何故だ……!?!」

紅に染まる世界。

炎に焼かれ燃え落ちていく世界。

その中で二つの人影が対峙していた。

一人は老人、口を覆う白髭に禿頭、皺が目立つ肌。

しかし纏う空気には一切の衰えを感じさせぬ威圧感を放っている。

その右手には刀の柄が握られ鍔の先にある筈の刀身は炎に包まれている。

正面にいるのは少女、黒い長髪を後ろで纏め対照的に白い肌を持っていた。

黒い瞳の目は右目しか開かれておらず左目は閉じられ瞼の上に深い裂傷が刻まれていた。

大地を、空を紅く焼く炎もまるでこの二人に近付くのを恐れているかのように遠巻きに円を描いていた。

「何故だ……！？」

少女の口から先程と同じ言葉が洩れた。

体中に刀傷や火傷を負い片膝をつき手に握る片刃の長剣を地面に突き刺して体を支えている。その長剣も刃が欠けひび割れていた。

「何故……！ あいつらだけが死ななければならない……！」

「……………」

少女を見下ろす老人は何も言わずその言葉を聞いていた。

「答える……！ 山本元柳斎重國……！」

「正義のためじゃ」

少女の言葉に老人が静かに口を開いた。

「護廷十三隊の正義と世界の安定を護るためにあやつらは命を懸け散っていった……。」

「じゃが」

「なら……!」

老人の重い言葉を少女が遮った。

「ならば……何故……私も行かせてくれなかった……山本……総隊長……」

既に限界だったのだろう。少女の足元には血溜まりができ息も荒くなってきた。苦しげに紡がれる声はどこか哀しそうな響きを宿していた。

「私は……」

「お主はこれからの……」

諭すように喋りだした老人はしかし途中で言葉を切った。剣を杖代わりに体を支えていた少女は顔を俯かせて沈黙していた。老人は少女が既に事切れているのに気付いたのだ。やがて周りを囲んでいた炎がゆっくりと彼女に近付きその身体は燃え盛る炎の中に消えていった。

そんな夢を見て私、水無月みなつき 桔梗ききょうは目を覚ました。

(眩しっ……)

右目を開けば差し込む強い光に負けて反射で目を閉じた。

(しかし……あの夢……)

久しぶりに見たな、と独り言を呟いて嘆息してしまう。山本元柳斎重國との戦いで死して何故か二度目の生を受けてから暫くはうなされるように何度も見たがそれも小学校に入るまでには見なくなった。

(何かの予兆で無ければいいが)

朝の強い日差しにようやく慣れてきた頃にもう一度右目を開けた。そして私は部屋に備え付けられた鏡を見ていきなり絶望した。

眠たげに開いた右目、左目は閉じられ死神だった頃に訓練で負った刀傷が生まれ変わった今でも左目に刻まれている。それは慣れていたのでいいのだが問題は長い黒髪だった。実は少しだけ自慢だった背中まで伸びた長髪は普段の面影も残さず爆発していた。例えばような無い程の爆発ぶりだった。

(どうしたものか……)

名案も浮かばずとにかくやるだけやるう、と心に決め私は洗面所に行く事にした。

その頃には朝見た夢に対する不安も忘れていた。

「お早うございます。陣谷殿、早苗殿」

「おお、桔梗ちゃん、お早う」

「うむ、お早う」

洗面所での死闘を終え居間に入ると育ての親である老夫婦、水無月陣谷と水無月早苗に挨拶して朝食の席についた。

「今朝はいつもより慌ただしかったようだな？」

「申し訳ありません……転入初日から遅刻は避けたかったので」

洗面所で自分の髪相手に悪戦苦闘していた事を言っているのだろう。その表情は楽しくて仕方ない、という顔だった。

「責めている訳ではない。急な引越しにお前達を巻き込んだのは僕の都合だし慌てるお主を見るのは久しぶりだからな。和ませて貰ったよ」

「そうさね、桔梗ちゃんも香久弥ちゃんも手が掛からんええ子やっただしの〜。

もう少し我が儘をゆつてもバチは当たらんよ？」

「そついえば義姉上は？」

早苗殿から茶碗を受け取る間に義姉の名前が出た事で思い出したが朝一番に起きてくるあの人が居ないのは疑問だ。

「あやつならもう大学に出掛けたよ。なんでも教授に見せなければならぬ論文があるとか」

「そうですか。では私も少し急ぎますので」

そう言つて本当に少しだけペースを上げる。急いでご飯を掻き込むとゆっくり食べなさいと早苗殿が怒るのだ。

朝食を食べ終えた後食器を流しに置き私室を目指した。

この地に引越して一ヶ月と少し。以前の洋風の家も悪くはなかったが私としてはこうした和風の屋敷の方が落ち着く。

陣谷殿と早苗殿の部屋に至つては電球などの光源はなく蝋燭で部屋を照らしている。部屋の床は全て畳で今歩いている廊下も木造である。

よくこんな屋敷が現代に残っていたものだ、と感心しながら自分の部屋にたどり着くと襖を開けて中に入った。

慌てていた為に放置していた布団を素早く畳み押し入れに放り込みと急ぎ足で箆笥を開け今日転入予定の中学校の制服を取り出し素早く着る。

部屋に入ってからここまで三十秒も掛かったかどうか。早苗殿が見たら確実に落ち着きなさい、と言ってくるだろう。

最後に背中まで伸びた髪をポニーテールで纏め鞆を手に部屋を出ようとした時。

壁に架かった一振りの刀が視界に入った。

私は鞆を床に置くとその刀

斬魄刀を手を取った。

平和な世に身を置く自分に愛想を尽かすことなく着いてきてくれている相棒に心の中で労いの言葉を掛け再び壁に架けた。そろそろ本当に危ない。

「では行ってきます」

「あいよ、気をつけてね」

早苗殿に挨拶してから私は屋敷の門をくぐり

。

海鳴市に一步を踏み出した。

プロローグ2（前書き）

二話目の投稿になります。BLEACH勢の本格登場はもう少し後になりそうです。

プロローグ2

そもそも私がこうして呑気に現世の街を歩いているのが自分でも今だに理解できない。

前世（死後の住人なのに前世でいいのか？）で山本元柳斎重國と戦いそして死んだ。あの男が敵となった者に手を抜くことはありえない、となれば単純に生き長らえたというのは無いし今の体の説明にはならない。

人間と同じように成長する体、しかし霊力はまったく変わらず斬魄刀は当然として死神の四つの戦術である斬拳走鬼も問題なく行使できる。過去に試した。

本来ならありえない。人が死にソウルソサエティに流れ素質ある者が修業を経て死神となる。そして死んだ死神は人の体と同じように朽ちやがて霊子となって消える。

これが本来の流れ。水が上から下に流れるように当たり前。死神の記憶と力を有したまま人間に生まれ変わる事はできない。だが起こりえない事が起きたという事は常識を覆す“何か”がこの身に起きたという事だ。

（最もその“何か”というのが全然分からんのだが）

朝に見た夢が原因だろう。既に信号も赤に変わった横断歩道の半ば。肩に自分の鞆を提げ右手には風呂敷に包まれた四角い荷物、左手にはゆったりした動作で歩く老婆の手を引きながら現実逃避を続けていた。

(初日から遅刻確定……か……)

さっきまでは周りを見れば自分と同じ私立聖祥大附属中学の制服を着た者達がちらほらいたのに今はどこにも見当たらない。

(許せ……まだ見ぬ担任よ……)

意味は無いと分かりつつ心の中で謝罪した頃にようやく横断歩道を渡りきった。近くはないが遠くもない距離で平和なチャイムの音が耳に入り無意識に深い溜め息をついてしまった私は悪くないと思う。

S I D E 高町なのは

「来なかったわね。転校生」

私の隣でアリサちゃんが呆れた調子で話しました。

「初日から遅刻してくるなんていい度胸してるじゃない」

「あはは、何か事情があったのかもしれないし」

「甘い！　なのは甘い！」

一応弁護してみるけどアリサちゃんにはあまり効果はなかったみたいだ。

「それでなのはちゃん達の方は管理局の仕事はしばらくお休みなの？」

何故かどんどんヒートアップしていくアリサちゃんの隣に立っていらしたずかちゃんが聞いてきた。

「御免ね、ずずか。海鳴に戻ってきたのは任務もあるんだ」

ずずかちゃんの質問には私の隣に座っていたフェイトちゃんが答えました。

「まゝた仕事？ また此処（海鳴）で？」

さっきまで憤慨していたアリサちゃんが二人の会話に反応したがその口調はまた呆れぎみだ。

まあ、無理もないかもしれない。

海鳴市では五年程前のロストログア、ジュエルシードを巡るP・T事件、その半年後に闇の書事件も起きている。

そのどちらもが一步間違えれば地球が滅びていたかもしれない大事件だった。事情を知る者からしたらまたか、と思うだろう。

「なんでなのは達ばかり使つかなく？」

「うん……、学校には通ったほうがいいよね。それになのはちゃんは前に大怪我までしたのに」

と想っていたら私達の心配をしてくれていたらしい。その心遣いには素直に感謝したい。

「二人共ありがとう。でも私はもう大丈夫だし、それに海鳴市で何が起きるなら私の手で何とかしたい。ここには私の家族やアリサちゃんにすずかちゃんも居る。私の魔法は皆を護るためにあるんだから」

そう言うと二人は照れたように笑ってくれた。

「明日にははやとシグナム達も来るから大丈夫だよ」

フェイトちゃんが二人を安心させるように言った時一時間目の授業を告げるチャイムが鳴った。

「とにかく！ 詳しい事は放課後にも話してもらってからね！」

チャイムの音を聞くとアリサちゃんがそう言って自分の席に戻っていった。それを見たフェイトちゃんとすずかちゃんも苦笑いしながら席に戻った。

そうしてクラスの生徒全員が席に座るのと入れ違いで担当科目の先生が入って来た。けれどその後ろには見たことのない女の子が着いてきていた。

（あの子が転校生かな？）

白い肌に映える長くて綺麗な黒髪をシグナムさんみたいなポニーテールで纏めた女の子だった。

ただこちらを向いた時に見えた左目に走る古傷が痛々しかった。

「朝に間に合わず申し訳ない。今日よりこの学校の生徒になる水無

月 桔梗といます。よろしく願いします」

そう言つて水無月さんは綺麗なお辞儀をした。どういふ子なんだろ
う？

友達になれるといいなあ。

S I D E O U T

一時間目には間に合った。職員室にて担任となる教師の冷たい目は
あの山本元柳斎重國を思い出　　ヴヴッ、ヴヴン！　あまりい
い思い出ではないな。遮断遮断。
さて一時間目の授業の前に挨拶となったが……。

「……………」

こちらの顔を見た途端ざわついた空気が止まった。

(まあ、無理もないか)

左目についた古傷は物騒すぎる。現世に生まれ変わってからこの古傷が原因で同年代の子供からは敬遠されていた。もっともこの傷を負った事自体に後悔はないが……。

「それじゃ水無月さんの席は……」

ポケットとされているといつの間にか話が進んでいた。

「あそこの空いてる席を使って」

「承知しました」

その返事に教師が少し驚いた顔をする。今時の子供の返事ではなかったか。次から気をつけよう。

これ以上下手を打つ前に席につくとしよう。

窓際の空が見えるいい席だ。隣では金髪の少女がニコニコ笑ってるが……。

いかな。こういう手合いは苦手だ。そして恐らくはその場の空気も読まずに。

「はじめまして、フェイト」

「自己紹介する前に授業に集中した方が良いと思われるのだが？」

予想した通りすぐに自己紹介を始めてきたが教師がチョークを手にとったのが見えたので授業の邪魔にならないようにそう言ったのだが……。

「あ……、御免なさい」

私の言葉に沈んだ感じで謝ってきた。

(やれやれ……、他に言い方は無かったのか？自己紹介の時間が無いのも自分のせいだろうに)

そんな感じに自分で呆れ自問自答してしまう。視界の隅で誰かが私を睨みつけて来るのが見えたが彼女の友人だろうか？

(これだから人付き合いは苦手なのだ)

ほとんど実力だけで渡っていった死神時代が懐かしい……。

ぼんやりとそんな事を考えながら私も取り出した教科書を開いた。

「では……進捗を聞こうか」

その暗い部屋の中、唯一の光源であるモニターに移る青年に人影が声を掛けた。

「まず目的の物ですが93%の確率で97管理外世界に有るかと……」

【巫女】もそう言うておられたので僕としては確定で間違いないと思います」

青年の報告に人影が顎に手を当てて考えだした。

「時空管理局の動きとすぐに動かせるこちらの戦力は？」

暫くの黙考の後人影が口を開いた。

「時空管理局に目立った動きはありません。【剣】と【竜】に陽動をお願いしたので辺境の管理外世界で何か起きてても即応は出来ないのでしょう」

打てば響くといった具合に人影の質問に青年が答える。

「時空管理局は初動が致命的に遅い。初めからマークしていたのなら別だが事が起きてから動いても後の祭りだ」

「追跡されていた【巫女】から彼らの目を外すためにも【剣】と【竜】に動いてもらった訳ですからね」

青年は苦笑、人影は隠すことなく嘲笑した。その態度から彼らが時空管理局をそれ程評価していないのが分かる。

「こちらの戦力ですが、すぐに現地に行けるのが貴方を除けば僕と【槍】【盾】【傀儡師】【群体】の五人。

【巫女】は時空管理局にマークされているのですぐには動けませんし【力】は【巫女】の護衛役、【剣】と【竜】は先程言った通り時空管理局への陽動を行う予定ですので動かせません」

「ふむ……」

「また他の管理世界に駐在している部隊への牽制もあるため一度配

置を決めてしまうとすぐには変更不可能です。こちらの指揮は僕が執りますので残りの　　？」

「どうした？」

ピピッ、っというメッセージを告げる音に反応した青年に人影が怪訝な表情で聞いた。

「いえ……、いま【巫女】の世話役からメッセージが……なっ!？」

「何が起きた？」

常に余裕を失わないと思っていた青年の驚愕の声に人影は何か起きたのを察した。

「悪い知らせですね。【巫女】が勝手に現地に向かったそうです」

「何っ……!!?」

青年の報告に人影が呻いた。

「どうも誰にも告げず勝手に動いたようで……。他の者が部屋に置かれていた手紙に気付いたのがつい先程、またそれを追って【力】も97管理外世界に向かったそうです……。マズイですね」

青年が懸念しているのは【巫女】をマークしていた時空管理局の動きだった。

【巫女】への追跡を外す為に陽動を計画したのにその【巫女】が勝手に現地に入れば当然追跡も追ってくるだろう。まして【巫女】が勝手に動いたのは数日前、既に管理局が動いていても不思議ではない。

そして青年の懸念は的中し既に97管理外世界 地球にはその出身である高町なのは、友人であるフェイト・T・ハラオウンが派遣されていた。

「配置を告げる……！」

人影の声に考え込んでいた青年が顔を上げた。

「【剣】と【竜】は予定通り陽動を決行。

ただしその動きはなるべく派手にさせる、可能な限り高ランク魔導士を引き付けさせるのだ」

「了解、当初予定していた彼らの継戦能力からだを持って数日でしょうが十分かと」

「お前は【盾】と【傀儡師】を連れて97管理外世界に入れ。現地で【力】と合流し【巫女】を保護、その後は目的の物の搜索だ」

「構いませんが他世界の管理局戦力の牽制は？」

「それは私が行う。【槍】と【群体】を借りるぞ？」

人影の言葉に青年が驚いた顔をした。

「貴方が？」

「なんだ？ 私が動く事に不満でもあるのか？」

「いえっ！ そういう訳ではないのですが。貴方が動けば確実にしようし。ただ目的の牽制が殲滅になる。民間人にもかなりの被害が出るでしょうね」

「それこそ結構な事だ。元より塵芥に興味は無い」

青年の言葉に人影が断言した。

「それなら結構です。【巫女】は僕が引き受けます。そちらはお任せします。【太陽神】よ」

「そちらこそ首尾よくな、【復讐者】」

その言葉を最後に青年の映っていたモニターが消え部屋が暗闇に包まれる。だが明かり一つ無くても人影には問題無いか躊躇うことなく部屋を歩き何かを手に取り眺めた。

「もうすぐだ。かの鍵により【聖域】の扉は開かれその風により世界は……人は在るべき姿を取り戻す。そしてその時こそ足蹴にされ踏み台にされ忘れ去られていった者達の無念は晴れるのだ……」

手に取った物を眺めながら人影は静かに笑いながら呟く。そして今まで眺めていた物を置くと扉を開け部屋を出た。

第一話

私は水無月家の住む家の近くにあった森に捨てられていた……らしい。

らしい、というのは私がその時の事をさっぱり覚えていないからだ。身を包む物も無く泣き叫んでいた左目に小さな刀傷を持つ赤ん坊

私とそのすぐ傍に落ちていた斬魄刀を見つけたのは当時五歳だった香久弥殿だったそうだ。しかし香久弥殿のご両親は私を養子にしてから一年後に死去されたそうだ。

そして遺された香久弥殿とまだ赤ん坊だった私を引き取ってくれたのが養父（と呼んでいいのだろうか？）の父親である陣谷殿だった。当初陣谷殿は私が拾われた子供だと教える気は無かったそうだ。何も言わず自分の孫として育てるつもりだったらしい。

尤も三歳ぐらいの頃には死神だった自分も思い出してきたので自分が普通の子供とは違う異端だと気付いていた。

だが言い出せなかった。

記憶だけなら自分の妄想で片付けられるからだ。三歳児がこんな事を考える時点でおかしいと思うがとにかくこの時は深く考えなかった。記憶の中の自分が死ぬ夢を見始めたのもこの頃だった。

死神の記憶に確信を持ったのは小学校に入学した頃。身体の成長に伴い大きくなる左目の古傷が怖かったのだろう、誰とも遊んでもらえず寂しく帰宅した私の頭の中で声がした。

大きな声ではなかった。何と言っているのかも解らなかった。

ただその声の主を捜す為に私は家の廊下を夢中で走りその音を不審に思っただけで来た陣谷殿が止めるのも聴かず物置を漁り

長方形の木箱に納められた斬魄刀を

私の相棒を見つけた。

その時の私はただ泣いた。何故泣くのかも分からないまま相棒を胸に抱いて残った右目から涙を流して泣いた。

その後帰宅した早苗殿や香久弥殿も交えて自分が捨て子だということとを聞かされた。早苗殿は刀を捨てるつもりだった事も聞かされた。なんでも私がこの刀を見つけたらすぐに居なくなってしまうんじゃないかと思っただけ。

だが既に私の中では死神の経験は過去の事だし今はこの人達を家族だと思っただけで出ていく理由が無い。

死神の事は抜きにして、そんなことを話すと早苗殿と香久弥殿が泣いて抱き着いてきた。見れば陣谷殿も少し泣きそうだったのを見ると私は少し嬉しかった。因みに相棒は本当に粗大ごみ一歩手前だったらしい。運がよかったな、相棒。

その後は今までと変わらず人のように生活した。時々担当区域を巡回する死神やそれと戦う虚の気配もしたが関与せず昔の勘を取り戻す為に少しだけ訓練したり相棒と対話したりしていた。

「ちょっと！ 私の話聞いている!？」

朝見た夢が原因だろう。

昼休みにお弁当を食べる場所を探すついでに校内を見て廻ろうとし

た私はアリサ・バニングスと名乗るクラスメートに無理矢理屋上に連れて来られ問い詰められていた。

見れば先程の金髪の少女の他に二人、恐らくは彼女達の友人だろう少女達が居たが三人共苦笑いするだけで止めるつもりは無いらしい。

(やれやれ……)

さっきの金髪の少女に対する素っ気ない態度や遅刻の理由についてしつこく問い詰めてくるアリサ・バニングスを見て昔を思い出すかのように現実逃避してついでに深い溜め息をついたとしても私は悪くあるまい。

S I D E 高町なのは

昼休みが始まって直ぐに逃げるように水無月さんが姿を消した。屋上に誘って一緒にお弁当を食べようと思ったのに……。

「分かったわ。私もあいつに言ってやりたい事があるし先に屋上で

待ってて」

そんな話をしているとアリサちゃんも姿を消した。そうして言われた通り屋上で待ってる間に出てくる話題といえば……。

「怒られた？」

「うん……うん」

フェイトちゃんの隣に座ったので当然話もしていると思ったのだが授業前だったというのもありちゃんとした自己紹介はしていなかったらしい。

「でも、その後にも時間があつたんじゃ？」

「それが……他の人達が話し掛けても素っ気なくて冷たい感じがするし、ちょっと近付きづらい雰囲気があつたから……」

確かにフェイトちゃんの言う通り水無月さんに話し掛けた女の子達も二、三言葉を交わすとすぐに離れていってしまった。原因はやっぱりあの素っ気ない口調と雰囲気、それに……。

「あの目の怪我も何があったんだろうね？」

「すずかちゃんの言う左目の怪我も要因の一つだと思う。管理局の武装隊に所属する隊員の中で稀に水無月さんと似た古傷を持った人がいる。あれは多分何かの刃物で負った傷だろう。」

「そんな話をしていると屋上の扉が開いてアリサちゃんと水無月さんが入って来た。」

「アリサちゃんは私達の近くまで来ると両目をつり上げたまま私の隣に座りその正面に水無月さんが座った。」

「それで？ 朝のあの態度はどういうつもり？」

「開口一番いきなりアリサちゃんが聞いた。というか突然それはどうかと思うよ？ アリサちゃん。」

「どづいとは？ どういう意味だ？」

「ほら。水無月さんも戸惑ってる。」

「フェイトへのあの言い方！ せっかく人が名前を名乗ろうとしてる人にあの言い方はないでしょう！ 元はと言えばあんたが遅刻して時間が無くなったのが原因でしょうが！」

確かに、担任の先生もHRの時間を使って自己紹介を済ませようと思っただらうけど……。

そこで水無月さんが何か考え込むように視線が逸れているのに気づいた。

「ちょっと！ 私の話聞いている!？」

アリサちゃんも気付いたのだろう、激怒寸前といった感じだ。

そして水無月さんは一度溜め息をつくときアリサちゃんに向き直り。

「まあ、落ち着け。え〜と？ バニングス殿？」

そんな事を言った。そして当然ながらアリサちゃんが。

「だ……誰のせいだと思ってるのよ!?!？」

やっぱり怒った。あとアリサちゃん、ちゃっかりと自分の名前は教えただね。

けれど水無月さんは慌てることもなく冷静だった。

「確かに今バニングス殿が激昂しているのは私のせいだが、さりとて私の口は一つしかない。そんなに一気に詰問されても答えようがないのだが……？」

諭すように言う水無月さんにアリサちゃんも少し落ち着いたのか何度が深呼吸を行った。

「それは悪かったわよ。なら……」

「さて、それでは朝の挨拶の件だったな」

「あ・ん・た・は~~~~~!!」

何とか冷静になったところを狙ったかのように水無月さんが勝手に話を進めてまたアリサちゃんを怒らせてしまった。

もしかしてワザとやってからかってるんじゃないよね？

「まず今朝の授業前の事は済まなかった。え~~~~と？」

「あ、フェイトです。フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

「ではハラオウン殿と。それで朝の事だが……せっかく教鞭を執る教師の邪魔をするのもどうかと思ったので止めたのだが、キツイ言い方になったのは反省していた。他にも言い方は無かったかずっと考えていたのだが……」

「ずっと？ それじゃ……」。

「あの後も素っ気ない態度、って言われてたのは……」

「む？ そんな風に言われていたのか？　ずっと考え込んでいたので気付かなかったが……」

もしかして、冷たい感じを持つと評されたこの人は凄く不器用なだけなのではないだろうか？

「な……なら朝に遅刻したのは!？」

まだ激昂してたのか、アリサちゃんが荒っぽく聞いた。

「学校の近くにある横断歩道でお年寄りがつまぐ渡れず困ってたよ。うなのでその人の荷物を持って手を引いていたら遅れた」

「えっ？ そういう理由？」

「まあ、元々時間ギリギリに家を出たのもあるのだが……うん？
だとしたらあの時間に行かなかったらあの老婆は立ち往生したまま
だったのか……？」

最後に水無月さんが何か呟いたかと思うとまた何か考え込んでしま
った。

その姿にアリサちゃんも毒気を抜かれたのか戸惑っていた。

「あ！ あの……！ いいかな？」

「む？ 何かな？」

このままだと話が進まないと思ったので強引に彼女の思考を遮った。

「私はなのは！ 高町なのは、っていいいます」

「あっ！ 私は月村すずかです」

私に続いてすずかちゃんも名乗り出た。

「改めて私は」

「アリサ・バニングス殿だろう？ 凄い表情でいきなり名乗り出したのには恐怖したのだが……」

「うぐっ!？」

やっぱり最初に自己紹介してたんだ。とはいえいきなり着いてきてほしいなんて言えば余計に警戒するだろうし仕方ないか。

「じゃあ、改めて水無月 桔梗だ」

さっきのアリサちゃんを真似するように水無月さんが名乗った。

「ア……アリサ、抑えて。何とか」

「フエイト……! は……な……して……! こいつ、喧嘩売ってる、絶対に喧嘩売ってる……!」

どう見てもからかっているとしたか思えない水無月さんに恐れ表情でアリサちゃんが詰め寄るうとしていたがフェイトちゃんに抑えられていた。

ただそれを見て笑う水無月さんは今までの綺麗な人という印象から変わって可愛い女の子といった感じだった。

「よろしくね、桔梗ちゃん」

「ああ、よろしく。高町殿」

「なのはだよ！　なのは！」

やっぱり友達なら名前で呼んでほしいし。

「あ〜〜？　高町」

「なのは！」

「高ま」

「な・の・は！」

何度か名前を呼んでもらおうと思ったんだけど桔梗ちゃんは困ったように額に手を当てた。

「何故そこまで名前にこだわるかな？ 別に家名でも問題ないと思うが？」

「だって友達なら名前で呼んでほしいから！」

「友達？ 私が？ 貴女と？」

「うん！」

桔梗ちゃんが不思議そうに聞いてくるのを私は肯定した。
けど……。

「それならやめておいたほうがいいだろう」

「えっ？」

そう言った桔梗ちゃんの顔は嘲笑を含んで……けれど今にも泣き出しそうな……そんな複雑な表情だった。

「どうして……?」

フエイトちゃんも、アリサちゃんも、すずかちゃんも。桔梗ちゃんを除く全員が困惑する中私は聞いた。だって、さっきまで普通に笑ってくれてたのにどうして突然そんな事を言ってくるのか分からなかったから。

「何故……か……」

私の問い掛けに桔梗ちゃんは目を閉じて……。

「それは……私が最低な大嘘つきだからだ」

自分の事をそう言った。その声は何でもないという風だったのに綺麗な顔に浮かぶ複雑な表情のせいがいまにも泣き出しそうな声に聞こえた。

S I D E O U T

「つい先程【復讐者】から連絡がありました。當麻様^{とつま}」

薄暗い部屋の中、小さな人影が壁際に座る人物に声を掛けた。まだ
幼い少年の声だった。

「【竜】よ。此処でその名は……」

「失礼しました、【剣】よ」

少年の声に応えたのは老人の声。嘎れた声だがそれに籠められた圧
力は老いをまったく感じさせなかった。

「いや、儂が過敏に反応してしまっておるだけだろう。

それで？ あの若造は何と言っておる？ 今更配置替えか？ 【巫

女】はどうする？」

そう言っつて老人は笑うが……。

「いえ……。どうやらその【巫女】が勝手に行動してしまったそう

です」

「ッ……!!」

少年の言葉に老人も表情を改めた。

「子守や【力】は何をしていたのだ……」

「話によると消えたのは四、五日前。『第97管理外世界に“鍵”を捜しに行く』と書き置きだけ残して消えたそうです。管理局の追跡を貼付けたまま」

「小娘がっ……!!」

老人が小さく吐き捨てる間にも少年が話を進める。

「それに伴い計画の変更もあつたそうです」

「計画に……? では攻撃対象の変更か?」

「はい。当初は【巫女】を追跡していた緑の騎士と盾の守護獣への牽制でしたが目標を変更して近くの管理局施設を攻撃せよと」

「この近くの施設といえば……あそこか……！」

老人には思い当たる場所があつたのかその声には力が籠っていた。

「まだ何も言つてませんが……まあ、貴方の考えている通りだと思いますよ」

少年も老人の考えを肯定した。

「あそこは法の犬を名乗りながら其の実違法研究が盛んなところだ」

「そこを強襲し裏でこそこそしている奴らごと引つ掻き回せということですね。近くの管理局施設から救援要請ができれば当然追跡者が動くでしょう」

「そうして更に追跡者の主も引つ張り出せということか……」

自分達の動きを確認する間にも老人の気迫はどんどん強くなつていく。

「救援に行った管理局施設が違法研究を行っている事を知れば当然調査しようとする。それで更に時間稼ぎが出来るという事か」

「元々牽制だけで長期戦は想定していませんでしたがこれなら我々でもある程度は管理局の目を引き付けられそうですね。剣の騎士か鉄槌の騎士か……多少の取りこぼしは容赦してほしいのですが……」

「かまわん……むしろあの若造共にも働かせろ」

老人の言葉に少年も小さく笑った。

「ふむ……そうですね。では【剣】よ、準備の方は……」

「いつでも行ける」

そう言うと老人は傍に立て掛けていた竹刀袋を手に立ち上がった。

「そうですか……では……」

「ウム、奴らに戦場を教えてやる……！」

そうして老人が、次に少年が後を追って部屋を出た。

第二話（前書き）

時空管理局と【ティアマト】の前哨戦です。

第二話

S I D E 傭兵

俺は元々時空管理局の施設の癖に裏で質量兵器の違法研究をするこの研究所の警備の為に雇われた傭兵だった。

ミッド式を操りそのランクはA A。魔導士の中では優秀な方だと自分でも思う。警備任務にあたり部下も与えられた時も自分の優秀さが証明されただけと思っていた。

だが、その自信も今ではさっぱり消えていた。

原因の一つは前方から歩いてくる十二、三歳にしか見えない子供。だがその身体からは俺とは比較にならない魔力が際限なく溢れ出しその目は視線が合ったただけで死ぬのではと思う冷たさがあった。

もう一つの原因はその隣を歩く白髪、白鬚の爺。子供と対照的にほとんど魔力を感じない。

手に持っているのもデバイスではなく、それどころか何の魔力も感じない黒い鞘に納められた見慣れない細身の剣を一振り。なのにそいつを見れば何故かこの男には勝てないと自分の中の何かが囁いてくる。

鳴り出した警報と地鳴りに研究所を飛び出してみれば。
恐らく強力な砲撃魔法を喰らったのだろう、そこら中に巨大なクレイターが出来上がりその周りには先にこいつらと戦った警備員の死

体、いや……肉片が転がりその上を二人組は気にすることなく歩いてくる。

「く……くそ！ 構えろ！！ ……撃て！！」

その光景に呆然としていた部下を叱責し攻撃を命じた。

一瞬ビクリと体を震わせてから手に持っていたデバイスから射撃魔法を連射し、俺も手持ちの中で一番強力な砲撃魔法を使用して侵入者を攻撃した。

狙いが逸れた魔力弾が次々と地面に当たり侵入者二人は粉塵の向こうに消えていった。

普通に考えれば明らかにオーバーキルだがこれぐらいでも安心は出来なかった。

そしてその不安を証明するように巻き上がった粉塵の中から少年が何事も無かったかのように出て来た。

しかしもう一人の爺が粉塵の中から出て来る様子はない。

「やったか！？」

「あんな魔力の無い爺を仕留めたぐらいで安心するな！ もう一人いるぞ！！」

部下が気を抜きそうになるのを怒鳴りつけた。

そう、さつきから化け物じみた魔力を発する子供がいるのだ。油断などしていい筈がない。

だがその子供は何をするでもなく首を傾げるだけだった。その動作は戦場に似つかわしくない歳相応の可愛いげのある動きでつい毒気を抜かれてしまう。

「ふむ……。いまのは私にも見えませんでしたよ。百に及ぶかどうかの歳月でよくここまで……。素晴らしい」

「ほう、全生物の頂点の一角と呼ばれる種族の者に褒められるとは……。我が剣も捨てた物ではないな」

(え……?)

その囁れた声は後ろから聞こえてきた。思わずその声に反応して振り返った時……。

キン

不意に鈴が鳴るような綺麗な音が聞こえたかと思うと途端に目の前が朱く染まった。

その朱があまりにも不吉な色だったので払いのけようとしたのだが

下から湧き出るように出てくるので抑えようと手を伸ばしたら自分の喉に行き着いてしまった。

(…………あ…………)

最後に見えたのは粉塵の向こうに消えた筈の爺が蔑むような表情で俺を見下ろす姿だった。

S I D E O U T

S I D E シグナム

「ッ……………！ 非道いな……………これは」

【ティアマト】という反時空管理局組織のアジトを搜索していたシヤマルが付近の管理局施設からの救援要請を受けた。
その救援の為に主はやてとヴィータより先行し研究所に急行。途中

で同じくシャマルより先行したザフィーラと合流。現場に到着したのだが……。

「何かしらの気配すらしない……。全滅か？」

ザフィーラの言う通り研究所の入口の前にある中庭には動く者は何も無かった。恐らくこの研究所の警備員だろう者達の遺体が溢れているだけだった。

原型を留めぬまでに身体を破壊された者、立ったまま掲げたデバイスごと袈裟斬りにされて絶命している者。

見渡す限り生きている者は何処にもいないようだった。

「中に入ろう……」

今ここで彼等にしてやれる事は無い。

地に倒れる者達を避けながら私達は研究所に入った。研究所の中も似たようなものだった。ただ死んだ者の中に此処の研究者だろう白衣を着た者の死体が増えただけだ。

そのまま正面にあった通路を進んでいた時。

「む………?」

「どうした? シグナム?」

足を止めた私にザフィーラが聞いてきた。

「主はやてから渡された案内図にこの階段はなかったぞ?」

「何………?」

そう、今私達が見ている地下へ降りる階段。これは此処へ来る前に渡された前情報には無かった物だ。

「では一体」

言いながらザフィーラが階段を覗き込みもつとした時だった。

「「!?!?!」」

申し合わせたように私達は左右に散開した。その直後。

私達が背を向けていた廊下の壁に一瞬で幾つもの切れ込みが入り崩れていった。

「ほう……。今のを躲すか。
なかなかどうして……。やるものだ」

舞い散る粉塵の中から嘎れた声が聞こえその後瓦礫を踏み越えて一人の老人と十二、三歳の少年が姿を現した。こいつらが襲撃犯か？。

「まったくですね。私なら絶対に喰らってました」

「そもそもお主ならこの程度、躲す必要すらあるまい」

その二人の会話の意味はすぐに気付いた。

彼等の正面。階段側の壁に斜めに深い切れ込みが入っていた。ちょうど私とザフィーラの胴体を両断するように。

その事に気付くと一瞬背筋に冷たいものが走った。

もしもあのまま身を躲すことなくあそこに居たら……？

「お前達……。何者だ？」

危険な想像を振り払い問い掛けた。その身体から発せられる殺気からこいつらがこの研究所を襲撃した犯人だと確信できた。

「何者とは……。随分と妙な事を聞くな？ 法の大地の飼犬」

返ってきた答えは失笑。

「何……？」

「敵。それ以外に有り得ますか？」

少年も同じように笑う。歳相応の無邪気な笑み、だがその目だけは冷たく凍え。

「ならば……！ 容赦はせん！！」

その言葉と共に二人の向こうから突撃するザフィーラが見えた。その動きを察知している筈なのに老人はこちらを睨んだまま動かない。動いたのはもう一人の少年。

老人を庇うように背中合わせに立ちザフィーラの拳を正面から受けた。

重く鈍い打撃音が響き何の防御も行わずザフィーラの拳を受けた少年はなすすべなく吹き飛ばなかった。

「何……だと……!？」

ザフィーラの驚愕の声に合わせて少年が腕を振った。纏わり付く蠅を払うような無造作な動き。ただそれだけで。

「ぐっ……おっ……!？」

ザフィーラが吹き飛ばされた。

その勢いは壁を突き破っても止まらず壁の向こうへ姿を消しても尚破碎音を響かせ続けた。

そして吹き飛んだザフィーラを追撃する為に少年も壁の穴をくぐっていった。

「ザフィーー ……!？」

壁の穴に視線を向けた瞬間、今度は視界の隅で老人の姿がブレたように見えた。

「
」

飛び散る瓦礫、舞い上がる粉塵。視界に映る物全てが時が止まったようにゆっくりと動く中、老人の動きだけが見えない。そして迫ってくる殺気に押されるようにバックステップ。
私と老人の間を飛んでいた瓦礫が大小問わず次々と両断されていくのがスローモーションで見えた。
バックステップで間合いを離し着地した瞬間停滞していた時間が唐突に元に戻り宙を舞っていた瓦礫が一齐に床に落ちた。

「ふんっ！ 今も躲すか……。
少々過小評価が過ぎたか？」

語る老人の構えは先程と違い手に持った物を腰に構えていた。そこで初めて老人の武器が目に入った。
独特の拵えの柄に軽く曲がり耐久力に疑問を覚える程に細い刀身は叩き切るのではなく引き切る事を前提にして作られている。

それは第97管理外世界地球の小さな島国で生まれた剣 日
本刀と呼ばれる物。

間違いない。あんな特徴的な剣は次元世界を捜しても地球にしかない。
い。

そして老人の構え。
敵の不意打ちに素早く対処するために日本刀の使用を前提にただひたすらに速さだけを追求された技 居合い。
ならば目の前の老人は 。

「ご老人……貴方は……97管理外世界の 」。

「そついえば貴様の主も儂と同じ出身だったな」

「やはりか……！」

レヴァンティンを構えながら納得する。
だがそれならば。

「何故こんな」……おい……！？」

何故こんな事をする？

そう聞こうとした瞬間また殺気を感じ今度は横に跳んだ。今回は何
が起きたというわけでもない。
だが。

「喋るな……。一度口を開いて意識を逸らす度に隙だらけだ。
気を張り詰める、視線を逸らすな。
でなくば……本当に死ぬぞ？」

「……！！」

放たれる殺気に引き摺られるように再度レヴァンティンを構える。
既に分かっている。

この老人……いや、剣士は強い。

感じられる魔力が少ないなど関係ない。手に持つ武器の性能など問

題ではない。

ただ純粹に劍士としての力量で目の前の敵は自身を凌駕している。

(済まない……ザフィーラ……)

どうやらすぐに援護に行くことはできなさそうだ。

一瞬そんな事を考えながら分厚い壁のように立ち塞がる劍士と対峙した。

S I D E I O U T

第三話

SIDE ザファイラ

子供の小さな手が自分の首を掴みそのまま凄まじい勢いで地面にたたき付けられた。

「がつ………！」

身体中を衝撃と激痛が走り一瞬呼吸が止まる。

だがそのままにするわけにもいかない。何とか振り払おうと拳で首を掴む腕を殴りつけるがその握力が緩むことはない。振りほどけない！！

「ゴツ………！？」

そのまま身体を持ち上げられ為す術なく腹部を殴られる。小さな拳から想像もできない重い一撃に意識が飛びそうになる。

「オツ… オオオオオ！！」

それでも何とか右の拳に魔力を集め渾身の一撃を首を掴む腕に叩き

付けた。

人の腕とは思えないあまりに“硬い”手応え。

逆にこちらの拳が砕けそうな痛みが右腕を痺れさせるが首を掴む握力は緩んだ。

今度は左腕を振る事で何とか拘束から逃れるが前のめりに倒れ込んでしまった。

「ぐぐつ……がつ……！」

痛みを堪えて立ち上がるうとするが今度は胸を蹴り上げられた。道端の小石を蹴るような簡単な動き。

しかし小さな拳と同様その威力は強大で空中で弧を描き落下、地面で数回バウンドする事でようやく勢いが止まる。

84

「ハア……ハア……！ ツ……！ 縛れ！ 鋼の軛！！ オオオオ
！！」

何とか立ち上がり拘束魔法を発動。

こちらに歩いてくる少年の足元が割れそこから幾つもの拘束条を出現させる。

拘束条はそのまま少年に刺さりその動きを縛る、筈だったが。

「ふんっ……」

少年は鼻で笑うと軽く体を捻った。ただそれだけで拘束糸が破壊され少年が自由になる。

「ハア……ハア……。何故だ……!？」

既に体は限界だった。ただ一回の魔法の使用で膝をついてしまう。目の前の少年はあまりに強すぎた。だがそれ以上に不可解だった。少年に吹き飛ばされ施設の外に飛び出した後も何度も攻撃を加えた。何度か人体の急所を捉えた筈の拳はしかし何の痛撃にもならず反対に少年の振るう腕や脚はこちらに当たる度に激痛をもたらし体力を削ぎ落としていった。

「何故倒れない……!」

これが魔法を使用した戦闘であれば分かる。

防御魔法で攻撃を防ぎ魔力付与で足りない攻撃力を補う。極めて単純な理屈。

だが目の前の少年は膨大な魔力を垂れ流しにするだけでそれを攻防には一切使用していない。

一切の防御魔法はおろかバリアジャケットすら纏わず攻撃に耐え、何の魔力付与も無しに大の大人も圧倒する脅力を発揮する。

普通の子供では絶対出来ない事だ。

「何故……? 簡単ですよ」

少し間が空いた場所で少年は立ち止まり語りだした。

「私と貴方とでは生物としての存在が違う。個の強さが違うのですよ」

その言葉の意味は……。

「人が半端な武器を持ってても野生の猛獣に勝てないように貴方がどんな魔法を使っても私には脅威にならない」

絶対強者の言葉。人を見下す神の視点。

「脅威にならない攻撃に盾を使う必要はない。何の力も毒も持たない羽虫に鎧を切る為の大剣を使う必要はない。ただそれだけです」

その言葉と共に少年の前に白色の魔法陣が現れた。

ミッド式ともベルカ式とも違う未知の術式。垂れ流しになっていた魔力の流れが初めて方向性を持つ。

「とはいえ驚いています。まさかここまでやって壊れないとは思いませんでした。たかが使い魔とは思えない頑丈さでしたよ。

だから……」

言葉を続ける間にもどんどん魔法陣に魔力が収束されていく。

砲撃魔法！？

「褒美にほんの少しだけ力を見せてあげましょう」

その言葉を引き金に魔力弾が放たれ視界を白い閃光が覆った。

S I D E O U T

87

S I D E シグナム

動けない。完全な膠着状態。

右に左に円を描くように動いてもフェイントを交えて回り込もうとしても剣士は動かない。

そう、不動なのだ。脚を動かした様子もないのに剣士はずっと居合の体勢を変えないまま私を正面に捉え続けている。

「くっ……！」

「……………」

何度か踏み込もうとしたが駄目だった。隙らしいものが無い。シユベルトフォームでもシユランゲフォームでも鞘を使った防御でも動きを見せた瞬間あの刀に切り捨てられるイメージしか浮かばない。

「む？」

どれだけ睨み合ったか。不意に剣士がザフィーラが吹き飛ばされた方向に意識を逸らした。

「……！」

その瞬間に私は一気に間合いを詰めた。きっかけらしい物もなくこのまま睨み合いを続けても埒があかない。だが。

「!?!」

間合いに踏み込んだ瞬間視界の隅で煌めく銀閃に何とか踏み止まりその場を飛び退く。

一瞬前まで私の居た位置を刀が通過し薄皮一枚の差でバリアジャケットを切り裂いていく。

「ッ……!! レヴァンティン!!」

『Nachladen』

着地した瞬間レヴァンティンがカートリッジのロードを行う。

このまま何もしなければまた元の睨み合いだ。余裕を与えればそれだけ逃走を許す可能性が大きくなる

無謀かもしれないがせっかく掴んだ攻撃のきっかけを逃すわけにはいかない!!

『Schlangiform!』

長剣から連結刃へと変え剣士に向けて薙ぎ払った。

「……ふむ……」

だが変幻自在の動きをする連結刃を剣士は紙一重で躲していく。無駄な動きの一切無い、一流の演舞を見ているような華麗な動き。その間にも剣士はこちらに向けて一步を踏み出し。

何の前触れもなく目の前に現れた。

「なっ!？」

居合いの体勢から間合いに踏み込んできた時には既に鞘から刀身が顔を覗かせ初めていた。

咄嗟に後ろに飛びつつ鞘を盾に。

その瞬間刀の柄を握る剣士の右腕が消え鞘から銀色の閃光が放たれた。

弾丸のように迫る銀閃はレヴァンティンの鞘と接触し。

ある程度間合いの開いた場所に着地する。
しかし……。

「……その程度か……」

「ッ……！」

左腕に痛みを感じバリアジャケットが血に染まる。

そして剣士の刀に両断され空中に飛ばされた鞘の片割れが床に落ち
濁いた音を発する。

三十秒にも満たない攻防。しかしその間に見せ付けられた力の差は
大きい。

瞠目すべきはその剣技か。

一瞬で間合いを詰めた時もレヴァンティンの鞘を切った瞬間でさえ
も彼は魔法を行使した様子は無かった。

魔法も使わずただ己の技のみで魔法と同等の現象を起こす。それは
一体どれだけの修練を積みれば可能なのか、想像する事さえできない。

「……まだまだ……！」

だがこの程度で引くわけにはいかない。もうすぐ主はやてやヴィー
タ達も来る。

いかにこの剣士が神業と呼べる剣技の持ち主でも高ランク魔導士を
複数同時に相手にするのは難しい筈。

左腕も出血こそ多いが見た目程深く切られたわけではない。まだ動
かせる。

『Schwertform』

改めて長剣に戻したレヴァンティンを構え剣士と対峙しようとした時……。

「潮時か……」

そう呟くと構えを解いてこちらに背を向けて歩き出してしまつ。

「なつ……？ まつ、待てっ！」

そのあまりにも堂々とした姿に呆気にとられてしまつが何とか回復し後を追おうとした。

その瞬間通路の壁が砕け目の前を何かが通過していく。

「なつ……！？ ザフィーラ!？」

壁を突き破ってきたのは少年に吹き飛ばされた筈のザフィーラだった。

何度か床をバウンドして止まるものの動く様子がない。慌てて駆け寄るがザフィーラに意識はなく血塗れだったが微かに呼吸音が聞こえる。まだ息はある。

ザフィーラの状態を確認したところで周囲を見渡したが既に剣士の姿はどこにも無かった。

ザフィーラが飛び込んできた穴を見れば施設の外まで通じているのが見えた。

あの少年にやられたのだろつが追撃してこないことから恐らく剣士
同様に撤退したのだろつ。

『シグナム……！ 聞こえる？ シグナム！』

その時頭の中で声が響いた。念話による通信。湖の騎士シャマルの
声。

「……シャマルか……」

『良かった……！ 連絡がないから心配してたの。いまはやてちゃ
んやヴィーたちちゃんと近くまで来てる。そちらの状況は？』

「……状況……か……」

自嘲気味に呟いてしまう。今の状況を一言で言い表すなら……。

「
だ」

『シグナム？』

「いや、なんでもない。まず我々だが施設を襲撃したと思われる二人組と交戦、ザフィーラが重傷を負った。応急処置は施すがすぐに本格的な治療が必要だ」

『ザフィーラが！？ 分かったわ。研究所の人達は？』

「全てを確認していないから断言はできんが……恐らく全滅だ。生存者は……」

『そんな……。シグナムは大丈夫なの？』

「左腕をやられたただけだ。問題無い。」

『とにかく、救護班にも連絡しておくわ。すぐに到着するからそこを動かないで』

最後にシャマルがそう言うってから念話が切れた。
それからしばらく片膝をついたまま周囲を見渡し

「くそっ……！」

右腕の籠手で床を殴り付けた。
今の状況など一言で言い表せる。

「……………完敗だ……………」

全滅した研究所の局員と警備員。重傷を負い意識のないザフィーラ。左腕から血を流す自分。手も足も出なかった戦い。圧倒的な力の差を告げるように警戒することなく悠々と歩き去っていく剣士。

その全てが自身の敗北を示していた。

主はやて、ヴィータ、シヤマル、連絡を受け駆け付けた救護班が来るまでの間ずっと研究所の冷たい床を眺め続けた。

S I D E O U T

初日の授業も終わり日も落ち始めた時間。結局あの後も高町殿達と大した話をする事もなく放課後になった。
ハラオウン殿が授業中も何か言いたげな顔で私を見続けていたがせ

めて授業には集中しろと言いたい。

教師の話聞いておらず指名された時に慌てふためく姿には和ませてもらったが。

しかもバニングス殿が逃がすかと言わんばかりの空気を発していたため放課後になった瞬間に急いで教室を脱出したのだ。

でなくば為す術なく捕縛され根掘り葉掘り聞こうと問い詰めてきただろう。

だが私を友人にしたところで録なことになるまい。

何故なら私はかつて自分で仲間と呼んだ者達を

「桔梗ちゃ~~~~ん！」

校門を出たところで遠くから声か掛けられる。

その聞き覚えのある間延びした声に振り返ると……。

「待って~~~~~！」

遠くから必死で走って来るその人影は

「義姉上!？」

香久弥殿がひいこら言いながら走って来る。その顔は満面の笑顔だが私はそれどころではない。

「だめです！走っては」

「ハア…ハア…へぷっ!？」

ゴツ、と鈍い音が鳴った。前のめりにコケたのだ。受け身もなく盛大にコケたのだ。黄金率というものがあるならこれだ！　っと言いたくなるくらい綺麗な放物線を描いてコケたのだ。周りの人達も呆気にとられ複雑な表情で香久弥殿を見ている。

「はあ……。だから普段から慌てて走らないでくださいとあれ程

」

「うう、だって桔梗ちゃん、こっちに気付かないで行こうとするし……」

取り敢えず彼女に駆け寄って手を差し延べながらいつもしている注意をするが逆に不満そうな声を上げてくる。

「呼ばれば足を止めますから……。慌てないで。落ち着いてください。私は逃げませんから」

「そっか……ふふっ……」

何が面白いのか香久弥殿は笑いながらも私の手を取った。腕に力を込め彼女の体を引っ張る。

「わっ…ととっ……！」

「ほらっ。気をつけて。助け起こした直後にまたコケるなんて勘弁してください」

水無月 香久弥。彼女の事を取り敢えずある程度解りやすく言っ
ら。

和風美人、意外と成績良好、天然（ここ心配）、全人類中最高硬
度（多分）、超！絶！運動音痴！

「今なにか凄い失礼な事考えなかった？」

「まさか」

一応褒めた部分もある。失礼な事ばかりではない。

「むう、桔梗ちゃんがお姉ちゃん面するとは生意気な。昔はよく助けてあげたのに」

「昔は昔、今は今です。ついでに言うなら私は助けてもらっていません。義姉上もセツトでコケてました」

「た、助けようとしたんだよ？」

死神の記憶が出始めた三、四歳の頃の話か。

あの頃は今の身体の癖と死神の頃の癖がごっちゃになり体がうまく反応しなかったのだ。

その結果私は何も無い所ですつ転ぶドシな子供のレッテルを貼られてしまった。そして香久弥殿は倒れた私を助けようとして慌てて駆け寄ろうとしてやっぱりコケる。

そして最後は周りの大人に助け起こしてもらった話は当時を知っている者達にとっては語り種となっている 私にとっては変えようの無い黒歴史である。

いつそ知っている奴らを焼いてしまおうか？

そんな感じに過去の抹殺計画を立案している時だった。

「ッ……!!？」

歩きながら話し込んでいるうちに住宅街に入りそこで何者かの霊圧を感じた。

私達よりも高い位置、電柱の上に立つ人影が周囲を見渡していた。

黒衣着物

死覇装、腰に差した刀

斬魄刀、死神の姿

がそこにあつた。

(この地にも居たか)

あの死神がこの周辺の担当なら虚が現れても任せておけばいい。

私は私の周辺の人達にだけ気を配っておけば大丈夫だろう。

私の霊圧も可能な限り抑えこんでいる。

気付かれても少し霊圧の高い人間がいるな、ぐらいの認識だろう。

(頑張ってくれ)

名も知らぬ死神に心の中でエールを送り香久弥殿と肩を並べ歩いた。

こんな日常が崩れぬように、決して汚されてしまわぬように。

小さく祈りながら陣谷殿と早苗殿が待つ家へと歩いていった。

第四話

SIDE 高町なのは

「はやて達が来れない？」

モニターの向こう、アースラの通信室から告げられたクロノ君の言葉にフェイトちゃんが聞き返した。
今私とフェイトちゃんはアースラに居るクロノ君から今回の任務の説明を受ける為にフェイトちゃんの自宅に集合していた。

あ後は桔梗ちゃんと大したお話も出来なかった。

それは……私が最低な大嘘つきだからさ

どうしてあんな事を言ったんだろう。

貴女達には互いを想ってくれる友人達が居るだろう。他人を謀る私が貴女達の友人に相応しいとは思えないな

そんな事無い。

そう言いたかったのに言えなかった。

あの時の桔梗ちゃんの色々な感情が混ざった表情は安易な否定や慰めを拒絶する空気を放っていた。だから静かに立ち上がり屋上から出ていく桔梗ちゃんを止めることが出来なかった。

でも、もっとたくさんお話して互いの事を知って……。そうすれば……。

『なのは？』

「あ？ どうしたの？」

『どうしたというか……何か上の空だが気になる事でも？』

どうやら考え事に集中しているのが顔に出てたらしい。フエイトちゃんも心配そうな顔で私を見ていた。

「ちょっと、学校でね。大丈夫だから」

『それならいいんだが。無理はしないようにな』

「うん。ありがとう」

『それじゃ改めて任務を説明する』

駄目だ、ちゃんと集中しないと。こんな事じゃ何かあった時にも対処できない。

『任務は数日前に補足した犯罪組織【ティアマト】の幹部クラスと思われる少女の搜索と逮捕だ』

その言葉と同時にモニターに一人の少女が映し出された。

かなり遠くから撮られたのだろう、画像はかなり荒く細かい部分に分かりづらいが八歳ぐらいの綺麗な金髪の少女だ。

その隣にも人がいるらしいが少女にヒントが合わせられているせいかイマイチ分かりづらい。

『この映像を手に入れたのは一ヶ月前。場所は第27管理外世界。たまたま別件でその世界を巡回していた局員が指名手配されていた少女に気付き撮影し、その後もこの少女を追跡していたが二週間程前に連絡が途切れた。情報の少ない【ティアマト】の重要人物を見失いたくなくった本局は敵戦力も考慮しはやてとヴォルケンリッターのメンバーを派遣した』

「その追跡していた局員は？」

『……連絡が途切れてから二日後に遺体で発見されている』

「……………そんな……………」

局員の安否を聞いたフェイトちゃんが悲痛な表情を浮かべる。

『……………続けよう。この少女の追跡はシャマルとその護衛に付いたザフィーラが担当していたが五日前にこの少女が転移魔法を使用、単独で移動したのが確認された。詳しい座標は不明だが転移先は海鳴市とその近辺と判明。罾の可能性等も考慮して高ランク魔導士で尚且つ現地出身で地理にも詳しい君達に白羽の矢が立ったということだ。ここまで一気に説明したが何か質問は？』

そこで一旦説明を止めてクロノ君が私達を見た。

「あの、いいかな？」

『ああ、どうした？』

「【ティアマト】ってどういう人達なのかな？名前はたまに聞くんだけど」

二、三年程前から時折耳にする名前だが誰に聞いても詳しい事は解

らなかったのだ。

『【ティアマト】という組織について分かってる事は少ない。活動を
確認されたのは大体五年程前。

今のところ分かってるのは組織の構成員、特に前線の実働部隊と幹部
クラスの戦闘力が非常に高いと思われる事、何かを捜しているら
しく各管理世界のロストロギアを管理、研究する為の施設を片っ端
から襲撃している事ぐらいだ』

「ロストロギアを？ 何かを捜してる？」

ロストロギアも色々あるが中にはジュエルシードのように次元災害
を引き起こす危険な物も有る。

もしもこの人達が捜している物がそういった危険な物だとしたら…
…。

『上層部も同じ見解だ。危険度の低い物や金銭的価値の高い物には
ほとんど手をつけてないし、襲撃しておいて何も盗らない時もある
そうだ』

「襲撃に対する本局の対応は？」

眉を顰めるクロノ君に今度はフェイトちゃんが聞いた。確かに何度
も襲撃を受けているなら研究所の警備の強化は行われている筈だ。

『警備の増員や高ランク魔導士の配備も行ったがいずれも大した成果は上がっていない。襲撃を受けた施設は局員、民間人を問わずほぼ全滅。おかげで彼等の情報も殆ど無い。組織名や映像の少女の事も研究施設一つをまるごと畏にした作戦で組織の構成員を逮捕することを得た数少ない情報だ』

「その逮捕された人は？」

『尋問を行った翌日に牢で自殺したそうさ。舌を噛み切って死んでいたらしい』」

フエイトちゃんが驚愕の表情で絶句しているのが見えた。多分私も似た表情になっているだろう。

そこまでして 命を捨ててまで……。

「そうしてまで【ティアマト】の人達は何がしたいんだろう」

『彼等の目的はまったく分かっていない。この少女が何故地球に入ったのかも。だが』

そこまで話してクロノ君だけどそこで一度言葉を切った。

「だが……？」

『今回のこの少女の行動は【ティアマト】も予想外だったんじゃないかと思う』

「予想外？ どうして？」

フェイトちゃんが不思議そうな表情で聞き返した。

『【ティアマト】の拠点突入の為に少女の転移を確認した後も監視を続けていたシャマルが慌てた様子で周辺を捜し回る人物を発見している。』

そして今日、数人が少女の後を追うように転移魔法を使用したのが確認された。その後シャマルとザフィーラが無人となった拠点を捜索したが食糧等がそのまま残されていたらしい』

「つまり何らかの理由でこの女の子が拠点を飛び出し他の人達は後から居なくなつた事に気付いて慌てて追い掛けた？」

クロノ君の言う状況からフェイトちゃんが思案顔で自分の考えを述べクロノ君も肯定するように頷いた。

『それにさっきも言ったが上層部は罠の可能性を憂慮しているが僕はその可能性は低いと思う』

「そうだね。罠を仕掛けるならわざわざ管理外世界に行くより自分達の拠点で仕掛けた方がいい」

『実際はやても罠を警戒して遠目からの監視に留めていた。だがこの少女が単独で動いたのならチャンスでもある。他の仲間と合流する前に精鋭部隊で捕縛しようという事になった。そこで君達二人とはやてが選ばれた』

低いとはいえ罠の可能性もありそしてこの女の子の戦力も未知数。加えて短期決着が目的ならこれも過剰戦力とは言えない。

「あれ？ そういえば。さっきはやてちゃん達が来れないって」

確かにフェイトちゃんとクロノ君がそう言っていた。

「はやて達に何かあったの？」

フェイトちゃんも気になっていたのか、勢い込んで聞いた。

『今日【ティアマト】の拠点を搜索していたシャルマルが近隣の時空管理局の研究施設からの救難信号を受けた。そしてはやてはシグナムとシャルマルの護衛をしていたザフィーラを先行させた』

「その研究所の人達は？」

『シグナム達が到着した時には全滅していたらしい。その後の搜索でも生存者は発見出来なかったそうだ』

「全滅って……。まさか……？」

非殺傷設定を使う現代の魔導士戦からは考えられない徹底的な殲滅。今そんな事をする人達の話をしていたばかりなのだ。

「まさかそれも【ティアマト】が……？」

『ああ、その可能性は大きい。研究所に到着した後シグナム達は生存者の搜索を行ったがその途中、研究所を襲撃したと思われる二名と遭遇、交戦状態となったそうだ』

「シグナムさんとザフィーラさんは？ 大丈夫だったの？」

古代ベルカ式の使い手であるシグナムさんやはやてちゃんの守護獣であるザフィーラさんがそう簡単に負けるとは思えない。ただ先程まで聞かされた【ティアマト】の事を考えると嫌な予感がした。そしてその予感は当たった。

『襲撃犯の片方と交戦したシグナムは左腕を負傷、幸いシャマルの治療魔法ですぐに治せる程度らしい。だがもう一人と交戦したザフィーラは意識不明の重体。現在は本局の施設で治療を受けている』

「そんな……、あの二人が？」

あの二人に勝てる人は時空管理局でも限られるのに。そこまでの強さなんて……。

「施設を襲撃した犯人は？」

『ある程度シグナム達と交戦した後はやて達が到着する前には追跡不可能な場所まで逃走している』

私もフェイトちゃんも驚くしかなかった。シグナムさん達を退ける戦闘力だけでなく引き際を見極める戦術眼まで持ち合わせている。これまで戦ってきた違法魔導士や組織よりも強敵だろう。

『更に厄介なことにその襲撃を受けた研究所には公式に発表されていない地下に続く隠し通路が発見された』

「隠し通路？」

更にクロノ君のお話から出た単語に首を傾げる。

「その……隠し通路には何が？」

私が首を捻っている間にフェイトちゃんが聞いてくれた。

『地下には兵器関係のロストロギアとそれらを参考に作られたと思われる質量兵器の試作品が大量に発見された』

「い、違法研究……？」

『ああ、兵器の種類も様々だった。まるで戦争でも始める気かと思ってしまう』

「それじゃ【ティアマト】はそのロストロギアを狙って？」

フェイトちゃんが更に質問を重ねる。どうやらフェイトちゃんの方が先に驚愕から回復してきたらしい。
私もしっかりしないと。

『他の局員の見解では……。はやて達は現場の確保と再襲撃に備えて暫くは研究所を動けない。
ただヴィータは予定通り明日にはそっちと合流する』

「ヴィータちゃんか？ でもそれだとはやてちゃん達が……」

はやてちゃん達の護りが疎かになるんじゃ。
そう聞こった。

『いや、多分だがはやて達の居る研究所がもう一度彼等に襲われる事は無いと思う』

「どうして？」

今回【ティアマト】は目的のロストロギアを手に入れていない。その前にシグナムさん達が研究所に到着したからだ。

ならば目的の物を捜してもう一度研究所を襲うこと有り得るんじゃないか。
……。
けどクロノ君の考えは違うらしい。

『研究所を襲撃した二人が本当に【ティアマト】のメンバーならあまりにも襲撃のタイミングが良すぎる』

「タイミング……？ あっ！」

クロノ君の言葉にフェイトちゃんが何か気が付いたらしい。

「フェイトちゃん？」

「なのは、本来のはやて達の任務は？」

突然のフェイトちゃんの質問に考え込んでしまう。
確か。

「本来のって、この女の子の追跡……！ そっか……」

言われてから気付いた。

そうだ。このタイミングだと女の子の後を追おうとするはやてちゃん達を研究所におびき寄せさせる事になる。でも女の子を逃がす為の時間稼ぎというなら確かに目的を達成している。

ザフィーラさんは重傷を負い戦線を離脱、シグナムさんも負傷している。

幸い怪我自体は軽いらしいけれどはやてちゃん達と研究所の警護をすることになるだろう。

「でも……、それなら上の人に言って他の人を回してもらえば……」

『僕もそう言ったんだが、シグナムとザフィーラが負けたというのと質量兵器を研究していた研究所が襲われたという事実が警戒心を強くしてるらしい。その事で今エイミイが関係者と話をしてる』

そう言ってクロノ君が重い溜め息をつく。

そっか、それでエイミイさんはさっきから居なかったのか。

そういえば……。

「その人達はどれくらいの強さの魔導士だったの？」

「ミッド式？ベルカ式？何かのレアスキルを？」

私達の質問に、けれどクロノ君は難しい顔で黙り込んでしまった。

「クロノ君？」

『その事だが。相手は魔導士じゃないかもしれない』

「魔導士じゃない？」

魔導士じゃないのなら一体……？

『シグナムの話だと相手は灰色の髪に民族衣装らしき服を着た十二、三歳ぐらいの少年と白髪、白鬚の老人。ザフィーラと戦ったのは少年の方でこちらはかなりの魔力を出していたらしい。ただ』

困惑した表情でクロノ君は言葉を切った。

『この老人からは殆ど魔力を測定出来なかったらしい。ランクだとD、下手をするとそれ以下。更に持っていた武器はデバイスではなくただの日本刀らしき物だったらしい』

「日本刀！？ それってこの国の？」

『多分そうだろう。なのは、日本刀っていうのは強固なバリアジャケットを切り裂く程の殺傷力があるのか？』

「そんな事は無い……けど……」

そんな話を聞かされた後では自信を持ってない。

「何かのレアスキル？」

フエイトちゃんも困惑の表情を浮かべながら聞いた。それが一番可能性がありそうだけど。

『いや、シグナムの話だとその様子は無かったらしい。純粹に剣技だけで戦っていたそうだ』

さっきのクロノ君の困惑した表情の意味が分かった。

確かに質量兵器の中には防御魔法でも防げない危険な物もある。けどそれは銃火器に分類される物でナイフの様な刃物は余程防御の薄い人でない限りバリアジャケットでも防げる。

でもシグナムさんと戦った人は剣技だけで渡り合ったのだ。

剣技の達人であるベルカの騎士であるシグナムさんと魔法無しで戦うという事実が信じられないのだろう。

『話を戻すがそんな危険な人物のいる組織を相手になのはやフェイトだけにさせるわけにはいかないといいわけ。ヴィータだけでもそつちと合流することになった。実際上層部の言っていることも分かんなくない。これが妥協案だろう。その分皆に負担を掛ける事になるが……』

「私達なら大丈夫！ 海鳴や地球が危ない事になるかもしれないのに何もしないわけにはいかないよ」

私の家族やアリサちゃん、すずかちゃんに今日初めて会った桔梗ちゃん。

此処には護りた人達がたくさんいる。

『もう少ししたら他の管理世界に駐在している部隊にも応援を要請できる。それまで頑張ってくれ。それじゃ通信を切るよ』

「えっ？ 義母さんと話をしていかないの？」

フェイトちゃんが不思議そうな顔で呼び止めた。

『そうしたいのはやまやまだが、他にも【ティアマト】関連で調べなきゃならない事がある。』

今回の件が片付いたらゆっくり会うとするよ』

「そっか……」

少し淋しそうに呟くフェイトちゃんにクロノ君が済まないな、と謝っていた。

やっぱり忙しいと会う事ができないのかな？

『フェイトになのは、気をつける。今回の相手は今までの次元犯罪者とは違いすぎる。生存者を残そうとしない残虐さも、戦闘力の高さも、目的の見えない不気味さも。何もかもが異質すぎる』

「分かった。クロノも頑張ってたね」

その会話を最後に通信が切れた。

「フェイトちゃん。頑張ろう、事件を早く解決できればそれだけ会える時間もできるよ」

「うん、そっだね」

フェイトちゃんは笑顔で頷いた。

「本格的な捜査はヴィータが来てからになるけど。なのはこの後どうする？もうすぐ義母さんやアルフも帰ってくると思っただけど……」

「御免ね、この後家族皆で夕飯を食べに行く事になって……」

「そうなんだ。分かった、それじゃまた明日」

「うん、また明日学校で」

そうしてフェイトちゃんに見送られて家を出た私は家族の待つ自宅に向けて歩きだした。

(明日はちゃんと桔梗ちゃんとお話してそうしたら次はフェイトちゃんやヴィータちゃんと女の子の捜索か……)

頑張ろう、っと気合いを入れた時だった。

(……?)

視界で見えるギリギリのところでは何かが見えた。遠すぎてイマイチ自信は持てないが人のように見えた。

(見間違い?)

瞬きをした瞬間には既に何処にも見えなかった。
テレビで見るような侍のような感じがしたけど……。

(何だったんだろう?)

気にはなったが一瞬だったのもあるしやっぱり見間違いだろう。
そうして止まっていた足を再び動かした。
周りを見れば夕日も落ちて夜の闇が訪れてきていた。あまりお母さん達を待たせるのも悪い。
少し早足になって家路を急いだ。

S I D E O U T

月が空に昇り人の気配も消えはじめた時間。

海鳴市に在るビルの屋上、そこに一人の男
死神と呼ばれる
者が街を見下ろしていた。

(今日も特に何も無し、時々霊圧の高い人間もいたが気になる程ではなかったしな。瀨霊廷も最近は揉め事ばかりだ。現世くらいは平和であってほしいが)

そんな事をつらつらと考えていた時だった。

(……!?)

突然空気が変わった。

周りを見れば地平線の果てまで結界らしき物で囲まれただでさえ少なかった人の気配が完全に消えていた。

(何だ……!?!? これは……!?!?)

混乱する中でもとにかく技術開発局に連絡をしようとした時だった。

彼の背後に魔法陣が現れそこから一人の少女が出て来た。

「なにっ!?!?」

その気配に驚き振り返ろうとした瞬間。

シャーン

金属同士がぶつかる澄んだ音が聞こえ同時に細い光が死神の心臓を貫いていた。

「な……に……？ いま……の……」

その言葉を最後に死神の意識も途切れ屋上から落ちていった。

「……違う……」

それを感情の伺えない顔で見下ろしながら突然現れた金髪の少女は呟いた。

「今は違う……。けど近い……」

死神の姿が見えなくなっても少女は呟き続け、その顔を上げた。その視線は僅かに明かりの見える住宅地を見ていた。

「しばしお待ちください……。
我が王よ……。」

そうして少女も空に一步を踏み出した。しかしその身体は重力に引かれることなく宙に浮いた。

そして少女は空を駆ける。

自身が捜す“鍵”が放つ気配を求めて……。

第五話

突然の空気の変化に眠っていた意識は一気に覚醒した。

(何だ！？)

感じるのは周辺を覆う霊圧らしき物。変わったのは周囲から感じる事ができた人の気配が完全に消えた事。代わりに遠方からかなりの霊力を持った者が近づいている。

跳ね起きるように布団から飛び出し寝間着を脱ぎ捨てる。どうせ周りに人が居ないのなら騒音等気にするだけ無駄である。普段着のシャツとスカートにスパッツを穿き準備万端。

(相棒……！)

(……………)

自身の斬魄刀に呼び掛けるが返る言葉は無言。

だがその刀身から感じる霊圧は普段とは違い覇気に満ちている。やる気満々らしい。

その様を頼もしく思いながら相棒を手に取り駆け出した。

「この辺りでいいか」

自宅の屋敷から離れたところに在る丘の上に来た。此処からなら海鳴市の海も見えるが今は観光している場合ではない。

（しかしこれは本当に結界か？　なんて広さだ）

結構な距離を瞬歩を使って移動した筈だが結界の切れ目が見えない。この様子だと海鳴市全域を覆っている可能性がある。

（相棒？）

（術式が死神の鬼道とは違い過ぎる。だが虚が周辺の人間に気を遣うような結界を張るとは思えん）

（私達が死んでる間に死神が“芸”を変えた可能性は？）

(在るには在るがそれを言い出せばキリが無い)

(現状は見た事の無い誰かと考えるのが妥当か)

私達が屋敷を離れると近付いてくる誰かも進路を変更し後を追いつけてきていた。

ただ敵と考えるのは早計だし警戒を緩めずその誰かを待つ事にした。だが待ち構えていた私達を嘲笑うかのように近付いていた霊圧が唐突に消え。

シャーン

(上っ！)

突如真上に現れた霊圧に見上げるより先にバックステップ。入れ替わるように私が立っていた所を一筋の閃光が貫いた。

(なっ！？ 今のは！？)

未知の術式の結界に空間転移、だが最も信じられなかったのは最後の
一撃。

見間違いでなければ最後のは……。

(『白雷』だっ！?)

だが驚きに浸る間もなく続けて二撃、三撃と立て続けに『白雷』が撃ち込まれる。

「くっ！ 縛道の三十九『円開扇』！」

次々に降り注ぐ攻撃に円形の障壁を張る。
その直後障壁に『白雷』が立て続けに着弾する。

(なんて数！ まるで機関銃だ！)

一撃の威力は一般隊士の死神と大差ないが如何せん数が多い。この場に完全に縫い止められた！
外れた『白雷』が地面に当たり土埃が周囲を覆っていく。
そうして暫く降り注ぐ『白雷』を防ぎ続けると唐突に攻撃が止んだ。
舞い上がった砂塵が少しずつ消えていく。

「あなたは……何……？」

その声は上空から聞こえた。晴れていく視界を上によけるとそこには輝くような金髪の少女がいた。
神社の巫女が着るような着物、手には金属製の飾りが付いた錫杖を

持っている。そして目は綺麗な金髪のせいかわ和感を感じる黒の瞳だった。

「あなたは……何……？」

その少女はもう一度同じ質問をした。

「何……とは？」

だが二回も同じ質問をされてもその意図がまったく分からない。

「さっきの人……一撃で死んだ……。なのにあなたは生きてる……。同じ形の剣に同じ質の魔力……。でもあなたは違う……。？ さっきの人……。この世界に居るのに居なかった……。あなたは違う……。確かに此処に居る。さっきの人のように曖昧じゃない……。あなたは……。何？」

少女からよく分からない呟きが聞こえてきた。

正直さっぱり意味が分からないが幾つか気になる単語があった。

(さっきの人？ 同じ剣？ ……まさか……？)

「考え込んでいるところ済まないが一ついいか？」

「……？」

自分の世界に没頭していく少女に声を掛けると小首を傾げながらもこちらを見た。

「あゝ、その……さっきの人っていうのは私と同じこんな剣を持つてて黒い死覇……じゃなくて黒い服を着た男性だったか？」

私の質問に少女ははつきりと首を縦に振った。

その後で知り合い？なんて聞いてきたがそれに答える余裕は私には無かった。

(最悪だ、最悪だ！ 最悪だ！！ 最悪だ！！！)

最悪の事態だ。ただ現世から死神の反応が消えただけなら「虚にやられたか」で終わる。隠密機動を派遣し少し調査しちよっとしてから新たな現世駐在の死神が来る。それだけだ。

だが今は未知の術式で作られた結界が張られている。滯霊廷はこの結界を確実に捕捉しているだろう。こんな大規模で隠密性皆無の目立つ結界を見落とす程無能とはとても思えない。

そしてその中で死神が死んだとなれば当然何があったかを調べる為

に戦力を強化した本格的な調査隊が来るだろう。
そうなれば私の存在がばれる可能性が非常に高い。
瀨霊廷では大罪人である私が生きていることが判明したらその場で
滅殺、良くて捕縛され永久幽閉だ。

(戦友っ!!)

そんな混乱状態の私を正気に戻したのは手に持った斬魄刀
相棒の一喝だった。
慌てて少女を見れば掲げた錫杖をこちらに向けていた。
そして杖の先端に灯る蒼い光……。

(今度は『蒼火墜』か！ ええいつ……！ 考え込む暇すら無い！)

咄嗟に瞬歩でその場を退避、直後放たれた“何発もの”『蒼火墜』
が誰もいない地面に着弾、爆音を響かせた。

(下級、中級鬼道の連射か。厄介な……。
しかし……)

確かに強力ではあるが私が躲した直後に少女が私の姿を見失ったよ
うに顔を巡らせたのは見落とさなかった。

(瞬歩の速力に反応できていない?)

高速戦闘に対応できる程の反射神経が無いのか、はたまた実戦経験の不足か、どちらにせよ戦場で敵を見失う一瞬は致命的だ。

「あなたが何か私にも分からない……。でもあなたが“鍵”を持っている事は分かる……。だからあなたを殺して“鍵”を取り戻す……」

「“鍵”？」

私の疑問にしかし少女は答える事なく再度錫杖をこちらに向けてきた。

そして再び先端に灯る蒼い光。だが今度は錫杖を持っていない腕の手の平もこちらに狙いを定め錫杖と同じように蒼い光が灯る。

「やれやれ、そこまでするとは……」

その鬼道を見た瞬間私は思わず呆れてしまった。

『白雷』『蒼火墜』に続いてこんな上級鬼道まで……。

私が呆れている間にも鬼道は完成したのか、その矛先を私に向け。

瞬間先程とは比べものにならない爆音が結界内に轟いた。

「……やった……！」

『双蓮蒼火墜』で吹き飛ばされた丘を見て少女は勝利を確信していた。だが甘い。

「流石に上級鬼道の連射まではできないか、少し安心した」

「えっ……！？」

後ろから声を掛けると少女は驚きを隠そうとせすにこちらに振り返った。

しかしそれは隙だらけの動きでしかない。

「破道の一『衝』」

「！？」

振り返った直後に鬼道による衝撃をぶつけ少女を地面目掛けて吹き飛ばした。

そのまま地面に衝突はしなかったがそれでも空中で体勢を直すのにかなりの集中力を割いているらしい。必死に体勢を立て直そうとする少女に向けて私は斬魄刀を持っていない右腕で逆三角形を描いた。

「縛道の三十『嘴突三閃』！」

霊力で作った嘴を模倣した三つの光は少女目掛けて飛び掛かりその両腕と腰に食らい付く。そしてその勢いを止めることなく先程の一撃で掘り返された地面に少女を縫い付けた。

「キヤ!?!」

地面にぶつかった衝撃で少女は短い悲鳴を上げるが気にすることなく少女の身体を跨ぐ形で私も着地、斬魄刀の切っ先を喉元に突き付けた。

「ッ!?!」

「さて……取り敢えずは私の勝ちという事になるが……。勝者の特権、敗者の義務、色々喋ってもらおうか」

流石にこの状況は詰みだと気付いているのだろう。唇を真一文字に

閉ざしこちらを睨みつけている。

「！」

「喋る気は無いということか？」

頑なに口を閉ざす少女にさて、困ったと考え込む。

心情的にもメリット、デメリットを考えてもこの少女を殺す気は無かった。

殺してしまえば後腐れは確かに無いし、いざとなればそれをするのも致し方ない。

だがそれで終わりかと聞かれれば答えは“分からない”。

終わりかもしれないし少女の死に激怒した仲間がなりふり構わず襲ってくるかもしれない。

今は一種の人避けの境界が張られているが怒り狂った者が次からそんな配慮をする可能性は低い。

だからこそ、そういった情報をこの少女から聞きたかったのだがその相手が口を閉ざしている。

刃物を突き付けられても気丈に睨みつけてくることからよほどの目的があつて襲ってきたのだろうが……。

このままでは口を開きそうにない。

(本当にどうしたもの　　！！)

考え込んだ瞬間に気付いた。凄まじい霊圧が住宅街からこの丘に向

かって来ている。

速い。後数分もしない内にここに辿り着くだろう。

こちらに向かって来る霊圧に意識を割いた瞬間だった。

「!?!」

鬼道で捕らえていた少女が霊圧を一気に解放、戒めを強引に破壊し手に持った錫杖を向けてきた。

「!?!」

錫杖の先端に集まる霊力を見た刹那、首を傾けると同時に頬を『白雪』が掠めていった。

外したことを察した少女が二発目を撃つ為に錫杖を傾け照準を調整する。

その間に私は斬魄刀を手放し手の平を地面に置いた。

「縛道の二十一『赤煙遁』!」

第二射が撃たれる前に煙幕を発生させ互いの視界を遮った。

「なっ!？」

少女が驚く間にも煙幕は周辺に拡がっていく。

(厄日なのか!?今日は!)

少女が突然の煙幕に混乱している隙に落とした斬魄刀を拾い少女の上から飛び退いて先に煙幕から脱出、更に瞬歩で丘から離れるように跳ぶ。

(敵か味方も分からない奴を二人も相手にははいられん!)

援軍も来ない状況で下手に乱戦になって逃げる機会を逸したら最悪だ。
先に消耗して力尽きる可能性が高いのは孤立無援である私なのだ。
だからそうなる前に可能な限り距離を取って逃げる。

(ここまで来れば大丈夫そうか?)

結構な距離を飛んだところで地面に下りる。
とにかくがむしゃらに飛んできたが商店街の一角に着地したようだ。
シャッターが下りているが結界内のため人の気配は感じられない。
と思ったらその結界が消え海鳴市は本来の、寝静まりながらどこか

ざわついた気配を放つ街に戻った。

これが現代の人の世の普通の姿なのだろう。

一部の人は夜でも眠ることなく働き、時に意味も無く騒ぐ。

そんな世界……。

(これからどうしたものか……)

考えるべき事は無数にある。それらに頭を痛めながら屋敷を目指して歩きだす。

そういえば……。

(最後に向かってきた霊圧は何者だ?)

何故か知っている気配だったような気がしたが……。

そんな事を考えながら屋敷への道をただ歩いていった。

S I D E なのは

(フェイトちゃん！ もうすぐ戦闘が起きてる現場に到着する！)

(了解！ 私もすぐに向かう！)

つい先程、突然発生した結界内で何者かが戦闘を行っている事を確認した。

【ティアマト】の可能性もある為即座にバリアジャケットを起動、現場に急行していた。

「見えた！」

遠くで粉塵を上げる丘が見え、更にスピードを上げ近付く。その途中新たに巻き起こった煙幕の中から人影が出て来た。ただ遠すぎたのと出て来た直後直ぐに消えてしまったのもあって顔とかは確認できなかった。

「転移魔法？」

『魔法陣の展開は確認できませんでした。ソニックムーブ等と同じ高速移動魔法の一種と思われます』

私の疑問にレイジングハートが答えてくれた。

「追跡は？」

『目標、高速で移動中……駄目です、索敵範囲から離脱しました。申し訳ありません、マスター』

「仕方ないよ、今はもう一つの魔力反応を！」

その間にも今だ煙幕に包まれる丘の上に到着した。

その瞬間煙幕の中から金髪の女の子が飛び出してきた。昼の映像に似た【ティアマト】の女の子！

「あの人は……！ 何処……！？」

女の子は暫く辺りを見回した後諦めたように頂垂れた。

「時空管理局、高町なのはです！【ティアマト】の？」

そこまで言ってから言葉を切った。

先程から少女は俯いたまま何かを呟き続けて私の言葉を聞いていなかったようだ。

だが不意に顔を上げ凄まじい形相で私を睨みつけてきた。

「あつ……時空管理」

「あなたのような瑣末に構っている暇はありません……」

再度名乗ろうとした私の言葉を女の子が遮りその足元に見たことのない魔法陣を展開した。

そして手に持っていた杖で魔法陣を叩くとその姿が光に包まれて

「あつ！ 待っ」

呼び止める間も無く女の子の姿は光の中に消えていった。少し間を置いて海鳴市を覆っていた結界も消えた。

『……のはちゃん……！ なのはちゃん！』

「エイミィさん！」

『良かった、通じた！ 怪我無い！？ なのはちゃん！』

唐突に空中に現れたモニターには何度も通信を試みたのだろう、慌てた様子のエイミーさんが写っていた。

『通じたか！　なのは、無事か！？』

その後ろからクロノ君もやって来た。

「なのは！」

その間にフェイトちゃんも合流した。

『フェイトも無事だったか。良かった……』

「うん、私は大丈夫。なのは？」

「私も大丈夫。けどあの【ティアマト】の女の子には逃げられちゃった」

そう言うってからこの場で見た事を簡潔に説明した。

『そうか……でも危険な相手なんだ、フェイトやなのはが無事で良

かった』

『私としてはもう一人いた魔導士らしき人っていうのが気になるけど』

「女の子もその人と戦っていたみたいだし」

そう言っただけ私は先程まで戦場だったと思われぬ丘を見下ろした。結界内にある空間の位相をずらす事で特定の対象を隔離し捕えるタイプの結界だったのだろう。このタイプの結界は解除するとその中で壊された建築物等も元に戻る物が多い。そしてこの結界も御多分に漏れず破壊された丘も元に戻っていた。

『とにかく、詳しい報告は明日聞こう、今夜は休んでくれ』

『また明日ね、なのはちゃん、フェイトちゃん』

それを最後に空中のモニターが消え辺りは静寂に包まれ私とフェイトちゃんが残された。

そのまま地上に降り立ちバリアジャケットを解除する。

人気の無い夜なので民間人に見つかる可能性は低いかもしれないが危険は避けるできるだけ避けた方がいいだろう。

「なのは、今夜は……」

「取り敢えず家に戻るよ。いきなり飛び出したから皆心配してるかもしれないし」

「分かった……それじゃなのは……」

「うん、お休み、フェイトちゃん」

その会話を最後に私はフェイトちゃんと別れた。
暗い夜道を歩く中、ふと煙幕の中から出て来た人影の事を考えた。
遠すぎて殆ど分からなかったが何となく……。

(桔梗ちゃんに似てた?)

無論気のせいだろうがそれでも何故かその考えが頭を離れたかった。

S I D E O U T

第六話（前書き）

新話更新できました。

九月二日にご感想にて誤字のご指摘がありまして……。

“ 鳴海 ”ではなく“ 海鳴 ”でした。一応ここまでの更新分は修正してある筈ですが見落としがありましたら御一報ください。

誤字を指摘してくれました神威様、ありがとうございました。

第六話

「眠い……」

気を抜けば落ちそうになる意識を頬を叩いて覚醒させた。
叩くついでに『白雷』が掠めた頬も痛かった。

（取り敢えず今出来るのはこんなところか）

帰ってきてから行ったのは有事に備えて用意してきた二種類の結界の設置だった。

一つは外部からの霊圧の捜査を遮断する結界。その後追撃が無かった事を考えるとまだこの屋敷はばれていないかもしれないが、どうやらあの少女は私を狙っているらしい。

私への対抗手段として香久弥殿や陣谷殿、早苗殿が人質に捕られるのは避けたい、その為なら多少の手間でも惜しむべきではない。

だがこの結界には遠くからなる程度の探査術もごまかすことができるが近くまで来て気合いを入れて探すと結界自体が見つかってしまつ可能性がある。

鬼道衆の者ならもつとちゃんとした結界を作るぐらい朝飯前なのだろうが生憎私ではここまでが限界。

だからもう一つの索敵用の結界を張る事になった。

これは屋敷を中心にある程度の範囲で鉄製の板に術式を刻んだ物を結界の起点として設置、その範囲に霊力を持った者が入った場合即

座に私に知らせるといふもの。

この中に、例えば私が屋敷に居る時に昨日の少女が入って来れば私は屋敷から離れて少女の目から屋敷と結界の存在を逸らす事ができる。

霊力を持った者なら誰が結界の範囲に入って来たかも分かるので不用意に飛び出してしまふ事もないし、一つ目の結界よりは発見される危険も低いが難点としては結界の起点が壊されると途端に消えてしまふ事、設置場所が限られる事か。

なにせ屋敷を中心に置いていかなければならないのだ。

中には他の家の屋根の上に設置した物もある。風や雨で落ちるといふ事は無いと思つが鴉に突かれて壊される、なんて事も有り得るかもしれない。そうなれば再度設置しなくてはならない。

鬼道衆ならこの結界もやはり朝飯前なのだろうが仕方ない。

(後はあの少女と護廷十三隊の動向か)

まだ隠し玉があるならともかくあれぐらいなら少女は驚異ではない。問題は少女に仲間がいる場合。例えその仲間が少女より弱くても戦える者がもう一人いるだけで戦術の幅が広がる。驚異にならない少女も状況によつては危険な存在になる。

だがやるしかない。

刃を突き付けられてもなお揺るがない気丈な目。

あの目を見ればいやでも分かる。あの少女はもう一度来る。今日か明日か、数日以内には必ず。

結界の中に引き籠もつてやり過ごせるならそれが最善なのだが……。

(それもできそうにないしな)

とにかく、次に遭遇したら何とか再度捕縛し可能な限りの情報を集めなくてはならない。そうでなくてはこれ以上の対策のしようが無い。

(私にとってはもっとヤバい奴らが来るかもしれないしな)

現状、最大の問題は護廷十三隊だ。なまじその戦力を知っているせいで危機感しか湧かない。

最初に海鳴市の調査に来るとしても良くて十席から下の席官だろうがこの場合発見されて交戦した時点でアウトだ。

その場で退ける事は出来ても次には更に強力な戦力が来る。それを退けても更に次が……。

そして最後には私が力尽きて終わりだ。

まあ、そんな消耗戦になる前に隊長格が動くだろうが。

(あつ！ でも浮竹さんや京楽には会いたいかも)

尤も会ったところで敵同士だ、呑気にお話などできまい。

逆に会いたくないのにこの状況で一番来そうなのが隠密機動を率いる四楓院 夜一か。

『瞬神』の異名を持つあの女性が来たら絶対逃げられない。

逃げられないなら隠密機動を相手に敗北覚悟の徹底抗戦をすること

になる。そうなれば海鳴市がどうなるか……。

(やばい、やばい！ これ以上は危険だ！)

物騒な想像を振り払い今後の動きを考えようとしたが

(会いたい……か……)

不意にさっきの自分の思考に少し気分が沈んだ。

全く未練がましい、あの最後を望んだのは自分自身だろうに。

どんなにそこに至る過程が気に喰わないものだとしても、それでもあの最後だけは私が得た物だ……！

仲間の血で買った勲章など要るか！！ 私は！！

「やれやれ、思考が鈍ってきてるな……」

頭を振って通り過ぎた過去を払う。

帰ってきてからすぐ結界の設置を始めたせいでまったく寝ていない。そのせいかイマイチ考えが沈みがちだ。

とにかく学校に備えて寝よう、と敷いたままだった布団に入ろうとした時だった。

「桔梗ちゃ〜ん！ 朝ご飯出来てるけど食べないの〜!?」

香久弥殿がそんな事を叫んでいた。

窓から外を見れば帰ってきた時にはかろうじて日が昇る前だったのに今ではその姿を完全に現わして部屋を照らしている。時計を見れば昨日目を覚ました時間と殆ど同じだった。つまり学校に行かなければならない。

(……………顔でも洗ってこよう……………)

悪あがきかもしれないが少しは眠気も取れるかもしれない。
そう考えて何とか寝惚けた頭を騙しながら洗面所に歩いていった。

「……………ぎんぎん……………」

朝日が差し込む廃屋の中金髪の少女は黄昏れていた。

「…………負けちゃった…………」

呟きながら更に少女は落ち込んでいた。

こんな筈ではなかった。

専用の探索魔法と専用の道具を使ってこの世界に“鍵”が在ることがわかった。

少女は一刻も早く王に逢いたかった。声だけしか知らない育ての父と言える王に。

だからこそ少女は周りの世話係や少女の護衛である【力】に止められていたにも関わらず書き置きだけを残して自室を飛び出した。時空管理局の人間に追われていても関係なかった。

邪魔をするなら以前追いつけて来た人と同じで殺せばいい。そう考えていた。

「…………負けちゃった…………」

先程と同じ言葉を少女はもう一度呟き途方に暮れた。

勝てると思った。

魔法文明の無い世界だと聞かされていたし、邪魔になりそうな男を殺した時も不意打ちとはいえそれ程の手応えは感じなかった。

だからその男と同じ魔力の波動を感じた隻眼の女もすぐに死ぬだろうと思った。

だが実際に戦えば軽くあしらわれただけだった。攻撃は簡単に防がれ躲され一瞬で回り込まれて捕まってしまった。果たして時空管理局の人間が来なければどうなっていたか……。

「……………どうしよう……………」

今の少女には隻眼の女を探す手段が無かった。

“鍵”を探す為の探査魔法は使えるがそれを補助する道具を昨夜の探査魔法使用で使い切ってしまったのだ。

通常の探査魔法も使えるが魔力を抑えているのか、何らかの結界に籠っているのか朝から探索しても見つけれなかった。

仮に見つけても今のままでは勝てない。はつきりとした力の差だ。少なくとも隻眼の女の消える様に速く動く魔法に対抗する手段が無い限り自分一人では勝てない。

151

(……………そういえば……………)

隻眼の女の使っていた魔法。

あれは王から教わった物と同じ物ではなかったらうか？

(……………あの人は、一体……………?)

膝を抱えて考え出した時だった。

不意に日の届かない物陰から聞こえた砂を踏み付ける音に思考が中断された。同時に感じる魔力の波動。

「!? ……誰 ……!?」

考え込んでいたせいでこの距離でも気付かなかった。だがそれ以上に感じる魔力に覚えがあった。

長い間少女の傍に居た者。傍に居るのが当たり前過ぎて逆に気付かなかった。

少女の呼び掛けに物陰から姿を現わしたのは大男だった。

黒い肌に禿頭、身長は二メートルを越え濃緑色の服を筋肉が押し上げている。

【ティアマト】の中では【力】と呼ばれ重要なポストである【巫女】の護衛役を任された男。

「 ……ストレンド ……」

ストレンドに駆け寄ろうとした少女は、しかし突然その足を止めた。自分が彼等の言い付けを守らず勝手に飛び出した身だと思い出したのだ。

「ストレンド ……あの ……」

しどろもどろになりながらもとにかく謝ろうとした少女にストレンドは何を言うでもなく片膝をつき頭を垂れた。いつも通りの少女への忠誠を示した態度、しかしよく見れば右腕が微かに震えていた。かなり心配していたのだろう。

「…………ごめんなさい…………」

咳くように少女が謝るとストレンドは更に頭を下げた。

「でも…………お願い…………ストレンド」

その言葉にストレンドは頭を上げ少女の顔を見た。

そこにあつたのは幼くも決意に満ちた顔。覚悟を決めた戦士の表情。

「“鍵”の気配を持つてる人を見つけたの。彼岸の彼方にいる王を現し世に呼び戻す為の“鍵”がこの地にあるの」

ストレンドはただ静かに少女の言葉を聞いた。

「けど…………その人はとても強くて私じゃ勝てなかった。だからストレンド…………。」

ストレンドは少女の願いを知っていた。その願いの為なら彼はあらゆる敵を倒しその拳を血に染める覚悟があった。だから彼は少女の言葉を最後まで聞くことなく先程より深く頭を垂れた。

「ありがとう……ストレンド……」

寡黙な男の無言の肯定に少女は小さく微笑んだ。

「これより緊急の隊首会を執り行う」

一番隊舎に集った隊長達を前に彼等を率いる老将、山本元柳斎重國が厳かに告げた。

「昨夜、海鳴市にて詳細不明の結界の展開と共に現地駐在の隊士が連絡を絶った。

海鳴市では五年前にも危険な領域に達した空間の振動、その半年後には異界の危険物により海鳴市だけでなく現世そのものが危機的状況となった」

「異界の法則で作られた物か……興味深いネ……」

涅マユリの呟きに全員が彼を見て、しかし気にすることなく山本元柳斎重國に向き直った。研究者である彼の呟きは基本的に余人には理解出来ない事ばかりだ。

必要な時に質問すれば必要な事は答えてくれるのでその時に聞けばいいや、といった感じである。

「現在海鳴市を危険区域に指定し駐在の任も席官のみとしていたが……」

「ついにその席官に被害が出た……か……」

後を引き継ぐように日番谷 冬獅郎が言う。

「護廷十三隊は現在度重なる大きな争乱の影響で戦力の低下を招いておる。これ以上の戦いが起きれば護廷十三隊の機能そのものにも影響が出かねん」

争乱という言葉に日番谷 冬獅郎は僅かに顔を伏せた。
幾つも起きた戦いの内の一つには彼と彼の親友が深く関わっていた
のだから。

「僅かな火種でも油断するわけにはいかぬ。だが徒に調査隊を派遣
して更なる犠牲を出すわけにはいかん。

そこで腕利きの者に現地の安全を確保させその後、正式に調査隊を
派遣する事になった」

「人選の方は？」

浮竹 十四郎の質問に僅かな沈黙の後山本元柳斎重國が口を開いた。

朝の空座町、大半の生徒が登校した空座第一高等学校の屋上に三人
の人影があった。

「と、言う訳で私と一護、恋次が海鳴市に派遣される事になった」

「朝っぱらからいきなり拉致してなに無理言ってるんだよ。」

あと、その絵じゃ何が言いたいのか相変わらず分かんねーよ」

絵だけ見れば可愛いのだが状況を説明するには明らかに場違いなウサギの絵が描かれたスケッチブックを手に今回の任務の説明をしていた朽木 ルキアだが黒崎 一護の一言に無言でスケッチブックを投げ付けた。

「よーするに、その海鳴市って所に行つて危ない物が無いか探してこいつ、て事だろ。他の奴にやらせるよ」

「そうしたいが、護廷十三隊も調査に回せる隊士が少ないのだ。上位席官のような実力者を必要とする場所が多いが続けて起きた戦いの影響で各隊も人員が不足しだしているのだ」

「じゃあ、何でこいつは此処に居るんだよ？」

そう言つて黒崎 一護は阿散井 恋次を見た。

腕自慢が必要、と言うなら六番隊副隊長であるこの男は引つ張り風ではないのか？

彼はそう思ったのだが……。

「いや……。俺も他の仕事があったんだが……。いざ始めよう、って時に隊長が来て……」

そこまで言ってから彼は朽木 ルキアを見た。

その流れだけで黒崎 一護は彼等の間に何があったのかを悟った。恐らくは相当回りくどい遣り取りが彼等の間にあったのだろう、と。

「学校とか、虚とかはどうすんだよ？」

「学校なら山本総隊長殿が何とかしてくれるそうだ。これまでの戦いに関する書類仕事よりは軽い、と言っておられたぞ。虚なら空座町を担当している隊士が居るだろう」

「ああ、あのアフロのおっさんか。……。何て名前だった？ 前に聞いた気がすんだけどよ」

「む？ え……と？……車殿、だったか？」

「あ……、何だったっけな？ そんな名前だったと思うんだが……」

三人で考え込んだが結局思い出せなかったので脇に置いておくこと

にした。

「とにかく！ 明日には海鳴市に行く予定だ。ちゃんと用意しておくのだぞ！」

そう言って強引に話を切ると朽木 ルキアと阿散井 恋次が立ち上がり屋上から出ていった。

「って、おい！ 遊子とか夏梨には何て
！
くそっ、もう行っちまいやがった……」

一人屋上に残された黒崎 一護は強引な決定に頭を乱暴に掻きながら嘆息し空を見上げた。

暫くは空を見上げ続けた黒崎 一護は不意に視線を前に戻すと一時間目の授業に出席する為に屋上を後にした。

第七話

最初のチャイムが鳴り響く中、教室の扉を開ければ各々の席に座り始めていた生徒が一斉に私を見た。正直心臓が悪い。

しかし担任の教師はまだ来ていないようで安心もする。どうやら間に合ったようだ。

又してもギリギリな時間に動き出した上に今日は相棒を持ち歩く為に霊圧を抑える為の術式を仕込んだ布を巻いた竹刀袋を用意するのに時間が掛かってしまった。

「あの……おはよう、水無月さん」

「ああ、おはよう、ハラオウン殿」

まだ昨日の別れ方が尾を引いているのかその笑顔はぎこちなかった。

「水無月さん……あの」

「ハラオウン殿、何を言いたいのかは察しているが長くなるなら後にした方がいい。
担任が来られるぞ」

「えっ？ あっ、はい……」

私の言葉とタイミングを合わせたかのように教室に入って来た担任を見て落ち込みながら前を見た。

ウム、見事なデジャヴユ。

まったく、打たれ弱いのか何なのか、私まで落ち込んでくるぞ。ああ、またバニングス殿が睨んできた。

昨日の夜もそうだが海鳴市に来てから録な目に遭わない。

「ふわあ〜〜」……」

なんて事を考えていると思わず大きな欠伸が出てしまい赤面してしまった、くそっ。

ハラオウン殿も……わっ、凄い欠伸……みたいな顔で見るな！

仕方ない、寝過ぎす危険もあるが休み時間の間に少しでも睡眠時間を稼ぐしかない。

いつまでもこんな状態ではいざ襲撃があった時に対応できない。

この程度、昔ならどうということもなかったのだが……。

やはり力量の部分よりも精神的な心構えの部分で鈍っているらしい。重くなる瞼に覆われるように意識も眠りに落ちていった。

夢を見ていた。

夢だと分かっていった。

それは私が得て、そして通り過ぎた過去の一つだったからだ。

そこは炎の世界だった。

紅い火が大地を焼きながら流れていく。

空も紅い雲……いや、炎に覆われ大地同様焼かれている。

紅い炎に焼かれる大地と天を繋ぐように幾本の火柱が燃え盛っていた。

私はただ呆然とその世界を見続けていた。

そしてその私を更に巨大な影が見下ろしていた。

来たか

その影が私に声を掛けてきた。思った以上に甲高く綺麗な女性の声だった。

「お前が……私の斬魄刀か？」

私は問い掛けたが影から返ってきたのは笑い声、いや嘲笑。

そして同時に影の周りの空気も重くなる。

余がお前の斬魄刀？

たわけ、仔犬のような今のお前が余の炎を手にするなど早過ぎる。
身の程を知れ

子供を諭す大人のような口調に咄嗟に反論しようとした。

けれどできなかった。

その巨体が発する霊圧、そして覇気とも言うべきものが私の口を塞いでいた。

しかしお前は未熟者だが余の主であることも事実。

ならばお前が少しでも人として成長したのならその時は対等の立場で話してやろう

影は笑いながら言葉を続ける。

今はまだ余の前に立つ資格は無い。だから今は余の言葉だけを覚えておけ。

そこまで言うってから影は言葉を切り空を仰いだ。

余の名は『 』！！

余は大地を打ち砕く烈爪！

余は世界を噛み砕く鋭牙！

余は咆哮をもって天をも焼く紅炎！

故に余は己の果てを知らぬ紅き王！！

余の名は

！！

影は天に向かって吠える。その咆哮に触発されるように周囲の炎がより激しく燃え上がり流動を早めていく。

私はただその光景を眺め続けた。

それが『彼女』との最初の遭遇。

気高く厳しい、そして優しい、私の相棒との出会い。

S I D E 高町なのは

結局、桔梗ちゃんと話が出来ないまま最後のホーミングの時間になってしまった。

寝不足だったのか休み時間になる度に眠ってしまい話し掛けることができる状態ではなかった。

授業の時間に来る先生に合わせるように目を覚ますけどその間も終始眠そうにしていた。

(昨日の夜に何かしてたのかな?)

思い出すのは昨日の夜、結界の中で確認した魔力反応の片割れ。舞い上がる煙や粉塵の中から最初に飛び出してきた人影。遠くて顔も見れなかったのに何故か私はその姿に桔梗ちゃんを重ねていた。

(……違うよね……)

桔梗ちゃんからはそれらしい魔力を感じない。昨日始めて会った時からずっと。

(なら、よし!)

もう昨日の夜の事は気にしないようにしよう。
それよりも問題は昨日のお昼休みの桔梗ちゃんの言葉の真意だ。

(あれじゃ過去に何が有ったかなんて分からない。
ちゃんと納得のいく説明をしてもらわないと)

気が付けばチャイムの音と共に先生が教室を出ていくところだった。ホームルームは終わったらしい。それに合わせて桔梗ちゃんも鞆と竹刀袋を手に立ち上がる姿が見えた。

(まずい！ また逃げられる！)

本人には逃げているつもりは無いのだろうが昨日の事も何となくそんな気になっていた。見ればもう教室を出ていく後ろ姿。

(追いかけないと！)

その後ろ姿を私は慌てて追いかけた。

S I D E O U T

「桔梗ちゃん！」

下駄箱に到着したところで後ろから私の名前を呼ぶ声に振り返った。見れば高町殿が廊下を走って追いかけてきていた。その後ろからはハラオウン殿達も走って来る。

どうでもいいが廊下は走るものではない。意外と危ない。予想としては昨日の件か。あれで変な奴とでも思ってくれば距離も開けることができるのだが……。

「高町殿？ 昨日の事なら」

「桔梗ちゃん！ 今日には翠屋に来ない!？」

……。

「はっ？ 翠屋？」

予想していなかった言葉につい呆けてしまった。

「私のお父さんとお母さんが喫茶店を経営してるの。そこでならゆっくりお話できると思うの」

ほお、つまり自分の本陣に引き込んで逃げ道を塞ぐ策か。

「あんな事言われたんじゃ逆に気になるよ。」

成る程、昨日の言葉は逆効果だったわけだ。
普通ならカツコつけた事を言う変な奴とでも考えられたのだが……。

「だから」

「あ~~~~、分かった分かった」

いい加減人目が気になってきたのもあつておざなりに承諾してしま
った。

帰ろうとする人の波に逆らうように立ち止まる五人。しかも一人は
片目に物騒な古傷を持っているのだ。
嫌でも目立つ。

「じゃあ……！」

「た・だ・し！ 翠屋という店に行くまでだ！ 話す事があるかど
うかは私が決める」

期待に満ちた高町殿の言葉を遮って断言しておく。
下手に彼女に喋らせると勝手に話を進めてしまいそうな気がした。

「むう………」

「唸っても駄目なものは駄目だ」

「あんたもケチねえ。いいじゃない、ちょっとくらい………」

バニングス殿が軽く言ってくるが生憎そう簡単な話ではない。
なにせ死ぬ前は死神でした、なんて言える筈もない。冗談として扱
われるか、完全に痛い人扱いだ。

「そうポンポンと過去の安売りをする気もないのだが」

「そういうのもこれから話してくれるんだよね？」

「そんな事は言ってない。どさくさに紛れて何を言わせる気だ？
高町殿」

「ケチっ」

バニングス殿に続いて高町殿まで人をケチ扱いか。

「ハア……。ほら、翠屋とやらに行くのだろう。いつまでもこんな所で喋っているのは周りの生徒にも迷惑だ。行くなら行くで早くしよう」

そう言つて移動を促したのだが結局校門を出るまでバニングス殿からケチ呼ばわりされてしまった。
本当にやれやれだ……。

第八話

放課後の日が傾き始めた時間。

私と高町殿達で翠屋という喫茶店を目指して住宅地を黙々と歩いてきた。

「そっぴゃあんだ、その左目はどうしたのよ？」

その途中沈黙に耐え兼ねたのかバニングス殿が左目の古傷について聞いてきた。

「アリサちゃん……」

「な、何よ？ いいじゃない、別に」

身も蓋も無い聞き方に月村殿が咎めるような視線を向け、バニングス殿も若干怯んだ表情になりながらも、しかし興味は尽きないらしい。

それに対し私は、さてどう返答したものかと左目の古傷に軽く触れながら考え込んだ。

死神として生きていた頃訓練で負った傷なのだが死神だったという事は水無月家の家族にも話していない。

陣谷殿や早苗殿も近くに落ちていた刀やこの傷から何らかの事件に巻き込まれて捨てられていたのではと考えているが私の生まれを調

べる事はしていないようだ。

香久弥殿は……果たしてそこまで考えているかどうか……。
当時は妹ができる……、なんて喜ぶだけだったらしいが。か
といって現在は考えているのかと聞かれると……う……ん。

「んで？ それも話せない事情なわけ？」

バニングス殿が返答を急かしてくるが確かにこれは話せない事情に
入る。

少しでもこの古傷の事を話して万が一にも水無月家の方と会った時
話に矛盾が生じる可能性がある。
ではどう説明するか……。

「生まれつきだ」

結局そんな微妙な答えになった。

案の定四人は驚いた顔で私を見た。

「え？ でも生まれた時からそんな傷……」

「正確には生れつきとは少し違うがあまり大差は無い」

四人の戸惑いを代表するように月村殿が声を上げる。

「正確には……って」

「私は物心つく前に拾われたらしいからな。その時にはもう左目は見えていなかったからな」

私の言葉に今度は悲痛な表情で沈黙した。

「何を考えているかは解るが別に気にする程ではない。今の家族には良くしてもらっているし、この傷も問題にはならない。むしろ触れていると少しだけ落ち着くしな」

そう言つてまた左目の古傷に触れた。

この傷は私の失敗の結果負ったものだがこの傷のおかげで私は私の弱さを知ることができた。

まあ、あまり理解の得られない話なのだが……。

「別に左目が見えないというのも馴れているからハンデにはならないしな」

「大丈夫なの？」

「その為に色々訓練したからな」

高町殿が尚も心配そうに聞いてくるが私は笑いながら返事をした。

そんな話をしながら歩き続けていた時だった。

「 !? 」

不意に感じた霊圧に私は咄嗟に顔をそちらに向けた。顔を向けた先にも道が続いている。本来の進行方向とは違うが……。

「 桔梗ちゃん? 」

「 この先で何かあったのか? 」

突然足を止めた私に高町殿が聞いてきたが私はその問いに答えること
となく逆に聞いた。

「えっ？この先、って」

「お店とか何も無かったと思うけど……」

いきなりな私の質問に戸惑いながらも高町殿やハラオウン殿が答え
てくれたが聞きたい事と違う。

「そつえばこの先行った所って」

「確か車の事故があった場所だね」

「事故？」

バニングス殿と月村殿には心当たりがあるらしい。

「なのはちゃん達は知らないと思うけどここを進んだ所にある交差
点で夜遅くに普通車にトラックがぶつかる事故があったの」

「車に乗ってたのはこの辺りに住んでた三人家族の人達。旅行に行
つてた帰りにトラックが横から突っ込んだらしいのよ」

顔を俯かせる月村殿に複雑な表情のバニングス殿が状況を説明して
くれた。

「その三人家族の方々とトラックの運転手は？」

「車に乗ってた人達の方は両親二人が即死、娘さんだけは離れた路
地裏で見つかったらしいわ。助けを呼ぼうとしてそこまで移動した
んじゃないかって。」

トラックの方は衝突後横転、運転手は病院に運ばれたらしいけど…
…」

語るバニングス殿の表情は相変わらず複雑そうだ。

月村殿は死んでしまった者への憐憫、バニングス殿はそれに加えて
事故を起こした者への憤りが……。

「詳しいね、アリサちゃん」

「かなり派手な事故だったらしいから情報が飛び回ってるのよ。」

けど、それがどうかしたの？」

高町殿の質問に答えながらも当然の質問をされた。

しかしこちらとしてはそれに答える時間は無さそうだ。

「すまないが急用ができた。翠屋はまた今度誘ってくれ」

「桔梗ちゃん!？」

高町殿が声を張り上げるが振り返ることなく家と家の間にある細い路地に入りある程度進んだところで瞬歩で跳ぶ。

流石に高町殿達に見つかるわけにはいかないので空中に上がった時にもう一度瞬歩を使って一気に距離を稼ぐ。

(少し遠いな。急ぐか)

誰も居ない場所を狙って着地することができた。

そのまま何食わぬ顔で走り出す。

瞬歩で移動しているところは見られていない筈だ。

と、というか瞬歩の速さが見えている人間がいたらそいつは人の姿をした何かか、もしくは人間のまま人間の限界を超えた超人だ。どちらにしても録な奴ではない。

(此処か?)

考え事をしながらも目的地である事故が起きたのだらう交差点に到着した。

見ればちゃんと片付けられているがガードレールが中途半端に途切れていたり所々で事故の跡が残っている。

(この霊圧……! あっちか……!)

少し離れた場所で昇る霊圧。

感じられる霊圧それ自体は小さい。少なくとも昨夜の少女とは比べるべくもない。

問題はその霊圧の質。

(まったく!こんな時に!)

幸い周りに人は見受けられない。これなら大丈夫だろう。

そう判断して私は駆け出した。

「いやああああ!!！」

高いビルとビルの間、人の気配のないその空間で胸に鎖を付けた少女が恐怖に叫び声を上げた。

「こんな所にいたか！ てめえ!!！」

その少女に白い体色をした者が詰め寄っていた。

大きさはもとよりその姿も異様だった。

人とも獣ともつかない体躯、頭部は仮面のような物で覆われ胸部には丸い穴が空き向こう側まで見えていた。

肉体は死に絶え現世をさ迷う霊となりやがて渴き、飢え、そして落ちて己の飢餓を満たす為に人を襲うようになってしまった魂魄

虚。少女は初めてみる虚に後退りするが胸についた鎖は地面に繋がれ逃げる事が出来ず、またその叫び声が誰かに届くこともない。

少女もまた肉体を持たない霊であるが故に現し世に生きる人間には聞こえない。

「逃げんなっ!!！」

「ぐっ!!！」

怯える少女を片手で掴み上げ締め上げる。

「ぎっ……！！ がつ……！！」

「てめえの……！！ てめえらのせい……！！ 俺は……
……！！」

そのまま握り潰すように更に力を込めていく。

「死ねや……！！」

叫び虚は反対の腕を掲げ少女目掛けて振り下ろそうとする。
締め上げられる苦痛に顔を歪めながら少女は振り下ろされる腕をただ凝視し……。

「縛道の四『這縄』」

その声を聞いた。

次の瞬間、今まさに振り下ろされんとした虚の腕に光の縄が巻き付きその腕の動きを止めた。

「なっ！？ なんだこりゃ！？ 誰だっ！ 邪魔する」

状況の変化はそれで終わらない。

縄を巻き付きたまま虚が振り返った時、少女は自分を苦しめる圧迫感が消えると同時に浮遊感に包まれた。

「えっ？ えっ？ ……きゃ！？」

突然の状況の変化についていけず困惑していた少女は地面に落下した衝撃で我にかえた。

そして少女は自分の状態を知るために周囲を見回し……。

自分と虚の間に立つ刀を持つ少女の背中を見た。

遠くから感じた霊圧、やはり虚だったか。

虚と、襲われていた女の子の霊の間に庇うように立ちながらこの厄介な状況について考える。

咄嗟に縛道で虚の動きを止め女の子を掴む腕を切り落としたが、本来なら背後から問答無用で頭を叩き切るべきだった。

それが出来なかったのは……。

「ぐあああああ！ 痛ええ！ 痛ええ！ 何だ！？ てめえ、邪魔するなあ！！」

虚が腕を切られた痛みにも呻きながらも残った腕で殴り掛かってくるが私は霊圧を上げて斬魄刀で受け止める。

その衝突が突風になり私の後ろに抜けるがそれだけ。

私はこの程度なら揺るがないし私の後ろで呆然とする女の子も無傷。

「なっ！？」

「お前、以前にその交差点で事故を起こして死んだ奴か？」

攻撃をあつさり止めたことに対してか、虚が驚愕の声を上げるが私は構うことなく質問した。

「……！！ 俺が起こしたんじゃない！ そいつが……！！ そいつらのせいだっ……！！」

虚が呆然としていたのも束の間、私の言葉に再度激昂して殴り掛かってきたが私は立て続けに繰り出される攻撃を全て受けていく。

「くそっ！ くそっ！！ くそっ！！！」

「そいつらのせいとは……どういう事だ？」

虚の攻撃を受けながらも私は視線を後ろに向けた。
そこには目の前の状況に怯える少女の霊がいた。

「俺はいつも真面目に運転していた！どんなに急いでいても法律だけは守ってきた！なのに……！なのに……！！！」

その言葉と共に虚は動きを止め……。

「そいつらが俺の前に飛び出してきたんだよ……！」

今まで以上の力で殴りつけてきた。

先程までと同様に斬魄刀で防御するが受け切れず後ろに吹っ飛ばされてしまった。

吹っ飛ばされながらも私は少女の真上を通過した辺りで身を翻し地面に着地した。

「飛び出してきた……か。」

大方信号無視して突っ走ってきた車に横から衝突してしまったとい

つたところか。
ならこれはその復讐ということか？」

私の言葉に女の子の肩が大きく震えた。
生憎女の子は虚の方に向いていて顔は見えなかったので彼女がどんな感情でその言葉を受けたのかは不明だ。

「そうだ！　ところがいざこいつらを見つけたら余計な邪魔ばかり入りやがる！
てめえも！あの男も！」

「あの男？」

私以外にもこんな事をしている者がいるとすれば……。

「黒衣着物にてめえみてえな刀持った男だ！　あいつが俺を殺した奴らをどっかに消しちまったんだよ！」

律儀に説明してくれる虚に私は頭を抱えなくなった。
つまりは昨夜殺されたであろう死神は虚による被害を未然に防げる程度には優秀だったのだ。

ところがその死神が死ねば次の担当が来るまで海鳴市は完全に放置状態だ。天敵たる死神が居ない海鳴市は虚にとって住み心地の良い

場所になつてしまふ。
遠くないうちにそうなるとは思つたがまさか昨日の今日とは……。
虚に謎の敵に護廷十三隊、私が今の状況を忘れて頭を抱えなくなつたとしても誰が私を責められるか？

「こんな場所でやっと娘の方を見つけた思つたら今度はてめえだ！
畜生……！ どのつもこいつも、俺のことを馬鹿にしがつて……！」

私が現実逃避しかけている間にも虚は女の子に迫っていく。

「成る程な。貴様のやりたい事と事情は概ね理解した。
だが……その娘を殺して喰つても貴様のその飢えと渴きと、そして憎しみは満たせぬぞ」

「な……に……？」

今まで怒鳴り付けて暴れるだけだった虚が初めてその動きを止めた。
私の言っている言葉の意味が解らなかつたのだらう。だが動きを止めたということは意味が解らなくとも本能が理解してしまっているのだらう。

「何を言つて……」

「いや、正確にはその飢えに果ては無いと言つべきか」

虚の疑問の声を遮るように私は話を続ける。

「今はその娘に憎悪が向いているからまだいいが本当に今だけだ。貴様が自身の復讐を遂げても貴様の飢え　　魂の空白は満たされない。」

この娘を殺せば貴様の本能と呼ぶべきものが魂の空白を埋めるために貴様に親しい者を殺し、喰らうていく」

「だから、てめえはさつきから何を言つて　　」

「恐らくだが……まず最初に貴様と血の繋がった家族が最初の犠牲者になる可能性があるな。親、兄弟。恋人がいたのならその者も対象だろうな。」

そうして自身に親しい者達を喰らっても貴様の魂の空白は満足しない。やがて喰らう対象を無差別に拡げていく」

語りながらも私は霊圧を少しずつ上げながら虚に向かって歩いていく。

初めて感じる霊圧の放出に虚だけでなく女の子まで恐怖しているようだ。が今は関係ない。

「私はそれを見過ごす気は無い。死神としてではなく私は私の目的の為に貴様を切る」

その言葉を最後に私は瞬歩で一度は開いた間合いを一瞬で詰める。

「ひっ!?!」

突然目の前に現れた私に虚は引き攣った声を上げて私に殴り付けてくるが私はその攻撃を霊圧硬度を増した腕で受け止める。

「!?!」

素手で止めるという傍目から見れば愚拳といえる行為に虚は呆然としていた。

その虚の頭部目掛けて私は斬魄刀を振り下ろした。

第九話

消えていく。

爪が、腕が、脚が、腹が、胸が……虚の身体がどんどん消えていく。

「まだ……死にたくない……」

「……誰だってそうだ」

消滅の恐怖に眩きを漏らす虚に私は可能な限り冷たい声で応えた。

「だが貴様を放置すれば貴様と関係のない者にまで災厄を齎しかねない」

そしてその関係のない者の中には私の家族が含まれる可能性もあるのだ。

故に斬った。正義の為でも世界の安定の為でもなくただ自分の都合で。

「私から貴様にできる事は虚に堕ちた魂を斬ることだけだ」

顔を覆っていた仮面も消え人の顔が、目がじっと私を見ていた。

「……………あ……………あ……………」

「還れ。本来在るべき輪廻の円環にな」

最後に一瞬だけ虚から人の姿に戻りそして消えていった。

「……………さて……………」

それを見届けてから私は女の子の霊に向き直った。

「ひっ!」

「む?……………ああ、これが」

私と目が合った瞬間怯えながら後退りしだしたがよく考えれば目の前であんな闘いを見せられれば怯えるのは当然か。

「落ち着け、というのも無理かもしれんが落ち着け。別に虚でない者を斬りはしないさ」

極力刺激しないように言ってみたが怯えた表情は変わらなかった。

(やはり駄目か。仕方ない、無理にでも話を進めるとするか)

「とにかく！ これからお前を尸魂界へ送る。
放置すればお前も虚になる可能性があるからな」

「そつる……？ ほろつ……？」

「尸魂界は死後の世界、虚は……まあ、悪霊とか怨霊の類とっておけば大丈夫だ。
さっきの虚の言葉を信じるならお前の両親も尸魂界に送られている筈だ」

「……お母さん、お父さん？」

両親の言葉に反応はしたが……。

「……………」

何故か膝を抱えて蹲まってしまった。

「ど……どうした？」

予想外の行動に戸惑ってしまった。

こういう時は大概親に会えるということ喜事ぶか、胡散臭い顔で見
てくるかのどちらかなのだが……。

「……くない……」

「は？」

少女が何か小さく呟いたがうまく聞こえなかった。

「……会いたくない……」

もう一度独り言のように呟くがその内容はまったく予想していな
かった事だった。

(そういえば……どうしてこの子は“まだ”此処に居る?)

バニングス殿は助けを呼ぶ為にここまで移動したのでは、と言って

いた。

ならば霊体になり自分の状況を理解した時点で親の元へ、正確には事故が起きた交差点まで行くだろう。

だが少女は両親に会いたくないと言う。

見れば胸の鎖も地面に繋がれている。此処から動きたくないと言わんばかりに。

一種の地縛霊というやつだ何故こうなったのか……。

「そう言われてもな……。

私としてはお前を尸魂界に送るしかない。さっきも言ったが放っておけばお前も虚になる可能性がある。虚になってしまえばお前は人を襲うようになる。

私はそれを見過ごす事はできない」

「……襲わない……」

「不可能だ。虚になればいずれ人としての理性も常識も無くす」

さっきの虚は強い無念から人としての部分がまだあったようだがそれも極短い間だけだ。

「はつきりというが力づくでお前を魂葬……つまり尸魂界に送ることとは簡単だ」

私の言葉に膝を抱えて蹲るだけだった少女は勢いよく顔を上げた。その顔にははつきりと恐怖の感情が見て取れた。

「ただ……私はそれを義務とする死神とは既に決別していな」

そう言うってから私は刀を納めて少女の隣に座った。制服も多少は汚れてしまつかもしれないが気にするまい。

「無理矢理魂葬する前に少しだけ愚痴を聞いていくとしよう」

少女の方を見れば先程までの恐怖の表情から一変して不思議そうな顔で私を見ていた。

それに私が小さく笑って応えようと少女はまた前を向いて口を開いた。

「……私のせいなの……」

「？……車の事故が……という事か？」

私の質問に少女が頷いて続きを語りだした。

「早く家に帰りたかったの。旅行は楽しかったけど家に帰って遊びたかった。」

そう言つて何度も私が急かしたの。そうしたら『車も少ないし家も近いから大丈夫だろう』つてお父さんがスピードを上げて……そうしたら……」

信号を無視してしまい青で交差点に進入して来たトラックに横つ面を撥ねられた……か。

「私が早く帰ろうなんて言わなきゃあんな事にならなかつた。私のせいでみんな死んじゃつた。私のせいで……」

成る程な、つまり……。

「そして怖くなつて逃げてきた……と。此処に」

私の言葉に少女が頷く。

それは地縛霊になる。逃げてきたなら両親の元に行こうとする筈がない。

自分のせいだというなら確かに辛いだろう。

だが……。

ふと、今でも思い出せる死神だったあの頃の事を考えていた。

ある日どこからともなく現れた謎の軍勢。

倒しても倒しても次から次に現れその数を増していく敵。

最前線で闘い続ける仲間達。

それを将来の為と諭され後ろから指示を出す事しか出来なかった自分。

突然上空から降り注ぎ敵も、死神も、関係なく焼き払った光。

焼かれていく仲間を他の者に引つ張られながら遠くから見ていることしか出来なかった自分。

もう謝ることすらできない、消えていった仲間達。

「別に逃げることを悪いとはいわないが今回に限れば逃げてもお前が救われることはないぞ。永遠にな」

気が付けば私は昔を思い出しながら口を開いていた。

「え？」

「過去からの実体験に基づく確信だ。状況は違うがな」

そう言うて私は左目の古傷に触れた。

「私も昔、大事な仲間達に嘘をついて戦場で戦わせた事がある。もう会うこともできない」

「会えない……？」

「もうどこにも居ないんだ。現世にも、尸魂界にも。他の人達は残った私を励ましてくれたがな。君は悪くない、あの状況では仕方ない、あれは君が下した判断じゃない、とな」

卯ノ花さん、京楽、浮竹さん。

他にも色々な人が言葉を掛けてくれた。だがそれでも……。

「私は自分の中から罪の意識を消せなかった」

誰も責めない罪、故にその罪は存在しない。そして本来なら罪を責めることが出来る者達はもう居ない。
だから誰も罪を罰することができない。罰せられないが故に罪の意識が消えることもない。

「だから私は君が羨ましい」

許しを乞う相手がいる。

謝罪したところで許してもらえとは限らない。

一生許されないかもしれない。

大事な人から罪を許されないならそれは確かに重荷だろう。
だがそれでも……。

「まだ君は大切な人達に会いに行ける」

大切な人達なら尚の事会いに行つて謝るべきだ。
手遅れになつてからでは遅すぎる。

「許されなかった時のことなどその時に考えればいい。
だがもしも、その両親が君のことを大切に想っていてくれているなら、今の離れ離れの状態のほうが辛いだろう」

「……私……」

彼女は目を伏せて考え込んでいるらしいがこの手の事はあまり考え込むと録な事にならない。

そう判断した私は立ち上がり斬魄刀を抜いた。

「さて……それではさっき言った通り無理矢理魂葬するのでしょうか。私にも目的や願いがあるからな」

「願い？」

「私の家族を護ることだ。傍から見れば怪しいとしか思えない私を引き取り育ててくれた人達だ。大切な人達だからこそ今度は守り抜きたいんだ」

語りながら刀の柄を彼女に向けた。

先程と違い彼女はそれを静かに見詰めていた。

「言っておくが尸魂界に行っても君の両親が見つかるかは君の努力次第だ。」

すぐに見つかるかもしれないしその逆もあるだろう。

君が道半ばで力尽きることもあるかもしれない。だがそれでも君に罪の意識と家族を大切に想う気持ちがあるなら多分大丈夫だろう。

じゃあ……いくぞ……」

そして私は刀の柄を彼女の額に押した。
その直前……。

「……………ありがとう……………」

少女はそう呟いた気がした。

尸魂界へ旅立っていく少女の霊を見送り暫くはそのまま夕焼けに染まる空を眺めていた。
久し振りに仲間達のことを振り返ったからだろうか。何となく空を眺めていたくなった。
だがその感傷も突然変わった。周辺の空気に吹き飛ばされた。

「……………来たか……………」

昨夜と同じく、結界の影響だろう世界の色の变化。
遠くから聞こえていた喧騒と共に人の気配も消えた。

そして遠くから感じる強大な霊圧。
分かつてはいた事だ。

抑えてはいたが私の出した霊圧は決して小さくない。あんな戦闘を
すれば見つかる可能性は非常に大きかった。

「魂葬が済んだ後で良かった」

この結界に巻き込まれた魂魄がどうなるか分からないがあのまま放
置しておく気にもならなかった。

「それじゃ……行こうか。相棒」

私は手に持つ斬魄刀に語り掛け無人になったであろう街に走り出し
た。

結界の中、普通の色を失った海鳴市の上空で二人の人間が佇んでい
た。

「居る……この結界の中に捕えた」

その一人、金髪の少女が呟いた。

「また魔力反応を消されたら厄介だけど今度はそう簡単には逃がさない。

行こう、ストレンド」

もう一人、ストレンドと呼ばれた大男は静かに頷いた。

「移動してる。追わないと　　！？」

感じる魔力反応に向かおうとした瞬間四方から少女目掛けて複数の赤い光を纏った鉄球が襲い掛かった。

「ッ！！」

反応したのは少女ではなくストレンド。

その巨腕からは想像出来ないような素早い動きで拳を振るい飛来した鉄球を全て叩き落とした。

「……………」

少女を庇うように振るった腕を上げたままストレンドは自分達より上にいる者を睨みつけた。

そこにいたのは赤い服を着た少女。

手には大型の鉄槌を持ち睨みつけるようにストレンドと視線を交錯させた。

「時空管理局、ヴィータだ。【ティアマト】のメンバーだな？」

赤い少女、ヴィータはグラーファイゼンを二人に向け名乗った。

第十話

SIDE Eーなのは

今、私はフェイトちゃん達と別れて一人で交通事故があったという交差点を目指して走っていた。

(桔梗ちゃん、どうしたんだろ)

突然立ち止まったかと思うと突然交通事故の話が聞いてきた。そしてアリサちゃんから事故の概要を聞くと慌てたように路地裏に走って行き、私が追い掛けて路地裏を覗き込んだ時には既に桔梗ちゃんの姿は影も形もなかった。

何かあったという事はすぐに分かったので後を追おうとしたが、翠屋には学校が終わる時間に海鳴市に入ったヴィータちゃんを待たせていた。

取り敢えずヴィータちゃんには念話で私だけ後から合流する事を伝え桔梗ちゃんが向かったと思われる交差点に行くことにしたのだが……。

(意外と遠いな、飛行魔法を使えたらすぐに

!?)

心の中でつい愚痴を零してしまった時、遠くから吹き付ける魔力を感知、突然の事態に私は思わず足を止めてしまった。

(フェイトちゃんやヴィータちゃんじゃない！ 誰！？ それに…
…これは本当に魔力？)

魔導師の放つ魔力と似ているが何か言葉に出来ない違和感があった。

(感知した魔力反応は昨夜逃走した所属不明の魔導師と一致します)

放出された魔力は一瞬だったようだけどレイジングハートはちゃんと反応を拾ってくれたようだ。

(あの金髪の女の子と戦っていた人が？ とにかくフェイトちゃんとヴィータちゃんに連絡しないと！)

(はい、念話を繋ぎます)

桔梗ちゃんも気掛かりだけどこの魔力反応の主が【ティアマト】となにか関係があるならまずはこちらを優先した方がいい。局員、民間人を問わず襲っていく【ティアマト】は放置するのは危険だからだ。

そう思った私はフェイトちゃん達と合流する為に連絡を取ることにした。

((なのほ……?))

(突然ごめん。でも緊急事態で。二人は今何処に居るの?)

頭の中で響く声二人の声、フェイトちゃんとヴィータちゃんに私は問い掛けた。

(私は今翠屋の近くまで来てるけど……何があったの?)

(桔梗ちゃんを探してる途中、魔力反応をキャッチしたの。昨日、金髪の女の子と戦っていた人と反応が一致してる)

(なのほの見た、っていう)

(こっちに来る前にクロノからも聞いた。【ティアマト】と何か関係が有りそうな奴が居るって)

クロノ君から聞いてるなら説明の方は大丈夫か。

(もしかしたらまた戦闘になってるのかも。万が一に備えて一度合流しよう)

(分かった。ヴィータと一緒にそっちに行く。
ヴィータ?)

(あたしも今翠屋を出た。直ぐ合流)

突然だった。ヴィータちゃんが言い切る前に唐突に私の身体を魔力の波動が通り抜けていったのだ。

「ッ!? ……今のは? ……ヴィータちゃん? ……ヴィータちゃん!」

そして気付いた。ヴィータちゃんとの念話がいつの間にか途切れている。

慌てて何度も呼び掛けたが反応は返ってこない。

(念話が遮断されています……周辺に昨夜と同じ結界の展開を確認。念話遮断はこの結界の影響だと思われます)

(なのは! ヴィータが居ない! 翠屋の前にも、中にも!)

(そんな……それじゃヴィータちゃんは)

発動した結界に捕まった？

その事実には思い至った私は慌ててアースラと連絡を取った。

S I D E I O U T

S I D E I ヴ ィ ー タ

（あの野郎！ あたしの誘導弾を素手で叩き落しやがった！）

なのは達との念話の最中、突然発動した結界の影響か、世界の色が一変したのは達と連絡が取れなくなった。

更に結界内ではなのは達とは明らかに違う魔力反応を捕捉。調べに来てみれば前まではやて達と追跡していた【ティアマト】の重要人物と思われる金髪の少女とその護衛の大男だった。

（孤立しちまったのはヤバいけどある意味願ったりな状況だ。なのはに余計な負担を掛けちゃう前にあたしがこいつらを捕まえる！）

覚悟を決めて仕掛けた先制攻撃だったのだが初撃をあっさりと防がれてしまった。

完璧な不意打ちだった筈だ。

デバイスの起動も防御魔法の使用も間に合うタイミングではなかった。誤算があつたとすればあの大男はそれらを必要としない、常識外れな奴だったというところか。

「時空管理局、ヴィータだ。【ティアマト】のメンバーだな？」

この確認の質問自体には意味は無い。既に分かりきっている事だからだ。

重要なのはあたしが時空管理局に所属していて、こいつらの前に居ると事実だ。

「ロストログアの強奪、窃盗。管理局の局員や民間人への傷害や殺害。管理外世界への無断侵入と魔法の使用の現行犯によりお前達を捕縛する。

言っとくが逃走や抵抗は無駄だ。もうお前らは管理局に捕捉されるし、あと数日もすれば周辺世界からの増援が来る……逃げ場はねえ。

投降しろ」

結界の外にはなのは達も居るし、アースラにはクロノ率いる武装局員も待機している。

その事実を悟って投降してくれるならその方がいい。けど……。

「……………」

「……………」

大男は相変わらず睨みつけてくるだけだし子供の方も何を考えているのか解らない顔であたしを見ている。

十秒近くも続く睨み合いにいい加減焦れてきた時、金髪の少女が初めて口を開いた。

「……………ストレンド……………」

隣の大男に呼び掛けて少女は……………。

「あの人も居るからあまり時間は掛けられない。直ぐに終わらせよう」

足元に見たことのない魔法陣を展開し戦闘体勢に入った。

「ッー！」

少女の動きに反応してあたしと大男が武器を、拳を構え、そして少女が手に持っていた杖で足元の魔法陣を叩き光に包まれて消えたのは殆ど同じタイミングだった。

（転移魔法！？……ッ！）

起動した転移魔法に気を取られた隙に大男が右腕を振りかぶりながら一気に懐に飛び込んで来た。

（速いっ！）

間合いに入ると同時に顔を目掛けて繰り出される右ストレートをギリギリ引き付けて躲す。
だがその攻撃に反撃を行う間もなく右腕を引いて、左腕を繰り出してくる。

（くそっ！）

それを後ろに下がって躲すも、別の軌道でまた右腕が突き出されてくる。

「ッ！ 舐めるなっ！」

このままじゃ埒があかない！
そう判断したあたしは迫る右腕にカウンターでアイゼンを振り下ろした。

「……」

だが大男はそれを予期していたように素早い動作で右腕を引っ込め、入れ替えるように左腕を振るってきた。

（フェイント！？ しまった……！）

その動きに気付いた時にはもう回避が間に合うタイミングではなかった。

『Panzer Schild!』

咄嗟に手を突き出しシールド魔法を発動。接触したシールドと拳に

付与された魔力が一瞬火花を散らし……。

「ぐっ！……うあああ！」

受け止め切れず後ろに吹っ飛ばされ、更に追い打ちをかけるように何発もの蒼い魔力弾が上空から飛来してくるのが見えた。

「アイゼン！」

『Panzerhinderinis!』

吹き飛ばされながらも何とか発動させた一点集中型のバリアで魔力弾を防御し、体勢を立て直す。

そして魔力弾が飛んできた方向に目を向けるとあの少女が先程と同じ光に包まれて消えるのが見えた。

（また転移魔法！）

だがそれに悪態をつく暇もなく大男が半身になって力を溜め込んでいるのに気付いた。

「アイゼン！ カートリッジロード！」

『Explosion!』

カートリッジの魔力を補填したアイゼンを変形させる。
ハンマーヘッドの片側から魔力噴射の為の推進器が、反対側からは
スパイクが現れる。

『Raketenform!』

突撃形態への変形を終えたアイゼンが魔力を推進剤に変え推進器か
ら炎を噴き出す。

同時に大男も半身の構えのまま突進してきた。

「ラケーテン……ハンマー!!」

遠心力も加える為に独楽のように回転しながらあたしも大男に向か
って突撃を行う。

互いに凄まじいスピードで間合いを詰め狭まる距離が零になると
した瞬間。

「おおおお!!」

「……!!」

あたしはアイゼンを薙ぎ払うように振るい大男はそれに対抗する為に大きく振りかぶった拳をアイゼンに叩き付けてくる。

先程のシールド魔法との衝突とは比べものにならない程の火花が周辺を明るく照らす。

「……!!」

「嘘……だろっ……!!?」

だがそれまでだった。

拳と真っ向から打ち合ったアイゼンが勢いを止められている。

大男の腕力とそれに籠められた魔力付与の力が完全に拮抗してしまつたのだ。

ラケーテンハンマーは確かに破壊力に優れた攻撃だが、数年前になのはと戦った時にはカートリッジで強化した防御魔法で防がれた事もある。

だがこの男はそれを自身の魔力と力だけで行っている。

本来なら有り得ないと言い切れるこの状況にあたしは呆然としてしま

『危険!』

「!? くそっ!」

アイゼン警告に噴射口から吹き出る炎が小さくなっていること
と気づいた。

「
」!

そして、その一瞬を見計らったように大男は打ち合っていた右腕を
捻りスパイクの切っ先を逸らしてきた。

「えっ!? うわっ!」

その動きに咄嗟に反応できず、あっさりと体勢を崩されてしまった。

「
」

その好機をこの男が見逃す筈もなく、膨大な魔力を籠めた腕を背中
が見える程に大きく振りかぶり……。

「
」!!」

声にならない気合いと共に思いつ切り振り下ろした。あたしに出来たのは少しでもダメージを減らす為にシールド魔法を構えることだけで……。

「がつ……！！」

そんな抵抗など意味は無いと言わんばかりにシールドごと殴り飛ばされてしまった。

その勢いは自力で止められるものでもなく、ビルの屋上らしき場所に落下、衝突し数回バウンドしたことでようやく止まった。

「う……く……」

（シールドも…騎士甲冑も……まるで効いてねえ……なんて……威力だ……ちくしょう……目が……）

殴られた時のダメージと落下時の衝撃が大きかったのか視界が歪む。だがそんな状況でもアイゼンを手放さなかったのは殆ど奇跡だろう。アイゼンを杖代わりにふらつく足に無理矢理力を籠めてなんとか立ち上がることに成功した。

そして敵の姿を捜して上空を見上げれば止めを刺す為だろう、突進してくる大男が定まらない視界に入る。

「ハア……ハア……シュワルベ

！？」

それを迎撃しようとした瞬間、大男とは別の方向から青白い光を放つ棒が大量に降ってくるのに気付いた。

「ぐっ……!? ツ……！」

だが気付いたところで今の状態ではまともに反応できない。大量の光の棒の流れに巻き込まれまた地面に倒れてしまった。

(……動けねえ……バインド魔法か……これ?)

周りに突き立つ光の棒に縫い止められ殆ど身動きが取れない。更に悪いことに倒れた拍子にアイゼンを手放してしまったらしく、戦いの中ではいつも手にあつた筈の感触が消えている。棒が飛んで来た方を見れば杖を掲げる金髪の少女と先程よりも距離を縮め腕を振りかぶる大男の姿。

(……ごめん……はやて……)

確実に終わらせる為か、頭を狙って振り下ろされる拳を視界に納め

ながら重くなってきた。目が閉ざされた。
その直後、遠くから鳴り響くように轟音が聞こえ

。

(……音……?)

おかしい。頭を潰されたなら音など聴こえない筈だ。
次第にぼんやりとする頭でそんな事を考えながらあたしの意識は闇
に落ちた。

S I D E I O U T

第十一話

（まったく！ あのまま隠れていれば逃げ切れたというのに！
録な事を考えんな、私は！）

今だに余韻を残す轟音を耳にしながら私は咄嗟に目の前の男と赤い服を着た少女との間に割って入った事に対して愚痴を零していた。結界に捕われた直後は相手の出方を見るのも兼ねて感じる二つの霊圧から距離を取ることを選んだ。

戦ったのが昨夜。それから一日と間を置かずに二戦目を仕掛けてきたのだ。

余程の自信家か、ただの馬鹿でもない限り私への対策を考えてくるだろう。

そして予想通りあの金髪の少女はもう一人連れて現れた。それも霊圧からして只者ではない、と解る奴を。

（できれば安全策のまま事を進めたかったが……）

距離を取るために動いたのは良いがその後が私にとって事態をややこしくした。

もう一つ霊圧が現れたかと思うと二人組の方に突っ掛かっていったのだ。

まさかもう死神が？と思つて遠目から様子を見てみれば赤い服を着た子供がハンマーを振り回している姿だった。

(思えば……あのまま霊圧を消して隠れていればよかったか？)

この正体不明の集団の情報や戦い方が解るかもしれない、と霊圧を消したまま監視していたがあれよ、あれよという間に赤い方が追い込まれていった。

恐らく相性が悪かったのだろう。

見た限りどちらも攻撃型らしいが攻撃力はほぼ互角のようだった。得意分野が互角ならそれ以外が勝敗を決するものだが、あの禿頭の大男は体技の方で子供を上回っていた。

あっさりと相手の体勢を崩して必殺の一撃を叩き込み止めを刺そうという時に割り込んだのだが……。

(ただの一撃を受けただけで右腕が痺れる。

こいつ、本当に人間か？)

咄嗟に左腕の肘を刀の峰に添えて受けたが右腕だけだったら防御ごと押し切られていた。

そのまま刀と拳で鏝ぜり合いをするという傍から見たら奇妙な光景の中、私は空いている左の指を大男に向けた。

「破道の四……『白雷』……！」

指先に集束した霊圧を一筋の閃光に変えて額目掛けて放つ。

流石に正面から撃つただけの攻撃が当たる筈もなく首を傾げるだけで躲されるが代わりに鏝ぜり合いを行っていた腕の力が緩む。

その瞬間、両腕に力を籠めて相手の腕を思いつ切り跳ね上げ、がら空きになった胴に切り付けるも上空に飛び上がることで躲される。

「破道の三十一『赤火砲』！」

空高くまで浮かび上がった大男に鬼道を放ち、その後を追い掛けるように私も跳ぶ。

せっかく助けたのに戦闘に巻き込んでしまいました、では笑い話にもならない。戦うにしても先ずはこの子供から敵を遠ざける必要がある。

『赤火砲』自体は大男の片腕で弾かれ爆発したが、拡がる爆炎を目眩しに私は一気に距離を詰めることに成功する。

「
」

爆炎から飛び出した私に大男は驚いた表情を浮かべているのが目に映った。

「ハッ！」

絶好の機会に必殺の念を込めて斬撃を放つが身を翻しながら後退されたことで胸を浅く斬るだけで終わる。

(躲された

!?)

即座に追撃を掛けようとしたが大男との間を遮るように撃ち込まれてきた『白雷』の弾幕に後退を余儀なくされる。

私に向けて杓杖を構える少女とその傍まで下がっていた大男の二人が睨みつけてくるのを睨み返しながら次の一手を詮索していた時、少女が口を開いた。

「あなたも……時空管理局の人間……なの？」

「時空……？ 何だ、それは？」

今生でも護廷十三隊に籍を置いていた頃にも聞いた事の無い言葉だが……。

名前からすると何らかの形で世界Ⅱ次元を監視、維持Ⅱ管理しているような組織、ということか？

そんな組織が現世にあったのか？

「時空管理局は、あらゆる多元世界の法を定め、管理しようとしている組織の名前……でも、あなたは違うの……？
なら……どうして……アレを助けたの？」

多元世界……成る程、つまり異世界のようなものか。それなら死

神だった頃に噂だけは聞いた事はある。

しかし、時空“管理”局ね・・・あまり良い響きの名前ではないな。

「アレの仲間でもないのに……あなたはなんの関係もない人を助けるの？」

アレ、とはあの赤い服を着た子供の事か。

確かに霊圧を消したままでいれば逃げ切れただろう。私に何か起きた時悲しむのは私を迎え入れてくれた水無月家の人達なのだ。ならばなによりもあの人達の事を考えて行動すべきだ。

だが、そうやって非情に徹するには私はあまりにも……。

「……人間側に浸り過ぎたらしい……」

「……え……？」

「なに……私も身近な人達に毒されたな、と言ったんだ。」

私の咳きは聞こえなかったらしいのでちゃんとした質問の答えを言っておく。

例えこの選択を後悔することがあっても。

それでもあの人達が私の選択を誇ってくれるなら。

それは私にとって……。

「……？ どういじ……」

「これ以上は私の事情だ。

それより、お前ばかり質問というのも卑怯だろう。次は私の質問に答えてくれ。

お前はさっき時空管理局は異世界で法を定める者だと言ったな？」

言いながら私は斬魄刀の切っ先を二人に向ける。

「なら、その時空管理局と敵対しているらしいお前達は何者だ？」

「……私達は……？」

私の質問に少女が口を開いた瞬間、大男が私と少女の間に割って入ってきた。

「ストレンド……？」

突然の行動に困惑している少女にはなにも応えず大男 スト
レンドは静かに拳を構えてくる。

「そうか……答える必要無し、ということか」

ストレンドの動きに驚いた表情を浮かべつつ、少女も足元に光を放つ四角い陣を展開した。

遠目から監視していただけではイマイチ解らなかったが、あれは……。

（曼荼羅……か？ 何処のやつだ？）

現世の仏教、特に密教でよく使われる曼荼羅に様式が似ているのだが両界曼荼羅や浄土曼荼羅等とは違うようだ。

だが考えに浸る時間もなく少女が曼荼羅の陣を杓杖で叩くと光に包まれて姿を消し、同時にストレンドが突進してくる。

（これがこいつらの常套手段か。）

完全に連携の噛み合ってる敵を相手にするのは厄介なんだがな）

凄まじい轟音を纏って繰り出される拳の連撃を躲しながら打開策を考える。

多彩な攻撃手段を持つ後衛と高い耐久力と攻撃力に優れた前衛の連携は敵にした場合、考える以上に危険で、そして面倒だ。

前衛であるストレンドが正面から突撃して相手の気を逸らし、後衛役の少女が鬼道で相手に休む暇を与えず攻撃し、反撃の機会を潰していく。

そして疲れきった相手に最後はストレンドのパワーで止めを刺す。さっきの赤い服の子供はこのパターンでやられた。

「ッ！ このっ！」

躲しきれなくなつた拳撃を刀で逸らし斬り返すが、靈圧を纏つた腕で防がれる。

斬撃の勢いを維持したまますれ違い、互いに背中合わせになつたところで風圧と共に繰り出される裏拳を屈んで躲す。

更に追撃で放たれる蹴りを瞬歩で回避、背後を取り斬り掛かるが紙一重の差で躲され、振り返り様に頭部目掛けて迫る肘打ちを先程と同じように刀で逸らす。

(一撃が重い……！ 下手を打つと刀を取り落としそうだ……！
それに瞬歩の速力にも反応してくる。
ストレンドと呼ばれていたか……やはり強い……！)

幾度となく刃と拳を交えながらその強さを痛感する。

こいつの体技は万衆に魅せる為の格闘技ではなく、敵を制圧し、殺す為の業だ。

でなければ拳で刀と真つ向から打ち合おうとする筈がない。

これが一対一なら鬼道を織り交ぜた一撃離脱で戦っていくのだが……。

「ッ！？ しまった！」

ストレンドの攻撃を逸らし損ね後方に弾かれるが、直ぐに体勢を立て直し瞬歩で再度ストレンドとの間合いを詰める。

その直後私の居た位置を少女が放ったであろう『蒼火墜』が通過していく。そして知覚できた少女の霊圧が一瞬で消えたことからまた空間転移を行ったのだろう。

これが連携攻撃の厄介なところだ。下手に隙を晒せばもう一人が容赦なく攻撃を加えてくる。

ストレンドの体技に少女の鬼道、一見隙の無い盤石の戦法。

(だが、付け入る隙はある)

先程からストレンドに接敵する度に鬼道が撃ち込まれてこないのがその証拠だ。

最初の戦いでも思ったがあの少女にはやはり実戦経験が不足しているのだろう、同士討ちを恐れているのはすぐに分かった。

最も同士討ちの危険が少ない単体を対象にした縛道を使おうにも瞬歩も混ぜて右へ左へ動く私とそれを追うストレンドの動きはそう把握できまい。

空間転移で移動を行う少女の位置が解らない今、嵐のような猛攻に晒されるストレンドの傍が現状一番の安全地帯なのだ。

(後はこの二人を打倒する方法か)

思い付く方法は二つ。

高い攻撃力を持つストレンドをそれ以上の攻撃力で圧倒し、瞬殺する方法。

恐らくは一番確実に自身の被害を抑えつつ勝利できる。相棒の解放を行えばその攻撃力を得られるが、万が一逃げられた場合、まだ全容の解らない敵に私の戦力情報を知られることになる。斬魄刀解放は最後の手段だろう。故にもう一つの方法。

鬼道で両方の動きを止め、その隙に片方を倒す。ただし、これには問題が一つある。少女の正確な位置が把握できないと私も下手なアクションが取れないのだ。迂闊に動こうものならその瞬間ストレンドの攻撃を受けることになる。

（仕方ない……賭けのような方法だがやるか）

少女が出て来る方向の予測ぐらいはできる。なぜなら私には左目が見えないことからくる致命的な死角が存在しているからだ。

右か左か、大雑把な方向さえわかれば後は攻撃の軌道で少女の位置を捕捉できる。

（そして彼女の鬼道に対するカウンターで縛道を使って動きを止めその間にストレンドを倒す）

後はタイミング、少女が私の望む方向に出て来るかどうか。

（ッ………！ 攻撃が激しくなってきた………！ このままじゃ持ちそうにないし………次に合わせてみるか）

次第に短くなる拳の連撃の間隔に避けることができなくなり刀で攻撃を逸らす回数が増えてくる。
ストレンドもこのまま押し切れると判断したのか、一瞬だけ力を溜め今までよりも強烈な一撃を放ってくる。

「ぐっ……!!」

その一撃を逸らすことに失敗し、吹き飛ばされるが身を翻し霊子の足場に着地する。

さつき、後ろに飛ばされた時とまったく同じ流れ。

だがそこで私は、ストレンドに向かって霊圧を纏った腕で三角形を描く。

「縛道の三十『嘴突三閃』！」

巨大な三つの嘴をストレンド目掛けて放つ。

間合いが開いたことで突撃体勢に入っていたストレンドはそれを躲せず、両腕と腰の動きを封じられて吹き飛んでいく。

本来は壁等に縫い付けて拘束する鬼道なのだが時間稼ぎとしては十分。

これでストレンドは直ぐには動けない。

しかしそれだけではこの二人に勝つことはできない。

「縛道の八十一『断空』！」

私は予め使用を想定していた鬼道の一つ、『断空』を左側に張る。そして展開した『断空』に吸い込まれるように、動きを止めた私を狙って飛来した『蒼火墜』が着弾、爆発する。

(左……下方！　そこか！)

「縛道の六十二『百歩欄干』！」

即座に『断空』を消し左手に持った光の棒を『蒼火墜』が飛んできた方向に向け投げる。

そこには攻撃に失敗したことに気付いたのだろう、また空間転移の用意をしている少女が居た。

「ッ！？　きゃあー！！」

だがギリギリのタイミングで数十本に分裂した光の棒が少女を捕まえ、近くに建っていたビルの壁面に縫い付けることに成功する。

「……………！！！」

だが今度は『嘴突三閃』の拘束を破ったストレンドが掠れた咆哮を上げながら突撃してきた。

（予想よりも早い！ 三十番台の鬼道じゃ短時間の足止めが精一杯かっ！）

突撃の勢いを活かして振るわれた拳を大きく右に避ける。

あの少女からの援護が無い今は余裕をもった回避が行える。

「破道の一『衝』！」

続けて振るわれる拳に鬼道による衝撃を与える。

流石に攻撃を止めることは出来なかったが突然受けた衝撃にストレンドは少しだけ動きを乱す。

「縛道の六十一『六杖光牢』！」

その隙に六つの光の帯でストレンドを縛り、再度動きを封じたところで後方に飛び退く。

「散在する獣の骨！ 尖塔、紅晶、鋼鉄の車輪！」

ある程度距離を離れたところで片手をストレンドに向け鬼道の詠唱に入る。

「動けば風！ 止まれば空！ 槍打つ音色が虚城に満ちる！」

後少しで完成というところでストレンドを拘束していた光の帯に輝が入り一つ、二つと砕けていく。

（六十番台の縛道すら力技で破るか！ だが遅い！）

「破道の六十三『雷吼炮』！！」

遂に『六杖光牢』が破壊されストレンドが自由になった瞬間、私の手から放たれた極大の雷撃がストレンドに直撃し大爆発を起こす。

「ストレンドッ！！！！」

爆発の中に消えていく仲間を見て叫ぶ少女の前まで移動し刀を突き付ける。

「ッ！」

「今回も私の勝ちだな」

昨夜と同じ状況に少女が歯軋りする音が聞こえた。

「どうして……私の出て来る場所が……？」

「ん？ ああ、さっきの事なら簡単だ。

単に私が賭けをして勝つ確率の高い“左から攻撃が来る”方に賭けた。

そして賭けに勝った、それだけだ」

少女の質問に答えながら私は自分の左の蟀谷を指でトントンと叩く。

「敵の死角を突くのは悪い判断じゃないが、必ずしも死角が弱点というわけじゃない」

少女に説明しながらも突き付けた刀の切っ先を近付ける。

「質問タイムはこれで終わり。次は私の番だ。

戦いを始める前に私のした問いの答え、お前達は何者だ？」

「……私達は……【ティアマト】……」

「【ティアマト】？」

少女の口にした単語に首を傾げる。

「時空管理局……法の狗に色々な物を奪われた復讐者の集まり……復讐の手段を求めた人達の会合……」

復讐者の集まり。【ティアマト】はその組織名か。
だが……。

「そんな奴らが何故私を狙う？」

「それはあなたが !?!」

そこまで口にした時、少女が驚いたような顔で口を閉ざし私の後ろを凝視しだした。

それに釣られるように私も振り返るとそこには右腕をだらりと下げながら私を睨むストレンドの姿があった。

「……ストレンド……」

少女の嬉しそうな声を後ろに聞きながら私はストレンドの状態を確認する。

まず右半身、特に右腕がかなり酷い。

着ていたコートはボロボロで肌を露出させ指の先から肩は焼け爛れ今だ煙を吹き上げている。

だがそれに対して不自然な程に左半身のダメージが見受けられなかった。

恐らく『雷吼炮』が直撃する瞬間、咄嗟に右腕に霊圧を集め防御したのだろう。

『六杖光牢』を破壊してから攻撃を受けるまでのほんの僅かな間に右腕を犠牲にしなければ防げないと判断したのだ。

恐ろしいまでの判断力と精神力だ。
しかし……。

「もうやめろ。その腕ではこれ以上の戦闘は行えまい。」

今だに高まり続けるストレンドの霊圧。彼はまだ戦う気ているのだ。常人であれば致命傷と言えるダメージを負いながら……。

「聞いているのか？ そのままでは命を……！」

命を縮めるぞ。そう言おうとしてストレンドの変化に気付いた。

焼け焦げた皮膚に少しずつ輝が入り胸の傷や小さな掠り傷もどんどん塞がれていく。

そして……。

「……………!!」

ストレンドが両腕を振り上げ雄叫びを上げると焦げた皮膚が剥がれ落ちその下から赤みを帯びた真新しい皮膚が現れた。

「なっ……………につ……………!!?」

(超速再生……………!!? いやっ、違っっ!!!)

変化はそれで終わらない。

2メートルを超える巨体に相応しかった右腕が更に大きく肥大化していく。

「……………」

今では自身の身長をも超えて巨大化した腕を構え……………。

「……………!!」

叫び声と共に私目掛けて飛び出してきた。

「!? 縛道の三十九『円闇扇』!」

瞬歩にも迫る踏み込みの速さに回避不能と判断した私は咄嗟に刀を構え障壁を張った。だがストレンドの巨大な腕は障壁を容易く粉碎してしまう。

障壁を砕きながら、尚向かってくる拳に斬魄刀を盾にして防いだが……。

(止めっ……きれないっ……!!)

赤い服の子供を庇って受けた一撃とは文字通り桁の違う威力に私の身体は呆気なく吹き飛ばされ遠く離れたビルの壁を突き破り破壊してしまう。

やがて私の視界は崩れ落ちるコンクリートの壁や舞い上がる粉塵に覆われて見えなくなっていた。

「……ストレンド……」

たった今桔梗を殴り飛ばしたストレンドは巨大化していた右腕を元のサイズに戻し、少女を拘束している棒を一薙ぎで砕いた。

「……………ありがとう……………ストレンド……………」

少女の感謝の言葉には二つの意味があった。

一つは拘束から解放してくれた事。

そしてもう一つは……………。

(あの人に勝てた……………！ やっぱりストレンドって強い……………)

自分一人では勝てないであろう強敵にストレンドは勝利なのだ。己の従者には感謝してもしきれない。

「それじゃ“鍵”を拾いに行こうか、ストレンド……………ストレンド……………？」

後は倒れ伏す桔梗から王の復活に必要な“鍵”を回収するだけ。そう思って少女はストレンドに呼び掛けるが彼はずっと険しい顔で

桔梗が突っ込んでいったビルを凝視していた。

「……………ストレ……………！？」

その様子に疑問を通り越して不安さえ感じた少女はもう一度彼の名を呼ぼうとして、唐突に発生した強大な魔力の波動に思わず口を閉ざした。

（なん……………なの……………？ この魔力……………）

その魔力の発生源は今も粉塵が立ち込める桔梗が倒れているだろうビルだった。

吹き付ける魔力の波動に少女が圧されるように下がる。

その瞬間……………。

「天涯を焼き討て……………おっが皇呀」

澄んだ声が結界の中に響き渡った。

その声に一拍遅れて粉塵の中から“紅い”炎が噴き出し粉塵を、瓦礫を、そしてビルそのものを覆いつくしていく。

（なにつ、あの火は！？ 紅い……………炎……………！？）

その紅い炎は一切の不純な色を含んでおらず、舞い散る火の粉の一つ一つまでが鮮やかな紅い色を保っていた。やがて紅い炎に包まれたビルはその存在を維持することが出来ず砂で作られた城のように崩れ落ちていく。

「悪いが……私にも、私の帰りを待っていてくれる人達がいてな……」

崩れ落ちたビルの上、紅い炎の中で額から血を流す隻眼の少女、桔梗は手に持っていた剣を掲げる。その剣はさつきまでと違い刀の形をしていなかった。

彼女の身長を越える長大な刀身を持ち、どこか西洋風の雰囲気醸し出す片刃の長剣。

鏢は排除され刃は波打ち、峰は切っ先に到る途中までに幾度も鋭角な線を描く。

そしてその長剣も切っ先から柄の先端まで、辺りを覆う炎と同じ紅い色をしている。

「この戦い、私が勝って終わりにさせてもらおう!!」

掲げた刀剣、皇呀の切っ先を二人に向け高らかに宣言した。

第十二話（前書き）

まず最初に。

更新が遅れてすいませんでした！

更に難くなる戦闘描写に悩み何度も書き直す内に遅れてしまいました。

ただでさえBLEACH勢もまったく言っていないほど出ていないというのにこの時点でこの体たらく。まったく情けない限りです。次からはもう少し早く更新出来るように努力します。

あとですね、後書きでアンケートが二つあります。

ストーリーに関係があるものが一つとちょっととした思い付きが一つ。感想で答えていただきましたら作者が泣いて喜びます。

では本編をどうぞ。

第十二話

（さて、数年ぶりの始解だ。まさか寝ぼけてはいないだろうな？
相棒？）

（気力は十分、敵に不足なし！ 肩慣らしには丁度いいぞ！ 戦友
！）

己の斬魄刀に語りかけながらも私は周りで燃え盛る紅い炎に意識を
通し、より攻撃に、より戦いに適した形へと変化させていく。

「烈火鬪槍……！」

燃え盛る紅い炎は消え、代わりに紅い炎で作られた槍の群れが私の
周りに布陣する。

そして全ての槍の切っ先を上空に佇む二人に向け
。

「……………行けっ！！」

号令と共に一斉に射出する！

「ッ！」

「!? ストレンジ!?」

それに対しストレンジは傍らの少女を後ろに突き飛ばしたった一人
で飛来する紅い槍の群れと対峙する構えを見せる。

「
！」

雄叫びを上げながら左右の拳で次々と槍を砕いていくが、そもそも
正面から捌き切れる数とスピードではない。霊圧硬度の高い腕や脚
は無傷だがそれ以外の部位に掠り傷が増えていく。
それでも後ろに庇う少女の為に一步も動かず迎撃してあの程度のダ
メージとは……。
本当に恐れ入る。

「ハアッ……！」

皇呀に炎を纏わせ左右に降り焚火のように燃え盛る新たな炎を生み
出す。

「第二陣………行けっ！」

更に炎の中から新たな紅い槍の群れを射出、同時に私も瞬歩を使い飛び交う槍の間を縫うように跳ぶ。

「！！」

急接近する私にストレンドも気付いたようだが槍の迎撃に手一杯の為に動けない。

「近付くな……！！」

代わりに迎撃してきたのはストレンドの後ろに居た少女。杓杖を私の進行方向に向けストレンドへの道を遮るように『蒼火墜』を連射してくるが、その行動は明らか判断ミスだ。私は傍を通過しようとした槍の一本を掴み左に進路を変えた。

「！？」

まったく予想していなかったであろう私の進路変更にあからさまに動揺する少女。その彼女目掛けて私は先程掴んだ槍を思いっ切り振りかぶって投擲する。

「あ」

少女がその攻撃に気付いた時には既に防御も、空間転移も間に合うタイミングではなかった。

あの少女が行うべきだったのは私への牽制ではなく空間転移による離脱だった。

彼女がこの場を離れれば足枷の無くなったストレンドは自由になりフットワークを活かした回避行動が出来るようになる。そうなればストレンドは再び前衛としての役割をこなせるようになっただろう。だが全てが遅い。

投げた槍は吸い込まれるように少女に向かっていき

「え？」

その間に割り込んだストレンドの腹部に突き刺さった。

「ス……ストレンド……？」

彼の背から少女の震えた声が聞こえてきたが、それは助かった安堵から出た声ではないのはストレンドの状態を見れば明白だ。

私が少女を攻撃した瞬間、完全に防御を棄てて動いたのだろう。先程投じた槍の他にも何本かの槍が胴体を貫通していた。

全身から紅い槍を生やしながらも少女を庇って仁王立ちする男の姿。その壮絶な立ち姿に私も追撃を忘れて呆然としてしまった。

「
私が呆然と立ち尽くす間にもストレンドの唸り声が聞こえてくる。
見れば突き立つ紅い槍が次々と砕け散り、身体に空いた穴が不自然
な程の速さで塞がっていく。」

「
「！」

そして完全に傷を癒したストレンドが咆哮を上げながら再度私に突撃してくる。

（さっきの『雷吼炮』の時と同じか！ これでは埒があかない！）

だが、このまま棒立ちになって敵を迎え撃つ気もない。私もまた靈子の足場を蹴りつけストレンドに向かって加速する。俗にいうチキンレースと言われる状況。相手の加速距離を殺しつつ自身の一撃を最大限に活かすにはこれが最も有効な手段なのだ。互いに加速を続けその距離が零になる瞬間、ストレンドが右の拳を繰り出し、私は右腕を斬り捨てるつもりで皇呀を振り下ろす。さっきまでと同じ剣と拳の衝突。違うのは始解状態となった相棒が私の手にあるということ。

「
「ッ!？」

そしてその差は一瞬の交差に表れた。
私の振るった剣は、ストレンドの拳に食い込み、肩まで一気に切り裂いていく。

硬い霊圧に護られ先程までは刃一つ通さなかった腕を斬られた驚愕からか、呻き声を上げながらも今度は左腕で裏拳を繰り出してくるが結果は変わらない。

その一撃を皇呀で受けそのまま薙ぎ払うようにストレンドの腕ごと振り抜く。

「ッ！」

左の拳からも血を流しバランスを崩しながらも後ろに飛び退いていくストレンドに追撃を掛けようとした時、飛来する複数の『蒼火墜』に気付いた。

247

「炎城壁……！」

皇呀に炎を纏わせ下に向けて薙ぐ。すると炎から飛び散った火の粉は火山の噴火を思わせる程に噴き上がり、『蒼火墜』と衝突、その全てを上方に“逸らす”。

更に炎城壁を回り込んで瞬歩を使い一気に少女の懐に飛び込む。

「えっ……ぐっ!？」

杓杖を構えたまま驚愕の声を上げる少女の肩を蹴り飛ばし近くのビルの上に叩落とす。

「破道の三十一『赤火砲』！」

倒れ伏す少女に左手を向け炎弾を放つが両腕の再生を終えたストレンジに落とされてしまう。

（大抵のダメージならある程度の余裕があれば再生出来るのか。ここまでくると生命力というよりは呪いだな。簡単に死ぬことさえ出来んだろう）

「」

暫し空中で睨み合いを続けているとストレンジが再び霊圧を上昇させていく。

「」

どんどん上がっていく霊圧と共に聞き慣れた掠れた咆哮を上げてストレンジが己の右腕を膨張させていく。

「……決着か……」

先程までの攻防でストレンドは既に気付いている。

単純な膂力と体術を除けば攻撃能力、機動力共に勝ち目は無いと。

特に私の攻撃能力の向上は致命的だったろう。

今までは凄まじい霊圧硬度を持つ両腕と圧倒的な腕力、それらを活かす技術で少女を護る壁役を熟せた。

だが相手の攻撃を凌げない者に前衛は務まらない。

ストレンドの腕の霊圧硬度でも私の剣を受けることは出来なくなつた。

故にこのままでは少女を護れないと判断したストレンドは最後の勝負に出ようとしている。

即ち殺られる前に殺れ。

下手に私に攻撃される前に自身の最大の攻撃で私を圧倒しようとしている。

「いくぞ、相棒」

生半可な方法ではあの巨大な腕の一撃は防げない。

その攻撃力は大抵の壁を容易く粉碎し、圧倒的な踏み込みの速さと巨大化した拳はこちらが回避する為の余裕と空間を削ってしまう。ならばどうするか？

答えはストレンドと同じ。

防御も回避も困難ならこちらも最大火力の技で相手を擦じ伏せる。

問題は技の選択。

正面から馬鹿正直に鬼道系の術や烈火闘槍で攻撃しても効果がある

とは思えない。

ならば攻撃は皇呀の火力を最大に發揮出来る近接系の技になるが、あの巨大な腕のリーチは見た目以上だ。ただ攻撃したのではストレンドの方が先に届いてしまう。

（だが対抗策はある。その為の布陣はさつき終えた。
後は……行くのみ……！）

「魔皇喝采……！」

更に上昇するストレンドの靈圧に対抗する為に私もまた靈圧を上昇させていく。同時に刀身を無数の紅い火花が彩る。それはさながら無数の拍手を思わせる音を響かせて……。

「……スト……レンド……」

少女の呟きが聞こえた瞬間、私はストレンドに向かって、ストレンドもまた私に向かって突撃した。

「おおおおおっ……！」

「……！」

先に動いたのはストレンド。私が攻撃動作に入る前にその巨大な腕を振り上げ。

「　　ッ!？」

直後まったく関係の無い方向から飛来した紅い槍に左脚を貫かれバランスを崩した。

その紅い槍は烈火闘槍。少女からの攻撃を防ぐ為に展開した炎城壁をそのまま烈火闘槍を射出するための砲台代わりにしたのだ。

予期せぬ方向からの攻撃に体勢を崩しながらも振るわれた腕には、しかし最初に受けた時程の勢いは無かった。

繰り出された拳をかい潜って一気にストレンドの懐に飛び込み。

「はあああつ!！」

気合いと共に紅い火花を散らす皇呀を振るってストレンドの胸を切り裂き、飛び退いて一旦間合いを取る。

胸から血が噴き出しながら、それでも怯むことなく向かって来るストレンド。その周りを皇呀から飛び散った紅い火花が包みこみ。

「……………終わりだ……………」

ストレンドを中心に次々と大爆発を引き起こした。

「アンコールだ……受け取れ！」

今だに爆炎を上げているところに皇呀を振って紅い火花を放り込み爆発させる。

「……………」

近くのビルの屋上に降り立ちストレンドを飲み込んだ爆炎を見遣る。魔皇喝采は始解状態の皇呀で使える技の中では最大級の破壊力を誇る。だがこれでも倒せないとなると残された方法は……。

「……………」

「くそっ！」

そして頭を掠めた不安を体現するように炎の中から私目掛けて飛び出してくるストレンドを見て思わず悪態をつきながらも後ろに飛び退く。

私の立っていた場所に入れ替わるように着地するストレンド。だが今のストレンドの状態は『雷吼炮』を受けた時より尚酷い。

全身に重度の火傷を負い、左腕は肘から先が無くなっている。本来なら疑う余地の無い致命傷。人間なら死んでいなくてはならないダメージでもストレンドは生きている。

「 ツ！ ツ！ ツ！」

だが様子がおかしい。すぐにダメージの回復をされると思われたストレンドだが今は荒く呼吸するだけ。よく見れば焼け焦げた断面を見せる左肘が僅かに震えるだけで今までのように再生する気配が無い。

（まさか……再生力にも限界があるのか？）

もしそうならこの好機を逃す訳にはいかない！

「 ……！！！」

だが私が動くよりも早くストレンドが巨大な右腕を振り上げ自身の足元、ビルの屋上に叩き付け打ち砕いた。

「何をっ ……！！？」

最後まで言い切る前にその異変に気付いた。

足元から断続的に破砕音が響き余震のような小さな振動が足元を僅かに揺るがしている。異変はそれだけで終わらない。屋上の床には次々とひび割れが入り、続いていた余震はついに地震と呼べる程に大きくなった。

（まさか……！ 拳圧だけでビルを土台ごと打ち砕いたのか！？）

驚く間にもビルの崩壊は止まらない。咄嗟に跳び上がる暇もなくビルの崩壊に巻き込まれ重力に引かれて落下してしまった。

「無茶な……！」

目まぐるしく変わる視界に映ったのは私の周りで同じように重力に引かれて落下する瓦礫と緩慢な動作で跳び上がるストレンドの姿だった。

「魔皇喝采っ！」

皇呀から紅い火花を生み出して周りに放る。周辺に散時かれた火花は落下する私の近くに有った瓦礫に触れ次々と爆発して吹き飛ばしていく。

更に剣を振った反動で体勢を立て直して着地、跳躍してビル崩壊の

際に発生した粉塵の中から脱出する。

「ッ！ 何処だ……！？」

少し離れた別のビルの屋上に着地し、周辺の警戒を行ったのだが……。

（気配が無い？ 逃げた？）

常に圧倒的な霊圧を放っていたストレンドの気配が消えていた。周りを見渡せばあの少女の姿も消えている。それでも暫くの間じっと構えたまま警戒を続けていると突然硝子が割れるような音と共に結界が消滅し世界が元の喧騒を取り戻した。

（まさか……本当に逃げたのか？）

構えを解かず待つこと数十秒、ようやく相手が撤退したという事実を悟った。

皇呀の始解状態を解除して刀の形に戻し、竹刀袋と霊圧封じの布を使って肩から吊っていた鞘に納める。

「痛っ……！！」

結んだ布を解いていた時、戦いの緊張から忘れていた額の痛みが蘇ってきた。

軽く触ってみれば指先に僅かにぬめる感触があった。

（血が出ているか……だがアレを喰らってこの程度ならむしろ運が良い方だろう）

咄嗟に障壁を張り霊圧も一気に解放してまでの防御だったがそれでも防ぎ切れない強力な一撃だったのだ。

額から血が出るだけの被害ならもはや奇跡の領分だろう。

（それに治癒系の鬼道も使えるからある程度なら大丈夫だ……かなり苦手だが……）

人の上に立つ立場を目指すなら前線だけでなくそれを支える者達の苦勞も知るべきです。

凄くイイ笑顔をした卯ノ花さんにそう言われて一時期練習した事がある。

面倒だからと少し反抗した際に見せたアノ笑顔は山本元柳斎よりも怖……ヴヴツ、ヴウンツ！ うん、説得力があった。

（万が一に備えて包帯とかの医療用具も鞆に入れて……？ ……？

？ 鞆は何処だ？

普段であれば鞆を提げている筈の右肩をバシバシと叩くことで初めてその不在を思い出す。

（確か……虚が居た路地裏に入る前に邪魔になるから近くにあった物陰に放り込んで……）

そこまで思い出してからビルの屋上の柵に手を置き住宅地がある方を見た。

（どの辺りだったかな？）

海鳴市に引越してきてから一ヶ月足らず。大きなビル等が建ち並ぶこの地区には殆ど来た事が無い。戦ううちにこちら側まで来てしまったのだが……。

（仕方ない。うる覚えだがある程度は記憶してるから地道に探すと？）

街を見回している時、別のビルの屋上に倒れる人影が見えた。

(あれは……確か……)

人が倒れているビルまで距離があるわけでもない。

膝を曲げ力を溜めて大きく跳躍、流石に人に見付かる訳にはいかないので瞬歩を使って一気に目的のビルまで飛び移る。これで人目には映らなかった筈だ。

「やっぱりあの子供か……時空管理局とかいったか」

着ていた物が赤い服からよく見掛ける子供服に変化してはいたが倒れていたのはストレンドにやられたあの子供だった。

「相手手酷くやられたな」

軽く観察してからダメージの大きさを測る。

ストレンドの渾身の一撃を受けたのだ。何処かの骨にひびが入るか、最悪折れているかもしれない。

「やれやれ……何処その組織の勢力争いか何かと知ってたら手は出さなかつたんだがな」

子供の傍に屈み込み手に霊力を集める。

「中途半端な治療でも恨むまないでくれ。なにせ本当に苦手なのでな」

聞こえていないだろうがそれでも一応、断りを入れてから治療を始め。

さて、家族には帰りが遅れる事をどう言っって言いつくしよう。

第52管理世界。そこに住む人々が暮らす街を一望できる丘の上。そこに一人の男が立っていた。

短い髪をオールバックにし、黒い軍服のような服の上に金の縁取りが施された黒いコートを羽織り腰には日本刀を差している。

その男は何をするでもなく静かに夕日に沈む街を見下ろしていた。

「……………レオーナか……………」

「はい」

耳が痛い程の沈黙の中、不意に男が後ろから近付いてきた女性に声を掛けた。

腰まで届く長髪を首と、髪先の部分で一つに纏め、男と同じく黒い軍服の上から縁取りだけが赤く彩られたコートを羽織っている。そして長い髪に隠れた肩の上にも人が乗っていた。

だがソレを人と呼ぶのは正しくない。

ソレは人の姿をしていながら人の手の平の上に乗る程度の大きさしかなかった。レオーナと呼ばれた女性と同様長い黒髪を持つが、前髪も伸びて顔を隠してしまっているので、その髪はただ放っておいただけ、という印象が強い。

「どうしても出られますか？ 閣下」

「ああ。久し振りに体を動かさなければ鈍るからな。

あいつらならば生贄にも丁度良いだろう」

レオーナの問い掛けに男はそう答えて街の中でも一際大きな施設を見遣った。

その建物からは何人もの時空管理局の局員が出入りしていた。

「ですが……この程度の任務ならば私と【群体】でも問題なく遂行できます。

閣下の御手を煩わせるような事は

「

「その話ならば先程もしたぞ？ お前はまた私の時間を浪費しに来

たのか？」

「ッ！ 申し訳ありません……閣下……」

本当に申し訳なさそうに謝罪するレオーナに男は喉を鳴らして小さく笑う。

「構わん、お前の心配性は今に始まったことではない。それで？ 首尾はどうだ？」

「【復讐者】 【盾】 【傀儡師】 は予定通り我々の攻撃開始後に第9管理外世界へ向かうそうです。」

【剣】と【竜】は現在連絡を絶っていますですが彼等なら大丈夫でしょう」

「【群体】と【錬鉄】は？」

「【群体】は既に第70管理世界に入りました。聖王教会の戦力も管理局施設に駐屯し戦力を増しているので警戒を促したのですが無駄でしょうね。」

【錬鉄】は例の機動兵器のサルベージと調整を行うそうです。見立てでは一週間以内には戦闘可能だと」

「随分早いな」

「元々は彼女が最高評議会の下で活動していた時に造った抑止力と呼ぶべき物。彼女以上にあれに詳しい者は居ないでしょう」

レオーナの報告に男は無言で頷く。

「ご苦労、レオーナ……さて、そろそろ時間だ。

お前にも任務がある。そろそろ配置につけ」

「承知しました。閣下もご無理はなさらずに」

レオーナが足元にベルカ式の三角形の魔法陣を展開し転移魔法を起動、光の中に消えていった。

「さて……後悔の時間だ……」

レオーナが消えてから数秒、下りてくる夜の帳に明かりを灯しだした街を見下ろしながら男は静かに腰に差した刀を鞘から抜く。

「何も知ろうとせず、ただ平和を謳歌する者どもよ。

その平和の土台がなにで出来ているのかを教えてやろう。

異界の神より賜りしこの力をもつてな」

呟きながら鞘から抜いた刀の切っ先を空に向ける。
同時に男の身体を膨大な魔力が包みこむ。

「業罪を焼け……………天啓^{てんけい}」

その言葉と共に刀から眩い程の白い炎が溢れ出し天へと昇り集束していく。

それはまるで白い太陽のように輝き。

「……………神威を見よ……………！」

人々が暮らす地上に一気に白い炎が降り注いだ。

第十二話（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
前書きで書いたアンケートについてですが、まずは……。

オリキャラ設定集みたいなのは必要か？

という件です。

本編である程度出ているキャラの設定集になるので書くとしたらまずは水無月 桔梗とその斬魄刀、皇呀についてですかね？

それでも本編でまだ出ていない設定もあるので少ししか書けないですが……。

ただこれをやろうとすると本編の更新が遅れる可能性があります。片手間に内容を変えられる程度の量なら問題無いんですが、本編に合わせて大幅な変更が必要になった場合は時間が掛かるかもしれないです。

完結してからでいいよ、となるのでしたら全部終わってから、ってことになります。

これが一つ。

次が……。

主人公（桔梗）側にも“リリカルなのは要素”は必要か？

という件です。

この小説見てた友人に、

友A「主人公とかティアマト強すぎて対抗できそうなBLEACH
オンリーになるんじゃないかね？ このままじゃ後半辺り“なのは”要ら
ないじゃん」

と言われ、

作者「……一理ある……」

と頷いてしまったことからその辺りの設定で頭を悩ませてしまった
のです。

ただ、アンケートやるにしても流石に設定の全てを読者に丸投げは
どうよ？

という考えが頭を過ぎったので、作者の書けそうな奴の候補を下に
書きました。

1. インテリジェントデバイス

ただし、桔梗が魔法を使うとせつかくの死神設定（特に鬼道系）が
潰れそうなので直接的に魔法を使わせるのではなく、バインド魔法
に引っ掛かった時に自動で解除してくれたりとか、某ロボットゲー
ムに出て来る某戦闘支援用AIの「敵艦主砲より高エネルギー反
応、回避してください」みたいな感じに補助的な面で戦闘を助け
てくれるデバイスになるかと。

2. ユニゾンデバイス

完全にオリキャラ。1.と同じ理由により攻撃的な魔法は使えない
キャラになるかと。融合適性とかの設定も都合よく弄ることになる
と思いますが……。

3・ 作者、手緩いぞ！ もっと他にあるだろうが！

上記以外にも何か案があれば・・・。作者に書けるかどうかは別問題ですが可能な限り努力してみます。

4・ 別にそのままでも良いんじゃない？

このまま進めます。

5・ 何も言う事は無い。作者に任す！

頑張ります。

以上がアンケートの内容です。次の更新も未定なので期限が定めづらいたのですがアンケート終了の際には前書きで告知しようと思いません。

ここまで読んで下さった方々。

ありがとうございます！

第十三話（前書き）

本作を読んで頂きありがとうございます。
作者の駆溜です。

アンケートは次の更新で締め切ろうと思います。（今回は内容が薄
めなので次は少し時間が掛かりそうな気がするので）

ここまでアンケートに協力していただいた、

龍様

月牙様

蒼月様

ありがとうございます。

第十三話

さて……あの子供の治療も終えて道に迷いながらも鞆を拾い屋敷に帰ってきてみたが……。

「……………」

「……………」

居間の襖を開けると何故かすぐ目の前に腕を組んで仁王立ちする香久弥殿が居た。

「桔梗ちゃん……なにか言い遺したことは？」

「いや、いくらなんでもBAD ENDは早過ぎでしょう」

「お黙りっ！ 私達がどれだけ心配したことかっ！」

「それに関しては先に連絡しましたが……」

そう言うってから居間の中央、食卓に座る早苗殿を見た。

電話に出たのは早苗殿だったのだが……。

「……………」

「……………」

うわぁ〜。早苗殿が笑顔のまま固まっている。表面上とは裏腹にそれは怒ってるな。陣谷殿も無表情のまま沈黙している。

「確か……子猫を助けて怪我をしたんだっけ？」

「そうそう、馬鹿でかい大型犬に襲われていたので」

ついでにもう一匹猫が居たが……。

「馬鹿っ！！」

「ッ！」

不意に響いた大声に一瞬だけ身体を震わせてしまう。

「それで桔梗ちゃんが怪我しちゃったら意味無いっ！ 昔っから危ない事したりっ！」

むう、今宵の香久弥殿は随分怒るな。

しかし昔か……。

昔も剣の修練の際に怪我をしたりするとよくこんな風に怒っていたな。

昔……？ ああ、そうか……。

「今回の事は緊急だったので他にどうしようもなかったとは思っています。」

ただ……心配をさせてしまった事は、その……あの……すみませんでした」

電話越しとはいえまだ帰りが遅れる事とか謝ってなかった。あんな戦いの後のせいとか、つい死神だったころの気分で報告だけする感じになってしまった。

「本当に仕方なかったの？」

「周りに誰も居なかったのだから」

無人の街で暴れ回ってくれましたよ、彼等は。

あれが結界内の戦闘でなければかなりの被害が出ただろうな。

「……………じゃあ、良しっ！」

ようやく香久弥殿からお許しがでた。

それを合図とするように早苗殿が茶碗にご飯を装いだし陣谷殿が無言でお茶を飲む。

「次からは怪我しないようにね？」

笑顔でそう言ってくれる香久弥殿を見てやっと帰ってこれた事を実感できた。

「じゃあ、早速ご飯食べよう！ あっ！ 後、お帰り、桔梗ちゃん」

「うむ、出迎えご苦労」

「ピッキーン……………！」

「痛たたたたたたっ！？」

冗談めかして言ったらアイアンクローを喰らった。
つと、いつか額の傷に食い込んで余計痛いっ！
その姿を陣谷殿に笑われながら食卓につく。

平凡な日常。なんとなく落ち着く一時。それは普段よりも楽しく、
普段よりも明るく……。

或いは……この一時がもうすぐ無くなると思っていたのかもしれない。
頭では考えないようにしても魂が感じていたのかもしれない。

着実に近付いてくる日常の終わりを……。
だからこそ……せめて今この時は、平和でありますようにと。

居もしない神に祈ってしまった。

SIDE Eーなのは

「遅くなりました」

一言断りをいれてからアースラの会議室に入る。

フェイトちゃんにクロノ君、エイミーさん。

今アースラに乗艦している中で大体の主要なクルーが集まっていた。

「いや、これから始めるところだから大丈夫だ。席についてくれ」

クロノ君に促されて空いている席に座る。

「それじゃ、対【ティアマト】の対策会議を始める。その前に……」

そこで言葉を切ってから私の方へ向き直る。

「なのは、ヴィータの様子は？」

「今は眠ってるだけ。肩の骨とかに少しだけ輝が残ってるらしいけど治療魔法も使えば直ぐに治るダメージだって」

「そっか……」

ヴィータちゃんの状態を聞いたクロノ君や他の人達もほっ、としたような表情を浮かべる。

「まずは海鳴市に張られた結界についてだ。エイミィ」

「はいはい」

クロノ君の言葉にエイミィさんが機械を操作しながら答える。
すると会議室中央の空間モニターに海鳴市の映像と、それを覆う結界の立体映像が表示される。

「この結界の特徴はその範囲と強度、特性だ」

大きい。広さもそうだが、特に高さが異常だ。どんな空中戦を想定しているのか結界の形がドーム状ではなく円柱形になっているのだ。

「海鳴市を丸ごと覆ってしまう巨大な結界だが、それだけではなく強度の方も範囲に比例しない不自然な程の強度だ。少なくとも個人の魔法では強引な破壊は出来ないだろう」

「こんな範囲と強度を持つ結界を個人で展開できるのかな？」

結界の解析結果にフェイトちゃんが疑問点を上げる。

「ミッド式やベルカ式では無理だろう。範囲はともかく強度が桁違いだ。

考えられるのはこの結界を展開、維持している者が複数居ること。もしくは何処かに供給源が存在するのか。その辺りの解析は殆ど進んでいないが……エイミィ」

「二回目の結界の発動の際に分かったんだけど……結界の切れ目、この場合だと海鳴市の外周に沿って五つの不自然な魔力の乱れがあったの」

エイミィさんの言葉と共に海鳴市の立体映像に光点が五つ現れた。

「結界全体の強度から見ると不自然なくらいに脆い。これが構成からくる欠陥なのかは分からないがここを攻撃すれば結界の破壊か、もしくは穴を開ける事は出来るかもしれない」

エイミィさんの説明にクロノ君が続く。
つまり……。

「次に結界の外に外されてもそこから侵入できる……ってこと？」

「この結界の1番厄介な特性は結界内に捕える者とそれ以外の者を選別できることだ。最初にフェイト達が故意か偶然か捕まり、二回目の発動の際には二人が外され海鳴市に来たばかりのヴィータが捕まってしまう孤立したまま戦闘、我々は援護することも出来なかった。

危険かもしれないが、もしも次の結界発動が確認された場合はこの部分を突破口にする」

私の質問にクロノ君は頷きながら今後の対応を告げる。

「次はグラーファイゼンから得た戦闘の映像ね」

次に映されたのはあの金髪の女の子と隣に佇む長身の男性の姿。

「金髪の少女の方は以前から度々目撃例があつたが、大男の方はここまでちゃんとした記録がでたのは初めてだ」

クロノ君が喋る間にもヴィータちゃんの奇襲を男の人が捌き、しばらくの問答の後、戦闘を開始した。

「ミッド式でもベルカ式でもない。一体何処の世界の魔法なんだろう？ それに男の人は魔法陣すら展開しないなんて……」

「解らない。ミッド式が主流になる前のローカルな術式かもしれない。無限書庫には調査依頼を出したから金髪の子供の方は数日中には何か解るだろう。」

ただ、男の方は映像からだとも腕や両足に魔力を集中させているらしいが、魔法も無しに戦闘を行えるレベルまで集束できるとは思えない。

こちらは何らかのレアスキルを使っていると思われるが……」

フェイトちゃんとクロノ君が彼等の検証している内に映像の中では決着が付きそうだった。

ヴィータちゃんがラケーテンフォームになったグラーフアイゼンで突撃し、男の人も拳を構えて同じように突撃する。

そして……轟音。

魔力同士の衝突により発生した強い光の影響で一度映像がフリーズし、暫くすると消えてしまう。

「この後も戦闘が続いたらしいがグラーフアイゼンが記録できたのはここまでだ。」

結界の消滅から30分後になのはのサーチャーがビルの屋上で倒れているヴィータを発見し保護、当艦に収容した。

結界消滅後の様子から恐らくヴィータはこの二人に敗れたと思われる」

クロノ君がそう言うと空間モニターが消え、部屋の全員がクロノ君に向き直った。

「Sランクオーバーの騎士すら倒してしまう危険な相手だ。僕はこれから近くの次元世界に駐留している部隊から増援を出して貰えるように手配してくる。」

フェイト、なのはの二人は、済まないが明後日から暫く授業を休む旨を学校側に伝えてきてくれるか？ 有事に即座に対応出来るようにしたい」

「了解っ！」

私が返事をしてフェイトちゃんも頷く。

「各部署も何時でも緊急の事態に対処できるようにしてほしい。解散っ！」

その言葉を最後に全員が一斉に立ち上がり会議室から去っていく。

「フェイトちゃん」

他の人に続いて会議室の出入口に歩いていたフェイトちゃんに声を掛けた。

「なのは？」

「もう一度ヴィータちゃんの様子を見てから家に戻ろうと思ったんだけど……フェイトちゃんはどうする？」

「私も一緒に行くよ。ただ、その後はクロノと話があるから海鳴市へは先に戻ってて」

「わかった」

そうしてフェイトちゃんと二人、肩を並べて通路を歩いていく。

(そういえば……結局桔梗ちゃんとはお話出来なかったな……)

医務室に歩いていく途中、その事を思い出した。
明日を最後に本格的に任務に集中することになる。
だから次にちゃんとお話が出来るとしたら明日だけだろう。

(でも……別に二度と会えない、ってわけでもないし。私が頑張っ
て早く事件を解決すればその分ゆっくり時間は取れるよね)

「なの？」

前方から聞こえるフェイトちゃんの声にハッとする。気が付けばいつの間にか足を止めていたらしい。数歩先でフェイトちゃんが私を振り返っていた。

「あっ！ ゴメンっ！」

少し先に居るフェイトちゃんに私は駆け出した。

S I D E I O U T

第十四話（前書き）

はい、またしても更新が遅れました。作者の駆溜です。

言い訳としては原作キャラの喋り方とか扱い方にめっちゃくちゃ苦戦してました。

そのせいで時間掛かったわりに今回も短いです。

後は・・・ゴッドイーター バーストをやってみました・・・。
すいません。

それとアンケートの結果発表ですが・・・。

このままの設定でいかせてもらいます。

こんな作者の悩みに付き合っていたいただいてありがとうございます。

それじゃ本編をどうぞ。

第十四話

「おいつ……本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だっ！ かかってこい！」

そう言ってから私は浅打を構える。
それにつられるように周りの者達も浅打を構えはじめる。

「せえいつ！」

「ふっ！」

最初に振るわれる刀を弾く。次に向かってくる刀を躲し軽い掌打を当てて転ばせる。

（いけるっ！）

次々に向かってくる白刃を弾き、逸らしながら自身の斬魄刀の事を思い出す。

（自分の分身だっというのにあんなに非協力的な奴だったなんてっ
！）

でも、これなら斬魄刀が無くてもいける。

爺さんや京楽、浮竹さんみたいに。そして皆を助けていけるっ！
そんな事を考えていた時だった。

「う、うわっ！」

相手の柄の握りが甘かったのか刀を弾いた際に手から滑り器用にも
真上に飛んだ。

その刀は一瞬だけ空中で滞空して重力に引かれて落下を始める。
刀を失って呆然とするその男に向かって。

「どけっ！」

慌ててそいつを突き飛ばして刀の真下から待避させる。

そして次の瞬間、自分の意思に関係なく左目が閉ざされ、次いで凄
まじい熱を感じ。

「ッ！」

そこで目が覚めた。

「ハッ……！ ハッ……！ ハッ……！」

布団から飛び起きて何度も荒く呼吸をする。

「ハッ…ハッ…ハッ………ふうふう」

乱れた呼吸も、普段よりも速く脈打つ心臓も時間と共に少しずつ静まってくる。

普段と同じくらいの速さまで落ち着くのを意識的に確認すると改めて布団に倒れ込む。

(……まだこんな時間か……)

時計を見ればまだ夜中の3時、学校に備えるには早過ぎる。無意識の内に左目を抑えていた手を思わず苦笑しながら下ろす。

(この数日はよく昔の夢を見るな)

自身の斬魄刀、皇呀との対話には成功したものの、結局名前を聞くことはできず自分の精神世界から叩きださってしまった後の訓練でのことだった。

つと、というか自分の心の中があんな風になっていたとはビックリだった。

修業を見てくれていた浮竹さんに言われるまま座禅を組み瞑想すること数分、気が付けば辺り一面火の海だ。驚かない方がどうかしている。

そしてその精神世界での対話から数日、苛立ちのままに他の真央霊術院の院生と一対多数の無理な訓練を行い……左目に重傷を負った。落ちてきた刀がいい感じに左目を斬っていったらしい。目茶苦茶痛かった。

(……寝るか……)

まだ微妙に眠気が残っている。昨日はまともに寝ることも出来なかったので今日はもう少し安眠を貪りたい。

再度時計を確認してから右目を閉じる。

今度の眠りで夢を見ることはなかった。

「おはよう、桔梗。今日はいたって普通の目覚めだな」

「おはようございます、陣谷殿。後この数日の朝の事は忘れてください。早急に」

朝一にからかいつつ挨拶してくる陣谷殿に挨拶を返しながら食卓につく。

そこで一昨日と同様香久弥殿の分が無いことに気付いた。

「義姉上は？ 今日も大学の方ですか？」

「香久弥なら今日はお休みだ、言うて駅の方へ行くゆつてたよ」

私の疑問に台所から朝食の卵焼きを持ってきてくれた早苗殿が答えてくれた。

「ありがとうございます。しかし……まだですか……」

「まただ」

あの人には放浪癖というか、とにかく暇さえあればフラフラと何処かへ行ってしまう癖がある。

行き先は事前に告げていくので行方が分からなくなる、というのはないのだが……またどっかでコケていないか心配だ。

その会話を最後に料理への称賛以外は無言で箸を動かす。水無月家の食事は基本静かに落ち着いて食べていく。

久しぶりに落ち着いて食べた朝食に満足しつつ鞆を肩に提げ、斬魄刀を入れた竹刀袋を持つ。

ストレンドのあのダメージだ。あの男の高い再生能力を持ってしても直ぐには治癒しないだろうが相手は組織で行動しているらしい。

他の仲間が襲撃をかけてくる可能性を考えれば斬魄刀は絶対に持っていないほうがいい。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

早苗殿の見送りを受けて玄関の扉を開ける。

(今日は学校の図書室を使わせてもらうか)

大量の書物が置いてあるらしいので日本の仏教関連を探せば金髪の少女が使っていた曼荼羅についても何か分かるかもしれない。今日の予定について考えながら屋敷の門を潜り……。

「……………」

不意に空を見た。

別段何かが違うというわけではない。雨雲が浮いているわけでも、飛行機の類が飛んでいるわけでもない。

（気のせいか……）

そう判断して私は学校へと向かうことにした。

SIDE 1 護

「……………」

「ごらっ！　一護っ！　なにを呆けているのだっ！」

「耳元で怒鳴るなっ！　眠いんだよ！」

ルキアに怒鳴り返してからまだ寝ぼける頭を軽く小突く。

結局、学校が終わった後でルキアが親父達を説得？　してしまった。

「実は……とても仲の良かった友人に不幸がありました」

とか言ってる内に親父と遊子が号泣。一護っ！　お前も行ってこいっ！　みたいな話になり、今日の朝一番の電車に乗り海鳴市に着いてしまった。

「何だっ！？　私はちゃんと今日出発すると伝えておいた筈だぞ
！」

「だからって夜中に起こすこたねえだろ！」

「その理由も説明しただろうか？」

ルキアが言うにはこの海鳴市で二度目の結界の展開が確認され、早急な調査を行う為に朝から部屋に押し掛けてきたわけだが……。

「ったく……で？ 最初は何すん」

「あつ！ おい、一護！」

寝ぼけた頭を振りながら歩きだそうとした時、恋次が慌てて呼び掛けてきた。

「ん？ なん」

「うひゃ！？」

何事かと恋次の方を向き直ろうとした瞬間、直ぐ近くから奇声が出た。

驚いて声のした方に振り返ると大学生ぐらいの女の子の人がバランスを取ろうと器用に手足を振り回していたが……。

「わっ……！ とっ……！ ととおおお……！ へぶっ！」

結局体勢を立て直せず前のめりにコケた。

「なにをやっているのだ！ たわけ！」

「わ……わりい……」

どうやらこの場で立ち往生していた俺を躲そうとしてバランスを崩したらしい。

「大丈夫か？」

「あう……。 すいません……」

手を差し出すと相手もその手を掴んでくる。

掴んだ手に力が入り膝について立ち上がる姿勢に入ったのを確認して一気に引き起こした。

「ふう……。 ご面倒をおかけしました。

避けれると思っ たんですけど……」

「いえ、こちらこそ連れが迷惑を……。
お怪我はありませんか？」

「大丈夫大丈夫。こう見えて頑丈だから。
ああ、でもこの事が知れたらまた桔梗ちゃんに笑われる……」

とか言っつて頭を抱えて悩みでした。
……が。

「まあ、過去を悔やんでも仕方ない。
それじゃ失礼しますね」

直ぐに復活すると挨拶もそこそこに行っちまった。

「何だっ たんだ？」

「おいっ！ いつまで寝ぼけてんだ、一護！
とっつと行くぞ！」

「あっ！ おいっ！ 待てよ！
まだ何からすんのか聞いてねえぞ！？」

気が付けばルキア達も反対方向に歩きだしていた。
それを呼び止めながら追いつけて行った。

S I D E I O U T

第十五話

時は昼、場所は図書室。

朝に考えていた予定通り日本の仏教関連について調べに来たのだが……。

「ちょっとあんた……！ 人の話聞いてる？」

「聞いていない」

「~~~~~？」

「ア、アリサちゃん……落ち着いて……！」

何故かバニングス殿達……いつもの四人組が引っ付いてきていた。

「はぁ……」

朝から大体こんな調子である。

まったく……何故ここまでしつこく絡んでくるのか……？

「調べ物なら手伝うよ?」

「無用だ。そもそも人を増やしたところでどうにかなる事では無い」

あの曼荼羅の内容を覚えているのが私だけである以上手伝いを頼んでも仕方ない。

「そんな急いでやらなきゃいけない用事なわけ?」

「うむ、わりと切羽詰まっている」

敵……ティアマトといったか。

今のところ判明しているのはあの金髪の少女とストレンジ……この二人の大雑把な戦力だけ。

対して敵には私の斬魄刀、皇呀の存在を知られてしまっている。

更に敵になるか味方になるかも分からない時空管理局……どういった組織なのか、どのような行動理念で動いているのか……。

分からないことだらけな状況なのだ。今は少しでも情報が欲しい時に、あまり他者に構っている時間は無い。

「でも……それなら尚更」

「

「高町なのは」

しつこく食い下がってくる相手を突き放す為にわざと冷たい口調を出す。

「それ以上は迷惑以外の何物でもないぞ？」

「なっ！？ あんた！ せっかく手伝い申し出てくれてる人にそんな言い方　　」

「ならどんな言い方なら納得したのだ？ 私は初めににも言ったぞ？ 手伝いは要らない、と」

昼休みの初めにもこの問答を行い断ってはいるのだ。
それにも関わらず勝手について来ているのだからそれ以外にどう言えというのだ？

「ふんっ！ そんなに言うならいいわよ！
行きましよう！ 放つときゃいいわよ！ こんな奴っ！」

「ア、アリサちゃん！？」

「ああ、そうだ。バニングス殿」

「何よっ!?!?」

「此処は図書室だ。静かにしたほうが良い」

最後に怒鳴ろうとして口を閉ざし、肩を震わせるバニングス殿と悲しそうに去っていく高町殿が印象的だった。

(……これで良いだろう……)

今の私は一歩間違えれば完全に四面楚歌な状態だ。

これが平時ならまだ対応を考えるがのんびりしていたら何が私にとって弱点になるか分からない。

(今の私では家族を護るのが精々だからな。他には手が回らない)

護りきれないならいっそ害が及ぶ前に距離をとったほうが良い。

(まあ、バニングス殿はからかうと面白いのは分かったが……これぐらいあれば十分か)

あらかた資料の選別を終えたので抜き出した本を借りる為に司書の元に行く。
当初はある程度中を読んでからと思っていたが、流石にあそこまで騒いでおいて此処で読んでいく勇氣は無い。家に帰ってから読むとしよう。

今日は徹夜にならなければいいが……。

その日、その夜。

街の明かりが少しづつ消えていき人々が寝静まるその時間。
海鳴市の上空に四人の人影が“立っていた”。
一人は短い黒髪に黒い瞳、黒い神父服という全身黒づくめの青年。
その隣には同じく黒い長髪に黒い瞳と漆黒の法衣を着た女性。
その二人からやや離れた場所には赤い髪と金色の瞳に紫のドレスを纏い、両脇にバスケットボール程の大きさの玉を浮かべた少女。
だが最後の四人目は人と呼ぶにはあまりにも大きすぎた。
体長は5Mに届こうかという巨体の全身が鎧で覆われ右腕には巨体に見合った長大なハルバードが握られている。
その巨人は身動き一つせず、ただ法衣の女性の傍に佇んでいた。

「ニーニヤとストレンドは放っておくと？」

「放っておくわけじゃないさ。」

「ただ、後でいい……それだけの事だよ。」

【力】なら何があっても【巫女】を守り抜くさ」

強い風が吹き付ける上空であるにも関わらず黒衣の二人は会話を進めていく。

「時空管理局の奴らも既にこの世界に入っているようだし、あの二人は邪魔者を排除してからゆっくり捜せばいい。その為の戦力も持ってきたんだ」

「例の小型兵器の試作品……もう使う気？」

「ああ、元々少数精鋭たる【ティアマト】の戦力を補う為の物だ。」

【練鉄】はともかくジェイル・スカリエッティの手も加わっている、
というのは気に喰わないところではあるけれど……」

「AMF……アンチマギングフィールドは特に対魔導士戦で効果を発揮する。そう捨てたものではないはずよ」

眉を顰めて語る青年に女性が咎めるように口調を変える。

「そんな事は分かっているさ。
しかし最高評議会も自分達の保身になると対応が早い。僕達の動きを察知した途端、高ランク魔導士を差し向けてくる……無駄な努力ではあるけれど」

そう言うと青年はポケットから五つの点を線で繋ぎ星の形にしたペンダントを一つ取り出す。

「そろそろ【盾】も我慢の限界のようなので始めるとしましうか。この世界……いや、この星がその身に蓄える魔力は膨大だ。普段であれば30分程しか展開できないこの結界も此処では制限は無い。捕らえた者は絶対に逃がしません」

眩きながら青年は手に持っていたペンダントを手放す。

重力に引かれて落下していくペンダントは、やがて地上に衝突し

「血戦の……始まりだ……！ 高町なのは……！」

今まで一言も言葉を発しなかったドレスの少女が小さく呟く。
同時に地面に落ちたペンダントが小さな音と共に砕け散った。

そして世界の色が塗り替えられる。

(こちら海鳴市南地区。異常無し)

(了解。西側も異常無し。街の中央まで移動するよ)

(分かった。私は東地区に)

夜の街をフェイトと共に見回りを行うなのはの表情は暗かった。

原因は昼に行った桔梗との会話。

人当たりの良い彼女は基本的に他者から拒絶されづらい。

例外としては初めて会った時のフェイト等のように特殊な事情を持った者ぐらいだったが……。

(調べ物があるから、って言ったけど……桔梗ちゃんのあの目は……
…そういうのじゃなかった)

手伝いは必要無い。
そう言い切った桔梗の目にあつた明確な拒絶を見た時なのは引き下がってしまったのだ。

(なのは?)

(あっ! ご、ごめん、フェイトちゃん。ぼーとしてて。どうしたの?)

(うん。あの後だと言いつらかったんだけど……図書室で桔梗が持ってた本に　!?)

「!?!? これって!?!?」

二人が会話を始めた瞬間、突如として世界の色が変色した。同時に僅かに残っていた周囲の人の気配も消えてしまう。

(フェイトちゃん!)

(結界の発動……!
今回は私達も内側みたい)

ヴィータの時と違い今回は分断されなかったようだ。
そう判断してバリアジャケットを纏うのはだが……。

「……………」

不意に右手を見るとレイジングハートを持つ手が僅かに震えていた。

(怖い?)

その事を自覚した瞬間、一度目に結界に捕まった時との明らかな違いに気付く。

「これって……まさか……?」

「な……んもねえな」

「ああ……虚の気配もしねえし……静かなもんだ」

人も疎らになった海鳴市の街で肩に乗ったライオンのぬいぐるみ

コンにやる気なさ気に一護が呟いた。

元々彼は今回の調査には乗り気ではなかった。

彼は空座町の死神代行であって護廷十三隊の死神ではないのだ。

井上織姫や茶渡泰虎に空座町の虚退治は任せて来たがそれでも心配なものは心配なのだ。

「そろそろ姐さんのところに帰ろうぜ」

「そうだな……時間も遅いし。

ルキアが宿を取ってくれてるらしいしな」

そう言って一護が踵を返すと同時、突如世界の色が変わった。

「！」

「お、おいっ！一護！？こいつぁ……！？」

「分かってる！コン！」

「何？ へぶっ！？」

その結界内を漂う無形の気配に仲間に連絡を取るより先に死神化することを選んだ一護は肩に乗ったコンを掴んだ後、死代行神証を叩き付けて中の義魂丸を取り出した。

「よっ、と」

義魂丸を口に含み、その背中から黒い着物 死覇装を纏った一護が姿を現す。

「いきなり何しやがっ」

「コンっ！ 近くの建物に入ったら俺が戻ってくるまで絶対に出て来るなっ！ 隠れてろ！」

「っ！ わ、分かった……！」

突然の一護の行動に文句を言おうとしたコンの言葉を遮って一護が命じる。

普段なら文句を続けようとするだろうコンだが、結界内に漂う異常な気配を感じているのか、一護の言葉に素直に頷いてから走り去っていった。

「くそっ……！ っっは……！」

「ふう、今日はこれまでにしておくか」

昼間に図書室から借りてきた本を閉じ桔梗は一つ溜め息をついた。

（日本の資料の中には該当する物は無かったな。インドでも曼荼羅を使っているようだし……もしかしたらそっちの方が？）

借りてきた本を鞆に戻しながら桔梗は明日以降の行動に思考を巡らせる。

（明日一日登校すれば祝日も挟んで連休が続く。足も使って街を調べるべきか？）

そこまで考えていた時だった。

「 ツ！ またか！？」

桔梗にとっては三日連続での結界の発動。
だが桔梗は今までの結界の違いを鋭敏に感じていた。

（あの金髪の子供でもストレンジでもない！ あのダメージで直ぐ動けるとは思えんし、あの二人が放つのはこんな“禍禍しい”ものじゃなかった！
なんていう……重い殺気だ……！）

私服に着替えてから斬魄刀を手にとって走り出す。
数々の思惑が入り乱れる夜の戦場へと 。

そうして生み出された決戦場に闘う者達が集う。
そしてその決戦場に三人の復讐者が放たれる。
金髪の少女が胸に秘める小さな願いでも。

寡黙な大男の守護の誓いでもない。
その戦場にいたのは……。

狂気に蝕まれた【盾】と

癒えることなき怒りを抱えた【傀儡師】と

忘れられぬ憎しみを吐き出す【復讐者】と

長い夜の、長い死闘が幕を上げる。

第十六話

SIDE I 恋次

「咆えろ！ 蛇尾丸！」

斬魄刀を解放し群がってくる“そいつらに”向かって、力一杯に蛇尾丸を振るう。
刃の間にある節が伸びその全長を増した蛇尾丸で“そいつら”の群を薙ぎ払うが破壊しても次から次へと湧いて来やがる！

「くそっ！ なんだこいつら!？」

見た目は現世に存在する戦闘機とかいうのが一番近い。
大きさは大型犬程。青みを帯び、ずんぐりと丸みを帯びた胴体に翼を生やしたこいつらは結界の発動と同時に出現、翼から『白雷』みたいな光線を撃ちだしてきたのだ。
初めは瞬歩で一氣に接近して一体ずつ切り伏せていたが更に増えつづける敵に斬魄刀の解放を余儀なくされてしまった。

「おおおおおおおっ!!」

蛇尾丸を頭上に掲げ、その刃を縄投げのように旋回させ周りを包囲

しようとしていた敵を纏めて吹き飛ばす。
だが間合いの外にいる鳥擬き共は気にすることなく光線を発射して
くる。

「ちいつ！」

その弾幕を大きく跳躍して回避、旋回させていた蛇尾丸の刃を遠心
力を生かして振り下ろし、数体を破壊してから近くの建物の屋上に
着地する。
その瞬間遠く離れた場所から幾つもの霊圧が立ち上るのを感じた。

「この霊圧……一護か！ ……！？」

身に覚えのある霊圧に気を取られた瞬間、下から追い掛けてきた生
き残りが目の前に現れて翼の銃口を向けてくるのが見えた。

「破道の三十三『蒼火墜』！」

咄嗟に蛇尾丸を盾にしようとした時、横から飛来した蒼い霊弾が目
の前の敵を破壊した。

「恋次！」

「ルキアかつ！」

俺や一護とは別に宿の確保を行っていたルキアが俺の隣に着地した。

「こいつらがこの結界の発生原因か？」

「分からぬ。だが此処に来るまでに複数の強い霊圧があった。
何者かは知らぬが私達や一護以外にもこの街で戦闘を行っている者が居る」

再び集まってきた鳥擬き共に対して背中合わせに立つ。

「今はこの場を切り抜ける方が先か。
恋次、一体は破壊せずに捕獲しよう。この結界との関係を調べねば」

「応っ！ とつとと終わらせて一護のところに行くぜ！
咆える！ 蛇尾っ ！？」

「破道の三十 ？」

互いに霊圧を高め目の前の鳥擬きに攻撃しようとした瞬間の変化だ

った。

今まで何体やられても気にすることなく向かってきていた鳥擬きが反転、波が引いていくように逃げていく。

「な……何なんだ？ 一体……？」

「分からぬが……とにかく……今の内に一護のところ……！」

「……！ この霊圧……！」

突然の敵の撤退に戸惑いながらも移動しようとした時、上空から凄まじい霊圧を感じルキアと同時に頭上を仰ぎ見た。

「時空管理局では……ないのですね……」

そこに居たのは一人の黒衣の女と……全身に鎧を着た……人と呼ぶにはあまりにも大きすぎる巨人。

「恨みはありません。 ですが……」

その巨人の威容と女の放つ霊圧に圧倒され二人して一瞬動きを止めてしまった。その間にも黒衣の女は自分の右腕を肩の高さまで持ち

上げ。

「今夜……この場に居合わせた己の不幸を呪ってください」

開いた手の平を力一杯握り込んだ。

次の瞬間、女の隣に立っていた巨人がなんの予備動作も無く圧倒的な踏み込みの速さで飛び掛かってきた。

「なっ……！？」

気付いた時には目の前に現れ右腕に持った巨大な斧槍を振りかぶっていた。

(何だ……この速さ……！?)

巨体に見合わぬその速さに驚愕する間にも巨大な刃は轟音と共に俺の視界を埋め尽くした。

SIDE I O U T

SIDEI???

「見つけた……！」

【復讐者】が結界で覆った夜の街。
私の目の前である白い女が踊っている。闘っている。

(…………憎い…………)

群がるエアリア共に桜色の誘導弾を放ちながら舞うように空を飛ぶ
その女。

(…………憎い…………！)

エアリアの大群の中には出力は低いがAMFを展開する赤い機体も
存在する。
だがあの女は怯むことなく砲撃魔法等も使用して確実にその数を減
らしている。

(…………憎い……！…！)

どうしてあの女はあんなに優雅に戦うのだろうか？

(…………憎い……憎い……！)

「…………憎い……！ ……憎い……！…！」

私はあの女が送ってきたたった一枚の紙切れでここまで汚れたのに…………。

「…………憎い……！ ……憎い……！…！ ……憎い……！…！…！」

あの女はどうしてキレイナママナンダロウ？

(憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い…………)

「憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
いアッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ…！」

もはや我慢できなかった。

飛行魔法の出力を全開にしてあの女目掛けて一気に飛び出す。

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやるフッフッフッフッフッフッフッフッフッフッフ……！」

ぐんぐんと距離が縮まる。

後数秒で接触するということとここであの女
高町なのはが私に
気付いて驚愕の表情で振り向いてきた。

でも、もう遅い……！

「アッハハハハハハハハハハハハハハハハハッ……！」

「！？ あぐっ………！」

飛行魔法の勢いを緩めないまま高町なのはにショルダータックルを喰らわせ後ろに押ししていく。
ぶつかつた時に一瞬間こえてきた短い悲鳴が私の背筋をゾクリと震わせる。

「くっ………！ なんで………あなたが………！？」

強風に紛れて高町なのはが何か言っているがもう関係無い。

このまま高町なのはの向こう側に見えてきたビルの壁面に叩き付け

ようか？

ああ、その時貴女はどんな悲鳴を聞かせてくれるのかな……！

SIDE I O U T

SIDE I F E I T

「バルディツシュ！ 状況は！？」

『周辺で詳細不明の兵器を多数確認。更に数箇所魔力反応を感知。複数の魔導士が戦闘を行っている模様』

「なのはとアースラとの交信は？」

『双方共に遮断されています……結界内に強力なジャミングの発生を確認。通常通信、念話、共に不能』

近くの魔力反応に向かっていている間、バルディッシュが周辺の状況を報告してくれる。

(ジャミング……ということは相手は初めから私達の分断を狙っていた?)

だとしたらまずい！ 私の方にはまだ何も来ていないということは、なのはが集中攻撃を受けている可能性がある。

『前方に多数の機械兵器と魔力反応を確認。戦闘中です』

バルディッシュの声に意識を前方に戻す。

見れば見慣れない戦闘機のような外見をした機械が編隊を組んで地上にレーザーを撃ちかけていた。

ただ、戦っている相手の姿は建ち並ぶビルに隠れて見えず、なのはの魔力光である桜色の誘導弾や砲撃は見えない。

あそこに居るのがなのはじゃないなら誰が　　！？

『魔力反応増大！』

突如膨れ上がる魔力に押されるように後ろに下がる。

そこから一瞬遅れてビルの間から三日月状の魔力の塊が飛び出し機械兵器群を薙ぎ払っていった。

それだけで止まらず、射線上に存在した高層ビルすら“両断”して彼方へと飛んでいった。

（砲撃魔法クラスの破壊力を持った……斬撃！？
なんて威力……！）

斬撃の破壊力に気を取られていた隙に、それを放つてであろう男性が一瞬で目の前に現れた。

（速い……！）

ソニックムーブと同種の高速魔法。
そのスピードは驚嘆物だ。

「お前か？ あいつら動かしてたのは？」

「なっ！？ ち、違います！」

現れた相手を観察している間に男性が問い掛けに慌てて否定する。

男性　　まず目に付くのは鮮やかなオレンジ色の髪。黒い着物に右手には身の丈はある刀剣を持っている。

「じゃあ、何者だよ？」

「時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウンです」

それが私が初めて会った
そしてこの時はまだ知りよつ
のな
かった

この世界の真実

S I D E I O U T

「はあっ！」

手に持つ斬魄刀を振り下ろし向かって来た最後の戦闘機擬きを両断する。

(これで最後か)

最初に【ティアマト】の子供と闘った時に来た丘。海鳴市を見渡せるこの丘なら街の状況が解るだろうと思って来たのだが……。

(何だ、こいつら?)

最後に破壊した戦闘機擬きの残骸を刀の切っ先で軽く突く丘への移動中に一体の戦闘機擬きと遭遇、出会い頭に斬り伏せたのだがそれから蟻が群がるように集まってきたのだ。厄介だったのはその数と周りの霊子の集束を拡散させてしまう赤い戦闘機擬きが混じっていた事だった。

321

(低級鬼道は威力の大部分が殺される。拡散力は弱いのか瞬歩等は問題無く行使可能。死神や虚のような固定化された霊子体もこの程度なら影響はあるまい。鬼道も三十番台以降なら破壊力で押し切れるが……)

高い戦闘力を持った敵と一緒に現れた時は問題無しとは言い切れない。

(“雑魚“は早めに片付けておいて正解だったな。間に合った)

「終わったぞ……出てこい」

ぱちっ、ぱちっ、ぱちっ

戦いの途中から気付いた、私を覗いていたその視線。

「いやいや、お見事。」

見ていたのは途中からでしたが、素晴らしい力をお持ちだ」

振り向いた先に居たのは黒い男。

黒い短髪に黒い神父服。それ以外の色は肌が露出している白い顔だけという徹底ぶり。

(こいつか)

一目見て分かった。こいつがこの結界の主だ。

顔は穏やかに笑っている。なのに全身から発散されている殺気はそれだけで人を殺せそうな程に濃い。

「ああ、申し遅れました。僕は【ティアマト】の

「！」

名を名乗る暇も与えず一撃で斬るつもりで放った斬撃は、しかし何処から取り出したのか、銀色の両刃の剣に防がれた。

「……………」

「名を名乗る暇すら貰えませんか。
では、その時間は自分で作るとしましょう……………か！」

鏢ぜり合いを行っていた銀色の剣を強く押してくるのに対し、弾かれ体勢を崩さないように刀を傾け銀色の剣を逸らす。

手首を返して追撃を放とうとした瞬間、左から“感じた痛み”に追撃を中断して後退。

後ろに下がる私と入れ替わるように、目の前を銀色の刃が通過していく。

(私よりも……………速い!?)

間合いが開いたところで空中に飛び上がり霊子の足場に着地する。

「左は完全に死角だと思ったのですが……………。
あのタイミングであの剣速を躲すとは。
もしかしてその左目……………見えてますか？」

「……？ さあな、もう一度試してみたらどうだ？」

男の言葉に何か……小さな違和感があった。軽口を叩き合いながらその違和感に思考を巡らす。

「ご冗談を……。貴女は強い。

そんな相手に自分から罠に飛び込むつもりはありませんよ」

(この男の剣は確かに速い。
だが何だ？ この違和感)

「距離も空いて安全になったところで改めて名乗りましょうか。

僕は【ティアマト】という組織のメンバー、メイズ・フォル・ロツクソート。

仲間内では【復讐者】と呼ばれています。

覚えなくても結構ですよ。今夜は邪魔者を一人残らず片付けにきただけですから……ね！」

「天涯を焼き討て！ 皇呀！」

飛翔して向かってくる男
つ。

メイズに斬魄刀を解放して迎え撃

この男相手に手加減は出来ない。
ならば最初から全力で叩き潰す！

第十七話（前書き）

お待たせしてすみませんでした。目茶苦茶更新が安定しない駆瑠です。

現在BLEACH（斬魄刀異聞編）をレンタルショップで借りて見ながら更新中です。

斬魄刀の擬人化は面白いな。番外編でも作ってやろうかな？とか思ってたんですがどうでしょう？

それはともかく本編をどうぞ。

第十七話

SIDE—一護

「よいか、一護。今回の任務には異世界の者が関わってくる可能性がある」

「異世界、っていうと尸魂界とか虚圏みてえなもんか？」

「現世と存在する次元が違う、っという意味では同じだ。ただ“この世界は”、現世・尸魂界が天秤のような霊的バランスで成り立っている。」

「以前説明したが護廷十三隊が滅却師を滅ぼす事になったのは彼等の闘いの影響でこのバランスが崩れそうになったからだ」

「他の世界は違うのか？」

「次元の繋がりはまったく無い為に不明だ。ただ、向こう側には黒腔のように世界間の門を開く術があるらしいが……」

海鳴市に着いてから入った喫茶店でルキアから今回の調査の理由と目的について詳しい説明を受けることが出来た。

「もしも接触した場合、厄介なのが向こうも一定以上の文明と法を
持っていた時だ。」

総隊長殿からもその事については嚴重に注意を受けた」

「どう厄介なんだ？」

「例えばだ。我々死神は現世と尸魂界の靈的バランスの守護を使命
としている。」

その主な内容が魂魄の魂葬や虚の昇華だが、異邦人が関わっている
としてその異邦人が虚を信仰の対象にしていた場合はどうなる？」

「おい！　いくらなんでもそりゃ　　！」

ルキアの話の内容に思わず立ち上がったけど周りの客の視線
にまた席につく。
ちくしょう、やっちゃまった……。

「落ち着け、一護。例えばの話だ。
それで？　もしもそういう文明を持った者が死神と虚の戦いを見た
らどう思うっ？」

「そりゃ……自分達が神様みたいに思ってるのがやられそうになっ
てたら……そういう事か」

そこまで答えてからようやくルキアの言いたい事が解った。
つまり……。

「そうだ。そしてその時は戦闘は避けられんだろう。
互いの理解の不一致からその可能性は十分にあるとのことだ。
名を聞かれたら様子を見ながら返答しろ。話し合う余地が無さそう
なら相手の言う事は気にするな。
戦うか、逃げるか。その判断は任せる」

って会話を昼間にしてたが……。

「管理外世界への無断侵入と魔法行使は犯罪です。
加えて現在の海鳴市は危険な状況です。
直ちに武器を納めて私の誘導に従ってください」

いきなりそれっぽい奴に遭遇しちゃった。

「おいっ！ ちょっと待ってっ！ 何だよ！？ その……、時空
なんとかとか、執務官とか！？」

「ッ！？ 時空管理局を知らない……？ っということは次元漂流
者……？ この世界に……？
とにかく、ここは危険ですから、私の指示に
」

「おいっ！ 後ろっ！」

相手の背にさっきのと同じ奴が突っ込んでいくのが見え叫んだ。
俺の叫びに咄嗟に振り返るが遅い！

(間に合うか……！？)

瞬歩を使いフェイトと名乗った金髪の女を横切り向かってきた戦闘機擬きを斬り伏せる。

「これはっ!?!」

「あいつらだけじゃなかったみたいだな」

フェイト(名前が長かったからフェイトでいいや)の驚愕の声を合図にしたように周りから戦闘機擬きが集まってきやがった。

「まずはこいつ等を片付けんのが先か」

「ッ！ わかりました……」。

ですが後で事情を聞かせていただきます」

「言ってる場合か！ 来るぞ！」

俺達の包囲を終えた戦闘機擬きが翼から光線を撃ちながら向かって来る。

「つたく……厄介な事になりやがった。」

SIDE I O U T

SIDE E I なのは

「くっ！ 離れて……！」

今だに私を後ろに押ししていく赤い髪をした同年代程の少女
メリア・シュトローゼに話し掛けるが聞く耳を持たないと言わんばかりにそのスピードを加速させてくる。

「てえいつー！」

その彼女目掛けて魔力付与を施したレイジングハートを叩きつける。

「ぐっ！」

元々近接戦闘は苦手だがこの距離ならば関係ない。

小さな呻き声と共にシュトーゼさんが僅かに距離を取り、直後加速して一気に間合いを離しに掛かり、その動きに追隨して白と黒の球体も飛んでいく。

それを見ながら私も後ろに後退。ギリギリのところまで高層ビルとの衝突を避ける。

（あ、危なかった）

冷や汗が流れるのを感じながらビルの反対側に消えた彼女を追う為に回り込もうとした時。

「ア……ハハハッハハハハハッハッ！」

どこか調子のズレた笑い声の上から聞こえてきた。

見上げれば両腕に赤紫の魔力刃を持ったシュトーゼさんが私を見下ろしていた。

(速い!?)

「死ねっ!」

歪んだ笑みを浮かべたまま両腕の魔力刃を掲げ投擲してくる。

「くっ!」

迫ってくる魔力刃に左手でシールド魔法を発動。

展開されたシールドと魔力刃が衝突し火花を散らす。その間にもシュトーゼさんが高速移動魔法を使用し一瞬で私の背後に現れる。

「アハッハッハハッアハハッ!」

「ッ!」

新たに形成し振るわれる魔力刃に対し今度は右手でシールド魔法を発動し斬撃を受けるが。

「浅はかつ！」

防御の隙をつくように繰り出された蹴りを躲せず、衝撃と共に吹き飛ばされた。

「くっ！ デイバインシューター……シュート！」

間合いが開くと同時に誘導弾を展開、向かってくる彼女に射出する。

（彼女の戦法は半年前の模擬戦で知ってる！
速さの代わりに最低限の攻撃力を残して火力と防御を犠牲にした極端な攻撃型！
接近される前に終わらせる！）

デイバインシューターで牽制し、バインドと砲撃魔法で一気に……。
今までの常套手段と呼べた戦術は、しかし……。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

彼女の周辺に張られた障壁に誘導弾が消滅したことにより一瞬で瓦解してしまった。

「!?!」

「抵抗……するな!」

圧倒的な速さに開いた間合いは再び零にされ手に持った魔力刃を振り下ろしてくる。

『Flash Move』

咄嗟に高速移動魔法を発動、間一髪で斬撃を躲し再度間合いを開け、レイジングハートを砲撃形態に変形させる。

「レイジングハート!」

『Load Cartridge』

同時にカートリッジのリロードを行い環状魔法陣を展開、その照準を腕を振り下ろしたままのシューターゼさんに向ける。
防御が固くなってもこれなら!

「ダイバイン……バスター!」

レイジングハートの先端に集束した魔力を一気に放出する。

「
」

砲撃が当たる直前、シュトーゼさんの唇が笑みの形に歪み
。

「アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

「!?!」

砲撃があつさりと堰き止められた。

私はまったく手を抜いていない。

逆にシュトーゼさんの様子を見る限り本気で防御に手を入れているように見えない。その態度には余裕さえ感じられた。

『解析完了。対象の周辺に高密度の魔力フィールドとAMFの同時展開を確認しました』

「そんな!?!」

レイジングハートの解析に愕然とする。

A M F アンチマギングフィールドはフィールド系の一種で範囲内の魔力結合を阻害する。範囲内だと魔法を発動させることすら困難になる厄介な代物だ。

ただ、それだけなら先程の機械兵器の中にも使用している機体もいたので今更不思議じゃない。

問題は 。

「どうやって防御魔法とA M Fの同時展開なんか 」

範囲内の魔力結合が阻害されてしまうということは自身の魔法使用すら阻害されるということだ。

それなら防御魔法だけを強化した方が格段に効率が良い筈だ。

『不明です。ただ、こちらの攻撃はA M Fで威力を減殺され魔力フィールドで消滅しています。正面からの突破は難しいと思われます』

レイジングハートが話す間にもデイベインバスターに注がれていた魔力が薄れていき、その向こうから両側に白と黒の球体を浮かべたシューターゼが見えてきた。

「さあ……絶望したか？ 高町なのは？」

魔力刃の切っ先を私に向けながらシューターゼさんが笑う。

これは……本格的にマズイかな？

SIDE I O U T

第十八話

木造の板張り柱で出来た道場。

「爺さ　　総隊長殿。周りが見えないんですけど……」

その道場に四人の男女が立っていた。
一人は肩まで伸びた黒髪の少女だが、何故か布で目隠しをされていた。

「当然じゃ。見えなくしておるのじゃからな」

少女の言葉に白鬚の老人　　山本元柳斎重國が応える。

「右目しか見えないならば初めから目が見えない戦い方を覚えるべきじゃ。残った右目だけに頼るだけでは死角を抱えたままなのじゃからな」

「そうは言っても　　！？　　いつてえ！？」

「ほらほら。油断大敵」

戸惑った声を上げる少女を軽く転ばせながら京楽が笑う。

「おい……京楽……」

「ほらほら浮竹。見てないで参加しなつて」

「しかしな　　む？　京楽　　」

「なんだい？　山爺からも言われてるんだし真面目にやらないと痛
つ！？」

「遅かったか……」

へらへら笑いながら浮竹の方を振り返った京楽だが素早く立ち上がった少女に脛を蹴り上げられた。

「てめえ、京楽！　殺してやるっ！　このっ！　こいつかっ！？」

「おっどっどっ！」

「ちよっ！ 待てっ！ 俺は京楽じゃなっおっ！？」

「やれやれ……」

もはや修業とは言えなくなった光景を見て山本元柳斎は小さく溜め息をついた。

それはおかしな光景だった。

何も無い空中に二人の人間が立ちその間を紅と銀の閃光が行き交う。二色の閃光が交差する度に火花が散り一瞬だけ周囲を明るく照らす。もしも事情を知らぬ者が見れば声もだせず呆然として硬直するだろう。

だが当事者たる二人は周り等気にする事なく敵を斬る為に剣を振るい続ける。

（やはりこいつの剣、何かあるな？

無理な体勢からは出せないような剣速が増えてきた。それにこの剣速……。

このままでは埒もあかない……試すか？）

怪訝な表情で紅い剣を振るいながらも桔梗は最初の違和感を形にする為に考え続けていた。

(一撃が重い……特別製の剣でなければとっくに折れていますね。それに彼女の様子……僕の剣に気付いてはいるようですね。具体的にどんな“魔術”を使っているかまでは解っていないようですが……。
しかし彼女のこの紅い剣……間違いでなければ【太陽神】と同じ……
…一当てしてみましようか)

メイズもまた剣を振るいつつ桔梗の斬魄刀に疑問を持つ。
そして両者が自身の疑問を解決すると決めた瞬間、申し合わせたように二人同時に飛び退く。
桔梗は霊子の足場に着地し、メイズは浮力を得たようにふわりと浮かぶ。

同時にメイズの背後、何も無い空間が突如“揺らぐ”。

「!？」

「フツ……」

険しい表情を浮かべる桔梗が見詰める間にも空間の揺らぎから金色の輝きを持った物が四つ、顔を覗かせる。

「さあ………続けましょうか！」

鎧の巨人が振り下ろす斧槍を恋次は紙一重の差で身を引くことで回避し、大きく後ろに跳躍する。

その恋次を追うように巨人は何も持っていない左腕を恋次に向け

その左腕が“伸びた”。

「なっ………！？」

伸びた左手は驚愕から反応が遅れた恋次を捕まえ、そのまま向かいのビルの壁に叩き付けてしまう。

「恋次 ツ！？」

巨人は動きを止めることなく伸びきった左腕を戻しルキアに狙いを定める。仲間の名を呼ぶルキアに一気に間合いを詰め斧槍を振るう。

「くっ！？」

咄嗟に斬魄刀を盾に斧槍を受けたが拮抗も一瞬、圧倒的な膂力の差でルキアを吹き飛ばし給水塔に叩き付ける。

「う……く……」

(受け止めることすら出来んとは……なんという腕力　！？)

痛みを堪えて立ち上ろうとするルキアに再び巨人が目の前に現れて斧槍を振り上げる。

「！」

「蛇尾丸！」

だが斧槍が振り下ろされる寸前、戻ってきた恋次が蛇尾丸を振るい巨人に叩き付けた。
しかし……。

(刃が……通らねえ！ 一体何で作ってたんだ、あの鎧！？)

恋次が蛇尾丸の刀身を戻す間にも巨人の鎧は火花を散らし表面を僅かに削られていくだけで刃が食い込むことはなかったが攻撃を受け怯んだ一瞬の隙にルキアが瞬歩で巨人の前から離脱する。

「おおおおおっ！」

刀身を戻した恋次が巨人の脚を狙って再度蛇尾丸を振るう。だが巨人は恋次の攻撃に警戒する様子を見せず膝を屈め突撃体勢を取る。

「縛道の四『這縄』！」

脚に込めた力を解放し恋次目掛けて飛び出そうとした瞬間、ルキアの放った霊子の縄が巨人の脚に絡みついた。

普段であれば巨人は絡みついた縄をあっさり引き千切っていただろう。

だが力を溜め解き放とうとした瞬間に巻き付いた縄は巨人の動きを乱すのには十分だった。

踏鞴を踏む巨人に少し遅れて今度は蛇尾丸が巨人の片足に当たる。

『這縄』でバランスを崩していたところに受けた衝撃に耐えられず屋上の床に輝割れを作りながら巨人が横倒しになる。

「ルキア！」

「君臨者よ！ 血肉の仮面、万象、羽傅き、ヒトの名を冠す者よ！」
呼び掛けながら跳躍する恋次に合わせるようにルキアも鬼道の詠唱に入る。

「大人しく……寝てやがれ！！」

うつ伏せの状態から両腕で立ち上がるうとする巨人に跳躍した恋次が節を伸ばした蛇尾丸を振るう。
最初の一撃と同様、鎧を切断するまでには至らないが背中に受けた衝撃に巨人を再度床に倒すことに成功する。

「蒼火の壁に双蓮を刻む！ 大火の淵を遠天にて待つ！」

巨人が倒れた隙に鬼道の詠唱を続けていたルキアが両手の手の平を巨人に向ける。
同時に手の平に蒼い光が灯り。

「破道の七十三『双蓮蒼火墜』！」

巨人に向けて蒼い霊弾が放たれた。
二つの霊弾は途中一つに混ざり合い巨大な霊弾となって巨人を飲み込み大爆発を起こす。

「やったか？」

「分からぬ。先程からそうだが、あの者からは魄動が感じられない」
床に突き立っていた斬魄刀を引き抜くルキアに、その隣に降り立った恋次が問い掛ける。
巨人が倒れていた場所は今だ煙を上げその中を見通すことができずにいた。

「その……力……まさか……」

斬魄刀を構え警戒を解かない二人に、上空から呟く声が聞こえそちらに顔を向けた。

「本当に……この世界がそうだと……？」

二人の視線の先、ただ上空から見ているだけだった黒衣の女が驚愕の表情で二人を、ルキアを見返していた。

「貴様……何を言つて」

「予定が変わりました」

ルキアを見ながら眩きを漏らしていた女が不意に表情を変えた。
それはルキア達が見慣れた闘いに赴く戦士の表情。

「時空管理局の者ではない貴方達は、ただ痛めつけてこの街を出て
いってもらつて予定でしたが」

少しずつ高度を落としながら黒衣の女は左の手の平を二人に向け
。

「この世界が“王”の発祥の地ならば……貴方達が“王”と同じ存
在ならば……容赦は無用。
此処で……朽ちなさい……！」

力一杯に握り締めた。

「!? ルキア！」

「なっ!？」

同時に恋次が隣に立っていたルキアを突き飛ばした。

「ツ~~~~! 一体何を」

突然の事態に受け身も取れず床に倒れたルキアは立ち上がりながら恋次の方を見て。

「恋……次……?」

その視線の先に居たのは……。

鎧の至る所に輝割れを作りながらも五体を留め、長大な斧槍を突き出す巨人と……。

斧槍の切っ先を背中から生やし沈黙する恋次の姿だった……。

第十九話（前書き）

PV数が六万突破！

この作品を読んで下さっている読者の方々に感謝を。

まだ長くなりそうですがよければこれからもよろしくお願いします。

それでは本編をどうぞ。

第十九話

SIDE Eーなのは

私が初めて彼女 メリア・シュトーゼに会ったのは半年前、
任務も無い日にクロノ君が受けてきた模擬戦の時だった。

「模擬戦？」

「ああ。相手方からどうしても、っという事だな」

「どんな人なの？」

「メリア・シュトーゼ。

古くから管理局に優秀な魔導士を輩出してきた、所謂軍人の家系だよ。

彼女も御多分に漏れず管理局員として任務に就いてる」

その話をしてから二日後、本局の訓練室で彼女と出会った。

第一印象は怖い、という良くないものだった。

金色の瞳をした眼は鋭く、まるで何かに苛立っているような、飢えた獣みたいに見えた。

その印象は自己紹介をしても見向きもされなかったことで更に強く

なっていた。

「よ、よろしくお願いします」

「……………」

模擬戦の開始時間、訓練室の中央で向かいあい挨拶をしてもやはり無言。

何も言わず両手に魔力刃を構えるだけだった。

(こうなったらなんとしても勝ってお話、聞いてもらおう！)

そんな覚悟を決め臨んだ模擬戦。

その戦いには私が勝てた。

フェイトちゃん以上の機動力、シグナムさんにも匹敵するだろう近接戦能力、なにより理論でも技術でもなく、獣の本能に任せたような、強引な戦い方。

私が勝っていたのは火力と打たれ強さぐらい。

殆ど攻撃が当たらない中でも勝利できたのは今までの戦いの経験と下調べがあったからだ。

ただ、その日は彼女の両親が来て直ぐに帰ってしまった為に話をすることができなかった。

だから手紙を書いてみることにした。

「手紙を？ メリア・シュトーゼに？」

「うん、もう少しお話したいな、って思ってた」

「しかし……いや、分かった。僕も彼女の家は気になっていたしな。引き受けよう」

「？ よろしくね」

クロノ君の言葉が気になりつつも手紙の返事を待つ事一週間、手紙ではなくニュースで彼女の事を聞くことになった。

シュトーゼ夫妻、自宅で惨殺される。

現場検証から殺害犯はその娘、メリア・シュトーゼと思われる

そのニュースを聞いてから今日に到るまでの半年間、彼女の足取りはまったく掴めなかった。

『Protection Powered』

高速移動魔法で目の前に現れたシューターゼさんに対して防御魔法を展開し、攻撃に備える。

「とつとと……あきらめる！」

それでも気にすることなくシューターゼさんが右、左と連続で魔力刃を振るってくる。

『Barrier Burst』

「!?!」

連撃の間にレイジングハートが防御魔法に魔力を注ぎバリアを爆発させる。

さすがに攻撃に意識を裂いていた時の反撃には反応できなかったのか、驚愕の表情を浮かべたシューターゼさんは爆煙に巻かれながら後退していった。

「レイジングハート！」

『Load Cartridge』

間合いが開いたところでレイジングハートを爆煙に向けカートリッジをリロードする。

「アクセルシューター……シューター！」

レイジングハートの先端に魔力を収束させ複数の誘導弾にして射出、同時に爆煙の中から飛び出してきたシューターゼさん目掛けて加速させる。

「フンッ！」

全方位を囲うように動く誘導弾を見てもシューターゼさんは眉一つ動かさない。

そしてシューターゼさんに近付いた誘導弾はこれまでと同様にシューターゼさんに届く前に消滅してしまう。

（やっぱり魔力弾は効果無しか……）。

かといってAMFは突破できるかもしれないけど、人相手に非殺傷設定の出来ない物をぶつけるわけにはいかない）

戦闘スタイルの相性を問うのであれば半年前と違い、今のシュトーゼさんは私にとって最悪と断言していい。
彼女の動きを疎外、捕捉できる誘導弾は二重の防壁に阻まれ、唯一防壁を抜ける可能性があるが砲撃魔法は逆に当てることすら困難。
攻撃力自体は低いままなのが救いだけど、このままじゃ私が先に力尽きる。
けれど……。

(レイジングハート)

(はい。やはりあの防御魔法は左右に浮遊する二つの物体が発動させていると思われます。
そして)

(うん。だとしたら狙うのは)

もしもあの防御魔法が私達の考えている通りなら活路はある。
けどその為には彼女に私の狙いを悟られてはいけない。だから何度も細かい攻撃を繰り返す。
私に打つ手がないと見せ掛ける為に。

「待つて！ シュトーゼさん！
今はこんな事してる場合じゃないんだよ！

【ティアマト】が

「

「はっ！ 今更すぎる！ 【ティアマト】なら目の前に居るよ、高町なのは！」

「ッ！」

半分は時間稼ぎ、もう半分は本音で話し掛けてみたけどその返答は嘲笑と斬撃。

「どうして！？ どうしてシュトーゼさんが【ティアマト】に！？」

「決まってる！ お前を殺す手段が欲しかったからだ！」

喋りながらも振るわれる魔力刃を防御魔法で捌きながらこの半年間、ずっと疑問だった事を口にする。

「じゃあ、ご両親もシュトーゼさんが……！？」

「なんだ？ まだ疑われているだけ？
あそこまで解りやすい状況だからとっくに確定して追ってきてると
思ってた」

「なっ!?!」

眞実は違つんだと期待していた。

シュトーゼさんは誰かに罪を着せられただけで他に犯人がいたんじゃないかと。

だって……そうでなければ一度だけ見たあの夫婦は実の娘に殺されたということになつてしまふ……!。

「なんでそんな事を……!」

「なんで? “ムカついたから”!」

シュトーゼさんの口から語られるご両親を殺害した理由。それは私にはまったく理解出来ない物だった。

「ムカ……ついた……?」

「ああ、そう。ムカついたから。

ムカついてムカついてムカついて……。

いきなり周りが真っ暗になる程ムカついて……。

だからバツサリと斬つたんだ。

こんな風に……!」

シュトーゼさんの叫びと同時にその姿が消え、一拍の間を置いて目の前に現れた。

「!?!」

『Protection』

魔力刃を振りかぶるシュトーゼさんに反応したのは私ではなくレイジングハート。
自動展開されたバリアが魔力刃と衝突して火花を散らす。

「そんな……理由で……!?!」

「ああ、そんな理由で殺した！ 何の問題がある!?!
私はあんな物を親だと思ったことはないし、あいつらも私を娘だと思っちゃんない!」

「そんな事あるはずが」

「無いとでも!?! お前に何が解る!?! 何を知ってるって言う!?!」

お前ごときがつ!?!?」

「知らない! 話してくれなきゃ解る筈なんてない!」

やがて防御魔法を突破するのを諦めたのかシュトーゼさんが後退していく。

「そんなにお喋りが希望? だったら話してあげよう?
その首落として飾ってお喋りしてあげよう」

表情に笑みを浮かべながらその手に持つ魔力刃が輝きを増していく。
次で最大の攻撃が来る!

(マスター)

(レイジングハート。フェイトちゃんは?)

(反応がありません。彼女も恐らくは戦闘中だと思われれます)

(だとしたら急がないと……レイジングハート、次で仕掛けるよ!)

「さあ！ 死ね！」

魔力刃を構え突撃してくるシュトーゼさん。
それに対して私は。

「レイジングハート！」

『Axel Finn』

シュトーゼさんと同様、前に向かって加速した。

「」

互いに相手に向かって加速した為にシュトーゼさんが驚愕の声を上げる間もなく激突する。

「捕まえ……た！」

衝突のダメージが私の身体を揺さぶるのも構わずシュトーゼの肩を掴む。

この好機を逃すわけにはいかない！

「何を……！？ 離せ！！」

「この二重の防壁は外からの魔力攻撃には高い防御力を持つけど、通常のAMFと違って球形の膜状になってる！

そうしなければAMFの影響であなた自身が魔法を使えない！」

掴む手を振りほどこうと暴れる彼女を無視して砲撃形態に変形させたレイジングハートを浮遊する球体に向け環状魔法陣を展開、魔力を集束させる。

「外から撃つ攻撃は無力化出来ても内側からなら普段道理撃てる！
そして……この距離なら絶対に外さない！」

「！？ 離せええええええあ！！」

「ダイバイン……バスター……！！」

解放した魔力の光は叫び続けるシュトーゼさんの声すら飲み込んで私の視界を埋め尽くした。

SIDE I O U T

第二十話

巨人が右手に持った斧槍を軽く振る。
ただそれだけの動作で刃を腹部に突き立てられた恋次の身体が宙に投げ出され地に墜ちた。

「まずは……一人」

黒衣の女の言葉に呆然としていたルキアが我に返った。

「貴様……!!」

「嘆くことはないでしょう？
いずれこの世界に住む全ての者が後を追う。遅いか、早いか。
ただそれだけの違いです」

「……！ 舞えっ！ 袖白雪っ!!」

女の言葉にルキアが怒りに任せて斬魄刀を解放する。
怒りに触発されてかその霊圧も普段より遙かに強く。

「愚かな……」

それ程の霊圧の解放を見ても尚、黒衣の女の表情は眉一つ動かず機械的な動作で右腕を振るだけだった。

右から飛来する刃を半歩下がることで躲す。

更に入れ替わるように左から迫る刃を頭を僅かに屈めることでやり過ごす。

（霊圧が……一つ消えた？）

此処から比較的近い場所で感じていた霊圧が一つ消失した。

（死神か？ それ以外か？ こんな結界の中でなければ判別出来るんだが　！）

思考が脇に逸れた瞬間、今度は左右同時に刃が迫ってくる。

「チイツ……！」

さっきまでのギリギリの回避は不可能。

霊子の足場を蹴りつけ大きく後方に跳び退く。

入れ替わりに今まで首と胴があつた場所を二つの刃が通過していく。

「どうしました？ 防戦一方ではないですか。

まあ、もっとも」

跳び退くと同時、再度形成した霊子の足場に着地するとメイズの自信に満ちた声が聞こえてくる。

「“五対一”では無理からぬ事でしょうがね……！」

そう言うメイズの左右に二本ずつ、計四本の黄金色の剣が浮遊する。

「随分な自信だな。【復讐者】」

「何人もの単純馬鹿な魔導士や騎士共を葬ってきた剣軍です。それだけに驚いていますよ。やはり貴女の力量は素晴らしい。」

初めにも思いましたが、どうやら貴女は対集団戦がお得意のようだ。これだけ打ち込んでも隙が見つけれられない」

「お褒めに預かり光栄だ、【復讐者】。だが貴様の剣は底が見えたな」

「ッ……！どついう意味でしょう……？」

「簡単な事だ。貴様の剣技……いや、“能力”は分かった。実にくだらん物だ」

落ち着いて見ていれば実に簡単な絡繰だった。むしろ何故気付かなかったと数十分前の自分を殴り倒してやりたい。

「言ってくれますね……！ ならば僕を倒してみればいい！！」

私の言葉に愉悦から憤怒へと表情を変えたメイズが私目掛けて飛び出し四本の剣も追隨してくる。

「言われずともそうするつもりだ。その程度の力で私の前に立った己の未熟を呪え」

間合いに入ると共に振るわれる銀色の剣を皇呀で逸らす。

「破道の一『衝』」

更に逆から迫る黄金の剣を衝撃で弾き飛ばし、一拍遅れて後ろや左側等の死角から来る剣を霊子の足場を消失させ、丘に向かって落下することで躲す。

「ッ！ 逃がさん！」

膝を屈めて丘に着地、メイズを探して上空を上げば四本の剣を従えて真っ直ぐに突っ込んでくる。

(それはいくらなんでも蛮勇に過ぎるだろう)

その姿を視界に捉えながら右手を柄から離し手の平を地面に置く。

「縛道の二十一『赤煙遁』」

メイズが間合いに入る前に煙幕を発生させてから真っ直ぐ上に跳び脱出。

煙幕から脱出するのと入れ替わりでメイズが煙幕に入るのを確認す

る。

「魔刃　　！」

跳躍しながら振り上げた皇呀の刀身に紅い炎を纏わせる。派手に燃え上がるのではなく衣を被せるように薄く、しかし熱く滾らせていく。

「こんな小細工で何を　　！？」

メイズが私の方を見上げながら煙幕から脱出してくる。
そのメイズ目掛けて　　。

「　　炎撃覇！！」

加熱した皇呀の刀身を一気に振り下ろす！

「ぬっ……！！」

だがすんでのところメイズが身を引き私の一撃を躲す。
目標から外れた剣は地面に当たり衝撃波を発生させて地面を砕き、
大量の飛礫と粉塵を巻き上げながら私の視界を埋めつくした。

(どこから来る?)

大量の粉塵により互いの姿を見失った無視界戦闘。
普通であれば相手に手を出すより脱出する方を選ぶだろうが
。

(来た……!)

左から来た“痛み“に従って皇呀を二度振るう。
振るった剣は私の予想通りの軌道で飛来した二振りの黄金の剣に当
たり叩き落とす。

(右……!)

続いて右肩に感じた“痛み“から軌道を予測、右手の甲を翳す。

「縛道の八『斥』!」

翳した右手に小さな楯を作り右肩目掛けて迫る黄金の剣を弾き飛ば
すが、間を置かず左肩から“痛み“を感じ皇呀を振る。

「殺った……！」

だが左から来た黄金の剣を捌いた隙をついてメイズの声と共に薄い青色の霊圧を纏った剣が右から来るのが見えた。

剣に籠められた霊圧からも生半可な防御は不可能だと解る。

そして左から来た剣を皇呀で迎撃した私に身を守る手段は無い。普通ならばそう考える。

「甘い！」

右腕に霊圧を籠め炎を絡み付かせる。溢れる霊圧と炎で服の袖から肩の部分までが消し飛ぶが気にせず銀色の剣に叩き付ける。

「なっ……！？」

霊圧を纏った拳と剣が衝突した余波で視界を奪っていた粉塵が吹き飛んでいき、驚愕の表情を浮かべるメイズがその姿を現す。

「捕まえたぞ」

メイズが呆然としている隙に皇呀を振るう。

ただし、勢いは出さない。軽く、弱く、メイズに気付かれないよう

にゆったりとした動作で銀色の剣に皇呀をぶつける。

「しまった……!？」

カツンツ、っと小さな音がただだけの剣同士の接触。ただそれだけの接触到メイズが声を荒げながら跳び退こうとする。

「はあああああっ！」

だが、単に後ろに下がるだけの動きより私が前に出て炎を纏った右の拳を振るう方が速い。

四本の剣は先の攻防で地に落ち使用不能。

残る手段は剣を使つての防御のみ。

それが解っているだろうに、それでもメイズが行つたのはただ剣を持った両腕をゆっくりと動かすだけ。

「がっ……!」

そして私の拳は何に阻まれるでもなくメイズの眉間を捉え殴り飛ばす。

「あっ……! チツチツチツ……!」

メイズが吹き飛び地面に叩き付けられていくのを尻目に、意味が無いと解つていても右腕を大きく振って炎を消していく。

護廷十三隊二番隊隊長兼隠密機動総司令官、四楓院 夜一。

白打の天才とも呼ばれる彼女が編み出した独自の戦闘技法『瞬間』。一度だけ見たことがあるその技を見様見真似でやってみたのだが彼女とは比べものにならないくらい無様なものだ。本家『瞬間』とともに打ち合えば拳どころか腕ごと砕かれること間違い無しだ。

「はあ……！ はあ……！ 何故だっ！？ 何故分かったっ！？」

「何がだ？」

「何時僕の使う魔術に気付いた！？ 視界の無いなかどうやって攻撃の軌道を察知した！？」

「答える！！」

威力の調節が甘かったのか致命打にはならなかったらしい。

額を手で抑えながらふらつきながら立ち上がるメイズの顔は額から流れる血で赤く染まっていた。

そんな酷い状態でも尚、その眼だけは殺意に爛々と輝いていた。

「前者については話してやるが後者については話す義理は無いな」

「貴様……!!」

あの“感覚”は私にとって失った左目を補うものだ。容易に話す気はない。

「それで？ 貴様の能力の事だったか？ 簡単な事だ。

貴様の剣の速さは私の剣の速さ。

貴様の剣と接触した際の私の剣速が次の貴様の剣速になる」

戦いの最初の段階。メイズの二撃目が私が剣を振るより速かったのも簡単。

瞬歩も使って繰り出した私の渾身の一太刀の方が手首を返して振るおうとした私の二撃目より速かっただけのことだ。

「違和感は最初からあった。貴様は自分の剣の技を語る時、まるで人事のように喋っていた。

剣を交える間にも貴様の剣には何も感じなかった。己の剣に対する自信も、誇りもな」

人は長年やってきた事に大なり小なり何らかの感情を持つものだが、この男にはそういった感情を見出だせなかった。

メイズの眼はまるで、自分が用意した水槽で踊るモルモットを見る科学者のような無機質なものだった。

「確信したのは貴様の体捌きと四振りの剣だ。
明らかに無茶な体勢にも関わらず有り得ない程の剣速、そして

」

そこで言葉を切りメイズの横に浮遊する四本の剣に視線を向ける。
四本の黄金の剣はメイズを守るように切っ先を私に向けている。
まるでそこに誰かが居るかのよう。

「恐らくはその剣、何者かの剣技を模倣しているのだろうか？ 貴様
が振るう剣と違って達人の技があった」

攻めの型や受けの型。相手の体勢を崩し、隙をつく。
その一連の流れは幾度となく刃を振るい戦場を生き抜いた者が持つ
“経験”が生かされるものだ。

「素人の剣技、なのに貴様以外の剣の技は達人級。
だから途中からは防御に専念して観察し、その結果貴様の能力は
“記憶”に関するものと判断した。訂正はあるか？」

「戦いの最中にそれに……そこまで気付いただと……？」

「貴様自身が言っただろう？ 集団戦が得意のようだな、と。
その通りだ。集団戦に必要なのは観察力。味方の動き、敵の動き。
味方の位置、敵の位置。四方八方絶えず動く敵味方。」

いきなり目の前に現れたので攻撃したら味方でした、なんて言う奴は録な奴じゃない」

話しながら止めの一撃の為に霊圧を上げていく。

「お喋りは終わりだ。去れ……。死ぬぞ……。？」

「死ぬ……。？ この僕が……。？」

「切り札でもない限りはな」

実際この程度ならストレンジよりも弱かろう。

これで終わるなら私としては万々歳だが。

「死ぬ……。だつて？ ふっ……。ふっふっふっふっふっ……。！」

あーはっはっはっはっはっはっはっはっ……。！！

ふざけるな！！ この僕がこんな所で死ぬ筈がないだろう！！」

壊れた笑い声と共にメイズの霊圧が上昇していく。

それと同時に銀色の剣に青い光が灯る。

「奴らに……。！ 時空管理局の奴らに思い知らせてやる……。！ 何

の痛みも苦しみも知らないあの脳髓共に……！ 僕達が負った痛みを……！ 苦しみを……！ 人を捨てた奴らに……！ 人の痛みを刻むまで……死ぬるかあああつ……！」

血反吐を吐くような叫びを上げながらメイズが私目掛けて走り出し、黄金の剣達も同じように向かってくる。

奴らが何を言ったか知っているのか！？ 山本元柳斎！ 戦う痛みも知らない奴らは、あいつらの信念を否定したんだぞ！！ それを許せと言うのか！ 貴様はっ！！

一瞬の回想。

終わった過去。

その間にも互いの距離はどんどん縮まり

。

「遅いつ……！」

紅い飛沫が私の視界を彩った。

第二十話（後書き）

はい、前回よりも更に更新が遅れた駆溜です。

今回のには理由がありまして……今までの話を見返した結果、少し書き直そうと思ひまして……。

今回の更新分も修正版を書きながらちまちまとやってた次第で……。そんな理由につき次の更新も遅れるかもしれないませんが何卒ご了承ください。

それではまた次回の更新で。

第二十一話（前書き）

今までの文章の再編集が完了しました（本文だけ。前書き、及び後書きには手をつけてないです）。

なんとか年内に新話も更新できてホッとしています。

それでは本編をどうぞ。

第二十一話

SIDE1 一護

「月牙……天衝！」

斬月に霊圧を籠め、振るうと同時に一気に解放する。

刀身から離れ、鳥擬き目掛けて飛んでいく斬撃は、最初と違って二、三体しか破壊出来ない。

避けられた……！

「くそっ！………！」

その上月牙天衝を放った隙を突いて残りの奴らが光線を撃ちかけてくるのを瞬歩で躲す。

「いつら……！」

「落ち着いて！ この機械兵器は私達の行動パターンを学習しだしてる！ 時間は掛かるけど一機ずつ」

「そんな時間は無え！ 早くしねえと恋次が………！」

瞬歩で下がった場所で同じように鳥擬きと戦っていたフェイトが慎重策を提案してくるが考えるまでもなく却下だ。
一瞬の事だった。

距離はあったがそれでも確かに感じた恋次の霊圧が消えた。
そして合わせるようにルキアの霊圧の上昇も感じた。
間違いなくあいつらに何かがあった！

「レンジ……？ 貴方以外にも漂流者が？」

「……………。仕方ねえ。おいっ！ 離れてろ！」

「え？ 何を」

「いいから下がれ！」

何か言ってくるフェイトに怒鳴り返して無理矢理下がらせ斬月を構える。

「お前等に構ってる場合じゃねえんだ！」

「…解…！！」

こいつら片付けて直ぐに行く。

待ってる！ ルキア！ 恋次！

SIDE I O U T

SIDE I 恋次

「ぐあっ！」

甲高い悲鳴が耳に入ること目覚めた。

「ぐっ……！」

同時に腹から感じた痛み在意図せず呻き声が漏れる。

（腹……ぶち抜かれたのか……。
そりゃ……痛てえ筈だ……）

「ハア……ハア……」

「無駄な足掻きはお止めなさい」

聞こえた声に顔を上げれば膝をついて荒い呼吸を繰り返すルキアと、巨大な斧槍を掲げながら近づくデカブツと黒い服を着た女が見えた。

(……動け……)

「もはや力の差は分かりきっているでしょう？
それ以上は貴女の苦痛が増すだけです」

(……動け……！)

「嘗めるな……！」

(……動け……！！)

その光景から一度視線を外して自分の腕を見遣る。
腕は動かせるが血を流し過ぎたのかうまく力を籠められない。

(動けよ……！ 何の為に修業してきた……！
何の為に強くなるうと決めた……！
二度と手を離さねえ為だろうが……！
動け……動け……動け……！
動けえええええ)

「いずれは来る終末……。

せめて首を落とすことでこれ以上の苦痛を味わう前に終わら

！？」

ルキアに向かって歩いてきた女が不意に俺の方を振り向いてくるの
が見え ？

(何でえ……。まだ動けるじゃねえか……)

自分の腕を見ていた筈だったが気がつけば立ち上がって女を見返し
ていた。

「まさか……。まだ生きていましたか」

「情けねえな……」

「？」

「隊長ならもつと簡単にルキア助けてこの闘いを終わらせたんだろ
うが……。」

「まだまだ、ってことか……。」

「何の話です？」

隊長はこんな致命傷を受けることなくルキアを助けただろう。
感じる彼我の距離に眩暈がしてくる。

「それでも……。あの人より強く、って決めたのも俺自身だ。
だったら……。こんな場所で立ち止まってる場合じゃねえよな……。」

「だから……。！ 貴方は何の話をしているのですか！？」

「何の話……。？ 分かんねえか……。？」

死覇装の襟をずらし椿を模した刻印に手を翳す。
こんな土壇場で使う羽目になるとはな！

「俺は……！ まだ戦える、って言ってるんだ！！
限定解除！！ 卍解！！」

SIDE I O U T

SIDE E I なのは

「くっ……！ くう……！！」

『マスター！！』

「大丈夫……！！」

爆発し、渦を巻く魔力から脱出しながら声を掛けてくれたレイジン
グハートに応える。
至近距離から撃った砲撃魔法は私にも小さくない魔力ダメージを齎
した。

それでも手応え自体はあった。

「がああ……!!」

獣のような悲鳴を上げながらシュトーゼさんと二個の球体も魔力の渦から飛び出してきた。

「くそっ！ くそっ！ くそっ！ くそっ！」

そして片目を押さえながら砲撃の直撃を受けて輝が入った球体を殴り始めた。
殴られる度に球体からはスパークが発生し、シュトーゼさんの周りに展開されていたであろう透明な障壁に揺らぎが生じる。

「この私がつ！ この私がつ！ この私がつ！」

「ここまでだよ。シュトーゼさん。投降して」

「……？ どういう……意味……？」

「あなたの弱点は分かった。だからこれ以上は」

「くっ……はっ……はっはっ……あーはっはっはっはっはっはっ！
弱点が分かった？ 本気で言ってるの！？
馬鹿じゃないの？ 馬っ鹿じゃないの！？」

「ッ……！」

彼女を守る障壁はあの球体が発生させている。

だからこそ至近距離からの砲撃魔法の使用という無茶を行ったのだ。
それでも。

「弱点は分かった？ だから私に勝てる？ 本当にそう思ってるなら筋金入りの馬鹿だ！

教えてあげよう。お前は勝機を掴んだんじゃない。

さっきの一撃で私を落とせなかった時点で私を倒す機会を逸したんだ！

この私に……！ 何度も同じ手が通用すると思うな！」

駄目か……。あんな強引な攻撃が通じるのは一回だけ。やっぱり彼女も気付いていた。

最も恐れていた状況。それは私の狙いに気付いたシュトーゼさんがスピードを活かした一撃離脱戦法に切り替えてしまう事。

そうなっちゃえば私から彼女に接近できるチャンスは無い。スピードはシュトーゼさんの方が圧倒的に上である以上間合いを測る主導権は彼女にある。

そして私は自分から接近できるチャンス逃してしまった。

「さあ……て。思わぬ不覚をとったけどそれもこれで終わり。

一息に首を撥ねることは出来ないけど、こっちの方が面白そうかな
?」

「……!」

「さあ……いく !?」

互いに武器を構え動こうとした瞬間、遠くからでも解る程の強い魔力の奔流が二つ、発生した。

「これは……!?!? 【復讐者】でも【傀儡師】でもない! 何者だ
!?!?」

見ればシュトーゼさんも驚いた表情で彼方を見ていた。

(ねえ、レイジングハート)

(はい)

(これは……本当に“魔力”なの?)

(観測出来ているのは確かに“魔力”です。
詳細な測定はまだですが双方共にA A Aランクかそれ以上と思われる
ます)

レイジングハートは立ち上る二つの力の奔流を魔力だと言う。
だけど、私には感じる魔力にどうしても違和感を拭えなかった。

(一体……何が起きてるの?)

S I D E I O U T

私の目の前で刃を合わせる者達。その周りを血飛沫と銀色の鉄の破
片が舞っている。

「言っただろう……。去らねば死ぬと」

【復讐者】……メイズは何も言わない。

手には碎けた銀色の剣の柄を持ち、その眼は光を失っている。

下段から振り上げた紅い炎を纏った皇呀はメイズが振り下ろした銀色の剣を碎き脇から肩まで一気に斬り裂いた。

そして私達の周りには四本の黄金の剣と……私を守るように黄金の剣と鏢迫り合いをする二つの紅い太刀を模した炎。

烈火闘槍と同じ、皇呀の炎をより研ぎ澄ませた闘いの形の一つ。

「紅刃之草薙」

烈火闘槍より一度に出せる本数が少ない上に射程距離が短いものの烈火闘槍と違って動きをコントロール出来る。

メイズに攻撃すると同時に皇呀に纏わせた炎から紅い太刀を作り左右から迫る黄金の剣を防いだ。

「……………」

何も言わず後ろに倒れていくメイズに背を向ける。

掛ける言葉は無いし必要も無い。

この男は己の復讐に殉じて死んだ。ただそれだけ。

その死を哀れむ気は無いし、突然攻撃してきた理不尽を責める気も無い。

「他のところはどうなってる？」

霊圧が感知出来る限りではまだ戦闘は続いているが、少なくともこの丘の近くは静かなものだ。

「今の内に身を隠すか？」

そこまで考えたところで違和感があった。
メイズが倒れる音が聞こえてこない。

「ッ………！」

慌てて振り返った視線の先。

そこには倒れる途中の、中途半端な姿勢で身体を浮かせているメイズの姿。

それだけではなくメイズの周りに飛び散った剣の破片も、血飛沫も、ビデオの一時停止のように空中で静止している。
そして……。

「………！」

メイズの周りに霊圧が渦を巻き、メイズの全てが逆再生を始めた。

徐々に身体を起こし、血飛沫も、開かれたメイズの胸の傷に入っていく。

砕けた銀色の破片が一つに集まりはじめやがて一振りの剣になる。

「
」

全てが元に戻り、最後にメイズの傷が塞がり。

「スウ……」

左右に四本の黄金の剣を従え、眼に光を宿したメイズは無言で私を睨みつけた。

「なんっ……だどっ……!？」

今のは虚やストレンドのような超速再生ではない。
巻き戻しのように傷が塞がっていく姿は。

「時間操作……だど……?」

「いじげさ……」

驚く私の目の前で唐突にメイズが吐血する。

「似たようなものですが……厳密には違います……」

苦しげに語るメイズはズボンのポケットに手を入れると砕けた黒い石らしきものを取り出し、私に見せた後に放り捨てた。

「今の石は……僕の故郷の世界……第67管理世界、フィーニスで採れる……フォル一族が……儀式に使う石です……」
この石は……人間には観測できないあらゆる記憶を留めておくことができる……」

「記憶……？ まさか……！」

「聡明な人だ……。あの石に特殊な術式を刻み……特定の条件で発動するようにすれば……一度に限り……死ぬ直前の姿まで巻き戻せる……。その死を無かったことに……することが出来る……」

石に自身の姿を記憶させておけば、死んだ時に石に記憶させていた姿で復活出来る。

大雑把に考えてこんなところか。

「はあ……ふう……。無論リスクもある……。肉体の強引な巻き戻しは技術者に凄まじい負担を掛ける……。更に石自体が希少で、この術式も特定の条件下でしか行えない……。少なくとも僕の寿命が尽きるまでには出来ないでしょうね……」

話す間にも体調が回復しだしたのか苦しげな表情が消えていく。

「正直甘く見ていました。たかが管理外世界の人間だとね。やはり【剣】や【槍】の言う通り闘いに関する僕の見立ては甘い。だから」

そこで一度言葉を切ってからまたポケットに手を入れ何かを取り出す。

「ここからは手を抜くことのない全力だ……！」

ポケットから取り出し手に持ったのは、鎖に繋がれた小さな巻貝のペンダント。

「いきますよ……？ 過去の怨念に喰われて死ね……！」

「相棒……！」

霊圧を上昇させながら巻貝のペンダントを翳すメイズに対し、私も皇呀に紅い炎を纏わせ突撃する。

「……………！」

その瞬間、突然発生した二つの霊圧に足を止める。

「これは……………！？」

「この霊圧……………！」

互いに構えを保ったまま街の方を見る。

一つはかなり距離があるがかなりの霊圧。

そしてもう一つ。確実ではないが、さっき消えた筈の霊圧と同じ。

そしてその霊圧の極端な急上昇。

これが意味するのは。

「隊長格の限定解除に……………これは……………正解か！？早過ぎる！もう隊長格が来たのか！？」

「あそこに居るのは……………まさか……………姉さん！？」

「！ 待て！」

メイズの方を振り返った時には既に空に飛び上がっていた後だった。

ヴウウウウウウウウ……！！

「破道の ……！！」

鬼道で撃ち落とそうとした瞬間、響いてきた音に思わず動きを止めてしまう。

昔、死神だったところに一度だけ聞いたことがある。

まるでお腹の底に響くような、人を不安にさせるようなこの音は。

「これは……！！」

咄嗟に横に跳ぶも上空から聞こえてきた複数の風切り音にこれだけでは避けきれないと判断、瞬歩も使い更に距離を稼ぐ。

その直後背後から凄まじい爆音と衝撃、そして石飛礫が襲ってくる。

「縛道の三十九『円閼扇』！」

斬魄刀を横に構え円形の障壁を張り衝撃と石飛礫に備える。

(この音……間違いない！)

障壁にドンドンと石飛礫が当たる間にも鳴り響く音。

(これは……空襲を告げるサイレンか……！)

鳴り響いていたサイレンと爆音が止むのを確認し障壁を消す。

後に残ったのは爆発で抉られた地面と粉塵だけ。

上空を見上げて何も無い。結界の影響で変色した空だけ。空襲を行なった者は影も形もない。

398

(一筋縄ではいかないな……)。

あんな奴らがまだまだ居るとしたら……)

人外の怪力を持つ大男に魔術と呼ぶ詳細不明の力を操る人間。

そして今も護廷十三隊の隊長格を限定解除を行う程に追い込む何者か。

(なんとか……せねば……)

戦いはまだ暫く続くだろう。
当面は結界が消えるまで隠れる場所を探すべきか。
後は。。。

「服……はどうしようもないな……」

袖が消し飛んだ服の隠し方も考えるべきか……。

第二十二話

SIDEーフェイト

「バルディッシュ！ 何が起きてるの!？」

『不明です。ただ膨大な魔力を放出しているとしか……』

卍解

そう叫んだ直後、彼の身体を黒い、強大な魔力が押し包んだ。

(でも……これは……。
魔力……？ 何か……違うような……)

「……卍解……」

考えこむ間にも黒い魔力の奔流が薄れ

「天鎖斬月……!」

彼が姿を現した。

「え……？」

その姿を見た時、正直にいうなら拍子抜けだった。

黒い着物は黒いコートのような服に変化し、手に持っていた等身大の巨大な刀剣は細い漆黒の刀に変わっていた。

ただ……それだけ。

見た目だけなら前の剣の方が強そうだった。

「あ……あの……」

とにかく何か言わなければ始まらない。

そう思って声を掛けようとした時だった。

「なっ……!!」

彼の姿が消えた。

そうとしか表現できない、一瞬の出来事だった。
そして。

「……!?!」

左から突然響いた爆音に思わずそちらを見る。
見れば私達の周りを取り囲んでいた機械兵器の一体が二つに裂かれ爆発するところだった。

「これは……!？」

異変は終わらない。

一体目を始めに、次から次へと機械兵器群が真つ二つにされ爆発していき、機械兵器も混乱したかのように出鱈目にレーザーを撃ちまわるだけ。

レーザーの閃光と爆炎が空を彩るなか、一瞬だけ黒い影が飛び去るのが見えた。

(まさか……これって……!)

そして最後の一体が二つに斬り裂かれるのと彼が最初の位置に戻ってくるのは殆ど同時だった。

(高速移動魔法の連続使用……! そんな……速過ぎる!?)

影を捉えるのがやっとだった。

私と同じ……いや、それ以上の高速戦闘能力。

「悪いが先を急いでる！　じゃあな！」

「え……！　待つ　　！」

それが私に対する言葉だと気付いた時には既に遅し。
また高速移動魔法を使って消えてしまった。

『反応を確認できません。』

索敵範囲から離脱したと思われませう』

「……仕方ない。彼の事は後にしよう。
なのはの反応は？」

『遠方にて魔力光を確認しました』

「……急いじー！」

気になる事は山ほどある。
けど、今はなのはを優先しよう。
無事でいて！　なのは！

「限定解除……？ 卍解……？」

強い風と、巻き上げられた粉塵が渦を描く。
その渦から生じる強風の中黒衣の女が目を見開いて呆然と呟いた。

「ああ、そうさ……。卍解……！」

黒衣の女の呟きに応えるように一際強い風と共に粉塵が吹き飛んでいく。

「狒狒王……蛇尾丸！！」

粉塵の中から現れたのは恋次と、恋次を中心に蜷局を巻き威嚇する
ように鎌首を擡げる狒狒王蛇尾丸の姿。

「馬鹿な……。これがさっきまで死に体だった者の力と……？」

「言った筈だぜ」

先までとは違いすぎる恋次の霊圧に、自身気付かぬ内に一步下がっていた黒衣の女に対し、恋次は右手に持った柄を掲げ。

「俺はまだ戦える、つてな！ 咆えろ！ 蛇尾丸！！」

勢いよく柄を振り下ろすと同時、蛇尾丸が大口を開けながら巨人に突っ込んでいく。

「なっ……！！？」

さっきまでとは違う、そのスピードに黒衣の女は完全に虚をつかれながら慌てて腕を振る。

黒衣の女の動きに反応して巨人が斧槍を縦に構えて迎え撃つ。
だが。

「そんな……！！」

蛇尾丸と斧槍が正面から激突するも蛇尾丸がパワーで巨人を圧倒し、鏢迫り合いをしたまま屋上のフェンスを突き破って向かいのビルの壁面に巨人を叩きつける。

(今なら正解した蛇尾丸の方が上か！ なら、このまま押し切

！？)

「がつ！！」

更に追撃を掛けようとした恋次の視界に何かが入り、次の瞬間衝撃と共に後ろに吹き飛んだ。

「くそっ！ あれは……鞭か！？」

なんとか受け身をとって体勢を立て直した恋次は空中を翻って舞うものを見た。

恋次の頭部を強打したのは幾つもの骨を繋ぎ合わせたような鞭で、その先には人間の頭蓋骨らしき骨が付けれられ、更に柄の部分も棍棒のように太く、長い骨で出来ているという奇怪な武器。

俗に言う打杖鞭という鞭を黒衣の女が振るい薙ぎ払う。足元を狙って水平に迫る鞭を、しかし恋次は跳躍して避けることを躊躇った。

(何でこんな目立つ武器に当たるまで気付かなかった!?)

そして恋次の疑問に答えるように鞭が動きを見せる。

鞭の先が恋次の近くまで来た瞬間、なんの予兆も、予備動作も無く跳ねたのだ。

「なっ!?!」

物理法則では有り得ないその動きに恋次の反応が一瞬遅れる。
その間にも跳ね上がった鞭の先は恋次の死角に入り込み。

「破道の三十三『蒼火墜』!」

直後ルキアが黒衣の女目掛けて蒼い霊弾を放ち、その回避の為に飛翔魔法で飛び上がった女に釣られる形で鞭の軌道が逸れ恋次の頭上を通過していく。

「ルキア……!」

「恋次……傷は……?」

「大丈夫だ……!」

背中合わせに立つ恋次とルキア。

その互いの正面にそれぞれビルの壁に空いた穴から這い出した巨人と、空中から舞い降りた黒衣の女が立つ。

「恋次。あの女は私が引き受ける」

「ああ、後ろは任せた。それじゃ」

「ゆくぞ！」

「いくぜ！」

二人が声を合わせると同時、巨人が跳躍し空へ上がる。

それを追って恋次も空中へ飛び上がり、ルキアも黒衣の女目掛けて駆け出していく。

「あくまでも抗いますか。逃れられぬ己が運命から」

眩きながらも黒衣の女が鞭を持った腕を振るう。

不規則な動きで迫る鞭をルキアは瞬歩で大きく上へ避けそのまま斬り掛かる。

アースラのブリッジ。

再び海鳴市に展開された結界にクルーは騒然としていた。

「クロノ君！ 武装局員の準備完了！ いつでもいけるよ！」

「分かった！ 結界に穴を開けても通信が通じない可能性がある。
一時間が過ぎても結界が解除されない場合は近隣世界への増援要請
を頼む！」

「了解！」

エイミーからの報告にクロノが艦長席から立ち上がる。

そして武装隊の指揮を執る為に転送ポートへ行こうとした時
。

「待った……！ あたしも行く……！！」

「ヴィータ!？」

ブリッジに入ってきたヴィータがクロノを引き止めた。

「ちょ……!？ なに言ってるの!? まだ寝てなきゃ

」

「そんな暇は無え! 直接戦って解った……! 奴らはやべえ……!
! 武装隊の連中だけじゃ危険すぎる!」

「でも……!」

「……分かった。許可する」

「クロノ君……!？」

それまで沈黙していたクロノの言葉にエイミィが絶句する。

「ただし! 単独での戦闘は絶対に禁止だ。

突入後は直ぐにフェイトかなのはと合流すること!

いいな!」

「了解！」

そうして二人は転送ポートへと駆け出していく。

第二十三話（前書き）

明けましておめでとございます（すげえ今更ですいません）！

時間は掛かりましたが新話更新できました。

よろしければ今年一年よろしく願います。

それでは本編をどうぞ。

第二十三話

SIDEーなのは

「くっ……!」

「あっ……はっはっはっはっ!
ほらほらほら!」

右から、左からと次々に振るわれる魔力刃を防御魔法で凌ぎながら
レイジングハートを構える。

「デイベイン」

「ッ……!」

魔法が通用する距離に使用しようとした砲撃魔法にシューターゼさんが
一気に後退していく。
かと思えば迂回しながら凄まじいスピードで再接近してくる。

「同じ手は通じない、って言ってるだろ!」

向かって来ながらも投擲された魔力刃を左に躲す。
その代わりに後退する余裕を奪われ接近を許してしまう。
今は完全にシュトーゼさんのペース。

波の様に近付いては退き、退いてはまた突撃してくる。
更には設置型のバインドにすらも引つ掛からずその動きを抑える事が出来ない。

それでも強力な一撃を持たないシュトーゼさんの攻撃ならば凌ぐことは出来る。

私の魔力に制限が無いのならば……。

(カートリッジは予備も入れて残り十二発。

魔力の消費も激しいし、なんとかシュトーゼさんの動きを止めないと……！)

「随分と苦しそうだ。いい加減諦めて首を撥ねられなさい……！」

笑いながら振り下ろされる魔力刃を防御魔法で防ぐ。

その瞬間

「ぐっ……！？」

不意にお腹に衝撃を受けた。

下を向けばシュトーゼさんの左右に浮遊していた筈の球体の片割れがお腹に体当たりを行っていた。

(攻撃にも……使えたなんて……！)

「吹き飛ばえ！」

「ッ……！」

次いで頭を揺さ振る衝撃を受けて後ろに吹き飛ばされてしまった。

「う……く……」

『マスター！』

レイジングハートの声に衝撃で霞む視界を上げてみると直ぐそこにまで迫る魔力刃の切っ先があった。

(間に合わ ……！)

防御も回避も出来るタイミングじゃない。

私に出来るのは飛来する魔力刃をただ見詰めることだけで

。

「えっ……!?」

目の前まで来た瞬間、魔力刃が金色の光に撃ち抜かれた。

「誰だ!? 邪魔を」

「ハーケン！」

金色の光が飛んできた方向を見ればフェイトちゃんがバルディッシュを振りかざすところだった。

「セイバー!!!」

「貴様あ！ フェイト・テストアロツサアア！」

フェイトちゃんがバルディッシュを振り下ろして金色の刃を射出し、シュトーゼさんも片手に持った魔力刃をフェイトちゃん目掛けて投擲した。

「なっ……!!?」

けれどフェイトちゃんの攻撃も私と同様に防壁で消滅してしまう。

「ッ……！」

「逃がすか！」

投擲された魔力刃を躲すフェイトちゃんにシュトーゼさんが高速移動魔法で追撃し、フェイトちゃんも同じように高速移動魔法で応戦した。

「はあっ！」

「鬱陶しい！」

そのまま暫くは斬り合いが続いたけれど。

「遅いっ！」

「っあっ……！」

その斬り合いを制したのはシュトーゼさんだった。

シュトーゼさんのスピードはフェイトちゃんすら上回り、一瞬で背後を取って肩を斬り付けた。

痛みに肩を押さえるフェイトちゃんに更に追い討ちを掛けるように二個の球体が突撃して

？

「……！ レイジンググハート！」

「Load Cartridge」

私の意図を察してくれたレイジンググハートがカートリッジをリロード、砲撃形態に変形する。

「フェイトちゃん！」

環状魔法陣を展開しつつ、フェイトちゃんに呼び掛けながら照準をシュトーゼさんに向ける。

「デイバイン」

「！？ しまった……！」

私の呼び掛けに即座にフェイトちゃんが後退し、シューターゼさんが球体を呼び戻す。

「バスター！」

よりも僅かに早く砲撃魔法を放つ！

「くそっ……！」

そして砲撃は障壁に阻まれることなく、身を翻したシューターゼさんのすぐ横を通過していく。

「高町　　！？」

「プラズマ　　」

そして体勢を崩しながらも魔力刃を構えようとしたシューターゼさんの背後で、フェイトちゃんが砲撃魔法の用意をしているのが見えた。

「ちいっ……！」

シュトーゼさんもそれに気付いたのか球体を自分の周りに呼び戻した。

「スマッシュャー！」

球体がシュトーゼさんの傍に戻るのと同時、フェイトちゃんの鬨した手の平から電撃を含んだ金色の砲撃が放たれる。

「ハッ……！」

回避不能のタイミングで撃ち込まれた砲撃は、けれど二重の防壁を抜く程の威力は無かった。

砲撃自体の破壊力がAMFに減殺され、その影響を受けない電撃もAMFの内側に存在する魔力壁に遮られる。私の時と同じ結果……でも変化は確かにあった。

（障壁が……揺らいでる？）

どれだけ攻撃を受けても無色透明だった障壁は陽炎の様に揺らめいている。

それと同時、二個の球体の片方から火花が散っているのが見えた。

「レイジングハート！ 第二射！ いくよ！」

『Load Cartridge』

今残っているカートリッジを全て使って魔力を補填し環状魔法陣を展開、フェイトちゃんの砲撃魔法を受けて動けないシュトーゼさんに向ける。

「デイバイン……バスター！」

集束した魔力を一気に解放。

放たれた砲撃は真っ直ぐにシュトーゼさんに向かって行き

「ッ……！ フィールドの……出力が……！」

フェイトちゃんの砲撃と挟み込む形で直撃した。

「フィールドが……持たない……だと……！？」

両側から砲撃を受けて障壁が激しい光を発しているのが僅かに見え
た。
そして。

「くっ……くっそおおおおおおお！！！」

シュトーゼさんの絶叫も飲み込んで爆発した。

SIDE OUT

「異世界というのはなんでも在りだな。ここまで来ると驚きを通り越して笑うしかないぞ……」

ビルの壁を蹴りつけ道路を挟んだ反対側のビルまで跳び、また蹴りつけて反対側の別のビルへ……。
そうやってジグザグに前に進むことで後ろから飛来する“ミサイル”を躲す。

「……っひひ……！」

次々と発射され爆発していくミサイルの音に紛れて別の轟音と小さな霊圧が近付いてきたのに対し首を振って後ろを振り返り……直ぐに前を向いた。

「兵器の発想というのは世界に関係なく似るものなのか？」

今背後から追ってくる“物”。

それは戦車だ。例えばなど必要もなく戦車だ。

平面で構成された装甲に車体上部の旋回する砲塔。

キヤタピラ駆動独特の走行音を響かせて私の後を執拗に追跡してくる。

普通の戦車と違う点を挙げるなら広い道路を一杯に使う巨体と左右から伸びたクレーンゲームを思わせるアーム。

そして……その戦車から感じる霊圧。

（あの戦闘機擬きからも僅かに霊圧は感じたが……人が乗っている気配はない。

霊力を動力源に動かしているのか？）

そこまで考えてから後ろから感じる霊圧が上昇しだすのに気付いてまた振り返った。

「何だ……あれは……!？」

戦車の上部、砲身を幾つもの見慣れない術式を描く陣が巻き付き砲口部分に霊力が集中していく。

(これは……まさか……！)

咄嗟に瞬歩で横に跳び予測される射線から身を躲す。直後私の居た位置を灰色の霊力の塊が通過していく。

「虚閃だと！？ 巫山戯るな、この戦車擬 ……！」

思わず文句を言いそうになって再度瞬歩を使用。その後を再び虚閃が通過していく。

(連射が出来る上に狙いも正確ときたか……！ 面倒な ……！
今度は正面か！？ 次は何だ！？)

後ろからは戦車、更には前から大きな霊圧が高速で接近してくる。

(さっきの二つの霊圧の内の一つか！ こいつ……速い！)

このまま直進すれば間違いなく正面から対峙してしまう。だが、幸いなことに右へ曲がる道を発見した。

死神らしき霊圧が向かって来るのはその向こうにあるT字路の先だ。
ならば選択肢は無い。

(仕方ない。先がどうなっているかは解らんが右に曲がるしか
！？)

その時背後から覆いかぶさってくる影と、背中から感じた“痛み”
に体ごと振り返る。
その瞬間、視界に入ったのはさっきまでとは明らかに長さの違う戦
車のアームの先端部分が振り下ろされる光景。

「ぐっ……!!」

アームが伸びてくるといふ予想外の攻撃に回避するタイミングを失
い、咄嗟に皇呀でその一撃を受けるが。

「ぐぐっ……!! ぬあっ……!!」

見えた目通りのパワーに圧され後ろに吹っ飛ばされてしまう。

(って、ちょっと待て……!! こっちは……!!)

その勢いを殺す為に空中で身を翻した時には予定していた曲がり道
を通過してしまい。

「ちいつ……！」

地面に着地した直後に追い討ちで撃ち込まれたミサイルを回避する
為、更に後方への跳躍を余儀なくされる。

（駄目か……！ もうそこまで来てる……！！）

そしてT字路で着地。霊圧を感じる方に顔を向ければ。

（見付かったか……）

オレンジの髪に黒いコートの男。そしてその右腕には……漆黒の斬
魄刀。

近くはないが遠くもない距離で、死神の方もまた驚いた表情で私の
顔を見返していて。

（どつしたのかな……）

冷静にそんな事を考えている暢気な自分の思考にこそ驚いた。

忌避し続けた過去に……追い付かれたというのに……。

第二十四話

爆発による粉塵が辺りを覆っていくが、それでも二人は互いから視線を外すことはなかった。

隻眼の少女、桔梗は鋭く睨みつけ、オレンジ色の髪の青年、一護は戸惑った表情でその視線を受けた。

「…………お前…………死神…………か？」

一護は桔梗が手に持った剣から感じる霊圧で、それを斬魄刀だと認識し、桔梗を死神だと判断したが、その判断が一護を深くしていた。彼が戸惑っていたのはルキアから他の死神が来るには暫くの間が掛かる、っと聞かされていたのと、桔梗の服装が死神の死覇装ではなく現世の人間が着る普通の服だったからだ。

「……………」

「おいつ！　なんとか言え

！？」

「！？　ちいつ……………！」

一護がなにも言わない桔梗に詰め寄ろうとした瞬間、粉塵を切り裂いて飛来するミサイルに気付いて二人同時に瞬歩で飛び退き、直後

ミサイルが二人の居た場所に着弾し爆発する。

「なんだ……こりゃ……!？」

一護が飛んできたミサイルに驚く間にも凄まじい音を響かせて爆煙の中から戦車が現れ。

「……なんでこの状況で戦車なんだよ……」

「……まあ、妥当なりアクションだな……」

まさか戦車がでてくるとは思っていなかった一護が呟き、桔梗が相槌を打つ。

「この戦車のこと知ってんのか？」

「いや、知らん。……だが見つかった以上は仕方ないな……」

「は？ お前、何言って」

「山本元柳斎重國の爺いに伝えておけ。“私は何もする気はない。”

だが降り懸かる火の粉は払う“、ってな”

「だから」

「じゃっ！ 後は任せた！」

「うおおいつ！？」

言うだけ言って桔梗は一護に背を向けて走りだした。慌てて後を追おうとした一護だが更に撃ち込まれたミサイルに回避を余儀なくされる。

「くそっ ！？」

ギリギリでミサイルを避けるも、爆発に紛れて薙ぎ払われたアームを回避出来ず、その一撃を斬月で受けるが 。

「ッ………！ ぐあっ！」

そのパワーを抑えられずにアームごとビルの壁面に叩き付けられてしまっ。

「……何が起きてるのかしらねえが……」

アームの下。自身を押し潰そうと力を入れるアームを押し返しなが
ら一護が呟く。

「お前に構ってる暇は無えんだ！」

一護が叫ぶと同時に、黒い斬撃が放たれアームを斬り落とした。

「急いでるからな。悪いな……一瞬で終わらせるぜ……」

斬り落とされたアームが地面に激突し、轟音が響く中、一護は左手
を額に翳して……下ろした。

「おおおおおっ!」

柄を振るいデカブツ目掛けて蛇尾丸を突撃させる。

蛇尾丸の牙は斧槍で逸らされたが、もう一度柄を振るい、胴体を叩き付けて吹き飛ばす。

(やっぱりな。こいつ、空中での動きが鈍い)

直線的な速さはさして変わらないが、地上で俺達を翻弄したあの動きが無くなり回避が明らかに一歩遅れている。

限定解除で封じていた霊圧を解放して、自身の能力が上がったものあるだろうか……。

(空中に上がってから、動作も単調になりやがった)

攻撃、防御、回避。この一連の動きが繋がっていない。攻撃を受ければ回避し、避けられなければ防御。そして俺の攻撃が終われば突撃してきて攻撃。さっきからこれの繰り返し。

そこに相手を油断させる誘いも無ければ戦術も無い。

一つ一つの動きを行っているだけだ。

「いい加減に……倒れやがれ!」

勢いよく碎け散りその背から巨大な蝙蝠のような翼が現れ、靈力を集めだし。

「なっ……!？」

爆発させて一気に突っ込んで来た!

「くそっ……!」

咄嗟に蛇尾丸の刃節を盾にするが、凄まじい勢いから繰り出された刺突を受け切れず、碎かれた。俺から離れたことで蛇尾丸が動きを止め、それをチャンスと見たか、デカブツがまた突撃の姿勢に入った。

「もらったっ!!」

デカブツが動きを止めた瞬間、柄に靈圧を流し、落ちていく蛇尾丸の刃節を繋ぎ直す。そして動きを取り戻した蛇尾丸の頭はデカブツの背後!

「いけええっ!」

蛇尾丸の大口を開けて噛み砕こうとしたが、咄嗟に振り返ったデカブツの斧槍に阻まれる。

「まだだっ！」

柄を捻ることで蛇尾丸の頭部を回転させ、斧槍を弾き飛ばし再度噛み付かせるが、それも両腕で上顎を、片足で下顎を抑えることで阻まれる。
だ　　が　　。

「捕まえたぜ……！」

蛇尾丸に咄嗟に注ぎ込める霊圧を注ぎ、口内に集束させる。

「零距离ならちつとは効くだろう！ 狒骨……大砲！」

S I D E I O U T

SIDEールキア

「はあっ！」

「フツ……！」

不規則な動きで迫る鞭を大きく跳躍して躲し、上段から斬り掛かるが、棍棒のような柄で止められ罅迫り合いの状態になる。

「くっ……！」

だが、その拮抗も一瞬、あっさりと押し返されやむなく後ろに下がる。

「っあ……！」

更に下がった場所で鞭に背中を強打され、間合いから出る為にもう一度跳躍して下がる。

（厄介な武器だ）

通常では考えられない動きで死角に入り込み攻撃してくる鞭。かといつて鞭の攻撃を避ける為に接近すれば棍棒と、細腕からは想像できない腕力に圧倒される。

反対に鞭の間合いの外から鬼道で攻撃しようにも相手も動いているために中々間合いを離せない。

「貴女などに私達の復讐の邪魔はさせない！」

離れた距離を埋める為に鞭を振るいながら突撃してくるのに対し、私もまたビルの屋上から飛び降り道路目指して落下することで間合いを保つ。

「復讐だと……？ その復讐と我等に何の関係がある！？」

「この地、この世界で“王”が復活する！ その復活に貴女達魂の調停者の存在は邪魔でしかない！」

この口振り……死神のことを知っている！？

「貴様……！？ 死神の事を……！？」

だが、その事を問い質す前に縦に振り下ろされる鞭に右へ避け
！？

「いかん……！？」

気がつけば棍棒を振りかざした黒衣の女が右から。左から躲した筈
の、人間の頭蓋骨を模した鞭の先が不規則な動きで迫ってくる。
挟まれた……！

「ぐっ………！」

真っ先に飛び込んできた黒衣の女の棍棒を斬魄刀で受けるも臂力の
差にあっさり押し切られ道路に叩き付けら衝撃が全身を通り抜けた。

「ッ………！ がっ………！」

それでも痛みを無視して立ち上がろうとしたところへ更に肩に衝撃
を受けまた倒れてしまう。

「最期………！」

視線を上げれば鞭を振り上げる黒衣の女の姿が見えた。

(まづい !?)

「えっ? きゃあっ!?!」

その時、上方からの霊圧を感知。一拍遅れて赤い光の柱が黒衣の女の近くに着弾した。

(これは……恋次の狒骨大砲か……!)

そして着弾の余波に腕で顔を庇いながら空を見上げる黒衣の女。

(今しか……無い……!)

「縛道の四『這縄』!」

膝立ちのまま縛道を放ち黒衣の女の腕と鞭の柄を縛る。

「!?! こんなバインド……!」

「自壊せよロンダニー二の黒犬！」

『這繩』では直ぐに破られる。ならば早急に次の手を打たなくてはならない。

「雷鳴の馬車、糸車の間隙！ 光もて此を六に別つ！ 一読し、焼き払い、自ら喉を掻き切るがいい！」

詠唱を続ける間にも女は『這繩』に手を掛け、引き千切ってしまう。だが、間に合った！

「縛道の九『撃』！」

再び鞭を構えようとした女に今度は赤い縄を放ちその体を縛りつける。

「次から次へと……！」

「縛道の六十一『六杖光牢』！」

左手に薄い水色の光を燈し『撃』に手を翳した女に二重詠唱していた『六杖光牢』を放ち、完全に拘束する。

次いで袖白雪の切っ先を地面に向け、四度突き刺す。

「ッ……!!」

「次の舞」

そして袖白雪の切っ先を黒衣の女に向ける。

女も私の霊圧を察したのか『撃』を、続けて六つの帯の一つを消していく。その動作は傍目から見ても慌てていた。だが、遅い!

「白漣!!」

今また、二つの帯を消した女に向け、切っ先を突き出す。同時に冷気の波が発生させ黒衣の女目掛けて放つ。

「」

その瞬間、黒衣の女が何かを呟くのが聞こえたが、冷気の波は、その呟きも飲み込んで射線にある物全てを凍てつかせた。

SIDE I O U T

第二十五話

「なのは！ 大丈夫！？」

メリアとの空中戦を終え、近くのビルの屋上に降りて早々にフェイトが口を開いた。

「うん、魔力の消費が激しいくらいで怪我は特にしてないかな。それよりもフェイトちゃんの肩」

「私も大丈夫。肩を魔力刃が掠めた程度だから」

戦いが“終わった”ことで互いの状況を確認しあう。

二人は見ていた。メリアの周囲を覆っていた障壁が砕け、砲撃魔法が直撃するところを。

挟み込んで放った砲撃魔法の衝突により発生した爆発の中にメリアが消えていくのを。

だから二人は疑っていない。あの攻撃をまともに受けて無事で済む者が居る筈がないと。

だから二人は気付かない。何故直撃を受け、墜ちる筈のメリアが落下してこないのか。

「なのは。さっきの人……」

「うん……メリア・シュトーゼさん……。半年前に模擬戦をした……」

「どうして彼女が海鳴市につ……!？」

「フェイトちゃ

」!

突然脇から血を噴き出し前のめりに倒れていくフェイトに声を上げようとしたなのは、フェイトの背後に立ち、魔力刃を振りかざすメリアに気付いた。

(……なん)

金色の瞳を宿した眼は血走ったように見開き、口端を三日月の形に吊り上げて嗤うメリアは傍目から見ても正常な状態にないのは明らかだった。

(……で……?)

なのはには解らなかった。
何故フェイトより防御が薄い筈の彼女が障壁も無しに、あの砲撃に耐えることができたのか。

「死っ……！ ねっ……！」

そして、その一瞬の疑問から生まれた、一瞬の自失は致命的な隙。

(……防)

防御魔法を……。その思考すら間に合わない刹那の間に迫る魔力刃
/ 死。

「フランメ ……！」

その失態を取り戻したのは誰にも気付かれず接近していた鉄槌の騎
士。

「 シュラーク……！」

ヴィータがメリアの背後からアイゼンで殴り掛かった。

「ッ……！？」

「!?!」

呼び掛けながらも立ち上がるヴィータと背後から響く笑い声に振り返るなのは。

二人の見ている前で炎の中からメリアが口端を吊り上げながらゆっくりと身を起こし始めた。

「ハッハハハッハハハハッ……! 効かないな……? おつかしいな……? アッハハハハハハハッ!」

「化け物め……!」

「なんで……? ちゃんと直撃してるのに?」

忌ま忌ましそうに呟くヴィータに次いで、先程も思った疑問をなのはは口にした。

「ハハハハッ……! 不思議だよ……? 私も不思議だよ……。なんでか今は痛くないんですよ……: 良いところなのに邪魔ばかりするんじゃないっ!! この犬っころ共っ!!」

喜悦から一転して、怒声を上げると共にメリアは懐から金の口ザリ才を取り出し。

「くそがあああああっ!!」

真上に放り投げた。投げられたロザリオは光を放ってメリアを包みこみ。

「!? 転移魔法!？」

「待って……! シュトーゼさ」

なのはとヴィータが気付いた時にはメリアは姿を消していた。

「恋次……!!」

「こっちも終わったか……」

大穴が空き、分厚い氷の壁ができた道路の上。
そこで恋次とルキアは合流した。

「あの鎧の奴は」

「あそこだ。流石にあれで生きてるとは思えねえが……」

そう言つて恋次は今だに煙を噴き上げる大穴に視線を向ける。

パキッ

「結局何者だつたんだ、あいつら？」

パキッ

「分からぬ。ただ……あの女は死神の事を知っているようだったが
……」

パキッ、パキッ

「あん？　ってことはあいつら、異邦人じゃなくてこの世界の間
だってこと　　！？」

「どうした、恋　　！？」

会話を続ける中で最初に恋次が、次にルキアがその音に気づき、音
源を振り返った。

「……油断……と、言うべきでしょうか」

白漣で作られた氷の壁。その中から声が響くと同時に氷が内側から
砕け散った。

「なんだっ……？　これはっ……！？」

「ッ……」

ルキアが気圧されたように一步後退りし、恋次も警戒心を全開にし
て蛇尾丸の柄を握り直した。

氷を内側から砕いた者。それは“手”だった。そしてその下には当
然とばかりに黒衣の女が立っていた。

地面に出来た空間の“揺らぎ”から伸びた巨大な“手”は太い鎖を
五指に巻き付けながら調子確かめるように指を動かしていた。

恋次達が戦慄したのは、その霊圧。手が、指が動くだけで凄まじい霊圧が二人に吹き付けられていく。だが、それ以上何かをするでもなく、“手”は空間の揺らぎへと帰っていく。

その変わりと言わんばかりに黒衣の女が左腕を降ると、恋次が狒骨大砲で空けた穴から巨大な人影が飛び出し、女の傍に着地した。

「……！ 野郎……！ まだ生き……て……？」

「なんつ……だどっ……？」

蛇尾丸を構え直した恋次が硬直した。ルキアは“それ”が何か解らず呆然と呟いた。

「まさか……この鎧をこうまで砕くとは……魂の調停者の力……」
王“の力を信じるには十分ということですか……”

巨人を見上げながら黒衣の女が呟く。

全身を覆っていた鎧は腰や太股の部分を除いて消失し、鎧の下にあった肉体を露出させていた。

巨人の脚は黒い毛皮で覆われ、その下には人間のそれではなく、馬や牛のような蹄になっていた。

右腕は赤黒く、節搏立ち指には鋭く尖った五本の爪が生えていた。

左腕は狒骨大砲を受けた時に失ったのか肩から欠け、出血もせず黒い筋肉の断面覗かせていた。

「てめえ……！」

生きていた者を“物”扱いするその言い方に恋次は激昂しかけるが……。

「そうでしょう……？ 人間は弱すぎる。その肉体も……心も……弱い肉体を持つが故に強き者に憧れ、それ故に心が弱り、強き力を得る為に悪逆非道も平気で行えるようになる」

伏し目がちに語るソニアの言葉に機先を制され踏み止まった。

「“私達の復讐の邪魔はさせない”。
お前はそう言ったな？」

「……ええ……」

そして僅かながらもソニアと言葉を交わしたルキアが会話を続ける。

「今一度聞こう。お前の復讐と我等死神に何の関係がある？ そして先程から言っている“王”とは何だ？」

「……私達は……【ティアマト】という反時空管理局の者です」

「時空管理局……?」

聞き慣れない単語に恋次が聞き返す。

「他の次元世界を統轄、管理している法的組織の総称……。私達はその組織への復讐の為に集い……。今日、その復讐が始まる為の世界を見つけた。

この世界で“王”は封じられた。“王”を解放した時、その力はあらゆる世界を焼き尽くすと聞いています」

「その……“王”とは……何者　　!??」

ヴヴウウウウウウウ……

「何だ!?　この音!??」

突然響き渡った音に恋次が辺りを見回す。

「メイズ……!??」

ソニアもその音に反応し、慌てたように後方に大きく跳び退き、屍人もそれに追隨していく。

「!? ちいつ……!」

ソニアの後退に気付いた恋次が柄を振るい蛇尾丸を追撃させるが、同時に遠くから爆発音が響き、次いで尾を引く風切り音が鳴り出し。

蛇尾丸の刃節に何かが高速でぶつかり爆発した。

「くそっ!」

悪態をつきながらも恋次は爆発により破壊された刃節を自身の霊圧で繋ぎ直すが、正体不明の何かはまるでソニアとの間に壁を作るように降り注ぎ、蛇尾丸の進攻を阻止していた。

「ここまで……ですね」

ソニアの声が聞こえると同時に全ての音が止んだ。

そしてタイミングを合わせたように一際強い風が爆発で発生した粉塵を吹き飛ばし。

「終わりにしましょうか……この夜の狂騒を……」

恋次とルキアの視線の先、巨大な屍人と、骨の鞭を持ったソニア、そしてその隣に右腕に巻貝のペンダントをぶら下げた青年、【復讐者】メイズ・フォル・ロックソートが立っていた。

第二十六話

SIDE Eなのは

「ぐっ……！ ハア……ハア……」

「ヴィータちゃん！？」

シュトーゼさんが転移した直後力尽きたように膝をついてしまった。

「あたしは大丈夫だ……。それよりテストロッサは」

「私も……大丈夫……。かなり際どかったけど……致命傷は避けられた……」

その声に振り返ると、脇腹に手を宛てて出血を抑えるフェイトちゃんが立っていた。

「ヴィータは……？ まだ前の戦闘のダメージが残ってるんじゃない……」

「此処からアースラに戻るぐらいなら大丈夫だ……」

「そうだね。フェイトちゃんもヴィータちゃんもアースラに戻った
ほうがいいよ。あっちの戦闘には私が行ってくる」

「クロノがお前も直ぐにアースラに戻って待機してろ、って言うて
たぞ……」

「えっ？ でも」

その時、遠くから聞こえた爆音が響いてきた。

戦闘はまだ続いている……これを放置して撤退するなんて……。

「あっちならクロノと武装隊が向かったし大丈夫だ。

それに……【ティアマト】の戦力……。あたし達が……いや、管理局
が考えてる以上にヤバイ。戦うにしてもこっちの戦力が揃ってか
らの方が良い」

ヴィータちゃんの言うことも尤もだと思う。今日の戦いにしても私
一人だったら確実に死んでいた場面が二回もあった。しかもSラン
ク級の魔導師や騎士が三人掛かりで撃退するのがやっと、という戦
力差。もしも今のシュトーゼさんの力が【ティアマト】の平均だと
したら……。

それに目の前の問題としてまだ前の戦闘のダメージが抜けていない
ヴィータちゃんに斬られた箇所から血を流し続けるフェイトちゃん。
この二人を放っておくことも出来ない。

「そうだね……。一旦アースラに戻ろうか……」

そう言ってから今だ爆発音が響く方角に視線を向けた。

(クロノ君も気をつけて……)

S I D E I O U T

「動くなっ！」

道路に空いた穴を挟んで睨み合っていた四人の上空からの声に全員
が視線を上に向ける。

「おやおや……随分とお早いお着きだ……」

呆れたように呟くメイズの視線の先にはデバイス、S2Uを構えたクロノと、上空から彼等を包囲する武装隊の姿があった。

「時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。全員直ちに武装を解除しこちらの誘導に従ってもらおう」

「嫌だといったら……?」

「実力行使も厭わない……」

挑発的というメイズにクロノはS2Uを向け応える。同時に周りの隊員もデバイスを地上に居る者達に向ける。

「……ややこしい状況になってきやがったな……。どうする……?」

二人の会話を離れた位置から聞きながら恋次がルキアに小声で問う。

「……新手が一体どういう勢力なのか解らんのでは判断のしようが無いな……」。

……ここは一護と合流してこの場を離れるのが得策か……？」

「……一護ならすぐ近くまで来てるのが見えたが……向こうも戦ってる真つ最中みてえだぜ……」

「そちらの二人もだ！ 直ぐにデバイスとバリアジャケットを解除しろ！」

小声の会話が聞こえた訳ではないだろうがクロノが恋次達にも武装を解除するよう警告する。

(くそっ……ややこしいことになるから手が出せねえ、ってのに好き放題言いやがって……)

「……恋次……」

「なんだ？」

「……どうやら間に合ったようだぞ……」

「月牙

！」

ルキアが小さく呟いた瞬間、クロノ達よりも更に上から発生した霊
圧に全員が顔を上に向ける。

「天衝！」

そこには斬月を振るい黒い月牙を放つ一護の姿があった。

「いつの間に!?!」

気付かぬ間に頭上を取られたことにクロノが驚愕の声を上げるがそ
の間にも斬撃は武装隊の直ぐ横を通過し。

「ぐっ……!?!」

「ッ……!」

メイズとソニアの目の前を薙ぎ払った。

「おおおおおおおっ!」

突然発生した衝撃と粉塵に、腕で顔を庇う二人を尻目に一護は更に斬撃を散蒔いていく。

「うわっ！」

「ひっ………！」

その内の幾つかが局員の直ぐ傍を通過し、近くにあったビルを斬り裂き、道路に深い爪痕を残し、次第に周辺を土埃で覆っていく。

「そこまでだっ！」

『Stinger Ray』

月牙天衝を放つ為に動きを止めていた一護に、クロノが射撃魔法を放つ。

放たれた魔力弾はそのスピードで一瞬の内に一護の目の前まで迫り。

「なっ………！？」

クロノの視界から一護が消えると同時に二つに斬り捨てられ消滅し

た。
クロノの攻撃を捌いた一護はその勢いのまま舞い上がる粉塵の中に突入する。

「恋次！ ルキア！」

「一護！」

「遅えんだよ、一………！ ぐっ………！！」

直ぐ近くに近くに着地する一護に駆け寄ろうと瞬間、恋次が腹部を押さえて膝をつき、卍解も解除される。

「おいつ、恋次………！」

「一護、話は後だ。先ずはこの場を離れるぞ」

「そう言っても周りは囲まれてるぞ。どうする？」

「恋次が狒骨大砲で空けた穴がある。そこから下水に下りられる筈だ」

「解った。どつちだ？」

「あちらの方だ」

「よし……！ 恋次」

「わりい……」

ルキアが道路に空いた穴の方を指差す。
方角を確かめた一護は一つ頷くと膝をつき恋次に肩を貸し、ルキアの先導を受け歩きだした。

「包囲を崩すな！ 互いに支援出来る距離を維持しろ！」

一方、突然の一護の攻撃に浮足立つ武装隊に指示をだしながらクロノは先の一瞬の出来事を思い出していた。

（動きがなにも見えなかった……。転移魔法の類じゃない、単純なスピードであそこまで速く動くとは……）

もしもあのスピードで奇襲を受けたら一溜まりもない。

その考えからクロノは強攻策に出ることができなかった。

(…………晴れてきた…………)

僅かな時間の後、道路を覆う粉塵が薄れ始めた。その事に気付いた武装隊もデバイスを構える。
そして。

「……………居ない!?!」

視界が開け始めた道路に居たのは黒衣の男女 メイズとソニア、そして屍人だけ。その事に気付いたクロノが思わず叫んでしまった。
う。

「逃げた…………?」

「意外だけれど賢明な判断ね…………。赤髪の男は重傷の筈だし、彼等も状況の変化に戸惑っていたようだったから」

その二人にしても一護達の逃走は予想外だったのか、拍子抜けしたように構えを解いた。

「動くな！」

だが、先程の混乱の影響か、その動作に過敏に反応した局員がソニアにデバイスを向けた。
向けてしまった。

「じっ……！」

次の瞬間、その局員が姿を消し、入れ代わるように右腕を振り下ろした体勢の屍人が現れ、近くのビルの壁から重い水音が響く。

「なっ……！？ なにをっ

」

突然隣に現れた醜悪な巨人に驚愕の声を上げながら局員がデバイスを向け。

ヴヴウウウウウウウ

耳を劈くサイレンの音に気を取られた瞬間、何処からともなく飛来した銃弾の雨に身体中を撃ち抜かれ絶命した。

「はっ……！！ 口ほどにもない。この程度で僕達を殺しに来たとは

……。最高評議会も存外大したことはなさそうですね」

「なにっ……？」

眼下の二人が行った凶行にクロノがS2Uを向けようとしたが、メイズの言葉にその動きを止める。

（殺しに来たとは……？ それに……最高評議会？ 何故此处で管理局のトップの名前が出てくる……？）

「なんて顔ですか……？ 貴方達は最高評議会の命で僕達【ティアマト】の抹殺、壊滅に来たのでしょうか？ その為に高町なのはやフエイト・T・ハラオウンを連れてきた……僕達を確実に殺す為に……違いますか？」

「何を……何の事を言っている！？」

「……？ 白々しい……。獵犬が今更管理局の体面を取り繕う必要など無い……！」

話が噛み合わないことで互いに苛立ちを募らせ始めたが。

「無駄よ、メイズ。恐らく彼等は何も知らされず私達を追ってきたんだわ」

「……………」

ソニアの言葉にメイズは呆けた顔を隠せず。

「ッ……………」

クロノは更なる苛立ちから意識せず舌打ちしてしまう。

「あっ…………はっはっはっはっ！ はっーはっはっはっはっはっはっはっ…………！ これは傑作だ！ クロノ・ハラウンや高町なのはクラスでさえ人形扱いか！ 最高評議会め！ 慎重と褒めるべきか、無能と罵るべきか！ あっはっはっはっはっはっはっはっ！」

「何が可笑しい！」

ソニアの言葉の意味を理解したメイズが声を抑えることなく笑いだし、馬鹿にされていると判断したクロノが声を荒げる。

だが、メイズはクロノの激昂を気にも留めずスボンのポケットから金のロザリオを取り出す。

「笑わずにいろと？ 無茶な話だ。獵犬だと思っていた敵が、其の
実何の意思も持たないただの人形でしかなかった。これが笑わずに
いられるものですか」

「人形だと……！」

「もはや貴方の相手をする時間すら惜しい。この世界での敵は首領
殿と同じ力を使う魂の調停者のみ。それが確認できただけでもよし
としましょう」

ククロノ達が話す間に、屍人がソニアの隣に降り立つ。
それを合図にメイズが金のロザリオを真上に放った。

「……！ 待てっ！」

ロザリオから放たれる光に二人が包まれていく。
先の会話から、それが転移魔法の前兆であると気付いたククロノが呼
び止めるが、意味など無く、光が収まった時には二人はその場から
姿を消していた。

第二十七話

「結界が消えたか……」

硝子が割れる音と共に世界に色と音が帰ってくる。

今までと同じなら【ティアマト】は撤退、もしくは結界を展開していたであろうメイズが討たれた、っということになるが……。

(後者は高望みすぎか…… 本当に隊長格が来ていたら解らんが……)

「はあ……」

気が付けば溜め息が出ていた事に少し憂鬱になる。

数日前にはまったく想定していなかった瞬間が、あまりにも唐突に目の前まで迫っている。

(だが…… 座して終わりを待つ気も無い。出来る事は全て為す……)

差し当たっては話を通じるかも分からない【ティアマト】からの対処か。

（“戦利品”もあることだからな）

スカートのポケットに手を入れて“戦利品”を確かめる。
小さく冷たいその感触にはほんの僅かだが霊圧が残っている。

（都合三回に渡る先制攻撃か……。
悪いが……やられっぱなしというのは性に合わないのではな）

明日は学校の為に放課後の時間だけでは即席で練り上げた計画を実行する余裕が無い可能性がある。
だとすれば勝負は明後日の土曜日、無理そうならば計画を練り直して、次の日曜日。

（護廷十三隊への本格的な対処はその後。時空管理局は……放置しかないな）

今のところはメイズから相当な恨みを買っているらしい以外に情報らしい物がまったく無い組織だ。
そんな不確定な戦力をこれからの戦略に組み込むわけにはいかない。

（これ以上……水無月家の人達に迷惑を掛ける訳にはいかないしな）

流石に夜中に屋敷に忍び込むような帰宅を繰り返せば、家族に気付

かれる可能性は大きい。

(できれば……次で一気に状況を動かせると良いがな……)

私はお前等を殺しかねない戦場に放り込む立場にある。それを最低と罵りたいのも当然だ。
ただ……もしも……もしもそんな最悪な戦場ならその時は

ね
誰が桔梗ちゃんを嫌っても私は桔梗ちゃんのお姉ちゃんだから

約束は……誓いは破らない。今度こそ……

SIDE1 護

「護……！この寝台に……」

「分かった！ おい……！ しっかりしろ……恋次……！」

「……耳元で怒鳴んじゃねえよ……」

高くはないが安くもない。

そんな印象の、普通のビジネスホテル。

ルキアの案内でその一室のたどり着き、窓から部屋に入った。

「一護」

「なんだ？」

「私はこれから恋次の応急処置に入る。お前は街にいる私達の義骸を拾ってきてくれぬか？」

「ああ」

恋次をベットに寝かしてからもう一度窓枠に手を掛けて

。

「そつだ、ルキア。戦ってる時に知らねえ死神に会ったぞ」

危うく忘れる前に紅い斬魄刀の死神の事を思いだすことが出来た。

「なんだと……？」

「街中で、戦車に追い回されてたけど……あの女、人に戦車の相手押し付けてどっか行きやがった」

「女……？ せんしゃ……？」

「他に、死神が来る、ってのは」

「いや……今のところは我々だけの筈だが……」

ルキアも聞いてねえ……か。
そっぴゃ。

「死神が此処で行方不明になった、って言ってなかったか？」

「行方不明になった者は男だと聞いているから、それも違うと思っ
が……。
その死神の特徴は？」

「長え黒髪を後ろに纏めてて、服も死覇装じゃなくて普通の服だったな」

ああ、それに。

「左目に刀傷みてえのがあったな。開いてなかったから多分見えてねえんだろうな」

「……？ それだけで何故死神だと？」

「斬魄刀を持ってた。紅くて……炎みてえに波打ってる、変な形の斬魄刀だったぜ」

それにあの霊圧。身体を押し潰すような霊圧の強さは。

(隊長格連中とほぼ互角か……)

「……詳しい話は後にしよう。
今はこちらも余裕が無い」

「ああ、恋次は任せた。行ってくる」

「一護」

再度窓枠に手を掛けたところで今度はルキアに呼び止められた。

「戦闘は終わっているようだが気をつける。
今回の闘い……一筋縄ではいきそうにない」

「……ああ」

ルキア達と対峙していたあの三人。遠目からでも周りを囲んでる奴らよりヤバいのがわかった。

あの尋常じゃねえ霊圧と……結界の中を漂っていた殺気と同じ気配。最初に牽制の一撃を打ち込んで動きを止めたが、そうしないと何を遣らかすか解らない威圧感があった。

(……くそっ……)

暫くは空座町には帰れそうにない。

そんな事を考えた時、自然と心の中で悪態をついちゃった。

SIDE Eーなのは

「フェイトちゃんもヴィータちゃんも……大丈夫？」

アースラの医務室。ヴィータちゃん達が開けた結界の穴を通って外に出た後、アースラからの転送によって帰還。フェイトちゃんの怪我の治療の為に直ぐに医務室に入った。

「これぐらいなら大丈夫だよ、なのは。治療魔法も受けたし、2、3日もあれば治るよ」

「あたしはもう大丈夫だ、って言ってんだろ」

フェイトちゃんは担当の医師の治療魔法に包帯を巻いて。ヴィータちゃんは戻ってきて早々にベットに放り込まれた。

「無理し過ぎだよ、ヴィータちゃんは」

「うつせーな、危ねえとこだったんだからいいだろ」

なんでも担当医の人が目を離れた一瞬の隙に抜け出してクロノ君と海鳴市に降りてきたらしい。

「駄々々目、それとこれとは　？」

その時、軽い音と共に、医務室のドアが開く音がした。その音に三人して振り返ると　。

「みんな、大丈夫だった？」

エイミイさんが入ってきた。

「あ、エイミイさん」

「エイミイ？　ブリッジの方はいいの？」

そういえばまだクロノ君と武装隊の人達が戦闘中の筈だけど……？

「戦闘なら少し前に終わったよ。結界が解除されてクロノ君達も帰ってきたから様子を見にちよつとね」

そっか……戦闘は終わったんだ。
なら……。

「あの結界内で闘ってた人達は……？」

「駄目……。【ティアマト】のメンバーも所属不明の人達も、全員に逃げられた、ってさ」

そう言うってからエイミーさんが首を横に振った。

「それに……武装隊にも被害が出て……二人が殺された、ってクロノ君が……」

エイミーさんの報告に全員が顔を伏せてしまう。
個人の戦力が高い組織。そうは聞いていたけれど、こんなに……簡単に……。

「明日の……朝一に緊急の会議をやる、ってクロノ君が言ってたよ！
なのはちゃんと、出来ればフェイトちゃんも出てほしい、って言うってたし、今日はもう休んじゃったほうがいいよ！
後の事は私

とクロノ君でやっつくから」

重くなった空気を和らげる為か、エイミーさんが殊更元気に明日の予定を教えてくれた。

「そう……ですね。分かりました」

今日の闘いは終わったかもしれないけど事件自体はまだ終わっていない。

なのにまだ生きている私達がこんな所で落ち込んでる場合じゃない。少しでも早く、一刻も早い事件の解決を。

犠牲になってしまった人達もきつと、そう望んでいる筈だ。

「よしっ！ それじゃ私はブリッジに戻るね」

そう言って、エイミーさんは医務室のドアを開けて

「みんな、お休み」

ブリッジに戻っていった。

「じゃあ、私も部屋に戻るね。フェイトちゃんと、と・く・に、ヴ

「イーちゃんもゆっくり休んでね」

「あはは……。お休み、なのは」

「だ〜〜か〜〜ら〜〜！ 大丈夫だ、って言ってんだろ」

二人に挨拶してから私も医務室を出ることにした。

（必ず……。あの人達を止めてみせる……）

そう……。心に誓ってから……。

S I D E I O U T

海鳴市の周りを囲う森林地帯。その森の中にある小さな廃ビル。隣町とを結ぶ国道からも離れた場所にある廃屋の一室の窓から明かり

が漏れていた。

「ッ……………」

「……………」

その一室。崩れた廃材に二人の人影が腰掛けていた。

ニーニヤとストレンド

「ゴメンね、ストレンド……………」

「……………」

両手に白銀色の光を燈してストレンドの“左腕”に翳していたニーニヤがぼつりと呟き、その謝罪の意味が解らなかつたストレンドが首を傾げた。

「ソニアが居ればこんな怪我……………直ぐに治してくれたのに……………。私……………こういうの苦手だから……………」

そこまで言うてからニーニヤが顔を伏せる。

ストレンドは桔梗との闘いで全身に重度の火傷を負い、左腕も肘が

ら無くなるというダメージを受けた。

尤も、火傷自体はストレンドの常識はずれの再生能力により僅か一日で治癒し、無くした筈の左腕すら再生させていた。

だが、そのストレンドでも無くなった部位の再生には時間が掛かり、再生出来てもそれは見た目だけ、動かすことなど出来ない、という状態だった。

故に、ニーニヤから治療魔法を受けていたのだが、それでも完全な再生には時間が掛かっていた。

「ごめんね……ストレン」

尚も謝罪を続けようとニーニヤの頭にストレンドが動く右手を置き、撫でた。

「……………」

ストレンドの表情は変わらずの無表情。それでもニーニヤは少しだけ目を細めてストレンドの行為を受け入れた。

「……………うん、ありがとう……ストレンド……………。
それじゃ続きを」

「やれやれ……こんな所に居ましたか」

「!？」

「ッ
!？」

ストレンドの治療を再開しようとした瞬間、室内に響いた声に二人が勢いよく振り返る。

「まったく……【巫女】が魔法を使っていなかったら、更に見つけるのが遅れるところでしたよ」

二人の視線の先、黒髪に黒衣という、黒一色の男女、メイズ、ソニアの二人が立っていた。

「ソニア……メ、メイズ
!？」

咄嗟に二人の名前を読んだニーニャはメイズが左手に掴んでいるのを見て悲鳴を上げそうになった。

「メ……メリ……ア……」

だらり、と。四肢を力無く投げ出したメリアがメイズに襟首を掴ま

れていた。

「ん？ ああ……【盾】なら死んでいませんよ。管理局の人形共に
返り討ちに遭ったみたいで……倒れていたのを拾ってきたんですよ」

そこまで言うてからメイズは掴んでいたメリアの服の襟首を離れた。
小柄とはいえ、それでも一人が床に投げ出され、重い音を起てる
が、メイズは気にしたそぶりも見せずニーニヤに近付いていった。

「あ……あ……」

「おや？ どうしたんです？ そんなに怯えて……？」

一歩一歩ニーニヤに歩み寄るメイズは笑顔ではあつた。だがニーニ
ヤはメイズが近づく毎に身体の震えを大きくしていた。

「ああ……無断で動いたことを気にしているのですか？ まったく
……」

そしてニーニヤの目の前にはメイズが立ち。

「気にするぐらいなら……こんな事をするんじゃないっ！ この小

娘っ!!」

ニーニヤの身体を蹴り上げた。

「ガッ……!!?」

その一撃にニーニヤは抵抗も出来ず吹き飛ばされた。

「ッ
」!

「なんです……? 満足に子守も出来ない兵士ごときが、僕に盾突く気ですか?」

その行動にストレンドが右腕を振り上げ、メイズが魔力を上昇させていく。

「まっ……て……」

そしてストレンドがメイズ目掛けて飛び出そうとした瞬間、ニーニヤが苦しげに胸を押さえながらもストレンドを呼び止めた。

「おね……がい……。ソニア……。
ストレンドの……左腕……治して……」

「勝手に動き回ったあげく姉さんにまで

」

「やめなさい、メイズ」

ニーニヤの懇願にメイズが怒鳴り声を上げようとするが、その直前にソニアが肩に手を置くことで制止する。

「姉さん……！」

「あなたは空間転移の用意を。“スファイア”も壊されてしまったよ
うだし、メリアは一旦【錬鉄】のところに戻したほうが良いわ。
それに魂の調停者達も居るなかで内輪揉めしている場合じゃないで
しょう。」

こっちへいらっしやい、ニーニヤ」

「……分かったよ……！」

ソニアの言葉にメイズは苛立ちを隠そうとせず大股で部屋を立ち去り、ソニアはストレンドの傍で膝をつき、力無く垂れ下がる左腕を持ち上げた。

「……随分手酷くやられたようね……。あなた程の兵士が管理局の魔導士や騎士ごときに遅れを取るとは思えないけれど……。誰に？」

「“王”と……。同じ魔法を使う人……。

紅い炎の剣を持った……。片目を閉じた人……。とても……。強かった……」

「……そう……」

ストレンドの左腕の触診を続けながらもソニアは、ニーニヤの返答に思考を巡らせていた。

（メイズが言っていた相手と特徴が一致する。

それにニーニヤが言う“王”と同じ魔法。

やはり……。この世界が……）

「……始まりにして……。私達が目指す終焉……」

一言呟いてからソニアは部屋の窓を見遣る。

ソニアの視線の先にはただ、月が爛々と輝き空と、地上を淡く、照らしていた。

第二十八話

「桔梗ちゃん、こつち来てからなんかあった？」

朝食の席。四人で早苗殿の料理を口にしていた時、香久弥殿がそんな事を聞いてきた。

「……………特に何もなかったですが……………どうしました、いきなり？」

昨日の深夜の帰還はバレてないと思ったが……………。

「う〜ん？ な〜んか考え込んでるというか……………ただでさえ友達作りづらい雰囲気を持つ困ったちゃんなのにそれが更に強くなってるというか……………」

「ははは……………義姉上……………また道端でコケましたか？ 骨は頑丈でも中・身・だ・け！ 脆そうなんですから気をつけないとまたコケますよっ。」

「……………？」

「……………？」

.....。

「ヴヴッ、ヴヴンッ！」

「ま、まあ、冗談は置いて……」

陣谷殿の咳ばらいで睨み合いを中断する。
とはいえ……。

「そう言っても心当たりが無いのも事実ですが……」

本当の事が言える筈もなし。結局はぐらかす事になる。

「ふ〜ん……」

あの目は信じていないな……仕方ない……。

「明日は学校も休みなので街を出歩く予定だったので……一緒に
にごつですか？」

先延ばしにしてうやむやにしておまおう。

「おっ！ ホントに!?!」

「午後は用事がありますが、それまででしたら……」

「OK! OK! 行っちゃおう、行っちゃおう! あっ! おばあちゃん、明日のお弁当よろしく!」

テンションアップ、動きもスピードアップ。
さっきまでの会話も忘れ立ち上がり、小躍りしながら居間を出ようとして……。

「へぶっ!」

コケた。

(ついに自分の家の中ですら……)

ついでに香久弥殿の首から何かが膝下まで飛んできたのを拾ってから立ち上がる。

それは白色とも銀色ともいえる十字架のペンダントだった。ただ付けられた装飾品のせいかわかの鍵のように見えなくもない。

「ほら、落としましたよ。大事な物なんでしょう?」

香久弥殿を助け起こしながらペンダントを差し出す。
なんでも亡くなったご両親の形見らしいが……。

「あうう、ゴメンゴメン……。」

あうう、チェーンが切れちゃってる。スペアと換えなきゃ……」

チェーンの切れたペンダントを見て落ち込むのを見ると、いつも肌身離さず持っていることを知っている私としてはなんとなく悪いことをした気になってしまう。

別に転倒させるつもりで言った提案ではないのだが……。

「あつ! 桔梗ちゃん、明日は9時からね!」

つと……思ってたら心機一転、さっきの落ち込み様が嘘のように歩き去ってしまふ。

(……やれやれ……)

思わず溜め息が出そうになるのを自覚してギリギリ阻止する。
私も学校があるからあまり時間は掛けられない。

(…………しかし…………)

あのペンダント…………いつ見ても妙な違和感があるのは気のせいだろうか？

別段何かの霊圧を感じるわけでもない…………。
だが…………。

(懐かしい…………?)

強いて言うならそれが一番近い。ずっと昔に見て、聞いて、触って…………。なのにそれを忘れていて…………。
そんな感触。

(解らん…………)

今考え込んで仕方がないことなのかもしれない。
そっ心に言い聞かせてから改めて食卓についた。

「済まないな、フェイト、なのは。
本当ならもう少し休ませたかったんだが……」

「これぐらいなら大丈夫だよ。クロノ君やエイミーさんも頑張ってるのに私だけ休んでられないよ」

「明日には怪我も治るらしいから心配しないで、クロノ」

昨夜の戦闘から一夜明けたアースラの会議室。
そこにはアースラの主だった人員が集まっていた。

「そうか……それなら……全員集まったみたいだから始めよう。
エイミー」

「はいはい。いやー、今回はクロノ君が会議の用意殆どやっちゃってね。私、出番無かったな」

クロノに呼び掛けられたエイミーが目の前のパネルを弄ると同時に

机の中央に四つの空中モニターが表示される。

「この三人が今回確認された【ティアマト】のメンバーだ。内、身許が分かっているのは彼女、メリア・シュトーゼだけ。残りの二人は詳細不明。このデカイ奴にしても何処かの次元世界の魔法生物なのか……それも不明だ」

メリア・シュトーゼ。その名前が出た瞬間、なのはが顔を伏せたのをフェイトが見遣った。

「メリア・シュトーゼは自分の周りに膜状の強固な魔力防壁とAMFを同時に展開する二個の球体を使用し、更には本人も高速戦闘を得手としていることからミッド式の魔法を使う者には天敵と言える存在だ。

また、残りの二名もミッド式とは違う未知の術式で構成された魔法を使用していると思われる。

部隊単位での交戦を前提にし、単独での交戦は絶対に避けること。

続けて

「

そこまで喋り終えてからまた、映像が切り替わる。

それぞれの映像には、赤い髪を逆立て、蛇の骨のような、巨大な鞭を持った男。

小柄な体つきに白い刀を持った少女。

そしてオレンジの髪に黒いコート。手に漆黒の長刀を持ち、振るう青年の姿が映っていた。

「【ティアマト】と交戦していたと思われる三人だ。赤髪の男と「んっ?」白いデバイスらしき物を「んんっ?」持った少女に関して詳しい情報は無い。「あれっ?」このオレンジの髪の「いいっ?」……エイミィ……?」

説明を続けようとしたクロノだが、エイミィがパネルを操作する度に三人の映像にノイズが走ったり、消えてはまた映ったりを繰り返す内に我慢の限界に達し、エイミィの方を振り返った。

「えっ? いやっ? えっと……あのさ……クロノ君……?」

だが、叱責の視線を受けてもエイミィは困惑の表情で見返すだけ。それどころか他のクルーの一部も戸惑った表情で周りの者を見遣っていた。そして。

「その人達……どこに映ってるの?」

困惑の表情を浮かべる者達を代表するようにエイミィが疑問を口にした。

「なに……?」

その疑問に困惑したのは、今度はなのはやフェイト、クロノを始めとする戦闘部隊の面々だった。

「えっ？ 映ってますよ、ちゃんと」

「いや……誰も映ってないんだって、なのはちゃん。魔力反応はあるのに記録してた計器も故障してるのか妙な魔力値出るし……」

「……？ エイミー、その数値を表示してくれ」

クロノの言葉にエイミーがパネルを操作し、映像に三人の魔力値が表示され。

「なんですか……これ……？」

その数値になのはが怪訝な声を上げた。
表示された数値は出鱈目に動き続けていた。

(Dランク……？ Sランク……？ 魔力値が安定してない……？)

「でも……レイジングハートはAAAランクかそれ以上だっ
て……」

「うん……バルディッシュやクロノ君のS2Uもほぼ同じ数値……
なのはちゃんと違ってより近くで捕捉してるからレイジングハート
よりは正確な記録が出来た筈なんだけど……」。

まさか三機ともが探知系の機能だけが揃って故障、つても無いだ
ろうし……」

そこまで言ってからエイミーが首を傾げる。

「……クロノ……?」

騒然とした空気が会議室を流れる中、クロノが一人黙考するように
顔を伏せているのにフェイトが気付いた。

「……ん? いや…なんでも無い。
エイミー、この件は後にしよう。心当たりがあるからそっちに調査
を頼む。」

【ティアマト】に対してはフェイトの傷の完治を待つてから今まで
通り、拠点の搜索を優先。さっきも言ったが単独での行動は絶対に
避けること。

この黒服の三人は発見、遭遇しても許可があるまでは不用意な接触
は厳禁!

以上だ……！」

その場に居る者の大半から上がる疑問の声を無視して、クロノは会議を強引に締め括った。

S I D E I 京楽

「隊長！ 隊長！！ またそんなところに居たんですか！」

聞き慣れた声の下から聞こえると共に梯子が掛けられ、登ってくる音が聞こえる。

見つかったか……。隊舎の屋根で飲んだのは何回かあるし当然か。

なんて考えてる間にも七緒ちゃんが梯子を登り切っていた。

「……よっと……。まったく……。またサボってお酒飲んで……。隊長の処理待ちの書類、溜まってますから直ぐ隊舎に戻ってください……っと、それから……。浮竹隊長が捜しておられましたよ」

「浮竹が……？」

上半身を起こしたところで動きを止める。

「はい、何か……急いでいる様子」

「おーい！ 伊勢副隊長！ そこか!？」

「あつ……！ はい！ こちらです！ 浮竹隊長！」

噂をすれば影、相当急いでるのが梯子を登る音も早い。

「……よしっ、と……済まないな、伊勢副隊長、わざわざ……」

「いいえ、元々は隊舎に居ない隊長が悪いんですから」

そこまで七緒ちゃんが言ってから二人の視線が集中する。

「んで……？ どうしたの、浮竹？ わざわざ捜して……」

「現世の海鳴市に先行して調査を行っていた朽木から報告が来た。昨夜にもまた張られた結界の発動に居合わせ、結界を展開していたと思われる者と遭遇、交戦状態になったそうだ」

慌ただしいねえ、三日立て続けとは……。それはともかく。

「戦闘の最中に」

「ちょっと待った、浮竹。その話は先ず山じいに話すのが先じゃない？」

実際僕に話してもしょうがないことだ。浮竹もそれが解ってるだろうに……。それでも僕を捜してたっことは……。

「用事はその報告の事じゃないんだろう？ 一体」

「紅い……紅い炎のような斬魄刀……」

不意に浮竹から出た言葉に開いていた口を閉じる。

こつちが本題か……。

「左目に刀傷を負った隻眼の少女……元柳斎先生への名指しの伝言……」

「……七緒ちゃん、悪いけど……ちょっとだけ席外してくれないかな？」

浮竹から語られる単語……どうやら僕が考えてた以上に面倒臭い事件のようだし……。

「……分かりました。た・だ・し！ ちゃんと書類は片付けに戻ってきてくださいね！」

そこまで言って七緒ちゃんが梯子を使って屋根を降りていく。やれやれ……釘を刺されたか……仕方ないね。

「それで……結界の調査の報告の筈なのに、なんでそんな単語が……？」

僕の覚えている限り、その三つから連想できるのは“彼女”しか居ない。

けど……“彼女”は百年以上も前に……。

(……………死んでる筈……………なんだけどねえ……………)

そこまで考えてから溜め息を一つ。

これは……………思った以上に厄介事っぽいなあ。

S I D E I O U T

第二十九話

「ふい〜、美味しかった」

「味の意見自体には賛成ですが、その息のつき方はどうかと思いますよ？」

海の近くにあつた公園のベンチで香久弥殿と二人、昼食を食べ終え、弁当箱に蓋をする。

「街の本屋に、海に、図書館に……一応主だった場所は回ったのかな？」

「欲しい物も買えましたし、後は用事さえ終らせれば私の今日の一日は終了ですかね……」

そこまで言ってから鞆を手に取り立ち上がる。

「義姉上は？ この後どうされるつもりですか？」

「私はもう少し海を見てくるよ」

「そうですね……それじゃ私は用事の方を片付けてきます。
もしかしたら、帰りが遅くなることも伝えておいてください」

「ん、分かった」

香久弥殿が頷くのを確認してから公園の出入り口を目差して歩きだす。

「あっ！ 桔梗ちゃん！」

途中、香久弥殿の呼び掛ける声に後ろを振り返る。

「気をつけてね！」

「……はい！」

そう言って手を振る香久弥殿に手を振り返してから今度こそ、歩きます。

(やれやれ……こっちの不安を見抜かれたか……?)

公園を出て、街の歩道を歩き、人目に忍べる場所を探しながら先の遣り取りと今後について考える。

これから行くのは死地だ。

メイズと、護廷十三隊の隊長格と互角に戦う戦力が最低でも一人、下手をすればストレンドとあの子供も合流している可能性がある。それに対する策は、策とさえ呼べない不確かな賭。不安になるな、つという方が難しい。

だがこちらから仕掛けなければ、いずれ数の前に押し切られる。

（依然好転する事なき戦況……こちらにも戦力と呼べる者が居ればこんな賭をしなくても済むんだが　此処でいいか）

歩いている途中、ビルとビルの間には挟まれた細い路地裏を見つけ、そこに入る。

「さて……海鳴市は広い……うまくいくと良いが……」

路地裏の更に奥……大型車一台分程のスペースを発見、鞆を地面に置いてからジツパーを開け、中から先程街の本屋で買った海鳴市とその周辺の地図、そしてくしゃくしゃに丸め輪ゴムで開かないようにしたハンカチ、これから使う鬼道に必要な墨を取り出す。

「【ティアマト】の方は“目印”があるからまだ何とかかなるとして

……問題は死神の方が……」

墨を親指に付け、霊圧を少しづつ上昇させながら地面に陣を描く。

「最悪一人で乗り込む羽目になるか……どちらにせよ先ずはこちらから……」

最後にハンカチのゴムを外して軽く振り、小さく砕けた黒い石を描いた陣の隣に転がす。

一昨日の夜……一度は死んだ筈のメイズが復活した後ポケットから放り捨てた黒い石。

詳細不明の術式の要らしいがこれだけでは詳しい事は解らなかった。ただ、使い捨てであるだろうこの石には、二日経ってもまだメイズの霊圧が残っていた。

「南の心臓、北の瞳、西の指先、東の踵！」

石に残った霊圧を目印に、両腕を陣の両脇に添え鬼道の詠唱に入る。

「風持ちて集い、雨払いて散れ！ 縛道の五十八『摺趾追雀』！」

詠唱を完成させ鬼道を発動。地面に描いた陣に様々な数字が流れていくのを読み取っていく。

「……………捕捉……………！」

見付けた霊圧の方角と距離を見失わない内に地図を手に取り今の位置を確認、どンドンページを捲り、メイズの霊圧を捕捉した位置に当て嵌めていく。

「……………海鳴市と……………隣町の間……………森林地帯の中か……………」

街を探しても見付からない筈だ。結界を張っているわけでもなく、街の中に居なかったのだから。

「さて……………次は……………死神の方か」

S I D E I 一 護

「ルキア、昼飯買って来たぞ」

「……助かる」

ホテルの近くにあったコンビニで買って来た弁当を机の置いてから、椅子を引っ張りだしベットで寝てる恋次と、その横に座っているルキアの隣に座る。

「それで？ 恋次は大丈夫なのか？」

「ああ……このまま安静にしていれば問題無いだろう。ただ、本格的な治療は受けた方が良さだろうから、四番隊の者が来るまで戦線復帰は難しいだろうな」

調査じゃなく戦線復帰……か……。

「って、言うことはまた戦いは起きる、ってことか……」

「そう……考えて動いた方が良い。奴らの目的は時空管理局という組織への復讐だと言っていた。その為の手段がこの現世にある、ともな……」

時空管理局……フェイトとか名乗ったあいつを見る限りだと、あまり恨みを買ったような奴にも見えなかったけどな。

「時空管理局、って組織の事も何も分かってねえのか？」

「うむ……過去に何度かそれらしき異邦人が発見されてはいるが本格的な接触は我々が初めてだろうな……一護」

不意に恋次の様子を見ていたルキアが俺の方に向き直ってくる。

「今日予定していた見回りだが……不足の事態も想定して最初から死神化してから行った方がいい。」

時空管理局の方はまだ分からぬが、【ティアマト】の方は組織で動いている上に個人の戦力も高そうだ。あの女一人でさえ苦戦を強いられた……あれより上がいるとしたら、下手をすれば十刃級の力を

発揮する者もいるかもしれん」

まだ闘ったわけじゃねえけどルキアがここまで言っんなら……。

「そっするか……よつと……」

ズボンのポケットから代行証を取り出して額に当てて死神化する。

「それじゃルキア、こっちは任せませ」

「ああ……気をつけるよ」

ルキアの言葉に頷いてから窓から街の道路に飛び降りる。
最初から死神になってるならこっちの方が早い。

「さあてと……どっから回る !?」

巡回のルートを考えてながら一步を踏み出した瞬間、感じた霊圧に足を止める。

(この霊圧……! あいつか!)

感じた霊圧は一瞬だったが、間違いねえ。一昨日の夜に会ったあの死神。

(……………いた！)

遠くに見えたあの横顔……………左目の刀傷……………人の列に紛れてるが確かに見えた……………が、ちゃんと確認しようとした時、相手がこっちに背を向けて走り出した。

「……………！ 逃がすか！」

どンドン遠ざかっていく霊圧を追う為に跳躍、人の上を飛び越えていく。

(けど……………あいつ、こんなところでなにしてやがんだ？)

S I D E I O U T

第三十話（前書き）

今回は話の区切りと、仕事の事情でいつもより短いです。
次の更新も、もしかしたら遅くなるかもしれないことを先に謝っておきます。

ほんと、ゴメンナサイ！

とりあえず本編をどうぞ。

第三十話

SIDEERなのは

『マスター。サーチャーに反応。街を高速で移動する魔力を二つ捕
捉しました』

「えっ!？」

土曜日のお昼。【ティアマト】の拠点搜索と街の警戒の為にサーチャーと飛ばしていた矢先の出来事だった。

『街の中央を横断する形で、森林地帯に向かっていきます』

森林地帯……隣町を結ぶ道路があるところか……。

「レイジングハート、サーチャーのモニターを出して!」

『はい』

移動している相手を確認する為にサーチャーが捉えている映像を空

中にだし。

「
」

思考が一瞬止まったのを自分でも自覚できた。

一人はオレンジ色の髪と、背中に身の丈程の刀剣を背負った高校生くらいの人。

あんな目立つ格好で人混みの中を走っているのに誰一人見向きもしないところを見ると、やっぱり一般の人には見えてない。

(なんで……?)

問題はその隣のモニター。そこに映っていたのは。

(なんで桔梗ちゃんが……!?)

長い黒髪を後ろで纏めたポニーテール。左目の古傷。右手に竹刀袋の紐を持ち、人の間を縫うように疾走していく。そのスピードはどつ見ても尋常ではなく、魔力も使って身体能力を強化しているのははっきりしていた。

そして今の桔梗ちゃんを見た瞬間、あの夜見た人影とピッタリ当て嵌まった。

(……追われ……てる……!?)

街の外目指して走る桔梗ちゃんを追うようにオレンジ髪の人が混みを飛び越えていく。

(何が……何が起きてるのか分からないけど……助けなくちゃ!)

SIDE I O U T

「……!?!」

「ニーニヤ……?」

海鳴市の近くに存在する森。誰かの別荘だったのかもしいない……だが、今は廃屋と化した建物の一室。ストレンドの治療を静かに見守っていたニーニヤは不意に顔を上げ、彼方を見遣った。

「魔力反応……それに……“鍵”の気配……あの人だ……！」

「！」

ニーニヤの言葉に治療の途中であるにも関わらずストレンジが立ち上がりニーニヤの傍に移動する。

（メイズ！）

（姉さん？）

そしてソニアもまた外に居たメイズに念話で呼び掛けていた。

（彼女が来たわ。一昨日の夜あなたが戦った彼女が……）

（ハッ！ 彼女の方から来るとは……良いさ……！ リベンジといこうじゃないか……！）

（トラップの設置は？）

(ああ、問題なく……周囲二kmは攻性トラップの網……建物を術式の基点にして設置しているから容易に接近は)

「ッ……！？ 何……この……魔力……！？ あの人……何を……！？」

その時、森の様子を探っていたニーニヤの声にソニアが振り向く。

「ニーニヤ……！？」

「……！ ストレンドッ！ あの人が炎を ……」

「……姉さん……！」

ニーニヤが己の従者に振り返り、外からメイズの叫び声が聞こえた瞬間、一瞬の風切り音と共に部屋が爆炎に包まれた。

「あれか……」

森林地帯の入り口。鬱蒼と並び立つ巨木より僅かに高い位置に霊子の足場を構成して立ち目標を観察する。

（見た目は普通の建物だが……複数の霊圧を感じる。
それに建物の周りにも奇妙な霊圧が取り巻いているな……）

生物の魄動も無いことから恐らくは何かしらの罠が設置されているのだろう。拠点とするからにはそれなりの備えがあると思っただが……。

（かなり広いな……随分な念の入れようだ）

建物を中心に広範囲に渡って奇妙な霊圧の流れがある。

（……出て来ないな……）

まだ私の接近に気付いていないか、あの建物で迎え撃つ気が……。

「まあ……どちらにしても好都合だ……皇呀」

左手に持った鞘から斬魄刀を抜き、始解。同時に背後に巨大な炎の“塊”を生み出す。

「待ち伏せというのも戦術的には正しいぞ。ただ……」

そして炎の形を変える。巨大な焚火は幾つもの小さな火球へ。

「皇呀は炎と戦争の斬魄刀……人同士の闘いに下手な“一般論”を持ちだしたら」

火球は円筒状の形へと変える。背後に展開している為に見えないが、円筒の中は発生したプラズマが光っているだろう。

「死ぬぞ……？」

最後に円筒状の炎の中に“砲弾”を装填。射角を調整する。

「開戦の狼煙を上げろ、皇呀……！ 雷朱咆紅……撃てええええええっ！」

号令を下すと同時、背後からの爆音と共に、ボーリングの球程の大きさの火球が放物線を描いて飛んでいった。

SIDEー一護

「くそっ！ 見失った！」

街を出て道沿いに走ること数分。近くにあった森の入り口までたどり着いた。
が……。

「どこ行った、あいつ……？」

視界にも、霊圧知覚からも反応が無い。
いや……かなり距離があるが……。

「この霊圧……あの二人か……」

恋次とルキアが戦ってた二人組。それに加えてまだ何人分かの霊圧がある。

「畏……か？ けど……それにしちゃ……」

様子がおかしい。待ち伏せしてるにしては、まるで攻撃を受けてるみてえな感じだ。

「ここまで来ちまった以上は行くしかねえか」

とにかく今は前に進む。そう決めてから煙が噴き上げる場所目指していくことにした。

S I D E I O U T

第三十一話（前書き）

前の更新からの数日間、仕事の休憩中の合間の30分ぐらいを使って一気に書きました。指が痛い……。

現在忙しいのか暇なのか自分でも分からない状態が続いており、感想やメッセージが来ても返信すらまともに出来ない状態だったのは申し訳なかつです。

現在PV数が十万を超えた記念にやろうと思ってることがあります。まだ考えてるだけで細かい設定が出来ていないので下手するとそのまま企画倒れになる可能性があります。それでもよければ後書きをご覧ください。

それじゃ本編をどうぞ。

第三十一話

「姉さん！」

突然の砲撃に瓦礫の山と化した家屋。その傍でメイズが瓦礫を押し
のけながら呼び掛けつつづけていた。

「姉さ
」

「こつちよ、メイズ」

メイズの叫びに声が返る。

直後、メイズの背後にあった瓦礫の山が崩れ、下から全身を鎧に包
んだ巨人と、ソニアが立ち上がり、そこから離れた場所でも背中で
瓦礫を持ち上げる傷だらけのストレンジとニーニャが立ち上がった。

「ストレンジ……！」

自身を庇って降り注ぐ瓦礫を背中に受けたストレンジにニーニャが
駆け寄るが、目の前で傷が癒えていくストレンジを見て安堵の溜め
息をつく。

「しかし……あの砲撃……一体どこから？ トランプにはなんの反応も無かったというのに……」

「……森の入り口……そこからは少しも動いて無かった……」

「……森の入り口……？ 馬鹿な……！ 三キロ以上ある！ そんな距離から」

「メイズ……落ち着きなさい」

「ッ……！」

ニーニヤの答えに激昂しかけたメイズは、ソニアの言葉でかろうじて自身を抑え思考を巡らせる。

（トランプは……駄目か……さっきの砲撃で基点を根こそぎ破壊された……）

ならば……こちらから迎え撃つしかないか……（

「【巫女】よ……今の彼女の位置は？」

「……入り口から……真っ直ぐ……こっちに……？ こ……これ

……？」

「……？ どうしました？」

「違う……！ この魔力はあの人じゃない……！ 似てるけど……
別の人だ……！」

「なに……！？」

気が付けば別人と入れ替わっていた。その事実によりニヤが驚愕の
声を上げる。

「それと……別の方向……空から……一つ……二つ……？ 魔力反
応……管理局の……」

「ッ……！ あの女……！ どれだけ災厄を連れてくる……！」

更にニヤが別の勢力の来訪を告げたことでメイズは自分達の危
機的狀況を改めて認識する。

（管理局は驚異ではない。ただ、数に任せて包囲されている間にあ
の女と調停者共に挟撃されたらマズイ……！ ここは
）

「ここは離脱しましょう、メイズ。一旦引いて拠点を変えるしかないわ」

「それしかないか……！ 他のメンバーの合流まで隠れるしかない……！」

メイズとソニアが同様の結論に達し、ポケットから巻き貝のペンダントを取り出す。

「あの女は僕が引き受けましょうか。その間に【巫女】を」

メイズがそこまで言ったところで、それまで微動だにしなかったストレンドが立ち上がり、歩き出した。

「一体何をっ」

「……ストレンド……行くの……？」

その行動の意味が分からず問い質そうとしたメイズの言葉を遮って、ニーニヤが声を掛ける。

「……………」

「気を…………つけて…………」

足を止め、僅かに振り返るストレンドにニーニヤは一言だけ呟き、ストレンドは何も反応を返すことなく森に入っていく。

「あの人は…………ストレンドが倒す…………」

「……………いいでしょう…………。どのみち残りの敵は僕が引き受けます。僕の使う魔術は防御には向いていないので。」

姉さんは「

「私はニーニヤの護衛を。後は…………森の中に兵を放っておくわ。管理局への足止めにはなるでしょう」

「兵…………？ けど、姉さん、エアリアは「

「問題無いわ。この世界に来るまでに何人かを殺したから」

そこまで言うてからソニアは右手を掲げ、六芒星の魔法陣を展開し

た。

SIDEーなのは

「レイジングハート？」

「魔力反応は森の中心部に向かって移動しています。
更に複数の魔力反応を感知。【ティアマト】のメンバーの者と思われ
れます」

桔梗ちゃんとオレンジの髪の人を追って辿り着いた森。
そこでは既に煙が噴き上がり戦闘中であることを思わせていた。

「桔梗ちゃんの……もう一つ魔力反応は？」

「……反応を捕捉できません。何らかの結界を使用していると思われ
れます」

とにかく……早く桔梗ちゃんに追い付かないと。

「なのはっ!」

森の中心部目指して飛ぼうとした瞬間に掛けられた声に後ろを振り返る。

「フェイトちゃん……!」

「なのは……急いでいたのは分かるけど、単独での行動は避けた方がよいよ」

「うっ……ゴメン……」

「大まかな事情はレイジングハートから聞いたから仕方ないけど……気を付けてね」

やっぱり怒ってる。

あの一度連絡してからすぐ飛んで来ちゃったし……。ただ、それでもしないと、地上と空中というハンデがあるにもかかわらず、あっさりと振り切られてしまいそうだった。

それ程までにあの二人のスピードは速かった。

「ここに……桔梗が……？」

「うん……ただ、結界を張ってるみたいで反応が消えてるんだ。それに」

「……【ティアマト】……ここに居たんだ……」

フェイトちゃんと二人、今だに煙を噴き上げる森の中心部を見遣る。

「アースラの方にはもう連絡してある。私達は」

「クロノ君達が来るまであの人達を抑える……！」

行動方針を決めてから飛翔魔法で加速しようとした時。

「これ……！」

「【ティアマト】の使ってる……結界……！」

魔力の波動が身体を抜けといくと同時に、世界の色が暗い緑色に変化する。

今、この結界を展開する、っということは……。

「あの人も正面から来る……！」

「なのは！ 結界の周辺はクロノ達が何とかしてくれる！」

「うん……！ まずは桔梗ちゃんを保護しないと」

『マスター、結界内で複数の救難信号を確認しました。管理局で使用されているコードと一致します』

「え……？」

レイジングハートの言葉に一瞬聞き違いかと思った。

私達以外に今この森に居る局員は居ない筈だ。

なのに……何故……？

S I D E I O U T

S I D E E 一 護

「ッ……！ またあの結界か……」

森の中心目指して走っていた時、唐突に世界の色が変わった。ただ、これで終わるなら前と同じ。

「……！」

不意に感じた霊圧に背中から斬月を抜き、構える。それと同時に、目の前の地面が大きく“波打つ”。そして。

（……何だ……！？）

波から這い出すように出て来たのは人間だった。籠手や肩当てが施されたローブに杖を持ってる奴。どっかの漫画にでも出るような鎧

を着込み、妙な装飾なんかがある剣を持った奴。
外見も、装備もバラバラ。ただ一つ、統一されているところがある
とすれば。

「こいつら……！ 全員……！」

乾ききった血を体中にこびりつけた子供。頭の右半分が削ぎ落とされて
いる男。肩から腹まで裂かれている女。他に立つ奴らも似たり
寄ったりの傷を負い、全員が血の気の失せた肌の色をしていた。

「死んでる……のか……！？」

最前列に居た奴が杖を掲げる。同時に足元に、フェイトが使ってた
陣が現れた。

「ちい………！」

その後にしてくるだろう行動に対し真上に跳躍、飛んできた霊圧の
弾丸を躲す。

（ルキアが言ってた死体を操る奴か

！？）

視線を下に遣ろうとした瞬間、追撃で振り下ろされる刃に気付いた。

「くそっ……!?!」

咄嗟に斬月を盾に剣を受ける。キリキリと音を発てる刃の向こう。眼を見開いて俺を凝視する子供の真っ青な顔があった。

「うっ……おおおおっ!」

押し切ろうと力が込められる剣に、それ以上の力で押し返して子供の身体を吹き飛ばしてから地面に降りる。

「復讐だかなんだか知らねえが」

倒れた子供が起き上がる。

同時に周りの奴らも剣を、槍を、杖を構えてくる。

ちくしょう……。

「こんな事して……許されると思ってんのかっ!?!」

SIDE I O U T

「この霊圧……戦闘を始めたか……」

こいつ自身の性格か、何故か始解すると霊圧を抑えることが出来ない皇呀を封印状態の太刀に戻し、森に降りてから数分。霊圧の急上昇と共に爆音が聞こえてきた。

（あつちはいいとして……この結界……戦う為か逃げる為か……）

正直人里離れたこの場所で人避けの結界を張るとは思わなかった。万に一つでも人目につかないように警戒したか、そうでなければ……。

（ここから逃がさないつもりか……もしくは結界に私や死神を閉じ込めて逃げる為の時間か……どっちにせよ急いだ方がいい！？）

多少発見される危険を冒しても空から行くか。

そこまで考えたところで前方から前にも遭遇した霊圧があることに気付いた。

(…………この霊圧…………)

突発的な事態に反応出来るように身体を軽く緊張させながら歩く。そして水が流れる音が聞こえてくると共に鬱蒼と視界を妨げていた木々が少なくなる。

「川…………か…………」

森を抜け、開けた場所に出る。そこには世界の変色の影響を受けた、本来なら綺麗な、透明な水が流れていただろう川があった。

「…………」

その川の流れの中央にそいつは居た。

二mを越える巨体。彫りの深い顔立ちと禿頭。前と違い濃緑色のコートではなく、動き易さを重視したのだろうタンクトップとズボンという軽装。

以前の戦いで無くした筈の左腕と右腕を胸の前で組み、その男ストレンドは私に鋭い視線を向けていた。

（あの子供は……少なくとも近くには居ないか……だとすればやはり足止めか）

左の親指で刀の鍔を押し、柄に右手を添えて左足を引きストレンドに対し右肩を向ける。どの道この男も突破しなくてはならない敵なのだ。

私の臨戦体勢にストレンドも組んでいた腕を解いて拳を構えつつ右肩を前に出した半身の体勢になる。

「……………」

「……………」

そのまま互いに押し黙る。こいつには下手な小細工は通じないだろうし、ストレンドも恐らくはそんな手を好むまい。メイズとは違った、純粋な肉体の強さと精神。それらが故に無駄な小細工を不要としている。

時間間隔などあっさりと消し飛ぶ空白。遠くから爆音がした。

「……………」

「……………」

瞬間、ストレンドの足が動くのが見えたと同時にストレンド目掛けて飛び出し、ストレンドもまた踏み込みで地面を抉りながら向かってくる。
互いに一気に間合いを詰めたが故に、一瞬で互いの間合いに入る。ストレンドが左腕を振り上げ、気合いと共に振り下ろしてくるのが見える。

「はああああああっ！」

その左腕に、抜刀した刀をぶつける。
腕に凄まじい衝撃が走ると同時、轟音が私の聴覚を完全に支配した。

第三十一話（後書き）

ここまで読んで下さった読者の方々。
有り難うございます！

前書きの方で書いた企画の方ですが、PV数が十万超えた記念に本編とは別に番外編（DMCのダンテが出る奴）の続きを書こうかな（これが記念になるかはともかく）、っと思っただのですが、読者の方々からネタ（主にキャラクター）を募ろうかと思ひまして……。

現在設定やらを本編書いてる間に考えてる途中なので本格的に募集したり出来ないですが、面白そうだなと思っってもらえたら幸いです。

それではまた次の更新で。

第三十二話（前書き）

ようやく仕事先の用事から解放されました。

仕事の影響で携帯をまともに触っておらず、感想への返信が遅れたのは申し訳なかつたです。

番外編の方も設定やら大まかな話は出来たので本編がもう少し進んでから出そうと思います。

それでは本編をどうぞ。

第三十二話

見るが……、ニー……、これが管理……の出し……結論……

眠りに堕ちたような、霞む意識の中、その声が鼓膜を叩いた。

……の人は、どう……なの……？

管……局の……らは、……の男……陥品と……なした……。この……な
ら確……に処分さ……る

処分……その単語が聞こえた時、自分は死ぬのだと、漠然と悟った。

わた……が……この……を助……す……

そう……全……は、神の……め……！……その為……ら、お前が……む
事は……る限り……現……よう……！……喜……、……！……お前……神
の……の守護……となる……だ！……誓……を……！……忘れ……な……！……

……誓い……

約束……して……ストレンジ……

お兄ちゃん、約束……忘れないで……！

ただ……その声だけが……頭の中で……再生され続けた……。

「はああああああっ！」

「……！」

気合いを込め、必殺の念と共に放たれた桔梗の刀に、ストレンジは掠れた咆哮を上げながら恐れることなく右の拳を叩き付けて逸らし、更に上半身を捻りながら反撃の左ストレートを返す。

「ッ……！」

まともに当たれば確実に頭蓋骨を砕くその一撃を桔梗は身体を傾け地面に倒れ込むことでやり過ごす。

「破道の三十一『赤火砲』！」

追撃で右腕を振り下ろそうとするストレンドに対し、桔梗は左の手の平を向け、威力を抑えた炎弾を放つ。

「ッ
!?」

炎弾はストレンドの顔面に直撃して爆発、生じた爆煙と衝撃が視界を塞ぎ意識を揺さ振る。

その隙に桔梗がストレンドの右足を思いつ切り蹴りつけ瞬歩を使用、足元から一気に脱出し、僅かな差でストレンドの右腕が振り下ろされ地面を砕き割った。

「君臨者よ！ 血肉の仮面、万象、羽傳き、ヒトの名を冠す者よ！」

後ろに飛びながらも左手で地面をつき、バク転の要領で身を翻した桔梗が鬼道の詠唱に入る。

「焦熱と争乱！ 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！」

それを隙と見たかストレンドが腕を引き、力を溜める。一瞬の空白、そして。

「！」

爆音と聞き違えるような踏み込みで桔梗に突撃した。

「破道の三十一『赤火砲』……！」

それに対し桔梗は手の平に火球を生み出しから左手を強く握り締めストレンドと同じように引く。そして火球はストレンドに向かって飛ばず、桔梗の拳に取り付くように移動した。

「ッ！」

「炎骨……！」

突進の速度を生かした渾身の右ストレートを放つストレンドに桔梗も火球を付随させた正拳突きを放つ。

「ぐっ……！」

「！」

拳と拳、霊圧と魔力の衝突。その衝撃は地面を抉り木々を空に舞い上げるだけに留まらず桔梗とストレンドの身体すら吹き飛ばした。

「……………！ 天涯を焼き討て！ 皇呀！」

「……………！！！」

凄まじい衝撃波に晒されながらも二人は身を翻して着地。余勢で地面を滑りながら斬魄刀を解放し、掲げられた右腕が肩まで巨大化する。

「魔刃……………！！！」

「……………！！！」

二人同時に後ろへの後退が止まる。そして二人が目の前敵目掛けて飛び出したのもまた同時だった。

「炎撃覇!!」

「!!」

一気に目前まで迫った敵に、桔梗は炎のヴェールを纏った皇呀を振るい、ストレンドも巨大化した右腕を桔梗に突き出す。再度の激突。その衝撃は先の一撃の比ではなかった。

「おおおおおおっ!!」

「!!」

気迫と咆哮。互いに攻撃力に傑出したものを持つ二人の激突は異界と化した森を幾度となく揺るがした。

「うおおおおおっ！」

目の前で光る壁を掲げる男に斬月を振り下ろす。

一瞬だけ壁に抵抗されたものの斬月の刃は光る壁を斬り裂き男を一
刀両断にした。

(……………くそっ……………！)

後ろから撃たれる光弾を跳躍して躲し、追い掛けてきた女が突き出
す槍を叩き落とし返す刀で斬月を振るい首を撥ねる。

(……………くそっ……………くそっ……………！)

杖を向けてくる二人に瞬歩を使って素早くその後ろに回り込む。

「おらあっ！」

二人が反応する前に斬月を横一文字に薙ぎ胴を両断する。

(……………くそっ……………くそっ……………くそっ……………！)

横から切り掛かってきた子供の剣に斬月を叩き付けて体勢を崩し斬月を掲げる。

「月牙……天衝！」

霊圧を込めた刀身を振り下ろし、月牙天衝を放つ。放った斬撃は構えられた剣ごと子供を斬り裂いた。

「ハア……ハア……くそっ！！」

周りにいた奴らが全て動かなくなったのを確認してから戦ってる間中溜まりつづけた苛立ちを吐き出す。

生半可な攻撃では止めることが出来ないことは最初の内に分かった。だから完全に破壊するつもりで攻撃した。死んでから大分時間が経つてたのか血は流れなかった。

ただ、硝子玉みたいになつた子供の眼はまだ脳裏に焼き付いて……。いや……。今は考えるな……！

「この霊圧……あの女と……もう一人は誰だ？」

この森に来ることになった切っ掛け……。あの隻眼の女が誰かと戦ってるのか、離れていても解る霊圧と爆音が断続的に森を揺らしてい

た。

「取り敢えず……あっちの方に行ってみる

!？」

目に見える形での目標に向かおうとした瞬間、金色に光る小さな円形の陣が四つ現れた。

「ちい……!」

慌てて瞬歩でその場を離れた直後、今まで立っていた場所に金色の輪が出現して消えた。

(これは …… !?)

更に飛びのいた先で何十発もの桜色の光弾が周りを取り囲むように動き回り ……。

「何だ……!？」

一瞬動きを止めたかと思った直後、一斉に飛び掛かってきた。

「ッ……！」

向かってきた何発かを斬撃で斬り裂いてから残りを躲す為に空中に跳び。

「はああああああっ！」

見覚えのある金髪が翻るのが見えた。

「……！ お前……！」

振り下ろされる斧とも杖とも言えない武器を咄嗟に斬月で受ける。

「フェイトとか言ったか！？ いきなり」

「何故……！？」

俺の声に反応したように顔を上げたフェイトの眼。その眼はどうみても……怒りに燃えた人間の眼だった。

「何故……！？ あの人達を殺したんですか！？」

「あの人達……!? ちょ……ちょっと待て! あいつらは
」

「フェイトちゃん!」

フェイトが何に怒っているのかに気付いたものの、何かを言う暇も無く、右から凄え霊圧が吹き付けてきやがった。

「ッ……!」

「デイバイン……!」

フェイトが瞬歩に似た技で離れていく。

「バスタアアアッー!」

だがそれを追う暇も無く今度は桜色の閃光が俺の視界を埋めつくした。

SIDE I O U T

第三十三話（前書き）

圧倒的な膂力と再生能力で迫るストレンドに僅かずつ圧されながらも桔梗は果敢に攻撃を仕掛ける。

一方再度遭遇した一護にフェイトは勘違いから怒りの刃を向ける。だが、その彼らにも過去の復讐の叫びが迫っていた

！

予告風なのを書いてみた。ああ、この作者疲れてんだなあ、とでも思っと思ってください。

それでは本編をどうぞ。

第三十三話

「おおおおおおおっ！」

「ッ

！」

反撃の隙を与えないように皇呀を連続で振るっ。

私と違いストレンドの攻撃は殆どが一撃必殺。下手に直撃を許せばそれだけで骨を砕かれ動けなくなる。あの時受けた一撃で軽傷だったのはただの奇跡でしかない。

「せえいっ！」

横薙ぎから手首を返しての面。だがどれだけ打ち込んでも致命打にはならない。斬撃の全てが拳か肘に弾かれる。

（くそっ！？ こいつの骨は鋼鉄か何か！？ 霊圧で防げる攻撃でも無いだろうに！）

人間の腕の中で最も頑丈なのが骨が突き出る拳と肘の部分だ。そしてストレンドはそれらの部位を巧みに刃の前に出して防いでくる。無論無傷ではなく皮は切れるし筋肉にも食い込む。それでもストレンドは痛みなど無いかのように同じ防御を続けてくる。

「！」

横薙ぎの斬撃を右の肘で受けられ、更に斬撃を受けた肘がこちらに向かってくるのを身体を後ろに傾けて躲し、バク転を行うついでに足の進行方向にあったストレンドの顎を蹴り上げる。
だ。

(……………！ 硬い……………！)

分かってはいたが、腕だけでなく全身の霊圧硬度も相当なものだ。霊圧を籠めて蹴り上げたにも関わらず痛みが太股まで来た。それでも痛みを無視してバク転の勢いを保ったまま後ろに跳び、着地。皇呀の柄を引き切っ先をストレンドに向ける。

「！」

「はあっ！」

ドンッ、という凄まじい音と共に踏み込んでくるストレンドに刺突を放つも皇呀の切っ先に拳を合わせられて止められてしまう。そのまま鏢迫り合いになれば当然腕力で劣る私の方が不利。だがこの間合いは皇呀の火力を最大に発揮出来る瞬間でもある。

「魔皇喝采終幕……！」

皇呀に靈圧を籠める。集まった靈圧は刃を走る紅い火花へ……。そしてその全てがストレンドに向かっていく。

「ッ

！？」

前に同じ攻撃を受けた故に警戒していたのか、皇呀の様子を見て取ったストレンドが慌てて離れていこうとする。だが遅い！

「落葉緋牡丹！」

ストレンドに向かっていった火花は私とストレンドを挟んで至近距離で爆発。そして生じた爆炎と爆風は全てストレンドに“向かった”。

「

！！」

魔皇喝采の集中砲火には流石に堪えたのか、ストレンドが掠れた雄叫びを上げながら後ろに吹き飛んでいく。バンカーバスター、と呼ばれる兵器がある。

主に爆撃に使用される兵器の一種で目標に当たると衝撃で伸管が起動し直ぐ爆発するタイプと違い、先が地面に突き刺さり易い構造になっており弾頭が目標に突き刺さるとまずタイマーが起動。弾頭がある程度深くまで潜り込んだところで漸く伸管が動き爆発。更にこの爆発には指向性があり、突き刺さった目標の内部に爆風を送り込むという代物。

ストレンドが喰らったのもこれと同じ。前回は拡散した爆発を全身に喰らわせたが今回は一点集中型の爆発。その威力は桁が違う。

「！」

「ッ……！」

と、思っていたのだが煙幕の向こうから聞こえる雄叫びを聞くに防がれたようだ。

即座にバックステップ。その後を煙幕から飛び出してきたストレンドが追ってくる。全身が煤け、血を流し、右腕に至っては丸焦げだったが、そのどれもが既に塞がり始め、炭化した皮膚が剥がれおち新しい皮膚が形成されている。

「紅星弓……！」

皇呀に炎を纏わせて切っ先を追ってくるストレンドに向ける。そしてみるみる間合いを詰めてくるストレンドに火矢を放つ。

一発、二発、四発、八発と散弾のように連射するが、どれだけ身体

に矢が突き立つてもストレンドは揺るがない。

(マズイな……！ このままでは他の奴らに逃げられる！)

S I D E E I フ ェ イ ト

(直撃弾！ いける！)

完全に足を止めた彼への、なのはからの砲撃魔法。

直接戦ったわけじゃないから分からないが、彼自身の戦闘能力は非常に高いと判断されていた。

Sランクに届こうかという強力な斬撃を飛ばし、更には補足不可能な程の高速戦闘まで行う。

故に私となのはで波状攻撃を仕掛け躲す暇の無い一撃を見舞う。連携は綺麗に噛み合い、なのはの放ったデイベインバスターは。

「なっ………!?!?」

打ち砕かれた。

一瞬だけ見えた黒い光。それが壁のようになのはの砲撃に当たり相殺した。

砕かれた桜色の魔力が周辺に散蒔れ、一瞬彼の姿が見えた。

（仮面……？）

彼の顔には最初に見た時には無かった筈の、白い仮面が見えた。が、彼が左手を翳すとその仮面もあっさり消えた。

「ふう……！　　ったく……いきなり襲って来やがって！　　人の話を聞けっての！」

「この状況で何の弁明があると言っんですか！？」

視線を下に向ければ倒れている局員の人達が目に入る。

胴を一刀両断にされた男性。

首を撥ねられた女性。

そして……肩から腰まで斬り捨てられた子供。

遠目からだったが間違い無い……！　　全てこの人が……！

「貴方がやった事でしょう！」

「だからこいつらは……!!」

「言い訳はアースラで聞かせてもらいます……!!
バルディッシュ!!」

『Load Cartridge。
Haken Form』

バルディッシュのカートリッジをロード、ハーケンフォームに変型
させて魔力刃を形成する。

「くそっ……!!」

「はあああああっ!!」

身の丈もある刀剣を構える彼に突撃する。
桔梗の件もまだ解決していないし、何よりこんな惨状を生み出した
彼を許すわけにはいかない!

きゃああああああっ!

がああああああっ！

だが、攻撃の間合いに入るその瞬間、周囲一帯に響く悲鳴に強制的に攻撃を中断させられた。

「っ……！？ フェイトちゃん！ 上！」

『上空から多数の魔力反応！』

なのはの叫び声と、バルディッシュの警告が聞こえ、目の前の男と同時に上を仰ぎ見る。

「なっ……！？」

視界に映ったのは様々な色の 砲撃魔法。

魔力光の違う砲撃が私達目掛けて大量に降り注いでくる光景。

（躲せない……！？）

咄嗟の回避が間に合わない砲撃魔法の雨。
だが、その砲撃が当たる瞬間、何かに視界を塞がれ……凄まじい爆

音が身体を揺さ振った。

SIDE I O U T

番外編（予告）（前書き）

第三十一話の後書きで書いた番外編の設定が出来たので投稿しました。

以下が番外編のクロス作品になります。

BLEACH（本作品の桔梗含む）

デビルメイクライ（トリツシユ、レディ出演未定、ネロ出演予定無し。ネロファンの皆さんホントにゴメン）

この時点で予測される質問も下に載せときます。

Q、なのはは？

A、出ません。完全にBLEACHとDMCのクロスオーバーです。

命乞いをさせてもらえるなら、下手に合わせる作品を増やすと登場人物が入り乱れて読んでくれている読者にも優しくないのではないかと、と思い、まずはBLEACHから、という形になりました。なのはとDMCはよく見るけどBLEACHは見たこと無いな〜、という気持ちもちよっとあります。

映画の予告みたいになってるのは仕様です。ちょっとした遊び心が
発揮されてしまった結果です。

そんな内容の話ですが、良ければどうぞ。

番外編（予告）

「ところで嬢ちゃん。名前は？」

「いきなりどうした？」

「今夜のダンスパーティーのパートナーだ。名前ぐらい聞いとかないと失礼だろ？」

それは海の向こうでの出会いが始まりだった。

「何でお前が此処に居る？」

「あれ？ 桔梗ちゃん、お友達？」

「そんな訳がないでしょう。失礼ですよ……私に」

「おいおい……あの夜はあんなに激しかったのにもう他人のフリか？」

「……………へっ……………!？」

「はあ!？」

海を越えて海鳴市に現れたのは赤い狩人。
そして……。

「貴様かつ!？ ムスペルを殺したあの男の仲間というのは!？」

「桔梗ちゃん……何……あれ……?」

「ちっ……! こんなところにまで……!」

悪魔

「……!？ 桔梗ちゃん……!」

「義姉上……!？」

護れなかった者……。

「身体にはなんら異常はありません……。ただ、脳がずっと睡眠状

態にあり覚醒するのを拒否している状態にあります……」

かつて海鳴市で起きた激戦より数ヶ月……。

「トリツシユからあいつらの居場所は聞いてる。目的もな」

「……何処だ」

少女は再び……。

「空座町だ」

剣を……。

「報告申し上げます！ 空座町の各所に空間の断裂が発生！ そこから詳細不明の霊圧を多数確認しました！」

空座町で起きる異常。

「なんだよ……」じや……」

「聞くまでもないだろう、黒崎。これは」

事態の解決の為に動いた一護達が見たのは。

「どう見ても……空座町だ……！」

もう一つの空座町。

「あの空間は重霊地である空座町をコピーし、その特性を利用して周囲から霊子をかき集め、急速に肥大化している。このまま肥大化が進めば……空座町は巨大な空間の亀裂に吞まれ消滅するだろうネ」

迫るタイムリミット。

「ダンテ……スパイダの息子……」

「また親父への恨みか？ まったく……こんな美女からまで恨みを
買って」

「黙れ！！ 私を裏切り見捨てたその罪！ 貴様の血で贖わせる……！！」

「……………！？ てめえ……………！？」

過去に断たれた絆。

「肥大化を止めるにはこの空間を発生させている基点を見つけて破壊するしかない！ 急ぐのだ、一護！」

「分かってる！」

護る為に走る。

「あれは私の使い魔……………故に私を殺せば貴様が助けたがっている者を救うこともできよう……………。」
だが……………無駄だ」

「無駄……………だと……………？」

「貴様と私とでは背負っている物が違う……………！ 幾千の同胞の為に戦う私と人間一人の為に来た貴様などに負けるわけにはいかんだ！ 今は亡きムンドウス様に代わり……………私がこの世界に同胞達を導く！」

小さな意地の前に立ち塞がる信念。

死神よ。

「やらせるかよ……何度だって斬ってやる……！俺が……！俺が護る……！」

世界を救えるか？

「ムンドウスだスパードだだとくだらん！あれもあの女も、奴らに忠義だ愛だと掲げた結果死んだ！人間なんぞが語る心など持つから弱い！分かっているのか、スパードの息子！？」

赤き狩人よ。

「それでも無いぜ？ あいつや人間の強さ……懇切丁寧に教えてやるよ。」

こいつでな……！」

その誇りを護れるか？

「この力を前にまだ向かって来るか、小娘……！ 人間一人の為にそこまで戦えるか……！」

覇軍の主よ。

「当たり前だろう？ お前に譲れない信念があるって……私にだって二度と破れない約束がある……！」

その意地を貫けるか？

放映未定（ オイ

第三十四話（前書き）

更新出来ました、三十四話です。

とりあえず……番外編については読者の方々からの反応待ち、ついで。

暫くは本編をどうぞ。

第三十四話

「フェイトちゃん！」

上空から降り注いだ色鮮やかな砲撃魔法の雨。
集中して放たれた砲撃は接近しかけた一護とフェイトを押し包んで
爆発した。

「フェイトちゃ

！？」

幾多の色が混じり合った爆発に圧され近付くことも出来ないのが
が名前を呼び続けようとした時、爆発の中から飛び出す人影に気付
いた。

「くそっ……！」

人影　一護は咄嗟にフェイトを抱き抱え、砲撃に対し、霊圧
を放射しながら庇うように跳んでいた。
それでも到底躲しきれぬ攻撃ではなく、ところどころに傷を負いな
がらフェイトを脇に抱えて地面に着地する。

「ッ……！　離しっ

」

「月牙……天衝！」

さっきまで敵だった男に抱えられている。その状況に暴れながら叫ぼうとしたフェイトを無視して、一護はなのはに月牙天衝を放つ。

「なっ……！？ ツ……！」

だが、その斬撃はなのはを逸れ、何も無い空間を飛び。

「グッ……！？」

なのはの後ろで呻き声が上がると同時に黒衣の男
メイズ
が姿を現した。

「……！？」

いつの間にか後ろを取られていた。
その事実慌てながらもなのはは飛翔魔法を使って、一護とフェイトの上空付近まで下がる。

「立てるか……？」

「え……？ あっ……！ はい」

一護の質問にフェイトが頷くと腕から力を抜きフェイトを地面に降ろした。

「てめえか……？ さっきの攻撃は……？」

「聞くまでもないでしょう？ 尤も……あの砲撃魔法自体は僕が撃つたものではないですが……」

フェイトが自分の足で立つのを確認してから一護も立ち上がり斬月を構える。

（レイジングハート……さっきの砲撃魔法は誰が……？）

（周辺から魔力反応は検知出来ませんでした。）

（次元跳躍攻撃？）

（空間への干渉も確認されていません。上空から突然現れたとしたか

……)

砲撃魔法が降り注ぐ瞬間を離れた場所から見ていたなのは目の前のメイズを警戒しながらも隠れた敵を探す。

「何を警戒しているのか分かりますが……今の砲撃魔法を使用した者を探しても無駄ですよ。今この結界の中で戦っているのは我々と向こうにいる二人だけです」

辺りを警戒するのはメイズは若干の嘲笑を滲ませながら言う。そのメイズの背後。相当な距離があるにも関わらず、凄まじい爆音が大気を震わした。

(なのは)

(フェイトちゃん?)

(ここは私に任せて先に行つて)

(ツ……!? フェイトちゃん!? でも……!)

(私は大丈夫……! 今は桔梗の方を優先して!)

「作戦会議は終わりましたか？ では」

「プラズマランサー！」

メイズが巻貝のペンダントを持った左腕を掲げた瞬間、フェイトが左右に金色の魔力弾を四発生成。

『Fire』

そしてバルディッシュの号令で一斉に撃ち出される。

「フン……」

正面から迫る魔力弾をメイズは身体を左右に傾げるだけで躲す。

「なのはっ！」

「……！」

『Axel Fin』

メイズの意識が逸れたと同時に、なのはが飛翔魔法で前に飛び出し加速。一気にメイズの横を通り抜けようとする。

「行かせると

」

それに対し、メイズが背後の空間に揺らぎを発生させ銀色の剣を取り出す。

「ターン！」

そして、傍を通り過ぎようとしたなのはに銀色の剣が振るわれる直前、フェイトの声と共に先程躲されたプラズマランサーがUターンして再度メイズに撃ち出された。

「チツ………！」

舌打ちをしながらもメイズは、なのはに振るおうとした剣を返し、迫るプラズマランサーを斬り裂いていく。

その間になのははメイズの横を通り過ぎる。去り際に一瞬だけフェイトを振り返り、しかし再び前を向いて桔梗が戦っているだろう場所を目指して飛翔していく。

「……やってくれますね……この……人形ごときが……！」

「私は人形じゃない！」

去っていくなのはを苛立った表情で見送った後、メイズはフェイトに振り返る。

そして苛立ちを吐き出すかのようにメイズは呟くが、フェイトはその呟きに過剰に反応した。

「ハッ……！ 人形でしょうが……！ 特に貴女は……名実共に人形だ……！」

「違つと 「！」

「プロジェクトF……！」

「……！」

だが、メイズはフェイトの訴えを鼻で笑って退ける。

「人から生まれることなく、ただ生みの親に命じられるまま戦い

「

「ッ………！」

「挙げ句その生みの親すら守れず法の番犬共に取り込まれ

」

「………黙れ………！」

「その後も世界がどれだけ軋んでいるか考えもせず、ただ自分達管理局が掲げる理念が正しいと、命じられるまま反対理論や反乱分子共を押さえ付け

」

「私は

！」

「今、僕と相對している今も！ 何故、此処に居るのかも貴女は知らされず、その意味すら思考せず、ただ僕達【ティアマト】が殺戮者という理由を聞かされただけで戦う！
そんな奴を人形と言わずに何と言っ！？」

「………黙れええええええっ！」

「ア——ハッハッハッハッ！」

フェイトの声に耳を傾けることなく、ただメイズは笑う。何も知らぬ人形がと。

「バルデイ !?!」

「ハ―ハツハツハツ !?!」

ひたすら笑うメイズに、激情を押さえられぬまま斬り掛かろうとしたフェイトは自分の隣に居た筈の一護が、メイズの横で刀剣を薙ぎ払う姿を見た。

「ッ……!!」

「おおおおおおっ!!」

瞬歩で突然真横に現れた一護に驚きながらもメイズは身体を横にずらすことで斬月の刃を躲す。

「せいっ!!」

だが、一護の攻撃はそこで終わらず手首を返して斬月を上段まで持ち上げ振り下ろす。

「ぐあ………！」

咄嗟に銀色の剣で受けるも、止め切れず吹き飛ばされ地面に激突する。

「………！ 貴様」

「月牙………！」

激突の衝撃に呻きながらも立ち上がるメイズに一護は斬月を振り上げ。

「天衝！」

高まる霊圧と共に一気に振り下ろした。

「………！？」

迫る斬撃に、立ち上がる動作の最中だったメイズはなんとか身体を傾け射線から身を逸らし。

「がつ……！？」

それでも斬撃を躲し切れずメイズの頭を掠める。

斬撃はその勢いのまま地面に衝突、メイズを巻き込んで砂塵を巻き上げる。

「てめえらが何言ってるのかさっぱり分かんねえけどな……。一つ分かったことがある……！」

地面に降り立ちながら一護は低く呟く。

「てめえは気に喰わねえ……！」

斬月を地面に突き刺し、今だ舞い上がる砂塵を睨みつける。

「立てよ……！ そのにやけ面……叩き潰してやる……！」

「叩き潰す……？ 僕を……？」

少しずつ晴れていく砂塵。

その中からメイズの声が響き

。

「調停者はいたく冗談をお好きらしい……！」

額から血を流しながらも口端を吊り上げて、メイズは凄惨に笑う。
その背後、空間が揺らぎ四振りの黄金の剣がその切っ先を現した。

第三十五話（前書き）

新話更新出来ました。

現在地震のよる被害が大きくなっています。

基本アナログ人間な私にはパソコンや携帯に対する技術力が無いので詳しくないのですが、他の作家様からも地震の情報などが出ています。

ラモン様の活動報告にもありました。お気に入り登録をしているので情報の確認をどうぞ。

まだ未確認ですが他にも情報の共有や開示を行っている作家の方々がいると思いますのである程度見て回るのが良いと思います。

第三十五話

SIDE Eーなのは

遙か前方で爆音が響く。
遙か後方で銃声が轟く。
飛べばすぐに辿り着ける距離だった。

「……………」

なのに私の前には三人の管理局員が立ち塞がっている。
そしてその三人は全員がまともに話ができないのは明白だった。

(レイジングハート……あの人達……全員……)

ある人は頭の一部が抉り取られていた。

(デバイスから救難信号を確認しました)

ある人はお腹が切り開かれていた。

（また……どの局員からも生体反応を検知出来ませんでした）

ある人は胸に大きな穴が空いていた。

（彼らは生物として……既に死亡しています）

全員が虚ろな眼で私を見返し、デバイスを向けてくる。

（一体……どうして……？）

（不明です。ただ……）

（ただ……？）

（彼らの身体に明らかに共通した魔力の波長が確認できます。恐らくは、何者が遠隔コントロールを行っていると思われる）

（誰かが……死体を動かしてる……！？）

レイジングハートと話す間にも、彼らの足元にミッド式の魔法陣が展開され。

「……………!?!」

左へ飛ぶと同時に、私の後を追って射撃魔法が撃ち込まれてくる。

(とにかくあの人達を抑えないと……………!)

飛びながらレイジングハートを砲撃形態に移行させる。

「デイバイン……………!」

発射の為に一度足を止める。

三人の攻撃は弾幕こそ凄まじいけど狙いが雑で距離があれば、その傾向が顕著になる。当たりそうな弾があってもレイジングハートが防御してくれる。

「……………バスター!」

狙い澄ましての一射。その弾道は何かにも阻まれることなく正確に、一番左の人に直撃した。

「残り二」

『マスター！』

残りの二人に狙いをつけようとした瞬間、レイジングハートの警告に思わず後ろに下がる。

「なっ………！？」

後ろに下がった直後、デイバインバスターの射線をなぞるように砲撃魔法が通過していく。

（……まさか………）

見ればデイバインバスターが直撃した筈の魔導師が円形の魔法陣を纏った杖を向けてくるところだった。

（攻撃が効いてない！？）

再度左へ飛び、予想出来る射線から待避する。そして先程と同じように私の後を追って次々と魔法が撃ち込まれてくる。

(恐らく……死体が操作されているだけなので、リンカーコアを通して肉体に負荷を与える非殺傷設定の攻撃が通っていないと思われます)

(……！ どうすれば……)

(現状は死体を動かしている魔導師を拘束するか……非殺傷設定を解除した攻撃で肉体を完全に破壊するしか無いかと……)

肉体の破壊……そういえば……。

(あの人も……そうだったのかな……?)

あのオレンジの髪の人。

最初と一緒に戦ったとフェイトちゃんは言っていた。

でも、私が見たのは局員に……子供にまで刃を振り下ろす姿だった。それを見た時はフェイトちゃんと二人、怒りながら攻撃しちゃったけど……。

(もしもあの人も同じ状況になってたのなら……)

後で……謝らないと……。でも……その前に……。

「……レイジングハート……」

『はい、非殺傷設定の解除を行います』

その前にこの状況を切り抜けないと……。

() 【ティアマト】 ……絶対に許さない……! ()

S I D E I O U T

子供の頭程もある拳が風圧を纏って迫ってくる。

「ッ……!」

その拳に皇呀の刃を突き立て、その軌道を逸らす。

「破道の六十三……！」

繰り出された腕を掻い潜り、左手をストレンドの脇腹に添え
。

「……『雷吼炮』！」

極大の電撃を撃ち出す！

「ッ
！」

電撃が迸り、ストレンドの咆哮が轟く。

「……！？」

だが、視界の端から迫るストレンドの巨腕に身を屈める。頭の上数センチをストレンドの腕が通過していくのが轟音で分かる。更に追撃で放たれる膝蹴りを跳躍して回避。ストレンドの頭上で身を翻し、皇呀を振り。

「……………」

下ろす前にストレンドが、自身の蹴りの慣性を利用して回転しながら飛び上がってくる。

「ちいつ……………!?!」

咄嗟に攻撃動作を中断。振り上げられる脚に対し、皇呀で防ぐ。

「ぐっ……………!」

刃が肉を裂く感触。次いで骨と激突した衝撃が剣を通して腕を痺れさせる。だが、ここで押し負ければ致命的な隙を晒すことになる。

「ぬっっっっ……………! せいあっ……………!」

故に選んだ手は力押し。

押し切ろうと更に力を込められる脚に、それ以上の力で押し返す。

「……………!?!」

力比べに負けたのがショックだったのか驚愕の表情を浮かべたままストレンドが落ちていく。

無論ただの力比べならストレンドにはまず勝てない。

皇呀は始解時に身体能力の強化と呼ぶべきものが発動する。特に顕著なのが臂力の強化。そうでも無ければこんな小さな身体でこんな長大な刀剣は操れない。

だが、身体能力の強化を持ってしてもストレンドの力はその上をいく。

幸運だったのは地の利。人間は基本、地に足をつけて立っている。それゆえに人間が使う武術も当然地に立って戦うことが前提だ。当然ながら人間は自力で自由自在に空を飛べる生き物ではない。

霊子の足場を構成して空中に“立つ”私と、空中に浮かび上がるように“飛ぶ”ストレンド。その差は空中で踏ん張りが効くかという形で出た。

白打による近接戦ではストレンドが一步上。だが統合能力では私の方がやや上。

その辺りを加味すれば少なくとも空中での近接戦はほぼ互角。

「
」

ストレンドもその事実気付いたか、無闇に突撃してくることもなく、静かにこちらを見上げてくる。

「スウ……ハア……」

現状は完全な膠着状態。これまではストレンドの攻撃を躲し続け無傷。しかし私の攻撃も半端なダメージはすぐ再生され致命打にならない。

なにより骨が堅すぎる。肩等の強固な部位は当然として、首の骨にまで止められるとは思わなかった。動脈を切断しても多少苦しげな表情を浮かべただけですぐ塞がった。超速再生が出来る虚も真っ青になるような、凄まじい再生速度だ。

(だが……ようやく弱点らしいところも解ったな)

前回……そして今回。二度の闘いを通して判明した事。

ストレンドには全身の霊圧硬度が著しく低下する瞬間がある。だが、その一瞬は私にとっても危険な状況だ。

「はあああああああっ！」

皇呀を上段で構えストレンドに向かって急降下する。

例え危険だとしても真正面からストレンドを倒すなら私の考える一瞬しか無い。

だから突撃する。ただ、その危険な一瞬を好機にする為に。

「クロノ提督！ 結界の出入口五箇所の包囲……完了しました！」

戦場となっている森の外れ。結界の外側にて、フェイトから連絡を受けたクロノが部隊の指揮を執るためにアースラから降りてきた。

「よし！ 包囲部隊は別命あるまで待機！ 少数の選抜隊で結界内に」

「貴方でしたか……クロノ・ハラウン……」

突入する……並び立つ管理局員の一人からの報告に号令をだそうとしたクロノだが、最後まで言い切る前に、よく通る女性の声に遮られた。

「……………！？」

後ろから響く声にS2Uを構えながらクロノが勢いよく振り返る。

「ここに貴方が居るのは、果たして幸か不幸か……」

その視線の先に居たのは、黒い法衣を身に纏った女性と……見上げる程の巨体を分厚い鎧で覆った巨人。

長い黒髪を風に靡かせながら結界内から歩み出た女性　ソニアは突き付けられるデバイスを見ても眉一つ動かさずただ右腕を持ち上げた。

「なっ……！？」

次の瞬間、ソニアの腕の動きに反応した巨人が何の予備動作もなく加速。

一瞬にして右腕に持った斧槍の間合いにクロノを捉えた。

(何だ……このスピード……！?)

突然の事態に反応すら出来ないクロノ目掛けて巨人の斧槍が振り下ろされた。

第三十六話（前書き）

アルバイトとは思えぬ連勤（疲労困憊）＋休み貰えねえ×モンスタ
ーハンターP3rdおもしれえ〓更新速度の低下。

前回仕事が忙しいので遅くなるかも、とか言ってた時以上に更新が
遅くなってしまいました。
ホントにすいませんでした！

この先纏まった休みが出るかまったく分からない状況で、次の更新
も遅くなる可能性が高いです。
楽しみにしていた方々には申し訳ありませんが許していただけたら
有り難いです。

第三十六話

「おおおおおおおっ！」

「フンッ！」

一護が斬月を横一文字に薙ぎ払い、メイズが銀色の剣でその一撃を真っ向から受け、互いの剣が弾かれる。

攻防はそこで終わらず、同時に剣を持った手首を返し、やはり同時に次の一撃を放ち、また弾かれる。

だが、一護が斬月の一振りしか持たないのに対し、メイズの周りには四振りの金色の剣が浮遊し、主を護衛していた。

「……！ くそっ……！」

そしてその差は手数という形で一護の死角から襲い掛かった。

背後から首目掛けて振るわれる風切り音を察知した一護が身を屈めて金色の剣の斬撃を躲す。更に上から迫る三振りの剣に退路を断たれる前に瞬歩でメイズから距離を取る。

ヴヴヴウウウウウ

それでもメイズの攻撃は終わらず、耳を劈くようなサイレンの音が

響くと同時、四方八方から一護に銃撃が撃ち込まれる。

(一体……！ どこから撃ってきてる！？)

銃撃を躲しながら、メイズを中心に円を描くように走りつつ一護は見えない狙撃主を捜し続けるが、周りには幾本もの木だけ。ある程度開けた場所であるその場所に狙撃主が潜んでいる気配は無かった。

うわああああああ……

そうしている間にも今度は男性の悲鳴が響き渡り、一護が跳躍。その後を追うように砲撃魔法が立て続けに降り注ぐ。

「ッ……！」

四方からの攻撃に晒されながらも一護はメイズに狙いを定め斬月を振り、月牙天衝を放つ。

「ハッ……！」

だが、メイズは一護の反撃を鼻で笑いながら横に身をずらすことで

躲してしまっ。

(やっぱ正面から撃っただけじゃ当たらねえか……！ このままじや埒があかねえし…… あいつの真似してるみたいで嫌だが……仕方なねえ……！)

「フッ……！」

しつこく降り注ぐ弾幕の合間をすり抜け一護は再度月牙天衝を放つ。

「馬鹿の一つ覚えというやつです……！ そんな攻撃を何度撃つても……！」

縦一文字に放たれた斬撃を先程と同じように横に身をずらして躲したメイズの軽口は。

「おらあっ！」

早過ぎる一護の第二撃に阻まれた。

(っこれはっ……！)

回避動作の最中だったメイズにはその一撃を躲す身体能力は無い。咄嗟に銀色の剣で飛来物を受けるも、強い衝撃に後ろに吹っ飛ばされていく。

(自分の……武器を……！？)

メイズに放たれた第二撃。それは斬月そのものだった。月牙天衝を放った後、柄の晒を持ち、メイズの回避先に投擲した。

「ふっ……！ おらあっ！」

メイズを吹き飛ばした斬月を、自分の傍まで引き寄せた一護は晒を保持したまま数度回転させ、遠心力の勢いも使って再度斬月を投擲する。

「ッ……！」

再び迫る斬月を吹き飛ばされながらも空中で身を翻しながら躲したメイズは空中に立つ一護に視線を向け。

「……！？」

一護の姿を見失った。

「おおおおおおっ！」

一方の一護は斬月を投擲した後、瞬歩で地上に降りて駆け出し斬月を回収。その勢いでメイズに斬り掛かり。

「ッ……！？ またか！」

金色の剣に阻まれた。

その段階になってようやく一護の接近に気付いたメイズは銀色の剣に蒼い魔力光を燈して一護に斬り掛かる。

「月牙」

そして一護もまた斬月に霊圧を籠める。

四方から金色の剣が。

正面から蒼い魔力光を纏ったメイズの剣が。
それぞれが一護に必殺の念を持って迫る中。

「天衝！！」

罅迫り合いをする金色の剣ごと一護は斬月を振り下ろした。

「なんっ
!?」

下に向けて放たれた斬撃はメイズの叫びを飲み込み、地面を抉り、凄まじい衝撃波と砂塵を巻き上げる。

「うおおおおおっ!!」

互いの視界が砂塵で埋まる。その中でも尚、一護は斬月を振るう。敵は目の前。故に視界が塞がっていようと捉えられる。

「……!? ちいつ……!」

だが、振るわれた斬月はメイズに届かなかつた。

以前の桔梗との闘いで同じように視界が塞がった状態での戦闘を行った経験があるメイズは砂塵に視界を奪われるのと同時に周囲の警戒を開始。一護が斬月を振るう直前に察知し飛び退いた。

斬月は僅かにメイズが左手にぶら下げた巻き貝のペンダントを掠めるだけに終わり。

な……で……お兄……私達……管理……襲わ……?」

うあああああああああああああああああああああああ
あっ！！！！

「なんだ……！？」

「貴様っ……！？」

突然見えた光景に一護は動きを止め、メイズは激昂して斬り掛かる。

「ぐっ……！！」

その攻撃に一護は我に返り斬月でその一撃を受けるが、蒼い魔力光を帯びた銀色の剣は強い衝撃を持って一護を吹き飛ばす。だが、メイズもそこから追撃はせず後ろに跳ぶ。

（今は……草冠の時と同じ……？　なんでだ……あいつは斬魄刀を持ってねえのに……？）

なんとか体勢を立て直なすも、余勢で地面を滑るのを斬月を突き立てることで止める。

だが、一護は先の一瞬で見た光景に思考を奪われ、攻撃を続けることをしなかった。

「あれは……あの子供は……」

薄れていく砂塵の向こうからメイズの聞き、思考を中断して一護が顔を上げる。

「あれが貴様の過去なら……貴様……見たのか……!?!」

そこに居たのは一護と同じく困惑と……憤怒を緋い交ぜにして一護を睨むメイズの姿。

(過去……? 見た……? ならあれは……)

一護が見た光景。

夜の暗闇を切り裂いて振る極彩色の光の雨。

砕け散る家屋。

叫び、悲鳴を上げ、逃げる人々。

そして……女の子を両手に抱え絶叫する男の姿。

「あれが……お前の過去……! そついうことが……」

「ッ……！ 流石に気付きますか……」

「ああ……さっきまでのためえの攻撃……あれは全部」

「ええ、過去に起きた事象です」

一護の言葉を引き継いでメイズは語る。

「その過去の事象の始まり、切っ掛けとなる音を再生することでその場に過去の一部を再現する。それが僕の魔術。

フィーニスにかつて存在し、時空管理局に滅ぼされたフォル一族を担う家系の一つ……！」

これがロックソート家が伝える魔術の一つだ……！」

「なっ……！？」

搾り出すような、それでいてどこか誇るようなメイズの言葉。それに驚愕したのは、ただ二人の闘いを見ていることしか出来なかったフェイトだった。

「管理局が滅ぼした、って……そんな！ そんな事を」

「管理局がする筈が無いとでも!? ならあの夜に襲って来たものは何だ!? ただの夜盗の群れとでも言う気か!! 貴様はっ!?!」

咄嗟に否定しようとしたフェイトだったが、メイズの剣幕にあっさり口を閉ざした。

「そつだ……! 忘れる筈が無い……! この僕が……! 奴らの闘い方を……! 家族を皆殺しに奴らの顔を……! この僕が……! 忘れると思っっているのか!! この人形風情がっ!!!!」

いやああああああ……

メイズの叫びに應えるように女性の悲鳴が響き、直後フェイト目掛けて砲撃魔法が降り注ぐ。

「くっ……!」

突然の攻撃に、それでも身体は反応して回避を行い。

ヴヴヴウウウウウウ

「……………!?」

続いてサイレンが響くのと同時に投下される複数の爆撃弾がフェイトの至近距離に落下。爆発でフェイトの身体を押し包んだ。

「……………また貴方ですか……………」

舞い上がる黒煙を眺めていたメイズが小さく呟く。

同時に黒煙の内側から発せられた“霊圧”に吹き飛ばされ

「そういえば……………最初から貴方はそれを庇っていましたね」

斬月を構える一護と、膝をつき、驚いた顔で一護を見上げるフェイトが居た。

「何故です？ 貴方にはその人形を庇う義務など無いでしょう？」

メイズにとって彼等は敵同士という認識だった。

勘違いからフェイト達は一護に刃を向け、怒りを叩き付けていた。そしてその誤解はまだ解けていない。

フェイトは一護を敵と認識している。にも関わらず一護は二回もフェイトを助けている。それがメイズには不思議だった。

「……人形じゃねえさ……」

メイズの問いに一護が答える。少しずつ自身の霊圧を上昇させながら……。

「てめえと同じだ」

「なに……?」

「誰かが死ぬのを見て……それに怒って……そんな奴が人形の筈が無えだろ!」

そして右手に持った斬月の切っ先を前に向け、右腕に左手を添える。

「てめえがここで何をやる気か知らねえが、それがまったく関係の無い奴らを巻き込む事なら……ここでてめえを止める!」

卍…解……!!」

第三十七話（前書き）

前回の投稿後、一話一話が短くボリューム不足に感じる、という
意見をいただきました。

なので今回はいつもより少し長めにしてみました。読み難くなっ
た、まだ短い、等があれば言うてください。可能な限り何とかして
みます。

文章量が多い人はホントに多いんですけどね……。

第三十七話

「メイズ……!?!」

ソニアが森を振り返ったのはメイズが怒りと共にフェイトに向かって叫んだ瞬間。

そして屍人兵が巨大な槍斧を掲げクロノに振り下ろそうとした瞬間。

「チエーンバインド!」

気を逸らしたその一瞬の間に屍人兵は地面に描かれた魔法陣から伸びた緑色の鎖に拘束されていった。

「……!」

「クロノ!」

「ユーノか!?!」

自身に振り下ろされる刃が目の前で急停止する光景に肝を冷やしなから、後ろから聞こえた声の主の位置まで下がり、他の隊員も追従していく。

そこには時空管理局無限書庫の司書長、ユーノ・スクライアが立っていた。

「ユーノ、どうして此処に？」

「合流場所まで来てみたら武装隊を率いて出撃した、ってアースラから連絡が入ったんだ。それに結界の発動の気配がしたから様子を
見に、ね」

「そうか……助かった」

「礼はいいよ。それより……」

クロノの感謝に手を挙げて応えてからユーノは正面を向き直り、クロノも同じ方向を向く。

「……ユーノ・スクライア……ですか……」

そこにはバインドに拘束され動きを止めた巨人と、ユーノの登場に再びクロノ達に向き直ったソニアが居た。

「僕の名前を？」

「無限書庫の司書長……名前と役職ぐらいしか……。無限書庫には少し興味がありましたので」

自分の名前を呼ばれたことに驚くユーノにソニアが理由を語る。

「……詳しい話はアースラで聞こう。

君達に逃げ場は無い。投降しろ」

「……？ まるで勝利が確定したような物言いですね。何故私が投降しなくてはならないのです？」

「……さっき言った通りだ。この結界の出入口は全て他の隊員が閉鎖している。君の最大戦力だろう召喚獣の動きも封じた。この人数を相手に勝ち目も無いだろう……もう一度言っ。投降しろ」

「ああ、成る程……貴方は召喚師だと思っているわけですね。確かに魔導師ならこの状況で勝ち目はほぼ無いのでしょうかね」

(魔導師“なら……?)

その言い回しにユーノが疑問を覚えた瞬間

バキンッ！！

巨人が腕に力を込め動かすだけで鎖を引き千切ってしまった。

「なっ！？ 腕力だけで！？」

驚くユーノに巨人はフルフェイスの兜の口部分を開く。そこから更に赤い光が漏れ出し。

「全員回避！！」

クロノが大声で命じ、飛ぶ。その後が続いて他の隊員が、そこから一拍遅れてユーノが飛ぶ。
直後ユーノの足元を炎の波が駆け抜けていった。

「ユーノ……！？」

「大丈夫……！ 当たって」

「ぐっ……！？ かひゅ……！！」

回避が遅れたユーノにクロノが声を掛けるも、続けて聞こえた声に振り返る。

そこには骨を繋げたような鞭を首に巻き付けられ、あらぬ方向に顔を向けた隊員の姿があった。

「……………無益です……………」

ソニアが小さく呟き、鞭が隊員から離れ戻っていく。同時に隊員が使用していた飛行魔法が切れ落下、炎の海へ落ちていく。

「貴方達が敗北する理由があるとすれば……………それは貴方達の常識でしょうね」

ソニアが柄を振るい鞭を地面に叩き付ける。そこにはどれだけの力が込められていたのか、鞭が叩き付けられた場所が捲れあがり、溝を刻む。

「そんな事は有り得ない。そんな事は不可能だ。知りなさい。これが貴方達の知ろつとしない世界の外側……………」

「……………！ 総員散開しろっ！！」

ソニアが左腕を掲げた直後、クロノが指示を出す。散り散りになって距離を取ろうとする彼等に、巨人が槍斧を振り上げ突撃した。

SIDE Eーなのは

「くっ………！」

正面に飛ぶ一人が撃つ砲撃魔法をギリギリまで引き付けてから右に躲す。

「デイベインシューター！」

回避行動の傍ら四発の誘導弾を放ちつつ、別の魔法を発動してから更に右へ飛ぶ。

後を追ってくるように別の人が射撃魔法を連続して撃ち込まんでくるけれど、相手を中心に円を描くように飛んでいれば動きを読まれない限りはそうそう当たらない。っと思っていたら丁度一周したところで三人目の人が正面に周りこもつとるのが見えた。

けど……。

「レイジングハート！」

『Restrict Lock』

そこは丁度ディバインシューターを撃つのと同時に拘束魔法を設置しておいた場所。
そして……

(……ごめん……なさい……！)

バインドの設置場所に移動した相手に拘束魔法を発動して捕縛。更に追い打ちで空中に飛ばしていた誘導弾を撃ち出す。
非殺傷設置が解除された魔力弾は相手の右腕を、脚を貫いて。

(ッ………！)

頭を撃ち抜くのを確認する。

「あと……二人……！」

頭を破壊された死体は動くことなく落ちていく。
死んでるのは最初から分かっている。それでも生きて動いている“人”のように見える“死体を撃つのは凄まじいプレッシャーを感じるし、心臓を鷲掴みにされたような違和感に吐き気すら覚える。

(でも……今ここでこの人達と戦えるのは……！)

フェイトちゃんは【ティアマト】のメンバーらしき黒衣の男性と戦っている。

私が桔梗ちゃんを探す時間を稼ぐ為に……。ならば逃げている時間は無い。すぐに目的を達成してフェイトちゃんと合流するべきだろう。

それに……このままこの人達を放置していくのは、あまりにも悲しすぎる。

(私に出来ることは……一刻も早くこの人達を終わらせてあげるだけ……！)

『Round Shield』

再度撃たれる砲撃魔法を防御魔法で凌ぐ。その間にレイジングハー
トを砲撃形態に。

『マスター！』

「ッ……！？」

その時後ろから衝撃を受け、両腕が何かに掴まれた。更に掴まれた腕にバインドを掛けられ動きを封じられた。

「ッ……！ くっ……！！」

後ろを振り返ればそこには血の気を失った男性の顔。

（まさか……！？）

嫌な予感に正面を向けば、先程と同じ砲撃魔法を構える死者の姿。

（この人ごと……！）

どこかで勘違いをしていた。明確な連携をとって戦う彼等は同士討ちをするような攻撃はしないと。彼等は既に死んでいて、その死体は別の魔導師に操られているのを半ば忘れていた。

(バインドの解除を……！)

そっちは思ってもどうも考えても相手の方が速い！

(ダメ……躲せない……！)

SIDE-OUT

SIDE-HEIGHT

「おおおおおおおっ！」

「いやあああああっ！」

私の前で二つの黒が激突している。

あの夜と同様の黒いコートに黒い刀を持ってオレンジの髪の人が凄まじい速さで刃を振るい続けている。

対して【ティアマト】の黒衣の魔導師も手に持った銀色の剣と、周囲に浮かぶ四振りの金色の剣で受け続けていた。

ただ、さっきまでと違ってオレンジの髪は手数で押されることはなく、スピードだけで五振りの剣と斬り合いを続け、圧倒している。

(…………でも…………)

何故彼は私を助けたのだろっ…………？ あの人達はあるな殺し方をして…………。

さっきからずっとこの事を考え続けている気がする。

「分かりませんねえ！ 何故貴方がそこまで必死になる！？ 貴方があの人形の何を知っている！？」

そんな私の気持を代弁するように、斬り合いを続けながら【ティアマト】の魔導師が問い質していた。

「何も知らねえさ！ 知ってんのはフェイト、っていう名前ぐらい！ 長くて名前なんて全部は覚えちゃいねえ！」

……………。

「はっ！ 赤の他人も同然……！ そんな他人の為に命まで賭けますか……！？」

「知らねえことばかりだけどな……！ それでも分かってることはある……！ あいつらを動かしたのはためえの仲間か……！？」

鏢迫り合いの状態になっている間にも続く会話。
けど……あいつら……？ 動かしていた……？

「あいつら……？ ああ……！ 管理局の兵士共ですか……確かに動かしていたのは姉さんだ……！ 尤も……肉体を破壊されたついでに“操り糸”も切れたようだけどね……！ 姉さんでも流石に距離がある上に即席の糸では限界がある……！
まあ……どの道用済みだ……！」

「用済みだと……！？」

「貴方への足止めであいつらの利用は十分……！ まだ他にも居ますしね……！ さっき飛んでいった女……！ 高町なのはも今頃は同じように戦っている頃でしょうね……！」

（なのはが……！？）

思わず声を上げそうになった瞬間、黒衣の魔導師が動いた。罅迫り合いの状態から後ろに下がったのだ。その動きに当然とばかりにオレンジ髪の男性も前に出て

いやあああああああ！

またあの悲鳴が響くと同時に黒衣の魔導師が横に身をずらし、その脇を砲撃魔法が通過していく。

「なにっ……！？」

オレンジ髪の男性が驚いた声を上げたのが聞こえた。今までは上空から撃たれるだけだったことに加え、彼からは魔導師が壁になっていて見えなかったのだろう。水平に撃たれた砲撃魔法を避けるタイミングを逸した彼は漆黒の刀で受けて、しかしギリギリと後ろに下がっていく。

「終わりだ！ 砕け散れ、調停者！！」

うわあああああああ！！

更に響く悲鳴と共にオレンジ髪の男性の背後で新たな砲撃魔法が放たれるのが見えて

「……………！」

飛び出した。その自分の反応に自分が驚いた。

「バルディッシュ！」

『Load Cartridge。
Round Shield』

彼と背中合わせに立ちバルディッシュを構えてカートリッジをロード。防御魔法を展開して正面から砲撃と向き合う。

「おまえ……………！？」

後ろから聞こえる声に応える暇も無く、砲撃魔法が展開した防御魔法に激突した。

「うっ……！ くっ……！」

激突の衝撃に思わず呻き声が漏れる。

なのはのデイベインバスターには劣るけど重い。気を抜けばあっさりと貫かれる！

「ッ……！ ハア………フウ……」

それでも時間と共に魔力は薄れ砲撃魔法が消えていく。

「お前……」

砲撃魔法が消えた時、後ろから掛けられた声に振り返る。そこには怪訝な顔で私を見下ろすオレンジ髪の男性の姿。どうやら彼もあの砲撃を凌いだらしい。

「どっして

」

「私は……！」

彼の言葉を遮って声を出す。

「私はあなたの事を何も知りません。名前すらも知りません」

前回は何も聞く暇も無く彼の姿を見失った。

「あなたが何処の世界の人なのかも……どうしてこの世界に居るのかも……何故あの人達を殺したのかも……」

今日見つけた時は局員を惨殺する彼の姿だった。

「だから話してもらいます……！」

けど……何度も危ないところを助けてくれたのも彼だった。

「あなたの事情も」

ヴヴヴウウウウウウ

「……………!?!」

喋り続けようとした矢先、突然響いたサイレンに、咄嗟に後ろに下がる。その直後、足元を何発もの弾丸が跳びはねていく。

「お喋りの途中、申し訳ありませんが……僕達にも時間が」

「あなた達もです……………」

そう言うと黒衣の魔導師は不快げに表情を歪めた。

「なに……………?」

「あなた達がどうして闘うのか……………あなたが言う襲撃者のこと話してください。そうしたら」

「そうしたらなんです……………? 誤解が解けるとでも……………? くだらない……………! お前達時空管理局がすべき弁明の機会などとうの昔に過ぎていく!」

「どっぴろ……………?」

「自分の胸に手を当てて聞け……！ 尤も……貴女ごときに心当たりなど無いでしょうがね……！！！」

言い終わると同時に彼の身体から魔力が圧力となって放出されてくる。

「……！」

「……一護だ……」

「……えっ……？」

その声のした方へ振り向けば、オレンジ髪の男性が私の傍に立っていた。

「い・ち・ご……！ 黒崎 一護だ……！」

それが私の聞きたかった彼の事 名前だと一瞬遅れてようやく気付いた。

「いちご……母……？　かわいい名前ですね……」

「ああ？……！？」

「えっ？　えっ？」

率直に褒めたら何故か怒られた。

「絶対に字が違っただろ！　漢字のーに護衛の護だ！
ツ〜！　それよりもあいつだ……！」

苛立った風に髪を掻きむしった後、彼……一護は黒衣の魔導師に向
き直った。

……？　って、この人の名前……漢字……！？

「あいつは……天貝さんと同じだ……復讐の為ならなんでも出来る。
それこそ自分の命を犠牲にすることだってな」

「あの人の事知ってるんですか……！？」

けれど、一護の言葉に生じた疑問は新たな疑問に変わった。

「直接聞いたわけじゃねえよ。ただ……あいつの目が、ジイさんに刀を向けた時の天貝さんとそっくりだ」

「目……？」

「それにあいつの剣……最初は何も感じなかったのに、剣を合わせるごとにどんどん殺気が乗ってきてやる。まるで何かに苛立ってるみてえにな……」

剣を合わせただけ……ただそれだけでそこまで解るものなのだろうか……？

「どつちにしろ、このまま放置も出来ねえ。違つか？」

「……はい……」

「なら、今はやることは一つだ」

そう言って一護が漆黒の刀を握り直し、構える。

「バルディッシュ」

「Loud Cartridge」

私もカートリッジをリロードし、足元に魔法陣を展開する。

「そうだ……それでいい……ただ殺すだけじゃ意味が無い……」

「いくぜっ!」

「プラズマ」

一護が高速移動魔法を使って飛び出し、ジグザグに駆けていくのを見送りながら、私も左手を黒衣の魔導師に向け、魔力を集束させていく。

「足搔け……そうやって傷だらけになって、痛みにもたうって絶望しながら倒れ、息絶えろ……! それだけが……! お前達が平和の為の踏み台にしてきた者へと出来る償いだ……!!」

「スマッシュチャー!」

右へ左へと走る一護目掛けて放たれる何発もの砲撃魔法の内の一つに砲撃魔法を放ち相殺する。

「おおおおおおっ！」

僅かに出来たその隙間を一護がすり抜けて跳ぶのを確認して、私も前に出る為に飛ぶ。

桔梗の状況も分からず、なのはも危ない目に遭ってるかもしれない……。

あまり時間は掛けられない。

全力で……終わらせる！

S I D E I O U T

第三十八話

「ふっ……！」

「ッ……！」

ソニアが振るう骨の鞭にユーノが膝をつきサークルプロテクションを発動。半球形の防御魔法がユーノを覆い鞭の一撃を受けるが。

「なっ……！？」

ただの一撃で防御魔法に小さな輝が入るのに気付き呻く。

「構え……撃てええ！」

一方のクロノも間合いを取り他の隊員に指示を出しながら、巨人に射撃魔法や砲撃魔法による攻撃を加え続けていた。
だが。

（効かない……！ 防御魔法を使っているわけでもないのになんだ
！？ この堅さは！？）

間合いを離し、周囲を囲みながら放たれる攻撃は、しかし巨人の鎧を砕くことが出来なかった。射撃魔法は鎧の表面に虚しく弾かれ、砲撃魔法ですら僅かにその動きを止めるだけ。魔導師同士の闘いでは有効な決め手の一つである砲撃魔法が牽制にしかならない。それはすなわちクロノ達管理局の戦力では、現状この巨人を倒す手段が無いということ。

「クロノ提督！」

その戦場に結界の基点、残り四箇所に待機していた魔導師達がどんどん集結していく。

（これで全員か……！　だが、これだけの戦力が揃ってもこいつを倒すには足りない……！　せめてなのはクラスの火力が必要だ……！）

「こいつはこちらで抑える！　君達はこいつを操っている筈のあの魔導師を頼む！」

「はっ！」

新たに現れた隊員達に指示を出しつつ再度巨人に向き直ろうとして

。

「……………！」

間合いを引き離れた筈の巨人が目の前で斧槍を構える姿を見て咄嗟にシールド魔法を展開した。

「新手……………ですか……………」

クロノ達と巨人が交戦する戦場を迂回して自身に迫る魔導師を見てソニアが呟く。だが、それは彼等への警戒故ではなく。

（ニーニヤ……………これで全て？）

（うん……………結界の周りに居た人達は皆此处に集まってる）

（そう……………中の様子は？）

（メイズは……………管理局の金髪の人と……………調停者と戦ってる……………。
ストレンドは……………？ ストレ……………ンド……………？）

(ニーニヤ?)

(ストレンドが……押されて……? ストレンド……!)

(ツ………! ニーニヤ! 最初に教えたタイミングで直ぐに来なさい!)

敵を前にしながらニーニヤと念話を行っていたソニアは、途中様子がおかしくなったニーニヤに強く言い付け念話を切る。

(これを使えば……私の技量では細い糸は全て切れてしまう……。もっとも、選択肢すら選んでいられる状況でもない……)

「開け……冥土の門よ……」

動きを止めたソニアに隊員達が一斉にデバイスを向けて

「私には死を……汝には誉れを……!!」

直後、彼等の足元に空間の揺らぎが現れ、そこから噴き出した魔力の渦に吹き飛ばされた。

「なんだ……!?!」

「これは……召喚魔法……!?! けど、こんな術式……!?!」

突然吹き付けた魔力にクロノが振り返り、防御魔法を張り続けるクロノが見たことの魔法に驚愕の声を上げる。

その瞬間、空間の揺らぎから幾多の太い鎖に拘束された巨大な右腕が現れ。。

「グローリーハンド(その右手に栄光を)……!?!」

拳を握ると同時にその周辺で無色の魔力が爆発した。

「はあああああああっ!?!」

「おおおおおおおっ!?!」

大気を震わすサイレンが、耳を劈くような悲鳴が響く中、一護とフェイトが空中に立つメイズの左右から同時に斬り掛かる。

「ちっ………！」

左右から迫る二人にメイズは四振りの金色の剣を一護に向かわせ、手に持つ銀色の剣でフェイトのバルディッシュを弾き返す。

「くっ………！」

それでもフェイトは手首の動きでバルディッシュを旋回させ、再度斬り掛かる。

「ふっ………！」

ろうとして、視界の端に銀色の光が煌めくのが見え、咄嗟に上体を逸らす。

そのフェイトの目の前を銀色の剣が通過していく。

「遅い………」

『Blitz Rush』

更に通常では有り得ないような速さで手首を返し、下段から銀色の剣を振り上げるメイズにフェイトは加速魔法を発動し、一気に間合いを離す。

「おらあっ！」

そしてフェイトと入れ替わるように、今度は金色の剣をたたき落とした一護がメイズに肉薄し、斬り掛かった。

「はあっ！」

一護の斬撃にメイズも蒼色の魔力光を燈し、天鎖斬月に勢いよくぶつける。

「ぐっ………！」

「ッ………！」

一瞬の拮抗。霊圧と魔力の衝突に弾き飛ばされたのはメイズの方だ

った。

「…………！」

そこから更に追撃を仕掛けようとした一護は、しかし下から放たれた機銃の対空掃射に後退を余儀なくされ。

いやあああああああ！！

「…………！ぐっ…………！」

回避先を狙って上方から撃ち込まれた砲撃魔法を正面から受けた。

「ぐっ…………うおおおおっ！」

砲撃魔法に押され地上に激突する寸前、一護が身体を捻り砲撃魔法の射線から外れ、かろうじて地面に叩きつけられるのを回避する。

（強い…………！ 守勢に回るだけでここまで攻め辛くなるなんて…………！）

三者の間合いが開いたことによる僅かな空白。互いに次の一手を模索する中、フェイトはメイズの戦術の変化を感じていた。当初一護と戦っていたメイズは一護を倒す為に積極的に攻撃を仕掛けていた。だが、その戦いにフェイトが参戦したことでメイズは戦い方を変えた。敵を倒す為の戦い方から、敵を翻弄し、その動きに合わせたカウンター主体のトリッキーな戦い方へと。

(剣は速いのに太刀筋は素人みたいに出鱈目……)

剣技を始めとするメイズの近接能力は高くはない。これまで一護の攻撃を凌いでこれたのは、剣を合わせることで相手の剣速とまったく同じ速さで斬り返すことが出来る魔術と、達人の剣技を模倣して攻撃する四振りの金色の剣による手数があったからだ。そして二対一という不利な局面に対し、メイズは手数の多さを近接攻撃への防御に回し、攻撃は砲撃魔法や機銃、砲撃に任せていた。

(近接戦闘は剣。遠距離攻撃は砲撃魔法や質量兵器……問題は破壊力よりもどこから攻撃してくるのがわからない)

フェイトがスピードを生かして、一気に懐に飛び込もうとした瞬間、後ろから撃たれ、回避の為にメイズから距離を離す、という状況も一度や二度ではなかった。

(早くなのはや桔梗のところにも行かないといけないのに！??)

二人掛かりでも攻め切れない。その状況にフェイトが苛立ちを覚え始めた瞬間、遠方から凄まじい爆発音が響き大気を揺るがした。

「ふん……。【力】め……。随分と派手にやってるな……。こっちまで影響が無ければいいが……」

全員が爆発音のした方に視線を遣り、メイズが小さく呟く。

「いや……。この場合、【力】の全力戦闘に真っ向から対抗出来るあの小娘の方が異常か……。
ここまでやり合えるのは【太陽神】か【竜】だけ……。あの小さな身体はどこにこれ程のパワーがあるのか……」

「この霊圧……。マジで隊長格連中と同格かよ……。？ 何者だ、あの女……？」

(小娘……？)

「あなたが言っているのは……。左目に古傷を負った女の子のことですか？」

「…………？ ええ…………その通り。彼女が持っているらしい“鍵”がどうしても必要でしてね…………。【巫女】と【力】が二回も襲撃したらしいですが…………」

尚も響く爆音を背後にメイズはなんでもないことのように語る。だがフェイトには聞き逃せない言葉もあった。

「“鍵”…………？」

「………………。今更貴女達が足掻いたところでどうしようもないことだ…………。いいでしょう。教えてあげますよ…………。僕達【ティアマト】の目的。あそこまで話せばもうお分かりでしょう？」

「時空管理局への復讐…………ですか？」

メイズの問いにフェイトが僅かに眉を顰める。

「管理局に所属する世界…………そこに住む人間…………全て根絶やしにして…………ね」

「そんなこと…………出来る筈が」

「確かに……人間はしぶとい。どれだけ叩き潰そうと必ず生き残りが出る。そしてまた生き残った奴が新たな管理局となる。ですが……“鍵”の持つ力と首領殿が言う神……“王”の力があれば生き残りなど絶対に出ない」

「神……？ あなた達は一体何を」

「次元連鎖崩壊……！」

するつもりですか……？ そう聞こうとしたフェイトの言葉を遮りメイズが言う。

「次元……連鎖崩壊……！？」

「そう……！ ある特定の繋がり……その繋がりを利用して全ての次元世界に“王”の力を打ち込み、その次元そのものを破壊する……！ それこそが僕達復讐者達の会合である【ティアマト】の最終目的……！」

そこまで一息に語ってからメイズはフェイトに手を向ける。

「この計画の一番の特徴は生き残りを絶対に出さない、ということです。何処に逃げようが……それこそ次元を越えようが、繋がり

持った瞬間からその世界も破壊の対象になる……!!」

「おい……!! ちょっと待て!!」

そこで割り込んだのは、それまで二人の会話を聞いていた一護だった。

「てめえの言ってることが本当ならここも……!!?」

「絵に描いたような巻き添え……!! としか言いようがありませんね」

今度は一護を見て、メイズは口端を吊り上げる。

「その事で僕達を恨むなら見当違いです。もう随分前からこの世界は時空管理局の調査の対象にされ、侵入を許している。その時から既にこの世界も破壊の対象だ……!!」

そしてフェイトに向けていた腕を振ると同時に再びサイレンが響き渡る。

「そんな事……絶対にさせない……!!」

戦いの再開を告げる音にフェイトがバルディッシュを構え、一護も斬月を持ち直す。

「僕を倒して……ですか？ 無駄ですよ！ 言ったでしょう……！
足掻いたところでどうしようもないと……！」

メイズの傍に四振りの金色の剣が舞い戻る。

「時が来れば【剣】や【竜】が動く……！ そして【太陽神】とその側近である【槍】、そして【災厄】も来る……！ それぞれが僕と同格かそれ以上の戦力を有した復讐者達が！
僕一人に苦戦している程度の貴女達ごときがどうにか出来るものか
……！」

「出来るかじゃ無えだろ……！ 絶対にさせねえ！」

「バルディッシュ！」

『 Loud Cartridge。
Haken Form』

一護が斬月を下段に構えて飛び出し、フェイトもバルディッシュを

鎌状の形態に変え、回り込むように迂回して飛ぶ。

「ハーケン……セイバー！」

そして間合いが狭まったところで出力していた魔力刃をメイズ目掛けて放ち、加速魔法を発動。一気に間合いを詰めに掛かる。

「はっ………！」

迫る金色の刃をメイズは一笑し、砲撃魔法を使用。ハーケンセイバーを撃ち落とし、急速接近してきたフェイトに銀色の剣を振り下ろす。

「くっ………！」

『Defensor Plus』

メイズの斬撃にフェイトが左手を翳して防御魔法を起動。バリアで斬撃を逸らしつつ、一瞬だけ金色の光を残し高速でメイズの傍を通り過ぎていく。

「おおおおおおおっ！」

そしてフェイトとすれ違いで、今度は一護が間合いを詰め。

「残念。その手はさっき見ました」

メイズが呟くと同時にサイレンの音が変わる。

「ッ………!?!」

ボンッ！ という音が一護の真上から響き、直後一護を凄まじい爆発と爆煙が押し包んだ。

「一護!?!」

その瞬間をやや離れた場所から見ていたフェイトが叫ぶ。

「ははははっ！ クラスターボムという奴です！ ご存知ありませんでしたか……!?! あっはははははは！」

クラスターボム。上空から散蒔かれる地雷の一種であり、戦闘機から放たれた親機が百発にも及ぶ地雷である子機を放出、広範囲に渡

つて地雷を設置するという近代兵器。

メイズは一護の進路上にこの子機を散布し、一護は散時かれた地雷群に自分から突っ込む形になってしまった。

「おおおおおおおっ！」

「……！？」

百発近い地雷の爆発。肉片一つ残さない過剰火力をその身に受けてもなお、途絶えない霊圧にメイズが顔色を変える。同時に爆煙が黒い霊圧に吹き飛ばされ。

「おおおおおおおっ！」

中から黒い紋様が入った白い仮面　　虚の仮面を纏った一護が飛び出した。

「なんっ　　！？」

爆発的に向上し、禍禍しさを増した一護の霊圧に驚愕しながらも迎撃するべくメイズが剣を構える。

『 Lightning Bind 』

その瞬間、メイズの傍で金色の魔法陣が展開され、右腕に金色の輪が掛けられメイズの動きを拘束する。

(バインド……！？ いつの間に ……！？ さっきすれ違った
時か……！)

「 月牙……！！ 」

突然発動したバインドに困惑する間にも一護は斬月に霊圧を纏わせ

「 くっ……！！ ？ 」

主を護る為に金色の剣が壁になるように次々と一護に斬り掛かる。

「 天衝……！！ 」

その金色の剣の壁を月牙天衝を纏った斬月の一太刀で全て砕き

「馬鹿なっ……！」

眼を見開くメイズの身体を斬り裂いた。

「はあああああああっ！」

「！」

紅い炎を纏った長剣と拳が激突する。

「ままだっ！」

ストレンドの拳の強度と腕力に押し返されながらも桔梗は更にもう一度刃を振り下ろす。

「！」

その攻撃をストレンドは右の拳で受け、血を流しながらもなんとか皇呀を跳ね上げる。

「はあっ！」

だが、次の瞬間跳ね上げられた皇呀の刀身に紅い火花が走り小さく爆発。直前の一撃を更に上回る速さで皇呀が振り下ろされる。

「ッ　　！？」

予想外のスピードにストレンドの防御が間に合わず、肩に直撃する。

「えええええいつ！」

しかし皮は裂けても骨は砕けない。それでも桔梗は皇呀の刃を振り抜き、肩から脇まで一気に斬り裂き、瞬歩で飛び退く。

「震天……！」

瞬歩で間合いを開けながらも桔梗は皇呀に紅い炎を纏わせ切っ先を猛追してくるストレンジに向ける。

「破城杭!!」

桔梗が皇呀を突き出すと同時に、杭のように集束された紅い炎が撃ち出され、ストレンジに向かっていく。

「!!」

ストレンジはその一撃を避けず、迫る炎の杭に魔力を込めた拳を叩き付けた。下手に避けて隙を作るより、目の前の炎を打ち砕いた方が素早く間合いを詰められると判断した上での行動だった。

「ッ……!!」

「ッ!!」

一瞬の静寂。次の瞬間、魔力の激突に耐え切れず炎の杭が爆発。周辺に凄まじい爆音を響かせた。

「!？」

爆発の衝撃に揺らぎ、黒煙に視界を塞がれながらも前に出ようとしたストレンド。その彼の顔を黒煙を裂いて現れた小さな白い手

桔梗の掌が鷲掴みにし。

「ぬっんっ!!」

後頭部から勢いよく地面に叩き付けた。

「!？」

その細腕から想像出来ない腕力に驚愕し、ストレンドは咄嗟に桔梗を振りほどくことが出来ない。

「ふんっ!!」

そのストレンドに桔梗は顔を鷲掴みにしたまま片手に持った皇呀を振り上げる。

「ッ
!?!」

その段階になってようやく、平静を取り戻したストレンドが腕を振り上げ、桔梗に振り下ろす。

「ちっ……」

ストレンドの反撃に小さく舌打ちをしながらも桔梗は無理せず、皇呀を振って紅い火花を残しながら後退していく。

「……！」

追い打ちで残された紅い火花には流石に慣れたのか、ストレンドは立ち上がる動作で、地面に手をつくついでに紅い火花も地面に叩き付け。

「……！」

手の平で爆発するのにも気にせず、即座に立ち上がる。

「ハア……ハア……」

「ッ　　、ッ　　、ッ　　……」

開いた間合い。次の攻めを模索する空白の時間。その間に二人は乱れた呼吸を整え始める。

今だ無傷とはいえ、凄まじい圧力を伴って繰り出されるストレンドの一撃と、どれだけ攻撃してもすぐに治癒してしまうストレンドの再生能力は確実に桔梗の精神に負担を掛ける。

一方のストレンドも、どれだけ高い再生能力を持つと失った体力まで取り戻せない。積み重なる疲労は確実にストレンドを蝕んでいた。

「ッ　、　ッ　…………ッ　！」

それでもストレンドは拳を構えた。例え負け戦だろうと彼に意味の無い逃走は有り得ない。

「フウ…………やれやれ…………。仕方ないな…………」

対する桔梗も、どこか諦めたような溜め息を吐き、皇呀を水平に構えた。

「…………」

それは今までと変わらない構え。だが、ストレンドはすぐに突撃しなかつた。

「正直……ここまでの強さとは思わなかった……」

突撃出来なかった。皇呀を構えた瞬間、桔梗の雰囲気が変わったのをストレンドは鋭敏に察知していた。

「他にも居るだろう奴らの戦いの為に戦力は温存していきたくったが……そんな我が儘が許されるものでも無いらしい」

静かに語る桔梗。その手に持った皇呀の刀身に。

「だから……ここからは出し惜しみ無しだ」

輝が入る。小さな輝は少しずつ刀身全体に広がっていく。

「」

ストレンドは動かない。普通であれば好機であると考えその光景。激しい戦いに武器が耐えられなかったと判断するその状態。

「私の斬魄刀の力は炎と戦争。それを具現するのにこの剣の形は“

小さすぎる。」「

それでもストレンドは動かない。

戦士としての直感が安易な突撃を拒否していた。

「さあ……いくぞ、相棒……？ 久しぶりの戦争だ……！」

皇呀の刀身に走る輝。そこから炎が噴き出す。まるで中から溢れ出すように。

そして。

「開戦だ、ストレンド……！」

「……解……！」

第三十九話（前書き）

また文章量が短くなってきてしまった。

話の区切りを考えるとこの辺りがちょうど良いかな〜、とか思ってしまったのは怠惰ですかね。

それと、後書きにてアンケートがあります。

全然切羽詰まったものじゃないので、この作者また何か疲れてんのか、程度に見てもらって大丈夫です。

それでは本編をどうぞ。

第三十九話

風が吹き荒れる。大地が割れる。

「くっ……」

「イ……ッ……」

舞い上がる砂塵が視界を塞ぐ中、地面に叩きられたクロノと、その傍まで吹き飛ばされたユーノがゆっくりと立ち上がる。

「無事か……ユーノ……？」

「なん……とかね……。他の人達は……？」

互いの安否を確認し合い辺りを見回す。
魔力の暴風は既に消えていたが、砂塵が視界を覆い尽くし周辺の確認を困難にしていた。だが、そこかしこから聞こえる呻き声になんとか生存しているとクロノは判断した。

（あの魔導師は……？ どうなった？）

「助かりました……クロノ・ハラオウン提督」

クロノが周囲の警戒を始めた瞬間、ソニアの声と共に強い風が吹いて砂塵を吹き飛ばし。

「前後を挟まれた状態でもっとも危惧していたのが退路の確保でした」

風に法衣をはためかせたソニアと、その傍に金髪黒目の少女、ニーヤが浮かんでいた。

「あなたが私の時間稼ぎに付き合い、他の結界への魔力供給源から援軍を呼んだ」

ソニアが手を振ると身動き一つせず立っていた巨人が、足元に出来た空間の揺らぎに沈んでいく。同時にニーヤが巫女服の袖から白い布を引っ張り出す。

「その結果、周囲を囲んでいた者達が消え、退路が確保された。互いの戦力差を明確に理解できる……貴方の戦術眼が救いでした」

ニーヤが腕を振ると、二人を中心に白い布が蛇のように蜷局を巻きだす。

「背後からは調停者達が迫っている状況ですので、貴方達の相手をしている暇はありません。これで失礼させていただきます」

「ッ………！ 待て！」

やがて二人を包んだ布が小さくなり消えていく。だがそこに二人の姿は無かった。

「消えた………！？ ……エイミー！」

「クロノ君！？ 大丈夫なの！？ さっき凄い魔力の爆発が

」

「現場の魔力反応は捕捉はしてたな！？ あの二人の転移先は！？」

アースラのブリッジで戦場の監視を行っていたエイミーに通信を繋ぐ。

「えっ！？ ちょっと待って………！？ ……転移先を………

捕捉！ 結界を挟んだ………ちよつど反対側！」

「なんだとっ!?!」

(個人で使う即席の転移魔法じゃ、この距離は追い付けない! この結界自体が壁になっているせいで飛んで追うのも時間が掛かる! この結界は隠蔽や隔離の為じゃなく)

「逃げる為だったのか……!?!」

「ニーニャ!」

「ちょっと……待って……!」

妨害を受けることなく転移を完了したところでニーニャが右腕の袖を捲り、その腕に黒い墨で紋様が描かれ始めた。

(早く早く早く……!)

気ばかりが逸る中、肩の高さまで上げた右腕の先に四角の図形が現れる。そして。

「皆……逃げて……!!」

結界内で捕捉している全ての存在に叫んだ。

S I D E E I なのは

「……えっ……?」

気の抜けた声しか出せなかった。
デバイスの先を向けられ、環状魔法陣に魔力が充填されていく光景をただ黙っているしか出来ない状況で。

「一体……どうして……？」

突然彼等が使っていた魔法が停止、消滅した。

砲撃魔法、バインド、飛行魔法……死んでいるにも関わらず使用されていた魔法が消え、糸の切れた人形のように落下していった。

（攻撃を受けた様子も無いし……彼等を操ってた人に何かがあった？）

一番考えられるのはあの人達を操っていたのは、あの黒衣の魔導師で、その人をフェイトちゃんが倒した、というのが一番ありそうだけど……。

「……ちゃんと……遺体を拾ってあげないと　　！？」

とにかく彼等の遺体を一箇所に集める為に地上に降りようと決めた瞬間、凄まじい魔力の流れが吹き付けてきた。

「これ……！　魔力……！？　あの時と同じ……！」

一昨日の夜にシュトーゼさんと戦っていた時に発生した二つの魔力の爆発的な急上昇。

フェイトちゃんの話だと片方はあのオレンジの髪の人で、“ばんか

い“と読んでいたらしい。
けど……。

(あの人の魔力反応はさっきあったから)

私が戦闘を始めてから少しして、あのオレンジ髪の人魔力反応が急上昇したのは捕捉していた。

「じゃあ……これは……誰が」

(皆……逃げて……! !)

頭の中で、どこか搾り出すように叫ぶ女の子の声が聞こえた。

(今は……念話……? 逃げて……って、一体……?)

S I D E I O U T

(皆……逃げて……!!)

「……………!?!」

瓦解の為に霊圧を上昇させていた瞬間、頭の中で幼い子供の声が響いた。

「これは……『天挺空羅』か……!?! ツ……!?!」

油断していたつもりは無かった。ただ、突然響いた声に気を取られたのも事実だった。

「……………!?!」

そしてストレンドが行動を起こすにはその一瞬で十分だったらしい。耳に届いた爆音に意識を戻した時には、ストレンドが右の拳を地面に振り下ろして大地を叩き割るところだった。

「……………!?!」

そこにどれだけの力が込められていたのか、大小を問わずかなりの数の岩塊が宙を舞う。その中心でストレンドの胸部が不自然な程膨れ上がり。

「……………！！」

「……………！！」

“それ”は人間の可聴域に収まる音では無かった。

膨大な霊圧も籠めて放たれた音圧は、音速と呼ぶにはあまりに遅いスピードで、しかし周囲で舞っていた岩塊を巻き込んで確実に迫って来た。

「ちつ……………！ 相棒！」

迫る音の壁もそうだが、この場合、吹き飛んで来る岩塊も脅威だ。数が多い上に、特別な狙いも無く飛んでくる為に落下先を予測出来ない。下手に動く回避先に落ちてくる可能性がある。

（とはいえ卍解する余裕は無い……………！ 始解で使える技で防ぐしかない！）

皇呀の刀身に炎を流し、輝割れを消す。

（炎城壁は却下。炎と霊圧の流れで飛び道具や鬼道を逸らす技じゃこれは防げない！ 紅刃之草薙、烈火鬨槍、紅星弓、震天破城杭、魔刃炎撃覇は殺傷力はあつてもこの攻撃は相殺出来ない！ 雷朱咆紅は展開している時間が無い！
なら……！）

迫る音の壁と飛んでくる岩塊を、それ以上の破壊力を持った技で押し返すしかない！

「魔皇喝采、劍姫乱舞

」

皇呀から紅い火花を発する。同時に周りに散蒔くように回転しながら後ろに跳躍。その動きに釣られるように火花も私の周りで渦を描く。そして渦を描く火花は風に煽られる花びらのように音の壁に向かい

「上炎華撃！！」

地面に突き刺さるドリルのように、指向性を持った爆発が渦を描いて音の壁にぶつかった。

SIDEーフェイト

勝ったのか、と思った。

一護が四本の剣を刀の一振りですり潰した時には凄いと思った。

そして……そんな、とも思った。

一護が刀を振り下ろすのと同時に、黒衣の魔導師の胸から血が噴き出すのを見た時、一護は非殺傷設定を使っていない、という可能性によろやく思い到った。

「一護 ……!?!」

慌てて二人に近付こうとして気付いた。

黒衣の魔導師が嗤っていた。

第三者の視点、と呼べる距離に居たから気付けた。

「……ヘルサイズ（地獄で謡う）……」

血が噴き出す黒衣の魔導師の胸。その前に見たことの無い形の蒼い

魔法陣が現れ。

「……アヴェンジャー（報復の祝詞）……！！」

金色の光が洩れだした瞬間、一護が吹き飛んだ。

「一護っ！？」

吹き飛んだ一護は凄まじい勢いで地面に叩き付けられた後、何度もバウンドし、離れた大木にぶつかることでようやく止まった。

「一護！？ 怪我は」

「ッ……！ 掠っただけだ……！」

膝をつき、片手で不気味な仮面を消す一護に駆け寄る。
けど……掠っただけ、って……。凄い勢いで飛んでっただのに……。

「自身が今まで受けたダメージの全てを攻撃力に変換する」

「……！」

そんな……あんな傷を負って……？

「それが僕が使う武装の一つ……ヘルサイズアヴェンジャーの力で
す」

振り返った視界の先。そこには、一護に斬られ重傷の筈の黒衣の魔
導師がゆっくりと地上に降りる姿があった。

(ダメージを攻撃力に変える……？ そんな魔法が ……！?)

考える途中で気付いたその違和感。この人は一護に斬られて重傷の
筈なのだ。
なのに ……。

(傷が……無い……!?)

一護に斬られた胸の傷。それが消えていた。幻だった………というの
は無い。黒くて分かりづらいけど、服はさっきの血で汚れているし、
斬られた跡に沿って破れて服の下の肌を露出させていた。

「この武装のもう一つの特徴は、敵に当たった時、自身が負ったダ

メージを無かったことにする。
全てを相手に押し付ける、というわけです」

「そんなレアスキルを……」

「レアスキル……それが貴女達の持つ常識……。故に貴女達時空管理局は僕達【ティアマト】に勝てない……。そんなことは有り得ない、そんなことは不可能だ。その常識に縛られるせいで貴女達は常に後手に回る。そうして全てが手遅れになる……」

(皆……逃げて……!!)

「ちょうどこんな風に……ね……」

今のは……念話？ 一体誰が……？

「危ないところではありませんでしたよ？ まさかあの距離、あのタイミングで躲されそうになるとは思わなかった。もしも調停者に掠めなかつたら僕の死は確定していた。まったく……ハイリスクハイリターンにも程がある……」

念話に気を取られていた意識を黒衣の魔導師に戻す。
その時には彼の手に金色のロザリオが握られていて

「では失礼します。次に会うのが世界の終焉の時でないことを祈って下さい」

ロザリオを空中に放ると、光を放ち始めた。

「もつとも……その前にあなたが生きていければの話ですが……。次に来るのは【太陽神】か、【剣】と【竜】か……。どちらでも僕と比較にならないレベルですから……」

そこまで言ってからロザリオが一際強い光を放ち

「……！ 消え……た……」

黒衣の魔導師は居なくなっていた。

S I D E I O U T

第三十九話（後書き）

ここまで読んでもらってありがとうございます！

さっそく前書きにて書いてたアンケートについてですが……。

デビルメイクライ以外にも何か書こうかと思っしまいました。
デビルメイクライの番外編はストーリーとか設定とかも出来てきたので、後は書いてもネタバレにならない程度に本編が進んだ辺りで書こうと思います。

ただ、それとは別に他のも書いてみたくなった、という感じです。

なので他にもこんなクロスが見たい、てのがあれば感想掲示板か、ネタバレが嫌な方はメッセーじボックスにでも御一報ください。
ただ……

・基本的に桔梗中心

・基本的に一話完結（プロローグ的な感じに）

・作者が知らない作品は書けない可能性大

二つ目は読者に好評なら（本編も好評が分からないですけど）続きを書くかもしれないです。疲れてる作者にネタを提供してやろう、みたいな感じで付き合っていたら嬉しいです。

それでは次回の更新で。

桔梗のクロス短編企画第一弾（前書き）

アンケート企画第一弾です。

前話からアンケートをとって分かったことが一つ……。自分の趣味嗜好って大分偏ってたんだな〜、ってところですね。とある魔術の禁書目録とか屍姫とか殆ど読んだことがなかったので、これを機に本格的に読んでるところです。

他にもこれが見たい、等がありましたら御一報ください。

本編……？ もう少しだけ待ってください……。

桔梗のクロス短編企画第一弾

「とうわけでやって参りました！ IN 冬木市！」

「誰に言ってるんですか、義姉上？」

バスやらタクシーやらの交通機関を乗り越していくこと数時間。
ようやく香久弥殿の目的地である冬木市に到着した。

「滞在期間は三日程と……取り敢えずは何処かのビジネスホテルで
も探して」

「あれ？ 桔梗ちゃん、言ってなかったっけ？ 三週間ぐらいなん
だけど？」

「……………はあ!？」

いやいや……！ 陣谷殿から学校が休みなら姉に付き合っただれ、
三日程らしいが、迷子が心配だ、なんて言われたので付いてきたの
ですが!？

「あれ……？ おじいちゃんに渡した紙には三週間のスケジュール、

って書いてあったと思うんだけど……」

成る程……これはつまり……。

「耄碌したか……？」

三日と三週間を見間違えるとは……。家族とはいえこれぐらいの罵倒は許してほしい。

「……………ハア……………」。

愚痴ったところでどうしようもないですね……。それで？ 大学のフィールドワークだと聞いてましたが、まずはどこから？」

「まずはこの新都の公園。冬木市は中央に川があつて、駅とかショッピングモールとかがあるこつち側と、住宅街があるあつち側に分かれてるの。で、この公園、十年ぐらい前に凄い火事があつたらしくて……………」

そう言いながら香久弥殿が冬木市の地図を見せてくれる。

ふむ、香久弥殿にしてはよく調べてるな。ちゃんと大学生していたことに驚きである。

「桔梗ちゃん……」

「いえ……失礼な事など何も考えて」

「まだ何も言っていないんだけど……」

……おっと……。

「……か……」

香久弥殿が開口一番に呟く。

そこには何も無かった。そう言つと語弊がある。

木が立っている。ベンチがある。ただそれだけだ。公園と呼ばれながらここは人の影が少なすぎる。

「……」

香久弥殿が無言で手を握ってくる。

ここはただ空虚な場所ではない。十年前に大火事が起きたらしいが、この公園に漂う空気は明らかに質が違う。その気配の禍禍しさでは虚など遠く及ばない。

「行きましよう、義姉上」

握ってきた香久弥殿の腕を引いてその場を立ち去る。

ここは……常人が居ていい場所ではない。

「うづ〜〜！ っと……！」

新都と深山町を繋ぐ大橋。

その橋を渡りきったところで香久弥殿が大きく伸びをして身体を解しはじめた。

「一挙に楽になったかな〜」。

なんか……どつと疲れたような気がしてたけど、気のせいだったかな？」

とか言っているが、あの公園に漂っていた気配　　怨念は相当マズイ。ただ居るだけで相当な負担を香久弥殿に強いている。あそこには近付かない方が賢明だろう。

「よしっ！　それじゃ気を取り直して、次に行こうか！」

「……っと言ってももうすぐ日も暮れますね……？　ホテルも探さないと野宿ですが……？」

「……桔梗ちゃんと野宿、っていうのも　　」

「………？」

「………「めんなさい………」」

元々はあの公園で負担を掛けた身体を休めよう、ということまでショッピングモールに入ったのが始まり。地元である海鳴市とは違う品揃えを見て香久弥殿が暴走。あれやこれやと買い物する内に日が暮れ始めたのだ。

………唯一の救いは買った物があまり荷物にならない化粧品とか

の小物類ばかり、ぐらいか。

「あと！ あと、この柳洞寺……！ この場所の確認してから泊まる場所を探そう……！」

「……………分かりました……………。そのかわり……………絶対に逸れないでください。道に迷ってる時間は無いんですから」

「大丈夫大丈夫！ お姉ちゃんに任せなさいって！」

なんて会話をしたのは数十分前。

「……………どこに行った……………？」

気が付けば香久弥殿が姿を消していた。

（確か……………商店街辺りまでは居た筈だが……………）

そういえば商店街を歩いている時、「あ……………！ あのタイヤキおいしそう」とか聞こえた気がしたが……………。

(思えばあの時に振り返っておけばよかった……)

そうして商店街をさ迷うこと数分、更に住宅街に出て歩き回ることに十分程。

「……！」

咄嗟に左に持った竹刀袋の紐に指を引っ掛けていた。

(なんだ……？ この霊圧……？)

死神とも虚とも違う。

(だが……)

その霊圧を感じるのは薄暗い路地裏の先。既に日も暮れた今の時間では恐らく人一人通るまい。

この霊圧にしても随分怪しい。ここは無視して。

(……！ いや……あれは……！)

通り過ぎようとしても出来る筈が無い。

なぜ……ここに香久弥殿が買った化粧品が落ちて……！？

「ッ……！」

走る。暗い道を走る。カチカチと光る街灯が目障りで仕方がない。

「……………」

そしてやっと見つけた。

目を閉じ、脱力した香久弥殿と……その首に今にも噛み付こうとしている、眼帯をした長身の女を……。

「……………」

「！？」

そして気が付けば、眼帯の女の顔が目の前に……………。

「……………
おおらあああつ……！」

「がっ……!!」

その段階になってようやく、自分が叫びながら女の顔面を殴りつけているのに気付いた。

「義姉上……!?!」

吹き飛んでいく女の姿を見届ける暇も無く、あの女から解放され背中から倒れそうになる香久弥殿の身体を支える。

「スウ……スウ……」

「……やれやれ……」

取り敢えずは眠っているだけらしい。
まあ、なんにせよ無事で良かった。

「一体……何者です? 貴女は……」

その時間こえた声に振り返れば、眼帯の女が膝をついて立ち上がる
ところだった。

「見たところ魔術師でもサーヴァントでもない……。かといってただの人間がそれ程の力を持つなど……」

「……あれだけ霊圧を込めて殴っても動けるか……。やはり人間ではなかったか」

「一先ずは香久弥殿の身体を横たえてから、改めて眼帯の女に向き直る。ただの人間でないなら手加減も無用か。」

「霊圧……？ それにその剣……。まさか……アラヤの抑止力の一部が何故此処に？」

だが、私が竹刀袋から斬魄刀を取り出したところで明らかに相手の雰囲気が変わった。

「荒耶……？ それは人間の魔術師が使う単語のうちか……貴様……英霊か……！」

いや……だとしても疑問は解決しない。文字通り世界の危機にしか出て来ない……死神側からすれば自然現象の一つ　巻き込まれたら死神ですらただでは済まない　竜巻などと同列に扱わ

れる災厄。

そんな奴がどうしてただ一人の人間を襲う為に現界している？

「……………好都合です。死神の魂は人間のそれより純度が高い……………。貴女なら以前のランサーとの戦いで消費した魔力も補填できるでしょう」

そう言う女の手にはどこから取り出したのか、二つの釘のような物を鎖で繋いだ武器が握られ。

「ふっ……………！」

呼吸一つで向かってくる。

その速力はそこらの死神の瞬歩よりも遙かに速い。

「……………！」

しかも目の前に迫る敵に刀を抜く前に、視界から消えた。

「フンッ……………！」

僅かに身体を右に移動させる。

その直後、先程まで立っていた場所に上から投擲されたのであろう釘が地面に突き刺さる。

「はあっ……！」

更になら上から突き出される釘を斬魄刀を納めたままの鞘で止める。

「ッ……！」

だが、女の動きはそこで止まらず、空中で器用に一回転。遠心力の乗った蹴りを右腕で受ける。

(ッ……！ 重いな……！)

右腕に凄まじい負荷が掛かり、ほんの少しだが右足が浮いた。長身とはいえ細身の身体にこの威力。流星は尸魂界でも災厄と呼ばれる英霊といったところか。

「ふっ……！」

相手の足を押し退け、左手に持った鞘を叩き付ける。

が、その動きは読まれていたのか空中に重力でもあるかのように、

ふわりと浮かぶように後ろに跳ぶことで躲される。

「ちっ……………!?!」

後ろに跳ぶ女を追おうと瞬間、足元から音が響くのと同時に左手に鎖が絡み付いてくる。

「捕らえました……………」

そのまま女の方へ引つ張られそうになるのを左腕と両足に力を、霊圧を込めることで踏ん張る。
このまま引き倒すつもりらしいが……………。

「捕まえて……………どうする?」

「……………!?! 馬鹿な……………」

残念ながらこれは相手の事を知らないが故の悪手だ。

「そんな小さな体に……………!」

「相手を舐めすぎだ。今は人の身だが、仮にも死神だぞ、私は」

両腕も使って鎖を引こうとする女を逆に少しずつ引き寄せる。

「ッ……！ やはり……魔力が ……！？」

相手が更に両腕に力を込めようとしたタイミングを見計らい、瞬歩を使いながら跳躍。唐突に崩れた拮抗に踏鞴を踏む女に ……。

「はああああっ！」

空中で両足を揃え前に突き出す …… ドロップキックをその顔面に打ち噛ました。

「……………！！！」

足の裏から感じる手応えが消えるのと同時に、叫び声一つ上げることなく吹き飛び近くの建物の塀に激突し、砕けた塀の下敷きになった。

「よっ………と………」

その姿を重力に引かれながら見送り、コースアウトしたスキー選手のような姿勢で着地する。

「くっ……！」

「さて……色々と話してもらおうか、英霊。別に世界の危機でもないのに何故　　」

「なんだ今の音!? 事故か!？」

瓦礫を押し退け膝をつく女に問い掛けようとした時、塀の向こうから男の怒鳴り声が響いた。

「……！」

「……!? 何っ!？」

一瞬だけ声がした方を向いた途端、女の姿が消えた。同時に女の霊圧が凄まじい速さで遠ざかっていく。

「ちっ……」

今から追うにも相手は建物も全てすり抜けて移動しているらしい。こちらと同じ方法で追わない限り、確実にあの女の方が速い。それに香久弥殿も放置しておくわけにはいかない。

「なんで行く先々でこんな……」

海鳴市に越して来た時も、前の海外旅行の時も……何故か面倒ごとに巻き込まれるな。

「ふう……ここまで来れば大丈夫か……？」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくるのを尻目に住宅街をひた走る。

「しかし……これからどうするか……」

先ずは背に背負った香久弥殿を休ませる場所が必要だ。このまま宿泊施設に入っても不審者扱いされるのは目に見えているし……変質者に襲われたと言って病院に駆け込むか？ あながち嘘というわけでもない

！？

「っあ……！？」

「くお……！」

自分でも気付かぬ内にぼけっとしていたのか、曲がり角から歩いて来た男にぶつかり、尻餅をついてしまった。香久弥殿を落とさないようにしていたから、腕も使えず受け身もとれなかった。

「っっ……」

「ごめん……！ 怪我は無いか……！？」

「いや……こちらこそ急いでいた。済まない」

こちらを心配してか、慌てたふうに声を掛けてくる男に返事をしつつ、座り込んだ状態から腰を持ち上げ正座の体勢へ。そこから膝に力を込め立ち上がる。

「っておい……！ 背中の人……！」

「私の姉なのだが……途中で倒れてな……。休める場所を探していたんだが……」

そこまで言ってから初めて相手の顔を見る。

身長や顔立ちから見るに高校生ぐらいの、日本人にしては珍しい赤い髪に、やはり珍しい色彩の瞳をした青年だった。

「……休める場所か……。すぐそこに俺の家があるから、そこで休ませるか……？」

「ムッ……」

男の提案に思考を巡らせる。この男が信用出来るのを前提にするなら魅力的な提案だろう。香久弥殿の状態も早々に確認した方がいいだろうし……。
やむおえん……もしこの男が下衆だった場合は仕方が無いので、生まれてきたことを後悔してもらおうか。

「かたじけない……場所は？」

「此処だよ」

そう言つて男がすぐ近くの壁

塀を拳でコンコンと叩いた。

「……………随分広い家をお持ちで……………」

この辺りを迷走していたので詳しくは分からないが、塀端から端の距離を考えても結構な広さだろう。

「正直一人で暮らすには持て余し気味だけれど……………背負うのは俺が代わるけど?」

「いや……………これぐらいなら問題ない。それより……………」

「……………?」

「貴殿……………名前は……………?」

「俺……………? 俺は……………」

それは……少年が運命と出会う前日。
有り得ない存在との有り得ない出会い。

第四十話

「ぐっ……酷い目に遭った……」

上に覆い被さっていた岩塊を押し退けて、立ち上がる。

「……逃げたか……」

周りを見渡してもストレンドの姿は無い。そして聞こえてきた子供の声……そのたった一言に集約された意味。

「結界も消えたか……完全に奴らを見失ったか……」

しばらく辺りを見回していた時結界が消え、気が付けば森の中に放り込まれていた。つまりストレンドを始めとする【ティアマト】の連中は逃走している。

「……手詰まり……か……」

二度も同じ手で追跡されるような間抜けとも思えない。畏でも仕掛けられていたら笑えない。

「……帰るか……。護廷十三隊に追撃されたら堪ったものじゃない」
空を見れば既に日が暮れ始めていた。
皇呀を太刀に戻し腰の鞘に納める。と、その時に自分の格好が目に入った。

「さて……また前と同じ問題だな……」

差し当たって、この汚れた服をどうするか……。

「護……怪我は……？」

「さっきも言ったが、肩に掠めただけだ……それ程酷くねえよ」

「けど……あんなに派手に吹き飛んだのに」

「ああ、大した威力だったぜ……」

怪我の度合いを心配して詰め寄るフェイトに、一護は右肩を押さえて、立ち上がりながら応える。

（掠めただけでこの威力かよ……。直撃してたらどうなってたか……）

メイズの前に展開された魔法陣から金色の光が洩れだした瞬間、一護は見ていた。

金色の光に紛れてその切っ先を覗かせる黄金の杭を。それを見たと同時に一護は身を振り、回避しようとした。だが、黄金の杭は虚化していた一護ですら回避できぬ速さで打ち出され、一護の肩を掠めて吹き飛ばした。

（自分が受けてきたダメージを全部攻撃力に変換する……。か。そんな物使われたら迂闊に攻撃出来ねえ）

「とにかく……怪我の治療もした方が良さだろうし……。この様子なら戦闘は終了しているみたいですし、なのはと合流したら、すぐにアースラに行きましょう」

「アースラ？」

「私達が拠点にしてる次元航行艦です。そこでならゆっくり話も出来ると思いますし……」

「次元……？ ……また変な物が出て来たな……」

完全にSFの世界だ。そう思って一護は額に手を当てて空を仰ぐ。

「どうしました？」

「いや……なんでも……。ちょっと待ってくれ」

「……？」

飛行魔法を発動しようとしたフェイトを呼び止めて一護は歩き出した。

「一護……？ ……！」

フェイトが振り返った時に見たのは、肩から斬り裂かれ動かなくなった子供の遺体を抱き上げる一護の姿だった。

「悪いな……。あいつ……。捕まえられなくてよ……」

そう呟いたのを最後に、一護は無言で子供の遺体を近くの木の根に横たえた。

そうして次に男性の、次に女性の遺体を順次横たえていく。

「どうして……」

「……？」

最後の遺体を運び終えた時、それまで沈黙を保っていたフェイトが口を開いた。

「どうして……。その人達を殺したんですか……？」

それはフェイトが最初から抱いていた疑問。彼等が斬られていく姿を見た。

だからこそフェイトは一護に斬り掛かった。

「俺じゃ無えよ」

なのに、一護から出たのは否定の言葉だった。

「そんな

」

「あいつの仲間に死体を操る奴がいる。前に恋次とルキアがそいつと戦ってる」

言い逃れ……そう言おうとして、しかしフェイトは言葉を詰まらせた。

一護の目は真剣だった。ただそれだけでフェイトの反論を抑え込むには十分だった。

「詳しいことはさっき言ったところで聞く、って言ってたろ？
こっちも聞きてえことはあるしな」

「……………分かりました。それじゃ

」

行きましょう。そう言って再び飛行魔法を使用しようとした。

「……………！」

その瞬間、一護が瞬歩を使い横に飛ぶ。直後一護の立っていた場所を青い魔力弾が着弾し、弾ける。

「これは……！」

「今の……クロノ!?」

「フェイト! そいつから離れる!」

その叫び声　　クロノの声が響くのと同時に一護に向かって多数の魔力弾が撃ち込まれる。

「ちい……!!」

切れ間無く迫る弾幕を後ろに下がりながらも瞬歩を使って右に左にと躲していく。

「チエーンバインド!」

更に弾幕の合間を縫うように飛んでくる緑色の鎖を躲す段階になつて一護は跳躍。霊子の足場に着地する。

「フェイト！」

「フェイト！ 済まない……！ 遅くなった！」

「クロノ……！ それに……ユーノ！？ なんで此処に……！？」

唐突な状況の変化に戸惑っていたフェイトの傍に、クロノとユーノが。更にその後ろに武装隊の魔導師が並ぶ。

「いきなり何しやがる！？」

突然攻撃を仕掛けてきたクロノ達に一護が叫ぶ。

「フェイト……“あれ”は街一つを壊滅させたあるロストログアと関係している可能性がある……！」

「なっ……！？」

「詳しい話は後です……！ 今は“あれ”を捕縛するのが先決だ！」

だが、クロノは一護の叫びには構わず、フェイトに矢継ぎ早に話した後、S2Uを一護に向ける。それに合わせてクロノ達の背後に展開していた局員達も一斉にデバイスを構える。

「ッ………！」

それに対し、一護も天鎖斬月を構える。

「クロノも一護も………！ ちょっと待って………！」

しかしフェイトはバルディッシュを構えることはせず、両者の間に割り込もうとした。

フェイトとしては話について行けず、半ば置いてきぼりを喰った形になっていた。そこへ更に自分以外の全員が武器を構え、臨戦体勢に入ったのだ。故にフェイトは無意識の内に戦闘を止める方向に動こうとした。

「………？」

だが、それよりも早く両者の間に、野球のボール程の球が放り込まれた。

(……………似顔絵?)

扇子と、帽子を目深に被る男がコミカルに描かれているボール。それが飛んでくるのを見てフェイトは何の冗談だろう? と、場違いにも考えてしまった。

「うおっ!?!」

「なっ!?!」

「っあ……………!?!」

「きゃ……………!?!」

だが、それが地面に落ちた瞬間、視界を奪う程の煙幕と閃光を発生した為に、そんな呑気な考えはあっさりと吹き飛んだ。

「……………くっ……………一体……………何が……………」

唐突に発せられた閃光に頭が眩みながらも、クロノは眼を開けて

「な……に……!？」

一護が消えていたことに愕然とした。

一つの闘いが終わる。だが。

「まもなく目標ポイントです」

「船体強度83%。シールド、正常に稼動中」

目視など不可能な程の吹雪が吹き付ける空を、三隻の次元航行艦が
“飛んでいた”。

「しっ苦労……。さて……大丈夫ですか？」

「ふん……今更だな……。そこまで私の言うことが信用出来かしら、艦長？」

「当然です。我等は管理局への復讐の為に集った。故に部下の命を無為に危険に曝すことは避けたい。来るべき時の為に」

その内の一隻……何人も人間が己の職務をこなす中、ブリッジの中央で、帽子を目深に被った口髭の濃い大男と、黒髪のショートカットに、赤いシャツとスカート、上から白い白衣を羽織った女性が話をしていた。

「この船の補強や、外殻の耐寒加工……あらゆる次元世界での運用を想定した次元航行艦にすら廃棄前提でそんな改良を施さねばならない。そうしなければ船自体がこの寒さに耐えられず、崩壊する。お探しの物も既に“腐って”いるのでは？」

「有り得ないわね」

艦長の嫌みのような問い掛けに、しかし女は特に気にした様子もなく断言した。

「……？ 何故言い切れ

」

「艦長……！ 本艦への電波干渉を確認！ ……通信です」

「……！ 馬鹿な……こんなところで……？ 相手の位置は解るか？」

「……艦の前方……距離は ……」

「艦前方に氷塊を確認！」

「ッ……！？ 制動コントロール！ 減速停止！」

自身の問い掛けに断言する女の根拠を聞こうとするも、俄に動き始めた状況に対応を余儀なくされる。

「……艦……停止……」

「……通信士。電波による通信はまだ続いているか？」

「はい……発信位置は前方の氷塊の中からと思われます」

「なんだと……?」

「繋ぎなさい」

「……!? 何を」

「繋ぎなさい……!」

それまで船の事には一切干渉しなかった女が唐突に口を挟んだことに艦長が困惑するも、女は気にも留めない。

「……艦長……」

「……繋げ……」

通信士の声に、やがて艦長も諦めたのか通信を許可する。

『……………』

通信回線を開いてから暫くは砂嵐のようなノイズが無言のブリッジに流れた。

『……………』

「なんだ……………」

だが、そのノイズの中に声が混ざり出した段階になってブリッジが騒がしくなった。

その中で白衣の女だけが通信士の傍まで歩いていく。

『……………ジク…カ…ク……………』

「……………聞こえている？ 【スルト】。聞こえているなら電波の出力を上げなさい」

『……………カ…ン……………カア…ン』

それは先程まで艦長と話していた彼女とは違う、優しい声。

『……………カアサン……………』

「それで良いわ……………いい子ね」

それは子を褒める母の声。

「これからあなたを縛る氷塊に楔を打ち込むわ。そこまですれば後は自力で出られるわね？」

『ヘイワ……………マモル……………テキ……………ジクウカンリキョク……………センメツ……………』

「それがあなたの望みなら……………。
艦外作業を始めて」

最後に相手の言葉を聞くと、彼女は一言だけ指示を出してからブリッジのドアへ歩きだした。

「どちらへ……………？ マリア・シエルメ」

「艦長……………貴方が呼ぼうとした人間はとうの昔に死んでる」

「失礼しました……………【錬鉄】……………。どちらへ行かれるつもりです？」

「【盾】の小娘が“ガルムト”と“フレスヴェルケ”を壊したらしいから、新しいのを作るってくるわ。
作業は最初に教えた通りにすれば、後はあの子が自分で氷塊を破壊するわ」

そこまで言ってから彼女 【錬鉄】は振り返ることなくブリッジを後にした。

「多次元世界防衛の為の要塞……非殺傷設定をした次元跳躍攻撃による“先制攻撃型”の拠点防衛兵器……か……」

誰に言うでもなく呟いてから艦長は周りのクルーへの指示を出し始めた。

三隻の次元航行艦から小型の作業艇が極寒の世界へ飛び出していく。

『……………ヘイワ……………マモル……………』

作業艇が向かっていく先。

次元航行艦すら越える巨大な氷塊の中で 。

『……………テキ……………ジクウカンリキヨク……………センメツ……………』

二つの朱い光が灯った。

一つの闘いは終わった。それは疑念と、すれ違いと、過去の慟哭を
残して……。

第四十一話 【冥界の鍵】（前書き）

皆さん初めまして、もしくはお久しぶりです。まずは恒例となった命乞いの前に謝罪ですね。

更新遅れた上に感想にも返信できなくてすいませんでした！！

小説書ける時間が仕事の合間にある休憩時間しかないという状況だったので、ちまちまとしか進まなかったのもあり、少しでも早く書くことと感想への返信も疎かになってしまいました。感想自体は読んでました。

クロノの酷評に涙しながら……。

感想にてサブタイトルをつけてみてはどうか、という意見をいただきましたので今回試しにつけてみました。単純なサブタイトルで自分でも泣きそうです……。不評なら次回から元通り話数だけになると思いますが……。後、頑張って普段よりちょっとだけ長くしてみました。これぐらいでちょうど良いなら幸いです。

長くなりましたが本編をどうぞ。

第四十一話 【冥界の鍵】

SIDE Eーなのは

あの森の戦闘では数名の死傷者を出すだけで大した成果は得られなかった。

フェイトちゃんが【ティアマト】の魔導師と交戦中、その目的を聞いたらしいけれど、それにしても狂信者の妄言ととられても仕方ない事だったらしい。

結局当初の目的だった桔梗ちゃんの保護は、本人を見失うという結果になり失敗。【ティアマト】が拠点として使用していたと思われる破壊された屋敷も搜索されたけど、めぼしい物が発見されることはなかった。

「クロノ……彼が街一つを破壊したロストログアと関係がある、っていつのは？」

アースラの会議室。殉職者の確認を済ませた後の会議でのフェイトちゃんの第一声がそれだった。

「それについてはユーノが無限書庫から当時の事件の資料を持ってきてくれた」

「それでユーノ君が来てたんだ」

合流した時フェイトちゃんやクロノ君と一緒に居た時には驚いたけど……。

「最初はデータの送信だけでも良かったんだけど、何故か本局から補給品とかが無限書庫に回って来てね。結局僕が来た方が確実、ってことになったんだ」

苦笑を交えながらユーノ君が地球に来ることになった経緯を話してくれた。

「……資料によれば、事件の始まりは二十年前……ある管理世界にロストロギアの輸送任務を行っていた陸士部隊が立ち寄ったのが始まりだ」

私達の話が一段落ついたので合わせてクロノ君が資料を読み始めた。

「当時新人だった隊士がロストロギアの積み込み作業を行っていた際、突然一つのコンテナが爆発。周囲数キロに被害を齎した」

「……それだけ……？」

少だけフェイトちゃんから話を聞いたけれど、正直ロストロギアが起こす被害にしては小さい気がする。

「もちろんそれだけじゃない。始めの爆発から数分後、その上空で空間の裂け目が現れた」

「裂け目？」

「そうだ……そしてその裂け目から詳細不明の魔法生物が出現、周囲へと攻撃を開始した。街を破壊した直接の原因はこの魔法生物だ」

魔法生物……街一つを滅ぼした、っていうなら相当危険な存在だろう。

「かなり巨大で、黒い布のような物から白い人間の手足が生え、頭にあたる部位には白い仮面らしき物がついていたらしい。」

こいつが空間の裂け目から現れたかと思うと砲撃魔法らしきものを使用し、周辺への破壊行動を行った。

そして……」

そこでクロノ君が言葉を切ってからフェイトちゃんの方を見た。

「もつとも厄介だったのが、こいつの存在を知覚……見ることが出来たのがリンカーコアの有無で別れた点だったそうだ」

見える人と見えない人がいる、って……。

「それ……ってあのと同じ……？」

やっぱりフェイトちゃんも同じ結論に達したらしい。

街中を黒い着物のような服に、背中には身の丈程の刀剣を背負って走っていたにも関わらず、あのオレンジの髪の人には誰にも見向きもされなかった。

話に聞く魔法生物が同じ特徴を有しているなら……。

「最初の段階では魔法生物が見える者と見えない者の間で凄まじい混乱が生じ、避難活動にも悪影響を及ぼしたようだ」

見える人には巨大な生物が暴れているのが見えるのに、見えない人にはその人達が何故慌てているのか分からない。それが混乱に拍車を掛けたのだろう。

「陸士部隊だけじゃなく、本局の魔導師も出動したが戦闘は長引き、街は大被害を受けた……街として機能しなくなるほどの……」

「その魔法生物は……どうなったの？」

「たまたま休暇で街に居合わせた陸士部隊の隊士が戦闘に参加、致命傷を負わせたらしいが抵抗力を奪うには至らず空間の裂け目に逃げられた……とある。」

その隊士の名前は……メリオス……メリオス・ベルリヒンデン。古代ベルカ式を使うSランクオーバーの騎士……」

シグナムさんと同じSランクオーバーの騎士……か。
でも……それだけの人でも追い払うのが精一杯だったんだ。

「一体何処の世界の生物なのか……暴発したロストロギアとの因果関係……その辺りはまったく分かっていない」

「ロストロギアは回収出来なかったの？」

「暴発したロストロギアは消失したらしい。この資料にしても生き残った件の新人隊士からの証言から得たものだ」

そこまで言うてからクロノ君がパネルの操作を始め、一つの空中モニターが映された。

「これが……移送前に写されたロストロギアの映像だ」

鍵……それがぱつと見の第一印象だった。
十字架に色々な装飾品がつくことで鍵のような外見になっていた。
白が原色に見えるけど光の度合いのせいか銀色にも見える。

「これが……ロストロギア【冥界の鍵】だ」

今までも世界一つを滅ぼせる力を持つロストロギアは幾つも存在した。

ジュエルシードに闇の書……この【冥界の鍵】も、もしかしたらそれに準じる力があるのかな……？

「鍵……鍵が持つ特性……次元連鎖崩壊……？」

「フェイトちゃん……？」

【冥界の鍵】の映像から目を離れた時、顔を俯けて考え込むフェイトちゃんが視界に入った。

「あの黒衣の魔導師が言ってた……。『鍵が持つ特性』に『王』の力があれば次元の繋がりがある世界を全て破壊出来る、って。もしかしたらその『鍵』、ていうのはこのロストロギアのことじゃないかな？」

「次元の……繋がり……？」

「一度でも人が立ち入ったことがある世界を破壊する……そうして
時空管理局を滅ぼす……。」

それが【ティアマト】の目的だ、って」

一度でも人が入ったことがある世界……？ でも、それじゃ
。

「自分達も巻き添えになっちゃんじゃ……。」

「一護が言ってた……あれは目的の為ならなんでも……それこそ自
分の命だっけ使える人間の目をしてる……そういう目だっけ」

思い出した……クロノ君が言っていた逮捕した【ティアマト】の構
成員……舌を噛み切っても情報の漏洩を防ごうとするその覚悟。

「だがフェイト……確かに【冥界の鍵】には次元に干渉出来る力はある
かもしれない。だがそれだけでは【ティアマト】と繋げるには
弱い」

「でも……【ティアマト】が本格的に動き始めたのを切っ掛けに、護達のような存在も見つかった」

確かに……【ティアマト】と【冥界の鍵】……どちらかだけなら繋がりはない。

でも……ここまで都合よく流れが出来ているとどうしても関係があるように思えてしまう。

「……当初予定されていた近隣世界からの増援はなくなった」

「えっ？」

「近隣世界にある管理局の施設が、次々と詳細不明の戦力に襲われ壊滅している。中には街ごと……恐らく広域攻撃魔法を受けたところもある。現在は生き残りの再編成を行っている状態で、はやて達ヴォルケンリッターも施設防衛の為に合流が遅れることになった。襲撃犯は確認されている限り三人。複数同時に攻撃を受けている為、施設襲撃は全て単独で行われているようだ」

クロノ君が突然語りだした近隣世界の状況。

詳細不明と言っているけれど、この流れに、管理局の施設を単独で攻撃出来る戦力……。

「【ティアマト】……？」

「恐らくはそうだろう……そういつわけだからこちらの調査は僕達
だけではない。」

フェイトが言う【ティアマト】と【冥界の鍵】の関係……二十年前
に現れた魔法生物と同じ特性を有した勢力」

それに……桔梗ちゃん……。

「調べること……やらなければならないことは多いが……次元世界
の平和を護る為には……やるしかない」

「うん……！」

どれだけ困難なことでも……全力でぶつかっていく。
今までも……そして、これからも！

SIDE I O U T

これまで通り逃走した【ティアマト】のメンバーの搜索や、桔梗への対応を話し合い、なのはとフェイトに休息を言い渡し退出させた会議室。

「いいの？ クロノ」

そこにはユーノとクロノが残り話し合いを続けていた。

「仕方ない……フェイトの言う通りここまでの事件の流れを偶然と片付けるには出来過ぎてる……この事件には……この世界には何かある。それを調べるのは当然だ。
なにより……」

主語の抜けたユーノの問いに、クロノは分かっていると小さく頷く。

「なのはに言える筈がない。“自分の故郷の危機を放置して管理世界の防衛に参加せよ……なんて”

沈鬱な表情のまま、クロノの言葉は止まらない。

「一応は【ティアマト】との交戦中につき、合流は遅れる……と」

返信しているが、それもいつまで続けられるか……。それにここでのんびりしていたらはやて達への負担が更に大きくなる」

「……唯一の救いは……ザフィーラの戦線復帰がかなり早くなりそうなところかな」

「魔法を主軸に、医療技術が大きく発達した世界……第六十七管理世界フイーニス……その治療を受けることは出来たのは大きい。普通は治療待ちで相当な時間を喰うんだが……」

「あそこは管理局の局員であれば優先的に治療を行ってくれるらしいしね」

「順番を待つ人達には申し訳ないが……僕達に出来るのは一刻も早くこの事件を解決して報いることぐらいだな」

二人は知らない。知りようもない。

かつてその世界で響いたある姉弟の慟哭を。

何故その世界は称賛を受けるほどに医学が発達したか。

そこに至るまでの血濡れの時間を。

二人は知らない。

SIDE1 一護

「一護！ 遅かったではないか！ 一体何を ……!?」

部屋に入るなりルキアの怒声を上げそうになって固まる。そりゃそ
うだよな。

「邪魔するぞ」

ここに居る筈のない夜一さんが居れば誰だって驚く。

「よ………夜一殿!? 何故こちらに!?!」

「浮竹と京楽に頼まれてのう」

そう言っつて夜一さんが入り口に一番近い椅子に座り込んだ。

「浮竹隊長から？」

「そうじゃ。阿散井負傷の報を受けて、近い内に尸魂界から援軍が送られてくる。席官以上……下手をすれば隊長格がな……その前に目撃された存在の真偽を確認してほしい、とな」

そこで夜一さんが俺の方を振り返ってきた。

「一護……お主が見たという死神についてじゃ」

あいつか……。

「報告に何か不備が？」

外見の特長はルキアに伝えてあるし、改めて確認する理由はそれ以外無さそうだけどな。

「……これから言うことは他の者には漏らすな……。
まず……お主が見た死神についてじゃが……その情報は浮竹のところで止まっておる。隊首会でも出たのは異邦人の戦力と対策についてらしい」

「なんでそんなに慎重なんだ？」

「……純粹に信じられんのじゃろ……もしもお主が見たのが本人なら尚更のう……」

「信じられない？ 何が？」

俺の疑問に夜一さんは一息ついて　。

「そやつの名は……あかつき暁 こうか紅花……護廷十三隊一番隊所属の死神で……百年以上も昔に死亡した死神じゃ」

死亡……？ 死んだ、ってちょっと待て……！

「けど……あいつは　」

「一護……お主の言いたい事も分かっておる。実際浮竹から話を聞いたから時は驚いた。故に確証を得る為に儂が来たわけじゃが……」

……っつとは。

「夜一さんはあいつのこと知ってんのか？」

確認の為に来たのなら当然面識がある筈だ。

「知つとるもなにも……あやつは二番隊にも籍を置いていたことがあつてのう。」

それだけではなく十一番隊や四番隊にも所属してことがあるぞ。」

「なんだ……節操の無え奴だな」

四番隊と十一番隊はめっちゃ仲悪かったんじゃないか？

「純粋に戦闘技術の錬磨が目的だったようじゃな。
二番隊で白打と歩法を、四番隊で鬼道を、十一番隊で斬術を初めとする戦闘経験を……最後に一番隊じゃ」

随分修業熱心　　そーいや……。

「暁だっけ？　なんで死んだんだ？」

「……………」

一番気になるところなのに夜一さんが言いづらそうに一瞬口を噤んだ。

「……僕も直接その場に居合わせたわけではない。しかし暁が死んだのは確実じゃろうな」

「……？」

「手を下したのは山本元柳斎総隊長殿じゃ。内容は中央四十六室への攻撃行動を行った為と聞いておる」

「ジイさんが……？」

「身内となれば尚更容赦は出来なかったのじゃろう」

「身内……？」

「ちょっと待て……じゃあ……」。

「……正確には養子らしいが……」。

赤ん坊の暁を流魂街で拾い育てたと聞いておる」

あのジイさんは……自分の子供を……斬った、ていうのかよ……。

S I D E I O U T

「あつ！ 桔梗ちゃん発見！」

日も暮れ、夜と呼んでも差し支えない時間。
後ろから聞こえる筈のない香久弥殿の声が聞こえてきたので。

「ちよつ！？ 何故逃げる！？」

脱兎の如く逃げることにした。
が……。

「待つ

！？へぶっ！？」

後ろから聞こえたいつもの悲鳴に思わず振り返り……。

「つゝかゝまゝえゝたゝ……」

「……！？」

肩を掴まれた。

倒れる時の声真似に引っ掛かってしまったらしい。

「ちよっ！？ 義妹を騙すとか！？ そんな義姉を持って私は悲しいですよ！？」

「義姉の声を聞いた瞬間逃げる妹を持って義姉は怒り心頭ですよ……？ あれ……？ 桔梗ちゃんが“変わってる”」

「私が“変わって”“どうするんですか……”。“替えた”のは服です」

気付かれたか……あのまま逃げ切れたら家でごまかせたのに……。

「もしかして午後からの用事、ってその事？」

「……まあ、そんなところです……」

結局……森の戦闘で汚れた服はどうしようもなく、服の新調を迫られた。

しかし、ただ前と同じ服に替えただけでは、服はどうした？ という話になりかねない。

そこでいままでのシャツにスカート、スパッツから大幅に路線変更。臍が出るような裾の短い黒いシャツに太股を晒す黒い短パンと白いソックス。最後に赤い革のジャケットという普段なら絶対にしない服装にした。これなら見た目のインパクトに気をとられて出掛けた時に着ていた服への疑問はあるまい。

……なぜだろう……悲しくなってきた……。
……っていうかあの店員、髪まで弄ることないだろうに……何が愉しくてツインテールにしなければならぬのだ……？

「随分なイメチェンだね……お婆ちゃん悲しむよ、桔梗ちゃんがグ
した……！ みたいな感じに」

実際に言われそうだから困る。この服にしても最悪見つけた時の為の対策でしかない。

「けど……そうか……おっ！ そうだ！ イメチェンなら良いのが

売ってたよ!」

「はっ……? いやいや、ちょっと!?! 何処に!?!」

何を思い付いたのか香久弥殿が何処かに行ってしまった。

……早歩きで。流石に走ったらコケるといふ認識はあったらしい。

「というわけで……ハイ!」

「いきなりすぎです」

待つこと10分近く。香久山殿が持ってきた物に驚いた。

「こんな眼帯なんてよく売ってましたね。しかも左目に使う物なんて」

「その質屋で売ってた」

香久弥殿が差し出してきたのは淵に薄く、赤い刺繍が施された革製の黒い眼帯。

ちゃんと後ろで留める箇所が、ベルトのように長さを変更出来るようになっていているあたり、かなり手の込んだ作りだ。

「これは……流石に高いでしょう？ 返したほうが」

「問題無し、問題無し！ ちゃ〜んとお小遣出てるから！」

そうは言うがこれは明らかに年季が入っている。質屋なら本来高いなんてもので済む話ではない可能性だってある。

「思い出したんだけどさ……私ってあんまり桔梗ちゃんに贈り物した記憶が無かったな〜、って思って……。昔っから我が儘言わなかったし……」

そう言おうとして、不意に真剣な……どこか泣きそうな口調で話し出した香久弥殿に遮られた。

「桔梗ちゃんが時々左目の傷に触れてるのも知ってるけど……それだけだと……う〜ん……なんていうか……お腹がすくんじやないかと……何言ってるんだか自分でも分かんなくなってきた……」

お腹がすく……か……。

「成る程……そういうことなら仕方ないですね」

「何を笑ってるのかな〜、桔梗ちゃんは〜?」

「H A H A H A H A ……ソナナコトハアリマセンヨ」

「その片言がムカつく〜!」

あんな戦闘の後だというのにこうして笑える。

それはとても貴重な瞬間で……失うことを分かっているのが、もっとも悲しくなる瞬間なのだろう。

第四十二話 【太陽神】（前書き）

最新話更新出来ました。今回はあまり間が開かず投稿出来たと思います。

アンケートは絶賛受付中です（書けるかどうかはともかく……）。

それではどうぞ。

第四十二話 【太陽神】

S I D E Eー シグナム

鋭く尖った切っ先が向かってくるのをギリギリまで引き付けて躲す。必殺と間違えるような速さで繰り出される刺突は、しかし相手には普段通り出せる速さでしかないらしく、すぐに引き戻されまた同じ速さで向かってくる。

「くっ……!!」

繰り出される刺突の嵐を右手に持ったレヴァンティンで、左手に持った鞘で受け、逸らすとその攻防の限界は私が思っていたよりも早く訪れた。

「つぁ……!!」

刺突の連打に織り交ぜられた緩急の一撃にタイミングを狂わされ、左腕に衝撃が走った時には持っていた鞘を取り落としていた。

「フウ……!!」

そして絶え間無く繰り出された刺突が止む。

「はああっ……！」

次の瞬間、今までの刺突すら並ばぬ速さで切っ先が迫る。

「ぬっ……！？ があ……！」

その一撃をレヴァンティンで受けるも、強すぎる衝撃が剣を支える両腕に走り。

ガッ、ギキィッ……

不吉な音がレヴァンティンから聞こえると同時に後ろに吹き飛ばされた。

「シグナム……！」

「ッ……！ ザフィーラか……」

衝撃の慣性に抗おうとした時、ザフィーラに受け止められた。

「大丈夫かよ……!?!」

「私はな……だが……」

続けて駆け寄ってくるヴィータに応えながら、レヴァンティンを見遣る。

『警告！ 可変機構及びカートリッジシステムに異常!』

「チツ……」

柄と鐔の間から煙とスパークを発しながら異常箇所をレヴァンティンが報告してくる。

ただの一撃でこのざまか……。

「あいつ……マジで強え……」

「三人掛かりでこれか……シャマルと主はやてにも来てもらったほうが良かったか?」

「いや……主はやてとシヤマルの二人では奴のスピードに反応出来ない。」

三人掛かりでも抑えられないのなら護りきれない可能性が高い」

……

「はあ……！ はあ……！」

視線をレヴァンティンから荒く呼吸を整える相手に移す。

最初に目に留まるのは首と背中の子力所をゴムで纏めた黒い長髪に、鋭く睨んでくる黒い瞳。

白や灰色の色調で纏められたドレスのような服に、銀の籠手や脚甲、胴鎧。

右手には“彼女”の身長を超える長大なデバイス　長い柄に刃が無く、円錐形に尖った切っ先をもった、ただ敵を貫くことだけを想定した槍　突撃槍を握っている。

…グ……

「……こっちは通さん……！」

僅かな様子見の間に呼吸を整えたのか、“彼女”が突撃槍を構え、足元に青緑色のベルカ式の魔法陣を展開する。

(……まだか……!?)

悔しいが、“彼女”と私達三人の間にある戦力差は大きい。“彼女”は私達と交戦する前に何人も、下手をすれば何十人という管理局の魔導師との連戦を行い消耗し始めている筈だ。にも関わらず圧されているのは私達。

(流石は……たった一人で管理局と戦い続けてきた“狂嵐”といったところか)

シグ……

それでも退くわけにはいかない。私達の役目は“彼女”をここに引き留めることなのだから。

「あまり無茶すんなよ……さっきの二の舞になっちまう」

「誰に言ってる、ヴィータ? 同じ不覚はとらん」

ヴィータがグラーファイゼンを、ザフィーラが無言で拳を構えるのを見ながら、ようやくスパークの治まったレヴァンティンを正眼に構える。カートリッジが使えないのは痛いのが戦場だ。我が儘は言え

ない。

「お前達を追い出し、今度こそ我が祖国に平穏を齎す……管理局……
お前達がしてきたことを悔いる　　!?」

その時、遙か遠方にも関わらず凄まじい爆音が大地を揺らした。

(間に合ったか……ギリギリだったな……)

「これは……!?　あの方角……まさか!？」

…グナ…!

「そつだ……お前達レジスタンスの拠点を我等の主が制圧した」

この管理世界のレジスタンス最大戦力である“彼女”をここに引き留め、その隙に主はやてが敵拠点に遠距離から広域攻撃魔法で制圧する。

レジスタンスは“彼女”以外の魔導師を保有しておらず、攻防の戦力を完全に“彼女”に依存していた。

故に“彼女”さえ引き離してしまえば、後に居るのは旧式の質量兵器を備えた兵隊だけ。その戦力と脅威度は“彼女”と比べるべくもない。

「投降しろ……お前程の騎士なら管理局で今までの罪を償いながら

」

「断るっ！！」

拠点を失うということはその後の戦闘を更に難しくするということが、
十分な補給や休息も出来ず、ただひたすらな消耗戦を強いられる。
それが分かっている筈だというのに、それでも“彼女”は戦うとい
う。

「私達が戦うことを諦めたら……誰が祖国の為に戦うというのだ……
……私達が戦うことを止めたら……もう……誰も笑ってはくれない……
……！」

「そうか……ならば決着をつけよう……。
いくぞ！ レオーナ・ヴァーンハルト！！！」

「うっおおおおおっ！！！」

“彼女” レオーナに向かって飛び出すのと同じ、相手もまた私に突撃槍の切っ先を向けて。

「シグナム！」

「ッ……！？」

すぐ近くから聞こえた主はやての声に意識せず身体が震えた。

「あゝ、やっと起きたあ、居眠りは珍しいな、シグナム」

そこまで言われてようやく自分が何処に居るのか思い出せた。
シヤマル、ザフィーラ、主はやて、途中から合流した本局の武装隊。
そして詳細不明の戦力からの攻撃を受ける街への救援に向かう次元
航行艦の仲。

先まで居た戦場 夢の中ではない。

「も……申し訳ありません……！」

「ええよええよ、後は目的地に着くまで待機やし」

そう言って主はやては私の正面、シヤマルの隣に腰掛けた。

「随分深く寝入っていたな」

椅子に座り直した直後、退院したばかりのザフィーラが珍しそうに聞いてきた。

「夢を……見ていた……」

「夢……?」

「ああ……三年程前の……レオーナ・ヴァーンハルト……」

「奴か……」

結局……私はレオーナに敗れた。

超重武器の一種である筈の突撃槍から繰り出される神速の突きの連打に圧され、石突きの部分に腹部を殴打されたところまでは覚えて
いる。

私は意識を失い、しかし連戦の消耗も激しかったレオーナもそこで隙を作り、ザフィーラとヴィータの波状攻撃を受け、墜ちたらしい。

「それ……三年のヤツ、つすよね。“狂嵐”とか呼ばれた女が第九管理世界で暴れ回ってた……」

「……そうだ……」

返事をしてから、自分の声に若干の苛立ちが混じるのを自覚出来た。次元航行艦に乗り込む際に合流した武装隊の一人……タリル・ヘイス。二十代前半の整った顔立ち。青み掛かった白髪はその顔立ちにマッチしていたが、やる気を感じさせない蒼い瞳をした眼がその魅力を明らかに半減させていた。

渡された資料には空戦Aランク、特に防御、結界形に関してはSランクオーバーに匹敵するとあったが……任務への積極性は低く、注意が必要と追記もあった。

「確保された、って聞いてないんすけど、どうなったんすか、せいっ」

「それは今聞く必要のあることか？」

「シグナム……！」

主はやてが低く呼び掛けてくるがこの男の軽薄な態度は……いや、もっと違う何かが癪に障る。

「ちいっす……すんません……」

もはやわざと煽っているとしか思えない。

「そろそろ時間や、皆用意を」

主はやての一言にザフィーラ、シャマル、他の武装隊の隊員が無言で立ち上がる。

「……かつたり……」

その中でこの男だけがボソツと呟いた。

SIDE I O U T

それは異様な光景だった。

“ 白い “ 炎が大地を走る。

“ 白い “ 炎が建物を喰らい尽くす。

その中でただ一人……長い黒髪をした女性が佇んでいた。

「この程度か……最高評議会直属の特殊部隊も質が落ちたな」

黒い長髪を首と背中の中二カ所で纏め、女性らしい均衡のとれた体型を、白と灰色を基調としたドレス、そして銀色の籠手や脚甲、胴鎧といった防具で覆っている。

そしてその右手には自身を超える、血に塗れた長大な突撃槍。左手には力尽き、ダラリと四肢を投げ出した少年の頭部を鷲掴みにしていた。

「ただ野心という名の平和の為に牙を研がされてきた子供達……か……。
哀れな……」

左手で掴んでいた少年を放り捨てる。
その周りには少年と同じような服を着た者達が何人も倒れ伏していた。

「……………」

「……………？ どうした？」

その場を立ち去ろうとした時、女性の長い黒髪に隠れていた者

手の平に乗れるような小さな小人が空を見上げているのに気付いた。

「ふん……増援か？」

白い炎に照らされる夜空。

そこに幾つもの魔力光が向かってくるのが彼女の視界に映っていた。

「猟犬か、人形か、その両方か……」

どちらにせよ関係ない……そう彼女は自分で浮かべた疑問を切って捨てる。

（この身は閣下に忠誠を掲げた……）。

私はその道を阻む全てを貫き、打ち砕く槍にすぎない……）

「行くぞ……ディザスタ。閣下がお待ちだ」

「はっ……ヒハハハハ……はっハハハハハ……！　こんなもんかよテメエら……！　弱すぎにも程があんだろ！　もっと粘れよ！」

白い炎が逆巻き家屋を焼いてゆく中、男の笑い声が響き渡っていた。聞く者に嫌悪感を齎す、不快な声だった。男が声を発する度に、虫の羽音にも似た音が一緒に発せられていた。

その風体も異様だった。

黒一色……黒い帽子らしきものに、黒いコートらしきもの。黒い服らしきもの、帽子とコートの間から見える筈の顔も黒。どこに眼があるのか、どこから声を発しているのか……その全てが曖昧だった。

「喰いがいが無え……最近はこんなんばっか……自分達で生み出したものも滅ぼせねえのか……“俺達”を殺し尽くせる奴は居ねえのかよ！」

男が理不尽な叫びを上げ足元に転がる黒い服を着た子供の“上半身を踏み付ける。

その近くには右腕と右足を切断された子供が、更には頭部の無い子供が……他にも身体の一部を、或いは大幅に欠損した子供達が……そこから溢れる血が川のように流れ、そこらじゅうの地面に出来た溝　　バターののような切断面を見せる大地に流れ落ちていく。

「けっ……飽きた……帰るか……。また【槍】にどやされ

なんだ？」

その時、黒い男が空を仰いだ。

男が向いた先……幾つもの魔力光が街目指して飛んでくるのを見つめ。

「良い魔力だ……。もっとも……殺し甲斐があるかは別問題だが……」

楽しい玩具を見つけた子供のように笑い出した。

「これは……」

(こんな……酷すぎです……)

その街へたどり着いたはやて達はその光景を見て絶句した。
本来なら仕事の帰りなどで賑わう時間。だが街の往来を埋め尽くし

ているのは白い炎だった。
白い炎がビルを、家屋を、人を焼いていた。

（マイスターはやて！ まだ人が……！）

「分かつとる……！ 武装隊は散開して生存者の搜索と救助を
」

「この炎……居る……！」

「えっ！？ ちょ……！？」

既にユニゾンしていたリインフォース？に応えながら指示を出そう
としたはやてを無視してタリルが飛んでいってしまう。

「あの男……何を！」

「分からんけどほつとけん！ シグナム、ザフィーラ、シャマルは
一緒に！ 残りは散開して生存者の搜索と救助をお願いします！」

はやての言葉に全員が統一された黒いバリアジャケットを着た男達
が頷きを返して散っていく。

「ウチらも行くで！」

それを見送つてからはやては残つた三人に呼び掛け、タリルの後を追つていった。

「くそっ……！ どこだ……！？」

一方はやて達から離れたタリルは一人白い炎に包まれる街を見回していた。

空からかろうじて見える街の住人も彼の意識には留まらない。

今彼はたった一人の人間を探し続けていた。
そして……。

（あそこか……！）

一カ所だけ……憩いの場になるであろう公園が炎に包まれていないことにタリルは気付いた。

（殺してやる……！ あの男だけは……この手で……！）

次元航行艦でシグナムと対峙した時のだらけた空気は一切なく、ギラついた眼で彼はその公園に降り立った。

「タリル・ヘイス！」

その後、はやて達も彼に追い付き公園に降りる。
そして。

(こいつ……！ 本当にさっきまでの男か……！？)

あまりの雰囲気の変化のようにシグナムが驚愕する。

「こんなところで遊んどる場合やない！ 早う生きてる人達を助け
んと」

「うつせえ……！」

だが、はやての言葉に怒声で返した瞬間に、シグナムは即座に我に
返った。

「貴様……！！」

「うつせえって言うてんだ……！！ 邪魔するんならてめえらから殺

すぞ……！」

「どつやら言つて聞かせる程度では分からんようだな！」

「……騒がしいな……」

シグナムがはやたとタリルの間に割つて入り、互いに険悪な空気が流れ始めた時、静かな……：大気を焼く白い炎にも邪魔されない覇気を秘めた声が響いた。

「何者かと思えば……：闇の書の小娘にその付属品か……」

全員が声をした方へ振り向く。

「存外……：今回の殺戮もつまらんものになるな」

視線が集中する先。まるで公園を取り囲む壁のように燃える白い炎の中から一人の男が歩いてきた。

黒く、短い髪をオールバックにし、三十代後半であろう端正で、彫りの深い顔立ち。髪と同じ黒い軍服の上から金の縁取りが施された黒のコート。そして腰のベルトには一振りの日本刀。

全員の視線の圧力を、それ以上の威圧感で圧倒しながらその男は公園に入りはやて達から数メートル離れた場所で止まった。

「何者だ……！」

聞くまでもなく敵。そう分かっているながらもシグナムは男に問い掛けた。
だが……。

「愚問だな。実につまらん……」

シグナムの問い掛けを聞いた瞬間、男は本当につまらなさそうに吹き、踵を返した。

「なんだと……！？」

「その質問自体が貴様等の存在価値を表している。
闇の書の主ですらこの様では、管理局の腐敗はいくところまで来ているようだな……」

もはや後半は独り言だった。その様子は本当にはやて達に興味がないことを証明していた。

「ッ……！」

「……………！ シグナム、ザフィーラ……………！」

侮辱を通り越した無関心。

その姿に激昂したシグナムは剣を、ザフィーラが拳を構え、はやての制止を無視して飛び出し

「あなた……………メリオスだろ……………メリオス・ベルリヒンデン」

タリルの一言にその場の全員　立ち去ろうとしていた男すらも静止した。

「元時空管理局局員……………Sランクオーバーの古代ベルカ式の使い手にして、陸士部隊のエース……………かつては名実共に最強と呼ばれた騎士」

「なっ！？」

「ほお……………？」

元管理局の局員。その事実にはやては驚愕の声を上げ、男
メリオスは先程までの態度を一変させ、興味深げにタリルに振り返

った。

「その目……最高評議会の犬には見えん殺意に満ちた目だ。奴らと関係が無いとすればよく調べた……私の存在は既に管理局に消されていたと思っていたが……」

「間違いないんだな……？」

純粹に感心するメリオスにタリルは低い声で問い質す。

「相違ない……ちゃんと自己紹介しよう……私の名はメリオス……」

完全にタリルに向き直ったメリオスは口元に笑みを浮かべながら

「反時空管理局組織、【ティアマト】の代表……我等が白き炎の神の代行者、【太陽神】メリオス・ベルリヒンデンだ」

静かに己の名を告げた。

第四十三話 【戦嵐の槍】（前書き）

相変わらずご感想に返信出来ない駆瑠です。新話更新しましたが、その変わりに返信の内容を考える思考を犠牲にしてみました…。

…。

ご意見やご質問（ネタバレにならない程度の）には頑張って返信しようと思っていますので併せて応援のメッセージなんかあれば嬉しいです。

それでは本編をどうぞ。

第四十三話 【戦嵐の槍】

SIDE E はやて

【ティアマト】……活動が確認されたのは五、六年程前。主にロス
トロギアの保管施設や研究所を小規模の部隊で襲撃し、研究品を強
奪していく。犯行声明等が無いことから金銭目的の集団というのが
公式見解。

ただ、ごく一部には、ただの金目当ての犯罪者にしては統率が執れ
すぎている、という話もある。

「私がメリオスと分かかっていてその前に立つ。良い度胸だ……何故
私を追う？」

その【ティアマト】の首魁が目の前におる。

「六年前！ 第二十四管理世界にある街を原因不明の大火災が襲っ
た……。
お前だな？」

六年前……？ ウチらが管理局入りするより前の話か……。

「六年前……よく覚えている……。私が初めて神より預かった力を

使った時か……。ではお前はその時の生き残りか。
どれだ？ 家族か？ 街か？ お前のプライドか？」

「ッ……！ 全部だ！ 生まれ育った街も……！ 妹も！ 妹との
約束も！！ 全部あの白い炎に持って行かれた！！」

「……そうか……」

その時のメリオスの顔は……無表情。でも、さっき立ち去ろうとした時のような無関心じゃなく、何かを抑えこむような……辛そうな無表情。

これだけの事をしてるのに……なんでタリルにはそんな顔が出来るんや……？

「ならば……その殺意に応じてやるのが、私からお前にしてやれる数少ない礼儀か……。
いいだろう……私が相手になる」

「嫌だと言っても……ここで殺す！！
コメットサンクチュアリ！！」

『御意』

けれどもそんな事を考える時間も無く、タリルが腰のポケットから
三日月状のペンダント 待機状態のデバイスを起動。
一瞬してから男性の機械音声が日本語で応えた。

(…………日本語?)

「なかなか珍しいものを使う…………自律浮遊する子機か。使いこなせ
れば相手の意識外から不意をついて魔法を使えるが…………お前が未熟
なら文字通り宝の持ち腐れだぞ?」

今タリルの周りを飛び交うもの。それは八つの蒼い円盤。それらが
タリルを護るように、相手を威嚇するように飛ぶ。
そして。。。

「いちいちうるせえ! いけえ!!」

一斉にメリオス目掛けて飛んでいった。
驚いたのはそのコントロール。一機一機が別々の軌道、別々の速度
でメリオスの退路を潰すように向かってく。八つの子機の動き全部
を把握してんとまずできん。
けど。。。

(す…………凄いいコントロールの良さです!)

「確かにコントロールはええ！ けど、この攻撃……非殺傷設定が外れとる！」

(え…ええ！？)

ラインが驚いてるけど、あの様子を見れば一目瞭然。

「シグナ ……！？」

けど、時既に遅し。シグナムに呼び掛けて止めようとした瞬間、メリオスの周りから同時に円盤が突撃。その身体を押し潰した。

「なっ……なんてことを ……」

「フウ………！ フウ………！」

詰め寄っても興奮した様子で円盤の山を睨むだけ。
あかん……まずは落ち着けな。

「シヤマル！ 一旦タリルと街の外に ……」

『主!』

「良い腕だ……コメット（彗星）の名に相応しい動きだったぞ」

シヤマルに彼を街の外に連れだしてもらおうと呼び掛けようとして、二つの声に遮られた。

一つはタリルのデバイス、コメットサンクチュアリ。

もう一つは。

「だが惜しいな……この数の子機を同時にコントロール出来る並列思考を持ちながら私の動きを追えなかったか」

「なんっ……だどっ……!?!」

「馬鹿な……!」

メリオスは積み重なった円盤の横に立っていた。その姿に後ろからシグナムとザフィーラが驚愕の声を上げたのが聞こえた。

ウチだけなら仕方ないと言えるかもしれん。直接的な戦闘が苦手なのは自分でも自覚してる。ただ、シグナムやザフィーラですらメリオスは円盤に押し潰された“ように見えた”。

それはこの中の誰もメリオスの動きが見えてなかったことになる。

「くそっ！」

毒突きながらもタリルは右腕を振って“七つ”の円盤を呼び戻して

(七つ……?)

「ッ……！」

隣でタリルが息を呑むのが分かった。最後の一枚……最初に突撃した円盤が予兆もなく真っ二つになるのが見えた。

「てめえ……！」

「何をした？　っと聞くつもりなら無意味だ。私の動きを捉えることが出来ないお前に話したところで信じられまい。最初の交錯の際に斬ったなどと……」

斬った……？　あの腰の刀で……？　あの一瞬で……？　あかん、何一つとして見えなかった。
これが……。

「これが私とお前の間にある力の差だ」

【太陽神】……【ティアマト】のリーダー……！。

「続けるか？ 未熟な復讐者よ」

「当たり前だ……！ こちとらてめえを殺す為だけに今日まで生きてきたんだ！」

「……！ シグナム！ ザフィーラ！ シヤマル！」

タリル一人やと絶対に勝てん！ 卑怯かもしれんけど五対一なら

「レオーナ！ レギオン！」

全員がデバイスを構えた瞬間、メリオスが叫んだ。

それと同時に人影らしきものが上から降下、爆音のような音を響かせてメリオスの左側に着地した。

続けてメリオスの右側……何も無い地面にどこからともなく“黒いシミ”が広がって……そこから“黒い人型が立ち上がった”。

「……………！？ そんな……………！？ 何故……………！？ 何故お前が……………ここに居る！？ レオーナ・ヴァーンハルト！！」

相手の顔を見たシグナムの叫びは当然。第九管理世界でウィータとザフィーラに墜とされてから行方不明になってた……………シグナムが決着をつけられず、解り合えずにいたことを後悔していた騎士。その人が【ティアマト】のリーダーに呼ばれて現れた。

「何を驚く？ 私は誰にも捕えられてなどいない。

それとも……………“あの時”確実に殺した筈だったのに……………か？」

「ッ……………！」

「なんだ……………？ 貴様は……………」

「ヒツハハハハッはハハッはははは！ なんだとは挨拶だな、犬っころ！ てめえ等自分達で作ったモンすらまともに把握してねえのか！？」

大量の虫の羽音のような声に振り向けばザフィーラと、黒い服の人が対峙していた。

(マイスター……………はやて……………こ、この人達……………全員……………)

(分かつとる……)

ユニゾンしたリインの音が震えてる。魔力値なんて調べなくても解る。

この三人……全員が間違いなく強い……！

「邪魔物を片付ける。あの男の相手は私がする」

「承知！」

「俺達“は残り物か……あまり旨そうには見えねえが……そらよ！」

最初に動いたのは黒い服の人。右腕で地面を殴り付けると、途端に“黒いシミ“が道を作るようにウチとシャマル、ザフィーラの間を通り。

「シャマル！」

「ぎゃあー!?」

シヤマル目掛けて黒い剣が飛び出した。
咄嗟にザフィーラがシヤマルの襟を掴んで引き寄せて、射線から外したけど逃がさんと言わんばかりに剣、斧、槍、鎌……大量の刃を持った黒い武器が地面のシミから飛び出していく。

「くっ……!?!」

刃の群れをザフィーラ、シヤマルは飛行魔法で空に上がって躲し、その後を追って黒い服の人が飛んでいった。

「はあっ!」

「ぐあっ!?!」

シヤマル達を追うかどうか……という時に響いた金属がぶつかる音に振り返ると、レヴァンティンでレオーナの長大な突撃槍を受けるシグナムの姿が見えた。

ただ、その位置は最初に全員が構えた場所よりかなり下がってた。
あかん、このままやと。

「無駄だあ!」

「つあつ!？」

更にレオーナが突撃槍を振り上げシグナムの身体を打ち上げる。空中に上がったシグナムをレオーナが追撃して吹き飛ばし、二人は白い炎の壁の向こうに消えていった。

「さて……小娘が一匹残っているが問題になるまい。

始めるとしよう……お前の復讐……この私が斬り捨ててやるう」

再度正面に向き直る。そこには七つの円盤を旋回させるタリルと、腰の鞘から刀を抜くメリオスの二人。

最悪の状況や。ただでさえSランクオーバーの騎士が二人に得体の知れん能力を持った敵が一人。このままやと分断されたまま各個撃破される可能性がある。

なんとか……なんとか合流せんと……まずい……! !

S I D E I O U T

S I D E ー シグナム

「はあああああっ!」

「ッ……!」

機関銃の如く打ち出される突撃槍の切っ先を右へ左へ躲し、鞘で、レヴァンティンで受け流す。

戦うのは二度目の為か、彼女の槍の動きに大分反応出来るようになった。

それでも槍というリーチの長さ、一撃の重さは相変わらず驚異だ。

「何故だ!? レオーナ! 何故【ティアマト】に」

「気安く私の名を呼ぶな! 管理局!」

突撃槍の切っ先を鞘で打ち返した瞬間、その反動を利用してレオーナが半回転、反対から突撃槍の石突の部分が迫ってくる。

「ぬっ……!」

その一撃をレヴァンティンで受けるが衝撃までは止められず、後ろ

に吹き飛ばされてしまった。
大きく開いた間合い。その距離に対しレオーナは突撃槍を腰溜めに構えて切っ先を向けてくる。その槍の周りに青緑色の魔力が周囲の空気を巻き込んで回転するのが見えた。
そして。

「風よ……!!」

「……!!」

魔力と風の塊が放たれた。

一発だけではない。二発、三発と立て続けに撃たれる。

「ちい……!!」

放たれる風圧の弾幕を左へ大きく飛ぶことで躲していく。
防御魔法は使えない。下手に受ければ、そのまま動きを止められ撃たれ続ける風圧弾を全て喰らうことになる。あれはそういう魔法だ。

「レヴァンティン!!」

『Nachladen!!』

レヴァンティンを鞘に納めてカートリッジをロード。鞘の中で魔力を圧縮、腰溜めに構える。

「飛竜……!!」

「むっ……!!?」

こちらの必殺を感じたのか、風圧弾の連射を止め、膨大な魔力を突撃槍に籠め始めた。同時に凄まじい空気の流れが集まっていく。

「一閃!!」

「旋風よ!!」

鞘からレヴァンティンを抜き、魔力を解放。連結刃形態に変え、切っ先をレオーナに向けて放つ。

対してレオーナも突撃槍に集まった空気を纏めて撃ち出してくる。そして。

「……!!」

一瞬の静寂、そして爆発。レヴァンティンに籠められた魔力と、レオーナの放った風が激突し、強烈な轟音と暴風を発した。

「くう……！」

吹き付ける強風に左腕を翳して顔を庇う。

（やはり……強い！）

第九管理世界。そこに存在したレジスタンス唯一の戦力とされていたレオーナ・ヴァーンハルト。

古代ベルカ式の使い手でありながら彼女は射撃、砲撃、範囲攻撃魔法をバランスよくこなす万能型だった。

ベルカ式の近接戦能力とミッド式の火力を備えた騎士。

高い戦力に加え、古代ベルカ式の使い手「近接特化」という思考から来る油断。それがたった一人で、一年に渡り管理局と戦い続けることが出来た要因。

「もう一度問おう、レオーナ・ヴァーンハルト。

何故【ティアマト】の者と行動を共にしている？」

轟音と暴風が静まり始めたのをきっかけに話し掛ける。このままなら、また戦闘が再開されてしまう可能性が高い。

「何故？ お前達時空管理局への復讐の為だ。【ティアマト】はその為の組織だ」

「復讐……だと……？ 三年前のことか？」

レヴァンティンを剣の状態に戻しながら彼女の真意を探る。だが、正直な話それ以外に思い付く理由が無い。

「それもある……。だが、お前は知らないだろうか？ あの後私の仲間がどうなったか……私の祖国がどういう状況かなど、お前にとつては認識の外だ」

「なんだと……？」

あの闘いの後に何かがあったのか？

「どれ程の昔か……あの世界で二つの国が戦争を行っていた。詳しい経緯は知らんが、戦争は最終的には消耗戦となり強力な質量兵器……お前達がロストロギアと呼ぶ物を使うにまで発展した」

レオーナが語るあの世界の歴史を静かに聞く。本当ならば一刻も早く主はやてと合流すべきなのだろう。

しかし、目の前には三年前に聞くことが出来なかったレオーナの真実がある。それを……逃したくもなかった。

「両国は完全に疲弊、国の存続が不可能な程に……その時現れた者達がいた……。それが時空管理局だ」

「……」
「……」
「……」

「そうだ……管理局の加盟と労働力の獲得を条件に、人々の救済を申し出た……。それで終わったら管理局は正に救い主だったのだろうか……！」

次元世界の平和と秩序の維持。それが管理局の基本にある理念の筈だ。ここまではそれ程不思議なところは無い。

「恐らくは当時の担当官がなんらかの悪事にでも手を染めていたのだろうな……管理局が本当に求めたのはあの世界で採れるレアメタルの類だ。デバイスや次元航行艦にも使われる稀少な資源……それが管理局の目的だった……」

「……」
「……」
「……」

「簡単なことだ……管理局は鉱石の採掘に従事した者にある程度の

給与を行っただけで、それ以外は何もなかった。治安維持や戦争で被害を受けた者達の支援……そうだったものは何も……！
そうして……管理世界の一つでありながら、半ば管理局からも見捨てられた状態が数十年も続いた……」

それが……。

「それが……お前の戦う理由か」

「そうだ……管理局が当てにならないなら自分達でなんとかするしかない……」

「どれだけ独立を訴えても聞き届けられないならば……！ 私達の自由は私達で勝ち取る！」

「それが……三年前の私の戦う理由だ」

三年前“の”……？ ならば今はどういう……。

「三年前というなら……今は何が理由だ？」

「不思議に思わなかったのか？ 数年かかっても私達が居る拠点を発見出来なかったのに、ある日突然、大規模な作戦が実行出来る程の詳細な情報が手に入ったことに」

確かに……あれは不可解な部分が多かった。聞いた限りでは管理局の上層部から流れてきたらしいが……。

「どこの世界でも汚い奴はいるものだ……鉱石採掘の僅かな利権に目が眩んだ者……それが私達と……私達の祖国の運命を決定付けた」

「ッ……！」

内通者……裏切り者……それがあの闘いの真実か……。

「結果はお前達も知つての通り……全ては変わらないまま……私達の祖国は引き返しようにもないところまで衰退し、採掘場が唯一の活動の場となった。今や我が祖国は“自治に失敗した世界”などと蔑まされる始末。そして私の仲間は今更なる絶望に放り込まれなくなった……。

ならば……！」

血を吐くような……小さく響く声。それは間違いなく、あの時レオーナが受けた絶望の深さを知らせる叫びだった。

「ならば私が全てを終わらせる！ 護るべき祖国も、共に在る仲間も、掲げる誇りも……失う物は既に無い！ 全てを破壊の炎に焼く、焼き尽くす！ それが貴様等が唄う平和の犠牲になった仲間と祖国に出来る償いだ……！」

「何をするつもりだ!?!」

「次元連鎖崩壊! 全ての管理世界がこの白い炎に焼かれ朽ちる! 骨すら灰へ! 灰すら灰へ!

この炎が我が戦友達と祖国の弔いの炎になる!」

「そんな事はさせん……!」

「人同士で人の終焉を願う……それこそがお前達管理局が生み出した意思だ! 世界が……! 人類の意思が……終末を望んでいる! 今更この流れは止められん! デイザスタ!

レヴァンティンを構えた瞬間、レオーナの肩辺りに小さな黒いベルカ式の転移魔法の陣が出現。そこに現れたのは手の平サイズの小人だった。

だが、それはただの人形ではなく。

「融合騎だと……!?!」

「そうだ……【災厄】デイザスタ。それがこいつの名だ。こいつはユニゾンデバイスの融合事故発生の原因の一つである融合適性の問題をクリアするために一つの実験を施された。ただ……代わりに副

それは最悪の言葉だ。かつてはその強さに敬意すら抱けたというのに……。

復讐の為に……ここまで……！

「何か勘違いをしているようだが……これをしたのは私達【ティアマト】ではなく……お前達、時空管理局だ」

「な……に……?」

怒りに任せて飛び出そうとした身体は、しかしレオーナの言葉に反応して静止した。

「無知は罪、力なき正義も罪とはよくいったな、管理局？ お前達が平和の為にやったことがお前達を滅ぼす……いくぞ、ディザスタ」

足を止めた一瞬の間にディザスタはレオーナの前に移動し、そして。

「ユニゾン……イン……!」

漆黒の光と共にレオーナの中へ消えた。

「…………おっ…………おおっ…………おおおおおおおおおおっ！！」

ユニゾンした瞬間、レオーナが咆えた。白と灰色を基調としたドレスも、銀色の甲冑も、足元に広がる青緑色の魔法陣も黒く染まってい

く。「滅びろ…………闇よ…………！」

「…………！」

レオーナの啖きが聞こえた時、視界が黒に埋め尽くされた。

S I D E I O U T

桔梗のクロス短編小説第二弾（前書き）

読者アンケートの第二弾です。

……本編じゃなくてすいません……。

思い付き……というわけでもないんですが、設定練らずに書くとなかなか難しいですね。難産でした。

……正直に言わせてもらうなら今回は読者の反応が怖い……。

そんな作者ですら戦々恐々とする内容の短編ですが、暇潰しになるだろう、ぐらいでどうぞ。

桔梗のクロス短編小説第二弾

偶然のタイミングだった。

陣谷殿と早苗殿は買物、香久弥殿が休日にも関わらず大学に行き、屋敷には誰も居ない昼下がり。

たまたまバイクが屋敷の前で止まり、また走っていく音が聞こえたので見に行けば、ポストに手紙が投函されているのに気付いた。

「ふむ……セールなんかではなさそ

！？」

茶色の、飾り気の無い封筒。何も書かれていない封筒を裏返したが……。

「光言宗……」

差出人にはそう書かれていた。

“あいつら”からか……。

正直中は見たくないが、後でどんな厄介事になるか分かったもんじゃない。確認だけは済ませておくべきだろう。

「勧誘だけは勘弁してほしいものだが……！？」

開封して中を調べて……再度絶句した。

「景世が……死んだ……」

頭が硬い“だけ”の僧が多い光言宗の中でも五指に入る人格者（自分を知る限り）。そいつが……死んだ。

「これは……相棒は随分荒れただろうな……違つか？」

入っていた紙を封筒に戻してから振り返る。

「マキナ」

「何時から気付いてたのよ」

そこには学校のセーラー服に長い黒髪をもった中学生か、高校生ぐらいの少女、マキナと……。

「どーも……」

「……？」

同じぐらいの年齢の少年の二人が居た。
誰……？

「単に遊びに来たわけでもないだろう？ 上がっていけ。今は誰も居ないからな」

「茶だ」

「ありがとう」

「……」

居間に上げてから来客用の玉露を出したが反応はそれぞれ。マキナの茶だけ取り上げてやるのか？

「それで？ 少年、君は何者だ？」

「しょ、少年って……」

「見た目に惑わされちゃ駄目よ。こいつ、私達より百歳近くは年上だから」

「いつ！？」

「精神年齢の話だよ。肉体的には中学生だ」

身長でも平均の域を出ない為に年下に見えたのだろう。

「それで？」

「あつ！ はい……！ 旺里です。花神旺里。……あの……以前ア
ニキ……景世が世話になった、って」

「年上だからといきなり敬語にすることはない。
しかし律儀な奴だな。一度しか会わなかった奴にまでこんな手紙を
出すように手配しているのだから。」

まあ、だからこそ好感が持てるわけだが……。
今回の件……何と言えればいいか……」

「いえ、いいんです。俺なりにケリはつけましたから」

「そうか……お前は？」

「あんたに言う必要がある？」

「おっ、おい!？」

「成る程……それは重畳」

少なくとも私に“救い”を求める為に来たのではなさそうだ。

「あ……」

「なんだ？ 花神」

「三人はどういうふう知り合っただんですか？」

馴れ初めか……。

「録な出会いじゃなかったな」

「へっ？」

人が死んだ時、魂は死後の世界へ昇るか、悪霊として墮ちる。ならば遺された肉体は何もなく土へ還るのか……。

「録な状況ではないな、これは……」

深夜の廃ビル。その一室に白いシャツに飾り気の無い黒いスカートとスパッツといういたって普通の格好をした少女
桔梗が居た。

ただ、普通の少女と違う点を上げるなら日本刀を吊り下げた紐を左手に持っているという点。

「まさか……現世駐在の死神すら喰らうとはな」

あちこち崩れたコンクリートの部屋。そこには五、六人の“人間”が寄り集まって蹲っていた。

「ぐっ……っおお……」

「ああああ……」

正確には蹲っているのではなく黒い着物 死覇装を着た男に喰らいついていた。

「霊体である死神すら食う。悪食極まったな……」

その惨状を前にしても桔梗は眉一つ動かすことなく呟いた。

「女……女だ……」

「う……ま……そっ……」

「ト……ト……ト……」

「駄目だぜ……お嬢ちゃん……こんな……夜更けに」

男を喰らっていた者達も桔梗が部屋に入ってきたのに気付कि振り返る。その全員が一樣に目を乾かせ、虚ろにし、欲望に血走らせていた。

「こんなところで……遊んでたら……喰われちまうぞ……!!」

口から血を滴らせた男達が桔梗目掛けて一斉に飛び出す。立ち上がりから跳び上がるまでに一瞬で、何の予備動作も無い不気味な動きだった。

この状況に加えて悪夢を見せられているようなその動きに常人なら足を竦せ、思考を停止させるだろう。

死してなお残る強すぎる怨念が肉体を突き動かす。魂を失い、肉体の正常な働きを失いながらも、残った怨念が身体を維持し、仮初めの再生能力を実現している。

屍……ただ己の欲望の為に生者を喰らい恐怖を与え絶望させる存在。

「そうか……」

その恐怖を。

「別に遊びに来たわけでもないから平気だろう」

桔梗は苦笑しながらあっさりと流した。

「……………!?!」

屍達が着地した時には少女はそこに居らず、声は後ろ　屍の
群れの最後尾にいる男の背後から聞こえた。

「なんつ　　!?!」

そして桔梗は、驚愕に振り替えろつとした屍の一体の頭部を鷲掴み
にして　　。

「ギッ……………!?!」

コンクリートの床に叩き付けた。

「なんだ……………死神も殺すような奴らだからどれだけと警戒すれば…
…存外脆いな」

頭を潰され動きを止めた屍を見もせず、跳ね飛び空中で身体を大きく回転させ、最も近い屍の頭に回し蹴りを叩き込む。

「ふっ……!!」

その一撃を回避すら出来ずまともに受けた屍の頭部が碎け散る。

(頭を潰されれば動きを止めるか……戦うのは初めてだが、何とかなるな)

「てっ……めえっ……!!」

「遅い……縛道の九『撃』」

屍の分析を行う桔梗に屍が大口を開けて踏み込んでいくが、そちらを見もせず放たれた赤い縄に縛られて、その動きを止め。

「ふっ……!!」

左手に持ち直した刀の鞘から斬魄刀を抜く。

居合斬りは屍の首を切断し、宙に浮いた瞬間手首を返す。そして振り下ろされた二撃目の斬撃は容易く屍の頭を両断した。

(残り二体……！)

「ちっ……くしょう……！　なんだ、こいつ……！」

そこで動きを止めることなく瞬歩を使用。背中を見せようとした生き残りの屍の片方に斬魄刀を振り下ろす。

「ひぎっ……！」

「これで終わ　　！？」

屍を一刀両断にし、残った最後の一体の背後に回り込んだ瞬間、桔梗がバックステップ。入れ替わるように軽い銃声が連続で響き、無数の銃弾が屍の身体を貫き、破壊していった。

「なんだと……！？」

桔梗は止まることなく後退を続け、桔梗が通り過ぎた後をなおもしつこく斉射される銃弾が通過していく。

「ちい……!!」

壁際まで来たところで桔梗は大きく跳び、窓硝子に背中から突っ込んだ。

(銃まで使うのか!? 最近の屍は……!!)

僅かに残っていた窓硝子の破片と共に桔梗は外に飛び出した。そこは廃ビルの四階。そんなところから飛び下りれば人間などあっさりと死ぬ。

「ッ……!!」

だが桔梗は気にした様子もなく身を翻し、あっさりと地面に着地。上から撃たれる銃弾を右に左にと跳ぶように走りながら躲し薄暗い路地に消えた。

「ちょ、ちよつと待てつてマキナ！」

「離しなさいよ、景世！」

先程まで桔梗が居た部屋には法衣を着込みグラスンを掛けた男

景世と両腕に軽機関銃を持った少女 マキナが窓際で揉めていた。

「屍と互角に戦うなんてどう考えても人外でしょ！ 少なくとも人間じゃないのは確実！ 先制攻撃を喰らわせただけよ！」

「だからあれは 」

「そんなこと言ってる間に逃げられる！」

マキナを抱え込むことでかろうじて抑えていた景世だったが、屍姫の力に勝てる筈もなく振りほどかれてしまう。

「ふっ………！」

景世の拘束を振りほどいたマキナは窓枠に手を掛け、桔梗と同じように躊躇いなく外の地上に飛び降りていく。

「あゝ……もしかしてさ……」

一人取り残された景世はただ呆然と。

「俺が止めんの……？ 屍姫と死神のドンパチを……？」

世の不条理を嘆くかのごとく呟いた。

廃棄されたビルが集合する区画にある開けた広場。そこではマキナの二丁の軽機関銃が雷鳴のような音を響かせながら銃弾を吐き出し、桔梗の後を追い掛けていた。

「ッ……！」

立ち止まり、狙いを定めながら引き金を引き続けるマキナに対し、

桔梗はマキナを迂回するように大きく円を描きながら走り続けた。

(なんて脚力！ やっぱりただの人間じゃない！)

(こっちの速力に反応してくるか……！ やはりこいつも屍！)

マキナは遮蔽物も無い広場で自身の脚だけで銃撃を躲す桔梗に、桔梗は自身の動きに合わせて即座に銃の狙いを変えてくるマキナの反応速度にそれぞれ驚愕していた。

「……………」

ひたすら弾幕を張り桔梗を近づけさせまいとするマキナに、進行方向を変えながら銃撃を躲し続ける桔梗。
一種の膠着状態に陥りかけた時、桔梗が突然マキナに向き直り走りだした。

(なにを……！？)

いきなり動きを見せた桔梗にマキナが戸惑いながらも迎撃しようとして。

「なっ……！？」

視界から消えた。

(上！)

桔梗の瞬歩に驚愕し、それでも見失うことなくマキナは両腕の軽機
関銃の銃口を上に向け。

「破道の四『白雷』！」

上空から撃たれた霊子の閃光に左手に持った銃を撃ち抜かれた。

「ッ……！？」

刀しか持っていないかった桔梗からの遠距離攻撃に不意を突かれなが
らもマキナは役に立たなくなった銃を放り捨てて桔梗の着地場所を
予測、残った右手の銃を向ける。

桔梗も向けられる銃口を意識しながらも相手の火力が落ちた好機を
見逃さない為に斬魄刀を構えて。

「ぐっらあああああっ！！！」

二人の間に巨大な影が落下した。

「てめえら……よくも俺の縄張りでえええええ！」

人には有り得ない巨体を誇る屍。三mはあろうかという巨体を揺すりながら桔梗に向けて丸太のような腕を振り上げ。

「どけえ！！」

桔梗に蹴り上げられた。

桔梗としては目の前に突然現れた障害物を排除する為の行動だったが、小柄な少女に蹴り飛ばされた屍の驚愕は凄まじいものだった。

「こつちに落ちてくるな！」

その上空から地上に落下してくる間にもマキナが放った銃弾に全身を貫かれ、破壊されながら地面に叩き付けられ。

「げっ……へっ……ちくしょう……てめえら……絶対に。」

「五月蠅い！！」

立ち上がるうと上半身を起こしたところで桔梗とマキナが互いに向けてクロスカウンター気味に放った拳に頭部を挟まれ砕けた。

「こいつが群れのリーダーか……」

倒れていく屍の胴体を見送ることなくマキナは呟いて、右手の軽機関銃を桔梗に向ける。

「なんだ？ 貴様は違うのか？」

桔梗も応戦する為に右手に持った斬魄刀を構える。

「一緒にしないでもらえる？ この不審者」

「気に喰わんのはお互い様か……。いいだろう……。この私に銃を向けたことを後悔するがいい」

「ふんっ……。いいわ……。これで決着を」

「つけないでいい」

マキナが引き金に掛けた指に力を籠めようとした瞬間、背後から忍び寄った景世がマキナの頭にゲンコツを落とした。

「いったく……いきなり何」

「こうでもしないと大人しくならないうら、お前は。はあ……」

マキナからの非難の声も遮ってから溜息を一つ。そして。

「私の屍姫が行ったご無礼、お許しください……死神よ」

「なっ!?!」

桔梗に向かって景世が頭を下げ、マキナは景世の言った一言に絶句した。

「死神って……! 死後の世界の番人でしょ! なんでこんなところに」

「屍姫……どうりで奴らと同じ気配しかない筈だ。
ならお前は……。」

「はい……光言宗の小僧正……屍姫マキナの契約僧、田神 景世と申します」

マキナが驚く間にも、二人は会話を進めていく。

「やはり光言宗か……安心しろ。私は“連中”からも距離を置いてる
言わば無所属の死神……今はただの人間と変わらん」

「そうですね……そりゃ良かった。光言宗の上の連中と護廷十三隊の仲の悪さは筋金入りだからな。流石に自分の屍姫の暴走で全面戦争はヤバすぎる」

「かつての滅却師のようになりかねんからな」

苦笑しながら斬魄刀を鞘に納める桔梗に護廷十三隊の死神ではないと分かると途端に景世は言葉遣いを崩す。

「……？ なんで死後の世界の番人との仲が悪いの？」

「……おい、自分と契約している屍姫だろう？ 大丈夫か？」

「いや〜……その辺の事は何も話してなくて……とはいえこれは……」

「苦労してるな……」

「……せめて聴こえないように話さない！」

「その後も色々あったな…… 光言宗と護廷十三隊の軋轢の話に……
その区画を閉鎖していた光言宗の坊主共に取り囲まれたり……」

「取り囲まれた……って……」

「連中からすれば人間でありながら死神の力を使う私が珍しかったんだろっな。」

実際引つ越すまでは勧誘の電話が何度かあったしな」

景世とマキナ……二人の馴れ初めを話す間、当事者の一人がずっとそっぽを向いているが……まあ、仕方ない。

「拗ねるな……お前にとっては赤っ恥な話かもしれんがな」

「人に苦勞掛けといてニヤつきながら言うんじゃないわよ！ 初対面で景世と意気投合するわ、他の僧に喧嘩売って人を巻き込むわ……」

「頭の硬い坊主に囲まれてたんだ……それぐらいの茶目っ気は許せ」

マキナの非難は笑ってスルーして冷たくなった玉露を啜る。気が付けば外は真っ暗……長く話すぎたな。

「さて、そろそろ香久弥殿達も帰ってくるかもしれんし、お前達もそれ程暇じゃないだろう。途中まで送ろう」

「いらないわよ……あんたの見送りなんて」

「ちよっ!?!? なんてそんな喧嘩腰……!?!?」

「ははははははっ!」

「「「「ぐらいでいいんじゃない」」」」

「ああ、そうだな」

「……?」

夜の帳が降りた路地。道を照らすのは街灯だけという人がまったく通らない道路。

そこでマキナと二人立ち止まり、釣られたように旺理も足を止めた。

「二人共……?」

「旺理……黙って私の後ろに」

「この道を通つ直ぐ行けばすぐに駅の前に出られる。今日は楽しかったぞ、旺理、マキナ」

臨戦体勢に入ろうとするマキナの言葉を遮ってから、旺理に気付かれないように左手に持った竹刀袋の紐を引き、結び目を解く。

「あなた」

「言われなくても解る……。お前達は前に進むと決めた。私は家族を護ると決めた。今、ここはその縮図だ。私の平穩を乱す輩は私が排除する。お前達は私の事を気にせず前に進めばいい」

「……………礼は言わないわよ」

そう言うってからマキナは振り向くことなく暗闇に向かって歩きだした。

「あ、ちよつと！？ え、え〜と、水無月さん、今日はありがとうございました」

「私は茶しか出していないからな。その手の礼は無用だ。
早く行け、相棒に置いて行かれるぞ」

追い払うように適当に手を振ると最後に頭を下げてから旺理もマキナを追って暗闇に消えていった。

「……さて……」

二人の気配が消えてから後ろを振り返る。

「……ああああ……」

「……逃げ……た……」

視界に入る連中は三人、暗闇に紛れた気配は倍。その後ろから強烈な殺気を放っているのが二人……いや、三人か。

「一度しか会わなかった親友への弔いと、敵としてただ一度しか同じ戦場で戦わなかった戦友、そしてその新しい相棒への門出祝い」

竹刀袋から斬魄刀を取り出し、いつものように袋を腰に巻く。

「その号砲代わりだ……！ 派手に鳴け……！！」

「かあああああっ！！」

叫び声を上げながら突っ込んでくる屍に居合斬りで最初の一太刀を振るう。

尸魂界か、あの男の信じるあの世か……何処に居るかも分からない男に届くようにと……。

第四十四話 【復讐の彗星】（前書き）

前回の更新から凄まじく間を空けてしまった駆瑠です。

書こう書こうとは思いつつなかなか上手い内容に出来ず悪戦苦闘していた上に、最近買ったゲームに嵌まり更に書くのが遅れてしまいました……。
ホントにすいませんでした！

第四十四話 【復讐の彗星】

「うおおおおっ！！」

「ひゃーはははははっ！ おらおら！ どうしたどうした、犬っころ！ 効いてねえぞ！」

白い炎が街を燃やしていく中、青と黒が幾度となく空中で激突していた。

それは端から見れば一方的な闘いだっただけ。ザフィーラが何度も拳のラッシュを叩き込み、レギオンを吹き飛ばす。レギオンも回避しようとしているが、避けきれずに何の防御も無しに拳を受け続ける。しかし、その闘いを後方から援護しているシャマルが感じているのは明確な不安だった。

（どうして……どうして攻撃が効かないの！？）

ザフィーラの攻撃をどれだけ受けても、レギオンはただ不快な声で笑うだけで、まるでダメージを感じさせないのだ。

「ぬっんっ！」

「おっ……とっ……！」

ザフィーラもその違和感を感じていたのか、一際強烈な一撃をレギオンの胴体に放って吹き飛ばし間合いを取る。

「ザフィーラ！」

「この程度……どうということはない……！」

後退してきたザフィーラに、シャマルが駆け寄る。

一方的に殴り付けていた筈の両腕の拳は自身が流した血に塗れていたが、問題無いという風に握り締めた。

「様子見か？ 無駄なんだよ、てめえらじゃ“俺達”は殺せねえ！」

再度身構えるザフィーラとシャマルに、レギオンは腰を折り曲げて背中を上に向け。

「……………！」

その背から大量の刃を持った武器が撃ちだされた。

剣、槍、斧、大鎌……様々な種類、形状をした武器は一旦上空へ上がると、その切っ先をザフィーラ達に向け一斉に落下した。

「くっ……!!」

「クラーウルヴィント!」

雨のように降り注ぐ刃にザフィーラは障壁を、シャマルは風の護盾を展開し攻撃に備える。
そして。

「ッ……!!」

大量の刃の切っ先がそれぞれの防御魔法に次々と激突した。

(なんだ、これは……!!?)

(魔力が……奪われる!?)

二人が驚愕したのはその威力ではなく、異様な虚脱感だった。
刃の切っ先が防御魔法に当たる度に二人から魔力が失われていく。
それは相手の攻撃を防御魔法で防いだ際に発生する“減少”ではなく、文字通りの“略奪”だった。

(こいつの使う武器は魔力を奪う力を持っているのか!?)

(私達と相性が悪すぎる!)

「はぁん? あれを耐えるたあやるじゃねえか」

黒い刃の雨……それが止んだ時には二人は奪われた魔力の量に肩で息をしている状態だった。

(大丈夫か、シャマル?)

(まだ、なんとか……。けれど、もう一度同じ攻撃を受けたら……)

(デバイスによる戦闘が出来ない我々には不利……か……)

念話で互いの状態を確認しあいながらレギオンとの相性の悪さを再認識していた。

魔力で構成された物に武器が触れた際に、術者の魔力を奪うならばレギオンは魔導師、特に大半のミッド式魔導師の天敵といえた。そして攻防の全てをデバイスではなく自身への魔力付与と防御魔法に頼るザフィーラとシャマルにとってもまた……。

「ひいははははははっ！」

疲弊した二人に休む暇も与えぬとばかりにレギオンが突撃する。そのスピードは決して速いとは言えず、振り下ろされる無手の左腕の一撃をザフィーラとシャマルは余裕をもって躲し。

「ッ……！？」

「ハッ……！」

レギオンが小さく笑うと同時に、ザフィーラは左の二の腕からの痛みと出血に小さく呻き声を上げた。振り下ろされたレギオンの左腕。その腕には大量の黒い短剣が生え、肘より先を覆い尽くしていた。

（身体から武器が生えているのか！？）

その事に驚く暇もなくレギオンは右腕からも、左腕と同じように黒い短剣を生やしてザフィーラに斬り掛かった。

「一体何者だ、貴様！」

「そんなもん気にしてる場合か！？ ああ！？」

振り下ろさしてくる右腕を、ザフィーラは先程よりも更に大きく避ける。展開した防御魔法等から魔力を奪われるなら、レギオンの攻撃は可能な限り回避しなくてはならない。だが、当然ながらその動きはザフィーラから次の行動に移る余裕を奪ってしまう。

右腕の一撃を躲されたレギオンは続けて左腕を振り上げる。その軌道を予測してザフィーラは後ろに下がり。

「逃げられねえよ……そんなんじゃないなあ！！」

振り上げられた左腕がザフィーラの頭の位置でピタリと止まる。

「ッ……！！」

その瞬間、何をするのかを察したザフィーラが身を振り、直後黒い短剣が散弾のように撃ち出された。

「ぶっ……！！」

「まだまだ

！？」

撃ち出された短剣はザフィーラの右肩を掠め飛ぶ。体勢を崩し高度を落としたザフィーラに、レギオンは追撃の為右腕を向けるが、自身の周りに細い糸　ワイヤーが舞っているのに気付き、追撃を中断した。

「ああん……！？」

「クラールヴィント！」

『.ja.』

先端に宝石のついたワイヤー　ペンダルフォルムとなったクラールヴィントがレギオンを拘束しようとワイヤーの範囲を狭める。だが。

「バインドか……しゃらくせえ！！！」

レギオンの叫び声と共に、その全身から無数の武器が出現、全方位に射出しクラールヴィントのワイヤーを吹き飛ばした。

「ぬっ……！？」

「きゃあ！」

その攻撃はバインドを仕掛けていたシャマル、再度間合いを詰めようとしたザフィーラにも襲い掛かった。

「がつ………！」

レオーナとの間合いを一気に詰めようとしたシグナムの身体が“黒い風”に押し流されていく。

「壊刃の間よ………！」

更に体勢を崩したシグナムにレオーナが追撃の為に突撃槍に魔力を籠める。集束された魔力は渦のように回転を始め、回転する魔力は周囲の空気を巻き込んでその色を黒く染めていく。

「斬り………刻め！」

竜巻と化した魔力をレオーナは槍ごとシグナム目掛けて解き放つ！

(躲……せ……！)

迫る黒い竜巻に、かろうじて体勢を立て直すことが出来たシグナムは高度を上げることでギリギリの回避に成功する。

「これは……！？」

標的を外した竜巻はそのまま地面に激突。周りに黒い刃を撒き散らし周辺の建築物を細切れにして破壊してしまう。

(なんと……破壊力 ……！？)

「うらあっ！」

攻撃の破壊力に気を取られた瞬間、レオーナが瞬時に間合いを詰め突撃槍を振り下ろす。

「ッ……！」

呪いの言葉を聞いた。同時にレオーナの左目が黒く染まっていく瞬間を見た。

「レオーナ、まさか……！」

「殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せがあああああつ……！」

何が起きているのかを察したシグナムが思わず声を掛けようとしたシグナムだったが、突如発生した黒い風に吹き飛ばされた。

「まだまだ……！ まだ貴様に明け渡す気は無い、ディザスタ……！」

黒い風に煽られ姿勢を崩すシグナムに、しかしレオーナは追撃もせずに顔を俯かせる。

「レオーナ……やはり、それは融合の」

「うつつつつがあああああつ……！」

動きを取り戻したシグナムがレオーナに向き直った瞬間、レオーナ

が自分の左目に掌底を打ち込んだ。

「レオーナ……！」

「貴様の考えている通りだ、管理局……。
ディザスタはユニゾンデバイスとして適性を問わず“誰とでもユニゾン可能”というコンセプトの下、実験、調整を受け続けてきた」

突然の行動に絶句するシグナムに、左手を下ろしながらレオーナが口を開く。その時には黒く染まり掛けていた左目も元に戻っていた。

「結果……当初の目的通りの成果を上げたが、その代償に、重大な欠陥が更に顕著になった」

「融合騎からの意識の侵食か」

「人は戦闘に意識が埋没すればする程、敵への殺意や破壊衝動が大きくなる傾向がある。

戦争がその代表例だ。最初は人に向かって引き金を引くのに恐怖心を覚えても、引き続ける内にそれが消えていく。命を奪うことに何の関心も抱かなくなる。これは戦争だ、引き金を引いて殺さなければ、自分が殺される。戦争だから殺しても許される……」

語りながらも右手に持った槍に魔力を集束させていく。
ゆっくりと……ゆっくりと……。

「デイザスタはその精神状態を利用して、被融合者と意識を強引に一つの方向に統一することで対象を選ばずユニゾンが可能になった。だが……強すぎるデイザスタの殺意は被融合者の意識をあつさりと侵食してしまう。気を抜けば一瞬で私の身体は黒く染まり、私はデイザスタの器に成り下がる」

「そこまでして……復讐を望むのか、レオーナ。そんなことをしてもお前の仲間は」

「喜ばないとしても!? 帰って来ないとしても!? 当たり前だ! あの時……共に闘い続けた戦友達は既に死んでいる! お前時空管理局が望む平和の踏み台としてな!」

シグナムが彼女の身を案じる言葉を言った瞬間、レオーナが咆えた。同時に右手の槍にも集束された魔力が周囲の空気を集め、黒く染めていく。

「言った筈だ……! 私が失うもの等何も無いと……! 護るものを奪った貴様等が……私の仲間を語るな!!」

「ッ……!! レヴァンティン!!」

どす黒く染まつた突撃槍を構えてレオーナが飛び出す。それを見たシグナムもまた、カートリッジから魔力を補填し、レオーナ目掛けて飛び出す。

「風帝」

「紫電」

黒い風を纏った突撃槍を腰溜めに構えて後ろに引く。シグナムも自身のデバイスに炎を纏わせ振りかぶる。そして突撃する二人が互いの間合いに入った時

「咆哮!!」

「一閃!!」

炎と風が正面から激突し、爆発した。

白い炎の壁が闘技場のように公園を覆う中、蒼い円盤と氷の刃が鳥のように飛び交い幾度となく男に飛び掛かっていった。

「フッ……」

回避するスペースなど無いかのように見える猛攻を、メリオスは一笑に付した。

「フリジットダガー！」

「コメット！」

はやてが更に氷の刃を増やして射出し、タリルが自身のデバイスに突撃を命じる。

「無駄だ……」

降り注ぐ氷の刃を、身体を右に左にと軽く傾げるだけで躲し、飛来する円盤を刀で逸らしていく。

「そら、いくぞ……!!」

全ての攻撃をやり過ごし、次の攻撃に入るまでの一瞬、メリオスの姿が掻き消えタリルの目の前に現れた。

「……!!」

「さあ、どっする?」

突然目の前に現れた敵に驚愕するタリルに、メリオスは余裕をもって問い掛け刀を振り下ろす。

『防壁』

迫る斬撃にコメントサンクチュアリが反応。近くに浮遊していた子機が動き、両者の間に割り込んでシールド魔法を発動させる。

「ちっ……!!」

舌打ちをしつつ、視界が遮られている内にタリルが飛び退く。

『子機、大破。残り六』

「ッ……！」

少し遅れてシールド魔法ごと子機が斬り裂かれる。

「無駄だ……」

更に反撃として後ろから迫る子機にも左手を翳し、デバイス無しでシールド魔法を使用。あっさりと受け止め弾き飛ばしてしまう。

（あかん……！ 強すぎる！ ウチら後衛組やと反応できひん！
せめて……シグナムがザフィーラが居てくれてたら……！）

初めて見る二人の闘い方……古代ベルカ式の使い手であるメリオスと変則的なデバイスとはいえ、ミッド式の模範的な闘い方のタリルの戦闘を見てはやはり戦況の不利を悟った。
だ

「さて……そろそろ分かっただろうか？ 私と“お前達”の力の差が……」

「うつせえ！ こいつらなんぞ元々勘定に入っちゃいねえ！」

「ならば尚更だ。その様子だと自覚はあるようだな」

「……？ どついつことやっ？」

その会話の意味が解らずはやてが問い掛ける。

「なんだ……闘いには随分と愚鈍な兵士だな……。まさか、この状況が戦闘スタイルの相性の悪さ故……などと思っていたのではないだろうか？」

「……？」

「凶星か……哀れな……」

「簡単なこつた。さっきどっか行っちゃまったあいつらを入れてもこいつの方が強い……！」

「なっ……！？」

はやてからすれば、五人掛かりならば勝てる……そんな考えもあった。タリルのことはよく知らないにしても、シグナム、ザフィーラ、シヤマル、現在自身とユニゾンしているリインフォース？も含めて全幅の信頼を寄せていた。

その全員が居ても尚タリルは勝てないと言う。

「そういう事だ……。もつとも……お前が手の内を全て見せていたらの話だが……」

そこまで言うてからメリオスはタリルに視線を向け、驚きに声も出せなかったはやても釣られるように顔を向ける。

「わざわざ私を殺す為に力を磨いてきたのだろうか？ ならば見せてくれ……お前の復讐を……」

「……！ 言われなくともやってやる！ コメット！！！」

タリルが足元に魔法陣を展開して腕を振り上げる。その動作に反応して待機していた円盤状の子機が上空に飛び上がり、円陣を組む。そして円の中央に光が走り水色のミッド式の魔法陣が現れ魔力を集めはじめると。

「そうだ……見せてみる、未熟な復讐者よ。お前が神に挑む価値があるのか否か……！」

「メテオレインー！」

『流星弾雨』

タリルが腕を振り下ろす。それを合図に上空の魔法陣から無数の魔力弾が散弾のようにメリオスに降り注いだ。

（渡された資料とまったくちゃう！ 防御、結界系の魔法に関してはSランクの総合Aランク魔導師やて！？ 明らかにニアSランクやん！）

ユーノと同じタイプの魔導師……そう知らされていた為にはやても彼の闘い方を後方からの援護を主にしている、っと思っていた。だが、実際に見てみればその攻撃的な戦い方に困惑するばかりだった。

（実力を隠してた……？ けど、どうして……何の為に……？）

はやてが考え込む間に、魔力弾が少しずつ減り、魔力弾が着弾することで舞い上がっていた粉塵が薄れはじめ。

「この程度か……？ はっきり言って拍子抜けだ」

舞い上がる粉塵の中から無傷のメリオスが現れた。

（あれだけの魔力弾を受けても全然消耗してへんのか！？）

「もうよい、少しは期待した私が愚かだった。せめてこの刀の

「！？」

あの猛攻にまったくダメージを受けた様子を見せないことに驚くはやてを無視して、メリオスは刀を構えタリルに斬り掛かろうとするが、自分の足元を見てその動きを止めた。

「なんだと……！？」

粉塵が吹き飛んだ後にメリオスが見たのは、自身の足元に描かれた水色の魔法陣だった。

「これは……！」

更に辺りを見回した時、魔法陣の外枠に沿って、六つの円盤状の子機が地面に突き刺さっているを見つけた。

「零距离からの砲撃魔法だ……！」

気付かぬ内に用意されていた魔法に驚く間にも、魔法陣に魔力が集束されていく。
そして。

「……！！！」

「消し飛べ……！！メテオカノン……！！」

『流星砲』

魔法陣から水色の魔力の奔流が放たれ、メリオスを飲み込んで空に昇っていった。

第四十五 【真実の白、裏切りの黒】

プロヘエーティン・シュリフテン。

聖王教会の騎士カリム・グラシアのレアスキルを行使する為に必要な預言書型のデバイス。

これから起こりえる事態を詩という形で表現し、その的中率はよく当たる占い程度、とは本人の言。また発動には膨大な魔力を必要とするため、使えるのは一年に一度、特定の時期のみという力。

「ッ……!?!」

「カリム!?!」

自身の執務室でカリムが突然膝をつき、尋常ではない様子にシャツハが慌てて駆け寄る。

その二人を嘲笑うように部屋の中を本のページが乱れ飛ぶ。

「こ……れは……?」

(まさか……プロフェーティン・シュリフテンが……発動している!?!)

自分の意思によるものではない魔力の流出と預言の発現。困惑する

二人を余所に、飛び交う本のページはまた元の場所へと戻っていく。

「……………！」

「危険です！ カリム！」

魔力の流出が止まってからカリムは立ち上がり、預言書に近付く。

「……………」

知らず乱れる呼吸を整えながら、カリムは預言書に触れる。そこに書かれているであろう詩を見るために預言書を持ち上げようとしてその手が震えていることに気付く。

（なぜ……………？）

それでも内容を確認しなくては始まらない。その決意でカリムは内側から込み上げる感情を無視して。

「ッ……………！」

「カリム!?」

内容を見た瞬間、預言書を投げ捨てた。

そこに書かれていたのは詩ではなかった。いつそ子供の落書きと言われても納得できる……たったの一行で書かれた預言。

世界は滅ぶ

「業罪を焼け

」

完全な不意打ちである足元からの零距离砲撃魔法。

非殺傷設定がされていない強烈な魔力の奔流はメリオスを飲み込み、その肉体を破壊しようとして。

「天啓……！！」

奔流の中から溢れ出した白い炎に吹き飛ばされた。

「なん……だっ……！！？」

「炎……！！？」

宿願の達成を目の前にしていたタリル。自分が居ながら人を死なせてしまうという状況に、膝をつきかけたはやてはそれぞれ驚愕の声を上げる。

「先程の非礼を詫びよう、復讐者。私の短慮で随分失礼なことを言
った」

白い炎の中から声が響く。

「お前は神に挑むに十分だ……。
見るがいい……！！これがお前が復讐せんとする神の力……！！」

やがて白い炎が収まるのと同時にメリオスが前に歩み出る。その手に握っているのは刀ではなかった。

長身のメリオスとほぼ同じ長さの白い柄。ところどころに金色の装飾が施され、柄と同じく白い刀身は槍と呼ぶには長く、幅広だった。神々しさすら漂わせる白い槍をメリオスは横一文字に構える。

「この世の罪人共を裁く神の炎……天啓だ」

ニアSランクのタリル、Sランクオーバーのはやてすら圧倒する魔力。

「滅びよ、復讐者。我等の命は神の供物。その力は管理局の支配を受けぬ世界を救う礎になるだろう」

「ッ……!!」

膨大な魔力に圧倒されながらタリルは円盤状の子機を呼び戻す。その様子を余裕をもって見守りながら、メリオスは白い槍を片手で器用に回転させ、白い刀身からは炎が生じはじめる。

「サテライトウォール!!」

『衛星死守』

呼び戻した円盤状の子機の内、四つがタリルの前に陣を張り、巨大な魔力防壁を展開する。

「アマテラス！！」

強固な壁を張る敵に、しかしなんの感慨も示さずメリオスは回転させていた槍の切っ先を突き出す。鋭く尖った槍の先端から白い炎が波のように溢れ出し、タリル目掛けて押し寄せた。

「……………！」

白い炎の波はタリルの巨大防壁と接触、凄まじい爆発となって防壁ごと周囲の空間を薙ぎ払った。

「ふっ……………！？ くっ……………！」

「……………！！」

その破壊力は離れた場所に居たはやてすら衝撃だけで吹き飛ばそうとし、防壁に護られていた筈のタリルを空高く打ち上げ、地面に叩き付けた後も何度もバウンドさせ、身を屈めることで爆風をやり過ごしていたはやての傍に落下させた。

「タ、タリル!？」

「ぐっ……! くっ……そっ……!」

『子機、四機大破。残り二』

苦痛を押し殺しながらタリルが立ち上がるが、コメットサンクチュアリからの被害報告に悔しそうに奥歯を噛み締めた。

(たった一撃でこのダメージかよ……! 今まで逢った魔導師とレベルが違いすぎる!)

「どうした? まさかこれで終わりか?」

強烈な爆発の衝撃で生まれたクレーターを、悠然と飛び越えながらメリオスは問い掛ける。

「まだ……! まだやれるに決まってるだろ!」

『集結』

その余裕の態度に苛立ちながらもタリルは足元に魔法陣を展開し、コメットサンクチュアリが生き残った二機の円盤状の子機を呼び戻す。

「闘気は一人前だな。だが……」

そこでメリオスが一度言葉を切る。

「……！？ 何の真似だ……！？ どけ！」

「今はそんなことを言っとる場合やない！」

その視線の先にはタリルを庇うように前に出たはやての姿があった。

「お前じゃ無理だ！ 失せろ！」

「そんなこと言ってもタリルかてボロボロやん！ 過去に何があったのか知らんけど、ここは協力して」

「……！」

怒鳴るタリルに顔だけを振り返らせながらはやては応じていたが、
視界を覆い尽くした影に口を閉ざす。

「小娘……お前は邪魔だ」

はやてが前に向き直った時には既に遅く、メリオスは白い槍を後ろ
に引き、構えていた。

「逝ね……！」

咄嗟に身構える隙も無く、白い槍の切っ先がはやて目掛けて突き出
された。

(ッ……！)

(マイスタ)

。どんな魔法も間に合わない一撃。その切っ先をはやては注視して

「……！？」

右肩に衝撃が走り転倒した。初めはやては右肩を貫かれたのかと思
った。だが、倒れた後も想像していた激痛は無く、不思議に思いな
がらも顔を上げ。

「馬鹿なっ……！ なぜ……！？」

そこには突き出した槍を手に目を見開くメリオスと。

「ッ……！ はっ……！」

槍の切っ先を腹部にめり込ませ、血を流すタリルが居た。

「なぜだ……！？ なぜこのようなことを……！？」

「うっ……せえ……！ これい……じょう……てめえの……す……き
……に……させるかよ……！」

信じられないものを見たという風に呟くメリオスに、タリルは息も
絶え絶えに答えた。

「……………！」

「がはっ……………！ ちく……………しょうが……………」

驚愕の表情を浮かべたまま、メリオスが槍を引き抜く。その動作に引かれてタリルが一步前にでるが、そのまま力尽きて地面に倒れ込んだ。

「タリル！？ タリル！！」

「はっ……………！ はっ……………！ はっ……………！ はっ……………！」

（傷が深い……………！ すぐにシャマルのそこに行かんと……………！ けど……………この男がおつたら……………）

「何をしている？ 傷は深いが、吐血していないところを見ると奇跡的に内臓は外れている。早く連れていけ」

「なっ……………！？」

メリオスの言葉にはやてが絶句した。先程まで圧倒的といえる力で二人を打ち砕こうとしていた男が手の平を返して見逃すというのだ

から驚かない筈はない。

「メリオス・ベルリヒンデン……あんだ一体」

どいうつもりや……そう聞こうとしたはやてに一枚の、小さな板状のものが投げ付けられた。

「……？」

「その男の健闘を讃えて、くれてやろう」

はやては投げ付けられたものを手に取る。それは小さめのフロップディスクだった。

「これは……？」

「第九管理世界……かつてレオーナの祖国があった世界……そこに末端の局員では知る由もない、廃棄された生命研究所がある」

語りながらもメリオスは二人に背を向けて歩きだす。

「どこに行く気や!？」

「【カ】ストレンド、【槍】レオーナ・ヴァーンハルト、【災厄】
ディザスタ、【群体】レギオン、【剣】はやしなき林崎 當麻とつま、【竜】ティン・
ダイロン……【ティアマト】に籍を置く者達の闘う理由の要因がそ
こにある。興味があれば行ってみるがいい……。
ただし

はやての詰問に足を止め、首だけを後ろに、はやて達の方に向ける。

「我々の次の目的地は第九十七管理外世界、地球だ」

「……!」

「真実を知りたければ“それ”が示す場所に行け。絶望を送ろう。
すぐに追ってきたければ好きにするがいい。お前達の道は我々に追
い付いた時点で終わりだ」

「ちょっと待った! なんでや!？ なんであの世界なんや!？
地球になにがある、っていうんや!？」

「現地人であるお前が知らんのも滑稽

」

口元に嘲笑を浮かべようとしたメリオスが、不意に表情を引き締め、空を仰いだ。

「増援……！？ よかった……間に合ってくれた……！」

それに釣られて顔を上げたはやては何人も魔導師が空から舞い降りてくるのを見た。

「いつらは……」

はやて達を囲むように地面に降り立ったのは、街に到着した時、はやての指示で民間人の救助を行っていた者達だった。

彼等は地面に着地すると同時にデバイスを“三人”に向けた。

「え……？」

気を失ったタリルに肩を貸しながら彼等に駆け寄ろうとしたはやては自分に向けられたデバイスに咄嗟に反応出来なかった。

「スサノオ……！」

デバイスの先端に魔力光が燈り、魔力弾が撃ち出されようとした瞬間、白い線が走り、その身体を両断した。

「呆けている場合か？」

「一体何を……いや、これは……!？」

「状況を飲み込めんか……道化だな、小娘」

味方に突然武器を向けられる……その状況に混乱するはやてを白い槍を構えるメリオスが嗤う。

「この人等のこと知ってるんか!？」

「知っているも何も……こいつらも管理局の人間だろう」

「管理局の……って！ せやったらなんで」

「決まっている……今、この場において貴様等が邪魔だからだ」

混乱しながらもなんとか状況を把握しようとするはやてだったが、

メリオスの言葉で更に深みに嵌まりかけた。

「それより……その男、放っておけば死ぬぞ。疾く、失せろ」

「……………！ くっ……………！？」

メリオスに押されるように、はやては飛行魔法を発動。タリルを連れて空へ上がる。

「追撃を……………！？」

一人の男が指示を出そうとするが、一瞬で目の前に現れたメリオスの白い槍に胸部を貫かれ絶命した。

「全てが終わった時、我等は復讐しか残らなかった……………。愛する者も、誇るべき信念も……………。貴様は違うのか？」

男の胸から槍を引き抜きながら、メリオスはほんの少しだけ空を見上げ、すぐに目の前の敵に向き直った。

上空高く発生した炎の爆発と黒い竜巻。

その中から全身に切り傷を負った人影　　シグナムが現れ、重力に引かれて落下していく。それでも落下中にかろうじて飛行魔法を發動させ、軌道を変更。燃え残っていたビルの屋上に落ちることで、火の海への落下を防ぐ。

「ぐっ……」

全身の出血を無視して、レヴァンティンを構え、空を仰ぎ見る。

「閣下……？」

そこにはシグナムとの激突を制し、無傷で空中に佇むレオーナの姿があった……だが、彼女は既にシグナムを見ていなかった。

（念話か……？　何があった？）

その内容まで把握することは出来ない。シグナムはひたすらに構え

を保って警戒を続けた。

「運が良かったな、管理局。この闘いはこれで終わりだ」

不意にシグナムに向き直ったレオーナが告げる。

「どづいつことだ……?」

「見逃してやる……と言っているんだ……。貴様の主も既に敗走しているぞ」

「なんだと?」

「覚えておけ……私達には勝利も敗北も無い……。故に私達を止めること等不可能……お前達管理局に出来るのは、お前達自身が生み出した復讐の炎に焼かれることだけだ」

それだけ言ってからレオーナはシグナムに背を向け黒い風を纏って飛んでいった。

「ああ！？ どういうことだ、ヴァーンハルト！ 餌目の前にして退け、つてのか！？」

右肘から先を黒い両刃の長剣に変化させていたレギオンがザフィーラから視線を外し、誰も居ない方向に向かって怒鳴った。

(ザフィーラ……)

(念話か……他の場所で何かあったのか？)

念話を行い無防備な姿を晒すレギオンだが、ザフィーラとシャマルもダメージと奪われた魔力が大きく、即座に攻撃出来る状態ではなかった。

「ちっ……切りやがった……。喜べ犬ところ……！ 今日はまだ終わりだ……！ どのみちこんな邪魔が入ったら食欲も失せる……！」

「逃げる気か！？」

小さく愚痴りながらレギオンが二人に背を向ける。それをザフィーラが呼び止めようとするが……。

「逃げる……？ 馬鹿が……！ 今の自分の様も分かんねえ程に呆けてんのか、てめえは……！？」

「ッ……！」

「何をどうしようがてめえ等に“俺達は”殺せねえ……無駄なんだよ……てめえ等の努力も……闘いも……！ その全部がな……！」

そして啞う……啞いながらレギオンの姿は黒い霧のようなものに包まれ……蟲の羽音と共に消えた……。

S I D E Eーはやて

「はやてちゃん！ 目を覚ましたよ！」

「ほんとか！？」

管理局本部の通信を終えたのと同時に、タリルの治療をしてくれたシャマルが声を掛けてくれた。

「大丈夫か、タリル……！？」

「ッ……此処は……？」

やっぱり状況が飲み込めんか……無理もないけど……。

「ここは街の郊外にある森林地帯や」

あの後……なんとかタリルを連れて街を脱出し、同じく脱出してきたシグナム達三人と合流。全員の怪我をシャマルの癒しの風である程度治した後、シグナムとザフィーラは街に戻っていった。本来行われる筈だった民間人の救助と……【ティアマト】のメンバー三人そしてあの魔導師達の搜索の為に……。

ただし、タリルだけは傷が深くてすぐに完治……とはいかんかったからシャマルと残って傷の治療に専念。リインはユニゾンを解いた後は休息のためにお休み。生まれてからそれ程日も経ってへんのに、

今回はいきなりハード過ぎたかな。

「……………！ あの野郎は！？」

「分からん……………今シグナムとザフィーラが街に戻ってるけど、時間も経つとるし……………」

「くそっ……………！」

タリルが苛立ちを紛らわすように拳を地面に叩き付けた。

「待って……………！？ まだ治療が……………」

「ちょっと待ち……………！ 何する気や！？」

「決まってる！ あの野郎を追っ……………！」

お腹を押さえて無理矢理立ち上がろうとするタリルの肩を押し返す。

「今動かなけりゃ、また手掛かりゼロだ！ やっと……………六年近く掛かってようやく追い付いたんだ！ ここまで来て……………」

「ベルリヒンデンの行き先なら分かっ取る！ ええからまずは落ち着きー！」

「なに……！？」

「せやから今後について話しときたい事があるんや」

そう言つとタリルはあつという間に大人しくなつた。

「まず聞きたいんやけど、最初に合流したあの陸士部隊の魔導師らについてやねんけど……」

「……？ あいつらなら俺より先に港に整列してやがったぞ……。船に乗る段階で初めて同じ任務に就く、って分かつたぐらいだが……あいつらはどうした？」

「ウチらが逃げる時にデバイスを向けてきた」

「……！？」

タリルが眼を見開く。この様子やとタリルはあの人等とは無関係かな？

「なんだそりゃ……！？」

「さっきまで本部の人にも問い合わせたけど、辞令も資料も正式な物やったらしいんやけど……そんな命令を出した者は居ない、って返ってきたわ。その魔導師達にしても管理局における箒やのに、所属部隊には名前が無かったらしい」

「……………」

「タリル？」

「メリオス・ベルリヒンデンの個人情報情報は抹消されていた……………」

それまで黙っていたタリルが唐突に口を開いた。

「俺があいつに辿り着いたのは、無限書庫にあった二十年前の過去の事件の資料にあいつが載っていたからだ……。なのにいざ調べ始めたら、そんな人間が管理世界に居た記録はありません、だった」

「それって……」

あの魔導師達と同じ……。

「あいつらが何なのかは分かんねえが……個人情報操作や完全な抹消なんてこと出来るのは限られてる」

「管理局が……それをした、って言うんか？」

「それもかなり上の奴だろうな」

信じ難いことをタリルが平気な顔して言うてのける。
後ろ暗いことをしてます、っと両手を上げて宣伝してるような行為をしてなんになる……そう聞き返したいのにタリルの表情にはなんの迷いも無かった。

「それで？ 野郎の行き先が分かった、って言うのは？」

「えっ……！？ あ……ああ、その事な！」

本来ならタリルには話さんほうが良かったのかもしれないけど、あのまま放つといたら重傷のまま追い掛けていったやろうし……。

「第九十七管理外世界、地球……そこに【ティアマト】のメンバーが集結し始めてるらしい。あの三人も地球に向かう、って言うってたわ」

「地球……！そこに奴が……！」

「ただ……ウチらとしては地球より先に行きたいところがあんねん」

「行きたいところ？」

「第九管理世界……そこに廃棄された生命研究所があるらしいねん」
「タリルの疑問にメリオスから受け取ったフロツピーディスクを見せながら答える。」

「相手の情報を得る為にもまずはその研究所を調べに行きたいねんけど……」

「俺には何の関係も無いな」

「……………そういつやるうと思っとなわ。けど……………実際のところどっちも急がなあかんやるうから、二手に別れることにした」

「話が見えねえが……………」

「最初はウチとリイン、シグナムが地球、ザフィーラとシャマルが第九管理世界、って感じに」

【ティアマト】の戦力と計画の危険性を訴えてたシグナムは地球に向かうべき、って言うってたけど、シャマルが相手の能力も何も分からんままに挑むのは危険やと反対。ザフィーラは押し黙ってウチの決定に任ず、みたいな感じやった。なので地球へ向かう組と捜査組で別れる事にしたんやけど……………。

「戦力的にバランスが悪くてな。ただ、タリルが入ってくれたら話は変わってくる」

「俺にどっちかに着いてけ、ってか？」

「ウチとリイン、シグナムにザフィーラが第九管理世界。タリルとシャマルが地球なら戦力での不安も無い。地球ではなのはちゃん達と合流して【ティアマト】の捜索を行ってほしい」

「分かった」

「もちろんタリルにも目的が……って、ええの!？」

正直いきなりOK貰えるとは思ってなかったけど……。

「奴らの戦力は半端じゃない……。あいつら全員を抜いてあの男を殺せるなんて思い上がっちゃいねえ。」

だったら少しでも成功の確率が上がる手段を取る……。それだけだ」

「タリル……」

闘いが始まってからそうやったけど……。

「タリル……なんであの男をそんなに殺そうとするんや？」

「話す義務が無え……。そんなことより急ぐんだろ？ あの二人も帰ってきたぞ」

タリルの視線を追っていくと今だに炎上する街から二つの人影が飛んでくるのが見えた。

「しゃあない……けど、ちゃんと話してもらっからな！」

「……………」

返事が無いのを不審に思っけてタリルに視線を戻したら、眼を閉じて眠ってた。

あの怪我やったしなあ……。タリルにも無理させてたか……。

「シヤマル……道中の治療よろしくな」

「ええ、任せてください。はやてちゃんの命の恩人ですし、地球に着くまでにはちゃんと治療してみせます」

シヤマルの言葉に頷き返してから改めて遠くで燃える街を見る。今回も自分達で何とか出来る、っていう陸士部隊の増援要請の遅延による初動の遅さと、ウチらの力不足が原因で多くの人達が死んでしまった。このままやったらあかん。この事件だけやない……。他にもいっぱい事件が起きとる。なんとかか……。なんとかせんと……。また同じ事の繰り返しや……。

S I D E I O U T

DMCクロス番外編アンケート

作者（以下 作）「はい！ というわけで始まりました、番外編企画アンケート回！ 司会は私、駆瑠と……」

桔梗（以下 桔）「アシスタントの水無月 桔梗がお送りします」

作 「気が付けばPV数が二万越えてました。思い付きから練り出した設定とストーリーだったのですが、読んでくれている方々がいるのは嬉しい限りです！ オリキャラ達にも意外とファンがついたりで……」

桔 「ストレンドなんか感想掲示板で死ぬな死ぬな、というコメントが多数入ってたしな……私にどうしろと？」

作 「桔梗ちゃんにもファンがついてたり……」

桔 「……？ ファン？」

作 「ツインテールの桔梗ちゃん萌」

(# 、 、 #)
(;)

桔「あれは私の黒歴史だ」

作「酷すぎる……」

桔「次は真つ二つにするぞ……それで？ 今回の趣旨は？」

作「最初にも言っていたアンケートですね。前からやるぞやるぞと言ったDMCとBLEACHのクロスに関してね。本編も進んできたからようやく一話目を書き出したわけですよ」

桔「企画倒れになってたと思っていたが……」

作「本編より話が進んだら変でしょ？ 桔梗ちゃんが本編でも使っていない卍解を使っちゃったりしたら」

桔「いくらなんでも間が空きすぎだろっ……」

作「すみません……私のがんびりしてたからです……」

桔「で……？ 一体何のアンケートだ？」

作「オリキャラ大募集！」

桔「ネタが無いのか？」

作「それもあります」

桔「正直に」

作「そ・れ・も！ あります」

桔「……………」

作「実際、読者参加企画というのもやってみたかった、っていうのもあります。極めて個人的な理由で申し訳ないですが……………」

桔「それで？ それだけでは漠然とし過ぎだろう。具体的には？」

作「番外編への参加勢力は以下の通りです」

・BLEACH（死神代行消失篇より前）

死神代行組

護廷十三隊

・DMC（4より前。2の時系列がイマイチ解らないので1が終わったぐらい）

デビルハンター（ダンテとかトリッシュ、レディとか）

悪魔

作「以上です。この四勢力につき一人か、二人ぐらいほしいなと」

桔「一勢力につき一人……採用するのは四人ぐらいか。少ないな」

作「こればかりはストーリーの展開上どうしても……原作キャラも出ますからね。流石に彼等の出番を無くすわけにはいかないのです……彼等あつての二次創作……彼等あつての妄想ですから」

桔「自分で言うな。デビルハンター、って言うのは？」

作「勢力と言うより職業ですね。そういうことをしてる人、っていう感じで」

桔「そして時系列での条件付きと……」

作「BLEACHだとまだ完現術の設定が明らかになってないしね。使いづらそうだし、アニメオリジナルストーリーみたいなものでも思ってもらえれば……」

桔「適当な……。他に条件は？」

・キャラの名前

・容姿（眼の色や髪型に髪の色、身長とかある程度どんなキャラかイメージできれば問題無し）

・能力

・性格

・喋り方（実際に台詞を載せていただけたら有り難いです）

・プロフィール

作「こんなところです。喋り方はキャラを構成する大事な部分の一つでしょうから敢えて書きました。喋り方と性格、って一致しないキャラも居ますしね」

桔「容姿の欄がそこはかとなく不安を覚えるんだが……」

作「やっぱり明確なものがあっても言葉にするのは難しいというのもあるでしょうしね」

桔「妄想とはいえ小説書いてる奴が何言ってる」

作「すいません……」

桔「それが良いかどうかは読者様の判断に任せよう……他には？」

作「能力はある程度なら。プロフィールも同じくOKです」

桔「ある程度？」

作「指先一つで〜　ダウンさ〜　とかにならなければ」

桔「古いネタで訳の分からんことを言うな。強すぎなければ良い、ということか？」

作「愛染とか山本総隊長レベルだと流石に強すぎる」

桔「あいつらは完全規格外だ。プロフィールは？」

作「BLEACHだと黒崎　一護の同級生だとか、何番隊所属だとか……DMCだとダントの同業者だとかですね」

桔「なんでも良いのか？」

作「後で原作に出てきそうなものでなければ。零番隊とか久保　帯人様も出す、みたいなことをファンブックで言ってたしね」

桔「他にあるのか？」

作「募集方法ですが、今までやってたアンケートと同じく感想掲示板、ネタバレが嫌だ、という方はメッセージボックスにお願いします」

桔「これで何も来なかったら無様だな」

作「私としては読んでいただけだった、っという方々にもこれを機にちよつとやってみよう、とか思ってもらえれば嬉しいですね」

桔「通信料とかを除けば書き込むだけだからな」

作「さて、こんなところですかね。ついですし四十六話の予告もちよつと……」

桔「迂闊にそんなもの載せて……書けなくても知らんぞ」

【ティアマト】との闘いを終え日常に戻った桔梗。その彼女になのは達が接触を試みる。

だが、海鳴市には桔梗にとっての過去がすぐそこまで迫っていた。

第四十六話 【護廷十三隊】

桔「それでは今回はこれで失礼させていただきます」

作「応募期間は今のところは特に設けてないです。目安的には桔梗ちゃんが正解したぐらいで切るうと思います」

桔「また曖昧な……」

作「次回の更新でお会いしましょう」

桔梗のクロス短編小説第一弾……の二幕（前書き）

さあ、文句ならいくらでも聞こう！ どんどん罵るがいい！

……いきなりですいません……。
まず、皆さんこう思われるでしょう……。

「本編はどうした？」

と……。

実はプロットが若干迷走を始めています。終わりは見えてるのですが、そこにたどり着くまでの過程に変な矛盾を発見し、修正を加えているところです。

まだ修正可能な範囲だったのが救いでした……。
ですが、作者のマヌケを報告するただけに一話分使うのもなんだったので友人から続きを書け！ とせがまれていた（なぜか友人達の間ではDMCより好評だった……）Fateの続きも書いてしまいました。

本編ほつぱり出してなにしてんだ！ っと思われるかもしれませんが、七月か八月には修正が完了する……させるのでどうか見捨てないでもらえると嬉しいです……。

暫くはこちらを書きますが、DMC外伝クロスアンケートも受付

中なので参加していただけると作者が泣いて喜びます。

では、ごうげん。

桔梗のクロス短編小説第一弾……の二幕

「おはよう、水無月」

「ああ……おはよう、衛宮殿」

離れの部屋を出て居間に入ると、朝食の用意をしていた一晩の世話になった恩人 衛宮 士郎に挨拶を返す。

「あの人は……」

「大丈夫だ。今は眠っているだけのようで……」

香久弥殿がああ英霊に襲われてから一晩。診た限りでは外傷も無く、生命力を奪われた、というわけでもなかった。魂魄を汚染されたわけでもないようだし本当に寝ているだけのようだ。

「そっか……そりゃ良かった」

「ただ……何時目を覚ますかまでは……」

「家族の人の迎えは……」

「連絡はしたのですが……如何せん祖父は車等が嫌いな人なので……」

なので交通手段は自ずと電車等になるのだが……。今までの引っ越しの時ですえ積み上がる荷物を前に徒歩で行くか、などと言い出す人だ。車嫌いもここまで来るといつそ清々しい。

「なのでこれから泊まれる宿を探して」

「いや……そういうことなら目を覚ますまで離れを使ってくれていいよ」

「はっ？ いや、しかし……」

いくらなんでもそれは……。

「流石に女の子二人をほっぽり出す気はないよ。あっ、好き嫌いはあるか？」

有り難いことではあるが……。これは……。

「いえ……特には……」

「そっか……もうすぐ出来るから座って待っていてくれ」

そう言つて衛宮殿が台所に戻っていく。なんとなく嬉しそうな横顔に氣勢を削がれ、断りを入れる機会を逸してしまった。しかし……なんで嬉しそうなのだ？

「衛み ……？」

なんとなく気になった疑問を問おうとした時、チャイムの音が聞こえた。

（来客か……？ 随分早い時間に来るな）

「衛宮殿……来客のようですが……」

「ごめん！ 今手が離せないから代わりに出てくれるか！？」

それなら仕方ない。

(新聞の勧誘……にしては朝早いな……)

居間を出て廊下を歩く。視界に入った玄関の扉。ガラス張りの戸に映る人影はセールスマンなどには見えないが……。

「一体何者」

「ちょ……！ ちょっと待ってくれ、水無！？」

置いてあったスリッパを履き、戸の鍵に手を掛けようとした瞬間、背後から衛宮殿の叫び声と共に聞き慣れた凄い音がした。

(これは……香久弥殿がコケた時の音だな)

振り返ってみれば案の定、居間から出たところで衛宮殿が前のめりに倒れていた。

「そんなに慌てて」

「せ……先輩……！？ どうしたんですか!？」

「……………!?!」

何故か焦っている様子の衛宮殿に駆け寄ろうとした時、背後から女性の声と、鍵を弄る音が聞こえて。

「先ば……………!?!」

振り返ると長い髪の女性と目が合った。

「……………!?!」

痛みを堪え立ち上がろうとする衛宮殿と、時代錯誤の眼帯をした見知らぬ女。
彼女が何者か知らないが、衛宮殿の関係者として、この状況は一体どのように写っているのか……………。

「取り敢えず……………衛宮殿を助け起こしましょうか」

「えっ? あっ……………! はい!」

「ふう……遅くなりすぎたな……」

夜遅く……明かりの殆どが消えた新都。時間を確かめる為に見ていた窓の外の景色から足元に視線を下ろす。

「傀儡か……」

タイル張りのビルの一室。先程までは人体模型のような、骨の人形だったものの残骸が残っていた。視線を移せば、残業でもしていたのか、男女問わず数人の人が倒れている。

（例外無く生命力を吸われている。そして霊圧の残滓は残っていても足跡は消して移動。

畏……というより足止めか……。やってくれる）

不穏な霊圧の動きを感知し、ビルに踏み込んだ時には会社員は皆倒れ、骨の傀儡共が徘徊しているだけだった。

（昨夜あつた英霊と同じく一般人から生命力を集め回っているようだが……昨夜の奴じゃないな、別の英霊か……）

なんとなくだが、昨夜の英霊がやったというにはやり方に違和感を感じた。しかし……だとすれば……。

「“世界“に酷使される英霊が複数体も同時に現界している？ 録でもない状況だな……何が起きている……？」

どのみちここは考え事するには適した場所ではない。救急隊と警察でも呼んでから一旦戻るか。

「家の番号を聞いておくべきだったな……あの三人も心配しているかもしれない」

遠くから複数のサイレンの音が響いてくる中、朝の騒動を思い出す。最初に出会った女性 間桐殿は大した騒動にならなかった。事情を話している間中、不審者を見る目で見られていたが、見知らぬ人間が懇意にしている者の家に居座っていたらどう考えても怪しいだろう。

問題だったのはその次に現れた衛宮殿から藤ねえと呼ばれていた女性 藤村 大河だった。

この女性……短気なのか過保護なのか、暫く泊まることを伝えると、

まず衛宮殿……男性と泊まることの危険性を主張しました。言っていることは正論なのだが、なぜか藤村殿が言っていると説得力がまったく無かった。そして事態が好転しない事を悟ると、「こんな女の子と一つ屋根の下なんて認められるかあ!!」みたいなことを叫びながら朝食が乗った机でちゃぶ台返しをやりかけた。流石に黙っているわけにはいかず武力鎮圧。その時の衛宮殿の私への感謝と藤村殿への呆れが同居した複雑な表情は今だ鮮明に思いだせる。

「面白い人ではあるんだろうが……」

今まで周りに居なかったタイプなだけに、失礼だと分かっているにも笑いが込み上げてくる。

「やれやれ……それどころではないのに……!?」

その状況に気付いたのは昨日衛宮殿と会った場所……屋敷の前だった。

(この霊圧……! 何者だ……!?)

塀の向こうから感じる霊圧。昨日遭遇した英霊とは段違いの、その質。

「ッ……!!」

その場で跳躍して塀の上に着地。礼儀などを気にしている場合ではない。明らかな緊急事態だ。

「飛べえ!!」

「がはっ!!」

そこから見えたのは青い服と防具、真っ赤な深紅の槍を手にした男と、その男に蹴り飛ばされ土蔵に突っ込んでいく衛宮殿の姿。

「ふっ……!!」

「なにっ!?!」

更に後を追おうとしていた男に塀の上から瞬歩で間合いを詰める。

「おおらっ!!」

「ぐっ……!!」

至近距離まで近付いた瞬間男が私に気付くが、構うことなく男の手前で跳び上がり、顔面目掛けて飛び蹴りを放ち、吹き飛ばす。

「……………」

（ガードされた！？ 大した反応速度に身体能力だ……………！）

土煙を上げながらも大地を踏み締め慣性を殺した男。その左腕は顔の高さまで掲げられており顔面への攻撃を直前で防いでいたのが分かった。

「不意打ちとはやってくれるな……………。何者だ、嬢ちゃん？」

「先程貴様が蹴り飛ばした家主に一宿一飯の恩がある者だ。それよりも英霊……………貴様に聞きたいことが山ほどある」

「俺が何か解るってことは嬢ちゃんも聖杯戦争の関係者だな？」

「聖杯……………戦争……………？」

「……………ちっ……………どうやら藪蛇だったみたいだな」

英霊が戦争？　もしそれが普通になったなら録な世界ではないだろう。

「まあいい……………嬢ちゃんが関係あるうがなかるうが、見られた以上は……………死んでもらう！」

そう言つて男が槍を構えて踏み込んでくる。

「……………！」

「そらよ！」

踏み込む動作が見えた時には既に目の前に居た。下手な瞬歩を遙かに上回る速力で間合いを詰めた男が赤い槍を突き出し。

「ッ……………！？」

「なんだ？　女子供だからと手でも抜いてくれたのか？」

突き出された槍を左に軽く動いて躲し、引き戻される前に脇で抱えるようにして柄を掴んだ。

「舐めるなっ!!」

「なっ……………!?!」

そのまま槍ごと男を持ち上げる。

「今度は……………!」

「がっ……………!」

「貴様が飛べえ!」

「ッ……………!」

そして男を地面に叩き付けてから槍から手を離し、倒れた相手の顔面に蹴りを放ち、吹っ飛ばす。

「ちいっ……………!」

幾度となく地面をバウンドしながらも手を突き、反動で身を翻して着地した。相当な身体能力……やはり昨夜の英霊とは別格か……。

「さつきも思ったが……ただの蹴りが随分重いな……！ バーサーカーかよ、てめえは……」

「なに……人を見縊った授業料とでも思うといい。さて……家主の借りは返した。くだらん騒ぎは終わりにして、とっとこの街で起きていることを吐いてもらおうか」

「はっ……！ 終わりにすんのも勿体ねえじゃねえか……」

口から流れる血を拭いながら男が立ち上がる。その身体からは呆れる程の霊圧と闘気に満ちていた。

「日々つまらねえ偵察に、なんの因果か同じガキを同じ日に二回も殺さなきゃならねえと来た……。

だが……てめえみてえない女に逢えたなら……それもちょっとは報われる……！

さあ、続きといこうぜ……！」

「女を口説くならもつといい言葉を持つてくるんだな、狂犬……！」

開いた間合いを一瞬で零にする踏み込みから放たれる槍の刺突を、竹刀袋から抜いた斬魄刀の鞘で受け、逸らす。

「ッ……!!」

「へっ……!!」

突進の速度を保ったまますれ違い、斬魄刀の柄に手を掛け。

「ふんっ……!!」

振り返りざまに居合斬りを放つ。

「遅え……!!」

すれ違った相手の背中に向かった刃は、しかし槍の石突きに止められ。

「おじっ……!!」

「せえいつ……！」

反撃の右の蹴りを、左の脚で止める。

「「ッ……！」」

硬直した状況を仕切り直す為に互いにバックステップ。その際に邪魔になりかねない鞘を放り捨て

「「はあああつ……！」」

鞘が地に落ちると同時に間合いを詰め、同じように突っ込んできた男目掛けて思いつ切り斬魄刀を振り下ろした。

「ぐっ……げほっ……！」

咳込みながらも辺りを見回す。なんとか土蔵までは来れた……。
けど……。

(追って……こないのか……?)

夜遅くまで残っていた学校の校庭で、明らかに場違いな決闘をしている赤と青の人影を見つけた。

遠目からではイマイチよく分からなかったが、それでもそいつらの動きが常人と掛け離れていて……あるうことか、そいつらに見つかり青い服の男に心臓を刺された。

(でも……助けられた……！ 助けられたのに……！ また殺されるのか……！？ あいつに……！?)

流れていた血溜まりに吐きそうになりながらも、床を拭いてから帰ってきた。

なのにあの男は屋敷まで追ってきた。

逃走は……論外だった。離れには水無月の姉が眠っている。もし、あの男が俺を探して彼女を見つけたら……。

幸いだったのはこんな時間になっても水無月が居ないことだった。ならば、後はなんとしてもあの男を追い払うだけ……。

なのに……！

(死ぬのか……！? また助けられて……なのに誰も救えないまま

……親父との約束も果たせないまま……！！！！

外からは鉄と鉄が激しくぶつかる音が聞こえる。何が起きてるのかさっぱり分からない。

それでも……自分の無力だけははっきりと分かった。

（俺は　　！？）

突然……あまりにも突然に、左手から激痛が走った。

「なんだ……！？　これ……！？」

痛みと熱さに激昂していた精神は逆に冷や水を浴びせられたように静まった。

そこでやっと土蔵の異常　　床から光が溢れているのに気付いた。

溢れる光はどんどん強くなって　　。

「問おう……」

光の中から、声が聞こえた。同時に溢れた光が薄くなっていく。そして　　。

「貴方が私のマスターか？」

外から差し込む月光に照らされる騎士の……凜とした立ち姿で佇む少女を見た。

桔梗のクロス短編小説第一弾……の二幕（後書き）

Fateでの桔梗のステータス。

水無月 桔梗

性別 女性

身長・体重 150cm 44kg

属性 秩序・中庸

筋力 A 耐久 C 敏捷 C 魔力 A 幸運 B
宝具（斬魄刀） A+

技能

直感 C+

戦闘時、常に自分にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

ある特定の状況で、極端に研ぎ澄ますことが出来る。

斬拳走鬼 B

死神の四つの基本戦術、“斬術”“白打”“歩法”“鬼道”のこと。

桔梗はこの四つを高いレベルでこなせる。

心眼（真） B

修行・鍛練によって培った洞察力。窮地において自身の状況と相手の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘理論”。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰りよせられる。

久しぶりにFateのPS2版を引っ張りだしましたね。何気に桔梗ちゃんの身長を出したのは初めてだったり。本編ほっぽってマジで書いてました……。本当に反省してます……。でも心眼（真）は外せなかった……。カッコイイし……。

桔梗のクロス短編小説第三弾（前書き）

さて……なんとかプロットの修正すべき点を発見できた駆瑠です。
これなら七月の頭ぐらいには四十六話を投稿できそうです。

今回は前にリクエストを頂きましたクロス短編の三つ目になります。
正直今回はまったく自信が無いです……。もっとやりようはあった
んじゃないか!? って自分で言いたくなるぐらいにヤバいです。

・桔梗であって桔梗じゃない

・死神じゃない

・場面がぼんぼん飛ぶので原作読んでないと分からない

一つ目は本編内でも一度だけ出て来た名前を使っています。本編でも
回想シーンぐらいにしか使われないだろうからネタバレにはならな
いかな? という判断から使用に踏み切りました。
なので喋り方も本編とは違ってます。

場面が飛ぶのも原作をもっと深く読み進められたらよかったです
が、今のままではこれが限界でした……。

これ以上書くと前書きが長くなりすぎるので、どんな駄作かは中を

見てもらえればわかります。

今回は本気で読者の声が怖いです……。

桔梗のクロス短編小説第三弾

赤ん坊とかではなく、その人個人が生まれた瞬間は？ と問われれば思い出せる限り一番最初に見た景色の中、と私は答える。

無機質な白い部屋。それが最初の記憶。孤児として親も、友も居ない、笑うこともなく一人窓の景色を眺めていた時、引き取り手が来た、と教会のシスターは無感動な声で告げた。

来たのは真つ赤な女性だった。

髪も赤、瞳も赤、肌色など直接手を加えられないところを除けば全てが真つ赤な二十代後半ぐらいの女性。

そいつは私を見て一言、「久しぶりだな、戦友」なんて呟いた。だが、私には彼女に見覚えがなかった。だからただ見返していると彼女は困ったような顔をして頭を撫でてきた。

懐かしかった。

それから世界中を渡り歩いた。義務もなく、ひたすら。

その間色々な話を聞いた。もっとも驚愕だったのは二十代後半と思っていたこの女は七十を超えていた、と知った時だ。

昔話りの話を聞いて育ち、結局彼女の名前だけは聞くことはなかった。

曰く。。。

「お主は余の名を知っている」

とのこと。

楽しい、と言える時間もあっさり過ぎた。彼女が病から床に伏せ、そして眠りについた。

最期に彼女から一つだけ手渡された。

彼女が暇さえあれば手で転がしていたオイルライター。チェーンで繋がられるように改造されたそれを彼女の手ごと握るように受け取り。

天涯を焼き討て。

なんだ……。本当に私は彼女の名を知っていた。

言葉よりも、記憶よりも……。この手が覚えている。

「昨日はまた上条とやりあったのか？ 御坂 美琴」

「またあんた？ 暁 紅花」

川添の道で学園都市の中学に通う美琴は前から歩いてきた、両手に

大量の食料品を入れたビニール袋を引つ提げた隻眼の少女に煩わしげな視線を送った。

「ああ、そろそろ上条が空腹で餓死する頃だろ？ 主に運の悪さから来る自滅とかで」

「あ〜、はいはい、通い妻ご苦労様です……！」

美琴はそう言ってあっちにいけ！ とでもいう風に手を振った。

「ああ、貴様に言われんでも行かしてもらおう」

それに対し紅花は　　。

「貴様も超能力とかばかりにかかずらってないでちょっとは修業とやらでもしたらどうだ？ 上条の幻想殺しは貴様の雷だけでは突破出来ないだろ？」

美琴の“背後から背中合わせ”に声を掛けた。

「……………！？」

美琴が振り返った時にはその背は歩きだしていた。
御坂 美琴など相手にならんとばかりに。

「あいつといい、あの女といい、なんなのよ……レベル0の連中は
……」

離れていく紅花の背を、悔しげに見送りながら美琴は小さく呟いた。

「おい、上条……上条？ おい！ 上条！」

男子寮の一室。そのドアを紅花が叩く。始めは軽く、時間が経つにつれ、どんどん強く。

「居ない ? 鍵は開いてるのか」

留守ではない。ならば何故返事はないのか。疑問を覚えながらも紅

花はドアの取っ手を掴んで回し。

「……………!!」

「」

「……………上条?」

驚愕の表情で振り返る上条 当麻と、全裸で胸を張る少女を見た。

「……………邪魔したな……………。もう会うことはないだろうが、檻の向こうでも達者でな」

「ちょ……………!!? ちょっと待て、暁! 待ってくれー!!」

「近付く変態! この真正が!!」

「ごぶっ! だから違う! 話を聞いてくれ! ってか真正ってなに!?!」

「で？ インデックスとか言ったな？ そいつが空から降ってきたと？」

「ああその通りって、いててついて！ 噛み付くな！」

調理し終わった料理の乗った皿を机に並べていきながら、インデックスに噛み付かれる当麻に聞いた。

「で…… インデックスは魔術結社なるものに追われここまで逃げきたと」

「そう！ 大変だったの！ しかもごはんは取り上げられるし“歩く教会”はダメにされちゃうし！ うっうっうっうっ！」

「……俺が悪かったです……」

ひたすら謝り倒す当麻に噛み付くことはやめたものの、睨みつけながらインデックスは出された料理を次々頬張っていく。

「良かったな、上条。トラブルの女神は貴様を溺愛してるぞ」

「要らねえ！ そんな愛要らねえ！！」

「ふむ……まあ、当然の答えではあるが……その台詞はインデックスと今日の補習をなんとかしてからの方がいいぞ」

「えっ！？ 補習……って……ぬあああああっ！？」

からかいながら紅花は残酷な現実を突き付、現実を突き付けられた当麻は今更思いだしたように絶叫した。

「なんて……こった……。そもそも魔術師じゃなかったのか、アンタ……」

血まみれの右手を握りながら当麻は、神裂 火織と対峙する。

「何か勘違いをしているようですが……。私は何も自分の実力を安
いトリックでごまかしているわけではありません。七天七刀は飾り
ではありませんよ。七閃をくぐり抜けた先には真説の唯閃が待つて
います。」

それに何より……。私はまだ魔法名を名乗ってすらいません」

二人の戦力差は大きかった。当麻の武器は右手の幻想殺し一つ。
それに対し、火織は腕の一振りですべての鋼糸を放ち、異能の力では
ないが故に打ち消すことも出来ない。

それでも当麻は果敢に突撃するも、蹴り上げられ、刀の鞘に打ち据
えられ地面に叩きつけられた。

痛みに顔を顰ながら、追撃を避けるために横へ転がり

「七閃」

静かな声と共に七つの鋼糸による斬撃が当麻に放たれ

「なんだ！？ 随分とズタボロだな！？ 上条！！」

鋼がぶつかり合う凄まじい音と共に、聞き慣れた声が倒れる当麻の
上から降ってきた。

「ぐっ……！ あか……つき……？」

「ふん……血を流しすぎて誰かも分からなくなったか？」

呻き声を上げながらも顔を上げる当麻に、紅花は少しだけ後ろを振り返ってから、また前を向いた。

「一体……何者ですか、貴女は？」

「はっ！ 笑わせる質問だ、不審者！ 貴様こそ学園都市の生徒に襲い掛かって……何者だ？」

当麻は驚愕で、火織は困惑からそれぞれ動きを止めていた。

暁 紅花はレベル0……当麻と同じ無能力者。にも関わらず今、紅花の両腕は炎に包まれていた。

（発火能力……！？ 暁が……！？ なんで！？）

燃え盛る炎に当麻は疑念を抱くが、それは火織も同じ。

「質問を変えます。貴女は……どうやって七閃を止めたのですか？」

両腕に纏った炎を使った。そこまでは火織にも予想はつく。ただ、質量など無きに等しい炎では斬撃を止められない。しかし現実には、鋼糸は炎に止められた。剣と打ち合ったような手応えを残して……。

「どうやって？ 愚問すぎだな。試してみるよ……そうすれば解る。嫌でもな……！」

挑発するように……否、現に紅花は火織を挑発して炎を纏った両腕を前に出して構える。

「……！」

紅花の挑発に、火織はもう一度鋼糸を振るう。何が起きたのかわかる為に……。だが。

「……！」

「貴様の戦術は正しいよ。どれだけ殴り合いが得意な奴でも四本の腕を持った敵に勝つのは難しい。二の腕では四本の腕は止められない」

先程と同じ、鋼がぶつかると同時に、火織の左頬に一筋の赤い線が引かれ、そこから血が流れ出した。

「だが……単純明快な理屈だけに対処法も単純。七つの斬撃を腕の二本で止められないなら……七本以上の武器を持つてくればいい」

紅花の両腕の炎。その中から紅い凶器が生えていた。剣、槍、斧、鎌、戦鎚、錫杖……あらゆる武器が炎の中から顔を覗かせる。

「なんですか……それは……？」

「ロツソ・ジ・パーダ（紅染めの刃）……それ以上は知らん。“こいつ”から出した炎を自在に操り文字通りの武器に鍛え上げる」

そう言う彼女の右手首。革製のベルトに取り付けられた短いチェーンに繋がれたオイルライターが蓋を開け、また閉じる。独りでに、触ってもいないのに何度も開いては閉じるを繰り返す。それは彼女の知らない話。

かの時系列では完現術と呼ばれる力。彼女は知っている。その小さなオイルライターに籠められた心を。死神だった頃彼女が幾度となく相棒と呼んだ者の魂を。

結果は正史と変わらない。火織を退け、インデックスに掛けられた
“首輪”を外す為に共に戦い、刃を振るっても……。

「どうやら……先生の言う通り、本当に記憶が飛んでるみたいだな。
まあ、それは置いておこう……。」

学園都市の大学病院。その病室で『竜王の吐息』の影響により、記憶を失うどころか“破壊”された少年は、何故か頭のとっぺんを両手で押さえて死ぬう、とか独り言を呟いていた。

「あれで……良かったのかい？」

それは紅花と医師が部屋に入る際にすれ違った少女
インデックスのこと。

この少年は今までの記憶を破壊されながら、それでもインデックスの目の前で“上条 当麻”を演じた。

「あれで……良かったんじゃないんですか」

医師の問いに少年は静かに答えた。

ただ、インデックスには泣いて欲しくないと……。なぜそう思ったのかも分からないまま、少年は“上条 当麻”になりきった。

「案外……俺はまだ覚えているのかもしれないですね」

「君の“思い出”は脳細胞ごと“死んで”いるはずだけどね？パソコンで言うならハードディスクを丸ごと焼き切った状態なのに、脳に情報がないなら、一体人間のどこに思い出が残ってるって言うんだい？」

医師が質問を続ける。その言葉に僅かばかりの期待を乗せて……。

「どこって……そりゃあ決まってますよ」

紅花は何も語らず眼を閉じ　。

「心に、じゃないですか？」

「……心に、じゃないのか……？」

誰にも聞こえないぐらいの小さな声で、少年と一緒に呟いて……少
しだけ笑った。

桔梗のクロス短編小説第一弾……の三幕

言葉が出なかった。

驚愕も……。

痛みも……。

先まで頭を焼いていた焦りも……。

「サーヴァント、セイバー……召喚に従い参上した。

これより我が剣は貴方と共に、貴方の運命は私と共に……。
ここに契約は完了した」

目の前の……その美しさに押し流された。

「契約……って……ッ……!？」

その静かな空気を吹き飛ばすように、凄まじい 火薬が爆発
したような音が土蔵の外から響いた。

（そつだ……! あいつがまだ外に……って何してるんだ、あいつ
?）

さつきから鉄が激しくぶつかり合う音が聞こえてくる。
何度も何度も……。まるで戦っているかのように。

「何者かが闘っている。一人はサーヴァント……もう一人は人間のようですが……かなりの魔力です。マスターはここに居てください」

そういつて少女は半壊した土蔵の入り口に向き直り。

「ッ……！」

風切り音を残して飛び出していった。

「……！ 駄目だ……！」

あの少女は闘う気だ。あの猛獣のような男と……。

「くそっ……！」

今更思い出した身体の痛みを強引に捺じ伏せて立ち上がる。
あんな女の子があれに勝てるわけがない……！

「やめっ ……！？」

そうして少女を追って土蔵を飛び出し。

「なっ……につ……？」

三角形を描くように立つ人影　　紅い槍を構えた男と、銀の甲
冑を纏った少女。
そして。

「水無……月……？」

左目を眼帯で閉ざし、右手に細身の剣　　日本刀を持った少女、
水無月　桔梗がいた。

「っっ……っ」

「……………！」

秒間数撃という常人の槍では有り得ない連打をただ、受け、逸らしていく。

それは文字通りの槍襖……………何本もの槍を使って作る騎馬兵の突撃を阻むための壁である筈のそれを、男はたった一本の槍で行う。だが……………！」

「槍が……………増えたわけじゃないだろう！」

「ぐっ……………！？」

心臓目掛けて突き出された槍に斬魄刀を叩き付ける。

ただそれだけの一撃が相手には酷く重いのか、槍の連撃があっさりと止まる。

「はあっ…！」

更に槍を弾いた反動で一回転。槍の反対側から横薙ぎの斬撃を放つ。

「ぬう………………！」

体勢を崩しながらも男は斬撃に槍を合わせてくる。刀と槍。鏝迫り合い状態の中、互いの得物に籠められた霊圧が火花を散らしている。

「ちい………！」

だが、先の一撃がまだ響いているのか、少しずつ槍を押し込んでいく。

「ッ………！」

そして完全に押し切り、槍を弾いた時点で、不利を悟ったか男が後退していく。

「どうした？ ただの小娘に力負けか？ 英雄の称号が泣くぞ」

「ほざけ。ただの小娘にそんな腕力があるか。

てめえ………何者だ？」

「………語る必要があるのか？ これから散る貴様に」

「はっ！ そうかよ……。なら………仕方ない」

そうして男は構えを変える。後ろに構えた槍の切っ先を下げる、その特異な構え。

「……………」

周囲の空気が凍っていくのが分かる。強烈な威圧感、圧縮される霊圧が槍に込められていく。

「嬢ちゃんが七人目なら、さぞ楽しい戦になったんだろうが……………残念だ」

「そうか？ 英霊と戦争などお断りだ。だから……………ここで潰える」

斬魄刀を横一文字に構える。これから来るのは、あの男の必殺。何が起こるかは分からないが、香久弥殿や衛宮殿が居る今、後退だけは許されない。

「その心臓……………貰い受ける……………！ ゲイ（刺し穿つ） ……！？」

「はああああっ！」

「なにっ!?!」

そうして男が構えた槍の切っ先を下げた瞬間、男の横から何者かが突撃し、斬り掛かった。

「ちい……! サーヴァントだと!? まさか ……!?!」

「ふっ!」

突然現れたそいつが、何も持っていない筈の腕を振るう度に、防御の為に翳された槍から火花が散る。

「はああっ!」

「卑怯者め! 自らの武器を隠すとは何事か……!」

男にしても見えない武器というのはやりづらいのだろう。相手の攻撃を槍で受け、反動を利用してコマのように回転し回し蹴りを放つがそれはどうみても牽制の一打。

女も無理せずに回し蹴りを屈んで回避し、後退していく。

「やめっ

」

三角形の形で睨み合う状況で、更に衛宮殿が土蔵から飛び出してきた。

「水無……月……？」

「……………」

明らかな疑問の表情を浮かべているが、それに応える余裕は無い。赤い槍の男に、見えない武器を振り回す女。互いの正体も、実力も分からない膠着状態。

「成る程な……………」

迂闊に動けば他の者を全て敵に回す。その危うい沈黙の中、男が最初に口を開いた。

「まさか……七人目が嬢ちゃんじゃなく、坊主の方だったとはな……」
「一つだけ答える。貴様の宝具……それは剣か？」

「さあ、どうかな……。戦斧かも知れぬし槍剣かも知れぬ……。いや、もしか弓かも知れんぞ、ランサー？」

「ふん……。ぬかせ、セイバー」

その言葉を合図にランサーと呼ばれた男が槍を下ろし、身を引かせていく。

「逃げるつもりか！？　ランサー！」

「生憎、今日は様子見だ。その嬢ちゃんと合わせて……。つてのも悪くねえが、雇い主が腰抜けでな。二対一はやめてとつと逃げてこい、つてよ」

女の詰問に、最初の部分は本当に名残惜しそうに、最後の部分は本当に忌ま忌ましそうに応えてランサーは後方へ大跳躍。一足で屋敷の塀の上に乗った。

「追ってくるなら構わん。だが、その時は決死の覚悟で来るんだな。んじゃ……。会えるもんならまた会おうぜ、嬢ちゃん」

それを最後にランサーが一瞬で姿を消した。やはり尋常ではない脚力。こと速さだけを競うなら四楓院　夜一とも並ぶかもしれない。

「ちよっ……と……」

「動くな！」

当面の敵は去ってもまた一難。まだこいつが居た。

衛宮殿に向き直った瞬間、金髪の女が見えない武器を下段に構え、突撃の姿勢を見せた。

「一体何者ですか、貴女は？」

「お前がそれを聞くのか？ いきなり現れたかと思えば、いきなり喧嘩腰とはな。

お前こそ何者だ？」

「ちよっ……！？ ちよっと待ってくれ、二人共……！？」

「来ないでください、マスター！ 彼女は危険です！」

マスター？ 衛宮殿の知り合いか？

「彼女は最初ランサーと対峙し、ランサーは彼女に宝具を使おうと
していました。つまりランサーはそうしなければならぬ程に追い
詰められていたということですよ！」

「宝具……？ あの槍のことか……？ とにかく武器を納めてくれ
！ 彼女は大丈夫だから！」

衛宮殿は必死に説得しているが、女は聞く耳を持ちそうにない。や
れやれ……。

「……！？ 一体何の真似です？」

「一応、衛宮殿の敵ではないのだろうか？ なら敵対する意味はない」

訝しげな表情を浮かべる女の前で斬魄刀を鞘に納める。実際こうし
なければ話は進みそうにない。殺し合いは進むかもしれないが……。

「……………」

「……………分かりました……………」

衛宮殿にも睨まれること数秒。ようやく女は構えを解いた。

「それじゃ……話のきっかけとしてまずは自己紹介から。
私は水無月 桔梗。その家主……衛宮 士郎に部屋を借りている。
外から戻ってきた時、あの男に衛宮殿が襲われているのを見て助太
刀に入った」

はい、次……っと女を見遣る。

「……私はサーヴァント、セイバーです。今回の聖杯戦争にマスタ
ーの召喚に応じ、参上しました」

幾許かの躊躇の後、女が答え、そして二人揃って衛宮殿に向き直る。

「お、俺は衛宮 士郎。この家の人間で、マスターなんて名前じゃ
ないぞ」

本人も若干の外れなことを言っている自覚はあるのか、少しだけ顔
が赤い。

「ではシロウト。ええ、私としては、この発音の方が好ましい」

「うっ……！」

女 セイバーに名前と呼ばれた瞬間、衛宮殿の顔が更に赤く
なった。

……………どこの小学生だ、貴方は。

「ちょっと待て、なんだってそっちの方を …… !? 痛っ ……
!」

衛宮殿が抗議しようとした時、突然彼が左手を押さえ込んだ。

「なんだ……………これ……………」

小さく呟いた彼の左手の甲。そこに見たことのない紋様が描かれて
いた。

「それは令呪と呼ばれるものです、シロウ。私達サーヴァントを律
する三つの命令権であり、マスターの命でもある。無闇な使用は避
けるように」

「待て、二人共。また何か近付いているぞ。一人……………いや、二人か」

セイバーが左手の紋様について説明を始めたが、それを遮るように

二つの霊圧が近付いてくるのを感じた。

「シロウはここを動かさないでください。キキョウ……と言いましたね。シロウをお願いしても？」

「いや……そもそも敵か？」

「……………いきます！」

霊圧が近付いてくるだけ。

たったそれだけでも関わらず、セイバーは闘志全開で飛び出していた。

「なっ！？ どこへ行くんだ、セイバー！？」

「こっちに向かってくる霊圧に襲い掛かったに決まってる。それで？ どうする？」

「どうするもなにも……水無月は危ないからここに居てくれ！」

叫びながら衛宮殿も門へ走り出した。

「いや……衛宮殿が一番危ないのだが……」

私の眩きは当然ながら衛宮殿には届かなかった。

「はあ……！ はあ……！」

走る走る。夜の道を必死に走る。

「やれやれ……凜。君は」

「分かってる！ 分かってるから言わないで、アーチャー！」

後ろから追ってくる赤の従者　　アーチャーにもぞんざいな返
事しか返せないくらい私は急いでいた。
夜の校庭でランサーと戦い、犠牲者を一人出してしまい、よりも
よってその犠牲者とは“あいつ”で……。

アーチャーもその行動を阻止しようとしたみたいだが駄目だった。凄まじい早業で手に持っていた双剣を弓に切り替え矢の雨を放ったけど、ランサーは飛来する矢を一瞥しただけで、全て叩き落としてしまった。

アーチャーが言うには“矢避けの加護”なるスキルがあるらしく、ランサーはそのスキルを有しているのでは？ とか言っていた。

とにかく追い付いた時には手遅れ、“あいつ”は心臓を刺され死を待つだけ。

なんとか父さんの形見のペンダントに籠められた魔力も使って治療処置。

なんとか一命を取り留めた彼を置いて、疲れた身体を引きずって館に帰ってくればアーチャーの一言。

「ところで凜。あの少年はあのままでもいいのか？」

「……………あ」

そして今に至ると。

「凜。身体の調子は大丈夫か？」

「大丈夫よ。まだ魔力にも余裕はある。それよりアーチャー……………戦鬪の用意だけはしといてね」

手遅れでなければ、向こうに着けば目撃者を消す為にまた“あいつを殺そうとするランサーとの連戦になる可能性が高い。それは向こうも同じだけど、こっちは蘇生魔術一歩手前の治療を行ったばかりだ。
果たしてその差がどれだけ響くか……。

「……………見えた！」

そうこう考えている間にも“あいつ”の家の扉が見えた。

「居る……！　ランサーのサーヴァント！」

グダグダ考えるのは後！

「アーチャー！　先に　」

言いかけてやっと気付いた。

「ちょっと……………これって……………」

感知出来る魔力の反応は一つだけじゃない。

二つ……………三つ……………強烈な魔力の波が渦を巻くように、扉の向こうか

ら漂っていた。
しかも、三つの魔力の内、二つはサーヴァントのもの……。
つまり……。

「アーチャー……」

塀の向こうには今、二体のサーヴァントが居る。

「これで七人……。数が揃ったぞ、凜」

アーチャーが冷静に言う間にもランサーは屋敷を飛び出していく。
けれど、そこに何の焦りも浮かばず。

「凜！」

我に帰った時には、雲が月明かりを遮り、生まれた闇に紛れるように塀を飛び越えてもう一人。

「ッ……！」

「くっ……！」

「なに……!?!」

ようやく身体を動かせるようになった時には振り下ろされたものをアーチャーが双剣の片割れで受け止めていた。

「はあっ!」

「ちいっ……!」

いや……受け止めていたように見えた時には、既に刀身は砕け散っていた。

「……!」

舞い降りた人影が着地したと同時にまた何かを振ってくる。その段階になってやっと身体は人影から間合いを離すべく動きだしてくれた。

「やらせん!」

瞬間に迫ってくる何かを、庇うように前に出たアーチャーが残った剣で受け。

「ッ……!!」

さっきと同じように砕け散った。

「終わりです！」

ランサーとの戦いでもアーチャーは二十を越える数の双剣を取り出し戦っていた。だが、間に合わない。

先の一撃を翻して、振り下ろしの一撃が放たれ。

「ぬうん……!!」

「なっ!?!」

「えっ……?」

人影が宙を舞った。特別なことは何も起きていない。ただ、振り下ろされる一撃にアーチャーは右腕を下から上へ、左腕を下から上へ振っただけ。それだけの動作で、サーヴァントらしき人影を空中に放り投げた。

「くっ……！」

けれど、投げただけじゃダメージにはならない。
相手は空中で身を翻して体勢を立て直して着地。その際にアーチャ
ーも再度両手に双剣を握っていた。

「やるな……」

雲に隠れていた月が顔を出し始めた。そこでやっとサーヴァントの
顔が見え。

「……！」

そこに居たのは年端もいかない……同年代にも見える少女だった。
けど、その身体から放たれる濃密な魔力や、覇気が幼いという印象
を吹き飛ばしていた。

「下がれ、凜。抑えるにしてもこれは少々手間だ」

「少々……なんてもんじゃないでしょ……」

あれは明らかにアーチャーより格上。恐らくは……セイバーのサーヴァント。接近戦はどう考えても分が悪すぎる。だというのに。

「なに……あの手のジャジャ馬とは昔から縁があつてね。“あれ”と比べればまだマシな方だ」

だというのに、この男は事もなげに言つてのけた。

「ッ……！」

「クッ……！」

そして互いに突撃。相手は見えない武器を横に薙ぐモーションを、アーチャーは片手の短剣で防御を、もう片方の短剣を振り下ろし……轟音。

「なにっ!?!」

「むっ……!?!」

「やれやれだ……」

両者の間に割り込むように誰かが落ちてきた。

「冷静になれ、セイバーとやら。マスターが来るぞ」

落ちてきたのはこれまた同年代程か少し下ぐらいの少女。後ろで纏めた黒い長髪、普通のシャツにスカート、スパッツという出で立ち。ただ格好で目を引くのが左目を覆う古風な造りの黒い眼帯。そして右手には肩に担ぐようにして、アーチャーの短剣を受け止める日本刀。左手にはサーヴァントが持つ見えない武器を押さえ付ける鞘。服装は普通なだけにそれらが妙な違和感を生み出していた。

「なぜ邪魔をするのですか!？」

「さつきも言った通りだ。衛宮殿が来るから戦闘をやめろ。下手を打つと巻き込むぞ」

そら、っと少女が視線を向けた先。門から見慣れた“あいつ”が慌てふためいて飛び出してきた。

「シロウ!？」

「やめろ、セイバー……？ あれ……？」

「塀を飛び越えた方が早い。当然でしょう？」

息せき切って走ってきた彼は、しかし日本刀の少女を見た瞬間首を傾げて止まった。

それより……彼は何と言った？
セイバー？

「こんばんは……衛宮くん？」

取り敢えずは平静に挨拶を試みる。ただ、自分の心は……例えようもなく、煮え繰り返っていた。

第四十六話 【護廷十三隊】（前書き）

新話更新出来てしまった。

実はまだプロットの修正が途中ですが、このまま外伝だけちまちま出すのもどうかな？と思いききました。

次の更新はプロットの修正具合に合わせてもう少し遅れるかもしれません……。

第四十六話 【護廷十三隊】

さて……今日は何事もなく学校に辿り着けた。
辿り着けはしたが……。

「……………」

教室に入った瞬間、朝の喧騒が止んだ。

「……………」

ただ、その静寂も一瞬で消え、何事も無かったように話し出した。
誰も私に視線を向けなのまま……。

「……………図書室で……………」

「……………ああ、高町さんと……………」

自分の席を指す途中聞こえた会話から事態を把握する。
要するに……休み前の、図書室でした高町殿との会話の影響が知り
合い、友人にも広がっているということか。ぱっ、と見た限りでも
人望はありそうではあったようだし、そんな人を“敵”にするよう

な奴と話したくない、つといつたところか。

(まあ……いつものことではあるが……)

陣谷殿の仕事の都合でよく引越すというのもあるが、昔に仲間を失ってからどうにも浅く、広い友人関係というのが苦手なのだ。それらを否定する気はない。ただ、私にはその全員の友情を背負える自信が無かった。

(人によつては傲慢、と言つのかな?)

いくらなんでも友人全員の命を背負え、なんて言われているわけではない。

それでも……友と呼ぶからには自分にもそれ相応の責任はある。

(む……? バニングス殿と月村殿に……高町殿とハラオウン殿か)

視界の端に件の四人の姿が見えた。その四人にクラスの者達が次々と朝の挨拶を行い、四人が応えていく。

「あ……おはよう……桔梗ちゃん」

「ああ、おはよう。高町殿」

そして誰かの席について授業まで話しているのかと思ったら、話かけられた。

「何か？」

「うん……あのね」

（聞こえますか？）

「……！！」

外から聞こえる声と頭の中に響く声。同時に聞こえてくることから来る違和感が表情に出そうになるのを強引に押さえ込む。

「前の約束……まだ大丈夫かな？」

「約束？」

（聞こえていたら返事をしてください）

「うん……あの……前に翠屋で話そう……って……」

「あれか……」

(聞きたいことや、お話ししたいことがあります)

この声……ハラオウン殿か……。

「いいだろう……放課後でよいか……?」

(聞こえていたら放課後、町外れの丘にまで来て下さい。なのはと二人で待っています)

「うん……それじゃ放課後に……」

そう言うと高町殿も自分の席に戻っていった。

(さて……どう考えるか……)

周りは先の私達の会話にざわついているが、そんなものは興味の外だ。

それよりもさっきのは……『天挺空羅』に類する術だとは思つが……。

(頭の中に聞こえていたのはハラOWN殿の声。それに術を使用している間だけだが、確かに霊圧の上昇を感じた。

あの口ぶりだと高町殿も関係者か……。この二人で、あの丘で待っていると言っていたが……)

翠屋で……。つというのはこの際関係無しだ。恐らくは向こうも私の事を正確に分かっていない。丘に現れたら【ティアマト】の関係者。翠屋に現れたら無関係、といったところか。

(問題は……。彼女達が何者か……。だな)

昔のままなら、という前提がつくが、護廷十三隊は論外。こんな回りくどい真似は絶対にしない。

【ティアマト】……。というのもどうだろう？ 罠に誘い込む為の甘言、にしては大雑把な気がする。

護廷十三隊でもなければ、【ティアマト】でもない。ならば残されているのは……。

(時空……管理局……)

あの金髪の少女や、メイズが口に使っていた組織。今だ接触の無い詳細不明の勢力。

(さて……どうしたものかな……?)

SIDE Eなのは

「桔梗ちゃん……来るかな？」

「分からない……念話で話し掛けても返事はまるでなかったし……」
日も暮れた放課後。フェイトちゃんとヴィータちゃんの三人、丘の上で明かりが点きはじめた町並みを眺めていた。

「そのキキョウとかいづのがどういづ奴かも分からずに接触すんの

かよ！ 危なねえだろ！」

ていう議論があつて無理矢理ついて来ちゃったんだけど……。大丈夫……だと思っただけだな……。

「翠屋のアリサちゃん達からも連絡は無いし……。どうしたんだろ」

念話が聞こえていたらこっちに来ると思うし、聞こえていなかったら翠屋に行くと思う。

「そういえば……。今日のキキョウ……。左目に黒い眼帯をつけてたけど……。」

「そういえば……」

びっくりしたのは二つ。一つは桔梗ちゃんが左目を覆う黒い眼帯をつけてきていた事。もう一つは……。

「それに……。なんだか、クラスの皆とも距離を置いてるみたいだし……。」

朝から帰宅までの間、誰も桔梗ちゃんに声を掛けなかったし、桔梗

ちゃんも誰かに話し掛けようとしなかった。

アリサちゃんが言うには「自業自得よ！ ほつときなさい！」と、なんか怒った風だったけど……。

「なんか……転校して突然孤立してる

」

「待つて、なのは。周囲のサーチャーに反応……来た」

フェイトの言葉に全員が森の方

町へ下りる道へ振り返る。

「待たせた」

森の暗がりから出てきたのは、右手に竹刀袋を吊り下げた紐を握った桔梗ちゃん……なのかな？

「え〜……と？」

膝まで届く赤と黒のワンピース。ただ、スカートの縁や、腰辺りにはヒラヒラとした飾りが縫い付けられ、手にも同じ彩色の、手触りの良さそうな手袋。髪型もシグナムさんのようなポニーテールじゃなく、後頭部二カ所で纏めたツインテールになっていた。

左目の黒い眼帯とも相まって……なんていうんだっけ？ ゴスロリ

……？

例えも思いつかないけど……。

「可愛い服だね……？」

「語尾が泳いでるぞ。似合わんのは自覚しているし、そもそも私の趣味じゃない」

「え……？ でも」

「わ！ た！ し！ の趣味じゃない……！ どうかの誰かさんが変な趣味に目覚めたせいだ。まったく……あの時、香久弥殿に見つかったのが、ここまでついてまわるとはな……」

わざわざ着替えてきたのなら気に入ってるんじゃない……と言おうとしたら顔を真っ赤にして遮られた。似合ってると思うけどな〜。

「ん……？」

その時、桔梗ちゃんの視線が私の後ろ、ヴィータちゃんに向いた。

「……？ なんだよ？」

「いや、なんでもない……。それより……」

会話も一瞬、恥ずかしそうだった表情はすぐになりを潜め。

「それで？ 一体どういう用件だ？」

初めて会った時には想像出来ないような、険しい表情に変わった。

「私達は……時空管理局に所属する者です。あなたにお話を伺う為にお呼びしました」

まずはフェイトちゃんが応える。今回の接触では、基本的に執務官のフェイトちゃんが受け答えしていくことにしていた。私とヴェーラちゃんは、フェイトちゃんが居なかった状況の説明をするフォロ―役。

「時空……管理局ね。名前だけは連中から聞いている」

「連中……【ティアマト】のことですか？」

「ああ……あの黒い神父服の男に、あそこまで恨まれるようなことをする組織だと判断していたが？」

「なつ……！？ それは誤解です！」

フエイトちゃんが慌てて言うけれど、確かに心当たりは無い。それ程の非道い事件があったというのも聞いたことがない。

「誤解ね……。まあいい。奴の闘う理由は奴の物だ。私が干渉したところで意味はあるまい。それで聞きたいことは？」

「……ではお伺いします。あなたは何者ですか？」

まず確認しなくてはならないのはここ。彼女はどこの魔導師で、なぜこの街に来たのか。そしてあの黒い服の集団との関係。次元漂流者なら保護するべきだ。でも……仮になんらかの犯罪に手を染めて逃げて来たのなら……。

「質問をもっと明確にしろ」

「え……？」

けれど返ってきたのは、まったく予想していなかった返答。

「え……じゃない。何者だと問われても、十年以上も前に水無月家に拾われた人間だとしか答えようがない」

「魔導師じゃ……ないんですか？」

魔導師じゃない……だとしたら、街を走っていく時に見せた身体強化系魔法は……。

「魔導師……魔術師なら知っているが……。魔導師の定義は？」

「……魔法を使える人の総称です」

「魔法……ファンタジーなものが出て来たな……。お前達が私の何を見て、私を魔導師と判断したのかは知らんが、私の力は……まあ……生まれ付きのようなものだ」

「う……生まれ付き……？」

フェイトちゃんが対応に困ってる。当初だと、桔梗ちゃんは魔導師

ということまで話を進めようとしてたし……。生まれ付き……。レアス
キルか何かかな？

「お前達の聞きたいことは終わりか？ なら私からも聞きたいこと
がある」

フエイトちゃんが考え込む間に今度は桔梗ちゃんが口を開いた。

「私をどうする気だ？」

「どじする……って……」

「もっと解りやすく言っなら私の敵か？」

「違う……！ 私達は敵じゃないよー！」

桔梗ちゃんの言葉に、つい反射的に声が出てしまった。

「そうか……ならいい」

「ちょ………！ どじに行くのー！？」

「私の確認したいことは済んだ。時空管理局とやらが私の敵じゃないなら興味は無い」

「まつ……待つて！ 桔梗ちゃん！」

背を向けて歩き出した桔梗ちゃん呼び止める。もう必死だった。最初に決めていた段取りは頭の中から消えていた。

「なんだ？」

「協力してほしいの！ 今はこの次元世界が危ないの！」

「協力……というのは時空管理局にか？」

「うん……！ そう！」

今の私達では【ティアマト】と、黒衣着物の人達と闘うには戦力不足。だから可能ならば協力を仰いで連携し、戦力の強化をしよう、と決めていた。

ましてや、今は全ての次元世界の危機となる可能性だってある。なら、協力出来ない理由はない。

ないのに……！

「断る」

「……！ どうして……！？」

「私は……全てを護れるなんて思い上がってはいない。私に護れるのは私の手が届く範囲くらい……私の護りたい平穏だけだ。それ以上、手に手を伸ばせば、護りたかったものが落ちていくだけだ」

「桔梗ちゃん」

「高町殿 いや、高町なのは」

背を向けていた桔梗ちゃんが振り返る。その眼は。

「私の平穏を乱すなら……時空管理局とかいう組織も、【ティアマト】も差別しない。降り懸かる火の粉がごと……その大元を焼き払う……！」

確かな……敵意が籠っていた。

「ではな……お前達も厄介な奴らに睨まれる前に引っ込め。死ぬぞ……?」

そして桔梗ちゃんが再び背を向けて歩き出した。

S I D E I O U T

S I D E I 一護

「なあ……夜一さん。暁 紅花、ってどんな奴だったんだ?」

日も暮れた時間。恋次に治療を施すルキアを眺めながら、机の上で寝そべる黒い猫 夜一さんに声を掛けた。なんでも街中を探索するなら猫の方が都合がいらいけど……。

「山本元柳斎総隊長殿の養子……っというのはこの間話したな?」

あやつも育ての親に倣って死神になった……」

そう言つて夜一が目を閉じた。昔を思い出そうとしてるみたいだ……。

「使命感と……仲間意識が非常に強い娘じゃった。

『死神は死ぬ戦場に出て当たり前。だが、もしもそんな最悪な戦場に行くなら自分も一緒に闘つて死ぬ』。いつもそう言つて、そしてその言葉通り、常に最前線に出ることで部下や、他の隊士達からの信頼を得ておつたが……それがいかんかつたのかもしれない……」

「……？　なんでだよ？」

聞いた限りだと結構いいヤツだと思つけどな。

「あやつは席官にまで上り詰めたが、上に行く程に出陣の機会が減り、部下を任せられる程、その仲間を戦場に送りだすことに悩んでおつた。自分が出れば無かつたであろう被害に嘆き、無断で戦場に出ることも多くなつた」

「仲間を救う為に……か……？」

「そうじゃ……総隊長殿はその事を危惧しておつたようでの……」。

上官としての経験を積ませる為にも尸魂界で起きておつた異変の調査任務に一隊を任せて出陣させた。ただし……：暁だけは斬魄刀の帯刀は認められず、後方からの指揮に専念するように、とな」

「その任務の内容……とは？」

治療しながら聞いてたのか、ルキアも話に加わってきた。恋次も起きてたのか、顔だけがこつちを向いている。

「尸魂界の人里離れた山岳地帯。そこで“白い炎”が現れ、通りかかる者を襲っている、というものじゃ」

「白い……炎？ 虚か？」

「虚の霊圧は一切感知出来なかったそうじゃ。そしてその被害が死神にまで及ぶに到って、席官率いる調査隊が出ることになった」

「それが……暁 紅花」

「うむ……じゃが、現地に到着してから来た連絡で詳細不明の勢力と交戦状態になった、との報告と一緒にその戦力差に対し暁自身の斬魄刀と、増援を求める連絡もあった」

「詳細不明の勢力？」

「報告によると“白い炎を纏った甲冑”のようなもの、らしかったんじゃが詳しいことは分からなかった。

その事を調べる前に、四十六室から直令が下り、それを実行するのに手一杯じゃった」

「中央四十六室から直接……？ 一体どのような？」

詳しいことは知らねえけど、四十六室は一番上の偉いさんの集まりらしいし、よっぽど大変なことだったんだろっな。

「『調査隊を足止めに使い、山岳地帯を大規模な破壊鬼道で薙ぎ払う。隠密機動は撤退可能な者だけを引き上げさせ、その区画を閉鎖せよ』」

「なっ……！？」

その内容に知らず声が漏れた。ルキアや恋次も険しい表情で夜一さんを見ていた。

「撤退させることができたのは暁だけじゃ。そして暁を下げ、撤退

が完了と同時に瀟靈廷から鬼道が放たれ、そこにあったものを全て破壊した……」

「
」

それじゃあいつは自分の仲間が死ぬのをずっと見てたのか？ 必死に護ろうとしたものが消えてくのをずっと。

「今までの心労もあつたのか、瀟靈廷に帰還すると同時に倒れ、四番隊に運び込まれた。それから一週間程してから四十六室に呼び出され……その翌日に姿を消した」

その後、爺さんと闘って死んだ……か……。

「あやつが何故生きておるのは分からぬ。じゃが
！？」

その時、夜一さんが言葉を切って立ち上がった。
いや……これは……霊圧か？ 誰か近付いて来てる！？

「ルキア……！」

「分かっておるー！」

そう言うとルキアは恋次の寝てるベットを飛び越えて、部屋の扉とベットの間に着地した。

(誰だ　　って、この霊圧……?)

コンの義魂丸を手に取ってから近付いて来る霊圧に覚えがあるのに気付いた。

「おい、ルキア。この霊圧……」

「うむ……」

そして移動していた霊圧が扉の前で止まって　　。

「すいませ〜ん！　朽木さんはいらっしやいますか〜ん?」

微妙に間延びした声が聞こえてきた。

「ちっぱりか……」

「待て……！ 今開ける！」

ルキアが返事をしてドアに駆け寄り、鍵を開ける。

「いや〜……道に迷ってちゃって、到着が遅れちゃいました……」

そう言って部屋に入ってきたのは花太郎だった……あれ？

「おめえ一人で来たのかよ？」

バウントの時も他の連中と一緒に来てたけど……今回は違うのか？

「いえ……途中までは皆さんと一緒にだったんですけど、異世界の人達の霊圧を感知したらしくて、そっちに行っちゃいました」

「……！」

一人で歩いてたら道に迷っちゃって……ってさっきも言ったことを言ってるが、こっちはそれどころじゃねえ！

「花太郎！　一緒に来た奴ら、って誰だ！？」

「えっ！？　え〜と……綾瀬川五席に、斑目三席……それに松本副隊長に日番谷隊長ですけど……」

「……！　夜一さん！？」

確か、尸魂界にばねえ内に暁　紅花に接触する筈だった。

「もう隊長格が来おったのか……！？　早過ぎる……！」

振り返った先、夜一さんは窓の外をずっと睨みつけていた。

S I D E I O U T

「お前達……用意はいいな……！」

「はい……！ 限定解除の許可も下りてますし、とっとと終わらせてシヨッピングに生きましょう！ あっ！ 一角は荷物持ちよろしく！」

「断る……」

「そうそう！ 一角は僕と一緒に化粧品の物色に」

「誰が行くか……！」

「……………おまえら……………！」

「……………！」

“それ”に一番最初に気付いたのは桔梗だった。歩き出した足を止め、街を見遣る。

「桔梗ちゃん……?」

その様子にどうやって桔梗を呼び止めるか考えていたのはが声を掛けるが、桔梗は振り向かない。ただ、じつと夜の街を睨みつける。

「桔梗ちゃ

」

『マスター!』

「レイジングハート!?!」

桔梗を呼び続けようとしたのはにサーチャーを使って周囲の警戒をしていたレイジングハートが声を掛ける。

「どっしたの!?!」

『サーチャーに反応! 魔力反応を持った者が急速に接近していま

す！』

「……来る……！！！」

レイジングハートの報告に被せるように桔梗が呟く。
そして。

「……！ 誰……！！？」

彼女達の上空に黒衣着物を来た者達が四人……突然現れた。

背中まで届く茶髪の女性。

肩に刀を担ぐ禿頭の男と、その隣に立つ右の眉に装飾を施した細身の男。

そして、ただ一人だけ黒衣着物の上から白い羽織りを着た銀髪の少年。

「異世界からの侵入者……異邦人だな……？」

その四人を代表するように銀髪の少年が問い掛ける。

「この人達……一護と同じ……？」

フェイトが彼等を見て眩く。

「俺達は……護廷十三隊。現世の靈的バランスの守護を司る者だ」

第四十七話 【激突】（前書き）

七月頭に予定していたプロットの修正が予想より早く終わりそうなので今回四十七話も投稿しました。

謎が更なる謎と激戦を呼ぶストーリーにしているつもりですがどうでしょう？

それではどうぞ

第四十七話 【激突】

「今回俺達が来たのは警告の為だ」

隊長格の証である隊首羽織りを羽織った銀髪の死神が口を開いた。

「貴方達は……？」

高町 なのも突然の登場に困惑しているらしい。

この様子だと異世界には死神に該当する存在は居ないらしい。

「答える義理は無い……」

「なっ……！？」

「……？」

だが、死神の様子も変だな。なんとなくだが……雰囲気固い……？
緊張とかではないな。

「お前達異邦人は即刻この世界から退去してもらおう」

「……………！？ どうして!？」

「言った筈だ。答える義理は無い」

おまけに強引と来た。フエイト・テスタロッサの疑問もあっさり流している。

思えば最初から違和感はあった。

早過ぎる隊長格の出現。

その上、短い間に更に別の隊長格が率いる援軍。

いくらなんでもやりすぎだ。確かにストレンドの強さやメイズの霊圧、不気味さなどは厄介だし、下手をすれば隊長格に匹敵するかもしれない。

だが、それは何度となく交戦した末に生まれる警戒心の筈だ。これではまるで、既にこの【ティアマト】や時空管理局という存在が始めから危険だと判断していたとしか思えない。

……………少し様子を見るか……………？

「貴方達は一護と同じなんだよね!？ 一護は!？」

「黒崎はこの場には居ないし関与させる気もない。あいつは死神代行……………本来なら今回の件にも関与させるつもりはなかった。これは元々俺達護廷十三隊が解決すべき問題だ」

「死神……？」

「悪いが……これ以上話す気はねえ……。現世から出ていくつもりが無いのなら……！」

「……！」

そこまで言っただけで銀髪の死神が背中中の斬魄刀に手を掛けた。それを合図に他の三人も腰や手に持った斬魄刀を柄を握り、その動きに高町なのは達の身体に緊張が走るのが見えた。

やはり、妙だな……。警告とはいえ多少の交渉はあってもいいはずだ。ただ、言っただけで出ていくとは思っていないだろう。これではまるで戦闘を前提に、警告が出ていってくれたら御の字と思っただけでしか見えない。

それに、私に対しても何も言わないのはおかしい。山本元柳斎の爺さんなら必ずアクションがあると思ったが……。仕方ない……。

「幾らなんでも言われただけで出ていくわけがないだろう？」

「なに……？」

「桔梗ちゃん？」

注目を集めるのは嫌だが、なんの情報も無しに開戦というのも論外だ。私に対する判断や、時空管理局や【ティアマト】の情報を得る為にも危ない橋を渡ってみることにする。

「今この場の人間達だけで状況が動いているわけでもない。退くにしてもそれ相応の理由が必要だ」

「…………お前達異邦人は危険な存在だ」

「えっ…………？」

「…………？」

「お前達は過去に幾度となくこの現世に、世界崩壊の原因を持ち込んでいる…………。最近なら四年前のこの地で…………それも二回もな」

「ジュエルシードに…………闇の書…………！？　なぜあなた達はその事を…………！？」

フェイト・テストアロツサが叫ぶが、先程とは違い完全に無視。だが、これで護廷十三隊の過剰な反応の訳が分かった。四年前に世界が崩壊する危機が、最低でも二回はあった。現世と尸魂界の守護を司る

彼等にすれば、災いの種は早めに取り除きたいといったところか。しかし、これだけでは私への反応と、時空管理局への強行な態度の理由にはならない。

「そして……お前達自身も危険だ。その力も、その思想も……返答は？」

「ッ……！ 私達もこの世界で発生している事件を解決する為に来ました！ あなた達が一護の仲間なら、どうか協力してください！」

「出ていく意志は無い、ということでもいいんだな？」

「……………!？」

その言葉を合図に、銀髪の死神が瞬歩を使用。一番近かったフェイト・テストアロッサに斬りかかるも、彼女は飛び退いて回避。次の瞬間、霊圧の放出と共に彼女の服が変化、黒い服に白いコートのようなもの羽織ったものになった。同じように高町なのはと、その隣に居た子供もそれぞれ白と赤を基調とした服に変化した。

「桔梗ちゃん！」

「クロノ！ 【ティアマト】とは別の……例の魔法生物と同種の存在に接触、交戦状態に突入！ 指定範囲への封時結界の展開をお願

い！」

戦闘が始まったのに動かない私に業を煮やしたのか、慌てた様子で高町　なのはが近くまで走ってきて、フェイト・テスタロッサが何事も喋りだし、数秒後世界の色が一変した。

【ティアマト】が使っているのと同じ空間隔離系の結界か？　だが、あいつらの物と比べると違和感がある。

「アイゼン！」

「……………」

結界に思考を巡らせる間にもあの子供が銀髪の死神にハンマーを振り下ろす。死神は跳躍して回避し、三人の死神のところに戻っていた。

「人避けの結界か……。街を巻き込む心配も無いし好都合だ……………！
いくぞ、松本……………！」

「はい、隊長！」

しばらく結界が展開された丘を見渡していた銀髪の死神と、その副官らしき死神が死覇装の衿に手を掛けてずらし、その下にある刻印

に触れた。
そして。

「「限定解除!!」」

叫ぶと同時にその霊圧が一気に向上した。

「なっ……!!? リミッター!? こんなに魔力が上がるなんて!」

隣で高町なのはが驚愕の声を上げているが、驚いたのは私も同じだ。まさか限定解除が個人の判断に委ねられているとは。

「ふっ……!!」

銀髪の死神が再度向かってくる。その狙いは今だ驚愕で固まっている高町なのは。驚愕と、先程とはまったく違うスピードに反応出来ていないのか構える様子はない。

(驚いている暇すら無い!)

庇うように前に出て振り下ろされる刀を、竹刀袋に納めたままの刀

の鞘で受ける。

「なに……!?!」

刀の刃で竹刀袋と、竹刀袋に巻き付けた霊圧隠蔽の為の術式を書き込んだ布が引き裂かれていく。そのまま露出した刀の柄を握り

「ふう……!」

鞘から刀を抜き、銀髪の死神に刺突を放つ。

「……!」

「桔梗ちゃん!?!」

その段階になつてようやく我に還ったのか、高町なのはの声が聞こえるが、隊長格相手に余所に気を配る余裕は無いので無視。刺突を右に避けた死神の衿を、鞘を手放した左手で掴み

「はあっ!」

「ッ……!？」

真っ直ぐ上に放り投げて、追撃の為に跳躍。即座に体勢を立て直し、
霊子の足場に着地した死神に斬り掛かる。

「……!」

下段から斬り上げる一撃を死神は後ろに下がって躲し、更に迫る反
撃の斬撃を、手首を返して振り下ろした刀で弾く。

「ッ……!」

刀を弾いた反動で互いに後退して跳び退く。

「その刀……斬魄刀だな？ 何者だ……!」

この問いから、やはり私のことは護廷十三隊に伝わっていないらしい。
ただ、それもここまで。

こうなった以上は開き直るしかない。

「何者……か……。それは私が一番聞きたいことだがな」

「なに……?」

「少なくとも人間だよ。お前と同じ力を持っただけの……な……」

最近になって更に強くなる疑問。死んだ自分が何故ここに居るのか?

「だが……今はそんなことは後回しでいいだろう?」

懐かしい感覚。死神として虚と……同じ死神と何度も対峙した……
死神だった頃の感覚。

「名乗れよ、餓鬼……。名無しで死にたいか?」

「……護廷十三隊十番隊隊長、日番谷 冬獅郎だ。貴様は?」

「水無月 桔梗。ただの人間だ」

SIDEIなのは

金属が……鉄が何度もぶつかり合う音がしている。
桔梗ちゃんが、あの銀髪の子供が空中で幾度となく激突しては離れて、また激突する。

(あの刀……それにあの戦い方)

そっくりだった。ミッド式の魔導師よりはベルカ式の騎士の戦い方。互いに高速移動魔法を絡めて激しくぶつかり合う。

(桔梗ちゃんは……この人達と関係がある!?)

思えば桔梗ちゃんはこの人達の出現にまったく驚いていなかった……どころかサーチャーを使って周辺を警戒していたレイジンググレートよりも早く、その接近に気付いていたように見えた。

(でも……確か桔梗ちゃん的能力は生まれ付きだった)

「なのは！」

「……！」

『Protection』

そこまで考えたところで、フェイトちゃんの叫び声が聞こえた。同時にレイジングハートが自動で防御魔法を発動させた。

「ッ……！ 気付いてないと……思ったけど……！！」

展開させた防御魔法と鎬を削っているのは桔梗ちゃんや銀髪の子供が使っているのと同じ刀。それを握っているのは銀髪の子供の隣に立っていた女性。考え事をしている間に背後に回り込まれていたみたい。

「……！」

『Flash More』

防御魔法で足を止めている間に高速移動魔法を使用しつ空中に出る。この人達全員がベルカ式に近い戦い方になるなら瞬発力が重要にな

る陸戦は不利だ。

「はあああっ！」

空中に飛び上がるのと入れ代わりでフェイトちゃんが斬り掛かっていくのが見えた。

「いくよ！ レイジングハート！」

『Load Cartridge』

このままじゃ満足な話し合いは出来ないままだ。乱暴だけどここは取り押さえるしかない！

「ほっ………！」

「ッ………！」

下ではフェイトの攻撃を躲した女性が、高速移動魔法で空中に飛び上がった。今だ！

「アクセルシューター……シュート!!」

「プラズマランサー……ファイア!!」

足元に円形の魔法陣を展開。杖先に魔力を集束して、集めた魔力を二十発の誘導弾にして撃ちだし、地上のフェイトも四発の魔力弾を形成して射出した。

「……!!」

アクセルシューターが包囲して全包囲から攻撃。弾速に優れたプラズマランサーが足を止めた相手を撃ち抜く。バリア魔法による全包囲防御をしても、その時には砲撃魔法で討つ。

「唸れ……灰猫!!」

アクセルシューターが相手の包囲を終えた瞬間、刀を前に構えて何かの名前を叫んだ。その直後刀身がまるで灰のように溶け、空中に漂い始めた。

(なに……!!?)

撒き散らされた灰はどんどん広がって行って周りを飛び交う誘導弾も、後から飛来したフェイトちゃんも魔力弾も飲み込んだ。そして。

『誘導弾、消滅。破壊されました』

灰の中で幾つもの光が発せられると誘導弾の制御が途切れた。

「……！ どうやって!？」

『不明です。何か切断されて破壊されたようですが……』

戸惑う間にも女性の周りで渦を巻いていた灰は風に吹かれたようにこちらに向かってくる。

「ッ……!」

詳細は解らないけど、この灰に触れるのは危険だ。

防御魔法も効果があるか分からない以上、躲すしかない。その判断で高度を上げて、灰の塊を回避。

「はっ！」

「……！？ きゃっ……！」

読まれていた。高速移動魔法を使ったのか、回避先に回り込んでいた相手の蹴りをまともに受けてしまい、再度高度を落としてしまった。

「バルディツシュ！」

『Load Cartridge。
Haken Form』

落ちていく視界の中、フロアの為に上がってきてくれたのか、ハ
ーケンフォームに切り換えたバルディツシュを振りかぶって相手に
斬り掛かるフェイトちゃんと……禿頭の男の人に突撃していくヴェ
ータちゃんが見えた。

S I D E I O U T

S I D E Eー ヴ ィ ー タ

「うりゃあああっ!!」

「おおおおっ!!」

ハゲ頭に思いつ切りアイゼンを振り下ろすも、右手に持った刀の鞘に防がれる。

「おらっ!!」

『P a n z e S c h i l d!!』

お返しとばかりに振るわれる左手の刀に、右手を翳してシールド魔法を発動して受ける。

「やるじゃねえか……!! ガキが相手かと心配したが、どうやら杞憂だったみてえだな……!!」

「ッ……！ 舐めんなあ！！」

相手が押してくる力が予想以上に強い！ 押し切られる前に出せる力全部を込めて一気に押し返す。

「……！」

何処とな無く楽しそう表情を浮かべながら下がっていく相手を見送りながら魔法陣を展開。右手の指の間に鉄球を四つ、生み出して空中に放り。

「シュワルベ……フリーゲン！！」

『Schwalbe fliegen!』

アイゼンでハゲ頭目掛けて鉄球を撃ち出す。

「はっ……！！」

四方から迫る鉄球を相手は鼻で笑いながら両手の刀と鞘で打ち落とす。

けど、これで終わりじゃねえ！

「アイゼン！」

『Explosion!』

カートリッジを使用して魔力を補填。更に。

『Raketen form!』

「ラケーテン」

スパイク状のハンマーヘッド、そして反対側に噴射ノズルを展開。補填した魔力を推進剤にして一気に加速する。

「……!?!」

「ハンマー!!」

加速を活かす為に何度も回転しながら間合いを詰めた攻撃は、ハンマーを振り下ろす寸前に気付かれた。

「ぐっ……!!」

誘導弾に気を取られていたにも関わらず、凄まじい反応速度で振り下ろしの一撃に刀と鞘を交差させて受けやがった。
けど……!

「吹っ飛べええええ!!」

そんなもんじゃ……止められねえ!

「……!？」

交差させた刀と鞘の防御を噴射の加速で無理矢理押し切って丘目掛けて吹き飛ばして叩き付ける。

「これだけやりや動けねえだろ……。
次は……」

スパイクと噴射ノズルを戻しながら土煙を上げる地面から目を離して、少し離れた場所から今の戦いを見てやがった男に視線を移す。

「てめえ……あいつの仲間じゃなかったのかよ……」

「……？ いきなりなんだい？」

「ぶざけんなよ……！ 加勢もせずにと観戦かよ……！」

そう……こいつは動かなかった。仲間の危機を前にしても……仲間がやられるところを見てもこいつは動かなかった。

「ああ……そういうことかい？ それなら大丈夫だよ。ほら……」

こっちの詰問にも男は眉一つ動かさずに。

「まだ終わってないだろう？」

そんな事を言いやがった。

「なんだと」

「伸びる」

改めて男に向き直ろうとした時、声が聞こえた。

「なっ………!？」

それは下方 さっきあのハゲ頭を叩き付けた方から、凄まじい魔力の上昇と共に聞こえた。

「鬼灯丸!！」

そして土煙から人影 刀ではなく槍を構えた男が飛び出してきて、一気に間合いを詰めてくる。

「はあっ!！」

「ッ………!！」

突然の攻撃に防御魔法を発動させられず、傾けた頬の真横を刃が掠めていく。

「おおらあぁ

」

『危険!!』

攻撃を躲しながら、反撃の一打を振ろうとした瞬間、アイゼンからの警告に従って即座に跳び退く。

「つぁ……………!!」

跳び退いた直後、左肩に激痛が走るのと共に、視界の端で煌めくものが見えた。

(こいつ……………!)

間合いを開けて、追撃してこないことを確認してから改めて相手の武器を見遣る。

「その武器……………仕掛け付きかよ」

「三節棍だ。槍だなんて一言も言ってねえぜ」

ぱつと見槍に見えた武器は、しかし今は三つの棒を鎖で繋いだ見慣れない武器になっていた。

「だが……今も躲すとはな……てめえ、名は？」

「グイータ……鉄槌の騎士、グイータだ。それがどうした？」

左肩の傷は……結構深いけど、まだいける。問題はあいつの武器。ただの刃物にしか見えねえのに、あっさりと騎士甲冑を斬り裂いてきやがった。

「なに……殺す時には名を名乗れ……。それが俺の流儀なんだな。誰だって自分を殺す奴の名前ぐらい知つときたいだろ？」

そついうわけだ……護廷十三隊十一番隊第三席、斑目 一角！ てめえを殺す男の名前だ！ 仲良くやろつぜー！！」

S I D E I O U T

第四十八話 【紅き覇軍の咆哮】（前書き）

プロット修正が予想より早く終了しました。犠牲にしたものは個人的には大きかったです……。
ここでする話でもないので作者の愚痴は活動報告にて。

さて、はっきりと言わせてもらえるなら読者の反応次第では、後で今話を大幅修正する可能性があることをご了承ください。
なぜかは本編を読んでもらえればわかります。

何故かFateの番外編を書け書けと催促してくる友人からこんなこのアニメのOPが会うんじゃない？ とメールを送ってくれました。

一話〜四十二話ぐらいまでは疾走感を重視してとある魔術の禁書目録から『No but s!』。

それ以降が東京アンダーグラウンドから『失つてはならないもの』
（だったような気がする……詳しく思い出せない……）。
オリキャラのイメージCVを送ってくれた方もいるのでイメージが合いそうであれば、プロフィールに書き込んでいきます。

それでは本編をどうぞ。

第四十八話 【紅き覇軍の咆哮】

周辺を監視、警戒していた管理局武装隊により丘を中心に、近くの町も取り込んで張られた封時結界の中。

「霜天に坐せ……!!」

桔梗と冬獅郎はその戦場を丘から町の上空へと移していた。

「氷輪丸!!」

掲げられた斬魄刀の柄から鎖で繋がれた三日月型の刃が現れ、冬獅郎の周辺の気温がどんどんと低下していき。

「はあっ!!」

振り下ろすと同時に氷でできた龍が飛び出し、桔梗目掛けてその顎を開いた。

「……!!」

自身に向かってくる氷の龍から瞬歩で間合いを取りつつ桔梗は左手を氷の龍に向け。

「破道の三十一『赤火砲』！」

手の平から炎弾を放つ。炎弾はまっすぐ飛び、氷の龍と激突して爆発。

「ちい………!!」

忌ま忌ましげに舌打ちを一つしてから桔梗は更に瞬歩で後退。先まで立っていた空間を、爆煙から飛び出してきた氷の龍が通過していく。

「散在する獣の骨！ 尖塔、紅晶、鋼鉄の車輪！ 動けば風！ 止まれば空！ 槍打つ音色が虚城に満ちる！ 破道の六十三『雷吼砲』………」

尚も向かってくる氷の龍に桔梗は左手を掲げ鬼道の詠唱を開始。左腕を極大の電撃が覆いつくし。

「雷骨!!」

目前まで迫る氷の龍を思いつ切り殴り付け、打ち砕いた。

「……………!!」

素手で自身の技を打ち砕かれたことに驚愕する冬獅郎に桔梗は瞬歩で間合いを詰め、斬魄刀を振り下ろす。

「おおおおっ!!」

「くっ……………!!」

振り下ろしの斬撃を氷輪丸で受けるも、膂力の差で桔梗が少しずつ押し込んでいく。

「聞きたいことがある……………」

「奇遇だな……………俺もだ……………!!」

鏝迫り合いの最中桔梗が口を開き、冬獅郎が苦しげに答える。

「ッ……！」

そして弾かれたように二人同時にバックステップを行い、距離を取る。

「貴様……人間なのに鬼道を使ったな？」

互いに斬魄刀を構え直しながら冬獅郎が最初にその疑問を口にした。

「……それがなんだ？」

「人間が霊力を使った術を使うのは不思議じゃねえ……。だが、貴様が使ったのは明らかに死神が教わり、習熟し、使いこなしていくものだ。なら……貴様は誰に鬼道を教わった？」

「……言っても信じないだろ……」

「教えた奴は居る、といことだな？」

「……ふん……」

冬獅郎の問いに桔梗は気に入らない、という風に鼻を鳴らした。

「今のでお前の疑問が解決したなら次は私の番だ。
何故そこまであいつらに敵対する？」

「理由なら話したろ」

「敵視する理由ならな。だが、敵対する理由にはならないだろ」

「……？」

その微妙なニュアンスの意味が解らず冬獅郎は片方の眉を吊り上げた。

「世界の危機が短時間に二度も集中したのは聞いた。だが、いきなりお前等のような戦力が送り込まれてくる理由にはならない。“調査”だけなら最初に見たオレンジ髪の死神と一人二人ついてる奴らで十分な筈だ」

「黒崎と会ったのか……」

「誰か一人負傷したぐらいなら増援の人数も二人ぐらいで十分に

も関わらずあんな“奴”まで連れてきたなら、最初から“やる気”で来たとしか思えんな」

刀から片手だけを手放して、親指だけで背後を指す。

最初の戦場であった丘の上空では、幾つもの魔力／霊圧が激突していた。

「話し合いもなく殺す気で来る。答える……護廷十三隊はあいつらの事を知っているのか？ それもあいつらを殺させばならないと考える程に……」

「……………」

桔梗の問いに冬獅郎は目を閉じ、再び開いた。

「滅却師は知っているか？」

「一応は……………」

「なら、滅却師の戦い方は？」

「霊子で構成されたものを武器にしている……………」と聞いているが「

冬獅郎の言葉に今度は桔梗が眉を吊り上げる。

「奴ら異邦人の力は……その滅却師と同じものだ」

「なんだと……!？」

その背後……まるで冬獅郎の言葉を証明するように桜色の光の奔流が立ち昇っていった。

「……! 確かに……死神のそれとは違うみたいだが……!」

「加えて……先発隊が遭遇した【ティアマト】とかいう奴らはともかく……あいつらは霊圧の隠し方を知らねえ。その癖奴らの霊圧は強大……更に四年前の事件で相当な霊圧の解放があった。空間そのもの……現世を破壊しかねない程のな」

「ッ……!」

そこまで言われて桔梗は彼等の強行な態度や行動の理由に気が付き小さく舌打ちした。

「あいつらを放置していれば際限無く虚が寄ってくる？」

「その対策として、この近辺の虚討滅の為に駐在できる死神は席官のみに限定していた。もつとも……今回派遣されていた死神には事情は殆ど伝えていなかったようだがな」

「随分手抜きだな……！」

「こつちにも事情はある……。異邦人の活動自体は更に前から確認していたが、本格的な情報が入ったのは例の事件の際だ」

皮肉るように言う桔梗に、冬獅郎は苦虫を噛み潰したような表情で流し、話を戻した。

「その時に奴らの力は滅却師と同じもの……加えて組織として動いていることが判明した。そんな奴らが虚の存在を知ったら……？」

「自分達の身の安全の為に虚狩りを始めかねない……。か……。数百年前の焼き直しだな」

「もしくは虚の保護でも言い出すか……。こつちも奴らの動きを完全に把握していない以上、虚の存在を教える訳にはいかねえ……。奴ら

自身の為にもな……。それで？ お前はどつする？」

「……………」

主語を省いた冬獅郎の質問に桔梗は無言で刀の柄を握り直す。

「それが答えか」

「あいにく……友だなんだと語れない身だが……あいつらを見殺しにする気も無い。私なんかを友人にしようとするいい奴らだらな。一応聞いておくが打開策はないのか？」

「虚の事も話せない以上、あれで現世から退いてもらうのが一番の最善策だ……。だが、それでも退かないと言っなら」

「その時は仕方ない……………」

その問いに桔梗は笑う。

「私が甘かったと諦めて手を下すだけだ。今の私にも優先順位はある。」

だが 「

笑いながら右足を下げ、冬獅郎に対し、半身の姿勢にしながら斬魄刀を肩に担ぐように構える。

「少なくとも……今はその時じゃない……!!」

「そうか……」

桔梗の返答に冬獅郎も氷輪丸の切っ先を下げ、下段に構える。
そして。

「」
「」
「」
「」

気合いの咆哮と共に再度目の前の敵に突撃した。

「浮竹達がもつとも恐れておつたのは暁の存在を知つた総隊長殿の反応が読めんことじゃった」

代行証を使って死神化した直後、夜一さんが矢継ぎ早に喋りだした。

「静観や放置を決め込むなら良し。じゃが、もしも百年以上も前の断罪を掲げるなら、事態は非常に厄介な事になる」

「厄介？」

「暁は隊長への昇格も推薦されたことがある死神じゃ。当然討つ為には相応の戦力は必要になるじゃろうが……」

「今の十三隊にそんな余裕はねえ……」

「普段なら総隊長殿もそんな事はせぬじゃろうが……あやつは総隊長殿の義娘……加えて今のこの街の状況を考えると……」

「何を言つか分からねえ、ってことか」

「そうなる前に暁に接触し、あやつ我真意を確認したかったのじゃが……完全に後手に回っておる」

そう言つて夜一さんは窓の外……遙か彼方から感じる霊圧に顔を向けた。

「よいか、一護。暁の斬魄刀は炎熱系の斬魄刀じゃが、同時に“戦争”という側面も持った斬魄刀じゃ」

「戦争……？」

炎熱系……炎は分かるけど、もう一つが抽象的すぎていまいちピンと来ねえ。

「あやつは“紅武”と呼んでおつた能力じゃ。炎を特定の武器の形に練り上げ、霊圧で押し固め、兵士のように操る。最強最古の斬魄刀である流刃若火程ではないが、高い火力と制圧力を持つておる」

あいつの斬魄刀がどれだけ厄介かなんて聞いただけじゃ分かんねえけど……ここでその話をするってことは……。

「暁 紅花と戦闘になる、つてのか？」

「あやつが護廷十三隊にどのような感情を持っておるか……それ次第じゃ」

その話を最後にホテルの窓から飛び出したのが数分前。

「……見えた……！」

ようやく結界が展開されてる場所にたどり着いた。

結界が張られてる、ってことは結界を使わなきゃならねえ状況になつてる。

暁 紅花が居るかは分かんねえけど異世界の連中の霊圧を感知した、つてんならフエイトが居る可能性は高い。だったらまだ話し合いで済む余地はある……！

(周りにも何人が居るみてえだが……相手してる時間は無え！)

結界近くの家の屋根に着地してから、力を溜めて一気に跳躍。結界の頂点を目指す。

「なっ!? 貴様……! そこで止ま」

「悪い! 急いでんだ!」

途中杖を持って辺りを見回してる奴が居たが相手してる暇は無いから、その顔面を踏み付けて更に跳躍。数秒してから結界の真上に到着した。

「月牙……」

背中から斬月を引き抜いて上段に構える。
チマチマ結界の起点とか探してる暇は無い。
なら……！

「天衝！！」

強行突破しかねえ！

S I D E I O U T

「氷輪丸!!」

隊長格が斬魄刀を振るうとその切っ先から先程の氷の龍が三つ現れて向かってくる。一つだけならともかく、三つ同時だとさっきのようにはいかない。

「……………!!」

一体目の氷の龍を右に跳ぶことで躲したところで二体目の龍が時間差で突っ込んできたのに合わせて瞬歩で左に跳んで躲す。

「ッ……………!!」

だが、読んでいたとでも言いたげに回避先に突っ込んでくる三体目の龍を斬魄刀で受け止め。

「くっ……………!!?」

刀身が凍りはじめたのを見て、斬魄刀を傾けて氷の龍の進路を強引に逸らしてから瞬歩を使って一気に間合いを詰める。

「はあっ！」

「……！」

振り下ろしの斬撃を相手は斬魄刀を傾けながら受け流していく。その拍子に纏わり付いた氷を振り払い、横薙ぎの一撃を振るうも、やはり受け流される。

(やる……！ 流石は隊長格か……！)

先の鏝迫り合いで力負けしているのを悟ったか、正面から受けるのではなく、受け流す防御に切り替えてきた。

「ふっ……！」

傾けた斬魄刀の切っ先が孤を描いて向かってくるのを手首を返して翻した斬魄刀で受け、弾く。

「ッ……！」

「もらった……！」

刀を弾いて体勢を崩した相手に前蹴りを食らわして地上目掛けて吹き飛ばす。

「破道の　　！？」

追撃で鬼道を放つ為に左手を向けた瞬間、左腕に硬質な何が巻き付く感触に視線を下ろした。

「鎖……！？」

それは三日月状の刃を隊長格の斬魄刀と繋いでいた鎖だった。

（まずい……！？）

相手の意図を察した時には、本能が身体を引っ張る力に対抗して逆に鎖を引いていた後だった。

「はあああああっ！」

そして落下していた隊長格が引っ張られる反動を利用して突っ込んでくる。

「っええい……！」

膂力は勝つていても勢いは向こうの方が上。横薙ぎの斬撃を正面から受けて今度は弾かれる。その上、加速の勢いを保ったまま後ろに回りこんでくる。

「ちい……！」

「遅え……！」

斬魄刀を構え直しながら背後を振り返った時には氷の龍が目の前で大口を開けて迫っていた。

「づあっ……！」

噛み付かれる前にかろうじて斬魄刀で受けたが体勢が悪い。ズリズリと身体が後ろに下がっていく。

（またか……！）

再び冷気が斬魄刀の刀身を侵食していく。更に左腕に巻き付いていた鎖が外れているところを見ると、追い打ちの為に引き戻したらしい。

「終わりだ……！」

そして上からは隊長格の声。確かに斬魄刀を押さえられ、満足に動けないこの状態での反撃は不可能だろう。肩から背中にかけて鋭い何かに“斬られる感触”が走る。距離は近い。だが。

「天涯を焼き討て……」

哀しいかな、そこは。

「皇呀……！」

私の間合いだ……！！

「なっ……！！？」

「おおおおっ……！！」

解放し、紅く、歪な形状の刀身になった皇呀に炎を纏わせて振り抜く。ただそれだけの動作で氷の龍が砕けていく。

「はあっ!!」

「ぐあ……!!?」

振り抜く勢いのまま、皇呀を背後に居る隊長格に向けて薙ぎ払う。相手もこちらの一撃に反応して斬魄刀で受けようとするが、そんなものは関係無しに衝撃で相手を吹っ飛ばしてから紅い炎を纏ったままの皇呀を十字の形に振るう。

「烈火鬪槍……!!」

十字架を象っていた炎が消え、代わりに数十本の紅い槍が私の前に展開される。
そして。

「突撃!!」

号令を下して隊長格目掛けて一斉に射出してから、私自身も瞬歩を使って間合いを詰めにかかる。

「ッ………！」

その途中、吹き飛ぶ隊長格が空中で身を翻し、慣性に引きずられながらも霊子の足場に着地するのが見えた。

「せえい！」

そして斬魄刀を下に向けて振ると、途端に氷の壁が現れ烈火闘槍は氷の壁に突き立ち、消えていく。

「………！」

続けて氷の壁から鋭く尖った氷柱が出現し、烈火闘槍の弾道を遡るように撃ちだされてくる。

「炎城壁………！」

迫る氷柱の弾丸に、相手と同じように皇呀を下向きに振るって炎の壁を発生させ氷柱を焼きはらう。

(このまま撃ち合っても埒が明かない……！ それは向こうも同じだ……なら！)

発生させた炎の壁を跳躍して飛び越える。その向こう、同じように隊長格も氷の壁を飛び越えて向かってくる。

「氷輪丸……！！」

私がおかをするより早く斬魄刀を振り下ろして氷の龍を生み出し、向かわせてくる。鬼道を除けば、威力のある遠距離攻撃は全てなんらかの予備動作が必要な以上必ずあの隊長格の方が早い。ならば打倒する方法は、得意の近接戦に持ち込んで間合いを離される前に瞬殺するしかない！

「おおっ！」

目前まで迫る氷の龍に皇呀の切っ先を突き立て紅い火花を走らせ、氷の龍の内側に送りこむ。

「魔皇喝采終幕……！！」

ストレンドの時には“不発”に終わった技。

地下施設を破壊する目的で投下されるバンカーバスターは本来対象

の真上に突き刺さり、内側で爆発することで真価を発揮する！

「落葉緋牡丹！！」

内側に送り込んだ火花が爆発して氷の龍を木っ端微塵にする。更に皇呀の刀身から発生した炎に手を突っ込んで、掴むように引き剥がし、腕に纏わせる。

「炎魔……」

「うおおおっ！」

舞い散る氷の飛礫の中から間合いを詰め、振るわれる隊長格の斬撃を弾いて逸らし、炎を纏った左腕を振り上げ。

「炎扇！！」

「ッ……！！」

がら空きになった相手の胸に叩き付けて吹き飛ばす。
本来なら確実に致命打になる一撃。けれど。

(浅い……！)

直前に両腕を交差させて防いだ上に、ギリギリで後ろに跳ぶことで衝撃を受け流していた。

「ふっ……！」

吹き飛んだ隊長格の後を追う。このまま逃がせば態勢を立て直してまたやってくる。そうなればこの現世を去ろうとしない高町 なのは達にまた刃を向けてくる。

(なんとかこいつらを倒して次が来る前にとっと元の世界に帰ってもらおう！)

その時間を得る為には目の前の隊長格の打倒は絶対条件だ。

(これで……！)

やはり威力の大半を受け流していたらしく、近くにあったビルの給水塔に叩き付けられても、即座に立ち上がってきた。そしてその身体から更に強大な霊圧が放出され始めた。
だがな。

「んか」

「遅い!!」

放出された霊圧が形になる前に、間合いを詰め皇呀を振り下ろす。

「……!？」

直前に割り込んできた影に斬撃を受け止められた。

「貴様……!!」

「黒崎……!!」

柄も鍔も無く、晒が巻かれただけの無骨な太刀。その向こうからオレンジ色の髪をした男の眼が、私を見返していた。

第四十九話 【紅の覇軍VS黒き刃】

「やめろ！ 暁 紅花！」

「……………！！！」

一護がその名を叫んだ瞬間、弾かれたように桔梗が跳び退いた。

「黒崎……………お前……………！？」

「わりいけど……………下がっててくれ、冬獅郎」

破壊された給水塔から立ち上がる冬獅郎に一言告げてから一護は数歩前に出る。

「何がしたいんだ、貴様？」

「……………？」

「護廷十三隊は私の事を知らず、貴様は私の名を告げる。この状況だと、私の事を知る誰かが情報を止めているんだらう？」

答える……何が目的だ……？」

桔梗の質問の意味が分からずに片方の眉を吊り上げる一護に重ねて問い掛ける。

「お前がこの街で何がしたいのかを聞く為だ」

「何だと……？」

「百年以上も前に起きたことなら夜一さんから聞いた。お前は……尸魂界に復讐したいのか？」

「そうか……あの人がな……」

桔梗が右目を閉じる。自身の気持ちを整理するように……。

「今生の家族を護る為だ。それ以外だと……あいつら、高町 なのは達の身の安全の確保……ぐらいか」

そして右目を開くのと同時に口を開いた。

「家族……?」

「不思議なものでな……百年以上を生きていても、数年の間子供の身体になり、子供の“演技”をしていると子供の思考が染み付いてくる……。そんな中でした約束は、私にとって本当に重要なものだ」

語りながら桔梗は皇呀を横一文字に構える。

「それに……こんな私を友と呼ぼうとする奴らを見捨てる趣味も私には無かつたらしい。故に今回の護廷十三隊の行動は見過ごせない」

「……? どういう意味だ」

「何も知らないんだな。そいつは……高町 なのは達異邦人の現世からの追放を宣言。それが受け入れられないなら強制排除も辞さない……。
それが今、そいつがここに居る理由だ」

「……!? 冬獅郎……!」

そう言いながら桔梗は一護の背後に視線を見遣り、一護も首だけを捻り、後ろを振り返る。

「報告は聞いている……。黒崎……。お前は異邦人に深入りし過ぎだ」

二人の視線に冬獅郎は明確に答えることもなく、ただ、それだけを口にした。

「それで？ お前はどつする気だ？」

「……………!?!」

桔梗の声に、冬獅郎を振り返っていた一護が正面　　桔梗に向
き直る。

「必要とあればそいつは高町　なのはやフェイト・テストロッサ・
ハラオウンを殺すだろう。そしてそうさせない為に私がそいつを殺
す」

「なんで闘う必要がある!」

「時間稼ぎだ。その隊長格が死ねば次の応援が来るまでの時を稼げ
る。その間に高町　なのは達が現世から立ち去ればいい」

その言葉に一護が眉を顰める。言いたい事は一護にも解った。だが、それは……。

「その後、お前はとうするんだ、暁？」

自分自身の事は何一つ言わなかった。

「闘い続けるだけだ……。私と刃を交えても無駄だと、護廷十三隊が認識するまでな」

そしてその状況は京楽 秋水や浮竹 十四郎がもつとも恐れていた状態。

「させねえよ……」

「何……？」

その答えを聞いた時、一護が斬月を正眼に構え、呟いた。

「誰も死なせねえ……冬獅郎も、フェイトも……お前も……！ 誰も死なせやしねえ！」

「……………大言なぞ好きなだけ言える……………」

一護の叫びに桔梗はただ一瞬だけ瞠目し　。

「言っておくが……………勝てる目の無い賭けをする気はまったく無い。誰も死なせないと言っなら……………やれるだけの力を見せてみる！　死神！！」

「突破されたのか……………」

『申し訳ありません、クロノ提督……………』

「いや……………あれが相手なら仕方ない」

戦闘の観測を続けるアースラのブリッジで、クロノは一護と接触した局員からの報告を受けていた。

「結界の補修は？」

『既に完了しています。ですが、数十人で展開している結界を一撃で破るなんて……』

「いよいよこいつの危険性が際立ってきたな……引き続き結界の維持を頼む」

『了……し……した』

「どうした!？」

その時、唐突に通信に乱れが生じ、ブリッジクルーが対応する間も無く途絶した。

「海鳴市全域に巨大な結界……!？　これ……!？」

慌ただしくなるブリッジの中で、通信の管制や海鳴市の状況を監視していたエイミィが声を張り上げた。

「クロノ君……！【ティアマト】の使ってる結界が海鳴市を覆ってる！そのせいで通信が途絶してる！」

「なん……だと……！？」

S I D E E R 一護

「ふんっ！」

「ぐぐっ……！」

右から迫る横薙ぎの斬月を斬月で受ける。ただ一撃受けただけで身体が後ろに下がっていくが、暁はお構い無しに二撃目を振るってくる。

「どっしたっ！？」

「づつ……!!」

手首を返して振るわれる二撃目も受け止めるが、その威力を支え切れず、さっき以上に身体が後ろに下がっていく。

（一撃が重すぎだろ……!!　なんだ、このパワー!?!）

真正面から斬撃を受けただけで構えを崩されそうになる。正直この身体のどこにそんな力があるのか分からねえ。

「口先だけか、貴様は!!」

「ッ……!!」

（守ってるだけじゃ勝てねえ!　攻めねえと……!!）

横に薙ぎ払われる紅い斬魄刀の一閃を屈んで躲して全身。暁の懐に飛び込む。

暁の斬魄刀は本人の身長に見合わずに長い。これだけの差がありや振るう余地も無い。斬月の柄で腹でも打って気絶させ。

「がつ……！？」

懐に飛び込んだ瞬間、顎に衝撃を感じ、視界が強制的に上を向いてしまう。

(ひ……ち……！?)

揺らぐ意識の中、下に目を向ければ暁が左足の膝が振り上げられているのが見えた。

「はあああつ！！」

そして下からズドンツ、と爆発音みたいなのが響くのと腕を交差させたのは同時だった。

「ッ……！！」

まず衝撃が来た。そして音が、腕に痛みが来た後、左腕を突き出した姿勢の暁がどんどん遠ざかっていく。

「く……そ……！」

吹き飛ぶ風圧に逆らって霊子の足場に手をついて身を翻して着地。
慣性で滑っていく身体を支えながら暁に視線を戻す。

「……………」

その頃には既に暁は次の行動を終えていた。暁の背後には巨大な篝火。そしてその中から何十本もの紅い槍が這い出して暁の左右に浮遊した。

（あれが夜一さんの言ってた“紅武”か……………！？）

見ている間にも暁は紅い斬魄刀を掲げて　　。

「なっ……………！？」

暁が突進してきた。最初に槍が来ると思ってただけに反応が遅れた。

「ぐっ……………！」

突進の加速も乗った斬撃に、何とか斬月を合わせ、傾けて威力の方向を逸らして暁の斬魄刀を跳ね上げる。

「……………!?!」

構えを崩した暁に追い打ちを放とうとした瞬間、視界の端に紅い何が見え。

「……………! 槍……………!?!」

咄嗟に跳び退いた時、目の前を幾つもの紅い線が通過していった。

「ッ……………!」

更に時間差で飛来する槍を後ろに跳んで躲していく。
だが。

「はああああっ!」

紅い斬魄刀を振りかぶった暁が突進してくる段階になってようやくこいつの闘い方が解った。

(紅い武器と自分自身の時間差攻撃……………! 剣八と白哉のいいところ

どりじゃねえか！)

瞬歩は明らかに速いように見えないし、力そのものは剣八の方が上。槍もまだ直線的な分白哉の千本桜よりは見切りやすい。だが、槍に気を取られている隙に剣八のそれに近いパワーで突撃してくるのはヤバイ。

「……………」

突進してくる途中、暁の斬魄刀が紅い炎に包まれた。

「紅刃乃草薙……………」

そして炎を纏った斬魄刀を二度振るうと、炎の中から紅い刀が飛び出してきた。

「突撃……………」

紅い刀は一人でに回転を始めて左右に散り、暁が再度突撃を開始。別の方向からはまだ残っていた槍が切っ先を向けてくるのが見えた。普通に対処してたんじゃ間に合わねえ。なら……………」

「卍…解…!!」

靈圧を解放して、卍解する。幅広の刀剣だった斬月も黒い太刀へと……。

「天鎖斬月……!!」

左右から同時に飛んできた紅い太刀を斬月を二度振って叩き落とす。

「おおおおおっ!!」

続けて雨のように突撃してきた紅い槍に斬月を連続で振るう。スピードはあるが槍自体の強度はそれほどでもない。紅い太刀と違ってあっさりと砕けていく。そして槍の雨を凌いでから瞬歩を使用。驚愕からか、今だ右目を見開いて動きを止めている暁に接近して。

(後ろ……これで……!!)

暁の背後に一気に回り込む。眼帯を着けた左背後。加えてまだ気が付いていないのか、暁はこっちを見ていない。動きを止める為にも首筋に斬月の柄を振り下ろして。

「な……!？」

担ぐように構えた紅い斬魄刀の、刀身の腹で止められた。

(気付かれた……!？ いや、違う！ 暁はまだこっちを見てねえ！)

動きを読まれたのかと思ったが違う。暁はまだ首を振り、右目で俺を見て驚いているところだった。こいつの様子を見ると、今の動きは捉えきれなかった筈だ。

「ッ……!？」

考える間にも暁の斬魄刀から紅い火花が飛び散る。普通の火花と違うのは、火花自体が霊圧を放っているの……意思を持っているかのように、俺に向かってまっすぐ飛んでくること。

「クッ……!！」

咄嗟に瞬歩で跳び退く。その直後、目の前で灰色の爆煙が拡がった。

(どうやって攻撃を防いだ!?)

ギリギリで爆発範囲から離れ、ある程度間合いを開けて靈子の足場に着地しながらさっきの攻防を思い出す。

避けたのなら分かる。咄嗟に回避行動をとって、危険から遠ざかることで相手の間合いから離れる。

けど、暁は俺の攻撃を防いだ。まるでどこから、どんな攻撃が来るのか分かっていたような防ぎ方だった。

「卍解……か……」

爆煙の向こうから呟く声が聞こえると、その中から暁が歩み出てきた。

「大した速力だ。何らかの力の発現が見られなかったところを見ると、鬼道系の斬魄刀じゃないな。身体強化系……一対一なら特に有効な能力だ」

その暁の左右にさっき叩き落とした二振りの紅い太刀が戻ってきて静止。切っ先を向けてくる。

「だが、まだまだ……この程度でさっきの大言が実行出来ると思うな

……！」

「なんでだ……！？　なんでそこまでして闘うんだ……！？」

「護廷十三隊は必要とあらば何でも犠牲にする……。それこそ自分の命でもな……。！　そんな奴らがいっつらのような少数を犠牲にすることを躊躇うと思うか……。！？」

「んなことあるはずが……！」

「あるさ……。！　私が……。私達が……。世界の為に切り捨てられた少数だ……！」

暁が叫ぶのと同時に二振りの太刀が真っ直ぐ突撃してくる。続けて斬魄刀を構えた暁も突撃してくる。

「ちい……。！」

凄まじい速さで飛んできた一本目を弾き飛ばし、続けて飛んできた二本目も同じように弾き飛ばして。

「……。！」

「はああああ！」

回転しながら飛んでいく太刀を左手で掴み取った暁が一気に踏み込んでくる。

「ッ……！」

右手一つで振るわれる長大な斬魄刀の一撃を斬月で受けて、身体が後ろに押されていく。

あそこは過去の罪人が封じられた禁忌の地

一度這い出てくれば世界に災厄を齎す……。あの者達は世界を護る礎になったのだ

横から迫る左手の太刀の軌道を斬月で強引にずらしても、続けて振り下ろされた右手の斬魄刀の一撃を受け損なって、体勢を崩したままさつきよりも更に後ろに押される。

ならばそう言っていただければよかった！ それならば彼等も納得して……！

そのような事をして臆病風に吹かれた者が出たらどうする？

ツツ……！！

「せええい……！！」

開いた間合いを突進の加速距離にして暁が突き出してくる斬魄刀の切っ先を受ける。

それが……！！それが理想と忠義に殉じた者達へ言う言葉か！
？

「ツツ……！！？」

強烈な衝撃に吹き飛びそうになるのをかろうじて堪える。

「う……おおおおっ！！」

止められたことへの驚愕か、目を見開きながらも押し込めようとする暁の斬魄刀を跳ね上げる。

「ふざけんな!!」

「ちい……!!」

返す刀で斬り掛かり、斬撃の線上に構えられた紅い太刀と斬月が衝突。太刀を一撃で砕く。

「月牙……!!」

紅い太刀を砕いた勢いで一回転。回りながら斬月の刀身に霊圧を籠め。

「天衝!!」

暁に向かって放つ!

「……!!」

暁が斬魄刀で受けるのも構わずに一気に振り抜き、斬撃として霊圧を解放。暁ごと吹っ飛ばす。

「はあああああ!!」

暁の叫び声が聞こえたかと思うと、飛んでいく黒い斬撃の中から紅い点が見えた。やがて点は面へ、面は炎へ、炎が斬撃を切り裂いて、その中から炎を纏った斬魄刀を振りかぶった暁が出てきた。

「やっと解った……」

「なに……?」

冬獅郎や草冠、あの黒い服の男の時にもあった斬魄刀の共鳴。その中で最後に見た暁は。

「お前が待ってたのは言葉なんかじゃなかった……」

泣いていた。誰かの為に泣いていた。だから解った。

「だから……“見せて”やるよ……暁……」

こいつが待ってたのは空論や理想なんかじゃなく。

「これが俺の……覚悟だ……!!」

自分じゃどうしようもない状況をなんとか出来る……力だった。

「……!!」

下段に構えた斬月に霊圧を込める。同時に暁からも凄まじい霊圧と共に、斬魄刀が大きな炎を纏うのが見えた。

「いくぜ!」

「おおおおおっ!!」

きっかけは要らない。ただ、暁目掛けて飛び出し、俺の霊圧を込めた斬月を目の前まで迫る暁に振るって。

「……!?!」

瞬間、“世界”が震えた。

SIDE
-
OUT

第五十話 【鋼鉄の破壊神】

「これは……!?!」

「ッ……!」

桔梗と一護。互いに間合いを詰め、目の前の相手に斬魄刀を振るう。その直前に起きた世界が震えていると錯覚するような振動。それを察知した二人は攻撃を中止して擦れ違ったところで停止。同時に瞬歩を使用して距離を取った。

「何が起きてんだ……!?!」

「下だ! 黒崎!」

今だ震える世界を見渡しながら一護が呟いた時、瞬歩で同じ高さまで上がってきた冬獅郎が叫んだ。

「……! な……なんだこりゃ!?!」

言われてから始めて一護はその存在に気付いた。三人の眼下に拡がっていたものは円形の陣。彼等の知らない文字や

符号で構成された赤銅色に輝く巨大な魔法陣。

その魔法陣の中央部分から一際目映い光が漏れだすと、その中から、“ソレ”がゆっくりと浮上してきた。

「なん……だよ……こいつは……」

“ソレ”はチエスの駒、騎士に似ていた。円形の台座の上に細長い鋼鉄の胴体。その更に上にある頭部にあたるには二つの朱い光が人の眼のように輝く。そして左右には卵の殻にも似た防壁が太い棒で繋がれていた。

だが、一護が驚いていたのはその外見ではなく。

「でけえ……」

“ソレ”は巨大だった。そこらのビルなどまるで及ばず、彼等が知る巨大な存在、下級大虚よりも更に大きい。

<転移完了。戦闘モード、起動。レーヴァテイン（神殺しの炎）、スタンバイ>

“ソレ”から声が響くのと同時に胴体とおぼしき箇所の前に灰色の環状魔法陣が何重にも展開されていく。

<レーヴァティン、展開。発射シークエンス、四番から十七番を省略。チャージ開始>

そして展開された環状魔法陣の中央に魔力が収束されていく。その光景は……。

「虚閃……!？」

その光景は大虚が使う虚閃に酷似していた。故に三人は予測される射線から瞬歩で待避する。
だが。

「……!？ 狙いは私か!？」

全体から無数の噴射炎を輝かせながら“ソレ”はゆつたりした速度で旋回しつつ、環状魔法陣の砲口を桔梗に合わせ続けた。
そして。

<チャージ完了。レーヴァティン……発射>

瞬間、世界から音が消えた。同時に巨大な灰色の奔流が桔梗目掛けて放たれる。

(躲せない……!?)

自身の瞬歩の速力では放たれた魔力の奔流から逃れられない。

(卍解も間に合わんか……!)

迫る巨大な魔力の“壁”を睨みつけながら、桔梗は半ば諦めの境地でその事実を悟る。

「暁!!」

「なっ……!?!」

その時、桔梗の傍に一護が瞬歩で現れ、桔梗を抱き抱えると再度瞬歩を使用。天鎖斬月の速力をフルに発揮して距離を稼ぐが。

(足りねえ……!!)

後一步の差で安全圏に届かない。一護が悔しそうに歯噛みし。

「ッ……！」

今度は桔梗が動いた。片腕を一護の首に巻き付け固定し、もう片方の手に握った紅い火花を発する斬魄刀の切っ先を一護の背後に向け、火花を爆破。爆風をブースター代わりに自分達の身体を強引に射線上から押し出す。

「ッ……！！」

砲撃が生み出した破壊力は、衝撃で吹き飛ばふ二人の声すら飲み込んで封時結界の果てを目差して飛んでいった。

その砲撃が齎す破壊の余波は離れた場所で闘っていた高町　なのは達にも及んでいた。

「うああああああっ!」

「ぐ…………ぬあ…………!」

「ヴィータちゃん!」

「一角!」

砲撃が彼女達のすぐ傍を通過し、もっとも近くにいたヴィータと一角を衝撃で吹き飛ばした。

なのはは吹き飛ばぶヴィータの先に回り込み、その身体を受け止める。一角はそれよりも更に遠くへ吹き飛ばされたが、自力で体勢を立て直し霊子の足場へと着地した。

「大丈夫!? ヴィータちゃん!」

「わりい…………なのは」

「なのは! ヴィータ!」

「一角!」

「くそっ……！　なんだ、今は！？」

「あんた達大丈夫！？」

なのはとヴィータの元へはフェイトが。一角の元には弓親と乱菊がそれぞれ駆け寄っていく。だが、砲撃が齎す影響はまだ終わらない。

「結界が　　！？」

なのはが空を見上げて驚愕する。

放たれた砲撃は時空管理局の局員が展開していた封時結界を難なく破壊し、その上から被さるように、海鳴市全体に張られていた円柱形の結界に激突。数秒の間結界の壁と押し合いようやく消滅した。

「これは……【ティアマト】の結界！？　いつの間に……それに、あの砲撃魔法に耐えるなんて……」

「フェイトちゃん……あれ……」

フェイトは突然撃たれた砲撃魔法の破壊力と、それに耐えた結界の耐久力に思わず驚愕の声を漏らす。なのははまったく別の方向を

見ていた。

「なに……あれ……？」

「でかい……」

なのはが見ていた方向を振り向いてやっとフェイトはチェスの騎士の駒に似た“ソレ”の存在を認識し、ヴィータは“ソレ”の巨大さに呆然と呟いた。

「ちょっと……あっちの方って……隊長達が飛んでいった方向じゃない……！？」

「……！ 桔梗ちゃん！？」

「……！？ 待って、なのは！」

乱菊の声になのはもまた戦いながら飛んでいった桔梗の事を思い出し、詳細不明の巨大な存在の元へと飛び、フェイト達も後を追うように飛び出していった。

「なぜ“スルト”を投入した？ マリア」

「あの艦長もそうだったが、私はマリアではないと何度言ったら解る？ 此処に居るのはただの“亡霊”だ」

空中モニターが生み出す光だけが光源となっている暗い一室。

椅子にもたれ掛かり、死神と魔導師の闘いを静観していたメリオスは音も無く自分の背後に立った女性に振り向くことなく声を掛けた。

「そうだったな、【錬鉄】。それで？」

「実戦データの取得の為だ」

赤い髪に赤いシャツとズボン。白い白衣を纏い、【錬鉄】と呼ばれた女性は、迫力を増したメリオスの質問にも動揺することなく、淡々と答えた。

「“スルト”はまだ生まれたばかりの赤ん坊だ。起動直後の隙を最

高評議会の連中に突かれて封印されたが、“スルト”はインテリジエントデバイスにも使用される自律思考AIが搭載されている。本来なら初の起動試験の際に実戦演習を行い、ある程度の“経験”を積みませる予定だった。

今のままでも十分な戦術、戦略思考を持っているが完全ではない」

語りながら【錬鉄】は白衣のポケットからタバコの箱とライターを取り出す。

「“スルト”の経験値を上げつつ、あの世界での障害となるだろう調停者達のデータも手に入る。一石二鳥だろうか？」

「【復讐者】からの報告だと“鍵”を持っていると思しき女もいるようだが」

「通常的手段で“鍵”は滅ぼせないだろうか？ お前の“神”がそう言っていたんじゃないのか？」

メリオスの詰問にも口調を変えずに口に銜えたタバコに火を点けながら【錬鉄】はメリオスに背を向ける。

「どこへ行く？」

「さつきも言ったが、あの子は今のままでも十分な戦術、戦略思考を持っているが引き際を知らない。念のために“スルト”を連れ戻せる奴が待機していないとな……。」

【盾】の小娘も連れていくぞ。ちょうど暇を持って余っていたようだし、高町なのはが居るなら喜び勇んで飛び出すだろうしな」

その会話を最後に【錬鉄】は音も無く部屋の中から消えた。現れた時と同様の、あまりにも唐突な消失だった。

「……せめてドアを使え。現代最強の召喚師」

それに驚くこともなく、メリオスは空中モニターに視線を戻す。そこには、たったの一撃で結界により作られた偽りの街を廃墟にする“スルト”が映っていた。

「子を想う母……か……」

「黒崎！」

廃墟と化した街に降り立ちながら、冬獅郎は声を張り上げた。

「隊長！」

「松本！」

上空に佇む“スルト”を警戒しつつ、一護を探していた冬獅郎の傍に、乱菊、一角、弓親が降り立つ。

「全員無事か……！？」

「はい、私達は大丈夫です。隊長は？」

「俺は大丈夫だが、黒崎が巻き込まれた」

「一護が……！？　なんで此処に……！？」

「眼帯の女を追っていたようだが……」

冬獅郎達が互いの無事を確認しあつ傍らで、なのは達も少し離れた場所に着地して周囲を見渡す。

「桔梗ちゃんは……」

『周辺に高密度の魔力が霧散し、更に火災も発生している為にセンサーが正常に機能していません。この瓦礫の中から探すのは困難かと……』

レイジングハートが言う通り、“スルト”の放った砲撃は射線上のあらゆる物を粉碎した。
海鳴市の写し身とはいえ、射線上の近くには可燃物となる物が多く、砲撃の余波はそれらに火を点けるのに十分だった。

「そんな……」

レイジングハートの報告になのはが一瞬膝をつきそうになった。

「でええええいつ!!」

その瞬間、近くに積み重なった瓦礫の一つが吹き飛び、小さな人影が這い出してきた。

「桔梗ちゃん！」

「ッ……！ 酷い目に遭った……」

服の所々が破け、煤けながらも自らの斬魄刀をしっかりと握り、目立った外傷も無く立ち上がる桔梗になのはが駆け寄ろうとするが、桔梗はそちらを振り向くことなく近くにあった瓦礫に手を掛け

「ふん！」

彼方に向けて思いつ切り投げ飛ばした。

「いつ……てえ……」

そして瓦礫が退けられたところから一護も頭を振りながらゆっくと立ち上がり、桔梗が手を差し延べる。

「すまねえ……」

「いや……こちらこそ助かった」

掴んだ手を握り返しながら桔梗が引き上げ、一護はやっと瓦礫の山から抜け出す。

「桔梗ちゃん……！ 大丈夫……！？」

「ああ……こちらはな……。その様子だとそちらも無事らしいな」

「一護！ どうして此处に！？」

「フェイトか……お前等の戦いを止めに来たんだよ」

瓦礫の山から降り立つ二人にその場に居合わせた全員が集合する。

「さて……全員の無事が確認出来たところで……あれは何だ？」

そして全員の中で代弁するように桔梗が空を見上げながら口を開く。

そこには胴体の各所から水蒸気を吹き出す威容が浮かんでいた。 “スルト”

「隊長格」

「日番谷 冬獅郎だ……。心当たりは無いな……」

「高町 なのは」

「時空管理局じゃあんな危険な兵器は使用しないよ」

桔梗は初めに冬獅郎を見て、首を横に振るのを見るとなのはに振り返ったがそちらも首を横に振るのを見て視線を上に戻した。

「時空管理局でもなく、護廷十三隊でもない。そしてこの結界……
【ティアマト】か」

「【ティアマト】……あんな物まで……」

『マスター、通信です』

「通信？ 繋いで」

『なのは！ 聞こえるか！？』

「クロノ君!？」

第三勢力の介入と結論を出したところでレイジングハートがアースラからの通信を拾った。

「結界越しじゃ通信は繋がらないんじゃない……」

『通常通信では出来ないが、結界の出入り口に中継機を設置して通信を繋いで、中の様子もモニターしている。』

ただ、これも即席の通信手段だからいつまで持つか分からない。全員直ちに脱出しろ!』

「どつしたの……!？」

なのははレイジングハートから響くクロノの声から、尋常ではない様子を感じた。

『そいつの名は“スルト”。かつて時空管理局の統合技術部門に所属していたマリア・シエルメリストが設計した先制攻撃を前提とした次元防衛兵器だ!』

「次元……防衛兵器……？ 先制攻撃って……」

『次元世界の狭間で運用を想定し、大犯罪や反乱の可能性がある勢力の拠点へ、非殺傷設定の次元跳躍攻撃を使うことで鎮圧する。それが“スルト”が設計された目的だ』

矛盾しているとしたかと思えない二つの単語になのはが聞き返し、よほど慌てているのかクロノは早口に必要な説明を続けていく。

『次元跳躍砲以外にも近接防御用に複数のMAPWを搭載し、通常の戦力でも戦闘用の次元航行艦を上回る力を持った動く要塞だ……！ 魔導師が……人間が勝てる相手じゃない……！ 脱出に一番近い出口の情報をレイジングハートに送る。結界内に残っているのはなは達だけだ。すぐに脱出して』

「待て」

焦りながら脱出を促すクロノの言葉を遮る為に桔梗はレイジングハートの柄を握りしめた。

『なんだ、君は』

「二つほど質問がある。一つは確認だ。あのデカブツは複数のMA

PWを搭載しているんだっとな？」

『ああ、そつだ……！』

「もう一つの質問だが……この結界に出口があるのか？」

『結界の切れ目に五つ、他の部分と比べて強度が非常に脆い場所があり、そこから出入りできる』

「五つか……じゃあ逃走は却下だ」

『なんだと！？ 君は正気か……！！』

「ま……待って、クロノ君！ 桔梗ちゃん、どういうこと？」

質問の果てに出た桔梗の結論にクロノは声を張り上げるが、このままでは話が進まないと判断したなのはが止めに入り、桔梗に問い掛ける。

「今、奴はどの方向を向いているように見える？」

「え……？ えっ……と……」

桔梗に問い掛けられてなのは“スルト”を見上げる。

騎士の駒を模倣した外見、二つの朱い光を燈す頭部が向いている方角は明らかに。

「私達の方……？」

「分かっていると思うが、奴は私達が此処に居ることは気付いている筈だ。動かないのは何か事情でもあるのか様子見か……」。

どっちにしてもたった五つしかない出口を呑気に目指したら、奴が装備しているらしいMAPWの餌食だぞ」

『ッ……！』

「う……」

桔梗の指摘になのはが呻き声を上げる。クロノもただ撤退するだけでも相当困難なことに気付いたのか、小さく声を漏らしたきり沈黙してしまふ。

「なあ、暁……。さっきから言ってるマッ……なんとか、って何だ

「？」

その沈黙の合間を縫うように、今度は一護が桔梗に問い掛けた。

「MAPWは近代兵器に使う分類の一つだ。戦略級兵器、もしくは準戦略級兵器が対象で、一番分かりやすいのは核兵器だろうな」

「核って……そんなもん積んでんのか、あれ!？」

「さて……流石に核レベルの破壊力を持った兵器で大量に武装しているとは思いたくないが……」

持ち出された例えに一護が驚愕の声を上げ、さっきの砲撃の破壊力を思い出した桔梗がげんなりとした様子で答える。

「けど……逃げられないんじゃない……」

「闘うしかないな」

「どっせって?」

桔梗の出した意見でなのはが一番気にしていたのが逃走以外の方法だった。

クロノからも人間が勝てる相手ではない。そして先程の砲撃魔法の破壊力を見てまともに戦えば必ず犠牲者が出る。その事を懸念しての質問だったが。

「まともにやり合ってあれを落とすのは難しい。なら、狙うのはあれの武装だ」

桔梗の答えは単純だった。

「離脱の一番の妨げになっているのは奴が持っているらしいMAPだ。なら装備されている兵装を全て破壊して戦闘能力を奪う。見たところ足が速い、というわけでもなさそうだし、正面から戦うよりは難易度は下がるはずだ」

「成る程……」

あの巨大な兵器は自身の最大火力でも倒せるか分からない。そう考えていたのはだが、桔梗の提案に勝機を見出だしたか、その身体に再び覇気が満ちていく。

「そついうことなら……！ ゴメン、クロノ君。でも……」

『 スルト “ がカタログスペック通りの性能を発揮するなら、彼女の言う通りただ逃げるのは難しいだろう……。ただし……。！ 危険だと判断したらなにがなんでも逃げてくれ！ フェイトもヴィータもいいな！ 』

「 「 「 了解！ 「 「 「

クロノの言葉になのは、フェイト、ヴィータの三人はデバイスを構える。

「おい、死神」

「……………？ なんだ……………？」

そして桔梗は一護に振り返り、声を掛ける。

「さっきお前は誰も死なせない。この場に居る者は誰も殺させないと」

「……………ああ」

「なら見せてくれ……その“覚悟”を……」

「……言われるまでもねえ！」

そして桔梗の隣に一護も歩み出て隣に並ぶ。

「どっどっ言ってる場合じゃないか……いくぞ！」

「はい、隊長！」

最後に冬獅郎達も一護の横に並び立ち斬魄刀を構える。

「役者は揃ったか……。随分と待たせたな、神殺しの巨人……！！！」

第五十一話 【白夜乱戦】（前書き）

スツゴく間が空きました。

はっきりと白状します。

V S 人外戦があんなに難しいとは！

プロット修正の時に、実は一番修正が入った場所であるにも関わらず、このていたらく……。……。

おかげでサブタイトルもまともな物が思い浮かばないという始末。

そんなグダグダ感溢れる更新ですがどうぞ。

第五十一話 【白夜乱戦】

全員が“スルト”と対峙する為に空へと上がる。

グン・グニール、ガイ・ボルグ、起動

それを確認して“スルト”は左右の防壁の至る所が開け、無数の砲台を露出させる。

グン・グニール、チャージ

その内もつとも口径の大きい砲台に灰色の魔力光が灯り

。

グン・グニール、発射

何発もの太い魔力の槍が発射された。明後日の方向に撃ち出された魔力の槍は途中で軌道を変え、桔梗達目掛けて加速する。

「靈子の槍……か……？」

更に立て続けに発射される魔力の槍を躲すように、散開しながら、

なのは達も“スルト”目指して前進する。
彼等の有効射程距離からは大分離れている。ただ攻撃するにしても
まずは接近する必要がある。特に斬魄刀による戦闘を主軸にして
いる死神組は尚更。

(桔梗ちゃん?)

その中でなのははや遅れぎみに飛ぶ桔梗に気付いた。

「……………」

向けられている視線に気付いているのか、いないのか。特別なりア
クションを返すこともなく桔梗は霊子の足場を蹴りつけて跳躍し
。

「一つ言い忘れていた」

唐突に口を開いた。その声を聞いて振り返ったのは、なのは達魔導
師組と冬獅郎、松本だけ。一護は天鎖斬月の速力で先頭を突っ走り、
一角は持ち前の強気から魔力の槍の弾幕を正面から抜けようとし、
弓親もその後が続こうとしていた為に桔梗の声が聞こえなかった。

「さっき説明した通り、MAPWは戦略兵器に使われる単語だ。—

見普通の弾に見えても 「

「うおっ!?!」

「ぬあああ!?!」

「くあ……!!」

「実は面単位での攻撃力に優れた厄介極まる攻撃かもしれんから気をつけると言いたかつたんだが……」

聞こえた悲鳴と爆音に全員の視線が正面に戻る。

そこに見たのは、広範囲に広がる灰色の魔力の爆発と、全身を煤けさせながら爆発の中から跳び退いてくる一護達、後を追うように狙いを付けて突っ込んでくる大量の灰色の魔力の槍だった。

「それを先に言え!」

怒鳴りながらも冬獅郎は大きく横に跳び、魔力の槍から距離を取つつ回避行動を行い、一瞬だけ遅れてなのは達も魔力の槍から距離を置きはじめた。

「おい、何があった？」

その中で桔梗は跳び退いてきた一護の隣に移動して声を掛けた。

「躲して横を通りすぎたらいきなり爆発しやがったんだよ……！」

「ふむ……」

一護の言葉を聞きながら桔梗は自分目掛けて飛んでくる魔力の槍に視線を移す。

そして。

「破道の三十一『赤火砲』」

槍に鬼道を放った。放たれた炎弾は魔力の槍に直撃することなくその脇を通過し、何の予兆も無く槍が爆発した。

「ああ、成る程……近接伸管というやつか？」

「なんだ、それ？」

「これは私も詳しく知らないが、ミサイルなんかを使う伸管で、弾

頭の傍を何が通過したりするとセンサーが感知して伸管を起動させて爆発、爆風と破片で目標にダメージを与えるもの……だった筈だ」

「曖昧だなあ……」

「お前……私をミリタリーマニアか何かと勘違いしていないか？
とにかく……この攻撃にはあいつらみたいに大きく距離を離すか、何か適当な鬼道をぶつけてやればいい。運が避ければ弾頭同士で勝手に誘爆しあう」

一護に説明しながら桔梗は遙か彼方の“スルト”へと視線を遣る。

「……前に見たのは小さな戦闘機に戦車……今度は近代兵器の塊だ……。偶然かもしれない……たまたま発想が同じだった。それだけかもしれないが……」

「暁……？」

「……全ては後だ……。まずはあれをどうにかするのが先決だ……」

そこまで呟いてから桔梗は“スルト”目差して飛び出し、一護もその後を追う。

「切りが無いな……。一気に間合いに飛び込む……。！ 援護しろ、松本！」

「了解！」

それに続くように冬獅郎、乱菊も飛び交う魔力の槍に正面から突っ込んでいく。

「烈火鬨槍！」

桔梗は炎を纏った皇呀を横に大きく薙ぎ、炎の軌跡の中から何本もの紅い槍を作り出して射出。狙いを定めて飛び掛かってくる灰色の魔力の槍と交錯させ敵弾を誘爆させていく。

「先に行け！」

そして足を止めた桔梗を一護が追い越して弾幕を突破し、“スルト”の右側に回り込む。

「唸れ……。！ 灰猫……！」

反対側では斬魄刀を解放し、刀から灰へと変化させた乱菊が残った柄を振るい灰の壁を作り、灰に触れた槍を片っ端から切り裂き爆発させ、その合間を縫うように冬獅郎が跳び“スルト”の左側へ回り込む。

「月牙……天衝!!」

「氷輪丸!!」

一護が黒い霊圧を纏わせた斬月を振るい必殺の一撃を放つ。

冬獅郎が凍える斬魄刀を振り下ろして氷の龍を生み出し、氷の龍は顎を開き“スルト”の展開する砲台目掛けてまっすぐに飛翔する。

防御

迫る攻撃に“スルト”は動かない。ただ、黒い斬撃には灰色の光を放つ球体を無数に射出するだけ。

「ッ……!!?」

黒い斬月は球体の中に入った瞬間、出鱈目に飛び回り、最後には地上に落ちていく球体に引き摺られるように大地に落ちて消滅。

氷の龍はその顎を防壁に突き立てようとした瞬間“爆発”した。

「なんだ!？」

何が起きたのか分からずに困惑する一護と冬獅郎を追い越して今度は桔梗と一角が前に出る。

「破道の三十一『赤火砲』！」

「おらあ！」

桔梗が向けた手の平から炎弾を撃ち、一角が頭上で鬼灯丸を旋回させながら目に見える砲台に切り込む。

「……! ちい……!」

「ぐあ！」

炎弾は砲台に到達する前に爆発し消滅。一角も鬼灯丸を振り下ろす前に突如爆煙に包まれ吹き飛ばされた。

(今のは……！)

歯噛みしながらも桔梗と一角は後退し、それぞれ一護、冬獅郎の傍まで下がる。

「フレア（誘導欺瞞弾）に……リアクティブアーマー（炸裂反応装甲）か！？」

異世界の兵器がなんでそんな物で武装している！？」

「またかよ……！？ 今度は何だ！？」

爆発の瞬間、垣間見た物に桔梗が呻き、一護が問い掛ける。

「フレアは対ミサイル兵装の一種で熱源とかを持った罠をばらまくことでミサイルの誘導をごまかす兵器。」

お前の斬撃の進路を乱したのはこれ！

リアクティブアーマーは旧世代の戦車が使った古い防御機構で装甲に指向性を持った爆発物を埋め込み、攻撃を受けた際に爆発させて威力を相殺する技術だ！ こっちの攻撃が当たる寸前に小さな何かをばらまくのが見えたし、それを爆発させてるんだ！」

「なんでお前が知ってるようなもんばかり積んでるんだ、あいつ……！？」

「それは私の疑問だ！ そんな事より次が来るぞ！
上だ！」

戦闘中の為か早口で会話を進める二人だったが、桔梗の警告に一護
が上を見上げる。

ガイ・ボルグ

“スルト”の左右に取り付けられた防壁。その最上部に開いた砲台
から灰色の光が洩れだし。

ガイ・ボルグ、発射

二つの光が空に昇っていった。光は上空で一旦静止。やがて小さく
収縮を始め。

「ッ………！ 躲せ！！」

光の雨として地上目掛けてに降り注いだ。

「すげえ威力だな………」

ギリギリのところ、瞬歩で跳び退いた桔梗達の目の前を光の雨が雑
ぎ払い、地上に着弾。瓦礫と化した眼下の町を打ち砕き、大量の粉
塵が桔梗達の居る上空にまで昇ってきた。

「今度は何だ？」

“スルト”の左右の防壁に蜂の巣のように開いた砲台。その中から
鈍色の“何か”が顔を出し、噴煙と共に大量に撃ち出された。

「ッ……！！ 月牙天衝！！」

「魔皇喝采！！ ぶちまけろっ！！」

飛来する大量の“何か” ミサイルに一護が黒い斬撃を放つ
て撃ち落とし、桔梗が紅い火花を散蒔いて爆発させミサイルへの壁
にする。

「裂ける！ 藤孔雀！！」

「灰猫！！」

弓親が自身の斬魄刀を四本の刃へと変化させ迫るミサイルを切り裂きながら跳び、乱菊が灰の壁を張り飛び込んできたミサイルを破壊していく。

「第二陣……！」

更に砲台に装填されるミサイルを見て桔梗が呻く。その前で再び噴煙を撒き散らしながらミサイルが放たれる。

「月牙」

「デイベインバスター！」

再度迎撃しようとした一護達の前を桜色の閃光が迸りミサイル群を纏めて撃ち落とした。

「桔梗ちゃん！」

背後からの声に二人が振り返った先。魔力の槍の弾幕を抜けてきたなのはが合流した。

「プラズマスマッシュャー！」

左側でも冬獅郎達に迫るミサイルを砲撃魔法で撃ち落としたフェイトが合流。バルディッシュを構えて“スルト”と対峙した。

「遅れてごめん！ ヴィータちゃんの配置に手間取って……！」

「配置 ……！？」

その瞬間桔梗は強大な霊圧に空を仰ぎ見た。

「アイゼン！」

“スルト”よりも更に上。足元に三角形の魔法陣を展開しカートリッジをロード、より巨大な鉄槌へと変型させヴィータは自分のデバイスを振りかぶる。

『G i g a n t f o r m ! ! 』

「轟天……爆碎！！」

上段に構えられたグラーファイゼンはそこで柄を伸ばし更に巨大化する。

そして　　。

「ギガント……シユラーク!!」

轟音と共に振り下ろした。

「ッ……!!」

最初にあったのは爆発。次に爆風。続けて鉄槌と防壁が激突した際に発生した黒煙と衝撃波が吹き荒れ、桔梗達は手を翳して衝撃から顔を庇う。

「やった……!!」

その中でなのは小さく喝采の声を上げる。

「……まだだ……!!」

しかし、あれ程の攻撃を受けたにも関わらず、僅かに体勢を崩すだけ“の“スルト“を見て、桔梗は瞬歩を使って足を止めたヴィー

タの元へと跳ぶ。

グン・グニール

それより少し遅く黒煙を切り裂いて射出された魔力の槍がヴィータに向かって飛び

「ッ……！」

その間に割り込んだ桔梗が魔力の槍を切り捨てるも、魔力の槍が爆発。咄嗟に跳び退くも、その衝撃に皇呀を手放してしまう。

「ちい……！」

「お前！ 大丈夫かよ!？」

「私は問題無い……それより……奴だ」

駆け寄ってくるヴィータに返事を返しながら桔梗は落ちていく皇呀を、次いで徐々に黒煙を見遣る。

そこには攻撃を受けた右側の防壁の一部からスパークを発しながらも再浮上を始めた“スルト”の姿があった。

「ッ……！ あれだけやってあの程度かよ……！！」

「恐れる程じゃない。少なくとも攻撃は通る。むしろこっちの攻撃は一切効かない可能性もあったんだから上等だ」

「ギガントシユラークなんて、何発も打てるか！」

「落ち着け、阿呆。殆ど効いてないように見えるのはあいつが直前で躲しただけだ」

「躲……した……？」

「リアクティブアーマー代わりの爆薬をばらまきながら、後ろに後退して威力を受け流したんだ。“動く要塞”とはつまり言葉だな。動ける利点をちゃんと活かしている」

言いながら桔梗が身構える。その先には大量のミサイルを捌くのはや一護達が居た。

「やはり妙だな……」

「何がだよ?」

「……確信は無い。それよりもいくぞ!」

「ちょ、ちょっと待てよ! お前、武器は!?」

何も持たず素手で立ち向かおうとする桔梗を、流石に危険と判断したヴィータが止めた。

「は……?」

「は……じゃねえよ! あれが無かったらまともに闘えねえんじや

」

「……ああ! そういうことか!」

最初何を言われているのか分からなかった桔梗だが、ヴィータの言葉によろやく彼女が何を危惧しているのかを理解した。

「それなら安心しろ。お前等異邦人がどういいう戦い方も知らんし、他の死神と斬魄刀の関係も知らん……だがな

」

そこで桔梗は言葉を切り　。

「私は相棒を信頼しているし、相棒も戦友を裏切らない。相棒が応えてくれるなら、恐れる敵などこの世に居はしない！」

自信を持って告げた。

第五十二話 【巨人陥落】（前書き）

前回同様更新に超時間喰った駆溜です。

ほんとにお待たせしました。

前回の前書きにも書きましたが、人外との戦闘が予想以上に難しい。これがガンガン動く動物系ならまだ動きもイメージ出来るんですが、スルトぜんぜん動かねえ……。

今話も皆様の暇潰しになればいいのですが、どうだろう……。

第五十二話 【巨人陥落】

「ッ……！」

その少女は身体に走る激痛で目を覚ました。

「……は……」

それが見慣れた天井、見慣れた調度品が置かれた自分の部屋であることによく気付いた。

「そうか……」

そこで少女は思い出した。

自分は高町 なのはに負けたのだと。

一気に接近しても防御魔法を抜くことが出来ず、大量の誘導弾に足を止められ最後は砲撃魔法が自分目掛けて撃たれたところで少女の記憶が途切れていた。

「くそっ……！ くそっ……！ くそっ……！ くそっ……！ くそっ……！」

負けた事実を壊そうとするように少女はひたすら自分が寝ていたべ

ツドを殴りつける。

少女は示さなければならなかった。時空管理局に、世界に。自身の力を、自身の家名を。

少女は没落を始めた軍人の家系の生まれだった。時空管理局発足以前から優れた魔導師を輩出し、名門と呼ばれるに相応しい一族だった。しかし時空管理局が発足されそこに属するようになってから魔導師の“質”が目に見えて落ち、少女の祖父の代でとうとう管理局の中枢から外れてしまった。その中で少女は久方振りに生まれた“金”。故に少女の父は過度な訓練と、洗脳に近い教育を施した。

（我が魔法は至高。故に我等は人々の上に立たねばならない。故に敗北など許されない）

「フウ……」

父から言われ続けた言葉が幾度となく少女の頭の中で再生されるが、溜まったものを吐き出すように深呼吸をして少女はベッドから降りた。

（くそっ……）

部屋を出て暗い廊下を歩いていく。

少女は父が嫌いだった。記憶の中の男は些細な魔法の失敗にすら怒り怒鳴って拳を振っていた。魔導師としての資質を持たず、自分では実践一つ出来ない男が……。

少女は母が目障りだった。記憶の中の女はいつも男に肯定の返事しかせず、自分が殴られるのを見ても視線を逸らすだけの女が……。そんな奴らに頭を下げて敗北を謝罪せねばならない。その事が少女をより一層苛立たせた。

「……ものだ……」

「……すね……」

少女が一階へ降りる階段にたどり着いた時だった。

「我が………は強くなければならん。それが代々管理局に身を置いてきた者の責務だ」

「そうですね……」

気配を殺し、静かに階段を降りていく。2階同様薄暗い廊下で、唯一明かりが点いている部屋に近付いていく。

「まさか……遥かに実戦経験の少ない小娘に負けるとは思わなかった。我が家名に泥を塗り、十年近い教育も無駄だったことが証明されてしまった」

「そうですね……」

少女が部屋の前にたどり着く。

忌ままししい彼女の両親。彼等は、男は少女が部屋の前に居ることに気付くことなく愚痴を零していく。

「あれ“に比べて……この高町　なのはは優秀だな……。見ろ、わざわざ友誼を結びたい、という内容の手紙だ。挨拶一つまともに出来ん“あれ“とは大違いだ」

「そうですね……」

少女は自分の心が凝り固まっていくのを目に見えない“何か“で感じた。

少女から感情が欠落していくのに全く気付かず、男は口を開き言うてしまう。

「まったく……」

自身の……破滅の引き金となる言葉を……。

「あれ“より高町　なのはが私の娘なら良かったのだが」

その言葉を聞いた瞬間、少女の視界が真っ赤に染まった。

「そうです　　！？　ひっ……！！？」

いつも通り男に追従しようとした女は部屋の入り口で、魔力刃を両手に構えた少女を見つけた。顔は俯き、表情は前髪に隠れて窺うこととは出来ない。にも関わらず女が悲鳴を漏らしたのは、少女が構える魔力刃と、怖気を誘う……その殺気。

「一体どうし　　！？　おい……何の真似だ？」

男も女の態度から異常を察知し、入り口を振り向き、少女が放つ殺気に困惑と、恐怖が緋い交ぜになった表情を浮かべた。

「何の真似だと聞いてる……！！　おい！　止まれ！！！」

「ひっ……ひいやああああげぶ……！！？」

腰を抜かしながらも懸命に男の背後に逃げようとした女は、しかし一瞬でその傍に現れた少女に肩を切り裂かれた。

「よ……よせ……やめる……！」

大量の血を撒き散らしながら、床に出来た血の海に倒れ伏す女に一瞥をくれることなく、男も逃げようとする。

「き……貴様……実の親を殺そうと言うのか　　！？　や……
やめてくれ……う……うおおおごっ！？」

逃げようと背を向けたと同時に、背中に激痛を感じ、直後少女の魔力光と同じ色をした刃が胸を突き破った。

……。

「ッ……！」

その少女は身体に走る激痛で目を覚ました。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

状況を知る為に辺りを見回した少女の目に入るの一面を彩る赤。そしてその赤の中に紛れこんだ赤に染まった“何か”。

少女は笑う。己を縛り付けていた物からの解放と、その名前に募り始めた憎悪に身を任せて。

「アクセルシューター、シュート！」

「シュワルベ・フリーゲン！」

なのはが大量の誘導弾を放ち、ヴィータが四つの鉄球をデバイスで撃ちだす。鉄球なのは達に迫るミサイル群を飛び回りながら撃ち抜き爆発させていく。

防御

剥き出しの砲台目掛けて桜色の魔力弾が飛ぶが、“スルト”の防壁から射出される灰色の球体に誘導を乱され、落下していく球体に引きずられて地上に落ちていく。

「プラズマ……スマッシュャー!!」

反対側からもフェイトが砲撃魔法で砲台を狙い撃とうとするが、噴射炎を輝かせながら旋回することで狙いを外され防壁を僅かに焦がすのみ。

ガイ・ボルグ

その隙を突くように接近しようとした死神組を“スルト”から撃たれた無数の光の雨が襲い、近寄らせない。

(戦力差は解ってたけど……)

その中でなのはは現状を打開する術を考える。
戦況は膠着状態だった。なのは達の攻撃は“スルト”に通らず、“スルト”の攻撃もつかず離れずの間合いを取る彼女達を捉えるには至らない。
しかし。

(このままじゃ……押し負ける……!)

それは人と機械の差。そして兵士と兵器としての差。

これが一護達死神組だけなら、“スルト”の圧倒的な弾幕を前に接近すら出来ず落とされていた。そしてなのは達魔導師組だけなら火力の差に押され、やはり落とされていた。

一撃離脱が出来る足を持ち、揺さ振れる死神と、弾幕を張れる魔導師が同じ敵を前に連携しているからこそその膠着状態。

それでもこのまま続けなければいずれ誰かが落ちる。そうしなければ崩し的に全員がやられていくだろう。

(ヴィータちゃんの攻撃は有効打を外されてもダメージにはなつて。つまりあの魔力弾を雨みたいに降らせる攻撃の外から、左右同時に強力な砲撃を撃てば流石に躲せない筈……！)

ただ、となのはは思う。それには問題が幾つかあった。

一つは一撃を撃つための時間。先のフェイトのプラズマスマッシュャーですら外壁を抜くことは出来なかった。つまり攻撃にはそれ以上の破壊力が必要だが、なのはにしてもチャージには時間が掛かる。その間“スルト”の左右で攻撃を準備している者を護る必要があるが、現在は全員が手一杯になり始めており、余裕は無い。そしてなのはにとってもう一つの問題。

「だから……ちらちらと私を気にするようなら護衛の必要など無いと言ってるだろう？ そんな事では満足に動けまい？」

桔梗の存在だった。今戦っている者達の中、武器を失ったことで桔梗がもつとも戦力ダウンしているようになのはは感じた。現に最初

の時ほど強力な攻撃は出さず鬼道で敵の攻撃を迎撃するだけに留めていた。故になのはとヴィータが桔梗に近くに陣取り、なんとか三人で攻撃を捌いていたが……。

「ほら、次が来たぞ。ボサツとするな」

桔梗は必死に援護する二人の苦労などどこ吹く風で向かってくる魔力の槍に指を向け、集束した霊子の閃光を放ち、他の魔力の槍を巻き込んで誘爆させる。

「だから……お前がさっさと下がらねえから助けてやってるんだろ
うがー！」

その言葉にヴィータがキレた。武器を落とした時からずっと彼女は桔梗に武器を拾いに行くか、後退を促していた。しかし桔梗はそのどちらも選ばず空中に留まっていた。

「ふう……しつこいな……。後退の必要など無いと言っているぞ、
私は。この状況はお前達が勝手に背負いこんでいる苦労だ」

「て……めえ……！」

「ヴィータちゃんに桔梗ちゃんも！今はそんな事をしてる場合じ

「や……！」

桔梗の言い草にヴィータはついに我慢の限界に達したのか桔梗を振り返りそつになるが、慌ててなのはが呼び止めることでギリギリ堪える。

「まあ……からかつのはこれくらいにして……」

（悪ふざけかよー！）

「おい、赤いの。さっきの巨大なハンマーはもう一回使えるか？」

桔梗の一言に心中で猛烈なツッコミを返すヴィータだが、続く桔梗の真剣な声に驚いて顔だけを振り返らせる。

「なんでだ？」

「あいつの攻撃は可能な限り私が封殺する。お前はその間にあいつの防壁のどつちかを破壊しろ」

「封殺って…できんのか!？」

「あいつが最初に使った主砲と、雨みたいな爆撃を降らせてくるやつを除けばな。お前はあいつの正面以外から、距離に注意して攻撃すればいい」

「……分かつ

」

「待つて、ヴィータちゃん！ その攻撃は私がやるよ！」

桔梗の提案に少し間を置いてからヴィータが頷こうとしたが、二人の会話を聞いていたなのはが割り込む。

「なのは……！？」

「ギガントシユラークはグラーファイゼンに掛かる負担が大きいし、遠距離からの攻撃なら私とレイジングハートの方が向いてるよ」

「けど……！ 負担って意味じゃ

」

「桔梗ちゃん……信じて大丈夫だよな？」

咄嗟に止めようとするヴィータの言葉に被せてなのはが問い掛ける。

「ああ、任せろ」

その問いへの桔梗の答えは簡潔だった。

「さっきも言った二つの攻撃を除けば……ミサイルと灰色の槍は私が落とす。

私が……“私達”が、抑える」

「分かった……お願い！」

「なのは!?!」

桔梗の言葉を聞いて、なのはが躊躇いなく“スルト”の右側の防壁目差して飛び出していく。

「お前……なのはに何かあってみる……ただじゃおかねえからな!」

そしてヴィータも捨て台詞のような言葉を残し、なのはの後を追っていった。

「……録な台詞じゃないな……」

最後の言葉に溜め息をつきながら桔梗は“スルト”の反対側で戦う死神達を見遣る。

(後は……向こうが“私達”の動きに気付くかどうかだが……)

そこまで考えてから桔梗は思考を中断。“スルト”が動きはじめたのに気付いたのだ。

目標……移動

“スルト”がなのはとヴィータの動きを察知する。
右側の防壁の上方へ。飛翔魔法で駆け抜け、魔法陣を展開する。

「レイジングハート！ エクセリオンモード！」

なのはの声と共にレイジングハートが姿を変える。杖から槍のような形状へ。

より鋭く攻撃的な姿へと。

「瓦解……！」

動きを見せたのはなのはただけではなく

「大紅蓮氷輪丸!!」

圧倒的な霊圧と冷気を放出しながら、冬獅郎が構える。その四肢は氷に覆われ、背には氷でできた巨大な翼と長大な尾を背負う。

「……!!」

その傍を抜けて一護が桔梗の元へ飛ぶ。

ランチャー、装填

“スルト”は突然変わった敵の動きにも慌てない。今までよりも奇烈に、全てのミサイル発射口に弾頭を装填する。

「おおおおっ!!」

迎撃の準備が整ったところで冬獅郎が氷の翼を羽ばたかせて飛び出す。同時になのはも前方に新たな魔法陣を展開し、魔力の収束を始

める。

発射

“スルト”の左右の防壁から大量のミサイルが射出される。その数は今までの比ではなく、“スルト”の周りを一瞬で噴煙が包み込んだ。

魔導師は攻撃の為に足を止め、死神はまっすぐ突っ込んでくる。そして自身の武装なら容易に圧倒できると判断した為であり、“スルト”のAIが下した戦術予測は。

……！？

下方からガトリングガンの如く放たれた紅い矢の弾幕にミサイル群を全て撃ち落とされたことであっさりと覆された。貫かれ爆撃したミサイルが生み出す爆煙が周囲を押し包み。

「ッ……！」

爆煙の中を突っ切って冬獅郎が凄まじいスピードで飛翔する。

グン・グニール

ミサイルが駄目ならこちらで。そう判断した“スルト”は左側の防壁に開いた数十門の砲台から灰色の魔力の槍を撃ち、しかし撃った端から高速で飛来する紅い槍に打ち抜かれミサイル同様爆発させられる。

!?!?

“スルト”のAIは混乱の極みにあった。攻撃が飛んでくる眼下には誰も居らず、ただ町を焼く火災が大地を覆うだけ。周りを飛ぶ者達も何かをした様子は無い。

それでも向かってくる冬獅郎の勢いを挫くために、小さな炸薬を散蒔こうとして。

……!?

今度は砲撃を受け、炸薬の射出口を潰された。

「竜霰架!!」

そして冬獅郎は何かにも阻まれることなく、砲台に刃を突き立て、冷気を送り込む。

極寒の環境にも堪え、そこらの攻撃を受けても揺るがぬ装甲も内側から凍らされたのでは堪ったものではないらしい。冬獅郎が斬魄刀

を抜き後ろに下がると、外壁を食い破るように幾つもの巨大な氷柱が現れ侵食していく。

パージ

中央の胴体に影響が及ぶ前に左側の防壁を切り離す。
防壁は内側から溢れた冷気に覆われて凍りつき、地面に落下。衝撃に細かく砕け散り、炎に焼かれ消えていく。

「お前の欠点は主砲と光の雨、ミサイル、霊子の槍。この四つの内、一つずつしか撃てないことだ。
もしもこれだけの火力が一度に解放できたなら、この内の誰かはとつくに死んでる」

語りながら桔梗は眼下の炎　　火災に紛れ、大地に突き刺さった皇呀から拡がった自身の紅い炎に思考だけで指令を出し、桔梗の意を受けた炎は大量の紅い砲台　　雷朱砲紅を形成し砲弾を上空の“スルト”に撃ち出す。

……！！

「普通ならあれだけの弾幕と迎撃兵装があれば大抵の敵は圧倒出来る。
だが……その弾幕に付き合える者が居れば前提は変わる」

立て続けに撃ち込まれる砲撃はダメージよりもむしろ、衝撃で“スルト”をその場に釘付けにしてしまう。

「全力全開……！！」

左右のバランスを大きく欠き、砲撃を撃ち込まれながらも必死に体勢を立て直そうとする“スルト”になのはが狙いを定める。

「お前の敵は周りにいる者達だけじゃない……」。

眼下に広がるこの紅い炎……全てが私の兵で……全てがお前の敵だ……！！」

「スターライト……ブレイカー！！」

そして身動きを取れない“スルト”に桜色の魔力の奔流が放たれる。

直撃

“スルト”のAIはその砲撃を回避出来ないことを悟った。通常の要塞などと違う“スルト”の最大の利点は火力と堅固な装甲ではなく動ける、ということだった。だが今は体勢を崩し下からの砲撃に

足を止められている。“スルト”にはスターライトブレイカーを躲す術が無かった。

……！！

桜色の奔流は“スルト”の右側の防壁に直撃した。それが通常であれば堪えられたかもしれない。戦艦をも上回る“スルト”の外壁は魔力系の攻撃に高い耐性を持つ。しかし撃たれた場所は不幸にもギガントシユラクを受け僅かに損傷した箇所だった。やがて桜色の奔流は魔力の供給が途切れると同時に消えていき、右側の防壁には無惨にも巨大な穴が空いていた。

パージ

“スルト”が右側の防壁を切り離す。一瞬の後、防壁は内側から火を噴き始め、空気を震わせる爆発と共に砕け散った。

レーヴァテイン、展開

残るはチェスの騎士の駒のような胴体部だけになり、それでも“スルト”は自身の眼前に巨大な環状魔法陣を展開する。

「この局面でそんな物を使うということは、お前にはもうそれだけ

しか無いということだ」

その正面に立ちながら、桔梗は逃げることなく腕を組む。

「だが……それは些か遅すぎた」

レーヴァテイン、チャー

「おおおおおっ！ー！」

桔梗を飛び越えて、一護が“スルト”の前に踊り出る。その顔には白い虚の仮面を被り、右手に持った斬月には黒い霊力が込められていた。

「月牙……天衝！ー！」

そして振り下ろす。放たれた黒い斬撃はまっすぐ“スルト”へと飛ぶ。レーヴァテインが撃たれるよりも遥かに速く……。それは止めの一撃。誰もが次の瞬間には馬に似た“スルト”の頭部が両断され、破壊されると思いを。

「……………！？」

その期待は“スルト”の眼前に現れた赤銅色の魔法陣に裏切られた。現れた赤銅色の魔法陣は黒い斬撃と激突……することもなく斬撃を飲み込んでしまった。

「なん……だと……!？」

驚愕に足を止める一護達の遙か前方。赤銅色の魔法陣は姿を消し、代わりに一護達に立ちほだかるように、白衣を纏い、煙草を銜えた一人の女性が立っていた。

第五十三話 【鋼鉄の女帝】（前書き）

やっと更新できました。

夏休みに入ってからバイトが忙しく、なかなか手をつけられないという状況になっており、長くお待たせしたことをお詫びします。

ホントにすいませんでした！

なんか……毎回謝ってるような気がしてきました……。

第五十三話 【鋼鉄の女帝】

全員が口も開かず、身動き一つせず、突然現れた女性を注視し、“スルト”もまた集めた魔力を霧散させ沈黙した。

「まったく……」

きっかけさえあれば容赦なく切れるだろう緊張感から来る沈黙を女性は一言呟くことであっさりと破った。

「危険になれば退けと言っておいたのに……引き際を見誤るからそうなる。」

ゆっくり反省しているといい」

そう言って白衣のポケットに突っ込んでいた手を抜き、指を弾き音を鳴らす。

それを合図に“スルト”の真下に巨大な赤銅色の魔法陣が現れた。

「……！？ 転移魔法！？ あの人はあの兵器を逃がすつもりです」

「……！ させるか！」

フエイトの声を聞いた一護がまっさきに飛び出す。元々距離が近かったことに加え、天鎖斬月の速力もあり、女性との間合いを一気に詰めていく。

「やれやれ……せつかちだな……」

向かってくる一護に慌てることなく、女性は左手を一護に向け、赤銅色の魔法陣を発現させ。

「……!？」

その中から“黒い斬撃”が一護目掛けて飛び出した。

「くそっ……!」

咄嗟に足を止め身を捻り、その横を黒い斬撃が掠めていく。だが、その一瞬で“スルト”は赤銅色の魔法陣が放つ光の中へと消えていく。

「そんな……あれだけの質量を一瞬で……!？」

「種も仕掛けもある。でなければ私なんぞがこんな戦場に出るはずも無い……」

素早い転移魔法の発動になのはが声を上げるが、女性はなんでも無いことのように応えてから白煙を吐き出す。

「さて……突然だが自己紹介はしておこうか。管理局連中は察しがついているだろうが私は【ティアマト】の所属だ。他の奴らには【錬鉄】と呼ばせている」

よろしく、と【錬鉄】は軽い調子で締め括る。

「一体……どうしてこんな」

「どうしてこんな事をしたんだ、っと？ 理由は色々あるが……まあ、そいつらに興味があった、というのは大きいな」

フェイトの質問に答えながら【錬鉄】は視線を死神達に向ける。

「実に……興味深い……。他の世界でお前達のような存在は観測されていない。

死後の世界の住人……魂の調停者。そして“鍵”の所持者、【太陽神】が言う第九十七管理外世界の始まりを記す記憶媒体……“アカ

シッケレ「コード」

「アカシツク……？」

聞き慣れない単語になのはが首を傾げるが、【錬鉄】は気にせず
口を開く。

「物は相談だが……ここでお開きというのはどうだろう？」

私は【ティアマト】の中でも最弱でな。魔導師や騎士相手ならまだ
やれるが、レアスキル持ちだかを相手にするとどうしてもな……」

「そついうわけにはいきません……！ アースラまで連行します！」

フェイトがそつ言つとなのはやヴィータがデバイスを構える。

「そいつらは知らねえが……こつちも聞きたいことがある」

冬獅郎や乱菊も斬魄刀を構える。

「そつか……」

高まる不可視の圧力を前に。

「なら仕方ない」

【錬鉄】は銜えていた煙草吐き出して足元に赤銅色の魔法陣を展開し。

「消え　　！？」

驚愕に声を発したフェイトの後ろに居た。

「フェイト！　後ろだ！」

「……………！？」

一護の警告に振り返ろうとしたフェイトの脇腹に振り上げられた【錬鉄】の左膝が食い込む。

「ぐっ……………！？」

バリアジャケットの上からでも響く衝撃に呻き声を上げながらフェ

イトが吹き飛ぶ。

「ッ……！」

振り上げた足を下ろした瞬間、彼女の左右から桔梗と一護が瞬歩で同時に踊り出た。

「はあ！」

「ふっ！」

桔梗が地上から飛来し受け取った烈火闘槍を振り下ろし、一護が斬月を薙ぎ払う。

しかし前後からの攻撃にも焦りを見せずに再度魔法陣を展開。一瞬で姿を消し二人の一撃は虚しく空を切る。武器を振りながらも二人は消えた敵を探し。

「凄まじい速力だな」

先程と同じ場所にまた現れた。そこは丁度武器を振り切った桔梗と一護の背後。

振り返る二人に【錬鉄】は駒のように回転しながら跳び上がり、一護の顔面に右膝を、桔梗に左の踵を叩きつける。

「ぐあ……!!」

「ッ……!!」

桔梗は咄嗟に武器を放り捨てて両腕を交差させ自分から後ろに跳ぶことでダメージを抑えるが、一護は反応しきれずに顔に直撃を受け、虚の仮面を割られながら吹っ飛ばされる。

「デイバイン……!!」

吹き飛ばす二人と入れ代わるようになるのはが前に出てレイジンググハトを【錬鉄】に向ける。

「ふう……」

矛先を向けられているにも関わらず【錬鉄】はポケットから煙草の箱を取り出して一振り。出て来た煙草を銜えるとライターで火を点けた。

「バスター……!!」

完全に脚を止めた【錬鉄】に桜色の魔力の奔流を放つ。なのはとしてはこの砲撃が当たるとは思っていなかった。狙っていたのはカウンター。砲撃を転移で躲し、攻撃してきたところをバインドで拘束しようとした。だが。

「学習せん奴だな」

砲撃を遮るように赤銅色の魔力陣が【錬鉄】の前に現れ砲撃を飲み込んだ。

「な………!?!」

魔力の奔流が途切れたところで【錬鉄】は左手を真上に向け、魔法陣を展開。そこから桜色の砲撃が放たれた。

「ッ………!」

「くっ………!」

その先には真上から切り掛かろうとした冬獅郎と乱菊が居たが、突然向けられた矛先に回避を余儀なくされる。

「転移魔法の使用を誘ったんだろつか……生憎、貴様の戦術などとうの昔に研究済みだ。あんなあからさまな誘いじゃ私の裏は掻けない。
勿論お前もだ」

【錬鉄】が振り返りながら脚を振り上げ飛来した鉄球を蹴り落とす。

「まさか……!?!」

「さて、偉そうな事を言っておいてなんだが……このまま続ければ私が死ぬな。

そこでだ、高町　なのは……お前の相手は他の奴に任せよう」

驚くヴィータを尻目に【錬鉄】はなのはに声を掛ける。

「他の……?」

『マスター！　上方より反応!』

「上　　!?!」

「あっははははっはははははは！！」

なのはが上を向いた瞬間、調子の外れた笑い声と共に人影が飛び掛かってきた。

「シュート」

「墜ちろ！！」

人影の正体に気付いた時には既に手に持っていた魔力刃が振り下ろされた直後だった。

咄嗟にレイジンググハートを構えながら呼び掛けようとするも、魔力刃にレイジンググハートを押さえられ、一緒に地表に落下していく。

「なのは !?」

友の危機に気付いたフェイトが後を追おうとするも、横から幾筋の閃光を撃ちかけられ後ろに下がる。

「そう簡単に私を抜けると思うな」

【錬鉄】の背後。何十の魔法陣が展開され、その中から鋭角的なシルエットを持つ小さな戦闘機が何十機と現れ、目の前の敵にレーザーを撃ち始めた。

「これは……あの夜の機械兵器……!？」

「エアリアだ。どこぞの狂科学者が造った“ガジェット”という兵器の試作品だよ」

いきなり増えた敵に齒軋りするフェイトの傍に桔梗が瞬歩で駆け寄る。

「フェイト・テストロッサ、私が行く」

「桔梗……!？ ちよつと待」

突然の申し出に待ったを掛ける間も無く、桔梗が飛び出す。

「行かせると思つか？」

【錬鉄】の周りに居たエアリアが桔梗の進路を塞ごうと桔梗の後を追う。

「……………皇呀」

しかし桔梗は後ろから迫るエアリアを一瞥しただけで前に向き直る。
その背にエアリアが照準を合わせ。

「……………！」

地上から放たれた紅い槍が桔梗と擦れ違つて飛び、エアリアに突き刺さつて爆発し、桔梗は背後を気にすることなく地上へ降りていく。

「一人逃がしたが、これぐらいの人数なら丁度いいか……………」

暫く地上に視線を遣っていた【錬鉄】が小さく呟く。その周りに無数のエアリアが布陣し始め。

「命じる……………殲滅……………！」

その言葉を合図に一斉に飛び出した。

SIDEERなのは

「デイベインシューター……シュート！」

家屋の間を後ろに下がりながら飛びつつ、四つの誘導弾をシューターゼさんに向ける。

「無駄だ！」

あの時と同じ、二つの白黒の球体を左右に浮かべたシューターゼは誘導弾を気にすることなく向かってくる。

「そこ！」

誘導弾じゃ弾かれるのは既に分かっている。だから狙うのはシューターゼさんの進路上にあった乗用車。

「なっ……！？」

シュトーゼさんが乗用車の横を通過しようとするタイミングに合わせてボンネットを撃ち抜き爆発させる。

「……………！」

爆発にシュトーゼさんを巻き込むのを確認して急制動を掛けて転進。レイジングハートを向けながら、一気にシュトーゼさんとの間合いを詰める。

「小賢しい……………！」

けれど爆煙が不自然に揺らめくのと同時に、シュトーゼさんが上空に飛び出したことで間合いを再び取り直す。

（煙幕で接近して零距离から……………っていきたかったけど……………）

（唐突な接近は警戒されているようです）

一度距離を取ってから上空に居るシュトーゼさんに視線を遣って

「…………？」

違和感があった。シュトーゼさんはただ魔力刃を両手に持って空中に佇むだけで

！

（あの球体は！？）

『マスター！』

「…………！」

常にシュトーゼさんの横に浮かんでいた球体が消えたのに気付くのとレイジングハートが警告を発してくれたのは同時だった。咄嗟に上空に上がると、すぐ下を黒と白の光が何発も駆け抜けていくのが見えた。

（魔力弾…………！？ 前の時には）

「いいやりやああ……………！！！」

覆いかぶさってきた影に顔を上げた時には魔力刃を振り上げたシュトーゼさんが目の前に。

「やめる」

目前まで迫った魔力刃が突然止まる。振り下ろされかけた腕には別の白い手にガツチリと掴まれていた。

「そいつに何かあると私が録な目に遭わないらしい。どっかの赤い服を着た子供に睨まれてるのでな」

シュトーゼさんが振り向く。そこにはシュトーゼさんの左腕を掴む桔梗ちゃんが居た。

「桔梗ちゃん……!」

「ふん!」

「ッ……!?!」

桔梗ちゃんがシュトーゼさんの左腕を引いて反転。その勢いそのまま片腕で投げ飛ばしてしまった。

「ちょ………！ 桔梗ちゃん！ やり過ぎだったー！！」

投げ飛ばされたシュトーゼさんは勢いを緩めることが出来ず、近くの家屋の壁を突き破り、倒壊していく建物に巻き込まれてしまった。これじゃバリアジャケットがあっても。

「構えろ、来るぞ………！！」

「え………？」

「があああああつー！！」

次の瞬間、瓦礫を吹き飛ばし、獣のような叫び声を上げてシュトーゼさんが飛び出してきた。

「ふっ………！！」

それを見た桔梗ちゃんもシュトーゼさん目掛けて一気に飛び出していく。

「邪魔をするな!!」

シューターゼさんが高速移動魔法で視界から消え、桔梗ちゃんが空中で脚を止める。

「な……!!?」

驚愕から思わず声が漏れた。シューターゼさんが消えた瞬間、桔梗ちゃんは上半身を前に傾け、その上をシューターゼさんの薙いだ刃が通過していった。

予めどんな攻撃が来るのか分かってたような回避。

「ッ……!!」

桔梗ちゃんが上半身を戻す勢いで背後のシューターゼさんに肘をぶつける。

「はあああつ!!」

「!!」

攻撃はそれで終わらない。勢いよく反転し、振りかぶった拳を思い

っ切り叩きつけ、再びシュトーゼさんを吹き飛ばす。

「皇呀！」

地面に叩きつけられ、舞い上がる粉塵の中へ消えていくシュトーゼさんを見遣りながら桔梗ちゃんは誰かに呼び掛けて両手を広げる。すると周りで燃える炎から二本の紅い刀が飛んできて桔梗ちゃんの両手に納まった。

(そついえば……さっきも槍を使ってたっけ?)

シグナムさんと同じ炎の変換資質。けど、フェイトちゃんのように刃にするならともかく、武器にする、っというのは些か魔力効率が悪い気もする。

「あ……あ……あ……うああああっ!!」

けれどそんなことを考える間にも叫び声を上げてシュトーゼさんが粉塵の中から飛び出し、桔梗ちゃんも前に出て刃を振るう。

(呆けてる場合じゃない！ 援護しないと！)

一度だけ空を仰ぎ見る。私が落ちた後に何があったのか、上空では幾つもの爆発が生じていた。

(あっちも苦戦してる！ 早い行かないと……！)

視線を前に戻す。そこには魔力弾を放つ球体も使つてあらゆる方向から攻めるシュトーゼさんと、両手の刀で器用に捌いていく桔梗ちゃんが居た。

S I D E I O U T

第五十四話 【狂気の盾】

「G A a a …… G A A A A A A A A A ! !」

赤い髪の女が獣の咆哮を上げながら突進してくる。

「五月蠅い……！」

振るわれる右の剣を左の太刀で弾き返し、押し返される反動で向かってくる左の剣を右の太刀で落とす。

「邪魔っ……邪魔を、邪魔をするなあっ……！」

右、左と次々に振るう刃を順次落としていく。
そこに匠の技は無い。ただ速い。一撃落とされれば更に速い斬撃を。一撃弾けかれば更に多くの手数を。体勢が崩れそうになるのも関係ない。相手よりもひたすら速く動き敵を斬ろうとする。
だが。

「G i …… G U A A A A A A A ! !」

「スピードだけで……！」

迫る左の斬撃を両方の太刀で挟み込んで受け、缺のように引くことで切断、消滅させ太刀を放り捨てる。

「私に勝てるか！」

「G U U……！？」

消えた剣に構うことなく振り下ろされる左の剣を持った腕に掌打を当てて剣を落とさせる。

「破道の三十一『赤火砲』……！」

更ながら空きになった相手の胸に手の平を押し当て鬼道を発動。炎弾を手の平の先に収束させる。

「爆導掌！！ 歯を食い縛れ！！」

そして爆破。指向性を持たせた炎と衝撃は容易く相手を吹き飛ばし、大地に叩きつける。

そのダメージにも関わらず本人が一切気にした様子が無いことだ。
ここまで来ると苦痛を押し殺しているのではなく。

「痛みを痛みとして認識していないのか？」

「どっぴいっぴいっ。」

「簡単に言つと痛みは信号という形で脳が受信して発生するものだ」

高町　なのはの疑問に答えながら飛んできた紅い槍を受け取る。

「ところが一種の興奮状態に陥るとこの信号を伝える機能に異常が起きる。痛みを感じなくなる。
思考に異常を与えるほどの痛みに対する防衛本能からでもなることがあるが……」

「どっぴやったら……止められるの？」

それが最大の問題だ。

「止める手段など考えるまでもなく、あの出血ならとっくに意識を失っているはずなんだが……」

痛みを感じなくなっているだけであって、ダメージそのものが無くなるわけではない。身体の機能がそのままである以上、血は絶対に必要なものなのだ。

「出血が多量になれば最悪欠乏症……ショック死も有り得るはずなんだが、あの様子だとそれも期待出来ないな」

「……痛みが無いなら非殺傷設定の魔法も効かない……」

「非殺傷設定？」

「肉体や物質を傷付けないよう魔力によるダメージだけを与えるものなんだけど……」

要するに……。

「自転車の補助輪か」

「ほ、補助輪、って……」

「何度も何度も邪魔ばかりかあつ!! いい加減に死ね!!」

「ままならないのは戦場の常だろう!」

間合いに入った瞬間振るわれる左の刃を槍の切っ先で払い、両手で柄を回転させながら石突きの部分で相手の顎を打ち据える。普通なら脳震盪確実な一撃だがやはり意に介してないらしい。続けて反対から迫る刃を石突きで弾き槍を半回転。刃で喉を薙ぐが、瞬歩のような技で躲され後ろに下がっていく。

「せえい!」

離れた相手に槍を振りかぶり思いつ切り投げ付ける。

「マヌケ……!」

迫ってくる死を前に女の口元には笑み。次の瞬間横から突っ込んできた黒い球体に投げた槍を壊され女が姿を消す。

「破道の一『衝』!」

左肩から斬られる“感触”を信じるままに背後に鬼道の衝撃を放つ。

「G.i……!?!」

「破道の三十一『赤火砲』!」

衝撃に怯んだ敵に振り返りながら炎弾を放つが、相手に当たる前に掻き消されたように消滅した。

「碎け散れ……!」

更に白黒の球体が女の眼前で円を描き始めた。

「ブリット・シルド(弾丸の盾)……!」

「……!」

収束される霊圧に咄嗟に瞬歩で真上に跳んで退避。すぐ下を白と黒が混じり合った閃光が突き抜けていく。

(霊圧を圧縮した鎧での体当たりか……!)

単純だけに破壊力も相当なものらしい。コンクリートには深い破壊痕を残し、進路上にある瓦礫や家屋を根こそぎ蹂躪していく。そして。

(どこに行った!?)

霊圧の光が消えた後に残ったのは白と黒の球体だけ。その二つも左右に散って飛んでいってしまう。着地しながら再度飛んできた紅い太刀を受け取り、周囲を見回す。

「桔梗ちゃん、後ろ！」

「そつち！」

高町　なのはの叫びを無視して右から左に投げ渡した太刀を左側に振るつ。

「……！ お……まえ……！！ また……！！！」

「言った筈だ……！！ スピードだけで私に勝てるか！」

その先には私の背後でも迂回して回りこんだのか、死角から今まさに刃を振り下ろさんとしていた女の姿。

「このノロマが！ このノロマが！… このノロマが！… このノロマが！… このノロマが！…」

「スピードだけで敵を圧倒したいなら相手の三倍は速く動け。一芸特化はそれぐらい出来なければ話にならない」

太刀を振り抜いて相手の剣を破壊。襟を掴んで近くの塀に投げつける。

「ふん！」

更に横から突進してきた白の球体をキャッチ。地面に叩きつけ。

「破道の五十四『廃炎』！」

投げ捨てるのと同時に炎で球体を焼き尽くす。

「縛道の三十『嘴突三閃』！」

白い球体が消えると黒い球体も動きを止めて地に落ちた。それを確認してから立ち上がるうとする女に三つの嘴状の霊圧を放ち、再び扉に縫い止める。

「……………！？ くそっ……………！ くそっ……………！ くそっ……………！ くそっ……………！ こんなバインドで……………！！！」

縛道から抜け出そうとする女に太刀を突き付ける。

「終わり」

「待つて、桔梗ちゃん！」

止めを刺すかか否か……………。決めあぐねていたところで高町 なのはが後ろから駆け寄ってきた。

「シュトーゼさん……………どうしてこんな事を……………どうしてご両親を殺したの……………？」

「くっ……………あはっはっはっはっはっ……………あっはははははははは……………」

そこまで聞いたところで女

シュトーゼが笑いだした。

「何で！？ お前が私より優秀だからだよ！！」

「……………えっ？」

返ってきた答えはまったく要領を得ない答え。

「私が……………？ それって……………どういう……………？」

「誰もかれもお前を愛する！ その力を認める！ どれだけ闘い続けてもただ力が劣るといふそれだけの理由で欠陥品扱いされた奴の事など、お前は知らないだろうな！！」

「そんな……………！ そんな事は……………」

「あるさ……………！ 良かったな、高町 なのは……………お前は私の親にも愛されていたよ……………弱い私よりもな！！」

その話を聞きながら半歩下がる。

これは私が立ち入れる話ではないらしい。

「何が……あつたんですか？」

「劣等な私よりもお前みたいな奴が娘に欲しかったんだと！ あつはははははは！ 笑わせる話だ！ 劣等な親から生まれた子供が優秀な訳がないのにな！ 昔は管理局の偉い地位に居たから今もその地位に居なくてはならない！！ その為に自分の子供は優秀でなくてはならないだとさ！！」

「……………！！」

何が可笑しいのか、今だに笑いつづけるシュトーゼに高町　なのはが絶句していた。
だが、もういいだろう。

「子を愛せない親……親を愛せない子供か……」

「桔梗ちゃん……？」

「引導は必要か？」

下げていた足をまた前に出して太刀を喉元に突き付ける。

「桔梗ちゃん!!」

「はっ……!! 糞喰らえ……!!」

「そうか……」

先の会話で決心は付いた。こいつは既に壊れている。

そしてその結果異常な精神が肉体のダメージを無視する程になっている。

そんな奴が生半可な説得で止まる筈も無く、放置すれば私の周辺を害する可能性は高い。

「同情は必要無いな……」

「……!!」

「桔きよ」

後ろに居た高町 なのはの声が途切れた。

咄嗟に振り返ろうとしたところで今度は脇腹に衝撃が走り、吹き飛ばされてしまった。

（“ 予知 “ 出来なかった！？ 気を抜きすぎたか……！！）

後は止めだけ。そう思っていただけに油断があったらしい。それでも何とか空中で体勢を立て直して着地。向こうでも高町 なのはが脇を押さえながら立ち上がるところだった。

「随分派手にやられたな。せつかく作り直した“ スフィア “ も壊されて……」

その声に視線を戻すと、シュトーゼを拘束していた縛道を蹴りで破壊していく白衣の女が居た。

「なんでここに居る……上の奴らはどうした……？」

「逃げてきた。やはり駄目だ、正面からでは勝てん。私はこの様だし、エアリアは全滅だ」

シュトーゼにそう言いながら私に向き直った【錬鉄】の姿は酷いものだった。

まず左腕が肘から無い。切断面には黒い霊圧が残り香のように纏わりつき、右腕は肩まで凍り付いていた。

「そういう訳だ。私達はこのまま逃げさせてもらう。納得出来んかもしれないが、ここは痛み分けということで勘弁してくれ。まったく……このままでは煙草すら吸えん……」

そう言いながら【錬鉄】は足元に赤銅色の術式の陣を展開した。

「次は【太陽神】が来るだろう。それまでお前が持っているらしい“鍵”……誰にも渡さんことだ。特に時空管理局にはな。宝の持ち腐れだ」

「さっき言っていた“アカシックレコード”か。インドの仏教用語がなぜここで出てくる？」

「ほう……力ばかりだと思っていたが、博識だな。そこまで分かっているなら“鍵”……“冥界の鍵”が本来持っている機能も自ずと分かる筈……っと、タイムアップか……。助言はここまで。次は世界の滅びで会おう」

語るだけ語って【錬鉄】はシュトーゼと共に光に包まれて消えた。そして上空からフェイト・テストロツサ達が降りてくると結界が消えて周辺の景色が元に戻るのも同時だった。

「夜……か……」

完全に夜の戸張が降りた公園。最初に居た丘から大分移動したらしい。見れば敷地の片隅に皇呀が突き刺さっているのが見えた。

「なのは！ 大丈夫か！」

「うん……桔梗ちゃんが来てくれたし、何とか……」

赤い服の子供が高町 なのはに声を掛けるのを聞きながら皇呀に歩み寄り、引き抜く。

「あの二人はどうした？」

「逃げた。次の襲撃予告だけ残してな」

銀髪の死神が聞いてくるのを適当に返しながら高町 なのはや死神達と“対峙”する位置に移動する。
そう……まだ何も終わっていない。

「一護……あなた達は何者なの？」

「俺達は」

微妙に睨み合う形になった直後、フェイト・テストロッサの質問にオレンジ髪の死神が“迂闊”にもその質問に答えようとした。こいつは状況をまったく理解していないのか!?

「縛道の六十三『鎖条鎖縛!』」

故に不要な事を口走る前に動きそのものを拘束する。

「おい!? 暁」

「連れていけ!」

困惑気味な声を見捨てて隊長格に告げる。

「こいつらに現世の理を告げる訳にはいかない……。その目的は一致してる。こいつらは任せてとっとと行け……!」

「……分かった」

隊長格が頷くと、まずハゲ頭が鎖で拘束された死神を肩に担いでから瞬歩で消える。続いて目に飾りを付けた男が、髪の毛の長い女が、銀髪の隊長格が順次瞬歩で消え、霊圧はどんどん遠ざかっていく。

「ちょっと待」

「ふん！」

その突然の逃走に、驚きながらも後を追おうとした三人の前に皇呀を振り下ろし、衝撃で地面に一筋の傷跡を刻む。

「……………！ てめえ……………！！」

「それは境界線だ」

ハンマーを構えて今にも飛び出そうとする子供を無視して宣告する。

「この世界の真実が知りたいならその線を越えて来い。真実を知る前に私がお前達を……………殺す……………！！」

だからこのまま元の世界に帰ってほしい。やったことは無いが、殺したくない者を殺すのは想像するだけでも嫌になる。録なものじゃ

ない。

「私にこの刃を振り下ろさせるな……！　こんな世界の事など気にせず、お前等はお前等の世界へ帰れ……！」

そう言うってから私も瞬歩を使いその公園を後にする。

返事は聞く気は無かった。返答によつては本当に殺さなければならぬ。世界のバランスの為に。家族が住む世界を守る為に。

数日前はこんな事する必要は無かった筈だ。

普通に朝に起きて家族に挨拶してご飯を食べて学校に行き、帰ってくればまた家族に挨拶して……。

そんな普通な日常だった筈なのに……。気付けば身近な人間と世界の安定、自分の命と他者の命を天秤に掛けなければならない状況に陥っている。

まったく……。本当に……。

「……………どうしてこうなった……………」

気が付いた時には愚痴が零れていた。

ただ、幸いだったのは彼女達が後を追って来なかったことぐらい……か……。

「巨大兵器“スルト”は武装の大半が破壊され戦闘不能……マリア・シエルメリストと彼女お手製の兵器を使用した魔導師も敗退……か……」

「やはり恐れるべきは魂の調停者達か。管理局の人形共だけならこっちはならなかった」

小さな明かりだけが光源となる暗い部屋の中で、黒い軍服を着込み、椅子に腰掛けて本を読む男と、白衣を纏い、壁に飾り付けられた絵を眺める男が言葉を交わしていた。

「それで？ 次は君が出るのかい？ メリオス」

「無論だ。目的遂行の為にあの娘 紅い炎の剣士を排除する必要があることが分かった。ならば私が直接手を下す」

軍服の男 メリオスが読んでいた本を閉じる。その目には覇気の色が浮かび、彼の本気を示していた。

「そうか……ならばこうして会うのはこれが最後か」

「ああ……計画が失敗しようが成功しようが私は死ぬ。技術協力……感謝しておこう、ジェイル・スカリエッティ」

「気にすることはない、友よ。こちらも良いデータが手に入った。満足出来る時間だったとも」

「お前に友人呼ばわりされると背筋が薄ら寒くなるのは何故だろうか？」

そう言いながら二人は笑う。笑いながらメリオスは椅子から立ち上がり、ジェイル・スカリエッティは彼に背を向けて歩き出す。

「それじゃあ……さようならと言っておこうか、友よ」

「次に会うのは地獄か……。先に行く。さらばだ、友よ」

それを最後にジェイル・スカリエッティは部屋を出る。友と呼んだ男を振り返ることもないまま……。

「さあ……始めよう……」

メリオスも椅子に立てかけてあった刀を手に取り歩き出す。

「捨てられた者の……奪われた者の復讐を……。世界よ……我等が
問い掛ける。お前のその意志を……！」

第五十五話 【交わらない道】（前書き）

お待たせしました。前回の更新で自分の未熟にへこみまくってた
瑠です。

まあ、気落ちしててもしょうがないので心機一転して新話更新！
でも身から出た錆とはいえ読者の反応は怖い……。

第五十五話 【交わらない道】

SIDE Eーなのは

戦争と間違えるような戦いが終わった翌日の昼。
アースラの会議室は重い空気が押し包んでいた。
原因は突然現れた黒衣着物の集団。シュトーゼさん。そして……桔梗ちゃん。あまりにも解らない事が多すぎるのだ。

「まずは……無事に帰ってきてくれて良かった……」

その中でクロノ君が最初に口を開いた。

「計画書の段階で破棄された筈の移動要塞を【ティアマト】が持ち出してくるとは思わなかった……。【ティアマト】はあれを作る為にマリア・シエルメリストを引き込んだんだろう」

「クロノは……あれについて知ってたの？」

フェイトちゃんの言う通り、クロノ君はあの質量兵器の名前から製造目的に至るまで、最初から知っていたようだった。
だから最初から逃げるように言っていた。

「“スルト”の設計者であるマリア・シエルメリストと母さんが知り合いだったんだ。そして子供の頃、母さん達が会っている時にその設計案を見せてもらったことがあったが……“スルト”は危険だと母さんが訴え管理局でも“スルト”の建造を行うことは無く、計画書は破棄された」

「その存在を【ティアマト】が知って、あの人を……」

「そうなんだろうが……彼女は十年近く前に消息不明になっているんだ」

「消息……不明……？」

「ああ……彼女が“スルト”の設計案を管理局に提出した三年程してから連絡がつかなくなったと母さんが心配していた……」

その頃から【ティアマト】とも繋がりがあつたんだろうか……？

「彼女の事は知人に頼もう。ここから出来る事は少ない」

そう言ってクロノ君がパネルを操作して空中モニターを呼び出す。

「現状【ティアマト】以上に不可解なのが彼等……護廷十三隊と名乗った者達だ」

そこに映ったのはあの黒い着物を着た人達……そして桔梗ちゃん。

「当初次元漂流者だと思われていたが、彼等の言動を考えると、どうも現地の勢力だと思われる」

「でも、この世界には魔法か、それに類する技術は発見されてないんじゃない……」

フェイトちゃんがそう言っただけ私を見てくるけど、私は首を横に振ることしか出来ない。

眉唾物の話なら幾つも聞いたことがあるけれど、どれも本当の事とは思えない事ばかりなのだ。

「データを見た限りだと彼等の戦い方はベルカ式に近いが……その能力や戦術には個人差があるらしい」

エイミーさんがモニターの操作を始めると、あの人達が持っていた刀剣類が表示された。

「デバイスか……これ？」

「特徴としてはアームドデバイスが一番近いが、初遭遇時からずつと解析を行っても、可変機構等あらゆる部分が解析不能で既存の物とは大きく異なっている。

まったく未知の技術で造られた剣、としか言いようがないな」

ヴィータちゃんの疑問に答えながら更に剣が変化した後の映像が増えていく。

「一部の者を除くと、最初は普通の日本刀と呼ばれる武器の形状をしているが……変化後だと詳細不明の能力を使う者もいる」

私とフェイトちゃんが戦ったあの女の人が使っていた刀身が粉状になっってしまう武器。あの粉　色からすると灰だろうか？

は触れた者を切断してしまう能力があるらしい。

そして桔梗ちゃんの剣は紅い炎を発し、そこから刀、槍、矢、果ては大砲らしきものにまで変化させていた。

「そしてもう一つ解らないのが彼等の目的だ」

「……目的……時空管理局をこの世界から追い出すこと？」

あの銀髪の子供も、桔梗ちゃんからもこの世界から去るように言われた。

「……これも理由が解らないな……。確かに最初の遭遇時にこちらもデバイスを向けたが……状況から考えるに彼等も【ティアマト】と敵対していた。ならば話し合いによる協力も出来る筈だ。にも関わらず彼等は簡単な警告だけして襲い掛かってきた」

しばらくの沈黙の後にクロノ君が口を開く。
やっぱり彼等の事情を知る一番の近道は……。

「私……もう一度桔梗ちゃんと話をしてくるよ」

それしか無いと思う。護廷十三隊を名乗った人達は行方が分かっていない。でも彼女なら。

「他の人達は何処に居るか解ってないけど、桔梗ちゃんなら今は学校に居ると思う」

「この状況で学校だと！？もしそうだとしたら彼女は自分の置かれてる状況を理解してるのか！？」

学校に居る、という言葉にクロノ君が怒鳴り声を上げたけど気持ち

は分かる。
ジュエルシードや闇の書事件の時には私も学校に行ったりしてたけど、事情が違う。狙われているのは彼女自身なのだ。下手をすれば周りにも被害が及ぶ。クロノ君はその事を警戒し、怒ってるのだから。
でも。

「多分……居る。桔梗ちゃんは普通の生活にこだわってるような感じがしたから……」

それが前日に話をした桔梗ちゃんの影響。普通の学生の生活をして、その日常を壊そうとする人が居るならなんの躊躇いも無く闘う。そして桔梗ちゃんから見れば時空管理局も【ティアマト】も同じ“日常を壊そうとする敵”にしか見えないのかもしれない。

「でも……もつとちゃんと話し合えると思う。桔梗ちゃんやあの人達の事情も解れば協力し合えるよ」

そしていずれは【ティアマト】の人達とも。
きつと……。

S I D E I O U T

S I D E E ー 一 護

「話し合う余地は無い」

冬獅郎があいつらと戦い始めた理由の締め括りだった。

「あいつらが石田と同じ能力で……それで虚とかその辺りの事情を知らせるのはまずい、って……」

「そつだ。下手をすれば数百年前の滅却師の焼き直しになる。お前には実感の薄い話かもしれんがな」

あの戦いの後、追って来る時空管理局とかいう奴らを振り切ってルキア達の居るホテルにたどり着いた。
ルキア達も結界には巻き込まれたらしいけど、幸いこの辺りは無事だったらしい。

「けどよ……いくらなんでもいきなり

」

「愛染の反乱以降からバウント、綾大路や天貝の事件で尸魂界は揺れてる……その上今回の現世崩壊の危機……そして時空管理局という勢力は今後も不確定要素となりうる。

現世からの退去、そして今後二度と現世に関わらせない。それが一番穏便に済む流れだろう。

松本！」

「はい」

そこまで言ってから冬獅郎が立ち上がって乱菊さんに向き直る。

「海鳴市の近くにも虚が集まってきている。今は檜佐木や吉良が討伐に動いているが、途中で受けた報告だと予想よりも数が多く苦戦してるらしい。お前と斑目、弓親は二人と合流して虚の討伐に当たれ」

「隊長は？」

「俺は一度尸魂界へ戻る」

そう言いながらも一度俺に向き直ってくる。

「あの死神……暁 紅花のことについて知ってるだろう奴が“居ない”のでは仕方がない……」

何故か戻ってくるかと夜一さんが居なくなっていた。ルキアが言うには結界が消えるのと同時に姿を消したらしいけど……。

「数百年前まで護廷十三隊に籍を置いていたなら……ましてやあれだけの実力なら総隊長が確実に知っている筈だ。そしてあの死神はこの騒動の中心に居るらしい。そんな話を伝令神機で済ませるわけにはいかない」

言ってる間にも乱菊さんが、続けて一角と弓親が窓から飛び出していく。

「黒崎、朽木、阿散井、山田。お前達はここで待機だ。時空管理局が動いても接触は避ける。いいな！」

「おい！ 待てよ、冬獅郎！」

最後にそう言い残して冬獅郎も窓から街へ飛び出していく。

「……どうするのだ、一護？」

「どつする……つてもなあ……」

無音になった室内で、それまで静かに話を聞いていたルキアが口を開いた。

「日番谷隊長のやろつとした事も解る……。要は二度と現世に関わりたくない、と思うような状況に追い込めばいい。そうすれば余計な殺傷も必要なく異世界からの干渉を防げるだろう」

「そうすりゃ連中が虚だとかに関わることも無く現世はいつも通り、つてことか」

ルキアの言葉に恋次も頷きながら続く。
確かに言わんとしてることは解る。
けど。

「いくらなんでも荒つばすぎやしねえか？　それで向こうがキレやがったら逆効果だろ？」

「或いは……そうまでして奴らからの干渉を避けたいのか……中央四十六室が動いているのかもしれないが……」

「…………？ それって護廷十三隊よりも上の…………命令出してる奴らだろ？　なんでそれが出てくるんだ？」

「異世界の存在にはこちらから関わることを禁じられていた。こついった戒律を敷いているのは中央四十六室だ。ならば」

「良い読みしとるのおー！」

「おわっ！？」

突然聞こえた背後からの声に思わず身体が跳ねた。振り返ると人の姿の夜一さんが壁にもたれ掛かっていた。

「夜一殿！？　いったいどちらに」

「あやつらに見つかりと厄介じゃったから隠れておったんじゃが…………。」

「護…………お主の状況を見るに事態は相当混乱しておるようじゃの」

「ああ…………まったく訳分かんねえぜ…………」

それからあの結界の闘いの事を話した。
暁の事。いきなり現れて闘いに介入してきた【ティアマト】。闘い
が終わった後に冬獅郎から聞かされた闘いの理由。

「ふむ……【冥界の鍵】……“アカシックレコード”か……」

けれど夜一さんはあの白衣の女が言ってた言葉が気になるらしく、
途中からずっと考えこんでいた。

「夜一さんは知ってんのか？」

「いや……【冥界の鍵】は知らんが……やむを得まい。一護……儂
も尸魂界に行ってくる。調べる事が出来た」

「は？ 調べる事って、ちょ……！」

それだけ言つと呼び止める暇も無く瞬歩で消えた。窓を見れば風が
吹いてるわけでもないのにカーテンが揺れていた。

S I D E I O U T

「祈りましょう、帰りを願って……」

学校からの帰り。まっすぐ屋敷に帰らず海へ出る為の道を歩き続ける。

「凱歌を高らかに、貴方は銃を握って空を見上げる」

海の近くの公園は珍しいことに人っ子一人見つけれず、気が付けば昔聴いた歌が頭を過ぎっていた。

「昇っていく黒い煙は誰のもの？ 誰の想いでしょう？」

闘いの勝利を祝う歌。

「凱歌を高らかにお帰りなさい。
温かい想いの籠ったお家へと……」

これだけを聞けばそう思える。それで終わるなら闘いは……戦争は
幸せなものだろう。

「良い歌だね」

「そうでもない。続きは……終わりは結局そんなものかと思わせる
内容だ」

海が目の前に見える。柵に手を掛けながら後ろから掛けられた声に
応える。

「まだ現世をうるちよろしていたか……」。

何の用だ？ 高町 なのは

「何の理由も無く下がれない。今は色々な世界が危ないんだよ。
私達が動かなかつたら誰が【ティアマト】を止めるの？」

「護廷十三隊が止める。はっきり言うならお呼びじゃないんだ、お
前達は」

下手に優しい言葉を言っても変な希望を持たせるだけ。そう思って
学校からずつついてきていた高町 なのはに言葉を投げ掛ける。

「昨夜のあの人達の事？ でも、【ティアマト】の戦力だって大きい。少なくともあの人達だけじゃ」

「それがお前等の基準なら比較にもならん。考えなかったのか？ 護廷十三隊の名前を……」

「え……？」

「護廷十三隊は一番隊から十三番隊で構成される。昨夜の隊長格は十番隊を名乗った。あいつら全員を同じ隊と仮定するなら、あれと同格か、それ以上の能力を有した隊が後十二隊存在している」

比較にもならない。彼女もそれ相応の実力はあるのだろうが、少なくともあの隊長格達と互角程度では勝負にならない。

「解つたろう？ お前等はいらないんだ。解つたのならとつと自分の世界へ」

「ここが私の出身世界だよ」

自分の世界へ帰れ。そう言おうとして遮った高町。なのはの言葉に振り返る。

「この世界には私の家があって、私の家族が居て、私の友達が居る。だから護るんだよ」

語る彼女の眼は真剣だ。だが、私にとってそれは最悪に近い事実だ。彼女はこの現世に住み着いている異世界の人間だと思っていた。だからただこの現世から居なくなれば手を出す必要も無い。なのに彼女はこの現世が出身だと言う。ならば尚更。

「だから協力して。この世界や他の次元世界を護るために。桔梗ちゃんも協力してくれたらもっと色々な事が出来」

「悪いが……その話を聞いてますますお前達をこの現世に居させるわけにはいかなかった」

「……？」

私の言葉に高町　なのはが不思議そうな顔をしているが、こいつらが現世に居座る状況の方がずっとまずい。

銀髪の隊長格にも確認したことだ。四年前に起きた騒動で凄まじい霊圧が散時かれ、虚が際限無く集まってくると。そしてそれはこいつらが中心なのだ。

「このまま現世にいれば後悔することになる。別にお前達が死ぬわけじゃない」

こいつらの実力ならそこらの虚はどつにでもなる。
だが。

「死ぬのはお前の家族……そして友人だ」

周りの人間はどうか？

「なっ……！？」

「ああ、解らないならはつきり言ってやる」

彼女が何も考えず、ただ居るだけで虚が寄ってくる。

今まで出会わなかったのは偶然か、護廷十三隊が優秀だったか。

この状況ではどちらだろうと関係ない……。

「お前等はな……この現世では災厄を招き寄せる餌でしかないんだ……！」

「こんな……」

ガラスの割れた窓から差し込む光だけが光源となる暗い一室。

「こんな……アホな事を……！」

薄汚れ、埃が積もるその部屋で八神 はやては一つのモニター、そこに記録された日記を読んでいた。

「これが
」

握る拳を震わせ顔を俯かせながら呟くはやての後ろ。シグナムとザフィーラも何かを堪えるように顔を顰めていた。

「これが時空管理局の……人のする事かあ!!」

狭いとは言えない室内でただはやての叫びだけが虚しく木霊した。

第五十六話 【風の生まれた場所】（前書き）

また更新に間が空いてしまった駆留です。

今回はまったくストーリーに絡んでこなかったあの二人が登場です。

第五十六話 【風の生まれた場所】

SIDE E はやて

第九管理世界『オーガス』。次元航行艦やデバイスにも使われるレアメタルが採掘され、管理局にとっても重要な世界。そして管理局からの独立を訴えたレジスタンスが三年前に鎮圧され平和になった世界。

その筈なのに……。

「なんや……これ……」

管理局預かりの空港から出て来て最初に眼に入っただのはゴーストタウン……と見間違えそうな寂れた町並み。一応人の気配もするけど、錆び付いた看板を出したお店らしき家屋はどう見ても営業してるようには見えん。これなら任務の為に訪れた三年前の方がずっと活気があった。

「確か……データによると町を出て少し行ったところにある森の奥やったな」

気にしても始まらない。メリオスから受け取り、記憶したデータと空港で貰った地図を照らし合わせながら一緒にについて来てくれたシグナム達に声を掛け。

「……め……！」

「……よ……！」

ようとして、凄い剣幕で木箱に座るお婆さんに言い寄る男二人組を見つけた。

「シグナム、ザフィーラ」

「はっ………！」

改めて声を掛けると、二人も揉め事に気付いたのか、早足に、男二人に近寄って　　。

「痛っ！？　イデデデッ」

「ぐあっ！？」

「貴様等………何をしている？」

あつという間に二人の腕を捻りあげた。
やっぱ頼りになるなあ。

「くっそ……！ 離せよ！ ツ……！ てめえ等余所の世界の人間
だな！？ 失せ……！？ 痛っ！？」

「その通り、時空管理局の者だ。解つたのなら大人しく」

「時空……管理局……？」

その瞬間暴れる男の雰囲気が変わるのが後ろから見ていても解つた。
ザフィーラに抑えられてる男も不気味なくらい静かな眼で見返して
くる。

「そうかよ……管理局かよ……。なら」

「おやめなさい」

その時噎れた、けれどよく通る声が響いた。

「ッ……！ 婆さん……！？」

「貴方達の言いたい事は解ってる。有り難う……。さあ、管理局の方々も良ければその手を離してあげてください」

「しかし……」

「ッ……！」

「……！ 待て！」

お婆さんの一言。それにシグナム達が逡巡した際に男達は捕まえた手を振り払って路地に消えてしまった。

「いいんです。あの子達は孫の幼馴染みなので」

「そう……ですか……。だが、あの剣幕は……」

咄嗟に追おうとしたシグナムをお婆さんが呼び止める。

「二年ほど連絡のつかない孫を心配してくれたんですよ」

「連絡がつかない？ 何かあったんですか？」

シグナム達に追い付いてから改めてお婆さんの容姿が眼に入る。
白を基調に灰色のライン模様が入られたローブ。長髪は歳の影響
か白く染まり、首と背中あたりで細いリボンを使い纏めている。

(どっかで見たことある人かな？)

「『同胞や戦友達の魂を空へ還す為に、自分には成さねばならぬこ
とが出来た』……そう言っつて音沙汰が無くなって二年になりますか
……………」

「同胞……戦友……？」

「あの子は前の闘いにも兵卒として参加していましたから……………」

「前の……………っつて……………！」

そこまで言われてようやくこの人が誰に似ているのか気付いた。

「申し訳ありません……………宜しければお名前を聞かせていただいても

「？」

そしてシグナムも同じ人に思い至ったみたい。

「名前……ねえ。シルヴィア……シルヴィア・ヴァーンハルトとい
いますが……何か？」

「ッ……！」

聞いた家名はあの女性

青緑の風を纏った騎士と同じやった。

「じゃあ……あなたがレオーナ・ヴァーンハルトの」

「……？ あの子の事を知ってるのですか？」

「三年前の最後の戦闘で……」

「……ですか？」

そう呟くお婆さんの表情は何も変わらず……心配しているのかそうでないのか……さっぱり解らんかった。

「あの人が今何処に居るかとかは……」

「さあ……ただ、何をしようとしているかは解りますが……」

表情からでは嘘をついてるかも解らん。年齢や纏う雰囲気から腹芸では勝てそうにもない。

せやけど……。

「彼女が何をしようとしているのか解る、ってというのは？」

「この世界では国を問わず、祖国の為に闘い死んだ者の魂を空の神が迎えに来る、っというお伽話があります」

「それが……？」

「あの子は帰ってきて最初に言いました。『皆の魂はあの闘いからずっとこの大地に捕われている。今だ空へ還ることが出来ていない』と。私にはあの子が何を知ってそう言ったのかは解りません。ただあの子は戦士達の魂を捕らえている鎖を壊すつもりです」

そういうことか……。それで彼女は次元世界を滅ぼすつもりなんか。

「お願いがあります！」

「何でしょう……？」

「どうか彼女を……レオーナ・ヴァーンハルトを止めるのに協力してください！」

この人がレオーナ・ヴァーンハルトの祖母なら説得出来るかもしれん！

「止める……とは……？」

「彼女は今は『ティアマト』という組織に居ます。世界を滅ぼすと
言うて……」

「成る程……解りました」

「え……？」

これまでにあった経緯も話そうとして、しかしシルヴィアさんにはさっきのだけで理解してしまったらしい。

「え〜と……？」

「あの子は三年前の闘い……この国を救う闘いから世界を消し去る闘いを始めた……。それも次元世界を全て破壊しかねない程の……違いますか？」

「え……！？ あ……はい、そうです……。けど……それはまったく関係の無い人達を巻き込むことなんです！ せやから」

「お断りします」

「彼女の為にも……って……え……？」

お断りします……その単純な言葉の意味を理解するのに数秒掛かった。それぐらい信じられん言葉やった。

「な……なんでですか！？ 世界が危ないんですよ！ 貴女だって……なんの関係の無い人達も」

「私自身はいいんです。所詮老い先短い身ですから。ですが……そんな私でも、せめてあの子の味方でなくてはならないんです」

そう言っつてシルヴィアさんは少しだけ笑った。

「三年前の闘いの結末……鉱山の利権と戦後の安泰を求めた一部の内通者によるこの国の敗北……それは知っていますね？」

「……はい」

レオーナ・ヴァーンハルトと戦ったシグナムが教えてくれた三年前の真実。そしてその結果が今日の前に広がるゴーストタウンさながらの町の惨状。

「あの子は短い生涯の殆どを他人の都合で決められてきました。三年前の闘いも他人の都合で戦場に駆り出され、他人の都合で闘いを終わらされてしまいました。」

その中で……せめてあの子が自分の意志で槍を持つと決めたなら……例えどんな結果になろうと私はレオーナの味方です」

「そんな……せやけど」

「

「それに……私も管理局は好きではありませんから……正直に言うなら今にも手を出してしまいそうで怖いのです……」

「……！」

さっきと違って今度は明確にその意味が解ってしまった。
拒絶。もう話は終わりだと……早く帰ってくれと……。この人はそう言ってる……。

「……分かりました……。失礼します……」

一度頭を下げてからシグナム達を促して町の出入口目指して歩きだす。
失礼な態度かもしれんけど、あの人も長々と話すつもりはなさそうやった。表情や雰囲気には出ていなくてもそれが感じられた。

「……」

一度だけ振り返る。あの人は最初から変わることなく、静かに木箱に腰掛けていた。
誰かを待ってるかのように……。

深い森の奥。太陽の光がかろうじて足元を照らすその場所にその施設は存在した。

「ここが……」

呟いてからはやては施設を見上げた。

見た限りでは一階だけだか、広さは相当なものらしい。もしかしたら地下もあるかもしれない。そう当たりをつけて正面口らしき自動ドア“だったもの“に視線を遣る。

「誰も使わなくなって久しいようです。人の気配もしない……」

シグナムも同じように辺りを見回しながら呟く。

施設に取り付けられた窓ガラスは割れ、蔦が壁を覆い始めていた。後数年もこのまま放置しておけば森に飲み込まれていく。そんな有

様だった。

「とにかく……外からやと何も解らん。入ってみよ」

その不気味な雰囲気気圧されながらもはやては自分を鼓舞しつつ最初の一步を踏み出した。

「うっ……！」

「これは……」

正面口をくぐってはやてはいきなり呻き声を上げ、シグナムは僅かに瞠目した。

ロビーらしき広い空間も時の流れに浸蝕されつつあり、壁や外に近い場所も蔦で覆われ始めていた。

だが、彼女達が足を止めたのはそれではなく。

「血……か。相当時間が経過しているようです。風化している」

ザフィーラが足元に拡がる“それ”を爪先で擦る。

瓦礫や蔦に隠れているが、明らかに乾いた血溜まりと解る跡が壁や床にこびりついていた。

「酷いな……何があつたんや……」

「解りませんが……電力はまだ生きていますよ」

そう言つてシグナムは壁に取り付けられた端末機を操作し、見取り図を呼び出す。

「正面入り口にロビー……研究室に実験棟、実験動物収容区画に宿舎と所長室。最後に外部庭園……か」

はやてはシグナムの横から見取り図を覗き込みつつ主要区画らしき場所の名前を片っ端から暗記していく。

「どうします?」

「近くの部屋から順に調べていこう。ただ、電源が生きてる、つてことはセキュリティも健在な可能性があるし、時間は掛かるかも知れんけど三人で固まって動こう。ええな?」

「はい」

そうして三人は一番近い部屋目指して歩き始めた。
しかし。

「……ここまでなんも無かったな……」

「情報になるような資料は無し。罾も無し。セキュリティはあった
ようですが全て沈黙していましたし……」

所長室。一時間近く掛けてここまで辿り着いたはやて達だが、成果
と呼べるものは何も無く、むしろ罾やセキュリティを警戒しながら
進む事に時間が掛かっていた。

「殆どの部屋の端末は潰れてて使えんかったし、ここが駄目なら後
は外部庭園ちゅうとこしかめぼしい場所は無いけど……お！」

机に備えつけられた端末のキーの電源を押した瞬間起動、モニター
の明かりが薄暗い室内を照らした。

「……あかな……。殆どのファイルにパスが付けられとる……。
これは……いけそうやな。シグナム、ザフィーラ」

端末を操作していくうちに、閲覧可能なファイルを見つけたはやて
は部屋を調べていた二人を呼び、ファイルを開く。

「この所長の日誌……みたいなもんかな……」

表示された記録を三人は下へと読み進めていく。

「……っと、こいつは……」

その中ではやては一つの記録に気づきスクロールを止めた。

上層部から兵器のサンプルとなる昆虫が数匹送られてきた。黒く、小さな虫だが、話によるとこの虫が大量発生し管理世界の一つを滅ぼしたらしい。

雌雄は無く、繁殖方法は不明。ただ、一匹でも放置しておく瞬間に増殖してしまうあたり、クローニングに近い手段で増えている可能性がある。

一匹でも人の肉を食いちぎる狂暴性を持つが、最大の特徴は他の生物が持つ魔力素を食べてしまうこと。集団で他の何かに擬態する習性があることだろう。

この擬態は犬等の動物、人間のような大型の生物。果ては刃物のような無機物にまで擬態することが出来、身体を変質させ、本物の刃

のように獲物を切り裂くことが出来るようだ。

兵器としての利用は難しいかもしれないが、マリア・シエルメリストやジェイル・スカリエッツィにも意見を聞こうとおもう。

（マリア・シエルメリスト……ジェイル・スカリエッツィ……それに上層部……）。

メリオスはここを管理局の施設やと言ってたけど……いや、まだや！ 確かな証拠があるわけやない！）

上層部から今度は実験用の人間が二人送られてきた。

一人は管理局所属の男で最高評議会の周りを嗅ぎ回る危険人物だった為に捕縛したらしい。

もう一人は第97管理外世界の住人である十四、五歳程の女で優れた魔力資質を持っている。

男は第67管理世界『フィーニス』に住むフォル一族から得た技術による肉体強化プラン『ストレンジス』に。女は近年注目され始めた戦闘機人技術の実験に使おうと思う。

しかしフォル一族も愚かな者達である。

管理世界に住む者の義務として技術提供すれば良いものを、一族の秘伝などと言って拒んだ為に滅ぼされたらしい。

管理世界の長き平和の為に永遠の命を得ようとする最高評議会の方々の覚悟は素晴らしい。我々も管理世界の平和の為に一層尽力せねばならない。

「最高……評議会……」

聞き覚えのある単語が次々と出てきたことで、はやては言いようのない不快感を抱き始めた。
そして。

この研究所が外部の局員に嗅ぎ回られているようだ。
いかに平和の為の行いとはいえ、一部の者には理解を得られないことのようなのだ。嘆かわしいことである。

とはいえ、もしもこの施設が存在が露見し、糾弾されれば些か面倒ではある。我等の研究はまだ世界から理解を得られるほど進んでいない。上層部が手を打つそうだが大丈夫だろうか？

この世界に存在した愚かなレジスタンスへの、管理局による総攻撃が開始された。

上層部の情報操作によるものだ。大規模な戦闘が起きたことでこの研究所のことを探っていた者の眼もそちらに向いたようだ。

更に喜ばしいことに捕らえたレジスタンスメンバーも研究用として回してくれるらしい。

女を使つての戦闘機人関連の研究は行き詰まったが、『ストレングス』プランは順調に進んでいる。もっともあの男はもう駄目だろう。筋肉の膨張により声帯が潰れ、思考も退化しつつある。まだ人としての自我を持っているのが不思議でならない。

「こんな……」

（平和の為に私達は戦った……！ 確かにあの人等も大勢捕まえた！ けど、それはあの人達と話し合いたからや！ あんな闘いはっかりやなくて、ちゃんと話し合って解決する為に……なのに……！）

「こんな……アホな事を……」

先程まで感じていた不快感が凄まじい怒りに変化するのを、はやては拳を握り、震わせながら感じていた。

「これが時空管理局の……人間のする事かぁ!!」

その怒りのままにはやては叫んだ。

シグナムも、ザフィーラもその叫びに答えることは出来なかった。

二人もまた同じ怒りを抱えていた為に……。

だからこそ。

「その通りだ……」

「……!!」

だからこそ返ってくる筈のない返事が囁れた声で返ってきたことに、三人は驚愕し部屋の入口を振り返った。

そこに居たのは、白髪白鬚に右手には竹刀袋、左手には花束を持った老人と、民族衣装に首飾りをした小さな少年が二人……。

「そこに残っている記録は……貴様等時空管理局の行ってきた真実だ……」

第五十七話 【降臨】（前書き）

夏休みも終わり、ようやくバイト先のハードスケジュールから解放された駆留です。

今回は次の話までの繋ぎ的な話になるので短めです（普段も長いわけではないですが……）。

その上話が若干飛びます。

なので読者様の反応次第では大幅に修正するかもしれないことをご了承ください。

ではどうぞ。

第五十七話 【降臨】

「何故……貴様等が此処に居る……!?!?」

突然現れた二人にシグナムとザフィーラは警戒心も露わにはやての前で構える。

「それは我等の聞きたいことだが……まあいい……。構えを解け。ここを戦場にする気は無い」

その二人に老人 林崎 當麻と少年 テイン・ダイロ
ンはたたき付けられる戦意などどこ吹く風で背を向け、歩き始めた。

「何処へ行く!? さっきのはどういう意味だ!?!」

「そのままの意味だ……。ここで殺し合いをする気は無い」

シグナムの問いにおざなりに応えながらも二人は足を止めず、部屋を出ていってしまふ。

「あつちは……外部庭園……? そんなとくに何の用があるんや?」

案内図の内容を覚えていたはやてが彼等の行き先に思い至り、二人の後を追う為に立ち上がった。

「私達はここが『ティアマト』に居る人の大半に関わりがある、つてメリオス・ベルリヒンデンに言われて来た」

「ふん……そういうことが……。
若造め……くだらんことを……」

「ここに居る、ってことは二人も」

「その問いに答える意味はあるのか？」

歩く二人の背に追いついたはやては恐れることなく、質問を続けていくが當麻が適当に答えるだけでティンは無言。シグナムとザフィーラは警戒を解くことなくはやての両脇を歩く。

「ッ………！　ここは………」

薄暗い廊下を歩くこと数分。その空間にたどり着くと同時に降り注ぐ光に手を翳して遮り、辺りを見回した。

円形の空間。中央部は色鮮やかな花が咲き、外壁部にはベンチが置

かれ、ここで働く者の憩いの場所だった区画。他の場所とは違い、ここだけは荒れることなく別世界のような空気を作っていた。中央に作られた花壇の道を當麻達は進み、はやて達が追っついていく。そして。

「これは……お墓……?」

花畑の中の開けた空間に安置された石。そこに文字が彫られているのを見つけてはやてが呟く。

「日本語?」

その内の一つにはやてがよく知る日本語が彫られた墓を見つけるが、はやてが近づくより早く當麻が墓の前に花束を置いて片膝をつき、ティンもまた墓の前で両膝をついた。

「……………」

手を合わせるでもなく、語りかけるわけでもなく。ただ、微動だにせずと膝をついた姿勢を維持し続けた。

「……………今から四年近く前になるか……………」

数十分。はやて達もどうすることも出来ず立ち尽くしていた時、突然富麻が口を開いた。

「僕の孫が唐突に姿を消した。孫の名前は林崎はやしだまき 風雅ふうが。どこにでも居る普通の娘……だった……」

「だった？」

「偶然か宿命か……。よく怪異に遭う子だった。一度目は神隠し。その際に出会ったのがこやつ……ティン・ダイロンだ」

「ッ……!!」

「もはや構うまい。大事の前の小事だ」

自分の名前を告げたことにティンが睨みつけるが、気にした風もなく富麻は喋り続ける。

「こやつと知り合ってから色々なことがあったが、最悪の出来事が起きた。ティンから風雅が地球から……あの世界から居なくなると聞いた」

「いったい何が……？」

「八神 はやて……貴様は高町 なのはと同じである世界の出身だつたな？」

「え……？ ああ、そやけどそれが」

「四年前から一度に二人の優秀な魔導師候補が見つかったのだ。ならばこう考える者が居ても不思議ではあるまい。“あの世界にはまだ第三第四の八神 はやてや高町 なのはが居るかもしれない”……とな」

「……！」

言われてはやては先程見たこの研究所の所長の日誌を思い出した。

「もしかして……戦闘機人の……」

「三年前この施設の存在を知ったメリオスから連絡を受けた儂等はここを訪れ……既に事切れていた風雅を見つけた」

當麻は思い出す。命の廃棄場のような場所で身体の半分を機械にされて打ち捨てられていた少女の姿を。

「その時メリオスからの誘いを受け、儂等は『ティアマト』に降った」

「本来なら……私一人でも貴様等人間を殺し尽くすことなど造作も無いんですがね……！ 惜しむらくは誓約に縛られたこの人の身だ……！」

そこでテインは立ち上がりながら振り返り、はやては始めてその少年の眼を見た。
金色に輝く瞳は、瞳孔が縦に……まるで爬虫類のような眼ではやて達を睨みつけた。

「言っておこう。レオーナ、ストレンド、メリオス……魔導師ではない儂より強い者は多い。
だが」

當麻も立ち上がって三人を振り返り。

「ここと殺し合いならば……儂より上は一人も居ない」

「……………！」

瞬間、細身の老人の身体から発せられた“視界”が歪む程の殺気にはやては戦慄し……………。

「では、さらばだ」

気がついた時には當麻達は三人の横を……………ベルカの騎士と守護獣であるシグナムとザフィーラの間合いをあっさりと通過していた。

「な……………！？」

「次に会う機会があるとすれば地球だろうが……………貴様等が来る頃には全てが終わっているだろう」

はやて達が振り返った時には二人の背は薄暗い廊下に消え、足音だけが虚しく、小さく響いていた。

「……………行くっ」

足音すらも消え失せた空間にはやてが口を開いた。

「この情報を可能な限り集めて地球に行く。地球にはなのはちゃんとフェイトちゃんも、ヴィータも居る。シャルとタリルも向かってる。皆なら何とかしてくれる筈や。今私達に出来るのは『ティアマト』の危険性を訴えてちゃんと戦力を集めて……そして、ここで眠る人達の無念を晴らす……！ 悲しみと憎しみを新しい悲しみと憎しみで晴らすなんてことは……絶対にさせん！」

はやては立ち並ぶ墓を振り返る。

自分が知らず、そして知ろうとしない間に犠牲になっていた人達に心の中で謝りながら……。

「行くう……二人共！」

だが彼女は知らない。決意固めるこの瞬間にも、彼女の生まれた世界で、滅びの秒読みが始められようとしていることを……。

海鳴市に張られた、異界と呼ぶべき結界の中で起きた闘いから数日。何もなく、ただ平穏を享受する者。ただ次の闘争に備える者。ただ

答えの見えない疑問に思い悩む者。
人々が様々な形で日常を費やしていく中で。

「さあ……始めて……終わらせよう」

夜の高層ビルの屋上。本来なら無人の筈の場所に三人の人影があった。

全身を、子供の落書きのように黒く塗り潰した影としか形容できない人間。

黒い軍服を纏い、黒い長髪を白いリボンを使い首と背中への力所を纏めた女性。

そして黒髪のオールバックに黒い軍服と、腰に日本刀を提げた壮年の男が右手を上げ、手に持っていたロザリオを屋上から大地へと放り投げた。

「結界……！？ 『ティアマト』の……！」

夜の道をフェイトと二人で見回っていたのはが最初に思ったのは
“こんな時に”だった。

数日前に桔梗と話をした時から彼女は次の闘いに幾許かの恐怖心があつた。

次に桔梗と会つたら。もし会つた場所が戦闘の真つ只中だつたら桔梗はどうするのか。もしかしたら自分に剣を向けてくるのか？

それは本人すら気付かない小さな感情のうねり。その小さな恐怖心が僅かに次の行動に出ることを躊躇わせるが……。

「ヴィータに……クロノの話だとシャマルも来るらしいからまずそつちと合流して」

（結界内の全ての者に告げる）

聞き覚えの無い男の声が頭の中に響いてきたことで、躊躇つたことにも気付かないまま待機状態のレイジングハートを握り締める。

（一体……この人は……！？）

（この中に残つたということは魔導師や騎士……調停者

死

神と呼ばれる存在だと判断する)

それはホテルの一室で今後について話し合っていた一護達にも届いていた。

「なんだ……!?!」

「これは……『天挺空羅』か……!?!」

突然の結界の展開と、頭に響く声に驚く間にも、声は止まらない。

(我々の目的は“冥界の鍵”の取得と……障害となる者達の排除だ。三十分だけ待つ。三十分が過ぎてもこの結界内に不審な魔力が残っていた場合……この結界を解除し、この街を破壊する……!)

「……!」

「待て、一護!」

その言葉を聞いた瞬間、飛び出そうとする一護をルキアが制止する。

「なんだよ……!?!」

「恐ろくだが……我々がこの街で闘えるのはこれが最後だ。この後……少なくとも私と恋次は尸魂界に呼び戻される可能性が高い」

「……!?! なんてだ!?!」

「不用意に深入りし過ぎたのだ。奴らの警戒心が街や街に住む人間を人質にしてしまう程に……。」
だからこれ以上干渉が過ぎる前に

「今回は何とかなってもまた同じことになるかもしれない。だからそうなる前に俺達を下がらせて様子を見る……そう言いてえんだろ。けどよ……」

そこで一護がルキアを振り返る。

「それじゃ結局世界の危機はどうにもならねえ。座空町も危ねえ。まだ」

「今回は様子を見る、っという手もある。管理局とやらも戦力はあ
るのだし、護廷十三隊の考えも解らぬまま動けば孤立無援になるか
もしれんぞ?」

「けど……放つとけば管理局の奴らだって誰かが死ぬかもしれないねえ。暁にも言ったしな……誰も死なせねえ、って。あいつが考えてるような最悪の結果には絶対にさせねえ……！」

「……そうか……。ならば行こう。こうしている間にも管理局か『ティアマト』が動きだしているだろう」

「あ……！！？　おい、いいのかよ！？　さっきまで様子を見るとか言ってたのに……！？」

ルキアが笑いながら横に並ぶが、一護の詰問に今度は心外そうな表情を浮かべ一護を仰ぎ見る。

「たわけ！　我等は仲間だ！　その仲間が戦場に行こうというのにそれをぼつつとして見送る奴が何処におる！」

「それに……俺も連中には借りがあるからな。それも返さねえで、このこと尸魂界に帰れるかよ」

「怪我をしても僕が治してみせます……！　でも……やっぱり怪我はしない方がいいですし、気をつけてください」

ルキアに続けて恋次も一護の横に並び、花太郎も心配そうに声を掛ける。

「……………ああ、分かった」

三人の言葉を聞いてから、一護は海鳴市が見える窓に向き直る。

「それじゃ……………行くぜ!!」

海鳴市のそこかしこから魔力/霊圧の発生するのを彼等は感知した。

「ひやはは……………死神か……………。魔導師や騎士共よりも喰いがいがあり
そうだな……………!」

そう言ってレギオンは虫の羽音を響かせながら黒い霧のように掻き

消えていった。

「我が闘争と信念の神よ……同胞達の魂の安息の為に闘う我に貴方の加護を……。例えばこの身が七つの地獄を巡るうと……。戦友達の為ならば、この魂は恐れません」

静かに祈りを済ませたレオーナが鳥の翼を象ったペンダントを左手に持ち一振り。次の瞬間にはレオーナの身体を光が包み、白に灰色のラインカラーが入ったドレス。その上に銀色の胸当てや籠手、脚甲を纏う。

その肩にディザスタが掴まるのを確認するとレオーナは空中にその身を投げ出した。

「我が妻シエリン……我が娘ケイナ……もう少しだけ待っていてくれ……」

二十年も掛かったが……暫くすれば、私もすぐにお前達の元へ行く……」

一度だけ空を仰ぎ見たメリオスは直ぐに視線を海鳴市へ戻し、ビルから飛び降りた。

第五十八話 【戦火の風、暴食の闇】

SIDE Eーなのは

街の中の開けた道路の交差点。

そこでその人は日本刀を地面について立っていた。

「来たか……」

ゆっくりと顔を上げるその人の前にフェイトちゃんと一緒に降り立つ。

「時空管理局、高町 なのはです」

「同じくフェイト・T・ハラオウンです。

貴方は……『ティアマト』のメンバーですか？」

私達が名乗ってもその男性は無言。口を開かないまま、少しだけ顔を横に向けて

「お前も来ていたか……歓迎しよう、タリル・ヘイス」

男性を挟んだ反対側にもヴィータちゃんとシャマルさん、知らない男の人が着地するのが見えた。

「メリオス……！」

「こちらには魔導師しか居ないということは……調停者達は向こうか。私はハズレを引いたというわけか……タリル・ヘイス、貴様が居るだけまだ救いだ」

「……！ コメット！」

二人で会話を進める間にも黒い服を来た男性は刀を抜き、シャマルさんの隣に居る男性がその手に青いグローブを展開し、その周りに八つの円盤が浮遊した。

（えっ……と……？ 一体何が ）

（聞こえてる！？ なのはちゃん、フェイトちゃん！？）

（シャマルさん！？）

状況についていけなくなってきた時、シャマルさんから念話が入ってきた。

（ヴィータちゃんにはもう話したけど、こっちのタリル、って人は数日前の任務で一緒になった人で、あの黒い服の男はメリオスといつて『ティアマト』のリーダー格よ……！）

（……！ この人が……！？）

（それにメリオス……って……メリオス・ベルリヒンデン！？ 二十年前に起きた“冥界の鍵”関連の関係者の人じゃ……！？）

フェイトちゃん言葉で、クロノ君が言っていた二十年前の事件を思い出した。

でも……その人がどうして……！？

「まっ……待ってください！」

とにかくあの『ティアマト』のリーダーが目の前に居るなら話を聞けるチャンスだった。

「高町 なのはか……今は貴様に用は無い。この男との決着をつけてから相手をしてやる。それまで」

「貴方はどうしてこんな事をするんですか!？」

「質問の意味が解らんな……」

再び彼が振り返った。その目は静かで粗暴な感じはしないのに、何故か刺々しい圧迫感を伴っていた。

実際に見たことは無いけれど、噴火する直前の火山、っというのはいくら感じなのだろうか？

「貴方が時空管理局に在籍していたのは聞きました。その貴方がどうして『ティアマト』を創ってこんな戦いをしているんですか？」

「話したところで貴様等は信じまい……」

「話してくれなかったら何も分からないままです!」

ごく最近にも桔梗ちゃんとも似た会話をした。そのことが余計に悲しかった。

「闘っている最中に纏わり付かれても面倒か……」。

いいだろう……教えてやる。

私の闘いの始まりは二十年前の闘い……我が神より聞いたあの巨大魔法生物……メノスグランテ大虚だ」

「神……？ メノス……？」

管理局でも見たことが無い魔法生物の存在を知っている……。けれど……“神”……？」

「現れた大虚は街を、そこに住む者達を蹂躪した……。私の家も……愛する妻子もな……！」

「……！ それじゃ……でも、管理局は」

「それで終わると思うか……！？ あの事件を仕組んだのが管理局だとしてもか！？」

「仕組ん……だ……？」

「当時私は“英雄”などと呼ばれていた……。だが、それを妬む者も居る……。手柄というのは均等に配られるものではない……。この手で殺したそいつら自身が言っていた……」

そこでメリオスの声がどんどん低くなっていく。
けれど、それは決して意気消沈しているからではなく。

「そいつらは管理局の遙か上……最高評議会と結託し、一つの任務をでっちあげた……。複数の危険なロストロギアの輸送任務……。その途中一つのロストロギアを暴走させ、私への失点にしようとした……。」

だが、そいつらにも予期せぬ誤算があった……。
暴走の規模が余りにも強すぎ、“冥界の鍵”は遙か遠き世界と繋がり、大虚を呼び寄せ、街を破壊し、人々を、我が妻子を殺し、その責だけが当初の予定通り私に課せられた……！」

さっき抱いた印象の通りに、彼の中に何かが溜まっていくのが解る。
でも　　！

「それだったらどうして罪の無い人達まで犠牲にしてこんな戦いをしてるんですか……！？　それに……管理局はそんな人達ばかりじゃない筈です……！　そういう人達に頼れば　　」

そう……この人はさっき事件を仕組んだ人達を手を掛けたと言った復讐の為に命を奪うのは良いとは思えない。でも……復讐を遂げたのならどうしてまだ戦っているのが分からなかった。

「私が真実を知った時、既に管理局に居場所は無く、誰もが私の敵

だった……。もつとも……。そのおかげで奴らの懐に入り込むのは簡単だった……。私を罠に嵌め、妻子を殺した奴らの喉に刃を突き立てていった……。！だがそんな事で終わりでは無い……。！最高評議会……。まだ奴らが居る……。！」

「そんな……。それで管理局を敵にして……。でも……。！そんな事をしても誰も喜ばない！亡くなった奥さんや子供がそんな復讐を望んでるんですか……。！？」

この人は止まることなく管理世界の人達を犠牲にしても復讐を続けようとしている。

そんな事……。誰であってもして欲しいとは思わない筈だ。

そう思った瞬間思わず口を開いて出た言葉は。

「……………」

一瞬にして虚ろになったメリオスの顔を見て、噴火寸前の火山に最後の一投を放り込む言葉だとうやく気付いた。

「くっ……。くっくっくっ……。ははははは……。よりもよって、彼女達を殺した貴様等管理局が言うか……。！」

彼が笑い始めた瞬間、その姿が消えた。

「消え」

「業罪を焼け……天啓……」

彼の姿を探す暇無かった。上からメリオスの声が響くのと同時に視界が白い光に包まれた。

「ッ……！」

それが何かを認識する前にフェイトちゃんと共に後ろに下がる。ある程度離れてから、ようやくそれが白い炎の火柱だと解った。周りを見渡すと、私達と同じように散開しながら距離を取るヴィータちゃん、シヤマルさん、タリルと呼ばれた男性が見えた。

「「管理局の面汚し」、「名ばかりの英雄」……それが私に張られたレッテルだ……」

その声に視線を上にする。

「なぜ誰にも話さなかったか……。人は自分の掲げた旗か、他人の掲げた旗か……。どちらを疑えと言われた時……。どうすると思う？ 私の時はあっさりと答えは示された」

白い炎の火柱。その前に白い刀身と柄、金色の装飾が施された綺麗な槍を手に私達を見下ろしていた。

「我が神はそんな愚か者共を一人残さず裁く……。妻を……。娘を殺した最高評議会も……。奴らを頭に置く時空管理局も……。時空管理局に全てを委ねる人間も……。そして一時とはいえ管理局に籍を置いていたこの私すらもな!!」

その目は今まで会ってきた誰よりも冷たくて恐ろしくて……。そして……。今にも泣き出しそう……。悲しい目だった。

S I D E I O U T

薄暗く閉ざされた結界の中を、感知した霊圧目差して一護達は建物の屋上を次々と跳び移っていく。

「やはり妙だな……この結界……」

「結界がどうした？」

その途中、辺りを見回していたルキアがボソリと呟き、その呟きが聞こえた恋次が振り返る。

「どう考えても個人が……人が展開出来るものとは思えん……。これだけの規模だと、どうしても結界の基点か、供給源になるものが必要な筈だが、街を見回った時にもそれらしき物が設置されている様子は無かった」

「単純に鬼道と術式が違うから、っていうのは？」

「こんな結界を展開し、あまつさえ維持出来る術者が居るとすれば、私達の手を負える相手ではないな」

「緑色で気持ちわりいし、地面から何か吸い上げてるみてえだよな……」

「なに……？」

「……………？ ルキア？」

二人が言葉を交わす間無言で聞いていた一護が思い付いた考えをそのまま口にした。

だが、ルキアはその一言を聞いた瞬間に足を止め　。

「吸い上げる……………？ 地面から……………？ そうか……………なぜ気付かなかつた……………！」

ビルから飛び降りた。

「ルキア……………！？」

飛び降りたルキアを追って一護と恋次も飛び降りていく。

「大地から……………微かだが……………だが……………」

「おい……………ルキア！ 一体どうし　」

「一護、恋次……………！ この結界の供給源は大地の霊脈だ……………！」

「は……………？」

霊脈、という聞き慣れない言葉に一護が首を傾げる。

「霊脈とはいわばこの大地が持つ霊力の流れだ。この結界はその霊力の流れに食い込み、そこから霊力を吸い上げることで維持されている……！」

「それって……なんかヤバイのか？」

「馬鹿者！ こんな形で霊脈を利用出来るということは、攻撃にも使用出来るということだ！」

全ての生きる者に力を与える大地の霊力を破壊に使われれば一体どれほどの被害が

どれほどの被害が出るか。

そう言おうとしたルキアの言葉は、突如響いた爆音と遠くに見える白い柱に遮られた。

「なんだ、ありや……？ 白い……炎……？」

「それに……これは異邦人の霊圧だけではない。僅かだが、死神の霊圧も混ざっている……！」

各々がその白い炎の柱に驚く中で。

「……！？ 危ねえ！」

一護が最初に“それ”に気付き、警告を発した直後、青緑色の風の弾丸が凄まじい速度で向かってきた。

「おらぁ！」

一護が背の斬月を素早く引き抜き、飛んできた青緑色の風の弾丸を斬り裂くも爆発。辺りを衝撃が舞い上げた粉塵で覆った。

「ッ……！」

その中からルキア、恋次、最後に一護が飛び出してくるが、風の弾丸の狙撃は止むことなく飛来し続けた。

「空気の塊か！？」

飛来する弾丸の正体に恋次が叫びながらも、撃たれ続ける風の弾丸を瞬歩を交えて躲しながら前進し、一護、ルキアも同じように躲し

ながら、風の弾丸が飛んでくる方向に進んでいく。

「……………」

ある程度進んだところで連射されていた風の弾丸が途切れ、三人は足を止める。
そして。

「その風貌……………調停者が……………」

「くははは……………魔導師や騎士じゃなくて良かったぜ……………奴らは食い飽きた」

左右にビルといった建築物が建ち並ぶ場所で、その二人を見付けた。一人は電柱の上に立ち、白いドレスの上に銀色の胸当て等を纏った黒髪の女性　レオーナ。

足元には青緑に輝く三角形の陣　ベルカ式の魔法陣を展開し、手には自身の身長を越える長大な突撃槍が握られ、槍の周りには青緑色の魔力に染められた風が渦巻いていた。

もう一人は道路を挟んだ反対側で何をすることもなく、ただ佇んでいた黒い人影　レギオン。

風ではためく黒いコート“らしきもの”と黒い服“らしきもの”、そして黒い帽子“らしきもの”……………唯一肌が見える筈の顔まで黒く染まり、その立ち姿は曖昧な印象を三人に抱かせた。

「てめえらも『ティアマト』か!？」

一護が斬月を構えながら問い掛ける。

「その通り……『ティアマト』の『槍』……レオーナ・ヴァーンハルト」

その問いにレオーナは胸に手を当てながら答え

「はははは……立場や名前なんてどうでもいいだろう……？ 食い合いにそんな肩書きはいらねえ……」

レギオンは虫の羽音が混ざった笑い声で一護の問いを一蹴した。

「先程の閣下の宣告通り……結界内に残った者を今後の障害と見做し……排除する……!」

「そういうこつた……大人しく」

次の瞬間レギオンが予備動作も無く跳び上がる。

「俺達“に喰われな!!”」

跳躍の頂点でレギオンが腕を振る。直後その腕から何十本の黒い剣が現れ、一護達目掛けて飛び出す。放たれた黒い剣は一護の周りに突き立ち、衝撃に舞い上がる粉塵が視界を遮る。

「ひひ……まさかこれで終わり」

「月牙……天衝!!」

レギオンが着地すると同時に霊圧を纏った斬月を振りかぶった一護が飛び出し、レギオンに霊圧の刃を放つ。

「何　ぬおっ!?!」

高速で飛ぶ斬撃はレギオンに躲す暇すら与えず直撃。その身体ごと近くの建物に叩き付けた。

「ふっ……!!」

後方に押し戻されたレギオンに代わって、レオーナが足元の電柱を蹴りつけ加速。一護との間合いを一気に詰めに掛かる。

「咆える！ 蛇尾丸！」

後少しで間合いに入る寸前、立ち込める粉塵を吹き飛ばしながら迫る刃を見て、レオーナは身を翻して着地。

「破道の三十三『蒼火墜』！」

更に追撃で放たれた蒼い霊弾を跳躍して躲し、近くにあった建物の屋上のフェンスに降り立つ。

「速い……！」

「ひいはははははは！！」

その鮮やかな動きにルキアが驚嘆の声を漏らした時、レギオンが叩き付けられた場所から剣、槍、斧、鎌といった刃を持った凶器の群れが無数に撃ちだされ、一護達に襲い掛かった。

「くっ……！？」

殺到する刃の群れを一護とルキアは左右に散って回避し、恋次は大きく跳躍してビルの上へと逃れた。

「はああああああ!!」

その恋次へ突撃槍を振りかぶったレオーナが飛び掛かった。

「ッ……!!」

振り下ろされる突撃槍を蛇尾丸で受け、押し返してから、横薙ぎの斬撃を放つも槍の柄で止められる。

「ひゃあはははは!!」

「JG……!!」

一方で一護も斬り掛かってきたレギオンと激しく斬り結んでいた。

「こやつ……一護の月牙天衝を受けても無傷なのか!？」

狂ったように二振りの剣を使って一護に斬り掛かっていくレギオンの動きを見て、ルキアがそう判断する。レギオンの動きはどう見てもダメージを受けている者の動きではなく、それどころか、レギオンの斬撃は徐々にスピードを増し始めていた。

(こいつの剣……腕から直接生えてるのか!?)

一護もまたレギオンの異常性に気付いていた。片手に一振りずつ持っているように見えた黒い剣は、しかし黒い人影の肘から先が刀身へと変化していたものだった。

「くっ……!」

考えるのは後回し。今は援護を優先すべきとしてルキアはレギオンに手の平を向け。

「ぐあっ!」

上から聞こえた声に振り返ると、腹部を押さえながらも恋次が地面に着地するのはほぼ同時だった。

「恋次……!?! ツ……! 『蒼火墜』!」

レオーナを牽制する為にルキアは恋次に駆け寄りながらも、左手をレオーナに向け蒼い霊弾を発射する。

「むっ………!」

レオーナも無理に追撃はせず、横っ跳びで霊弾を躲す。

「ひ…ひひ……ひははは!」

「いつまでも……笑ってんじゃねえ!」

力一杯に振り下ろされた右の斬撃を一護は斬月で受け、刀身を寝かせるように黒い剣を逸らし。。

「ぬ……!?!」

振り抜く勢いを利用して黒い剣の刀身を地面に食い込ませた。

「おおおおっ!」

地面から剣を抜くよりも、一護が斬月を振るう方が速い。
振るわれた斬月の切っ先は右の脇から左肩までを一気に斬り裂き

「痛えじゃねえか……ええおい……！」

虫の羽音が混じった不快な声を聞いた。

「……！！」

一護は咄嗟に斬月の刀身の腹を盾にするように構え

「ぐっ……！！」

直後、レギオンの胴体から槍衾のように飛び出した黒い槍の切っ先
が斬月を打ち据え、一護を吹き飛ばした。

「ッ……！！」

それでも一護は空中で身を翻し、着地する。

「もらった!！」

足を踏ん張って慣性を殺す一護に今度はレオーナが突撃槍を突き出した。

「くっ……!！」

「はああっ!！」

かろうじて槍の切っ先を逸らすも、レオーナはその流れに逆らわず、今度は石突き部分を前に突き出す。

「ちい　　づあ!！」

迫る打撃を今度は屈んで躲すもレオーナの動きは止まらずに回転しながら小さく跳躍。回し蹴りを一護の頬に叩き込み吹き飛ばした。

「ッ……!　　月牙　　」

「くるか……!　　ッ……!?!」

「破道の七十三」

なんとか体勢を立て直した一護が斬月に霊圧を溜め始め、レオーナも迎撃の為に槍に魔力を集めようとしたが、背後からもルキアに狙われていることに気付कि迎撃手段を変更する。

「……束ね束ねよ、破壊の吐息……！」

レオーナの足元にベルカ式の魔法陣が展開され、徐々に大きくなっていく。

「天衝……！」

「『双蓮蒼火墜』……！」

正面からは一護の斬撃。背後からはルキアの両手から放たれた二つの霊弾。

だが、二人の一撃はレオーナの足元　　ベルカ式の魔法陣を中に発生した巨大な空気の渦　　青緑色の竜巻に遮られた。

「嵐よ……！」

斬撃を、霊弾を打ち砕いても竜巻は止まらない。ますます範囲を拡げながら周りの建築物を破壊し、蹂躪していく。

「うあ……!!」

「うお……!!?」

ルキアが吹き付ける風に大きく後ろに弾き飛ばされて離れた家屋の壁に激突する。

一護も踏ん張りが効かず、その身体を上空高くまで持ち上げられ

「……!!? 風が止ま ……!!?」

「風神の鉄槌よ!!」

不意に猛威を振るっていた風が止まった。

そのことを疑問に思う間も無く、竜巻の余波に乗って勢いよく上昇したレオーナが、青緑色の竜巻を纏った槍を振りかぶった。

「おおおおおおおっ!!」

「……!？」

気合いと共に振り下ろされる一撃を斬月で受け止めるも、不安定な体勢だったことも影響して、その強烈な攻撃を受け切れずたたき落とされてビルの屋上に落下。それでも勢いは止まらず屋上の床を突き破っていく。

「一護!？」

「人の心配してる場合かあ!？」

その光景の一部始終を見ていた恋次が助けに向かおうとするが、その前にレギオンが立ち塞がった。

「どけえ!!」

立ち塞がるレギオンに恋次は蛇尾丸の刀身を伸ばして斬り掛かる。

「はっ! 単調

!？」

上段から降ってくる刃をレギオンは鼻で笑いながら横へ避けるが、伸縮した刀身を押し込むように戻しながら突進してくる恋次に気付いた。

「おらあー!!」

レギオンに一気に肉薄した恋次は反撃の暇すら与えずに蛇尾丸を横一文字に薙ぎ払う。

「…………!!」

右の脇腹に食い込んだ刃は、何かに引つ掛かることなく左の脇腹へと抜け、レギオンを上下二つに分ける。
そして。

「捕まえたぜ？」

「な…………!!?」

蛇尾丸の刀身をレギオンの左手に掴まれた。

痛みをまったく感じさせないレギオンに恋次が絶句する。彼が見ている前で切り離された胴体を繋ぐように黒い霧が浮かび、次の瞬間何事も無かったように再び合わさった。

「あばよ……！」

「……！」

目の前で完全に動きを止めた敵にレギオンは右腕の肘より先を黒い
刀剣へと変化させ振りかぶり。

「『蒼火墜』！」

「ぶお!?!」

瓦礫から這い出してきたルキアの放った霊弾に吹っ飛んだ。

「この……糞餓鬼が」

「縛道の六十一『六杖光牢』！」

レギオンが悪態をつく間にも、ルキアは二重詠唱で用意していた縛
道を放ち、六つの光の帯で拘束する。

「……………！ バインド……………！」

「舞え……………袖白雪……………！」

レギオンが動きを止めている間にルキアが斬魄刀を解放。純白の刀の切っ先で地面を四度突く。

「次の舞……………！？」

そして切っ先をレギオンへと向けた時、その身体から黒い霧が染み出し始め、六つの帯を侵食、消滅させた。

「ッ……………！ 白漣……………！」

それでもルキアは袖白雪の切っ先を突き出し、膨大な冷気の波を放出した。

「ちい……………！」

自由を得たレギオンはしかし、恋次が驚くような行動に出た。

「くそがつー!!」

跳躍して逃げたのだ。冷気の波はレギオンの足元を通過し、巨大な氷の壁を作り上げた。

(避けやがった……！ こいつ、冷気に弱いのか!?)

今まで斬られようが、霊弾に撃たれようがダメージを受けたように見えなかったレギオンが明確な逃げの手を打ったのを見て恋次がそう確信する。

「舐めんじゃ……ねえぞー!!」

ビルの屋上に着地したレギオンの背から黒い霧が羽のように拡がっていく。

「何をする気だ……!?!」

「……死ねっ!」

次の攻撃を警戒するルキアだったが、黒い霧の中から黒い雨

視界を埋め尽くす黒い刀剣の群れが自分目掛けて殺到するのを見て顔色を変える。

(躲せない……!?)

圧倒的な物量による範囲攻撃はルキアに防御も回避も許さずにその身体を串刺しにするだろう。

それでも身を固くして衝撃に耐えようとするルキアの前に瞬歩で恋次が陣取る。

そして降り注ぐ刃の群れに蛇尾丸の切っ先を向けた。

「卍解!」

高まる霊圧が渦を巻き恋次達を飲み込み、黒い刃の群れを次々と弾き飛ばしていった。

「ぐっ……!？」

「狒狒王……蛇尾丸!」

呻くレギオンの前で渦が掻き消える。そして恋次の周りで蜷局を巻き、大きく口を開けてレギオンを威嚇する狒狒王蛇尾丸の偉容が現れた。

「……………！ でかくなつたからなんだってん ……！？」

それでも怯むことなく突撃しようとしたレギオンのすぐ隣に瞬歩で移動してきたルキアが刀を構え ……。

「何を苦戦している……………！？ レギオン……………！」

離れた場所で氷の柱がそそり立ち、崩れていくのを見てレオーナはレギオンかメリオスか…………… どちらの援護へ向かうべきか迷い ……。

「卍…解……………！！！」

「……………！！！」

崩れ落ちたビルの残骸の中から黒い霊圧が溢れ出し、周りの瓦礫を吹き飛ばすのを見てどちらにも行けないことを悟る。

「天鎖斬月……………！！！」

黒い霊圧の放出が治まると、そこには黒い長刀を手にし、黒いコートに身を包んだ一護が居た。

「……………ふっ!!」

「……………!?!」

一瞬の静寂。気が付いた時には空中に居るレオーナの前で一護が斬月を振りかぶっていた。

(なんとというスピード……………!!)

その速力に驚くも、身体は迫る斬撃に反応して槍を構え、受け止めていた。

「ッ……………!!」

「くっ……………!!」

鏝迫り合いの状態から互いにバックステップで距離を取り。

「月牙
」

「風帝
」

片や黒い靈圧を。片や青緑色の風を得物に纏わせて二人は前の敵を見遣る。
そして。

「天衝!!」

「咆哮!!」

闇緑色の空に黒い光と青緑色の風が飛び散った。

外伝 斬魄刀異聞編一幕（前書き）

ようやく苦手な夏を抜けつつあることにホッとしている駆瑠です。

まず最初に、最近感想の返信が遅れたり返信出来なかったりしてすいませんでした。

変な言い方になるかもしれませんが、いわゆるスランプみたいな感じに陥り、なかなかこちらに手がつかない状態でした。

んで、気分転換に久しぶりに見たBLEACHのDVDを見て今回のネタを思い付き一日で書き上げました。スランプどこ行った……。

テンションが上がるまでもしかしたらこっちばっか書いてるかもしれません、お許しただけならありがたいです。見限りられても仕方がないですが……。

設定としては本編後になるのでいつの間にかいつら仲良くなったんだ？とか若干のネタばれ（これは極力無くしていくようにします）があるかもしれません。

なのでそういうのが駄目な方はここで回れ右をオススメします。

ついでに後書きで変なアンケートがあります。

付き合ってやるよ、という方はそちらも読んで答えていただけると

嬉しうです。

じほじほ。

外伝 斬魄刀異聞編一幕

「浦原さん……居ます?」

「はいはい……っと、暁さんじゃないですか。
どうしたんです?」

「爺さんに呼ばれて里帰り」

要約すれば私が浦原商店の前に居るのはそれが理由。

「里帰り……ですか?」

「そう……ただ、普通の穿界門は使えないかもしれないから行く気は無い、って言ったたら空座町の浦原さんのところに行け、ってさ」

「ふむ……まあ、そういうことでしたら構いませんよ」

で……わざわざ浦原さんに迷惑掛けておいていざ来てみれば……。

「執務で忙しいから数日程待て……って、ふざけてるのかあの爺さ

んは
「

「はは……まあ、仕方がないさ。元柳斎先生も忙しいからね」

しばらく浮竹さんのところでお茶を飲んでいた時、雀部君が業務のために会えない、っと伝えに来てくれたのだ。

「まったく……本当にしばらく尸魂界に足止めとはなあ……」

「まあまあ……良い機会じゃないか。京楽や卯ノ花隊長、碎蜂隊長にも挨拶してきたらどうだい？」

「卯ノ花さんはともかく……京楽に碎蜂はな……」

京楽はまだしも碎蜂に到っては短い間同じ隊に居た、っというだけで接点は殆ど無い。最近見たのを除けば四楓院 夜一にべったりだった印象しかない。

「そういえば……ここに来るまで他の隊士を見ただけ……何かあった？」

なんというか……斬魄刀を片手にウンウン唸ってる死神を良く見掛

けたのだが……。

「最近のことなんだが……斬魄刀の不調を訴える死神が増えていてね」

「斬魄刀の……不調？」

不調とは……風邪か？

「暁の斬魄刀は大丈夫かい？」

「少なくともここに来るまでにそういうことは無かったけど……」

そう答えてから傍に置いていた自分の斬魄刀を見下ろす。

（斬魄刀の不調か……）

コツン……コツン……と……。

その洞窟に靴音が響く。

洋風のコートを着た長身の男が階段をゆっくりと降りていく。

「お帰りなさい」

その男を桜色のリボンに子供の頭ほどもある大きな鈴を結び付け、肩から提げた少女が出迎える。

「新しい仲間だ。面倒を頼む」

男はその少女の肩に異様に伸びた爪をした手を置き、擦れ違った。

「結構カツコイイかも……っ……？」

少女の隣に飛んできた金色の小人が、入ってきた碧色の髪と、顔に十字状の傷跡を持った青年を見て呟やくも……。

「なによ……アンタ……？」

後から入ってきた人影を見て顔色を変えた。

「はん……！物を知らん奴だな……下げれ」

「なあつ……！？」

強圧的な言い方に小人が憤る間にも人影は階段を降りてくる。

暗がりから最初に見えたのは紅い厚手の革靴。次いで紅いアーミーコート。背中までまつすぐ伸びた髪も紅。そして見えてきた人影の顔。女性の顔を構成する唇、眉、やや細く吊り上がった眼、その瞳。白い肌を除けばその全てが赤よりも濃い紅。

長身を誇るその女性が少女と小人を押し退け階段を降りていく。その後ろはどう見ても、その空間に集った者達に興味を持っているように見えなかった。

十三番隊の隊舎。夜の帳が降りたその庭で斬魄刀を引き抜き、静かに、少しずつ霊圧を上げていく。

爺さんからの緊急召集を受けて浮竹さんとルキアが双極の丘に行つたのを見計らって斬魄刀の様子を見ることにしたのだ。

だが……。

(皇呀もか……！)

ここに来てからは些細な変化だった。霊圧に妙な違和感。どこか、斬魄刀の霊圧が遠く感じる。そして今日この時、唐突に斬魄刀の霊圧が消えるのに合わせて始解できなくなった。

「くそっ……」

自身の斬魄刀に何が起きているのかも解らず、イライラしながら刀を鞘に納めた時。

「……！？」

遠くから爆発音と、続けて警鐘が響いてきた。

「火事……！？ いや……これは……！」

離れた場所に僅かに見える火の手。そして……霊圧。

「ッ……!!」

十三番隊の隊舎から出て再度火の手が上がった場所を見遣る。

「誰だ!? 暴れてる !?」

駆け出そうとして、今度は巨大な氷山が現れた。
そして 。

「双極の丘……!!」

双極の丘で膨大な霊圧の放出と共に幾つもの光が灯って消えた。

「またか!?!」

更にそこかしこから火の手が上がるのを見て止めていた足を動かす。

「……………あいつか!?!」

死神達が走ってくる……逃げってくる向こう。二つの大きな鈴を桜色の布で結んだ子供が跳びながら向かってくる。その子供が布を振る度に鈴から火球が撃ちだされ、着弾し、爆発していく。

「ふん……!」

逃げてくる死神達の最前列の奴らと擦れ違った瞬間、瞬歩で跳び上がって、一気に子供の前に飛び出す。

「な……!？」

「はあああっ!」

驚いた表情を浮かべる子供の脇腹に右足を思いつ切り打ち込んで蹴り飛ばす。

「ッ……!？」

減速もせずに吹き飛び家屋に突っ込んでいく子供を見届けてから着地。

「ふんっ!」

「ちい!」

した直後に灰色の肌の、筋肉質な男が振り下ろしくる槍を
躲す為に再度瞬歩を使って後ろに下がる。

「はあっ!」

だが相手も瞬歩のような技で間合いを詰め、頭上で槍を回転させ、
振るう。

「せえい……!」

「むっん!」

横薙ぎの一撃を居合いで打ち払い、下段から迫る石突きを半歩下が
って躲そうとして顎に痛烈な痛みを“感じて”咄嗟に上半身を後ろ
に逸らす。

「……!?!」

眼前を赤い飾りを付けた石突きが通過していく。
一瞬だけ見えた槍の柄は鎖により伸びていた。

「はっはっ………！ やるな！」

（こいつ………！）

ギリギリで躲せば伸縮した槍の柄に顎を打ち抜かれるところだった。

「うおおっ…！」

男の動きは止まらない。一回転した槍を握り直して片刃の切っ先を突き出してくる。

「ぶっ…………！」

上半身を後ろに逸らした体勢では槍の刺突を躲せない。故にそのままブリッジのように後ろに両手をつき、反対に両足を振り上げて肘と膝を曲げ力を溜め。

「いやあ………」

「ぐっ……!?!」

溜めた力で身体を撃ち出し、曲げていた足を伸ばして男の腹にぶち込む!

「……!」

吹っ飛んでいく男を尻目に空中で回転して体勢を立て直し着地。

「破道の六十三……」

塀に突っ込み、崩れた瓦礫の下敷きになった男に左手を向ける。

「『雷吼炮』!?!」

そして極大の電撃を撃ち込もうとした左腕は。

「ッ……!?!」

振り下ろされる炎を纏った拳に、拳を叩き付ける。

「
」

一瞬だけ音が消えた。

「ぐあ……!!」

直後左腕に痛みが走ると共に弾かれ、身体が後ろに引き摺られていく。

「くそ!!」

左腕の痛みを無視して空中で身を翻して着地する。

(パワー負けしている……!?)

純粹に真正面から打ち負けた。それは斬魄刀を解放できない今、正面から立ち向かってでも私の勝ち目が薄いということだ。

「純粹な力技で負けてもまだ向かってくるか……。それでこそ余の

戦友だが……ここで決着をつけてもつまらんだだけだ」

それでも斬魄刀を構えて突撃しようとした私に紅い女が手を振りながら背を向ける。

その手から無数の紅い火花が飛び散り　　。

「これは……!？」

咄嗟に大きく後ろに跳び退く。直後、視界が紅く染まり、あまりにも強烈な爆音と爆風にまた後ろに吹き飛ばされた。

外伝 斬魄刀異聞編一幕（後書き）

はい、ここまで読んで下さった読者の皆様に感謝を。

アンケート……と言ってもさして重要ではないですが、一人の友人から「sts編も書きちまえよ」というような話になり、あくだこーだ言ってる内に「じゃあ、需要がありそうなら書く」みたいなことになってしまいました。

なので読者の方々に聞きたいのはただ一つ。

桔梗のsts編を見たい？

1 見たい

本編終了後、DMC番外編と一緒に書きます

2 見たくない
言うておきます

友人に「そんな物に需要は無かった」と

それでは次回の更新でお会いしましょう。

第五十九話 【神罰代行者】（前書き）

【槍】レオーナ、【群体】レギオンと交戦を開始した一護達。一方なのは達も【ティアマト】の首領、【太陽神】メリオスと対峙し、【ティアマト】との闘いを終わらせる術を知る。しかし、その前に立ち塞がる力はあまりにも強大だった……！

なんて書いてみたところで更新が遅れたことはごまかせないですね。スランプが予想以上に重かった……。なかなかボタンを押す指が進まないんですね。しかもバイト先が人数減ると、新人が入ってくるのとタイミングが被った為にやたらと忙しく時間も無いし……。

さて……ここで今回の内容について先に一つ。

ぶっちゃけなのは達の扱いが酷い、と思われる方が居ると思います（ってか居る）。

なので今回は原作キャラ、オリジナルキャラを問わず書く上で頭にあったキャラのコンセプト……とはちょっと違います、そういうのが三つあるので言い訳みたいに書いてみました。

迷いながらも目指す理想

揺るがず、染まらぬ信念

世界と天秤に比しても譲れない意地

です。誰がどれに該当するかはご想像にお任せしますし、扱いが悪くても終盤は……てな流れもある……かもしれないです（個人的にはちゃんと出せていても、読者様によつては相変わらず扱い酷いな、つて言われるかもしれないので確約出来ない……）。

後、感想にてアンケートに答えて頂きました読者の方々、ありがとうございます。需要があつたことに自分でも驚きです。それと、本来ならちゃんと返信すべきなのでしょうが、似た質問がたまに送られてくるのでここで書かせて頂きます。

愛染達や仮面の軍勢の皆さんは出ません！

一度感想への返信で書いたのですが、BLEACHの破面編がまさかの形で終わったので時間軸に若干？おかしなところが出来ています。

なので今はBLEACHのアニメオリジナルな物で書いてるので、そもそも登場予定そのものがありませんでした。

でも、ここまで何回も聞かれると空座町決戦も書きたくなくなるから不思議です。

今のところ書く予定まったくないんですけどね……。

長くなってしまい申し訳ありませんでした。

それでは本編をどうぞ。

第五十九話 【神罰代行者】

「それでも真実が知りたいのか？」

あの夕日の公園で隻眼の少女はそう聞いた。

「あの時言っただな？ 真実の知りたいならあの線を越えてこいと……」

持っていた竹刀袋は肩に巻き、取り出した刀を鞘から引き抜いて掲げた。

「躲すなら斬らせない……！ 誰かを守りたいなら死なせない……！ 闘う以上は斬る……！」

その刀から放出されていた魔力は凄いものだった。けど。

「お前が越えなければならぬのはあの線じゃない。この刀だ……！」

前に出すべき一歩を踏み出せなかったのは

「私は覚悟を決めた……お前はどうか？」

一歩を踏み出せば彼女は間違いなくあの刀を振り下ろす

「私に斬られるのが怖いか？ 私に仲間を斬られるのが怖いか？ 私を斬るのが怖いか？」

あの刀を見ただけでそれが解ってしまった。

「臆したのなら消える。相手の覚悟に恐怖したなら、それはお前に覚悟がないからだ」

刀を鞘に納めながら彼女が歩いてくる。

「別に恐怖することを責める気は無いがな……」

ただ、それだけを呟いて彼女は私の横を通り過ぎた。

最初に動いたのはタリルだった。

周囲を浮遊していた子機を二つメリオスに向けて飛ばす。

「正面からか。些か拍子抜けではあるが……」

そう呟いてメリオスは飛来する子機を叩き斬ろうとするが。

「むっ………!？」

メリオスの目の前まで飛来した子機は唐突に方向転換、距離を置いてメリオスを挟んで静止した。

「ルナティックプリズン!！」

『月光監獄』

二つの子機はそれぞれ円形の魔法陣を展開。そこから蒼色の稲光のようなものを発生させるとその中にメリオスを閉じ込めた。

「速い……!!」

「ふむ……結界の展開速度も強度も大したものだ。

だが、これが私に通用しないのは貴様自身が解っているのだろうか?」

「うるせえ! ぶつつぶせ、コメット!!」

『流星鉄槌』

メリオスを閉じ込めた結界の展開速度にフェイトが驚く間にも子機はそれぞれが魔力球を生成。プレス機のように勢いよくメリオスを叩き潰そうと加速した。

「なっ……!!? 待つ

」

その攻撃に驚いたのはなのは達だった。

明らかに殺気の籠った一撃は、どうみてもメリオスを殺すつもりとしか見えなかったのだ。其れ故に彼女達はタリルを止めようとしたが。

「カグツチ……!!」

その前にメリオスの手に握られた槍の切っ先に白い火球が生まれた。白い火球はどんどん肥大化。メリオスはまるで戦鎚のように振るうことで結界を破壊し、二機の子機を消滅させた。

「そろ……!!」

更にメリオスの動きは止まることなく、槍を頭上に掲げる。タリルも咄嗟に横へ跳ぶ。

「滅しろ……!!」

槍が振り下ろされ巨大な白い火球が放たれる。火球は地面に落ちても勢いを衰えさせず、コンクリートの地面を削りながらタリルの横を通過していく。

「ッ……!!」

距離があるにも関わらず、感じる熱気にタリルが呻く。火球は止まることなく直進し、ビルと激突。一階部分を飲み込み、倒壊させながら尚も進み、その進路上にある建物を残らず破壊しながら、彼方へと消えていった。

(なんて破壊力……！ でも、違う！ 破壊力よりむしろ……！)

見えなくなるまで凄まじい破壊を齎した火球を見送りながらフェイトは戦慄していた。

なのはのような砲撃魔法を得手とする者ならあれと同じか、それ以上の攻撃力を発揮出来る。フェイトが脅威と見たのはその発動速度だった。

多くの魔導師は強力な魔法の発動には相応の時間を要する。なのはのデイバインバスターはミッド式の砲撃魔法の中でも高い威力を持つが、フェイトのプラズマスマツシャーよりも“速さ”に劣り、それ故に誘導弾やバインド等の魔法にも一工夫が必要で、だからこそ強力な障壁を即座に展開したタリルの技量に驚嘆したのだが……。

「これで終わりではあるまい……？ 次だ……！」

メリオスはそのフェイトの常識の遙か上に居た。その槍には既に先程の火球が生まれ、顔はフェイトを見下ろしていた。

(連射まで……！？)

「カグツチ！」

フェイトがまっすぐ上に跳ぶ。その足元を白い火球が通過していく。

「遅い……」

「な……！？」

フェイトが視線を前に戻した瞬間、目の前からメリオスの声が響く。

「スサノオ……！」

槍が白い炎に包まれる。炎は槍の刀身を越えて更に伸び、それを下段に構え。

「ボサツとすんな……！」

その時、横からタリルがフェイトを抱えて、その勢いのままメリオスの前から離れ、振り上げられた白い炎の刃は空を切り。

「ッ……！？ 炎の斬撃……！」

道路に、ビルに白い線が走る。直後そこから白い炎が吹き出し、ビルを真っ二つにした。

「逃げるだけ」

「おりゃあああああー!!」

空中で離れ、身を翻して着地するフェイトとタリルを追おうとしたメリオスに今度はヴィータがグラーファイゼンで殴り掛かっていく。

「ふん……」

魔力を纏って振るわれる鉄槌をメリオスは少しだけ身を擦るだけで回避する。

「でええい!!」

「手緩い……」

手首を返してヴィータが放つ二撃目をメリオスは槍の刀身で受け流す。

「ちくしょ　　ぐっ!?!」

更に鉄槌を振り上げようとしたところで、メリオスは鉄槌を受け流した勢いを利用して槍を回転させ石突きの部分でヴィータの頭を打ち据え地面に叩き落とした。

「アクセルシューター！」

手をついて立ち上がろうとするヴィータに、メリオスは追撃を掛けようとするが、なのはの方から飛んできた数十発の誘導弾に阻まれ断念。その頭にヴィータがその場を離れシャマルの居る場所まで戻っていく。

「この数を同時にコントロール出来るのは称賛に値するが、判断ミスだ」

周囲を誘導弾で囲まれながらもメリオスは槍の切っ先を地面に向ける。

「タケミカズチ」

槍の切っ先から白い炎が溢れ、次の瞬間、メリオスを囲う壁のように燃え上がり、飛び交う誘導弾を全て焼き尽くした。

「ッ……！ あれだけの数を一回の攻撃で……！」

攻める手の悉くを上回るメリオスになのはを含めて全員が次の手を
思い付けずにいた。

（解っていたことですけどやっぱり強い……！　せめて“ブレイブ
”が使えれば……）

（“ブレイブ”……？　何ですか、それ？）

繋いでいた念話から聞こえたシャマルの呟きをなのはが聞き咎めた。

（魔導師の火力強化用の大型兵装なんですけど……大きくて、取り
回しが難しい代わりに複数のビットシステムを使用した単純な攻撃
力、防御力の強化にカートリッジシステムを応用した継戦能力の大
幅な向上を達成出来る……らしいんですけど……）

（らしい……？　でも、そんな凄いのがあるならどうして使わな
かったんですか？）

（とんでもない！　あんなのまともな神経の人には使えないですよ
！）

(え……?)

(大火力と強固な防御力を得た代わりに、それらの兵装の運用には高度なAIを備えたインテリジェントデバイスの使用は絶対条件！
起動自体も魔導師による外部からの魔力供給が必要ですけどその量は膨大で並の魔導師には起動不能！

その上技術力の限界をロストログアの解析から得たデータで補っているらしいんですけど、その技術から来る欠陥を別のロストログアの技術で補う。そしてまた出て来る欠陥をまた別の技術で補う！
そんな事の繰り返しでいつオーバーロードを起こしても不思議じゃない！
っていうような欠陥品なんです！
しかも兵装自体が巨大なせいで持ち出すだけでも一苦勞でした！)

(でも……それじゃどうして持って来たんですか?)

早口に捲し立てるシャマルになのはが当然の疑問を上げるが……。

(補給物資だ！
とかで陸の人達に強引に持ってこさせられたんです！
おかげでこっちはどれだけ苦勞したか……！)

よほど良い思い出が無かったのかシャマルの早口は止まらなかった。

（そういうことですから“ブレイブ”は使うにはあまりにも危険なんです！　なんとか現状の戦力で戦うしか　　）

「なのは、危ない！」

「え！？」

「愚鈍……！！」

シヤマルの念話に重なるようにフェイトの声が響き、なのはの目の前にメリオスが現れ槍を振りかぶった。

「うおおお！！」

「コメット！！」

その刃が振り下ろされる寸前、ヴィータがグラーファイゼンを構えて突撃し、タリルが円盤状の子機を飛ばす。

「ッ……！！」

横薙ぎの一撃をメリオスは屈んで躲し、ヴィータの脇から突然飛び出してきた子機を上を跳び上がることで回避する。

「ビビったなら消えろ！ 邪魔だ！」

「な……！？ てめえ、いきなりなに言いやが」

「……！ 怖くなんかありません！ いけます！」

タリルの言葉にヴィータが憤慨して文句を言いかけるが、なのは自身も解らない感情から来る衝動が逸早く反論した。

「なのは……？」

「いや……その男の言う通りだ。小娘……貴様は消えろ」

普段と違うように見えるなのはの様子に、フェイトは訝しげに見遣るが、続くメリオスの声に視線を上にする。

「貴様のさっきの攻撃は悪手だということくらい解る筈だ。本来なら味方が作った隙を利用して必殺を見舞う時だろうが。何かしら焦

「つてもいいるのか？」

「そんなことは」

「私は貴様等の倍以上は生き、そして闘い続けてきた。未熟者の貴様等の精神状態など少し戦えばすぐに解る」

「なのはの言葉をてメリオスが遮る。」

「今の貴様等を屠るなど容易いが……このままではつまらん……。いいだろう。少しだけ貴様等の士気を上げる事実を教えてやるう」

「事実……？」

「我等【ティアマト】の闘い……この私を倒せば終わる……っと、言ったらどうする？」

「……！？」

「……言っても【ティアマト】は復讐者の集まりだ。個人の闘いを止めることは出来んだろうが……世界の崩壊は阻止することが出来るぞ」

明らかに顔色を変えるのは達にメリオスは続ける。

「我等【ティアマト】の目的は次元世界の完全消滅による時空管理局の壊滅。その為に必要な物が四つ」

そう言つてメリオスは左手の指を四本立てる。

「一つは神降臨の為の儀式の祭壇。それがこの結界。この世界だ。これは隔離結界であると共に“神”の力を増幅する補助装置でもある」

まず人差し指を折る。

「次は【門】。“神”がこの世界へ来る為に通るのに必要な【門】だ。もつとも、この【門】はストレンジが身命を賭して護っている。貴様等では奪つことは出来ん」

次に中指。

「そして【門】を開く為の“鍵”。これは紅の剣を持ったあの娘が持っているようだ……今この場にあの娘が居ないところを見ると

貴様等との仲は良くないようだな」

そして薬指。その時なのはが一瞬顔を顰めたがメリオスは無視した。

「そして最後は呼び水。“神”が道標として残した力。それがこれだ……！」

最後に小指を折ってからメリオスは白い槍をなのは達に見せ付けるように掲げた。

「この槍をこちら側から向こうへ……そして“神”が向こうからこちら側へ力を打ち付けた時……“神”はこの次元世界に降臨し、世界の全てを焼き尽くす……！」

「つまり……お前を倒してその槍を奪えば……てめえの目論みは潰える、ってわけだ」

メリオスを睨みつけながらタリルが構える。その横ではヴィータとシヤマルがそれぞれの構えでメリオスを見上げていた。

「そうだ……！　だが、お前達に出来るか？」

「出来るかどうかじゃありません……。
やってみせます！」

フェイトがバルディッシュを振りかぶり、なのはがレイジングハートをメリオスに向ける。

「ようやくやる気になったか……。結構……では始めようか……！」

「メテオカノン……！」

メリオスが槍を構えるのと、タリルが周囲に浮遊していた子機で円陣を組み、砲撃魔法を放つのは同時だった。

「ふっ……」

「うりゃああああ……！」

身体的位置をずらすだけで砲撃魔法を躲すメリオスにヴィータが突撃。一気に間合いを詰めてグラーフアイゼンを振り下ろすも、やはり僅かに身体的位置をずらして躲してしまっ。

「クラーヴイント……！」

グラフアイゼンを振り抜き、ヴィータが下がるうとする一瞬にメリオスは斬り掛かるうとするが、ヴィータを迂回して飛んでくるワイヤーに気付き跳躍する。

『Blitz Rash』

「はああああ!!」

跳躍したメリオスを追ってフェイトが高速移動魔法を発動。その距離を瞬時に零に変え、メリオスの背後からバルディッシュを振るう。

「ふっ……!!」

「ッ……!!」

迫る一撃にメリオスは槍を回転させ石突きでバルディッシュを弾き、続けて向かってくる刃をフェイトはスウェイバックして回避し、再度高速移動魔法を使い、一気に間合いを離す。

『Restrict Lock』

離れるフェイトに振り返りながら槍に白い炎を纏わせたメリオスだが、その動きは突然現れた桜色の輪に両手両足を拘束されたことで強制的に阻止された。

『Load Cartridge』

「デイバイン」

「最大火力で機先を制し、波状攻撃で脚を止め、再び最大火力でトドメか……。」

「いいぞ……さつきと違って悪くない手だ。だが甘いな……！　クシナダ……！」

「なっ……！？」

砲撃形態へと移行したレイジングハートに魔力を集束させるのはだったが唐突に白い炎に包まれたメリオスを見て驚愕の声を上げる。

「“神”より与えられた力は、貴様等魔導師の常識を超越している！」

白い炎が消える。そこには炎でバインドだけを焼き尽くし、自由を

得たメリオスが槍の切っ先に白い火球を発生させていた。

「その身で思い知れ、神の力を！ カグツチ！！」

「ッ………！ デイバイン………バスター！！」

白い槍を頭上で掲げ、振り下ろす。放たれた火球はなのはの砲撃魔法と正面から衝突し。

「………！？」

拮抗すら許されず、桜色の光が砕かれた。

（さっきよりも威力が上がってる！？）

砲撃魔法の発射と、デイバインバスターが競り負けたことにより生じた反動で動けないなのはに壁のように白い火球が迫ってくる。

「なのは！！」

膨大な熱量がなのはの周りを焼き始めた時、高速移動魔法で傍に現

れたフェイトがなのはを抱えて火球の射線から離脱した。

「……………」

間一髪の差で火球はなのはの居た場所に落下。しかし安堵する暇も無く、落下した際に生じた熱と衝撃波がなのは達に襲い掛かった。

「ちい……………！ コメット！」

『防壁』

なのはとフェイトが衝撃波に対し、二人合わせて防御魔法を発動させようとしますが、それより速くタリルが二人の前に立ち防御魔法を展開した。
だが。

「ぐ……………く……………！ つあ！？」

あまりにも強烈な破壊力は、その抵抗を打ち碎きタリルを吹き飛ばした。

「タリルさ

」

「かはっ……………!?!」

自分達の横を凄まじい勢いで横切り瓦礫に突っ込んでいくタリルを思わず振り返るのだが、小さく聞こえた悲鳴にもう一度振り返る。

「ッ……………!?! シャマルさん!?!」

振り返った視線の先には肩から脇まで斬り裂かれ血を流し、前のめに倒れるシャマルと、槍を降り抜いたメリオスが居た。

「シャマル!?! てめえええええ!!」

『Explosion! Raketen form!』

それを見たヴィータが激昂し、アイゼンを変形させる。

「少し本気を出しただけでこのざまか……………」

グラーファイゼンが噴き出す噴射炎の加速に任せてヴィータが突撃

していく。

「うああああああ!!!!」

「だが……それも全ては“神”の強大な力を物語っているだけ」

ヴィータが鉄槌を振り下ろし、振り向いたメリオスが槍を薙ぐ。
激突は一瞬。

「むっ……!?」

金属がぶつかりあう甲高い音と共にメリオスの槍が弾かれる。

「おおおおお!!!!」

それを好機と見たヴィータがその場で一回転。噴射炎の加速に遠心力を交えた一撃をメリオスの胴目掛けて振るう。

「ッ……!!!!」

だが、必殺と思えるその一撃すらも。

「何を驚く？ 私とて元ベルカ式の騎士だ。魔法の一つや二つ、使えるのは当然だろう？」

鉄槌の前に翳した左手。その前に形成されたベルカ式の三角形の魔法陣に阻まれた。

「あまりにも貧弱なパワーだ」

メリオスが横一文字に槍を振り、爆発。白い炎と爆煙を撒き散らす。

「……………!？」

爆煙の中からヴィータが吹き飛んでくる。小さな身体は一度地面に叩き付けられても勢いが消えることなく何度もバウンド。その際にグラーファイゼンも手から離れ宙に投げ出された。

「そんな……………」

瓦礫に激突し、動かなくなったヴィータを見てなのはが呆然と呟く。

「残り二人か……」

メリオスがなのは達を見て一步を踏み出す。

「うおおおおおおおー!!」

その瞬間瓦礫を吹き飛ばしてタリルがメリオスに突進し、槍を持た右手に組み付いた。

「貴様……!?!」

「今だ! やれえ!!」

振りほどこうとするメリオスに必死にしがみつinaながら、フェイトと目が合ったタリルが叫ぶ。

「……!」

『Load Cartridge。
Haken Form』

フェイトはバルディッシュのカートリッジをリロード。バルディッシュを戦錬形態に変形させ高速移動魔法を発動。一気に間合いを詰めて刃を振り下ろす。

「ふん！」

メリオスはフェイトに向かって左手を翳し防御魔法を発動。金色の刃を防ぐ。

魔力と魔力の接触が激しい火花を散らす。

「はあああああ！！！」

強大な力を発揮する白い槍をタリルが抑えている。訪れた好機にフェイトはバルディッシュを握る手に力を込め更に刃を押し込み

「…………タケミカズチ…………」

メリオスの足元から白い炎が立ち上った。なのはの誘導弾を焼き払った先の技とは規模の違う巨大な火柱が燃え上がり、フェイトとタリルが吹き飛ばされていく。

「お前達の敗因は簡単だ」

膨大な熱と破壊を齎す白い火柱が消えメリオスが歩み出て来る。

「貴様等は私がどうい存在が解らなかった。故に一介の魔導師や騎士として闘うしかなかったが、私は違う。この力を授かってからの十年間、貴様等魔導師を殺すことだけを考え研磨し続けてきた。復讐心で己を満たしたタリル・ヘイスもその力は“神”に及ばなかった」

語りながら一瞬だけ倒れ伏したタリルに視線を遣る。その目は余人には窺い知れぬ複雑な感情が籠められていたが、すぐになのは向き直った。

「そして貴様等に足りぬのは覚悟だ」

一歩一歩となのはとの距離を縮めていく。

「義務感だけでは何も出来ん。出来る者が居るとすれば、それは義務の為に歯車と化した人間だけだ。そして貴様等にはタリル・ヘイスのような強い感情も無ければ時空管理局の為に歯車になる覚悟も無い」

メリオスが脚を止め槍を掲げる。

「見えるか？ この刃に籠めた貴様等を殺す覚悟が」

（私は覚悟を決めた……お前はどうか？）

それはなのはに一人の少女を思い出させ。

「さらばだ……秩序に踊る人形よ」

メリオスは刃を振り下ろす。

カシャン……

と……寸前に背後から響いた音に槍を止め、振り返った。

「白い……炎……」

メリオスから離れた……戦闘の影響で瓦礫の山と化した道の中心に……。

「それに……斬魄刀……か……」

隻眼の少女は降りた。

第六十話 【漆黒の刃VS暗黒の風】（前書き）

「誰かが死んだ者の為に闘わなければ、死んだ者は誰も笑ってくれない」

「亡くした者の為に強くなる。今度こそ失わない為に」
過去への無念と贖罪を槍に。現在いまと未来への信念を刃に込めて、一護とレオーナは激突し、その死闘は一つの決着へと到る。

一方、強大な力で圧倒せんと迫るメリオスに桔梗は苦戦を強いられる。刻一刻と劣勢に陥る戦況を打開する為に、桔梗は自身の切り札の解放を決意する。

活動報告で使った次回予告を少しだけ変えて載せてみました。

そして文章量が過去最多を達成。

毎回これぐらい書ければもう少し話の展開も早いんでしょうけどね……。

第六十話 【漆黒の刃VS暗黒の風】

辺りを見回す。

確か、この辺りは大小を問わず多くのビルが建つ、街の交差点だったはず。

にも関わらず、三十分足らずの戦闘で周辺一体は瓦礫の山と化し、ところどころに白い炎が燃え盛っている。

そして瓦礫の山に倒れ伏す金髪の女性と赤い服を着た子供。子供の傍には輝が入り、一部が砕けている戦鎚が落ちている。

そこから離れた場所にもフェイト・テストロッサが、そして金髪の男が倒れ、砕けた戦輪らしき武器が複数転がっていた。

「よく来たな……歓迎しよう、調停者」

そして最初は高町　なのはと対峙する形で。今はまるでこの瓦礫と白い炎の国の王のように、黒い軍服の男が両手を広げた。

「来るならもう少し後だと思っていたが……このタイミングで来るとは意外だ」

「何が言いたい？」

「この者達を助けるつもりなら最初から一緒に行動していた筈。だが、闘いが始まって来なかったということは貴様とこいつらに同

盟は無かったということだ。
ならば狙うは漁夫の利。互いが闘い消耗したところに攻めるのが当然だと思うが？」

ああ、成る程……。確かにただ倒すだけならその方が良いでしょうが……。

「お前には聞きたいことがあってな。だから不意打ちの絨毯爆撃は遠慮してやっただけだ」

「ほう……聞きたいことと……？」

一度目を閉じて昔を思い出す。

死神としての最後の任務。ある山岳地帯に現れる白い炎の調査。そこにたどり着いた私と仲間を襲ったのは、まるで白い炎が白い甲冑を纏ったような……。死神とも虚とも違うあまりにも不吉な存在。

「是が非でも聞かせてもらおう。お前は百年以上も昔に尸魂界に存在していたか？」

「ソウルソサエティ……？ 聞いたことも無いな」

嘘かどうかは……表情だけでは判断不能か。

「なら……それは“お前の炎”か？」

「……………質問の意味が解らんな」

「そのままの意味だ。この白い炎はお前が生み出しているのか？」

「そういうことか……。もちろん否だ。これは私の力ではない……………」

私の問いに男は白い槍を見せびらかすように掲げる。

「これは“神”が私に与えた力！ 十年前、ただ闇雲に時空管理局への復讐を願っていた私に、“神”は【祭壇】と【門】と、“神”の呼び水となるこの力を授けてくださったのだ！！
“神”の同胞により異界に封じられたその身を解放し、間違った理に支配された世界を救えとな！！」

白い炎。あの山岳地帯に封印されたという大罪人。

「成る程な……………」

偶然かもしれない。ただ同じ色の炎を使っているだけかもしれない。ただ仮説の域を出ないまでも、一つの仮定を持って考えると、今までの疑問を一気に解決出来る。

四十六室の言う大罪人はあの山岳地帯で異世界に封印された。

そう考えれば時空管理局への殺傷を前提とした接触にも納得がいく。要は恐れているのだ。彼女達時空管理局を通してその大罪人が戻ってくるのを。

「何を納得している？」

「いや……もしも私の考えている通りなら……私がお前達【ティアマト】と闘う理由が一つ増えたなと思っただけさ」

ムカつく……そう、極めて不本意ではあるが……。
もしも私の考えている通りなら、この男の言う“神”がこの現世に戻って来たら、それこそ世界の為に死んだかつての仲間の犠牲は無駄になる。

「そうか……丁度よかった。今しがた天啓からも“神”のお言葉があった。

真実に近付きかねない貴様を消せとな……!!」

男が白い槍を頭上で回転させ、両手で構える。

「高町　なのは！　他の連中を連れてここから離れる！　巻き込まない自信はまったく無いぞ……！」

「な……！？　待つて、桔梗ちゃん！　この人は強い……私も一緒に」

親指で刀の鍔を少しだけ押し出す。
警告はした。後の行動は彼女次第。

「悪いが……“神”より殺せと言われた以上……小娘であっても手加減できんぞ……？」

「安心しろ……まだ少し聞きたいことがあるからな……。ちゃんと手加減してやる」

高町　なのはが杖を構えた時、カツン、っと音がした。

「……！」

瞬間瞬歩で限界ギリギリまで跳躍する。
巻き込まない自信は無い、とは言ったが、それでも巻き込む危険性は可能な限り避けたかった。

「ッ……!!」

そして気が付けば男も瞬歩に似た技で私の目の前まで上がり槍を振りかぶっていた。

「ふっ……!!」

「シィ……!!」

振り下ろされる槍に短い気合いと共に鞘を叩き付け弾く。

「くっ……!!?」

「はぁ……!!」

弾いた反動で鞘を引いて、柄を握り、居合い。

「ふん！」

抜き放った刃は、しかし私と同じように弾かれた反動を利用して回転される槍の石突きに打ち上げられた。

「遅いぞ……！」

男の動きは止まらない。刀を弾いたのを隙と見たか、今度は身体を回転させ、横薙ぎの斬撃を放ってくる。

「ッ……！」

右から来る斬撃を横目で意識しながら、上半身を捻りつつ後ろに傾け、斬撃を躲す。そして霊子の足場を踏み付けてながら一回転。遠心力を混ぜた一撃を振るうも、刃が届く寸前に瞬歩で躲される。

「もらった！」

脇を抜けて背後に回り込んできた男が刃を振り上げた気配がする。

「無駄だ！」

相手の斬撃を感じる“痛み”から予測して逆手に握っていた鞘を後ろに突き出し、軌道を逸らす。

「なにつ!?!」

「せえい……!」

更に槍を弾いた鞘を振り抜き、半回転。男の脇腹に回し蹴りを叩き込む。

「ちい……!」

だが、その一撃は翳された左手に形成された三角形の障壁に阻まれた。

「はああああ!」

「……!?!」

それでも動きを止めずに軸足で霊子の足場を蹴り付け、その勢いで駒のように回転しながら男の頭部に脚を振り下ろす。

「ぬぁ……………！」

男も槍を持った右手で防御してくるが、防御ごと押し切つて蹴り飛ばす。

「ふっ！」

霊子の足場に着地してから近接戦の邪魔になりそうな鞘を放り捨てる。

あの白い槍が生み出す炎も驚異なのだろうが、その使い手である男の槍捌きも相当なものだ。

槍という武器の最大の特徴はそのリーチと、回転を活かした波状攻撃だ。槍は刀身だけでなく、石突きの部分も打撃武器として使える。当然その攻撃速度は剣を二度振るよりも遙かに速い。瞬歩で攪乱しながら、という戦法も無くはないが、あいにく私の瞬歩はそれほど速いとは言えない。

真正面からその波状攻撃に追い付くにはこちらも斬術だけでなく白打も使った波状攻撃しかないし、鞘を持っていては殴れない。

故に鞘を捨て、敵目掛けて飛び出す。

「ッ……………！ 大した膂力だ……………！」

間合いに踏み込み、刀を一闪。上段からの斬撃は相手の槍に受けら

れる。

「スピードはそれほどでもないが……闘い方が上手いな……！ 加えて反応速度も並ではない……！」

徐々に槍を押し込んでいく。だが、そんな状態でも余裕があるのか男が口を開いた。

「このまま斬り合いを続けられればいずれ私が敗れるか……だが！」

更に一步押し込んだところで男は瞬歩を使って後ろに下がっていく。僅かに遅れて私も瞬歩で後ろに下がり間合いを取る。

「“神”より賜りし力はこの程度ではない！」

男が槍の切っ先を向けてくる。その刀身に火球が形成されたかと思うとみるみる巨大化していく。

「滅しろ！ カグツチ！」

一度槍を掲げ、振り下ろすと巨大が火球が轟音を発して迫ってくる。

「破道の六十三『雷吼炮』！」

それに対して左手を火球に向け、極大の電撃を収束、放射する。

「ちいつ……！」

しかし放った電撃は拮抗すらせずに、火球に飲み込まれるように消滅し、瞬歩での回避を余儀なくされる。

「……！」

攻撃を回避する間に相手は次の行動に移っていた。

男を取り囲むように白い炎で形成されているのだらう、八本の巨大な槍が浮遊し。。。

「ヤタノオロチ！」

男の号令の元、一斉に撃ち出され、それぞれが蛇のように独特の軌道を描いて向かってくる。

「天涯を焼き討て！ 皇呀！」

即座に斬魄刀を解放。真っすぐ飛んできた一発目に皇呀を振り下ろすが。

(重い……！)

一発辺りに籠められた霊圧、熱量が凄まじく、破壊できない。

「魔刃炎撃覇……！」

皇呀に炎を纏わせて思いつ切り振り抜く。それでどうにか一発目を破壊するが、続けて二発目、三発目と別々の軌道を描いて向かってくる。

「せいっ！ はあっ！」

皇呀に炎を纏わせたまま右、左と向かってくる炎の槍を打ち砕き、瞬歩で一気に高度を落とし生き残っていたビルの屋上で着地する。

「ッ……！」

着地し、振り返りざまに背後に迫っていた炎の槍に皇呀を振るって砕く。

「つええい！」

更に頭上から来る槍を皇呀を振り上げて破壊し、隙をつくように屋上を這うように向かってきた槍に皇呀を振り下ろす。

だが、最後の八発目が微妙に遠い。刃は届かないが、体勢を立て直す暇が無いくらいに近い絶妙なタイミングで八発目が迫ってくる。

「飛刀刃！」

その八発目に向けて皇呀を振り、纏わせていた炎を飛ばす。炎の斬撃は炎の槍と激突し、相殺。互いに爆発して消えた。

「アマテラス!!！」

男の姿を捜そうとした時、横から凄まじい靈圧と熱を感じ、振り向く。

そこには白い槍を突き出す男の姿があった。そして白い槍の切っ先から炎が溢れ、爆発。まるで巨大な波のように向かってくる。

「炎城壁！」

皇呀を振って炎の壁を生み出す。
だが、炎の波は壁すらも飲み込んで白い炎は視界一杯に拡がり。

「魔皇喝采！」

皇呀を振り下ろし紅い火花を炎の波へ放り込み爆発させる。
限界まで破壊力と爆風を絞った一撃は炎の波に穴を空け、すぐ近くを膨大な熱が通過していく。

「ッ……!!」

それらを無視して、爆発で出来た僅かな空間に突撃し、すり抜ける。

「くおおおおお!!」

「はああああ!!」

白い炎の波を抜けた先。そこで既に白い槍を振り下ろさんと構えていた男に皇呀を振り上げた。

SIDE1 一護

「ぐう……!!」

振り上げた斬月が青緑色の風を纏った槍に弾かれ、反動で身体が後ろへ下がってしまう。

「いやああああ!!」

僅かに間合いが開いた瞬間、レオーナが馬鹿でかい槍を突き出してくる。

一度だけでなく何度も。引く瞬間はかろうじて見えるが、刺突を繰り出す瞬間は殆ど見えない猛烈な連打。

「ッ……!! くそっ……!!」

それでもギリギリで槍を弾くが、一撃の重さ、リーチの差も相まっ
て反撃する余地がまったたく無い。

「ッ……！？」

不意に刺突を弾こうとした斬月が空を切った。外したと一瞬思った
が、レオーナが切っ先を向けたところで動きを止めたせいだった。
そして気付いた時には足元に青緑色の三角形の光が浮かび、槍にも
青緑色の風が渦巻いていた。

「風よ！」

「くっ……！？」

次の瞬間胸に凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされた。

「くっ……！？」

それでも無理矢理身を翻して後ろに下がりながら霊子の足場に着地
する。

「旋風よ……！」

更にレオーナが槍を突き出すと、渦巻いていた風が竜巻のようになりながら向かってくる。

「月牙……天衝！」

向かってくる竜巻に対して霊圧の斬撃を飛ばす。

放った斬撃は竜巻と激突して、大気を震わせながら竜巻を斬り裂いた。

「なっ　　ぐっ!？」

斬撃は軌道を逸らしながらもレオーナの肩を掠め、衝撃でレオーナを吹き飛ばした。

「はぁ……はぁ……ふう！」

すぐ下にあったビルの屋上に突っ込んでいくのを見てから乱れ始めた呼吸を整える。

(強え……)

それが率直な感想だった。

距離が離ればスピードも軌道もバラバラに放たれる風。近付けば見た目からは想像も出来ない軽快さで振るわれる槍。おまけにどれだけ攻めても体勢を崩さないどころか、ほんの一瞬の隙に攻撃に転じる判断力。

「……………！ なんだ!？」

不意に空気が変わった。

そして感じる膨大な霊圧の放出と……………肌に突き刺さるような強烈な殺気。

それは下方……………レオーナが突っ込んだことで土煙に覆われ見えなくなったビルの屋上。

「ユニゾン……………イン……………!!」

距離があるにも関わらず、その咳きかはっきりと聞こえた。
そして。

「……………!!」

突然発生した竜巻が周りの全てを“切り刻んで”吹き飛ばした。

それは今までの青緑色の風ではなく、どす黒く染まった殺意の奔流。黒い竜巻が徐々に小さくなっていく。それに伴って少しずつ見えは

じめたレオーナの姿は。

(なんだよ……あれ……!?)

白く、灰色の線で飾られたドレス、銀色に輝いていた籠手や脚甲、胸当てが真っ黒に染まっていた。レオーナの全てが黒く染まる中で髪を纏める白いリボンだけがその存在を主張して。

(この感覚……まるで虚化じゃねえか!?)

さっきまでとはまるで違う霊圧、殺気。それは俺自身も使う虚化に近い感触を覚えた。

「うううあああ……うああああああ!?!?!」

レオーナが吼えた。その咆哮に周りの黒い風が飛び散り。

「……………いあああ!?!」

「……………!?!」

レオーナの周りを風が取り巻いた瞬間、目の前に居た。その背には黒い風が翼みたいに拡がり、手に持った槍も黒く染まったように風が渦巻いていた。

「ああああああ……！！！」

「ッ……！！ぐっ……があ……！！！」

悲鳴のような声と共に突き出された槍を逸らす。

ただそれだけの動作にも関わらず、斬月を握った手が見えない“何か”に傷付き血を流していく。

（風が……刃みたいになってやがる……！！）

槍の周りを渦巻く風が剃刀みたいに近付くものを片っ端から切り裂いている。

「くそ……！！！」

「ッ……！！逃がすか……！！！」

ともかく一旦距離を置こうとして槍を押し返そうとしたが、ほとんど揺らぐことなくまた槍を叩き付けてきた。

「ぐうー!!」

その一撃でまた手の傷が増えるが構ってられねえ。攻撃を受けた反動を利用して一気に後ろへ跳び退く。

「懐刃の闇よ!!」

間合いが開いたところでレオーナが槍を突き出し、黒い竜巻が唸り声を上げて向かってくる。

「月牙天衝!!」

黒い竜巻に霊圧の斬撃を飛ばす。
さっきの激突の焼き直し。
だが。

「ッ……!？」

結果は俺の放った斬撃が細切れになって散っただけだった。月牙天

衝とぶつかつた竜巻は何事も無かつたかのように向かつてくる。

「ちい………！」

ギリギリのところまで横に飛んで避けるが、猛烈な風と不可視の刃が身体を切り裂いていく。

「ッ………！」

よるめきながらも何とか霊子の足場に着地して斬月を構える。相手にとっては体勢を崩した敵なんて格好の的のはずた。

「………？」

だが、危惧していたような追撃は来なかつた。

「ううがあああああ………！」

それどころか片手で顔を抑えてただがむしゃらに槍を振り回していた。

(なんだ?)

チャンスなんだろうが槍が振るわれる度に黒い風が撒き散らされるのを見ると迂闊に踏み込めねえ。

「……………」

そうして暫く様子を見ていた時、一瞬だけ、片手で抑えられていたレオーナの左目が見えた。
黒く染まった、何か得体の知れない感情に支配された眼を。

「ああああああ!!」

不意にレオーナが自分の目を殴りだした。何度も何度も……狂ったように……。

「やめろおおおお!!」

その狂行を止める為に飛び出した。今のレオーナはどう見てもまともじゃねえ。

止めねえと何を仕出かすか分からない。

「ぐぐぐぐううう……!!」

暴れながら……それでも俺の接近だけは気付いたのか、槍を大振りに叩き付けてくる。

「おおおおお!!」

「ぐうがあああああ!!」

黒い風を放って切り刻もうとしてくる槍を、斬月から霊圧を放ちながら無理矢理押さえ込み。

「……!!」

轟音と共に爆発した。

「はあ……はあ……」

「はっ……!! はっ……!! はっ……!!」

爆発の瞬間に後ろに下がって霊子の足場に立ち、呼吸を整える。

黒煙が生まれているせいで向こうは見えないが、レオーナの荒い呼吸音だけは聞こえてきた。

「何故助けようとした？」

「……？」

風に流されて黒煙が消えていくと、その向こうから槍を構えたレオーナの姿が見えはじめた。

「あのまま私を切り伏せればそれで終わっていた筈だ。だが、お前はそうしようと思わず、私の槍を砕こうとするだけだった。何故だ？」

「その前に答えるよ。お前は何の為に闘ってるんだ？」

「なに……？」

「前に逢った黒服の奴は管理局とかいう組織への復讐だって言っただけだ。」

「お前もそうなのか？」

「そんなことをわざわざ聞くのか……？ 今更だな……。私の闘う

理由など他に無い 「

「本当にそうか……？」

「……なん……だと……？」

なんとなく……本当になんとかだが……。

「お前は……本当に“復讐”がしたいのかよ？」

「……………！」

前に闘った黒服の奴は憎悪の塊のような男だった。

全身から放つ殺気も、その言動も、刃を合わせる度に重さを増していく力（感情）も……。闘いを通して世界の全部を壊そうとするような、異様な雰囲気があった。

なのにレオーナからはそういったものが何も感じられなかった。

気迫もある。殺気もある。だが、その中でも相手を害するような負の感情だけは見出だせなかった。

「お前に……お前に何が解る！？」

黒い風を纏ったレオーナが凄まじい速さで突進してくる。

「死んだんだ……！ 皆……仲間も友も！！ 奴らが……奴らが殺した！！ 平和の為の行為だと……。その犠牲が平和へと繋がるのか宣いながら……！」

突き刺さる槍を霊圧を解放しながら弾き返す。

レオーナが纏ってる風が放つ刃は余波みたいなものだ。霊圧の放出を強くするだけで防げる。問題はもつと直接的な攻撃……槍と黒い風だ。

「それがお前の復讐の理由かよ！」

「そうだ！ 誇り高き戦士達も、奴らからすれば実験に丁度いい生贄でしかなかった！」

地鳴りみたいな音を発しながら横から迫ってくる黒い風を纏った槍を屈んで躲し、立ち上がったところさっきと同じ軌道で向かってきた柄を斬月で受ける。

「生き残った私には皆の仇を討つ義務がある！
戦士達の名を！ 我が祖国の名を貶めた時空管理局を滅ぼす……！」

「ッ……！！ 黙れええええええええええ！！！」

レオーナが叫んだ瞬間、黒い風が爆ぜた。

「ぐっ……！！」

衝撃で無理矢理後ろに押し流され、黒い風の刃が体中を切り裂いていく。

それでも怯んでる暇は無い！

「はあああああああ！！！」

黒い風の渦の向こうからレオーナが飛び出して来て槍を突き出してくる。

「おおおおお！！！」

その槍を新月で打ち上げて強引に逸らして、レオーナとすれ違ふ。

「……………貴様に言われなくても解っている……………」。

あの戦いの結果、死ぬことになるうと後悔はしない、祖国の為に全

力で闘い、悔いを残さず笑いながら死のうと……そう、私達自身が誓い合った……」

振り返った視線の先。レオーナは槍を両手で構えたまま俯いていた。

「だが……閣下に止められていたにも関わらず見てしまったんだ……。
身体をバラバラにされて……弄りまわされて……最期の最期まで苦しんだらう仲間達の顔を……」

俯いているせいで表情は見えない。

「私にはもうこうするしか無いんだ……。最後まで祖国の為に闘って……仲間達の無念を晴らすことでしか……もう、皆が笑ってくれる方法が思い付かないんだ……」

それでも聞こえてくる声だけで、今のレオーナの心境は伝わってきた。

「私は貴方のような人が羨ましい……。どれだけ傷付いても、大切な誰かの為ならば、貴方はどこまでも強くなるのだから……。闘っている中で、それが何となく解った。

昔の私にも、それぐらいの強さがあれば護れたものがあつたのだから……」

レオーナが構えを解いて顔を上げる。
その顔は笑っていた。あどけなさも無い。悲壮感も無い、綺麗な笑顔で……。

「レオーナ……」

「名を……」

「……？」

「名を……聞きそびれていた……。良ければ……聞かせてほしい……」

「……黒崎 一護だ」

「一護……か……」

その言葉を噛み締めるように呟いて、レオーナは左手を自分の胸に当てた。

「この闘い……どちらが勝つか負けるか解らないが……決着の前に……礼を言っておきたい」

「礼……？」

「ああ……ありがとう……一護」

その感謝の言葉にどうしようもなく嫌な予感が溢れだし。

「私の“最期”の相手が……貴方で良かった」

的中した。

「デイザスタ……！！ 約束の時だ！！ この身体、貴様にくれてやる……！」

閣下の眼前に立ち塞がる敵を粉碎せよ……！」

レオーナから強烈な黒い風が吹き付けくるのを、腕を翳して防ぐ。

「私の迷いも……足枷たる悲しみも……全て喰らい尽くせ……！」

こいつが突然変わったレオーナの霊圧と殺気の正体だと。

「そんな姿になってまで戦って……それで本当に……お前の仲間は笑ってくれるのかよっ！！！」

「殺す死ね死ね殺す殺す殺す殺す死ね死ね死ね死ねあははははアッハハははははははハハ！！！」

レオーナは答えない。ただ、レオーナの姿をした奴が笑いながら殺意を吐き出すだけだった。

「何で助けようした、って聞いたよな……！」

左手を額に翳す。同時に相手の槍にも黒い風が纏わり付くのが見えた。

「お前の槍が迷ってるように見えた……。なんでそんな風に見えたのか……やっとな解決した……」

レオーナはずっと板挟みになってた。仲間への情（悲しみ）と、過去の自分への不甲斐なさ（憎しみ）……。誰も護れなかった自分が

の周りを渦巻く風がスローモーションで動いている。

「アアアアアア！」

「おおおおお！」

目の前まで来た敵が槍を突き出してくるのに対して、ありったけの霊圧を籠めた斬月を振り下ろす。その段階で突然音が、時間が元に戻って、視界が相手の風で黒く染まった。

S I D E I O U T

「くっ……っ！」

周りを囲むように飛ぶ白い炎の槍を破壊しながら、自身の不利に桔梗が呻く。

彼女にとってメリオスとの相性は最悪だった。

メリオスが持つ白い槍が放つ炎。その一撃一撃が桔梗の斬魄刀が持つ技の破壊力を上回り、速力でもメリオスが勝っていた。故に遠間からの撃ち合いになれば当然メリオスの方が優勢であり、必死に間合いを詰めようとする桔梗を寄せ付けなかった。

それでも、まともな戦闘になっているのは、皇呀が炎熱系らしく、並の斬魄刀を圧倒する大火力を有した斬魄刀だったからだ。

桔梗自身は大概の敵を殴り合いで制する脅力と、優れた戦術眼を持つ以外は大した特徴を持たない。

これが皇呀ではなく、直接攻撃系の斬魄刀だったなら、緒戦の段階で決着はついていただろう。

「カグツチ！」

「……………！？ ぐっ……………！！」

しかし限界は訪れた。メリオスが放った八本の炎の槍を全て破壊し足を止めた一瞬に巨大な火球を撃ち出したのだ。

「ぐう……………おおおおお！！」

かろうじて皇呀を掲げて火球を受け止めるも、その勢いを止められず、地を滑り瓦礫の山に突っ込んでいってしまい、火球が大爆発を起す。

「終わりだ……」

爆発と黒煙が晴れはじめたところにメリオスが一步一步静かに近付いていく。

「お前は実によく闘った……。その年齢でその実力……尊敬に値する」

倒れ付して動かなくなった桔梗に語りながら歩き続け、唐突に立ち止まる。

「お前達との闘いは終わったと思っていたが……？」

「これ以上……貴方の好き勝手にはさせません！」

「勝手に終わらせんじゃねえよ……！」

呆れた調子でメリオスは立ち塞がった二人　　レイジングハー
トを構えたなのはと、ボロボロのタリルを見遣った。

「桔梗ちゃんも皆も……これ以上誰も傷付けさせない……！」

「私とて相手の力量を過小評価したりはせん。せめて五年もあれば今の台詞に見合った実力もあつたるうが……少なくとも今は理想を掲げるだけの無力な小娘だ」

「まったくだ……ついでに言うなら私の過小評価もやめてもらおうか」

「……！ 桔梗ちゃん……！？」

背後からの声になのはが驚きながら振り返る。

「高町 なのは……少なくとも……お前に庇われる程私も落ちぶれちゃいない」

さっきまで倒れて動けなかった桔梗が立ち上がり、なのはやタリルを押し退けるように前に出た。

「ふん……勇ましいな……。
だが」

ピキッ

「お前の武器は限界のようだな？」

ピキッ、ピキッ

その音になのはは桔梗の剣を見た。

「桔梗ちゃん……！ 剣が」

その紅い刀身には輝が入り、少しずつ長大な剣を覆い始めた。

「ッ……！」

それを見たのはやはり加勢しようとして一歩前に出て
。

「何度も言わせるな……過小評価するな、ってな」

威圧感を漂わせる桔梗の一言に続く二歩目を止めた。

「お前等は下がれ。さつきも言ったが……巻き込まないで済ます自信はないぞ」

振り返ることなくなのは達に告げてから、桔梗は皇呀をゆっくり掲げ、一気に振り下ろす。

その動作で刀身の輝割れが更に拡がるが桔梗は気にしない。

「限界か……お前は本当に“私達”の限界がこの程度だと思ったのか？」

もしそうならばつきり言ってやる……嘗めんなよ？」

皇呀の崩壊が止まる。
そして。

「なに……！？」

「ッ……！？」

皇呀の刀身を覆う輝割れから、壊れた蛇口のように炎が噴き出した。それを見たなのはとタリルは慌てて桔梗から距離を置く。

「斬魄刀の始解に必要なのは“対話”と“同調”。死神は自分の分身である斬魄刀と心を通わせることで刀の名前を知り、その力を引

き出す」

溢れる炎に晒されながら桔梗は動かない。

「そして……お前には絶対に辿り着けない領域が更に上にある。

“神”なんてよく解らないものの力に屈したお前には永久に辿り着けない領域がな……！」

「……なんだと？」

桔梗の言葉に、今まで余裕の態度を崩さなかったメリオスの顔が初めて怒りに歪む。

「見せてやるよ……。これが“私達”の全力だ……！！！」

桔梗が皇呀を水平に構え。

「卍解！！！」

刀身が碎け、紅い閃光が全員の視界を覆った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3130n/>

魔法少女リリカルなのは ~桜色の星光と黒き月光、そして紅き炎~

2011年10月7日03時09分発行